群書類從

第貳輯

東京

續群書類從完成會

群書類従第貳輯目次

神祇部二

巻第十六
春日權現驗記……一
巻第十七
春日社記……五八
春日大明神垂跡小社記……六一
春日神木御入洛見聞略記……六四
さかき葉の日記……二條良基……六六
巻第十八
大三輪神三社鎭座次第……七三
大倭神社註進狀……七八
廣瀬社緣起……八三
日吉社神道祕密記……八六
日吉神輿御入洛見聞略記……一二六
巻第十九
北野緣起……一二九
兩聖記……花山院長親……一五一
菅神入宋授衣記……一五四
巻第二十
天滿宮託宣記……一五七
菅家御傳記……菅原陳經……一六八
最鎭記文 貞元二年……一七二
梅城錄……呆菴……一七四
巻第二十一
廿二社本緣……一九五
巻第二十二
二十二社註式……二〇九
巻第二十三
大和豐秋津嶋卜定記……二四一
大日本國一宮記……二四四
延喜式神名帳頭註……卜部兼倶……二四七
尾張國内神名牒……二六五
伊豆國神階帳……二六九
上野國神名帳……二七二

卷第二十四

藤森社緣起……二七九

尾張國熱田太神宮緣記……二八〇

荏柄天神緣記……二八七

宇都宮大明神代々奇端之事……三〇七

卷第二十五

竹生嶋緣起……三一〇

走湯山緣起……三一五

筥根山緣起……三三〇

松浦廟宮先祖次第幷本緣起……三三七

卷第二十六

造殿儀式……北畠親房……三四六

八幡御幸次第……三四九

平野行幸次第……三五二

神馬引付……三五八

卷第二十七

太神宮參詣記……坂士佛……三七九

八幡社參記……足利義政……三九八

春日社參記……姉小路基綱……四〇四

卷第二十八

東家秘傳……北畠親房……四一二

寶鏡開始……四二四

詠太神宮二所神祇百首和歌……度會元長……四二九

雲州樋河上天淵記……四五一

群書類從第貳輯目次終

群書類從卷第十六

神祇部十六

撿挍保己一集

春日權現驗記繪目錄

第一卷　詞前關白[忠敎]
承平詫宣事　金峯山御幸事
竹林殿事
第二卷　詞同前
寬治御幸事　永久衆徒鬪亂事
二條關白事
第三卷　詞同前
堀川左府事　鹿嶋和歌事
信經事
第四卷　詞同前
天狗參入東三條事　永久春日詣時神託事
普賢寺攝政事　三條内府事
後德大寺左府事
第五卷　詞同前
俊成卿事　季能卿事
第六卷　詞攝政[冬平]
狛行光事　親宗卿事
蛇呑心經事
第七卷　詞同前
經通卿事　開蓮房夢事
近眞陵王事　隆季卿家女房夢事
第八卷　詞同前
清涼寺本尊事　依唯識論功能遁病難事

增利僧都事　壹和僧都事
法藏僧都事　離寺僧蒙神託事
第九卷　詞關白
祈親持經事
第十卷　詞同前
林懷僧都事　永超僧都事
教圓座主事　教懷上人事
第十一卷　詞同前
惠曉法印事　永萬夢相事
第十二卷　詞同前
藏俊贈僧正事　惠珍夢事
恩覺事
第十三卷　詞同前
晴雅律師事　勝詮僧都事
增慶事
第十四卷　詞權大納言冬基卿
唯識論遁火難事　隆覺僧正事
頓覺房事　唯識論安置屋遁火災事
第十五卷　詞同前
唐院得業事　教英得業事
大乘院僧正事　紀伊寺主事
清增事
第十六卷　詞前關白
解脫上人事　璋圓事
第十七卷　詞良信僧正一乘院
明惠上人事
第十八卷　詞同前
同事
第十九卷　詞冬基卿
正安神鏡事
第二十卷　詞同前
嘉元神火事

繪　右近大夫將監高階隆兼。繪所預。
詞　前關白父子四人。敬神之志懇切之餘。爲結

縁レ不レ可レ交二他筆一之由。所レ被二約諾一也。〔於纍〕出篇目者覺圓法印注二出之一。且相二談兩前大僧正一慈信。範憲。訖。

予亶二藤門之末葉一。專仰二當社之擁護一。不レ耐二敬神之懇志一。爲レ增二諸人之仰信一。大概類集之。遂二猶切磋一重可二書加一者也。凡企二此懇志一之後。家門觸レ事有二吉祥一。爰知相二叶神々之冥慮一歟。後輩彌可レ抽二敬信之精誠一而已。

延慶二年三月　日　　左大臣判 花押

第一卷

夫春日大明神は。滿月圓明の如來。久遠成道のひかりをやはらげ。法雲等覺の薩埵。內證本地の影をかくす。專一朝の忠神として。鎭に四海の安寧をまもり給。天津彥天皇はじめて葦原中國に入給し時。邪神ふせぎたてまつりしかば。天より寶劔をなげてこれを誅。大汝命。事代主命。天照太神をあやぶめたてまつりしに。經津主香取。武甕槌命鹿嶋。等追討使として。兩神さりし時國をおさむる矛を奉る。天岩戶をしひらきては六合のとこやみをてらして。萬民のうれへをやすめ給。すなはち天照大神。兒屋根尊。合躰御契ふかくして。伊勢大神宮もおなじく第四御殿にあとをたれたまふ。これによりて御裳濯河の流千秋のかげをうかべて九五の位おだやかに。御笠山の嵐萬歲の名をよばひて博陸のよせおもし。その源をたづぬれば。むかし我朝惡鬼邪神あけくれたゝかひて都鄙やすからざりしかば。武甕槌の命是をあはれみて。陸奥國鹽竈浦にあまくだり給。邪神靈威におそれたてまつりて。或はにげさり或はしたがひたてまつる。そののち常陸國跡の社より鹿嶋にうつらせ給。つゐに神護景雲 稱德 二年春法相擁護のために御笠山にうつり給

て。三性五重の春の花をもてあそび。八門二悟の秋月をあざけりたまふ。秋津洲の中山野おほけれども。月光も三笠山にしかず。花の匂も春日野に勝たるはなし。この花月をもてあそびたまへと香取平岡の兩神に申されしかば。おなじとしの冬影向し給てよりこのかた。靈驗としふりて利益日あらたなり。しかあれば。いにしへより今にいたるまで。しるしをき見をよぶところ。前後をたゞさず。聊後素にあらはして。彌中丹をはげまさんとなり。

朱雀承平七年二月廿五日亥時ばかり神殿鳴動して風吹。子時に橘氏女御寶前にて聲をはなつ。神殿守ならびに預などをめしあつむれば。已つつしみおそれて候。又今月廿三日より御讀經に候。興福寺僧勝圓をめす。卽御託宣云。我ははやく菩薩に成にたり。しかるを公家いまだ菩薩の號を得しめざるやとおほせらる。こゝに天台山修行の僧千良申けるは。菩薩の御名をばいかゞ申侍覽と申せば。慈悲万行菩薩と名のらせ給。太政大臣及左右大臣もろ〳〵の公卿もわがことはる所也など。さま〴〵おほせ事どもありけり。

繪

大和國平群郡夜摩郷に一の靈地あり。竹林殿と號す。春日大明神御影向の所也。むかし右馬允藤原光弘廣瀬郡吉南殿といふ所にすみけり。大和河の北の邊を見ればよる〳〵ひかる所あり。貴女この所におはして子孫繁昌すべき所なりとの給。いかなる人いづれの所より來給にかと光弘申ければ。

我宿はみやこのみなみしかのすむ
三笠の山のうき雲のみや

かくおほせられて見え給はず。

繪

光弘夢想によりて。天曆二年二月廿五日はじめて土木をかまへて。村上天皇に奏聞して。同年六月十六日より此ところにすむ。其後正曆三年のころ。藤原吉兼が夢に。家の西南の竹林のうへに貴女飛來ての給やう。我は汝が氏□春日大明神也。家たかく竹しげくして。竹林園に似たるゆへにこの所に來宿す。もし竹しげくさかりならば汝が子孫繁昌すべしと被仰と見けり。やがて社をたて神をあがめたてまつりて。ながく神竹をきるべからざるよし起請をかきけり。いまに修竹いよ〳〵か□して梁園にことならずとなん。

繪

寬治六年七月太上天皇白河院。金峯山に御幸ありけるに。御山にて俄に例ならぬ御けしきあり。人々色をうしなふほどに。龍顏逆鱗の氣ありておほせらるゝやう。春日山の邊に侍おきななり。わざとの臨幸までこそなからめ。御路のたよりになどか幽閑のすみかをもとぶらはせたまはぬと仰られて。大納言師忠。中宮大夫雅實など候はれけるを御覽じまはして。あはれゆゝしくさかへ給へる源氏たちかなとおほせ事ありければ。をの〳〵恐をなして御前をたちさりにけり。さて御氣色さめさせ給て。この事ふかく耻思食ければ。路より還御あるべきかなどさたありけれども。ことさら御祈願のむねありて。すなはち春日社へ神馬をたてまつらる。又左大辨匡房卿に仰て御願書をかかせらる。大部大乘經をぐして當社へ御幸あるべきよし也。其後御心神本にふくせさせ給て。此たびの御願はたしとげられにけり。

繪

第二卷

去年の御願によりて。寬治七年三月舞人一員

をめしぐして春日社に御幸あり。事にふれてゆゝしき儀式をつくされけり。内大臣以下片舞にたつ。左大臣陪従の列に加立。先例もありがたく。神威も掲焉なりけん。其後（堀河）康和年中一切經論をかゝせられて。社頭に經藏をたて百口の僧ををかれて轉讀せらる。越前國河口庄をながく供料に寄進せらる。かたぐ\先日のおそれを謝申されけり。それよりこのかた代代御敬神他にことに。臨幸も連綿としてたゆることとなし。又伊房卿の北のかみ夢のつげありて。御經藏といふ額をひそかにかきをきたりける。御託宣ありてめしいだされて。經藏の南門にうたれて今に現在せりとなん。

繪

（鳥羽）永久元年延暦寺の衆徒清水寺をやきはらふ。興福寺の末寺たるによって本寺おほきにいきどほりて。衆徒發向せしかば。公家官兵をつかはしてこれをふせがる。なを朝威にはからず栗駒山にて官兵と合戰をいたす。上皇ことに逆鱗ありて。南都を追討せらるべき由沙汰あり。その時修理大夫顯季卿仙洞の近臣にて候けるが。恐ながら奏申けるは。我君の聖運は専春日大明神の冥助也。いかでか神德をわすれさせ給べきと申。何事にかと仰あれは。君いとけなく御座せし時。御殿の天井に震動事侍き。大にあやしみをなすところに。聲ありて伊勢の神宮のすゝめによりて玉躰をまもりたてまつる。是春日の大明神也とおほせられき。さの事御報賽尤あるべきかと申ければ。さして勅咎はなけれども。つゐに征罰をやめられにけり。

繪

二條關白殿（敦通）出仕の時劔をわすれさせ給たりけるに。女房かへり入てとりてまいらせんとしければ。關白殿もとのごとくおはしまして。劔

を御ひざのしたにをきてほゝえみ。給はず。女房おどろきあやしみて歸まいれば。御車のうちより。など劔をもちてまいらぬぞとおほせられければ。あさましと思ひてかへり入ば。又たゞさきのごとし。これは春日の大明神のかげのごとくしたがひまもり給て。かやうに現じ給とぞ時の人申ける。おほかた此殿は寺社をあがむる御心ざしふかくて。寺より使まいれば。まづ子細をたづねきかせ給てのちぞ御膳などもまいりける。

繪

第三卷

知足院の關白殿(忠實)いまだわかくおはしましける時。堀川の左大臣(俊房)のむこになりたまひけり。北方事のほかに御年まさりておはしければにや。いと御心ざしもなかりければ。本意なきことにてありけるに。たゞならずなり給たりとて。左府もよろこびおぼしけるほどに。御產とてひしめきける。むまれたまへる御子うせ給にけり。この事ほいなさに。左府にはかくしたてまつりて。女房たち申あはせて。そのころむまれたる法師の子をとりて御子のごとくにもてなしけり。夜々の儀などうるはしくとりおこなはんとし給に。左府にはかに例ならぬけしきありて。春日大明神つかせ給にける。さてむこの大將殿に見參せんと申されければ。おもひもよらで對面し給に。左府のたまふやう。このむまれたりとてかしづかるゝ子は我子とやおぼしめす。ゆめ〳〵なき事也。そゞろなる物の子をとりて御子と申也。さらにもちゐたまふべからず。氏をつぎ給べき人はおはすめりとおほせられけるは。法性寺殿(忠通)の御事なるべし。これは左府のおとゝに右大臣顯房と申人のむすめのはらにむまれ給たりける也。こ

のよしを返々の給て後さゝめにけり。左府かゝる事をいひつるもつや〳〵おぼし給はざりけるに。よその人あゝりつるしだいをかたり申ければ。老の後にうき耻かきぬる事くちおしとて。北のかたをも女君をも同宿し給はざりけり。大將殿さして御心ざしもなかりければ。おはしましょらずなりにけり。あさましくめづらかなる大明神の御託宣とぞ世の人申おもひける。

繪

知足院殿長者にておはしける時。永久二年十月のころ。常陸國司鹿嶋の宮を造營して。御社のありさまを記錄して。國司かよひける殿中の女房のもとへつかはしたりければ。殿下御覽じて御扇をかの女房に給はせけり。女房うれしさに哥をよみてたてまつりけり。

三笠山まつふく風ものとけくて

千とせの陰をあふきみる哉

かく申たりければ。

みかさ山さして賴める君なれは

千とせの陰を長閑くやみん

とおほせられけり。國司これをみて一首をそへて。鹿嶋の宮にたてまつりけり。

千とせまてかけてそまもる氏人の

かみへといます君のたまつさ

これをみな寶殿におさゝめけり。その夜大禰宜中臣則助示現にかふりける御哥。

三笠山かせきの嶋にすまゐして

かくめづらしき跡をみる哉

繪

春日正預信經は秀行六代の孫なり。知足院殿へ御勘氣によりてめしこめらるゝこと數日にをよびけり。かゝるほどに殿下御惱の事あり。はじめはおこり心地のやうに日ませにおこら

せ給けるが。後には日々に發らせ給けり。有驗の僧どもをめしあつめられし中に。一乘寺僧正增譽加持しまいらせられけるに。それにもようのおこらせ給ければ。僧正那智瀧に三千日のあいだこもりて。滅罪のために不動の護摩を修せし功をばひとへに君にゆづりたてまつる。大聖たすけ給へとせめ申しかば。御氣色やがてたちなをらせ給ぬ。いまはおちさせ給ぬとて僧正も祿など給ていでぬ。

繪

次日また例のときに發らせ給。御惱すでに日數つもりて御氣力もよはらせ給たるに。さきざきよりもことにせめふせて。御いきとへのみかよひ。御つめの色などもかはりて。今はとみえさせ給へば。殿中のさはぎこともをろかなり。なを增譽僧正をめさるれば面白なければども又まいりぬ。ちかくまいりよりて御眼の色を見たてまつりて。とをくのきておほきにかしこまりて申やうは。增譽のふかく申ばかりなし。驗者とうはまづ病相をしる也。生靈死靈のたゝりをも見。大神少神の所爲をもわきまへてこそ加持護念すべきに。おろかにしてさとらざりけり。返々あさましきことや。たかき大神のかけり給なるべし。つたなき身をもて加持したてまつりける事もつとも恐ありと申。この時たかき大神とは春日の大神の御事にこそ。信經めしこめたること。もし冥慮にかなはざるにやとて信經をめす。

繪

信經めしによりてまいる。腰ふたへなる七十有餘の老翁の鬢眉皓白にして。しりよらはれたる淨衣を着してよろぼひいでたる。商山のむかしのおもかげもかくやとおぼえて。うち見るよりかう〴〵しく物さびたるさまなり。

法性寺どの直に御對面ありて。そも〳〵めしとめらるゝ事けふはいくかになるぞととはせたまへば。御ことばいまだをはらざるに。涙にむせびかうべをたれて。やゝひさしくして。けふはすでに百卅日になり候ぬと申せば。このほど心のうちになに事をか思ふとおほせらるれば。いとゞ涙せきあへずしばらくありて申やう。まつたく別のおもひなし。我父母かたりしは。胎内にやどりしより七月以前は日々になむぢを具してまいると思て大明神へまいる。むまれてのち日々にめのとのふところにいだかせてみやまをふますと申候き。ひととなりてはまた病をうけざるほかは毎日に大明神の御まへにまいりて。いがきのもとをあためずといふ事なし。こゝに今年のはるのころよりきみの御いましめをかうぶりて。七十餘の老のなみにたゞよひて。大明神にわかれたてまつる事すでに百三十日になりぬ。されば老耄の身は病なくともいづるいきいるいきをまつほど也。いはんやこの夏の天炎暑むすがごとし。力なくしてたゆべくもなし。みやこにて無常にしたがひなば。ながく舊里にかへらずして。ふたゝび大明神をおがみたてまつらざらむと。あまり心うく侍ればねてもさめてもなげくことたゞこればかり也と申てうつたへ。聲をたてゝなきゐたれば。法性寺殿これをきかせたまひて。なく〳〵ことのよしを殿下に申させたまへば。まことにいとあはれなる事なり。さらば今度の御惱を大明神にいのり申ていやすべしとおほせらるれば。すなはちこのよしをおほするに。やがて南にむかひて手をすりて。ねがはくば我大明神。君の御惱をいやし奉りて。ふたゝびわれを御山へむけさせたまへと。涙をながしていのり申せば。こ

ゐにしたがひてたちどころに本にふくし給ぬ。御感のあまり法性寺殿よりは御劔をくださる。北政所は御衣をたまはる。殿上人二人に手をひかれてまかりいづ。又御祈の料所に播〔磨〕摩國の大郷をたまはりけりとなん。

繪

第四卷

知足院殿東三條におはしましける比。御夢のうちに或たうとき僧をめして密敎をうけさせたまひけるに。そのかたはらにしらぬ法し二三人すゝみまいりてゐたり。なに物ぞと御覽ずるに。その僧のくちに鳥のはしつきたり。天狗にこそありけれと思食て。いかにこの東三條の中などにかやうの物はまいるぞ。角振の明神はおはせ侍ぬかと仰せられたりければ。その御聲につきて春日神主時盛まいりて候けり。これをみて天狗法師どもみなくにげうせにけり。つのふりはやぶさの明神は春日の御眷屬にて御社におはします也。

繪

知足院殿天下の執柄として。生前の榮花をきはめ給しかば。すでに四旬の齡をすぐして。いたづらに九夜のやみをまつことをおそれて。功成ぬれば身しりぞかんとおぼしたりければ。出家のいとまを申さむとて春日のやしろにまいらせ給たりけるに。十一二ばかりなる兒童にはかにけだかきすがたになりて。雖ㇾ觀二事理一者不ㇾ離ㇾ識。然此內識有ㇾ境有ㇾ心。心起必託二內境一生故。あなおもしろやといふに。殿下たゞ事ならずおぼしてかしこまり給へるに。この童の中樣。我は是春日第三神也。このたび見參はことにうれしく侍り。そのゆへはつねなきことをおぼしめして。かざりをおろさむと思ひきざし給へるうれしさに。隨喜の涙のところ

せきをもしらせたてまつらむとて託宣し侍り。相構てわすれず無常を心にかけ給へ。それぞ我はうれしとおもふべき。さても二人の男子をもち給へば。二人ながら氏長者につらなり給べし。忠通公世のまつりごとすなをにて手跡うつくしく。詩歌管絃たくみにおはしませばよによき人と申べし。しかれど道心のおはせねば。我心にはいたくもかなはず。おとゝ頼長は全經を業として政務きりとおしにして。人の善惡をはかり知ことたな心を指すがごとし。されば末代にはありがたき人にてあるべけれども。神事佛事におろかにして。氏寺をなやますべき人なれば。我ともなはずとの給てあがらせ給にける。そも〳〵雖ㇾ觀二事理一の文は慈恩大師の唯識章にあり。萬法一心にはなれずして。境界ほかにあらはさる。唯識甚深の妙理也。

繪

普賢寺（基實）攝政殿は平家とひとつにおはしましゝかば。壽永（安德）に宗盛公以下西海におもむきし時。おなじく關西の道におぼしたちて。五條大宮邊まで行幸供奉し給けるに。うしろより黃衣の神人まねきたてまつると御覽じて御車をとどむれば神人みえず。又御車をすゝむればさきごとく。（「の」脫歟）かくする事二三度になりければ。春日大明候おぼしめす様あるにこそとおぼして。轅を北にしてとゞまり給にけり。前後うちかこみたる武士のなかをわけて。御車をやりかへされけるを。とがむる人なかりけるもふしぎの事になむ。すべてこの殿は神慮にかなひ給けるにや。春日の寶前にては鹿御かほをねぶりけり。又世中にひろまりたる垂跡の御躰の曼陀羅も。この御夢におがませ給たりけると申つたへたり。

繪

三條内大臣公教重病をうけられたりけるに。松林院の教縁僧正。公圓法橋を春日社へまいらせていのり申されける。そのく御社にこもりて日來へにけり。曉京へのぼらむとしけるに。若宮の拜殿にて巫女一人舞けるが。庭にいでおほくの人のなかにこの兩人につげていはく。かの祈申事はたすくべけれども。身氏人として大位にのぼりながら。あへて我をあがめず。尤遺恨也。しかあればこのたび命をめしをはりぬといふ。兩人あやしみながらその曉上洛するに。京の使は道にあひてすでに事きれ給ぬと申けり。

繪

後德大寺の左大臣實定そのかみ大納言を辭退してこもりおはする事十二三年におよびけり。御子公守ときこえし人祭の使にて春日にまいりけるに。父卿しのびて車にのりぐしてまいり給ける。人にもしられ給はで。侍どものなかにおはしけるを。若宮の御前にみこども候て神樂のほどなりけるに御託宣し給て。このたびまいりたる事返々本意なり。かならずこのしるしあらせんとの給に。これは誰人の事ぞと申ければ。大納言かくれておはするをさして。その人の事也とおほせられけり。さて還向の後程なく大納言に成かへり。その年の中に大將になり給にけり。

繪

かくて内大臣左大將にておはしける時。木曾冠者義仲逆亂によりて大臣をとゞめられぬ。そのうれへにたえず。ねてもさめても大明神に祈申けり。或時夢にうへのきぬきたる一人の僧來て。たゞ今陳に參せさせ給べしと申。まづ使者のすがたをあやしみて。なに人ぞと尋

たまふに。興福寺の下所司なりと申。我は前官なり。左右なく仗座にまいりがたく。又大臣出仕の事外記もよをすは例也。興福寺の下所司使者にあたはず。かたぐまいりがたしとこたへ給に。さきの使者又歸來て申やう。大臣以下諸卿みな御參內ありて。天下の事ども沙汰あり。たゞ今いそぎまいらせ給べしと申。夢さめて後。ことのおもむきたゞ事ならねは。翌日太皇太后宮へまいり給。つゐでに此事語申されければ。御還任あらんかとおほせられけり。はたして兩三日をへて內大臣に還任せられけり。いとふしぎなりし事になん。

繪

第五卷

大宮權大夫俊成卿は父にをくれてみなし子にて久しくしづみたりけるが。いかゞして身をたつべきとおもひける程に。春日神主時盛が來たりけるにいひあはせければ。當社へ月まうでをして祈禱し給へかしとはからひ申ければ。其後月ごとにまいりけり。

繪

かくて月ごとにまいることをこたらで年をかさぬるほどに。讃岐守になりにけり。やうく人々しくなりて院にもちかくめしつかはれ。年預に補せられにければ。家中もみてことのほかに世おぼえある人に成にけり。これひとへに神恩とおもひて。いよく ふた心なく大明神につかうまつりけり。

繪

ある時社壇にまうで侍けるに。夜雨蕭々として社壇寂々たりければ。つねよりも心すみて。いつとなく此世のために神詣することのはかなさよとおもひつゞけゝるに。神□御殿のかたにけだかき御聲にて。菩提の道も我山

の道ときこえけり。随喜の涙いかばかりかとおもひやる袖さへともにしほれ侍り。

繪

かくて年月へて後やう〳〵家中もおとろへ。門前零落して鞍馬まれなりければ。榮枯分ありて盛衰時いたる事をおもひしりてしかば。ひとすぢに後世に心をかけて。最後臨終の時まで大明神の加護にあづかりけり。或人の夢に三位入道往生のよし聞てみければ。紫雲たなびきて蓮臺家より出けり。其蓮臺に三歳小兒ありける。黄衣の神人あひぐしたり。かたはらに聲ありて。春日の大明神御沙汰あるゆへに神人あひそふなりといひけり。其後三年ありて三位入道まことに往生しにける。三歳の兒とみえけるは。三年ありて往生すべきゆへにみえけるに□。去年終焉のときも瑞相おほかりけり。夢のつげどもゝありけるとかや。

繪

正三位季能卿は俊成卿弟子也。父能時より大明神をあふぎたてまつることあさからず。月ごとにぞまいりける。或夜夢に僧一人來。其色くろくおそろしげなり。其僧すでにちかづかんとするほどに身の毛いよだちてせんかたなし。かゝる程に人のをとするを家の人たづぬるに。使春日のやしろよりとこたふ。此聲を聞て僧のかほの色變じてにげさりぬ。ゆきがたをしらず。三位あせをながして驚て。夢のありさまを人にかたりけり。うたがひなく天狗のきたりけるを。大明神の御覽じてをひいださせ給ひけるなるべし。いとあらたなるりしやう也。

繪

第六卷

狛行光は興福寺の舞人なり。生年十六歳にし

て父にしたがひてはじめて賀殿の曲をつたへて後。より〳〵社頭に參りてひそかにこの舞を奏すること年月に成にける。あるとき重病をうけて息たえにける程に。閻魔の廳にいたりぬ。こゝに氣だかき人王宮にいたり給。閻王專饗應の氣色あり。王にの給やう。この男われに忠節ふかし。生年十六歲よりこのかたその志いまだかはらず。ねがはくは。我にゆるすべしとのたまふ。王おほせにしたがひぬ。乞得て王宮をいで給。行光あやしみ申けるは。いまゆるさるゝおゝきみの洪恩なり。抑誰人にておはしますにかと申せば。我は春日大明神なり。汝もし地獄や見たきとおほせられければ。かりのことゝこひねがふところなりと申。やがて行光を具して地獄のありさまをみせさせ給。くるしみのやうにすべていふべききはにあらず。一々にみてのちにいかなる方便にてかは此報をまぬかるべきと申せば。父母に孝養すべし。けうやうは最上の功德なり。もしようつとむれば。地獄におちずとをしへたまひけり。

繪

中納言親宗卿和泉國知行しけるほどに。かすがの神人あひまじはりて狼藉なることありければ。これをとらへて。すでにまきてせめけるほどにせめころしにけり。此事興福寺よりうたへ申によりて。平中納言の子國司にてありけるをながされて國もめしはなたれにけり。されども大明神の御心なをゆかずやありけん。(土御門)正治元年七月中納言おこり心地のやうにて日數へてわづらひけり。日をへてまさりければ。山僧なりける驗者の三位の阿闍利といふ僧ありけるをよびていのらするに。物付に山王十禪師つかせ給ておほせられけるは。此病人定

業にはあらず。大善はたしとげぬことあれば。炎魔王宮にはあながちにめされぬを。春日大明神の御勘當あるによりて。はやめさるべきになりぬ。病者此世にあらんこといま一兩日なり。汝祈べからず。はや〳〵立さるべしといふによりて。驗者むやくなりと思て出にけり。其後病いよ〳〵まさりて七月廿七日うせにけり。そのとき或人の夢にみる樣。門のまへを神人三人はしる。なにごとぞといふに。春日の大明神の平中納言をめす御使なりといひける。これのみならず家のむかへにありける人の夢にも。神人ひしと亂入とみけり。大明神の御たゝりすなはちなどはなけれども。ほどへてかならずかくぞありける。つかうまつらん人も。いかでかつゐにむなしからむ。

繪

春日の六道といふほとりに一の虵ありて心經一卷をのむ。こわらんべこれをうち放てけり。其中に張行しける童部たちまちに重病をうけたるほどに。護法うらをすれば大明神おりさせ給てつげさせ給やう。我に値遇せしものの一の邪執によりて虵道に墮したるを濟度せんがために心經をのませて惡趣の果報をのがれしめんとするをうち放。返々遺恨なればとがむるなり。大般若一部をよまば存命すべしと仰らる。やがて轉讀すれば平癒しけり。

繪

第七卷

經通卿藏人頭にてありし時。順德院の代始にあたりて重服になりにければ。おりふしあしとて藏人頭を他人に改補せられけり。其後三年をふれどもかへしなさるべき氣色もなかりければ。せめてなげきあまりて。建暦二年正月六日。春日に參籠して。夜は樓門の下に候て。

夜もすがら神樂をうたひ笛をふく。かゝるほどに五月十日のよ上皇御夢に御覽ぜらるゝやう。誰ともしらぬ人のかたはらにまいりて。などかく經通をば頭にはかへしなさせ給はぬぞと申と御覽ぜられけり。うちおどろかせ給て卿二位に經通はあるかと御尋あり。久くみえぬよし申さる。あはれこの俗は賀茂などにこもりて祈禱するやらむとおぼしめして。尋よと仰ありければ。二品たづねつかはしたりければ。この程春日に籠たるよしを申。院きこしめして。哀明神の御はからひは凡夫には似ざりけりと仰ごとありて。次の日かへしなさるべきよし仰くださる。十一日つかひ春日にまいりてこのよしをいふ。そのとき經通楼門のもとにて。寺僧たちきこしめせ。忽に神恩をかふりてかゝるよろこびをこそして候へとて。淚をおさへてまかりいづ。楼門の左右の人々寺僧までも。大明神の御利生ためしなき由をたとびけりとなん。此後は何ごとにもねてもさめても南無大明神とのみとなへけり。正二位大納言までなりて臨終のときもかはらざりけり。さだめて後生も引導ありけんかし。

繪

興福寺に尊遍侍從[者猷]といふ僧の母に開蓮房と申比丘尼侍けり。かの尼の夢に。ある人つげて云。汝南無大明神といふ眞言をとなふべし。自餘の眞言にはわづかに一の佛菩薩の德をあらはす。南無大明神といふ眞言一反となふるときは。ひろく五所の勝利をあらはす故に。利益莫大なりと云と見けり。

繪

興福寺綱所範顯寺主。[順德]建保五年正月十二日寅時の夢に。春日社に參詣して幣殿の前の藤のもとに侍て。御殿の方を拜すれば。なべてなら

ず御たけたかき若君の十七八ばかりにおはします。樓門のしたにたゝせ給とみやりたてまつるほどに。瑞籬の西のはしより束帶の俗ふぢのもとにあゆみよりたまひて。範顯におほせらるゝやう。近眞に陵王つかうまつるべきよし仰たまへば。家につたふる桴の候はねばえつかふまつらじと申也。陵王の桴つくりて近眞にたびて。御前にてれう王つかふまつるべきよし仰つくべきなりと仰らるれば。範顯かしこまりて。承候ぬ。たゞしこのよしを仰候とも近眞承引し候はじと申せば。俗かさねて。その條はもし難澁し申さば別して御さたあるべしと仰らるれば。樓門にたゝせ給わかぎみ。おほせかうぶりぬ。いそぎまかりいでねとのたまふ。御こゑみやまにひゞきてたかくきこゆれば。このおほせのうへはしさいを申におよばず。けいかもんをいでぬとおもひてゆめさめぬ。

繪

範顯やがて禪定院に侍ける桴の本様を申出て其まゝに作て。錦の袋に入て本幷夢の狀にあひぐしてつかはしたりければ。同年二月十六日近眞樂人どもをかたらひて。社壇の寶前にて古の桴をもて舞を奏す。亂序囀荒序など秘曲をつくしけり。笛景基笙忠秋大鼓景賢とぞきこえし。いとあらたなりしことなり。

繪

太宰帥隆季卿の家の女房に。五條局といふ人の夢に。大河のほとりに卒都婆あり。其銘に。

若有重業障。御笠大菩薩。
慈尊大導師。往生安樂國。

となむかきたりと見けり。

繪

第八卷

建保のころ京にある尼公。嵯峨の釋迦堂にまいりていさゝか啓白することありけり。やがて其所の別當仁雅法眼をもて導師とす。ことのおこりをかたるやう。わが身はもと南京菩提山の邊にすみ侍し程に。つねに春日社に參しに。緣につきて在京の後。ほどとをければ。をのづから春日まうでかなはぬことをなげきゐたるほどに。夢のうちに大明神しめし給やう。我はすなはち嵯峨の釋迦堂にあり。はやちかぢかなればわがもとへまいるべしとうけたまはるとみる。これによりてことに參詣して祈請をいたすといひけり。權現御本地釋迦にておはしますといふことすでに符合しぬ。いとたうときことなり。この事建保六年十二月十五日釋迦堂にて仁雅法眼笠置解脱房にかたり申けり。

繪

禪南院範雅僧都が養父大舍人入道といふものは。そのころ人にしられたる侍也。あるとし天下に疫病はやりて家ごとにやみけるに。この入道が郎等男。ゆめに數多の武士この家にうちいらんとするに。先陣のともがらうちをみいれて。かぶとをぬぎて拜していはく。此所には唯識論おはします。狼藉あるべからずとて。やがてみな退出しぬ。夢さめて後翌朝に入道が家にきたりて此よしをかたる。そも／＼唯識論とはなに物ぞやといふ。範雅おりふし在京してかの家に同宿したりければ。このよしをつたへきゝてくはしくその家をみるに。まろう人ゐの棚のおくより唯識論第九卷をもとめいだしてけり。此僧都つねに宿しければ同朋どもなど取落けるにぞと。

繪

興福寺僧〔增歟〕利僧都は。紀伊國名草郡の人なり。戒

行珠をみがき惠學燈をかゝぐ。顯密を兼學していまだ權實をわきまへず。上階の東西にふたつの道場をまうけて。おの〱聖教道具を安置して。春日の大明神を勸請したてまつりて決せむとおもふ。しかるあひだ神人室のうちに降臨し給て。まづ眞言の壇場を拜しては。貴かな密敎。法相の學窓を拜しては。ふかきかな顯敎とのたまふ。誠にとり〲なるらんかし。維摩會探題も此人のときよりはじまれりとなん。

繪

興福寺の壹和僧都は修學あひかねて才智たぐひなかりき。後には世をのがれて。外山といふ山里にすみわたりけり。そのかみ維摩の講師をのぞみ申けるに。思ひの外に祥延といふ人にこされにけり。なにごとも前世の宿業にこそとは思ひのどむれども。そのうらみしのびがたくおぼえければ。ながく本寺論談のまじはりを辭して。斗藪修行の身とならむと思て。弟子どもにもかくともしらせず。本尊持經ばかり竹の負に入て。ひそかに三面の僧坊をいでて四所の靈社にまうでて。なく〱今は限の法施をたてまつりけん心の中たゞおもひやるべし。さすがにすみこし寺もはなれ。きゝなれぬる友もすてがたけれども。思たちぬることなればゆくさきいづくとだにさだめず。なにとなくあづまのかたにおもむくほどに。

繪

尾張のなるみがたにつきぬ。しほひのひまをうかゞひて熱田の社にまいりて。しば〱法施をたむくる程に。けしかる聖來て壹和をさしていふやう。なんぢうらみをふくむことありて本寺をはなれてまどへり。人の習うらみにはたへぬ物なれども。ことはりなれども。心に

かなはぬは此世のともなり。陸奥國ゑびすが城へとおもふとも。それもまたつらき人あらば。さていづちかおもむかむ。いそぎ本寺に歸て日來の望をとくべしと仰らるれば。壹和かうべをたれておもひもよらぬ仰かな。かゝる乞食修行者になにのうらみか侍べき。あるべくもなきことなり。いかにかくはと申とき。かんなぎ大にあざけりて。

つゝめともかくれぬ物は夏虫の
身よりあまれる思ひ成けり

と云哥うらをいだして。なんぢ心おさなくも我をうたがひおもふかは。いざさらばいひてきかせん。汝維摩の講匠を祥延にこえられて恨をなすにあらずや。かの講匠といふはよな。帝釋宮の金札に記する也。そのついですなはち祥延壹和喜操觀理とあるなり。帝釋の札に記するもこれ昔のしるべなるべし。わがしはざにあらず。とく〳〵愁をやすめて本寺にかへるべき也。和光同塵は結緣のはじめ。八相成道は利物のをはりなれば。神といひ佛といふ其名はかはれども。同く衆生をあはれぶこと慈母の愛子のごとし。汝はなさけなくも我をすつといへども。我は汝をすてずして。かくしもしたひしめす也。春日山の老骨すでにつかれぬとて。あがらせ給にければ。壹和かたじけなさたうとさ一かたならず。渴仰の淚ををさへていそぎ歸のぼりぬ。そのゝち次のとしの講師をとげて。四人の次第あたかも神託にたがはざりけりとなん。

繪

東大寺の法藏僧都は法相宗の人也。維摩會竪義を勤仕しけるとき。苦學いとまなくして。興福寺春日社にまうでず。さるほどに遂業のとき短冊をはさむとて一枚をおりすつ。探題其

ゆへをとへば。立者こたへけるは。章の文をのすれども所立の義科にすべてこの文なし。されば おりすてゝよまぬなりといふ。題者おほきにとがめて現文の次第を誦すれば。立者あやしみながら問答しけり。歸て本章の現文を勘れば炳焉としてあり。後に春日大明神ゆめのうちに。われ日來かの文をかくしつとつげたまひけり。それより後にぞ東大寺竪義者は遂業の日必ず所立の本文をふところにいるゝことにてなんありける。

繪

昔興福寺僧住寺の緣かけてあづまの方にすみわたりけるに。あるとき秋夜耿々として月光清朗なりければ。心をすまして春日の御寶前のありさまを觀念して涙をながしけるに。ゆめうつゝともなく大明神けだかき御すがたにてかけらせ給て。汝は我をはなるれどわれは汝をすてず。我寺にしばしもすむ人になりぬれば。貴賤一子のごとくおもふ。後生もまたおなじと仰られけり。

繪

第九卷

むかしみやこにまづしき女ありけり。ひんがし山のほとりなる寺にて說法を聽聞しけるに。導師のいふやう。人は子をもて第一の寶とす。その中に出家受戒の子あれば。三寶も納受し琰王も隨喜し給ふよしをとくを聞て。わが子の八歲になるを出家せさせばやとおもひなりにけり。さらば興福寺こそ佛法繁昌の所にてあんなれ。おなじくは彼寺僧になさんと思て。八歲の童を具してうはのそらに南都へくだりつゝ。興福寺のにしの御門の邊にやどりにける。女やどのあるじにこの御寺にはたれが名だかき學生[匠歟]にておはすると問へば。喜多

院といふ所に空晴僧都と申人こそ一宗の法燈にて。滿寺こぞりてあふぎたてまつれば。門徒もおほく世おぼえもやむごとなき人にておはすれとかたりければ。そのゆかりをたづねて此童をかの門室にいれにけり。かい〴〵しく聰敏人にすぐれたりければ。僧都も法器をよろこびてねんごろにあたりけり。母も子の心ぐるしさに。やがて西の御門のほどにすみわたりけるほどに。

繪

この童十一歳になる時。はゝ大病をうけてあやうく覺えければ。子をよびよせてなく〳〵いふやう。我すみなれし故郷をはなれて。はるばるとこのならの里まで尋きたる事は。ひとへに汝が出家修學の望をとげさせむがためなり。そのおもひいまだ達せざるに。わが命すでにつきなんとす。これ生涯の怨なり。かつは臨終のさまたげともなりぬべし。ねがはくはことのよしをなんぢが師範に申て我めのまへに出家のすがたをみせよ。心やすく見をきて身まかりなんといきのしたにくどきければ。小兒母のいふまゝに僧都のもとにゆきてかたりければ。ふかくあはれみてすなはち出家せさせけり。そののちやがて西の御門の母のもとへゆきたれば。まちみてよろこぶことかぎりなし。今はこの世におもふことなしといひていきたえにけり。

繪

此女やもめなる旅人なれば。あとにはか〴〵しく後のわざなどよくすべき人もなし。小僧はいふかひなきよはひなれば。たゞむなしき死骸にむかひて。わかれの涙にむせびあきれゐたるに。三日をへて母蘇生してこの小僧にかたるやう。われ死して炎魔の廳庭にひざま

づく。罪人充満し獄卒むれゐて。怖畏たましゐをけし愁歎はねにとほる。こゝにけだかき童子のびんつらゆいたる一人きたりたまへり。炎王ゆかよりおりて。玉の冠をかたぶけて。ふかく恐たてまつるけしきなり。たれならんとおぼつかなく見たてまつる程に。童子みづから我は春日の大明神也。いさゝか申べき事ありてこの所にのぞめり。この女はわが寺僧を養育するもの也。我にむけてその功なきにあらず。ゆるしたまふべき也とおほせらるれば。王かしこまりて。冥官におほせて勘録の帳をひらかすれば。この女人が子興福寺喜多院住侶十一歳の沙彌とよみあぐ。炎王これをききて。このうへは子細を申にあたはず。はやく赦免すべしと申さるゝとおもひてよみがへりたるなり。汝すでに神慮にかなひけり。返々随喜すとて。手をすりなきよろこぶ事かぎりなし。これを聞人ほめあさまずといふことなかりけり。小僧はいとゞ鑽仰の功をつみて碩學のほまれありしほどに。年月をへてのち母又一生かぎりありて。つゐに九品ののぞみをとげしかば。眼前の無常におどろきて。後の孝行をいたさんために。ながく本寺のまじはりをのがれ。閑居のすみかをしめて。あさゆふ法華經を讀誦して先妣の菩提をとぶらひければ。時の人これを祈親持經となづけゝり。後には高野山にすみて往生の素懐をとげけるとなん。

第十卷

一條院の御時。山階寺の別當眞壹僧正の弟子林懐僧都と申人ありけり。維摩の講師を遂て後春日社に參詣して。若宮經所にて我が得し所の論義を心のうちに暗誦して法味にそなへしおりふし。宮人皷をならし鈴をふりて念誦

をさまたげしかば。林懷心のうちに思ふやう。神社のならひといひながら。信心をおこして眞の法味をそなふる所に。如此障礙をなすこと本意にたがふ。我若前途を達て六字の長官にいたらば。この事ながく停止して。法施のさはりとなさじと心底におもひて卽下向す。

繪

其後多年をふといへどもこの事さらに忘ず。思さるほどに先途時いたりて寺務になりぬ。思事とげたることとなれば。社の司におほせて鼓のこゑをとゞむ。そののち社頭冷然なること諸人をそれおもひけれども。權威におそれて物いはざるほどに。宿願ありて七ケ日社頭に參籠す。晝夜の祈請他にあらず。今生の榮花はきはまりぬ。當來の迎接あやまつことなく。たとひ前業つきずして。順次の徃生かたくとも權現の加護にあづかりて出離の道をえんと。

なく〳〵祈申に。そのしるしなくして七日もすぎぬ。今七日をのべてことに信心をこらし祈念するに。二七日に滿ずる曉うちまどろみたるに。第二御殿より束帶に笏もちたる高貴の人いでたまふをすでに權現納受し給て我願滿足すとおもふより渴仰の淚さきだちて隨喜のたもとをうるほす。其時權現よそ〳〵に御殿のまへのはし二こし三こしおりくだり給て。林懷を御覽じて。御けしきあらゝかに御まなじりいとはげしくてうちそむき給へり。こはいかにと思ひて恐み申やう。あやしのやまがつしづの女がふしむ懈怠なるをだに廣大慈悲の御めぐみもらしたまふ事なし。いはんや林懷いやしくも三十頌のひもをときしより一時の貫主にいたるまで。あやまてることなくして。今はたしなく無上菩提をいのり申せば。神慮にかなふべしとこそ心をやり侍に。あ

ますさへ御氣色不快なることこそ頗不審なれとなく〳〵申に。その御返事はなくして。鼕々とうつつゞみは法性のみやこに聞へ。瑮々とふる鈴は四智圓明のかゞみにうつるとこたへ給て。すなはちかくれ給ぬ。林懷驚歎の心ふかくして後悔の思ひ甚し。向後いかなる事ありとも此聲をとゞむべからざるよし慇懃に下知して出にけりとなん。

繪

（後冷泉）康平元年維摩會の初座夜に入てことをはりて。勅使左中弁資仲朝臣ちとね入たりける。夢に長者殿下扈從濟々として三面僧房におもむき給に。西むろのある坊にて笏をたゞしくしてみたび拜し給。夢さめて大にあやしみて。ひそかに彼の房のうちをうかゞひみければ。大會の聽衆永超得業あさ座の後しばらく退下して。暮座をまつほどうちやすむ事もなく。法服をきながらわづかに袈裟ばかりをぬぎて燈をかゝげて書籍にむかひけり。大明神の拜感せさせ給けるまことにゆへありけりと隨喜の思はな〳〵しくして。歸洛の後このよしを奏聞しければ。やがて明年の講師の請を給はせけり。

繪

同人僧都と申けるころ。洛陽法成寺の僧房にすみ侍けるに。異形の僧きたりていふやう。我俱留孫佛のよより魔界におちて。出離の期をしらず。上綱は當代の法將也。ねがはくはをしへをうけ給はりて其方法をしらむとおもふ。僧都おろ〳〵あひしらへば。當所勝地として佛の時より伽藍いまだた□ずなど。さま〴〵のことどもいひける。おそろしくおぼゆれば。春日の大明神をねんじたてまつる程に。かたはらの帳の中に神人のけありて。うへのきぬ

の袖をふるをときこゆ。さるほどに異僧おどろき忽然としてうせぬ。又彼神人難所をばされとおほせられければ他所へかへりにけり。垂纓のもんに率川の大明神の銘ありと申說も侍にや。

繪

或時僧都大明神の御うしろを拜したてまつることありけるに。申されけるは。永超ひさしく聖敎にたづさはりて。厳功やうやくつもる。當寺のうちに永超をきてたれか權現を拜したてまつらむ哉と尊神にちかづきたてまつれども。神にむかひたてまつることを得ざる返々も遺恨也と申ければ。こたへおほせられけるは。申ところまことなり。深く隨喜す。但なむぢわがところにていまだ眞實の出離の道をもとめず。是によりて汝にまみえざる也と。此御ことばをうけたまはりて。僧都なく〳〵祈顔申て漠恩の室に皈て。勸發菩提心集などといふふみに心をとめけるとなん。

繪

天台座主敎圓叡山の窓にして。早旦に唯識論轉讀せしかば。老翁一人隨喜をいたして。庭前の松上にて萬歲樂をまひたまふ。これ春日大明神にてぞおはしましける。

繪

南都に敎懷上人といふ僧ありけり。わかくより道心ありて小田原といふ所にこもりゐる。後には高野の山に住す。三年が程よるひる端座して極樂をねがひて。依正を觀ず。かゝるほどに腰の病をこりてたちあがることかなはず。この時むかしを思いでて。春日大明神を念じたてまつりて。このやまひいやさせ給へとねんごろに祈ける程に。夢に貴女おはして汝は我を捨つれどもわれは汝をすてず。我家は

西方にありとて。空をとびてさり給ぬとみる。其後腰にはかにたちて起居やすらかなり。されば病あらむ人も大明神を念じたてまつらばかなら〔ず脱歟〕そのしるしあるべきなり。後の世までも御たすけありけるにや。この上人をはりの時紫雲たなびき。樂のこゑ空にきこえて。往生をとげにけり。おなじき山維範阿闍梨入滅のよも。ある人の夢に教懷上人しやう衆のさきより出てことに歌舞し給とみけり。四御殿は十一面觀音にて貴女のかたちをあらはし給とぞ申つたへたる。彼聖德太子入胎のむかしも我等救世の願あり。我家は西方にありとの給けるに。權現の今の御告かはらずとて。菩提院贈僧正藏俊はことに隨喜申けり。

繪

第十一卷

修南院惠曉法印は二明の淵源をきはめて一寺の師範たり。稽古の功先賢にはぢず。ある時前夜より次日の巳時までふしたり。そのけしきたえいりたるさまなり。よみがへりてのちゆへをとへば。我炎魔王宮より請せられてむかひ侍つれば。炎王法華經をよむべしとおほせられしかば。よみたりつとかたられけり。わがおりけるとき所領につきていさゝか相論のことありて。ほいなかりければ。ひそかに離寺の思あり。そのとき夢に大明神おほせらるゝやう。なんぢは權別當になしてめしつかはんと思に。などか少事によりて離寺せんとすると承とみて。後ながくその心をやめてつゐに權長官にいたりにけり。

繪

思のほかに鳥羽院の勅勘によりて播磨國にながされけり。書寫山にすみ侍てとしをおくりけれども。恩免なければ。思あまりて大明神を

勸請したてまつりて。歸京の期をしらんと思て念じたてまつれども。おりさせ給はねば。有驗の僧を請たりけるに。ほどなく影向せさせ給て。五ヶ年ありて本寺に歸住すべしと仰らる。御託宣のやう隨喜の涙をさへがたし。はたして五年ありて歸寺して維摩會の一問をつとめける。自謙の句に。

草庵結レ露而多日獨拾二一乘之珠一。松門埋レ煙兮五廻還暗二二明之月一。

ととなへられければ。聽聞のともがらをのをの悲喜あひまじはりて涙をながしけりとなむ。

繪

二條 永萬二年七月廿三日春日の一鳥居のまへにふだをたてたり。その狀にいはく。

寺中の大衆蜂起不レ知二何事一。然間參二詣御社一。四所の寶殿の北のはしらの戸開たり。內に有二人音一而。寶殿のうちより雲聳きて往二南方一。本宮の邊に山と等しき長けある人あり。人に誰人ぞととへば人答云。彼は春日大明神令レ還二本社一御むかへの人也。榎本の御送に御すと云々。其雲聳て本宮の南より往二辰巳の方一。其中尤あをき榊の枝みゆ。三宮とおぼしきに云く。希有なる幼き人に世を預てと云て。寶殿よりあしをさしおろして御座す。此とき御寺の人愁歎して。或流涙し或いかがせんずなどいふ。夢中このことかたる人自も他も流涙無レ限。此事方々雖レ有レ恐。神明の告有二其由一。仍注狀如レ件。廿四日夜夢想。

永萬二年七月廿三日

とかきたり

繪

滿寺衆徒此事をなげきて。八月十九日より同廿八日にいたるまで。十ヶ日のあいだ春日社

にして心經幽賛の談義をはじめて。ならびに唯識論一卷を講じけり。講義者權僧正尋範。權少僧都教覺。權律師玄縁。讀師連尊。擬講教尊。擬講覺憲。已講心曉。已講玄縁。得業藏俊。得業聽衆長賀。濟秀。覺尊。携覺。懃慶。定勝。惠範。聖弘等也。談義をはじめて後廿三日に至りて。菩提院住侶印慶が夢想に。或人きたりて。春日の三宮かへらせ給ひて。一の鳥井におはします。その御形は地藏菩薩也と告ぐるとみてけり。その外人々夢想ひとつにあらずして。甚嚴重なりけりとぞ。

繪

第十二卷

興福寺權別當贈僧正藏俊は。學三藏を兼。道二明にたつして。中古よりこのかたたぐひなかりし人なり。慈母の夢に春日赫奕として口中に入と見てはらみければ。二親寵愛してやがて童名を春日といひけり。幼智ありて甘羅にはぢず。ひととなりて顔回をなむともせざりしかば。日新能才いとゞ名だかくして。まことにその道の宗匠たりき。保延六年五月廿九日のよの夢に興福寺の東門を南さまにゆくに。あけずの門のまへにて見れば。鳥居より大明神御こしにてこの門よりいらせ給。こゝにておろしまいらせたれば。やがておがみたてまつる。一宮はあらはにおはします御かほをば見まいらせながら。御かほのやうはおぼえさせ給はず。餘の三所は御輿のうちにてみえさせたまはず。一宮の仰に。御社へすべてまいらぬをいとしもおぼしめさずと承れば。申やう。學問つかまつるはおなじことにや候と申せば。御心ゆかぬ御氣色ながらうなづかせたまふ。藏俊心のうちにおもはく。無下に御社へまいらぬを恐れ思て禮したてまつる。一御前をば

釋迦。二御前をば彌勒。四御前をば護法。三御前をばなにともしらずして夢さめにけり。

繪

後白河保元年中當寺長講會に因明大疏をよみしかば。影向の戸のまへに鹿なれきたりてふしてかへらず。聞法の志ありとみゆる。ことにをこたらず。かゝりしかば。見人あやしみのゝしりけり。

繪

東大寺東南院に惠珍といふ學生あり。毎日に春日の社にまうづることをつねのつとめとしけり。彼の人夢に一の鳥居のにしのほとりにて車にのる人にあひぬ。物見をあけたれば。をのづから目を見合。つらつらその形を見たてまつれば地藏菩薩なり。惠珍につげての給けるは。けふの而講これにてたりぬべし。けふは心曉珍照をまぼらんがためにその所にむかふなりとつげおはりて後東方におもむきたまふ。黄衣神人山鹿濟々御車のうしろにしたがひたてまつるとみけり

繪

興福寺恩覺法明房といひし人は稽古のほまれ上古にはぢず。學をこたらざりしほど祿そのうちになければ。三衣よろづに似ず。一鉢つねにむなしかりし程に。かつは大明神の冥助のおろそかなることをうらみ。かつは我身の宿報のつたなきことをかへりみて。本寺の學窓をはなれて流浪せしに。思のほかに八幡の宮寺になにがしの入寺とかや申ける社僧に同宿してすみ侍けるほどに。恩覺もとより智者なれは一宗の奧義などあきらかに申ければ。大菩薩もことに法相をまもらせ給によりて。彼房主この恩覺にきえして。ことにふれてなをざりならずあたりけるほどに。むかし南都に

ありしにはにず。心やすきさまになりにけり。かくて兩三年にをよびけるにつけても。いとど大菩薩の御利生の掲焉なる事かたじけなくおぼえて。つねに寶前にまいりて通夜をしつつ。法施をたむけたてまつる事月日をかさねけり。

繪

或夜寶前にまどろみたる夢のうちに。けだかくゆゝしげなる俗。扈従の人濟々として社壇へまいらせ給へば。大菩薩御殿の御戸をひらきて御對面ありけり。朝家の大事どもさまざま御評定ありてやゝひさしくなれば。今は御歸もあるべきほどにやなりぬらむとおぼゆるに。この客人きと恩覺かたを御覽じて。いかにあの僧をばめしをかれて候や覽。我もとにとしごろ侍て修學稽古の道も拔群して侍しかば。宗敎をまもる心には返々不便におぼえ侍しかども。淨業すでに純熟して順次に都率の內院に生べき者にて侍が。富貴の報を得なば上生のさまたげあるべきによりて。わざと福分をあたへ侍ざりしに。いま衣食の資緣を御はからひあれば。順生はあく道の報のがれがたく。不便にも侍ことかなと申さるるとみて夢さめにければ。日來をろかに神明をうらみ申ける事もくやしく。又利生方便のかたじけなきこともおもひしられて。悲喜相半に覺けるあまり。入寺にかくとだに申にもをよばず。やがて寶前よりすぐに南都へ歸て。春日山のほとり。やけけ春日といふ所にいほりをむすび。たじなく出離の行業を修して。臨終正念にして音樂空にきこえ。異香室にみちて。上生の望をとげにけり。

繪

第十三卷

勸修寺晴雅律師は左衛門大夫平正弘が子。母は待賢門院の堀川ときこえし哥人養女也。かの母子なきことをなげきて神佛にいのり申程に。懐妊しければ父母ともによろこび思けり。月やうやくみちて產期ちかづきければ。母祈禱のため長谷寺にまいりけり。路のたよりなるによりて。春日の一鳥居の前に輿をかきすへて。誕生無爲のよしを祈念しけるほどに。忽に鳥居のまへにて男子をうみにけり。其上は物詣もとげず。又京へものぼらずして。三十日がほど南都に經廻してのち都に歸にけり。

繪

この子漸成人して十四歳になりにけるに。ことのたよりありて青蓮院の座主宮鳥羽院の第七宮。にたてまつりにけり。そののちこの小童ことにふれて物あしく。つねは病にしづみあかしくらしける程に。ある有驗の僧を請て護身などせさせけるに。家中の少女に神託あり。其趣我は榎本の明神也。春日大明神の御使にきたれる也。この童は當社一の鳥居の前にて誕生せしかば。其後大明神仕者をつけて守護し給。しかるに今他門にうつる。御本意にあらず。仍たりおぼしめす也との給。この時父母ことに信仰して。いまは山へのぼるべからず。大明神へまいらすべきよしかけ申けり。そののち病たちどころにいえぬ。

繪

かくて父ほどなく逝去して後。母一人のこりとゞまりて。思ながら南都の下向もとげず。いたづらにあかしくらすに。勸修寺の雅寶僧都聊ゆかりありて。この小童をこひうけたれども。大明神にまいらせたるものなれば。御ゆるしなくては他所へつかはしがたきよし申ければ。さて母あいぐして南都へまいりにければ。

若宮の御前にて大明神俄に託してしめし給やう。この小童一鳥居のまへにて誕生ののち晝夜仕者をつけて守護する所也。たま〳〵まいりたる次に。哥うたひて我にきかせよとおほせらる。此童もとより郢曲譜代をうけて藝能抜羣するによりてなり。母こしのうちよりなくなくこれをすゝむ。此時小童靈山の御山の五葉松といふ今様を兩三反うたふ。こゝに巫女又云。汝いのり申事あり。このたびはさらにたゝりおはしますまじきなり。とく〳〵本意をとぐへし。此事をきく諸人奇異の思をなして。めん〳〵涙をながしけり。其後雅寳僧都につけて眞言をまなび。出家して名をば晴雅とぞいひける。權律師に任て後年病をうくることありけるに。唯識論一萬書寫して。範信法印を導師として當社にて供養をとげければ。病たちまちにいえにけり。彼律師後は遁世して空印護念房と號して。忍辱山天王寺などにすみけるが。(後堀河)寛喜二年のころ。手に定印をむすび。口に佛號をとなへて。端座して眠がごとく終をとりけりとなん。

繪

興福寺の角院勝詮僧都。(高倉)安元年中護摩會の講師をつとめむがために。中室にうつりゐて侍ける時。盛恩得業もとより西室にすみけるが。勅使房番論義せんとて。隨分學問してねたる夢に一人の小兒きたりてかたに手をふるゝを。誰人にかと問へば。我は春日四の宮也。勝詮をまぼらむとて降臨するつゐでに。汝が學問所を見んとてきたれるなりとおほせられけり。

繪

興福寺別院菩提院に増慶戒興房といふ僧すみけり。(後鳥羽)文治五年の夏のすゑつかた。住房に下僧えやみをしけるをゐみて。わにといふゐなか

にしばしすみわたるほどに。かの所のどかにして心もとまりければ。先師の十三年までこの所にすまんと思なりにけり。同年秋のころ同朋の僧きたりて酒をすゝむるに。度をすぐさねどもけしからずゑひ。わびしく暮よりあけぼのまでやみあかしつ。次日ひつじの時ばかり。酒をのまねどもまた昨日のやうにおこる。かくて三日までおなじやうに温氣おびただしくせめけり。さるほどに訓慶得業といふ人。ならより使をつかはしてこひければ。病身をたすけてゆきたれば。御社の一切經よみたすくべきよしをいへば。領状して里へもかへらず。菩提院の住房へ行ぬ。うしの時より又れいのやうにおこりけり。

繪

かくておこり心地のやうに日々におこる。ならへ行て後もはや五日になりぬ。苦痛たゆべくもなければ。心のうちにおもふやう。我生年十二歳のときより寺にすみて。ことに大明神を念じたてまつりて。さま〴〵の法施をたてまつる事。年序ひさしくつもりにたり。さればしぬとも御笠山をおがみたてまつらむとおもひて。住房のひんがしむきへはひいでんとすれば。ちからなくして一間ばかりはひよりたれども戸をあくるにおよばず。みまはせば。ものの色みな黄いろなり。かゝるほどに天井の上に笛拍子をうつこゑまづ三度きこゆ。つぎに又二度うつ。其後やがて女なのうつくしきこゑにて琴をひきて。

やへ代てには初中後をはりぬされはよな。

とうたひて後又さしごゑにて。

曲不放逸。捨復令心。先除雜染。寂靜而住。

と誦す。これは[と脱歟]唯識論の文也。大明神の仰なるべしといとたうく覺て。此事をかきつけむと

すれども筆硯なければ人おとをまつほどに。房主ちかくきたればよびてやがてしるさせつ。さて事のやうなを不審なれば護法勸請しきに春日四宮おりさせ給て仰らるゝやう。我すでにかちぬ。われすでにかちぬ。この僧少年よりふかく我をたのむによりて。常住の資緣をあたへつ。なをいとまを申さずして。たちまちに離寺するや。されば八ケ日その身をせめつ。もとよりいのちをうばふ心なし。たゞいましめをくはふる計也。われ水屋におほせて此事をおこなはせつと。日來現のことも即水屋の所爲なりとのたまふ。かの御音を承てのち。すなはち眼をひらきてみれば物色よのつねのごとくみゆ。やがてこの事もし誠に大明神の御いましめならば。明日のうちにかならず身心本にふくせしめ給へと靳念するに。すなはち翌日もとのごとくによくなりにけり。さても唯識論のみ文は。由不放逸。先除雜染と侍る所たへたがはねば。かやうのことは文の上下など常のことなるべし。

繪

第十四卷

或寺僧一念發心によりて南都をさりて後。緣にふれて天台止觀を學して。要文を抄して小皮子にいれて棚のうへに置てけり。ある夜のゆめに。はからざるに火いできてかの皮子をやく。かたはらなる人水にてこれをけさんとすれば。大なる手のしろくこえたるをだして。刀を持てこの火けつ人の手を切る。おそれをなしてけちやみぬ。皮子やけはてゝ後見れば。止觀の抄物みな灰燼となりぬ。其外唯識論ばかり殘て有ると見えけり。後に彼僧人にかたりけるは。改宗の心なかれども。おのづからこれを忌てかれにつく。冥慮にかなはざるにや。さ

りながらそのかみわづかに讀誦せし唯識論。其緣むなしからず。つゐに出離の緣になるべきにこそといひける。

繪

密嚴院僧正隆覺興福寺の別當になりていく程なくて。衆徒蜂起して本寺をおひはらひければ。いきどをりふかくして濫吹を結構せしかば。寺中の騷動やむ事なかりき。其比御社の廻廊に參籠する人の夢に見けるは。第四の御殿の御簾にたちそはせ給て。隆覺がいたく我に威をきさふをばいかゞすべきとおほせらるれば。いかでか人力をもちて神威にきほひたてまつるべきと申せば。されどもそれも我にこれをきせたればとおほせられて。やがて御衣のうらを見せさせ給。おそれながらおがみたてまつれば。微妙の御服のうらに大般若經の一々の文。明々としてありと見えけり。後につたへ聞ば。僧正無言にて如法に大般若を轉讀して。法施にたてまつりけるとなん。

繪

かの僧正の房人のなかに堂衆なりける僧。藥師堂の邊より百日每夜に當社にまいりて。僧正ならびに自身平安に本寺にかへるべきよしねんごろに祈申程に。夢に大明神の御つげにて。なんぢが主は昔より今にいたるまで。帋一枚をもいまだ我にあたへぬ人なりとおほせらると見て。文にていそぎこのよしを僧正のもとへ申せば。此事まことなりとて。只修學の功を貧て。ながく財施をわすれける事をくひかなしみけり。

繪

かゝる程に僧正ひそかに夜中に參社してさまざまくどき申けり。寺中に我ばかりなる寺僧

は有がたく侍。思食はなつ事こそ口をしけれとせめ申ば。示現をかふりけるやうは。まことに汝が申やうによき寺僧なり。はなはだ有がたし。さりながら寺務する程の物の長講に入て少生をあはれまぬものやはあるべき。返々此事不當におぼしめす也と仰られけり。ゆめさめて後我還着せばやがて長講に罷入べしと祈願していでぬ。其後いくほどなく還着して。よろづの長講に入けり。

繪

中ごろの事にや。興福寺に九十人悪徒をおはらふ事ありけるに。其隨一なる僧の師匠にて忍辱山頓覺房といふ久住者あり。弟子が事を愁歎して。大明神に申うけんと思て。山寺より丑時に春日社にまうでて。いきのうちにて法華經一部を轉讀して。曉になれば山にかへる。かやうに百日まいりけるに。滿ずる日。經によみくたびれてまどろみたるゆめに。うつくしき若君おはしてひざのうへにあそび給に。御ぐしぬれたり。この僧問たてまつるやう。何ゆへに御ぐしぬれさせ給やと申せば。若君こたへさせたまひけるは。汝が法華經轉讀するきはにて。とうとけれと隨喜涙にぬれたるなり。但唯識論をよまゝしかば。これよりはたうとく覺なん。餘にちかくてよむがわろきぞ。これより後はいがきの内をばいづべきなり。いねては汝が申事はかなふまじき也。能々おぼしめし定たるなりと仰らると見けり。

繪

同比。京に大燒亡有けり。四方みなやけうせけるなかに。一宇の屋やけずして煙をまぬかる。その時人々未曾有の事なりといひさはぐ程に。となりなる人來て語けるは。この燒亡よりさき。ゆめを見しやうは。黃衣の神人數輩いで

きてこの家のやくるをみて。なげしをさぐりて其所より火を打けつと見き。然るに此家ばかり殘りとゞまりて。火の難をのがれたる事不思議なり。かのなげしにいかなる事か侍らんといふ時に。人々よりかのなげしを見れば。唯識論一卷あり。これを大明神擁護し給てやけざりけりといひて。見聞人ほめあざみけり。

繪

第十五卷

唐院得業といふ人。御社の東廊に入て居たりけるに。修學者のふしたりけるがおきもあがらざりければ。やすからず覺て。いでさまに足にてかしらをけて出たりければ。此僧あさましと思へどちからなくてふしたりけり。

繪

此得業病をうけて大事なりける時。みこをよびて大明神おろしたてまつりければ。このみこのいひけるは。なんぢ奇恠の事ありしかば。一切にたすけおはしますまじき也といふに。つや〳〵思わすれて。こは何事に候らんと申ければ。唯識論によみくたびれて。小生のねたりしをたうとしとおもひしをけたりし。返々奇怪也と仰られけるにぞ。まことにさる事有きと思いだしける。

繪

宰相得業敎英といふ人。春日八講の年頭に。とり被物といふもの事かけてわび居たるに。齋宮の御夢に束帶にて氣だかき人來てのたまふやう。そへ年頭に御助成有べしと仰られける。御ゆめさめておぼしめしまはすに。只今何をつかはすべしとおぼしめさねば。かさなりたる御衣一領を丹波入道淨恵といふ人のもとへつかはして。副年頭とは何事をいかなる人のつとむるにか。かゝる御ゆめを御覽じたれば

かしこへつかはすべしと仰られければ。やがて殺莢得業がもとへやりてけり。大明神の御はからひかたじけなくうれしくて。其衣をとり被物にしけるとなん。

繪

（後堀河）元仁元年十一月廿七日菩提山本願前大僧正信圓入滅のあひだ。大乘院僧正實尊附弟として菩提山にうつりて。中院の事をとりをこなはれしほどに。十二月廿六日殊につくろひたる法事を修せられしに。まへのよ持病喘息おこりて。あすの佛事も不定なれば。遺恨きはまりなくして脇足にかゝりながら聊まどろみ給けるが。おどろきて前にはべる賴憲と申僧に。汝がうしろの前栽に鹿一頭緣に頭をかけて。我にむかひて立とみてさめぬ。不思議のことなりとの給。賴憲は神明の加護なるらんとおもひて。感涙をのごふほどに。僧正の持病よくなりて。翌日の佛事。思ひのごとくとげられにけり。其時尊遍得業といふ僧おなじく菩提山に侍ける夢にも。房中を見あぐるに。あるところにたれぬの一間かけたるところのあるをひきあけて見れば。そのうちに大なる鹿一頭默然としてたてりといひけり。ふたつの事すでに符合しぬ。大明神和尙をまぼりたまひける。いとたうとかりし事也。

繪

中の僧正實尊寺務の時。修理の目代にて紀伊寺主といふもの有。そのころ天下飢饉して貴賤おほく餓死しけるに。かの寺の主寺家の御用もやとて。人にもしらせず下人一人によねをすこし預置て天井の上にをさめさせつ。中室の法泉房といふがくしやう有ける。兒ともしゆく者おほくとりをきたるに。房中煙たえて弟子どもうへなんとしければ。この房主こ

きてこの家のやくるをみて。なげしをさぐりて其所より火を打けつと見き。然るに此家ばかり殘りとゞまりて。火の難をのがれたる事不思議なり。かのなげしにいかなる事か侍らんといふ時に。人々よりかのなげしを見れば。唯識論一卷あり。これを大明神擁護し給てやけざりけりといひて。見聞人ほめあざみけり。

繪

第十五卷

唐院得業といふ人。御社の東廊に入て居たりけるに。修學者のふしたりけるがおきもあがらざりければ。やすからず覺て。いでさまに足にてかしらをけて出たりければ。此僧あさましと思へどちからなくてふしたりけり。

繪

此得業病をうけて大事なりける時。みこをよびて大明神おろしたてまつりければ。このみこのいひけるは。なんぢ奇恠の事ありしかば。一切にたすけおはしますまじき也といふに。つや〳〵思わすれて。こは何事に候らんと申ければ。唯識論によみくたびれて。小生のねたりしをたうとしとおもひしをけたりし。返々奇怪也と仰られけるにぞ。まことにさる事有きと思いだしける。

繪

宰相得業教英といふ人。春日八講の年頭に。とり被物といふもの事かけてわび居たるに。齋宮の御夢に束帶にて氣だかき人來てのたまふやう。そへ年頭に御助成有べしと仰られける。御ゆめさめておぼしめしまはすに。只今何をつかはすべしとおぼしめさねば。かさなりたる御衣一領を丹波入道淨恵といふ人のもとへつかはして。副年頭とは何事をいかなる人のつとむるにか。かゝる御ゆめを御覽じたれば

かしこへつかはすべしと仰られければ。やがて發英得業がもとへやりてけり。大明神の御はからひかたじけなくうれしくて。其衣をとり被物にしけるとなん。

繪

（後堀河）元仁元年十一月廿七日菩提山本願前大僧正信圓入滅のあひだ。大乘院僧正實尊附弟として菩提山にうつりて。中院の事をとりをこなはれしほどに。十二月廿六日殊につくろひたる法事を修せられしに。まへのよ持病喘息おこりて。あすの佛事も不定なれば。遺恨きはまりなくして脇足にかゝりながら聊まどろみ給けるが。おどろきて前にはべる賴憲と申僧に。汝がうしろの前栽に鹿一頭緣に頭をかけて。我にむかひて立とみてさめぬ。不思議のことなりとの給。賴憲は神明の加護なるらんとおもひて。感淚をのごふほどに。僧正の持病よくなりて。翌日の佛事。思ひのごとくとげられにけり。其時尊遍得業といふ僧おなじく菩提山に侍ける夢にも。房中を見あぐるに。あるところにたれぬの一間かけたるところのあるをひきあけて見れば。そのうちに大なる鹿一頭默然としてたてりといひけり。ふたつの事すでに符合しぬ。大明神和尙をまぼりたまひける。いとたうとかりし事也。

繪

中の僧正實尊寺務の時。修理の目代にて紀伊寺主といふもの有。そのころ天下飢饉して貴賤おほく餓死しけるに。かの寺の主寺家の御用もやとて。人にもしらせず下人一人によねをすこし預置て天井の上にをさめさせつ。中室の法泉房といふがくしやう有ける。兒ともしゆく者おほくとりをきたるに。房中煙たえて弟子どもうへなんとしければ。この房主こ

ころのうちにおもひまはすに。修理の寺主こそ寺僧の依怙となるひとなれとおもひて。至極のとかりやにして。このよしをいひつかはす。返事に。ずいぶむ寺僧の御事は忠を存侍。そのゆへは寺僧の依怙となれど。大明神の御託宣をかふりき。されば心のをよぶところいかにもとはげみおもへども。只今このてうこにちからをよばねといひければ。房主いよいよちからなくて。くちおしき事や。これぱかりをこそひごろはたのもしくおもひつれとて。心身きはまりなくして同朋も諸ともにうれへ居たる。草房のとをたゝきてよねをもて來て。きの寺主の御房よりといふ。其時よろこびてふしたる下法しをおこして。やがて飯にせさせてをの〳〵をこなひてけり。次日早旦に寺主來て。夜部の御返事あしく申たる。返々おそれ覺侍れば。いそぎまいりたるなりといへば。房主をこそ御よろこびにまいるべきよしおもふに。御渡返々恐ありといふ。寺主かさねていひけるは。もし僧正の御房のにはかの大事もこそいでくれとて。かくしをきたりつるよねを貴房におしみたてまつりつ。其後ゆめに老僧一人來て仰らるゝやう。なんぢがおしむよねすべきやう有とて。さん〴〵にはねすてゝ歸給ぬと見たるが。あまりに恐おぼゆればこの事を謝したてまつらんとて。まいりつるなりとぞいひける。

繪

三綱清增法橋そのかみ重病をうけて万死一生なりしかば。大明神をおろしたてまつりて。護法うらをとひけるに。物つきに託し給やう。此病者は不用の人なり。さはあれども我よりほかに餘社へむかはず。一向我をたのみたるうへ。すべて心操とゝのほりてあればあはれに

おぼしめすなり。また〱べちの事あるべからず。おぼしめしはなつまじきなりと仰られけり。はたして官職もきはまり壽命もながかりけるとぞ。

繪

第十六巻

笠置の解脱上人は二明の棟梁として。一寺の眼目たりしが。ふかく交衆の囂諠をいとひて。つゐに閑居の素意をとげてけり。信水いさぎよかりしかば。神明光をかよはし給き。建久六（後鳥羽）年九月の比大和國宇陀郡にて。上人病惱のついでに大明神御託宣の事ありけるを。病者心の中にもし大明神まことにつかせ給はゞ本心をうしなふべきに。さもなきこそうたがはしけれと聊不信に覺えける。さる程にやがて又御託宣ありて。汝はきはめたる不信の者なり。神明をばうたがふものかは。佛の加護によりて迦葉善現等甚深の法をときし時是をしらざるにあり。末世の僧名利の執心によりて。順次生におほく魔道に墮す。餘執をつぐのふ事あるひは二三ねんあるひは五六年なり。そののち人天に生ず。順次生々には人天の勝報をうけがたし。また汝は我にをきて宿縁あるものなり。臨終正念なりといふともなんぞ加護せざらむ。なんぢが發心せし事も我身なり。心經の幽賛をよみし時瑜伽論の文をひけるをみてなり。又舍利を信ぜし事も此卽無漏界の文によりてなりなど仰られて。對揚の小生にむかひて。我昔靈山にして釋迦如來の說法を聞き。汝もし法師にしたがはずばいかでか我こゑをきかんやとの給けり。

繪

笠置般若臺の鎭守に春日大明神を勸請したてまつらんがために小社を一字造營す。建久七

ころのうちにおもひまはすに。修理の寺主こそ寺僧の依怙となるひとなれとおもひて。至極のとかりやにして。このよしをいひつかはす。返事に。ずいぶむ寺僧の御事は忠を存侍。そのゆへは寺僧の依怙となれど。大明神の御託宣をかふりき。されば心のをよぶところいかにもとはげみおもへども。只今このてうこにちからをよばねといひければ。房主いよいよちからなくて。くちおしき事や。こればかりをこそひごろはたのもしくおもひつれとて。心身きはまりなくして同朋も諸ともにうれへ居たる。草房のとをたゝきてよねをもて來て。きの寺主の御房よりといふ。其時よろこびてふしたる下法しをおこして。やがて飯にせさせてをの〳〵をこなひてけり。次日早旦に寺主來て。夜部の御返事あしく申たる。返々おそれ覺侍れば。いそぎまいりたるなりといへば。房主をこそ御よろこびにまいるべきよしおもふに。御渡返々恐ありといふ。寺主かさねていひけるは。もし僧正の御房のにはかの大事もこそいでくれとて。かくしをきたりつるよねを貴房におしみたてまつりつ。其後ゆめに老僧一人來て仰らるゝやう。なんぢがおしむよねすべきやう有どて。さん〴〵にはねすてゝ歸給ぬと見たるが。あまりに恐おぼゆればこの事を謝したてまつらんとて。まいりつるなりとぞいひける。

繪

三綱清增法橋そのかみ重病をうけて万死一生なりしかば。大明神をおろしたてまつりて。護法うらをとひけるに。物つきに託し給やう。此病者は不用の人なり。さはあれども我よりほかに餘社へむかはず。一向我をたのみたるうへ。すべて心操とゝのほりてあれば。あはれに

おぼしめすなり。また〳〵べちの事あるべからず。おぼしめしはなつまじきなりと仰られけり。はたして官職もきはまり壽命もながかりけるとぞ。

繪

第十六卷

笠置の解脱上人は二明の棟梁として。一寺の眼目たりしが。ふかく交衆の囂諠をいとひて。つゐに閑居の素意をとげてけり。信水いさぎよかりしかば。神明光をかよはし給き。後鳥羽建久六年九月の比大和國宇陀郡にて。上人病惱のついでに大明神御託宣の事ありけるを。病者心の中にもし大明神まことにつかせ給はゞ本心をうしなふべきに。さもなきこそうたがはしけれと聊不信に覺えける。さる程にやがて又御託宣ありて。汝はきはめたる不信の者なり。神明をばうたがふものかは。佛の加護によりて

迦葉善現等甚深の法をときし時是をしらざるにあり。末世の僧名利の執心によりて。順次生におほく魔道に墮す。餘執をつぐのふ事あるひは二三ねんあるひは五六年なり。そののち人天に生ず。順次生々には人天の勝報をうけがたし。また汝は我にをきて宿縁あるものなり。臨終正念なりといふともなんぞ加護せざらむ。なんぢが發心せし事も我身なり。心經の幽賛をよみし時瑜伽論の文をひけるをみてなり。又舍利を信ぜし事も此即無漏界の文によりてなりなど仰られて。對揚の小生にむかひて。我昔靈山にして釋迦如來の說法を聞き。汝もし法師にしたがはずばいかでかは我こゑをきかんやとの給けり。

繪

笠置般若臺の鎮守に春日大明神を勸請したてまつらんがために小社を一宇造營す。建久七

年九月廿七日の夜同朋等を引率して當社に參詣す。正預等おりふし從候せざりければ。當番の氏人に おほせて。御山の御榊の 枝五六尺ばかりきらせて。やがて氏人にかの御榊の 枝をもたせて。一御殿の 寶前にて祝を申させてのち。上人御榊をうけとりて。南門の櫻〔橿歟〕の外の西腋に置たてまつりて。若宮の御前にまいりて。拜殿に侍ほどに心中に心ならず歌を詠せられけり。

我ゆかんゆきて あかめん。

とてしばし有て又。盤若經。といひつ。かくて上人下向せらるゝに。拜殿の北のほどにて。にはかに物のうちおほふやうに覺えて。目くれ心きえて。頂上兩所ゆびにて さすやう に甚おもし。又さきのやうにをのづから。

釋迦の御のりのあらんかぎりは。

と詠ぜらるれば。たち歸て 若宮の御殿を 再拜して又大宮の 御前へまいりて。後同朋眞惠房御榊をあらごもにつゝみて いだきたてまつる。御榊にとびうつらせ給ぬと覺て。上人の頭上はかろ〴〵となりぬ。さて眞惠房是をもちたてまつりて。笠置の八町坂を身もすゞしくかろ〴〵として。一度もやすまずのぼりけり。さき〴〵は七八度やすみて そののぼりける。其後上人夢想に。春日の御供預觀弘い できて申けるは。これに大明神のおはしますなるは。いづれの所にやと申と見られけり。又同朋眞惠房が夢に。新造の社のうしろの山に大なる鹿二頭あり。ながさ一丈ばかり。たかさ七尺ばかり。つのの長さ五尺ばかりなりと見けり。或時上人夢想に。天の中に御聲ありて。和歌を詠せさせ玉ふ。

我をしれ釋迦牟尼佛の世に出て
さやけき月のよを照すとは

とて。又同御聲にて今樣をうたひ給。
鹿嶋の宮よりかせ木にて。春日の さとをたつねこし。昔の心もいまこそは。人にはしめてしられぬれ。
となん見給けり。

繪

（土御門）正治元年の秋。解脱上人に 笠置の 草庵にておもくなやみ給けるほどに。八月廿二日 酉時ばかりよりつねならぬ けしきいできて。房中の人をあつめていそぎ居所をさうぢし淨衣を着して。大明神の御座とおぼしくて。俄に堂の禮盤のうへに 錦の切をしきて。同朋どもに灑水して香呂を取。威儀をとゝのへて惣禮あり。その詞にいはく。

南無恩德廣大釋迦牟尼如來。 南無甚深妙典成唯識論。 南無護法等十大菩薩。 戒賢玄奘供導高祖大師。

其後香爐をさゝげて。釋迦彌勒は其躰これおなじ。本師は圓寂ののちすなはち 彌勒として世に住し給。靈山知足は 其所不二なりとの給て。又御音たかく朗詠などのやうに詠て。中宗の事を御讚嘆あり。その御詞に云。

妙也微妙也。 玅にして更に妙なるかな。 深也甚深也。深にしていよ〱深し。

又おほせられて云。我宗法相中宗は 傳來ついでありて。 如來滅度九百餘年ののち慈氏 踰闍にしてはじめて演出し給。無着は登地の菩薩。世親は加行の大士。千佛の其一。戒賢は當代法師。玄奘は常啼の 跡を東方に垂れ。供道大師は等覺の形を晨旦に化す。しかるに 法相宗は他所になし。たゞ我寺にとゞまる我寺の 學徒者中にあり。なむぢを法燈といはざらんや。汝てらをはなれし時我いか〔か脱歟〕ばかりおしがりしたしみしかどもちからなし。其も宿緣のひく所なれば。

されどもふたゝび本寺にかへれどもまたきたる。ゆききたる事は改ざれども。本意をば猶すてず。しかるをいまむなしく正法の金をくだしていたづらに苦海のそこにしづめんとす。中古以來の學。或は法慳により或は嫉妬によりて。身づからしる所あれども他にものいはず。其身おの〳〵かくれにしかば其法もともにうせぬ。藏俊大德宿世の願力によりて義法を記しとゞむ。もししからざりせば我宗はながくうせなまし。なんぢ抄出いそぎ功をへよ。あやまりありて德なからん事をおそれ疑歟。善珠護命の製作とてもかならずしも諸人あまねくやは行ずる。いはんや末代の事をや。但よもこと人のしたるにはにじ。口稱念佛の行は汝におはす。さきにいひしやうに念佛は一萬反にてありなん。四萬反をばひとへに學問等にあてよ。同法等の行業はたゞ心にまかせよ。汝にをきては本師の名號を念じて。臨終正念上生內院ととなへよ。我兜率にまうでてより〳〵慈尊をおがみたてまつる。十六由旬妙相はわが眼もきはめがたし。たゞし日本皇主天照太神にまうでて念佛のことを申むねあり。その事かつは宿習のもよをすところ。なかばは魔界の所爲なり。魔界は念佛をすゝむる緣にあらず。これ學界をしりぞくる方便なり。太神宮は佛法をまもり給事我にもすぎましませり。梵釋四王天龍八部は佛の敎勅をうけてふかく正法をまもる。かやうの子細汝みなしりながら。しりて身づからまどへり。今度の病は我つくる所也。この次第はやく大師權僧正に申せとの給けり。抑去七月太神宮にまゐりて釋迦の寶號每日五萬反申べきよし啓白せられけり。天照太神に申むねありきとはこのことなるべし。

繪

南都に少輔僧都璋圓とて。解脱上人の弟子にて碩學のきこえありしが。魔道におちて或女人につきて種々の事ども申ける中に。わが大明神の御方便のいみじきこと。いさゝかも値遇したてまつる人をば。いかなる罪人なれども他方の地獄へはつかはさずとて。春日野のしたに地獄をかまへてとり入つゝ。毎日晨朝に第三御殿より地藏菩薩の灑水器に水を入て。散杖をそへて水をそゝぎたまへば。一したゝりの水罪人の口に入て。苦患しばらくたすかりて。すこし正念に住する時。大乘經の要文陀羅尼などを唱て聞せ給こと日々にをこたりなし。この方便によりて漸々にうかびいでて侍なり。學生どもは春日山の東に香山といふ所にて。大明神般若をとき給を聽聞して。論義問答など人間にたがはず。昔學生なりしはみな學生なり。まのあたり大明神の御說法聽聞するこそかたじけなくはべれと語ける。地藏は當所第三の御本地なり。殊利益めでたくおはすると申ならひたり。無佛の道師付屬の薩埵也。本地垂跡いづれもたのもしくこそ侍れ。

繪

第十七卷

栂尾の明惠上人は。十玄緣記の風煩惱のちりをはらひ。六相圓融の月觀念の窓にほがらかなりしかば。國家の福田として衆生の依怙たりき。そのかみ高尾牢籠の事侍りしかば。しばし紀伊國白上といふ所におはしけるに。たちまちに渡海の願ありし程に。橘氏女といふものの（土御門）建仁二年正月十九日より八ヶ日のあひだ水漿をたちて食事におよばず。家のうちのもの不食のやまひかなとうたがふ程に。顏色すべてたがはず。つねよりも肥滿してみえけり。每

日ゆをあみて讀經念佛しけり。諸人あやしみていかなる事にかと問ばこたふるやう。われなにごとも思はず。たゞ三寶の境界のみ心にいりて世法心にそまずといひけり。かくて廿六日午時あたらしきむしろを障子のかもゐの上にうちかけて其にのぼりてのたまふ樣。われは是春日大明神なり。御房の唐へ御わたりの事きはめてなげかしく侍れば。この事を制したてまつらんがために參たるなり。御房智惠人に勝たるゆへなり。御房を信じたてまつる人をばみな我守護するなり。時々は南都の住所へもきたらせたまふべしと仰らるれば。上人かたじけなくこの仰をかふり侍れば渡海をとゞむべしと申さる。その時かもゐよりおりさせたまふ。懷妊の人なれど。おりのぼりいさゝかもさはりなし。その御威儀どももも寂然にして飛蛾の羽をふるふがごとし。

繪

同廿九日酉時かの女人さきのやうに加行して。一重上人同朋あまた具して。かしこへいたりて障子をあけて見ば。女房とのゐものをかほにおほひてふしけり。上人を見てかほをひきあげてほゝゑみたり。上人此異香はなに事にかと問申せば。何ともしらず。わらはも身のかうばしく覺て見參のしたく侍つる也。たかき所にのぼりたければ天井へのぼるべし。この障子をたて給べしとおほせらるればひきたてつ。やがて天井にのぼりぬ。この時あけて見ば。天井の板一枚あきて。異香にほふ事さきにまされり。上人以下集會して南無春日權現と禮したてまつる。時に天井より柔軟微妙の御音をいだしてのたまはく。たかき所に侍る無禮なれども。我等がともがらは本よりたかき所にあれば。つくべき物を引あぐるなり。つき

おほせて後うるはしくしもへをりて見參すべきなり。さきの見參御不審のこりなければ又まいれるなり。この御拜をとゞめらるべしとおほせらるれども。猶拜したてまつれば。しきりに無禮のよしを被仰てのたまふ樣。神明皆御房を守護したてまつらずといふことなし。其中にわれ竝に住吉の大明神とは隨從したてまつる。中にも我はことに腹中よりそひたてまつる。されば御渡海の時も我等ははなれたてまつるまじければくるしみあるまじ。しかれどもこの國におはしませば。諸人善緣をむすびたてまつるべき事を悦おもへば。とをき御修行をいたみ申なり。われは佛法を信ずる人を皆愛す。その中にことに三人に思をかけたり。三人と申は御房と解脫など又京に一人あなり。此三人の中に御房にことに心をかけたてまつるなりとおほせらる。

繪

さて天井よりおりさせたまふ時。ものちるがごとくをともせず。御音につきて妙香いよいよにほふ。その香沈麝などのたぐひにはあらでこく深きにほひ。すべて人間の香にあらず。諸人感悅にたへず。御手足をねぶりたてまつればあまきこと甘葛などのごとし。その中に數日のうちをいたむ人ありける。ねぶりたてまつりてたちまちにいえてけり。人々きほひねぶれども。慈愍の御氣色にてさらにいとはしげにもおぼしめさず。御身うごかず。色相あざやかに白して水精のごとし。すべて御形躰凡類にあらず。御目まじろがず。御眼廣くながく黑眼はすくなく白眼はおほし。見るもの涙をながさずといふことなし。われ昔よりいまだか樣に眞形をあらはして人の前にくだる事なし。後にもまたあるべからず。これはきはめ

て御房を尊重したてまつるにより形をあらはして見參する也。ともしては邊土山林に思ひをかけてましますは。御自分の修行には目出けれども。有緣の衆生結緣の便宜なければわれらは其事を歎なりなど。さま〴〵の事どもおほせられて。今は時刻ひさしく成ぬ。かへりさらむとするに。此見參うれしければまかりやらぬと仰られて。御手を合て上人を拜したまふ。上人辭し申さるれども。しゐてなを拜せさせたまふ。又おほせらるゝ樣。解脫房をもて同齡としたまふべし。解脫御房は不思議にあはれに候人なりと四五度おほせられても。籠居の事我等うけずかくと申と御物語候べしとのたまふ。又釋尊の御もとにしてねんごろに戀慕の思をはこびまします事。この世に御房のごとくなる人もなし。此事ことに隨喜したてまつる也。又われ御房を愛念したてまつる事。世間の人の一子を思にこえたり。又善財の善知識の善財の發心を哀愍せしにおなじ。今はまかり歸なん。かならず〳〵春日山へ御渡りあるべし。その時われ形は見ずともいであひたてまつるべし。その心をえて心をしづかにしておはしますべきなり。時刻すでにひさし。まかりさりなむと被仰て。上人の兩手を御身にひきよせさせたまふ。異香ことに匂て諸人なきかなしむ事はなはだしければ。又おほせらるゝやう。かやうに悲泣したまふ事なかれ。世末代にして佛道修行に眞實に志をはこぶ人なし。人皆非法をこのめば正法はおこりがたし。かならず〳〵徒に時刻をすごさせ給べからず。勤學して聖敎の深意を得給べし。御房も智惠は最上品の人にておはしませども。學果いまだ熟し給はず。志々の緣務をやめて聖敎に眼をさらさせたまはゞ。漸々に佛意をえた

まふべし。たとひ名聞利養に住して學問せんと申物なりとも。百千人をもいとはずとりをきて勸給べき也。末代惡世のならひ人心つたなき事を歎も泣々せさせたまふべしと被仰て。御眼より涙をながしたまふ。御け色哀傷の色外に顯て衆會の心をうごかす。此事見聞する諸人皆悲慟す。凡哀悲の御すがた不可思議なり。御面をあげて衆會につげたまはく。いますでにまかりさるなり。暫句をとゞめをかん。かたみとしてをの／＼心をなぐさめたまふべきなり。御房とく／＼春日山へきたり給べしとて。還御の作法さきのごとし。此時毎月今夜の問答講なんどの事も契り申されしかば。我等はさやうの佛事にはいかなる所へも降臨せずといふことなしとぞ仰せられける。

繪

第十八卷

建仁三年二月明惠上人春日詣のために。五日國をたちて。同七日東大寺尊勝院におちつかれける時。東大寺中御門の邊にて。鹿卅頭餘同時に膝を折て一面にふす。其程又異香空の中に匂けり。同十一日參社の時。寶前にていさゝか眠。夢に靈鷲山にまうで釋迦大師に奉仕たてまつるとみる事五六度ばかりなりけり。その後紀州下向のあひだ。或はよな／＼の夢に。大明神の御眷屬たちそひたまふと見る。あるひは上人の身に微妙の異香をかぐ人ありけり。

繪

其後御形像の事を祈請のために。春日詣を思たちて。廿二日國をたゝんとする程に。廿二日さきの女房れいのやうにして。大明神おりさせたまひける。しきりにわが影像の事をたづねしめたまへば。其事申さんために來なり

とてくはしくしめしたまひけり。又東大寺中門にて鹿の膝をおりし事は。われ三日さきだちて御迎にまいりて侍しるしなり。又今出河にて二月十五日涅槃會はまいりて聽聞して。禮盤より左の方すこし佛前によりて。三尺餘あがりて侍し也。如來光明出已還入非無因緣。心於十方所作已解。將是最後涅槃之相の涅槃經の文を誦して。釋せさせ給し時こそたうとさにたへずして。おり降て板敷にて聽聞せし哉と。すべてさまぐの密事數刻御物語ありけり。上人御かたみに御哥一首をたまはらんと思と申さるれば。この見參にすぎたるかたみや候べき。又我影像をかたみとせさせたまふべし。されども仰らるゝ事なればとて。

千早振君かいかきにまとゐせん
かたみにめくみたるゝとをしれ

かくなんおほせられけり。

廿三日國を出て廿五日南都へいりて。戌刻社頭へまいりてかへりふしたまへる夢に。靈鷲山に詣して釋迦大師に奉仕したてまつるとみられけり。又廿六日參社して御前にして眠がごとくしておはすれば。手に二の白みがきの鐵鎚をなんもつとおもはれけり。

繪

廿七日解脫上人對面のために笠置寺に參たまひけるに。解脫房申されけるは。只今不思議の句あり。これ大明神御出とつれまいらせて御影向あると覺るなり。しばし法施まいらせて後見參すべしとて。眼を閉て法施をたてまつる。其後數刻對面ありて今日見參の悅に秘藏の舍利わたしたてまつるべしと被申けり。廿八日寺を出て歸らんとしたまふ時。夜部やくそくの舍利たてまつらんとて。紙につゝみてわたしたまふ。明惠房これをとりて。やがて經

袋にいれて。拜見にをよばず。又何粒ありともしらずして東大寺に歸つきぬ。

繪

やがて參社して御前にて眼を閉て法施をたてまつりて。眠れるがごとくにしておはすれば。さきのこの鐵鎚はこの二粒の舍利なりと覺れば。上人はじめておどろきて。寶前にてやがて開てみれば。二粒の舍利あり。不思議に覺て。またもとのやうにつゝみて經袋に入て。左の脇にかけて祈請申さるゝ樣。このたびめされつるは。この舍利たまはせんがためなるべし。しかあれば今より後此舍利を釋尊の御かたみ。大明神の御身とたのみたてまつるべし。かならず權現の御身此舍利にいりゐさせたまへと申て。眼をふさぎて一心に祈請し申さるれば。大明神左の脇にちかくたちそひて立たまへりと見ゆ。これ左の脇にかけたてまつる御舍利に大明神の御身いらせたまふしるしなるべし。

繪

第十九卷

ちかきころ興福寺の學侶蜂起して。大和惡黨を先かへり取て。流罪せらるべきよし訴申事有しほどに。正安三年（後伏見）十月廿五日子時惡黨社頭に亂入て。大宮四所の御躰をの〳〵二面。若宮六面。合て十四面の神鏡を盜取たてまつりて。當國高尾の別野といふ所にひき籠りぬ。やがて廿八日衆徒軍兵をひきゐてからめとらんとするに。大に合戰するほどに。惡黨交名うち池尻若王左衛門尉家政といふもの。戰場にてうたるゝ程に。かの男もちたてまつる神鏡三面取かへし奉りぬ。

繪

同十一月八日天こゝろよくはれたるに。當國

當業といふ所の堂ににはかに瑞光あり。其貞虹のごとし。行客土民あやしみをなして堂内をうかゞひみれば。神鏡三面しろき布袋にいれて佛前にかけたてまつる。落書一通かたはらにあり。良福寺の政康冠者所持の分なりけり。事のよしを平田庄の地頭につげければ。地頭いそぎ土民をもよをして。金勝寺にうつしたてまつる。そのほど二上の嶽より黑雲そびき。霰しきりにふりて。五色の雲春日山に立かゝる。拜見の緇素感涙を催さずといふ事なし。

繪

同卄日寅刻春日神人康景夢の告有ければ。其朝やがて高尾山におもむくに。いまだかの山にのぼらずしてはるかに嶺をみれば。瑞□みえけり。いとたうとく覺て其所をもとむるに。次日午時神鏡一面地より掘いだしたてまつりて。まづ金勝寺にうつしたてまつり。前後の神鏡七面かつ〳〵威儀をとゝのへて本社へわたしたてまつりぬ。

繪

十二月十三日當社神人守職神鏡をもとめたてまつらむとて。高尾の別野にむかひぬ。かの山に昇て後。山のうちしきりに鳴動しければ。かつはおそれかつはあやしみて。事のよしを住侶にたづぬれば。惡黨亂入の後。連々かくなんあるといひけり。いとゞ信おこりてもとめたてまつるに。花形の御正躰五面。しもの堂の本佛の御身の中よりもとめいだしたてまつる。同十五日やがて本社にわたしたてまつりぬ。

繪

同廿三日當國布陀山の峯にて。御正躰二面またもとめいだしたてまつる。これ遠春法師が分なりけり。廿五日本社に渡したてまつりぬ。

さても花形の神鏡五面を他所へいれたてまつらんとすれば。あせをながさせ給事水のわき出るがごとし。其うち少々光をはなたせ給き。この靈驗を申つたへんとて。ひとり身をすて殘とゞまりて。ありのまゝに申よし。遠春法師起請文にのせて學侶のなかへ申けり。十四面の御正躰ことゆへなく三月のうちにこと〳〵く本社にかへりいらせたまふ事。いと不思議なりし事なり。

繪

第二十卷

(後二條)嘉元二年興福寺の寺僧の中に大和國の地頭を追たるともがら有しかば。關東大にとがめ有て。衆徒神人などおほく召とられて。當國に地頭ををかるゝ事侍き。一寺なげきかなしみてみな逐電(電歟)せしほどに。七月のはじめつかたより春日山の木いまだ黄落の期をむかへ侍らぬにたちまちにみどりのいろを變じて梢すき神さびゆきしかば。神護景雲(寶龜)二年の御託宣に藤氏繁昌法相護持のために御笠山に跡をたれまします。末代にをよびて神事違例し政かけざ(たる歟)らん時樹木たちまちにかるべし。我當山をさりて天城にかへりますとしるべしとあれば。今にあたりて垂跡のとぼそをとぢて。本覺の城にかへらせ給にやとなげきあへりし程に。かやうの事ども關東へきこえて。おほきに驚て地頭をたてられにけり。この事いまだ南都へもきこえぬに。九月廿八日の夜たがいふともなく。大明神かへりいらせ給といひさはげば。人々面々たちいでて見たてまつるに。四方の雲の色炎上の餘氣のやうにひかりて。涼風ゆるくふき。微雨まゝそゝぐ。遠近の火濟々星のごとくとびあるきて社々にいらせ給。大方目もあやなり。社頭にてまた御歸座のや

うに松明二行に見えけり。又人もけたぬに寶前の燈爐の火一度にきえてけり。さき〳〵大明神いでさせ給時もいらせ給時も火をけつ事にてなん有けり。長者より御神樂をおこなはれしおりふしなりしかば。陪從近衞召人などおの〳〵見さはぎけり。

繪

凡我朝は神國として宗廟社稷三千餘座。各記現まち〳〵利益とり〴〵なれども。かゝる不思議どもいまだ見も聞もをよばず。まことにこれ勁松は霜の後にあらはれ。忠臣は國のあやうきに見る事なれば。時末代に屬し人諂曲なるによりて。不信の衆生のために掲焉の化儀をしめし給なるべし。つら〳〵事の心を案ずるに。釋尊の一代すでにすぎて。慈氏の三會またはるかなれば。前佛後佛の中間にむまるるもの。今世後世の利益をうしなはん事をあはれみて。鶴林のけぶりのうちにかくれ給しかども。鷲峯の月の光をやはらげて劫濁見濁の塵にまじはり。くらきよりくらきにいるともがらをすくひ給。大悲のふかき御志おもへば涙もとゞまらず。されば現世の官祿をさづけ給も。更に一旦の名利のためにはあらず。和光同塵は結緣のはじめなれば。この一緣をむすびをきて。八相成道利物のをはり。つゐに菩提にいたらしめんと也。これすなはち成事智の所現は專雜類機に對すれば。うれしきかなや。なか〳〵流轉の凡夫として。いま或現餘身の化導にあへることを。隨心淨處卽淨土所なれば我神すでに諸佛也。社壇あに淨土にあらずや。しかれば淨瑠璃靈鷲山やがて瑞籬の中にあり。補陀落淸凉山なんぞ雲海の外にもとめむ。明惠上人の靈山とをがみ俊成卿に菩提の道としめしたまひしこのことはりなりけん。

又罪業もしおもくして。因果しからしむるものは内證法性の土。淨穢をわかぬは大明神の本地。法身の化用として變現したまふ地獄のなかにおちて。つゐに出離の縁たるべし。璋圓僧都人につきて申ける。まことなるにや。すべて隨類應現の引接難思なれば。六趣四生にかくるとも。一たび縁をむすびたてまつりなば。餘神の引導にもるべからず。かの密教の心。地獄鬼畜生も曼陀羅の聖衆とならへるもよくよく思あはすべきことなり。

右春日權現驗記以屋代弘賢本挍合

うに松明二行に見えけり。又人もけたぬに寶前の燈爐の火一度にきえてけり。さき〳〵大明神いでさせ給時もいらせ給時も火をけつ事にてなん有けり。長者より御神樂をおこなはれしおりふしなりしかば。陪從近衞召人などおの〳〵見さはぎけり。

繪

凡我朝は神國として宗廟社稷三千餘座。各記現まち〳〵利益とり〴〵なれども。かゝる不思議どもいまだ見も聞もをよばず。まことにこれ勁松は霜の後にあらはれ。忠臣は國のあやうきに見る事なれば。時末代に屬し人諂曲なるによりて。不信の衆生のために揭焉の化儀をしめし給なるべし。つら〳〵事の心を案ずるに。釋尊の一代すでにすぎて。慈氏の三會またはるかなれば。前佛後佛の中間にむまるるもの。今世後世の利益をうしなはん事をあはれみて。鶴林のけぶりのうちにかくれ給しかども。鷲峯の月の光をやはらげて刧濁見濁の塵にまじはり。くらきよりくらきにいるともがらをすくひ給。大悲のふかき御志おもへば涙もとゞまらず。されば現世の官祿をさづけ給も。更に一旦の名利のためにはあらず。和光同塵は結緣のはじめなれば。この一緣をむすびをきて。八相成道利物のをはり。つゐに菩提にいたらしめんと也。これすなはち成事智の所現は專雜類機に對すれば。うれしきかなや。なか〳〵流轉の凡夫として。いま或現餘身の化導にあへることを。隨心淨處卽淨土所なれば我神すでに諸佛也。社壇あに淨土にあらずや。しかれば淨瑠璃靈鷲山やがて瑞籬の中にあり。補陀落淸涼山なんぞ雲海の外にもとめむ。明惠上人の靈山とをがみ俊成卿に菩提の道としめしたまひしこのことはりなりけん。

又罪業もしおもくして。因果しからしむるものは内證法性の土。淨穢をわかぬは大明神の本地。法身の化用として變現したまふ地獄のなかにおちて。つねに出離の緣たるべし。璋圓僧都人につきて申ける。まことなるにや。すべて隨類應現の引接難思なれば。六趣四生にかくるとも。一たび緣をむすびたてまつりなば。尊神の引導にもるべからず。かの密敎の心。地獄鬼畜生も曼陀羅の聖衆とならへるもよくよく思あはすべきことなり。

右春日權現驗記以屋代弘賢本挍合

群書類從卷第十七

神祇部十七

春日社記

一御殿。武甕槌命。鹿嶋。　常陸國。
二御殿。齋主命。香取。　下總國。
三御殿。天兒屋根命。平岡。　河內國。
四御殿。姫太神。太神宮。　伊勢國。
簡四前。宜命黃紙。
若宮殿。鹿嶋大明神。
榎本殿。巨勢姫大明神。
水屋明神。牛頭天王。稻田姫。南海天女。
卅八所。金峯山。藏王權現。
紀伊社。赤穗明神。
祓戶社。道祖神。

御宮殿。內ニ觀世音。弘法大師作。
風御神。風神ト申。
一言主宮。內ニ不動明王。
三枝明神。牽川大明神也。
氷室明神。內ニ陳那菩薩。
愛宕權現。內ニ三所辨才天。勝軍地藏。天神。
高山五社。內ニ善如龍王。
上水屋五社。長尾大明神。
十三重塔。內ニ浮雲明神。
多賀社。內ニ金剛童子。
住吉明神。
椿本角振明神。戶口。

山内外末社五十一神。此内降跡卅五所。口傳也。故不レ上。

神秘矣。

起。神護景雲二年正月九日大和國添上郡三笠山御垂跡。同年十一月九日寅日寅時宮柱立。御殿造畢。自二常陸國一御影向。御乗物以レ鹿爲二御馬一。以二柹木枝一爲二御鞭一。

延喜式曰。大和國添上郡春日祭神四座。稱德天皇神護景雲二年正月九日大和國添上郡三笠山御垂跡。同十一月九日寅日寅時宮柱立。御殿被レ造了。

神護景雲元年六月廿一日伊賀國名張郡夏身郷一瀬河弖爾御沐浴。以レ鞭爲レ驗立給。成レ樹生付。自レ其後御同國薦生中山數月。御時風秀行等爾燒栗各一賜天宣云。汝等子孫無二斷絶一可三我ニ仕ル二者。栗殖ヘンニ必可二生付一。卽生付了。因レ之始號二中臣殖栗連一。同年十二月七日大和國城上郡安部山御坐。同二年三笠山御垂跡也。

御位記曰。人皇五十四代仁明天皇嘉祥三年九月正一位。

御造營。神護景雲二年預二神官中臣殖栗連時風同秀行等奉行一。

御遷宮。光仁天皇御宇寶龜年中始也。

祭。仁明天皇御宇嘉祥三年庚午始行。

二季御八講。村上天皇御宇天曆元年丁未始而被レ修レ之。長者貞信公忠平。別當平源大僧都。

同行日。後一條御宇寬仁元年二月廿日十月廿日被二始行一。

二階樓。號二南門一。白河院御宇承保二年八月四日始成。

御神樂。同御宇三月十四日始被レ行レ之。

夕御供備進。鳥羽院御時永久二甲午年定。

本社廻廊。高倉院治承三己亥年二月廿六日三ケ

廻廊同時始作レ之。

臨時祭。伏見院正應三年二月九日始。使頭中

將伊定朝臣。
記曰。延喜十六年二月十日長者右大臣正三位藤原朝臣貞信公。御參修宮［　］
朱雀院承平七年丁酉十一月廿五日興福寺勝圓爾告御託宣。慈悲滿行菩薩成給。
一條院永祚元年己巳三月廿二日行幸始之。其後之行幸。代々御帝記有之。故不載。
當社春日御殿內若宮起。
內院。太刀辛雄明神。飛來天神。海本明神。八龍神是也。栗辛明神。隼明神是也。相本明神。佐軍神。天夜叉神是也。
中院。椿明神。角振明神是也。青榊明神。辛榊神。金剛童子明神。岩本明神。住吉明神是也。風御子明神。金命是也。
外院。水屋明神。牛頭天王是也。榎本明神。巨勢大明神也。祓戸明神。舟戸明神。道祖神是也。一言主明神。奉川明神。

三枝明神。內院之南方有。件社者右大臣是公武智麻呂孫。建立也。因南家苗裔行此祭者。春日祭翌日也。
若宮殿御出生。朱雀院御宇承平三年也。其後六十六代一條院之長保五年癸卯三月三日巳刻。時風五代孫中臣是忠拜見之。舊記在之。
御別殿御遷宮。崇德院長承四年乙卯二月廿七日寅一點。神主祐房奉移之。通合明神登波是也。
祭禮。七十五代崇德院保延二年九月十七日始被行之。
拜殿幷經所。近衞院康治三年五月始建立。
十六會講。崇德院大治五年十一月廿七日始行之。于社院內而修之。

右以元本再挍了天保十五年十一月廿三日忠寶

春日大明神垂跡小社記

當ニ神護景雲元年丁未六月廿一日。從ニ常陸國鹿嶋宮一伊賀國名張郡夏身郷仁渡御座。自レ是同國薦山仁在ニ渡御一而數月御居住。同年十一月七日大和國安部山仁渡御座。同二年正月九日同國添上郡三笠山本宮仁御垂跡。同二年戊申十一月九日寅日下津磐根爾鎭遷御。

御寶殿。辰巳。太刀辛雄明神。其北裏。飛來天神。其北竝。八龍神王。

內殿。後。梅本明神。亦者海本トモ申ス。其北。栗辛明神。所謂隼明神。

四御殿。後。椙本明神。其北。佐軍神。所謂天夜叉神是也。

中院乾方腸戸本。椿本明神。亦角振明神是也。

四御殿。其西方。風御子明神。金命是也。其西座。忠隆。金剛童子明神是也。

內殿坤方座。岩本明神。住吉明神是也。

舞殿東方。神宮寺座。所謂不開殿是也。其次ニ青榊明神。次ニ幸榊明神巳上。鎭座。次ニ宍栗明神。次ニ井栗明神。此兩小神新勸請也。

外院。水屋明神三所。所謂牛頭天王是也。自ニ本社一乾二町去御座。

福擁主。榎本明神。所謂女神。號ニ巨勢大明神一自ニ本社一坤座。

祓戸明神。所謂瀬織津姫明神。自ニ榎本一一町西座。

船戸明神。亦岐神。所謂道祖神。自ニ本社一一町西。

廻廊西竈殿。

以上四十三所。自ニ本社一一町西座。

若宮內院。太玉明神。手刀辛雄明神。二所。

外院。兵主明神。次南宮明神。其次一童子明神。三所。自ニ本社一北座。

懸橋明神。鬼子母神內在。自本社南當。
卅八所明神。南裡左良氣明神。其南一町去。所
謂識王權現。諺社。所謂辨才天也。
（本社回廊之內）紀御社。赤穗明神。嶋田明神。御前石立明神。天
乃石吸明神。自本社巽方御座。
一言主明神。自本社十八町去座。
率川明神三所。三枝明神。正一位也。自一言
主西五町去座。
穴栗明神。自本社南十町去座。
非栗明神。此兩社奉渡祐房中院也。
諺社。（二社座）赤乳明神。白乳明神是也。自本社北十
町去座。
一宮。武甕丸命。
二宮。世御神甕丸連日命。
三宮。舍人水權明神。
此三所自水屋社西一町去。忠隆宮內座。
愛宕勝軍神。辨才天女。天滿天神。

同社壇。左方三寶荒神。右方愛染明神。
右九萬八千夜叉神也。
北向荒神。日月星三光也。社壇毛三所。今二社
退轉也。
柏子神。修圓大威德明王之化現也。
酒殿。本地不動明王也。十三重塔座。自本社
坤方建。
野神。牽牛織女也。（牽牛者彥星男也。七夕者織女也。）
大鳥居。發心門。歌曰。榊葉仁夕四手付天打拂
身仁者穢乃雲霧茂那之。
二鳥居。修行門。歌曰。鳥居立左右高天乃原那
禮波集利賜倍四方乃神神。
藤鳥居。菩提門。歌曰。千盤屋振神乃鳥居於出
入者萬乃罪毛消宇勢爾慶理。
大宮御前。御橋。歌曰。祈禮人浮世之中乃榮花
仁波息災壽命福德乃道。
車馬屋殿下橋。五位乃橋登名。歌曰。宇智和多

須橋爾五色乃雲立天誠乃神之身催貴ヲソナス。

鹿道石橋。善趣乃橋登名。歌曰。知和屋不留我加心與利成須和佐於伊津禮乃神加條所ニ見ヘキ。

瀧本南橋。語羅伊橋。上細道在。願成就道也。歌曰。何事毛叶三笠乃中間道相乃知志夜語羅伊乃橋。

榎本殿。下橋。瀧本橋。四位。歌曰。靑瀧乃橋於通利志神水於宇氣與呂古布屋卽心成佛（トラナリホトケ）。

大鳥居。東橋。馬出橋。歌曰。千和及不留甲斐乃黑駒引與世天乘天意佐無留春日野乃原。

西屋堂。地藏菩薩御座。

南門。赤童子御影岩座。石橋下六足去座。

御社記終

右一卷之記。神社傳幷諸舊文拔出。爲二當社秘記一。愚不レ可二他見一。

于時長承二年二月十四日。神宮預中臣諸房 名判

加レ注淸書畢。

右御社記。末代役輩可レ相二傳御神恩一可レ仰也。

文明九年九月十六日隱密焉。（本書移之如能々可秘）

右以元本再挍合了天保十五年十一月廿三日忠實

春日神木御入洛見聞略記

應安四年十一月日。奉振寄神木於六條殿。今度自西路御入洛云云。傳聞訴訟肝要者。南門跡多非義。可被改門主之由云云。同日興福寺方衆等蜂起。押寄一乘院合戰。卽燒拂之間。門主忽沒落。大乘院同之。但不及燒拂云云。已不待裁許。兩寺與加治罸。此上者不及豫議歟。而兩門主沒落入洛云云。急可被處流刑之由奏聞之。其外三寶院僧正幷覺王院僧正等。同可有遠流之由。訴訟篇目數十箇條云云。兩僧正者一乘院汲引之故也云云。

同五年。任申請之旨。一乘院大乘院被按罪名了。而兩人忽沒落晦跡。其上自餘訴訟數十箇條被裁許之間。猶御在洛云云。

同六年九月二日。自酉刻至寅刻。大風穿山拔樹了。昔永祚風未可及今度云云。神木御在洛中非常儀歟。不可說々々。

同七年甲寅。自正月中旬新院御惱。御疱瘡云云。今年流布。同廿八日崩御。天下諒闇儀也。御歲卅七。世上之重事何事如之。自去年以來大變也妖。諸社之恠異勘文等繼跡了。而遂不及御祈禱。殊神木御在洛中。恐怖多端之處。果而有此御事。凡翰墨難及者也。

同年月。赤松、、二人被遠流。今度依南都之訴訟也。於攝州神人打擲事云云。

同十一月五日。兩僧正配流事被宣下。御歸座依此兩箇條于今延引云云。

同十八日。覺王院僧正備中國下向云云。

同廿一日。法身院僧正播磨國下向。但今暫丹州篠村可有逗留云云。卽播磨國淸水寺隱居了。

同十二月十七日。神木御歸座。其儀如常。關白。二條殿。別當。萬里小路新宰相繼房。卿相雲客。其數出仕云云。太閤與關白殿御同車。令參六條殿給。但被路次之

御供奉云云。
同廿五日。法身院僧正上洛。自武家執申之間。先依內々仰上洛云云。
同廿八日覺王院僧正同上洛。內々仰如前云云。
同八年乙卯正月十七日。兩僧正被召歸之由宣下云云。
康曆元年己未八月十四日。
春日神木御入洛。直奉入六條殿長講堂畢。
同二年庚申。自八月比大名少々發向。宇治邊取陣。是任衆徒申請可發向南都之由也云云。
十二月十□日。神木御歸座。寺家方衆等大略離去間。大衆不及上洛。但一乘院方御門徒一方有之。今度上洛云云。三百餘人歟云云。二條殿下以下卿相雲客供奉。洛中雨。當山今夜大雪也。宇治迄神幸。翌日南都御歸座云云。是今月廿五日。右大將家御着陣之間。藤家出仕之料。御歸座事。自武家押而被勸申之。一乘院門主今度御還住也。御忠節如此雖其沙汰。惣寺衆徒悉離散。野心之間。自武家軍兵押下之。奉守護神社云云。

さかき葉の日記

後普光園院攝政良基公

奈良の京春日の里。さほのわたりにしるよししてとし經たる翁侍り。當初より三笠山をたのむよすがにて。北の藤なみかけまくもかしこき代々をなむへたりける。奈良の都の名におふ故郷は。さらぬだに物さびたるに。おとゝ（貞治三）しの冬つかたより御榊都にわたらせ給へば。神だにすませ給はぬ御山の秋の月。いとゞ身にしむ心地して。林にたゞずむ鹿のね。苔にむせぶ水の聲までも。今年は恨がほなるも。聞なしからにや。此春の比は。世のなかの人おほくわづらひて。人の夢見もさはがしかりしかば。心有たぐひは此御たゝりにやとぞ歎き侍し。鹿の頭など道大路にちろぼひ。又目も鼻もなき頭。六條殿の庭にもいづくよりともなく現じなどせし事。誠に不思議なりし事にや。大方神々の御心も人にたがはぬ事にて侍とぞ。此春日御神は。いちはやくたち所に罸をあてなどし給事はなけれども。昔より神慮にたがひぬるものの。つゐに損せぬはなき事にてあるとかや。されば徳治（後二條）にも大覺寺の法皇（後宇多）御榊をふせぎたてまつれと仰られしに。直の託宣ありて。不思議の御歌などありしにや。げにも幾程なくして其驗も侍りけるとかや。今もいかなる事かあらむずらんなど世の人は申侍しに。道朝禪門が事。今日明日かゝる事有べしとは思ひより侍きや。いかにもわたくしありてかゝる難にもあひ侍にやと世がたりにさゝめきあひたれば。げにもさもやとぞおぼえ侍る。此翁も老の坂くるしき道にたち出て。さいつ比長講堂へまうでたりしに。ならはぬ御旅のすまゐおもひつゞけ侍りしに。さらに涙もを

さへがたかりき。さしも本社にていとにぎはしくこそみたてまつりしに。あれ果てたる古寺のこゝかしこやぶれくづれて。月だにたまらぬのきの板間に。忍草生しげりて。うらがれわたる庭のあさぢふ。なきよはる虫の音。所所にきこえたるも。彼野宮の秋の夕の物かなしさも。かくこそはと所がらさへあはれそふ心ちぞし侍し。かたの様なるかり屋きりかけ。たつ物などの内に神司の四五人十人ばかり所所にむれゐて。あはれやう〳〵夜さむにもなりぬ。いつとなき御旅所かな。神の御愁だにも此三年叶事なし。まして人の歎いつの世にか民のこゝろもひらけ侍べき。此ほど南圓堂の本尊などに付ていのり申事侍し。さやうならば一事なきやうはよもあらじなどさへはらくろげに申合たりしが。はたして口うらもむなしからぬ御誓なりけり。されども一夜の中。

都のさはぎもしづまり。いさゝかの觸穢などいふ事もなくて。ならの訴訟も今は殘なく眉を開たるにて。八月十二日の歸座とて。世にも目出度事とのゝしり侍にこそ。いまは天つそらにたゞよふ雲霧もはれ。胸の中にしげりたる葎ものこりなき心ちし侍也。まへ二三日のほどは。衆徒神人一二万人も布引に上あつまる。道もさりあへぬほど也。其日に成ぬれば都の中ゆすりみちて。物みるもの。あやしのしはふるひ人。おさめ。みかは。たびし。かはらなどまで。あしをそらにて。六條殿へとはしる。衆徒どもは六條院を集會所にしてあつまり。夜より雨ふりていかゞとおぼえしに。弘安（後宇多）正和（花園）にもかくこそありしかど。誠の神行の期に臨ては。ことにめでたくこそ晴たりしか。今日もさこそあらむずらめとぞ。こゝろある人は申侍し。公卿着座して裝束もうるほふばかりな

りしが。雲はれずして雨のやみたりしもまことに神慮といとたうとくぞ覺え侍し。辰の時に南曹弁嗣房寺へは參て。事ども奉行す。神人衆徒やう〳〵參集て。六條殿の庭より六七町はひしとなみゐたり。巳の時に權の別當懷雅權僧正を初として。僧綱三四十人參りて。東の庭の北の方にさぶらふ。衆徒は東の方に立滿たり。巳の時ばかりに關白殿(良基)參給。神司の輩など皆門前へ參合。いまだ事具せずして先堂上へのぼらせ給。嗣房召て條々御下知の事あり。大乘院僧都御房をそしとしてたび〳〵人をつかはさる。午時ばかりに左大臣殿(冬通)。九條大(公基)納言殿。一條大納言殿(房經)。別當(忠光)など次第に參て。東の庭の南の方の公卿の座につく。やう〳〵事なりぬれば。關白殿座につかせ給。奈良の僧綱已下。座の前に下て其禮をいたす。これ時の長者の驗にや。大臣以下の座は只高麗の疊一帖也。執柄の御座は二疊重たり。これも長者のけぢめにやとぞ見え侍し。此殿は曆應にも內大臣にて供奉せらる。又今度當職にて申沙汰ある事いとありがたしとぞ衣かづき申侍し。其後大乘院の僧都參せ給。上童などきら〳〵しくみゆ。出御の期に臨て衆徒僉議の事あり。神訴悉く眉を開く。上關白以下氏の人々神行にしたがふ。吾神の威よにことなり。朝家も武運も長久なるべき趣也。みな一同す。其後樂人北の方よりすゝみて亂聲あり。神人數百人參て先布留を出したてまつる。布留の神寶東のはしを下給ほど。關白以下の人々座の前に下てみなひざまづく。布留すぎさせ給て後。本社の御榊。五所の御正躰出させ給。神官ども覆面して持奉る。此時樂人還城樂を奏す。警蹕のこゑごゑかう〴〵し。關白以下僧綱まで首を地に着て平伏す。中門の邊にいらせ給時。公卿本の樣

に座につきて。次第に神行にしたがふ。御道の行列はいつもおなじことなれど。此度み及び侍りしやうを注し申なり。先赤仕丁二行に數十人白杖をもて前行す。次に白衣の神人數百人榊の枝をもつ。次布留の大明神の神寶に神人數百人相從ふ。次に又黄衣の神人數百人あり。次御正躰。神司ども束帶を着し覆面をたれて持たてまつる。神人數百人隨たてまつる。樂人道すがら樂を奏して供奉す。關白殿柳の御下襲に絲鞋を着し給。隨身十人御さきをはす。神行に恐たてまつらせ給故也。殿上人二人。一人は御裾をもつ。前駈四人御後にあり。次右大(實夏)臣殿。衛府長殿上人一人前駈二人なり。次今出川(公直)大納言。次花山院(兼定)大納言。行粧きら／＼しく見え侍り。次九條大納言殿。一條大納言殿。次坊城中納言。次四條中納言。次別當。例の事ながら供の官人などゆゝしきさまにみゆ。次西園寺中納言。次四條宰相。次洞院宰相中將。此後は殿上人どもなり。忠頼朝臣關白殿御裾をとる。季村朝臣左大臣殿の御供にあり。親忠朝臣關白殿の御供。嗣房朝臣。業信朝臣。一條大納言殿御供。宣方。資康。仲光。宗顯。爲有。兼時。九條大納言殿御供にあり。次聖僧。次權別當已下。僧綱。大乘院僧都御房も此内に歩給。御行粧ゆゝしくぞみえ侍し。次衆徒一二万人。螺を吹連て充滿たり。さしたる事もなき物とがめしを。石にてさじきをうちなど。いとおどろおどろしくむくつけし。されどもこれは衆徒のさだまれる振舞なるにや。車はたてゝみる例もをのづから侍れども。しかるべからぬ事となむ沙汰有て。今度も使廳に仰られたるに。今日あしく車二三兩たてたりけるを。衆徒散々にうち破たりと聞えしは。いかなる人にてか侍りけん。いと不便なるわざなり。供奉の公卿の

人數など前々よりもすくなくみえ侍しかども。是程もよくぞ此比の公家の人々出立給なるとぞ。例の物みる者どもは申し。申時ばかりよりそらも晴て。榊にうつる夕日影。香來山の代の鏡もさながらあらはれ給。たうとさもいはむかたなし。神人共の警蹕の聲かう〳〵し。御輿などのあざやかなるをこそ祭などの時は拜たてまつるに。これはそことなく青みわたれる榊の。梢はる〴〵とみかさの杜の心ちして。けうとく。身のけもよだつやうにぞみえ侍し。御みちすがらの樂の聲々。あやしのしづのめまでもなみだをおとし。手を額にあてゝ。ゑみのまゆをひらきてぞ今日は拜み奉し。時の關白大臣などのかやうに大路をさながら歩せ給事もありけり。いとありがたきことにや。此度は院の御さじきもなくて。いとさう〴〵しかりしに。(義詮)將軍六條わたりに棧敷を構て見物し給しかば。人々もこゝろしらひしてぞわたりし。物のはへある心ちして。いよ〳〵目出度かりし事共也今日かやうに事ゆへなく申沙汰せらるゝ事。武運なをたのもしく侍などぞ。例のきねかねき事どもにはし侍し。此翁も遥なる道しのぎて。今朝卯刻に六條殿に參たれば。いとくるしくて。後戸の方にしばし息み侍しに。とし九十ばかりにもや成ぬらんとおぼゆる神人。又寺官などにもやあらんとみゆる法師の是も八十あまりなるが物語をし侍しを承ば。當社の御事の昔よりたうとき事どもをぞかたり侍し。みゝもおぼろにてさだかに聞も侍ざりしかども。おろ〳〵書付侍也。寺官の僧申樣。此春日大明神の御事を只神は何も同じ事と心得たるこそ返々無念に侍れ。此日本國をば當社の御成敗ある事にて侍り。其故は伊勢大神宮。正八幡。春日大明神。此三社の帝王

をも人臣をも器量をえらばせ給事にて有也。八幡大菩薩は應神天皇にてわたらせ給へば。人王はるかの後に神と顯給。此葦原中津國を立給事は。伊勢春日の御沙汰にてありしなり。昔天上に高皇產靈尊と申神わたらせ給き。此神は國土へはくだり給はで。只天上にて萬事をはからせ給し也。其神天照太神の御孫皇孫をやしなひ申されて。此あしはらの國へ天くだらせ給し時。天照太神も其時は天上にましまして。御孫の神に三種の寶を授申されけり。八咫鏡。（是は內侍所也。）八坂瓊曲玉。（是は璽箱なり。）葦薙劒。（是は寶劍なり。）此三種を授申されて。天兒屋根命を副奉て。筑紫の日向國高千穗峯に天くだり給しとき。此天兒屋根命を神々ほめ奉て。其形は日のごとし。其心は海の〔寶劍〕ごとし。其德は地のごとし。其故に天照太神賢く誓てのたまはく。我子孫は此葦原中津國の主たるべし。汝の子孫は代々國柄を執て。床をならべ殿を等くして助けまもれと神約ありき。其より君臣の契たがふ事なく。魚と水とに異ならず。風と雲との感ずるに似たり。國を守り君を輔佐し奉るいはれ是よりはじまれり。則今の春日の三御殿にてわたらせ給ふ。執柄達の御先祖ぞかし。されば代は末になりたれども。伊勢太神宮の皇孫ならぬ人の位に卽事は一度もなし。又春日の神孫ならぬ人の執柄に成事もなき事なり。これこそ神國のいみじき驗にては侍れ。唐國にはいかなる民も王位に卽侍にや。今も蒙古帝位につきたりとぞ承及侍る。よのつねの人の約などだにも違事はなし。まして神と神との誓約。天地とひとしかるべき也。されば我國の賢王賢臣をも。とりわきめぐみ給ふ。直不可思議の亂臣をも退たまふも。偏に春日大明神の御事にて侍しぞかし。鎌倉右大將壽永に寶劍西海に沈

て後。彼替におほやけのたみの御守と成て。國朝敵をしづめられし初にも。先治承四年に義兵をあげられしきざみ。神宮に御厨をよせ奉り。其後所願成就のため。大和國一國をさながら地頭をだにすへずして春日社に寄進せられし其心。神代の事をわきまへ。行末をかゞみられけるなるべし。八幡も春日も正直の頭にやどらんとちかひ給へば。よく國をしづめられん人をぞ。行末とをく守り申さるべき。大方聖人などいはるゝ分際は中々申にをよばず。賢人などいはれ給ほどの人の我名利を先とする事はなきにや。人を先として己を後にし給ふ志深からむには。立所に國もおさまり。民の愁も有まじきにこそ侍れ。たとへば佛の出世し給て諸衆生をあはれみ給も同事なるべし。されば釋迦の所説にも。我滅度の後閻浮提の大神と成て廣く衆生を導くべしと經文にも侍とかや。しらぬ事を申はかたはらいたく侍ども。古き人のかたり侍しなり。ことに春日大明神は本地地藏ぼさつにてわたらせ給へば。人を助け給ふ御慈悲も深かるべし。故贈左大臣殿の信心ふかく。日ごとにかゝれけるも。をのづから此神の神慮にかなひて。天下をも草創し給けるにやとおもひあはせられて不思議に侍と。さま〴〵くどき侍しかど。老の心物わすれがちにて。もれたる事も多侍らん。あまりに神人の雜人をはらひのゝしりて。うちはりなどせしかば。らうがはしくおそろしくて。やがて立出侍しかば。なをのこりおほく侍るべし。

右さかき葉の日記以扶桑拾葉集挍合了

神祇部十八

大三輪神三社鎭座次第

當社古來無寶倉。唯有三箇鳥居而已。奧津磐（社傳）座大物主命。（神名帳）中津磐座大己貴命。（舊事本紀古語拾遺）邊津磐座少彥名命。

（古語拾遺）蓋聞素盞烏神自天而降到於出雲國簸之川上。以天十握劍斬八岐大蛇。其尾中得一靈劍。其名天叢雲。乃獻上於大神也。然後素盞烏神娶國神女奇稻田姬。生大己貴神。遂就於根國矣。大己貴神。亦名大國主神。亦號曰葦原醜男。亦曰八千戈神。亦曰顯國玉神。並有五名。其子凡有一百八十神。（舊事紀作八名。有大物主神。大國玉神二名。日本紀同。社傳）大己貴神持廣矛爲杖平國行到於出雲國三穗崎。（舊事本紀作御大御前。日本紀五十狹々小汀）而且當飲食。是時海上忽有人聲。乃驚而求之無所見。頃時有一箇小男。以白蘞皮爲船。以鷦鷯羽爲衣。（舊事本紀）自波穗乘天羅摩船。而內剝鵝皮剝爲衣服。有依來者。隨潮水以浮到。大己貴神。即取置掌中而翫之。則跳嚙其頰。乃恠其物色。爾雖問其名不答。且雖問所從之諸神皆曰不知。多邇且久曰。此者久延彥必知之。即召久延彥（日本）問時。答曰。此者高皇產（舊事作尊）靈尊之子。少彥名神。故遣使白於天神。于時高皇產靈尊聞之而曰。吾所產兒。凡有一千五百座。其中一兒最惡不順教養。自指間漏墮者必彼矣。（社傳）爲兄弟宜愛而養之。此即少彥名命是也。此故稱曰手間

天神也。（古語）初伊弉諾伊弉冊二神共爲夫婦。生大八洲國及處々小嶋。（舊事）而地稚如水母浮漂之時。大己貴命與少彥名命。戮力一心。（社傳）殖生蘆葦。固造國地。故號曰國造大己貴命。因以稱曰葦原國。復爲顯見蒼生及畜產。則定其療病之方。又爲攘鳥獸昆蟲之災異。則定其禁厭之法。是故百姓至今咸蒙恩賴。皆有効驗也。

（舊事日本）嘗大己貴命謂少彥名命曰。吾等所造之國。豈謂善成之乎。少彥名命對曰。或有所成。或有不成。其後少彥名命行至熊野之御崎。遂適於常世鄉矣。亦曰。至淡嶋而緣粟莖者。則彈渡而至常世鄉矣。（常世鄉在東海中。）（舊事）自後所未成者。大己貴命獨能巡造。遂到出雲國五十狹々小汀。乃興言曰。夫葦原中國本自荒芒。至及磐草木咸能强暴。然吾已摧伏莫不和順。遂因言。今理此國唯吾一身而已。其可與吾共理天下者蓋有之乎。于時神光照海。忽以踊出波浪末。爲素裝束。持天蘂槍。有浮來者。曰如吾不在者。汝能得治此國乎。若無我者。何敢得造堅建大造之績哉。大己貴命問曰。汝命是誰耶。名字云何。對曰。吾是汝之幸魂奇魂也。大己貴命曰。唯。然廼知。汝是吾幸魂奇魂矣。今欲往何處耶。對曰。欲往於日本國青垣山。（社傳）故卽營御室於大倭國礒城縣青垣山。使就而居。（社傳）號曰御室山。（或作三諸山。）（日本舊事）蓋大己貴命之幸魂奇魂。（古語）鎭座于當山。是神代也。（日本）此大三輪大物主神是也。天照大神　高皇產靈尊崇養皇孫天津彥火瓊々杵尊。欲降爲豐葦原中國主。仍遣經津主神武甕槌神。駈除平定。於是大己貴神奉避。仍以平國時所杖之廣矛。授二神曰。吾以此矛卒有治功。皇孫若用此矛治國者。必當平安。今我當隱去矣。卽躬被端之八坂瓊而長隱於百不足之八十隈者矣。故經津主神以岐神爲鄉導。周流削平。有逆命者。卽加斬戮。歸順者仍加褒美。是時歸順之首渠者。大物主神及

事代主神。乃合八十萬神於天高市。帥以昇天陳其誠欵之至。時高皇產靈尊勅大物主神。汝若以國神爲妻。吾猶謂汝有疏心。故今以吾女三穗津姬配汝爲妻。宜領八十萬神永爲皇孫奉護。乃使還降之。舊事紀

大物主神乘天羽車大鷲而。覓妻下行於茅渟縣陶邑。彼處大陶祇女活玉依媛。容姿端正。於是大物主神化爲美麗壯夫。娶活玉依姬。卽有懷姙。爾父母疑恠姙懷。問媛曰。汝爲懷姙也。誰人來耶。媛答曰。每夜半到來美麗壯夫共覆倒。曾其風姿威儀無比者。不知其姓名。夜未曙去。晝不到來。時父母欲知其壯夫。敎媛績麻作綜。貫針刺其衣襴焉。媛如敎爲之。而明旦觀之。貫針之糸控通戶鑰穴。而綜麻遺只有三勾而已。卽隨糸尋行。經茅渟山入吉野山至御室山。卽知爲大物主神之子。然後活玉依姬生兒。名之櫛日方命。畝傍橿原宮御宇天皇殊爲申食國政大夫。是賀茂大三輪君等遠祖也。依其綜麻所遺三勾。號麻勾山。今謂大三輪山。或作大神山。〇社傳復三嶋溝樴耳大女蹈鞴媛爲美人。或時媛爲大便之節。大物主神化丹塗矢。突陰元。爾媛驚乃將來其矢。置於床邊。忽化爲美麗壯夫。乃於奇御戶爲起而生女。名曰媛蹈鞴五十鈴媛命。於是天孫神日本磐余彥天皇卽位于畝傍橿原宮。欲立正妃。廣求華胄。時有人奏曰。大三輪神之女媛蹈鞴五十鈴姬命。社傳宅居于春日率川本名狹井川。之邊。是國色之秀者也。天皇悅之。喚媛蹈鞴五十鈴媛命。納宮爲皇后。生兒二男。神八井命。神渟名川耳天皇。此天皇卽位于葛城高丘宮治天下也。

社傳腋上池心宮御宇天皇御世。延喜式神明憑吉足日命曰。吾國造大己貴命也。大初己命之和魂。取託八咫鏡。云云。名曰倭大物主櫛甕玉命。鎭座大三輪神奈備云云。社傳令造瑞籬奉齋焉。隨神託立瑞籬於

大三輪山。遣吉足日命。令崇齋大己貴命大物主命。詔吉足日命。自今已後可爲宮能賣。是神宮部造先祖也。

(日本紀)磯城瑞籬宮御宇天皇御世。起疾病有死亡。於是天皇請罪神祇。時大物主神憑倭迹々日媛命曰。天皇憂國不治是吾心也。能敬祭吾者。必當自平矣。隨教祭祀無驗。天皇沐浴齋戒而祈之。夢覺曰。以大田々根子令祭吾者則立平矣。亦有海外之國。自當歸伏矣。天皇得夢辭。布告天下。求大田々根子。即於茅渟縣陶邑。天皇勅大田々根子爲祭大物主神之主。以天八十平瓮。令敬祭。定神地神戸。於是疾病始息。國內漸謐。五穀既成。百姓饒之。每年首夏仲冬卯日祭起于此時矣。群在日本紀。(社傳)磐余甕栗宮御宇天皇。勅大伴室屋大連。奉幣帛於大三輪神社。祈禱無皇子(淸寧)之儀。時神明憑宮能賣曰。天皇勿慮之。何非絕天津日嗣哉。上古吾與少彥名命。戮力一心。所以經營天下。其所以而今少彥名命。來臨吾邊津磐座。與吾及和魂共能可敬祭。守皇孫濟八民矣。於是起立磐境。崇祭少彥名命。于時天皇元年冬十月乙卯日也。仍鎭座次第如件。十一月十六日夜勘作之。

神階之事。

(神階記)貞觀元年正月廿七日。奉授大己貴命正一位。大物主神從一位。同二月朔日。大物主神奉授正一位。

祭禮之事。

(延喜式)卯日祭者。夏四月冬十二月上卯日。若有三卯時。中卯日行之。夏丑日有勅使。是曉祭之也。(社傳)冬寅日有勅使。是冬夕祭之也。有官幣以三枝華飾神酒甕。以八十平瓮祭之。瑞籬宮御宇天皇八年始行之。爲中絕。及宇多天皇御世。再興被行夏冬兩祭。于時寬平十年也。爾來爲每年行之。〇鎭華祭者。式三月擇日於神祇官奉敬祭。

當社狹井社也。當社行之。春華飛散之時。疫神分散而行癘。爲其鎭遏必有此祭。故曰鎭華祭(令義解)也。此祭自大寶元年而始矣。狹井社。大己貴命之荒玉也。

別宮小社之事。

葛城賀茂神社。　八重事代主命也。(舊事)大己貴命之子。母曰神楯媛。化爲八尋熊鰐。通三嶋溝樴耳小女玉櫛媛。生一男一女。是天日方命。(賀茂主命父。)五十鈴依媛命。(葛城高丘宮御宇天皇皇后。卽磯城津彥天皇父。)(社傳)瑞籬宮御宇天皇御世。大田々根子命孫大賀茂祇命。承勅立社於葛城邑賀茂地。奉齋事代主命。仍賜賀茂君氏。

春日三枝神社。　媛蹈鞴五十鈴媛命也。(社傳)小墾田宮御宇天皇御世。大三輪君白從承勅立社於春日邑率川坂岡兩處。奉齋媛蹈鞴五十鈴媛命。大物主命也。平城宮御宇天皇御世。益造兩社之相殿爲三座。又始行三枝祭。是大三輪氏長奉仕之。

大直禰神社。　大田々根子命也。(舊事)大物主命五世(櫛日方命。武飯勝命。武甕尾命。武甕依命。武御氣立命。)孫。武飯片隅命之子。母美良媛。土左賀茂部臣之女也。磯城瑞籬宮御宇天皇七年十二月勅爲神主。賜大三輪君氏。其子孫永仕其職。志賀穴穗宮御宇天皇御世。大三輪君大友主命依靈夢立社奉齋之。(俗云若宮。)

三穗神社。　三穗津媛命。立社奉齋年號未考。

曾富止神社。　久延彥命。右同。

五府神社。　天日事振魂命。(社傳)天道本聖性命。天氣壽根靈命。天風表通精命。天人體振魂命也。各高皇產靈尊之子。主五臟(肝心脾肺腎。)五穴(目耳口鼻陰元。)之事。

嘉祿丙戌之歲仲冬十九日

此書有他家。採納家。然後北畠大納言殿。今出

河宰相殿詣參之時。此書ヲ御覽アリテ被仰テ云フ。日本紀。舊事本紀。古語拾遺。延喜式。令義解等ヲ引テ勘作スル。若大三輪氏博學之人所爲歟。大納言殿其出書ヲ被仰テ。宰相殿取筆テ。肩書被成被下ヲ以テ。家ノ秘書トナル者也。然而家傳有相違也。

貞和二年十二月朔日

出雲掾大三輪君判

右大三輪三社鎭座次第以平高潔本書寫了

大倭神社註進狀

謹考舊記曰。大倭神社在大和國山邊郡大倭邑。蓋出雲杵築大社之別宮也。傳聞。倭大國魂神者。大己貴神之荒魂。與和魂戮力一心。經營天下之地。建得大造之績。在大倭豐秋津國守國家。因以號曰倭大國魂神。亦曰大地主神。以八尺瓊爲神躰奉齋焉。

家牒曰。腋上池心宮御宇天皇孝昭元年秋七月甲寅朔。遷都於倭國葛城。丁卯。天皇夢有一貴人。對立殿戶自稱大己貴命曰。我和魂自神代鎭三諸山。而助神器之昌建也。荒魂服王身在大殿內。而爲寶基之衞護。即得神教而。天照大神。倭大國魂神。竝祭於天皇大殿之內。

磯城瑞籬宮御宇天皇崇神六年。百姓流離云云。共住不安。秋九月己酉朔乙丑。天照大神託豐鋤入姬命。祭於倭國笠縫邑。仍立磯城神籬。亦倭

大國魂神託淳名城入姫命祭於同國市磯邑。（倭文名曰大倭邑）然淳名城入姫髮落體瘦而不能祭。七年秋八月癸卯朔己酉。穗積臣遠祖大水口宿禰等。共同夢而奏言。昨夜夢有一貴人。誨曰。以市磯長尾市爲祭倭大國魂神之主。必天下太平矣。天皇得夢辭。益歡於心。朕當榮樂。乃卜使物部連祖伊香色雄爲神班物者吉之。冬十二月辛丑朔丁卯。命伊香色雄而以物部八十手所作祭神之物。卽以大倭直祖長尾市爲祭倭大國魂神之主。定神地神戶。於是疫病始息。國內漸謐。五穀既成。百姓饒之。

纏向殊城宮御宇天皇（垂仁）廿七年九月戊申朔甲子。以皇女倭姫命爲御杖代。貢天照大神。倭姫命。隨神誨立宮於伊勢國渡遇五十鈴川上。奉遷焉。是時倭大國魂神。着大水口宿禰而誨之曰。太初之時期曰。天照大神悉治高天原。皇御孫尊惠治葦原中國之八十魂神。我親治大地官者。言已訖焉云云。大地主神之號起于是時矣。

類聚國史曰。嘉祥三年冬十月乙巳朔辛亥。進大和國大國魂神階授從二位。貞觀元年春正月戊午朔甲申。奉授大和國從二位大和國大魂神從一位。

新國史曰。寬平九年冬十二月壬寅朔甲辰。奉授五畿七道諸神三百四十社各位一階。官符云。大和國大和大國魂神奉授正一位。

神名帳曰。大和國山邊郡大和坐大國魂神社三座。（名神大。月次。相嘗。新嘗）

相殿神二座。

八千戈神。御歲神。

傳聞。八千戈神者。大己貴命以廣矛爲杖。令撥平豐葦原中國之邪鬼。是時大己貴命號曰八千戈神。神代卷曰。大己貴命卽以平國時所杖之廣矛獻皇孫曰。吾以此矛有治功。皇孫若用此矛治國者。必當平安。今我當於百

不足之八十隈。將隱去矣。言訖卽躬被瑞之八坂瓊。而長隱。常世鄉者矣。此矛亦上古在天皇大殿之內。其藏齋爲八千戈神之神躰。

御歲神者。守護禾穀神也。是以八握嚴稻爲神躰。古語拾遺曰。大地主神營田之日。御年神獻白猪白馬白鷄。奉謝無蝗蟲之災。年穀豐稔。故至今天子以白猪白馬白雞每年祭歲神也。

別社。

狹井神社。在大和國城上郡。

傳聞。狹井神者。大己貴命之荒魂大國魂神。卽當社別社也。

日本書紀曰。倭大神著穗積臣云云。命大倭直祖長尾市宿禰令祭矣。所謂大市長岡岬。今狹井社地是也。

神名帳曰。大和國城上郡狹井坐大神荒魂神社五社。

相殿神四座。

大物主神。

傳聞。大物主神者。大己貴命之和魂也。神代卷曰。大己貴神問曰。汝是誰耶。對曰。吾是汝之幸魂。遊魂。奇魂。鎭魂。也。大己貴神曰。唯然云云三諸山。以上。和魂荒魂問答言語也。故卽營宮彼處。使就而居。此大三輪之神也。此神之子。姬蹈鞴五十鈴命。

神名帳曰。大和國城上郡大神大物主神社一座。名神大。月次。相嘗。新嘗。

姬蹈鞴五十鈴命。

勢夜多良比賣。

古事記。三嶋隍咋之女。名勢夜多良比賣。溝樴姬。攝津國三嶋之人。神名帳。攝津國嶋下郡溝咋神社一座。其容姿麗美。故美和之大物主神。娶其人生子。名謂比賣多々良伊須々余理比賣。故謂大神御子也。其伊須々余理比賣之家。在狹井川之上。神倭伊波禮毘古天皇。幸行比賣之許。一宿御寢坐。後參入宮

內。阿禮-坐御子名神沼河耳命。綏靖天皇。神名帳曰。
大和國添上郡率川坐大神御子神社三座。
事代主神。
神代卷曰。事代主神。大己貴命子。化爲二八尋熊鰐一。通二
三嶋溝樴姬。或云玉櫛姬。而生二兒姬蹈鞴五十鈴姬
命一。是爲二神日本磐余彥天皇神武之后一也。
養老令曰。季春鎭華祭。義解謂。大神狹井二祭
也。在二春華飛散之時一。疫神分散而行レ病。爲二其
鎭遏一必有二此祭一。故曰二鎭華祭一。集解曰。大神狹
井二處祭。狹井者大神之麁御靈也。此祭レ之。華
散之時。二神共散而行レ疫已爲レ心。此故祭レ之。
延喜式曰。三月鎭花祭二座。大神社一座。狹井社一座。付二祝
等一令二供祭一。又曰。不レ定日者。臨レ時擇レ日祭レ之。
大神祝部者大三輪君等也。狹井祝部大倭直等也。
丹生川上神社一座。在二同國吉野郡一。
此神者。雨師神也。祈レ雨止レ霖。奉レ幣不レ過二當
社。神名帳。大和國吉野郡丹生川上神社一座。
名神大。月次。新嘗。
類聚國史曰。天平寶字七年夏五月庚午。奉二幣
帛于四畿內群神一。其丹生河上神者。加二黑毛馬一。
旱也。寶龜六年秋九月辛亥。遣レ使奉二白馬及幣
於丹生川上神一。依二霖雨一也。弘仁九年夏四月丁
酉。遣二使大和國吉野郡雨師神一。奉レ授二從五位
下一以祈レ雨也云云。元慶元年夏六月庚午朔壬
辰。授二從三位丹生川上雨師神正三位一。
新國史曰。寬平九年冬十二月壬寅朔甲辰。奉
レ授二五畿七道諸神三百四十社各位一階一。官符
曰。大和國丹生川上雨師神奉レ授二從二位一。
額正一位。授レ冠年月未レ考。
延喜式曰。凡奉二幣丹生川上神一者。大和社神主
隨レ使向レ社奉レ之。是丹生川上神社爲二當社之
別宮一也。
依二國守貴命一而古來秘傳。參二考國史家牒一
述作者也。攝社末社。祭禮次第。別記藏レ之。

仍註進狀如ㇾ件。

仁安二丁亥年也 二月十三日

獻上　　祝部大倭直歳繁謹書

率川神社。

神名帳云。大和國添上郡率川坐大神御子神社三座。　大神氏家牒曰。小治田豐浦宮御宇天皇推古御世。建ニ大神御子神 姫蹈鞴五十鈴命。 宮於春日率川邑ー本名狹井川邑。大神君白堤奉ㇾ齋ㇾ之。大寶年中始ニ行祭禮ー令ニ三枝祭是也。養老年中。左大臣藤史建ニ子守。御母三嶋溝橛耳之女玉櫛姫。狹井神。大己貴命荒魂大國魂命。兩神社ㇾ奉ㇾ齋焉。　類聚國史云。仁壽二年冬十月辛丑。率川坐大神御子神授ニ從五位下ー。　養老令曰。孟夏三枝祭。義解謂。率川社祭也。以ニ三枝 和名佐井草。古事記。山由理草之本名云ニ佐韋草ー也。或曰。鳥羽。華ー飾ニ酒罇ー祭。故曰ニ三枝ー也。集解曰。伊謝川社祭。大神氏宗定而祭。不ㇾ足者不ㇾ祭。卽大神族類之神也。以ニ三枝花ー嚴ㇾ罇而祭。大神祭供。此云ニ麁靈和靈祭ー。　延喜式曰。四月三枝祭二座。率川社。又曰。擇ㇾ日付ニ祝。大三輪。等ー令ニ供祭ー。又曰。率川祭。春二月。冬十一月。上酉日祭ㇾ之。春日使使ㇾ參。

別社。

三枝御子社一座。南家口傳云。藤原是公立ニ率川社ー。卽當社歟。

傳聞。狹井神之子。事代主神。神名帳曰。大和國添上郡率川阿波神社一座。類聚國史曰。仁壽二年冬十一月辛丑。率川阿波神授ニ從五位下ー。卽當社焉。

園韓神社三座。

大神氏家牒曰。養老年中。藤史亦建ニ園韓神社ー奉ㇾ齋焉。　神名帳云。宮內省坐神三座。並名神大。月次。新嘗。　園神社一座。韓神社二座。舊記云。件神等素戔烏尊之子孫。守ㇾ疫神也。　傳聞。園神者。大己貴命之和魂大物主神也。案此神園華飛散之時發疫病守ニ護之ー

鎭止之。仍云門神歟。門殖艸木之處也。集解所謂三枝和靈祭云當社之事。又大物主神可謂素戔嗚尊之孫。

韓神者。大己貴命。少彦名命也。兩神經營天下。爲顯見蒼生。則定其療病之方。或抄云。大己貴命。少彦名命。神記曰。昔造葦原中國訖。去往東海。今爲濟民吏亦來歸。因以號兩神云韓神歟。古語。外國云韓也。亦案。神皇產靈尊曰。少彦名命。與大己貴命爲兄弟。如此。少彦名命可謂素戔嗚尊子。紫野今宮三座。

社家者流如右。

右率川神社記者。獻上於注進狀之節。應或人需勘述者也。神秘口傳到其地可尋云。

十月廿一日　花押

右大倭神社註進狀以平高潔本書寫了

廣瀨社緣起

夫當社者。人皇十代崇神天皇御宇。大和國廣瀨郡河合村出現給。所以者何。彼里長藤時門外。異人着冠束帶而化來。其容貌端正。靈香甚薰。然而託里長曰。汝家北有一龍池。是號水足池。其深厚八億由旬也。其底下龍宮城也。是池上可造立社壇云云。藤時答言。冷水八百會也。何爲可建立社壇。異人又曰。汝所謂有其理。吾宜龍池變陸地。其時可建立。里長答云。此段非尋常之義。可奏聞。化人神妙々々言訖忽不見。其明日平旦。水足池成陸地。里長達天聽。則被立勅使。仰諸司百官。造立七宇社。號水足明神。此外眷神末社二十一所。又造立之。已上社家之緣起也。但日本書紀曰。天武天皇四年四月十日癸未。遣小錦中間人連大蓋。大山中曾禰連韓犬。祭大忌神於廣瀨河曲。同十三年秋七月四日癸丑。始行幸。每月祭

禮。朝暮禮奠。超于餘社。貞觀元年正月二十七日奉授正三位云云。尤可爲正說矣。竊以。神代昔。伊弉諾尊曰。我所生之國。唯有朝霧而薰滿哉。則吹撥之息成神。號級長戶邊尊。級長津彥尊。此風神龍田社也。又飢時生兒曰倉稻魂命。此大忌廣瀨社也。又曰。若宇加乃賣命。伊勢外宮分身也。是則水門神也。以一水之德養萬品之生。五穀靈神也。龍王之所變也。釋尊大乘經說法之時。八大龍王化現而擁護。伏羲周易六龍司十二時云云。於三國顯威力者也。役優婆塞十九歲而入箕面瀧。又入水足池。忽到龍宮城。地敷七寶。四面立四神旗。搆四門。行者入於南門。有宮殿樓閣。立梅檀之柱。懸金銀之椽。開瑠璃之扉。鏤水精之壁。一々莊嚴如諸梵天。其中央在女躰之尊形。行者謂尊神言。此尊神者。天上之神孫乎。地下之後胤乎。于時尊神以七言四句文託宣云。

我是天照連枝族。本地大悲觀世音。哀愍三界衆生故。示現明神度一切。

行者頓首再拜白。一切神明。佛法傳來以來。誦經卷捧法味。尊神者五時之教法之內可誦何經乎。神勅宣。往昔釋尊說法之時。現龍王守護法華經。以其因緣可聽聞云云。抑吾朝者。天孫降臨已來。自上一人至下萬民皆神孫也。故守神國之遺法。遂不嘗外國之儒教。而經千五百年。爰推古天皇御宇。上宮太子密奏言。日本生種子。震旦顯枝葉。天竺開華實。故佛經者。爲萬法之花實。震旦爲萬法之枝葉。神道者爲萬法之根本。以枝葉花實顯其根元。花落歸根之故。今佛法東漸矣。已上文。自爾以降。佛閣經教專興隆。天平年中。眞言密教流此土。後爲修供養法。諸社立本迹之二門。併以花實顯根元之謂也。夫本地大宮聖觀音。若宮藥師。此外阿彌陀不動釋迦等也。將又件龍池變陸地之砌。枳木一萬

餘本。長二丈餘。一夜出生。是影向之奇特也。舒明天皇御宇。池邊右大臣深則奉恨帝王。捨妻子隱深山。妻子啼泣而三七日參籠當社。祈請不解。爰明神應無二丹誠。答一心懇念。結願之曉。容貌端正女躰。開神殿而託曰。汝愁歎無比類。吾爲度一切衆生垂迹於此地。何不叶是願望乎。深則隱而有龍田山。明日令到此北方之河岸。汝可相待彼所。言訖閇御戶。則妻女從神託。果而深則到來。互欲渡其河中瀨而相合。故名此地曰河合。深則蒙此神之利生。遂補神主。姓中臣氏也。持統天皇行幸之時。枳實犬喰之惱亂。天皇知當社之祟令祈請。忽犬平喰。畜類不食柑類。自此之起乎。自爾以降。君臣上下奉殖之。託宣曰。神明奉殖木。垂迹垂加護。已上文。蓋此謂之乎。元明天皇自高市郡藤原宮遷都於奈良之砌。先行幸當社。于時河水太湛。波濤益漲。无通達之途。爰河上有聲告言。只可有行幸河上云云。于時水一二丈泝不流。天皇彌感奇瑞。王卿殊敬神威。行幸及度々給。光仁天皇寶龜五年甲寅行幸之。託宣。

我是本地大悲尊。　娑婆利生能化主。　無邊衆生濟度故。　假示明神受三熱。

代々帝王諸臣寄附神地。田數五百餘町也。源平兩家亂逆之時。有退轉之地矣。天地分而萬物生焉。人者爲萬物之長。伊弉諾尊爲成就一切衆生之生命。出生倉稻魂尊。是則五穀靈神也。神祇令曰。大忌神令山水變成甘水。浸潤苗稼。得其念稔云云。被孕其國土。不貴其主靈者。非情難生長。何況於人倫乎。靈氣之所覆養其地也。生其地者。不祭其神者。爭食其國之土地哉。續氣血骨肉於神明。受所生養育於當社。萬行之修力莫非此神恩。可仰可信。能思陪。深思陪。愼而莫怠矣。

右以累葉秘傳之神抄與社家緣起。混合而注

記之。於外題者。爲後鑒被染宸筆訖。

天文二十四年九月吉曜

神祇道管領長上卜部朝臣兼右

右廣瀬社緣起以村井敬義本書寫挍合了

日吉社神道秘密記

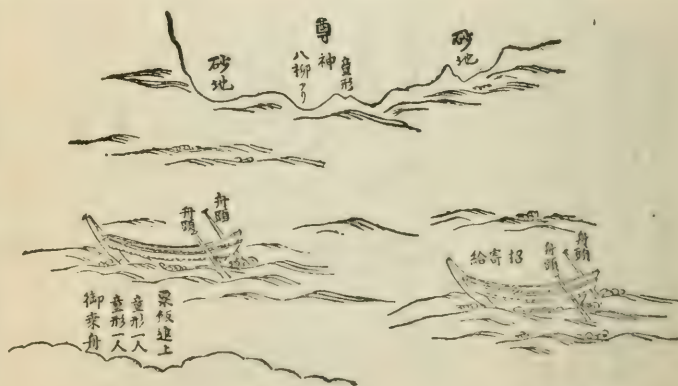
禰宜正四位上大藏卿祝部宿禰行丸撰條々。

一社務上祖琴御館宇志丸宿禰。自本國常州鹿嶋郡上洛。江州志賀郡三津濱居住之所。號之唐崎。於庭前殖松。名之軒端之松。時代第三十五代舒明天皇御宇五年頃。

祝部氏系圖。

國常立尊。　神皇産靈尊。　活魂命。（祝部氏始。）　宇志丸。（記錄之初。當社氏始也。）　裔孫行丸行廣。（相傳三十七代。）

記錄新調之事。行丸再調者。所謂前代之抄物炎上之間。以新調末代宜備龜鏡。於是社頭燒滅之事。元龜二辛未年九月十三日辛未。早旦。依放火織田彈正忠信長山上坂本破滅也。社中之記錄紛失也。然後七箇年以後。天正五丁丑年三月中旬。於伊香立鄉記之。社頭

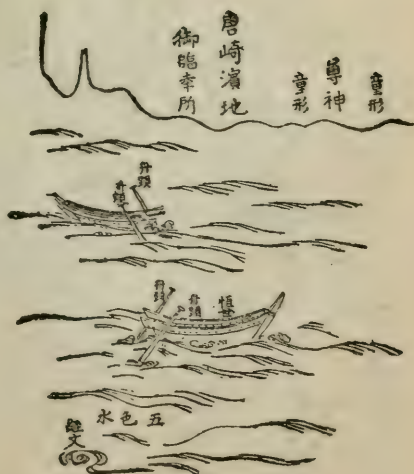
再造刻。以二此記一可レ令二演說一者也。
一日本二神。天降神（）。大社尊〻〻。大宮大國
主尊御影嚮舟頭建立次第宇志丸。
一大比叡大明神。　大己貴尊。尊號數々有。　又大
國主尊。　又大國作尊。　又顯國玉尊。　臨幸
之時代。第三十九代天智天皇御宇白鳳二癸酉年
三月上巳。於二大津與大崎八柳濱一有二臨幸一。于
時海上之漁舟。田中恒世召レ之。教二我唐崎松下
可レ送。恒世畏而白言。則同可レ乘二漁舟一。於二船
中一仰曰。我祭季之可レ備二御料一。恒世答申云。漁
舟之間。好物無レ之。於レ是粟飯有。奉レ獻二上味一。
早速御船漕二着唐崎之浦一。尊神於レ舟上陸給。仰
曰。恒世乘舟之送。粟御料之懇志至也。汝爲二
報謝一。每年卯月中申日。可レ有二神幸此處一。傳二子
孫一可レ來。速可レ歸二大津一。恒世畏而言二上御神語
忝過分也必可レ致二參勤一。大津八柳濱飯畢。
　江州志賀郡時代。

天智天皇大津宮御宇。第三十九代。白鳳二癸酉年彌生上巳。禁裡調進。每日捧ニ生魚一役者田中恒世。

山王御影嚮處々次第。

大津與大崎八柳濱。御臨着所。
〔舊本圖在此間今爲便宜移於左〕尊神沖ヨリ還御詠歌。

古の鷲のみ山の法の花
匂ひをうつすしかのからさき

いつとなくわしの高ねに澄月の
光をやとすしかのから崎

尊神者。唐崎琴御舘宇志丸宿禰亭。庭前之松下在ニ臨着一。尊神與ニ宇志丸一同ニ座於石上一。神言曰。吾者是佛法王法之守護神也。於ニ此處一可レ有ニ鎮座一。可レ求ニ與勝地一云々。琴御舘答曰。於ニ此唐崎之海上一五色波起常。一切衆生悉有佛性。如來常住無有變易。如レ是有レ響。早可レ有ニ御覽一言給、奉ニ御船一給。尊神乘ニ御船一觀ニ海上之波浪一。一切衆生經文。皈坐而御詠歌傳ニ宇志丸一給。

大伴の三津の浦はを打さらし
よりくるなみの行衞しらすも

御舘承ニ御詠歌一。又白言。君從ニ何方一御來臨。御名何與問給。尊神答曰。我者是和州三輪ヨリ

來至。此處可現神妙之相。敎御船上松梢給。于時宇志丸觀神變白言。於乾山下有勝地。在神幸。我又追御跡尋上。建神殿可奉成御遷宮申給。尊神忽然去給。從唐崎比叡辻着給。石占井登給。於此處女人爲占手。尊神對女人問曰。求我鎭座之勝地。有何方否。女人占曰。從此當山下有勝地。可尋往給云々。以此處井水洗尊神之御足給。號石占井。此女人祝神躰號石占井大明神。尊神從石占井到波止土濃。携持給御杖差此地給。早生付爲桂木。青葉萌出タリ。又結杉之葉給。此谷川五色之波流谷。其響經文也。一切衆生悉有佛性。如來常住無有變易。此文唐崎之波音同前。依之尊神於此處有御垂跡神語曰。和州三輪之杉ヨリ唐崎之松梢移生。御詫宣以後。波止土濃臨幸之御迹。任神通力琴御舘尋上波止土濃。觀之給。杉葉結置之。御杖桂青葉依現形。建立寶殿。尊像有尅彫。奉成御遷宮。其時御詠歌。

東より琴の御舘にさそはれて
此山すへにとまる松かせ

宇志丸承知之。重而有懇祈神號御形。其時於闇夜空中。如日輪光明爲照曜。而日輪之内有大文字。依之奉稱大宮。就日輪之驗。日吉大宮權現崇之給。御形再拜懇祈刻。大文字現形。故號大宮。本文曰。大如車輪。又大如微塵等同前也。カタチ車輪如。微塵如讀也。本社建立事。琴御舘宇志丸御祈所。次々二宮聖眞子八王子。皆宇志丸御造立之處。於唐崎尊神田中恒世依御神託。毎年卯月第二申日。唐崎江御神幸之砌。恒世以粟御供參勤。上古末代社例也。於唐崎琴御舘住宅富津濱引之。有造作。名此處曰小唐崎。植八柳。庭前之樹也。唐崎者卯月祭禮之宿院定之。小唐崎江移住之事。

一卯月祭禮神幸者。琴御舘以大榊奏神幸之祝言。於唐崎粟御供備進。恒世之子孫參向之事也。第卅九代天智天皇白鳳年中ヨリ以來如此。神輿御造進者。第五十代桓武天皇行幸。延暦十辛未年卯月第二ノ申日ヨリ七ヶ日御參籠。增倍依勅願御輿御造進之事。大宮二宮兩神輿在之。其後時々殘五社之神輿御造進也。巨細猶奥記之。

一本社俗形。於唐崎琴御舘御同座石上御形刻彫。如大人之長。口傳。巨細神前參向之段記之。

濱中所々神社之次第。

一唐崎[女別當社]口傳。婦女或松之精神祝之。或琴御舘種々相傳有之。〔舊本十禪師八王子以下圖在此間今隨便宜移後〕
自此小唐崎祭禮七社御船有出御。大津八柳之濱有之。小唐崎又八柳也。

一御船祭之事。慈惠大師之時代。臨時之祭禮三箇度。御船龍頭鷁首御座舟。莊嚴結搆有之。常之祭禮御船祭无之。近代延文年中。大洪水。唐崎之浦水込陸地无之。其時御船祭有。其後如

十禪師
八王子
二宮
大宮
聖眞子
客人
三宮
卯月申日七社神幸宿院
唐崎一松
琴御館宿所小唐崎エ引レ之唐崎ハ
神幸宿院ヲ建レ之

小唐崎八柳

琴御館宿亭庭前ノ樹也
厩
白鳳以来凡及一千年近代町屋有之

此。近年者一圓御船祭也。上古無之。新儀也。
北[若宮]俗形。上之大將軍勸請之。
一四屋中程ニ有。
南[若宮]女形。富津之南若宮勸請之。

北[若宮]酒井大明神 本地千手　石形 磊
井垣　神門有　假屋 神人住之
大宮之御分登町　言語道（立道通イ）
井垣　神門有　假屋 神人住之
南[若宮]大明神 女形十一面

北昔酒井町。酒之泉涌出タリ。故號酒井町。此泉之精神祟之建社。以石形爲神躰有。遷宮。南若宮大明神。是穴太村ヨリ禪納大明神勸請之。女形之御神躰。禪納之社。客人宮ヨリ勸請之。客人宮者。日本開闢之明神是也。然富津南若宮客人明神也。

一[興成]多江間町。僧(俗イ)形。

一[嶽成]富崎町。僧(俗イ)形。　社家之神位祝之。富崎町。河崎町。和田小崎(町イ)。江津等已下。悉社家中之住居此處也。成仲宿禰樹下上初。行言生源寺上初。上坂本中處々住處也。

一[騎兵]比叡辻橋詰。比叡辻町信用祭禮神人住處出之。

一[若宮]小比叡大明神勸請。依之號比叡辻。僧形。本地藥師。

一[若宮]和田町。俗形。

一[御供所]俗形。數多鎮座。衣冠成遠神位祝之。希遠社頭之氏永社是也。

社務中系圖。

山末社　社頭有レ之

社司上祖琴御舘宇志丸

第一

禰宜康範第十五（九イ）代

禮拜講始行
○左方始
萬壽二年三月十二日
小五月會
京方始調
前々ハ代々ノ調安
國ヨリ讓之始也

○右方始
小五月會
田舍中調

第二
禰宜安國

一男
石遠

次男
希遠

氏永社衣冠　山末ノ前ニ在レ之

永澤社衣冠　河口南白坂ノ東

友實
㕝也

行丸
十六代孫平家ニモ見タリ
記新調天正五年

行廣　口傳永代轉傳スベシ

三男
成遠
比叡辻北ノ口小崎町
御供所大明神衣冠

㕝
成仲
是ヨリ樹下へ
移住ノ始也

一琴御舘宇志丸ヨリ第二十一代。希遠ヨリ十六代孫行丸行廣相二傳之一。

社頭再造立願歌。

宇志丸の造り初にしひえの社
　絶たる時代たてん行丸

當今方仁皇帝御宇天正五年丁丑年彌生頃。

右記錄分於二石占井社前一口傳。社務參社先達之剋如レ此也。唐崎ヨリ[御供所社]マテ

如レ右讀二渡之一。〔舊本圖在此間今爲便宜移置〕

一山王御影嚮之次第。本國和州三輪社。

第一。三輪山。第十代崇神御宇在社也。有イ第二。江州大津八柳濱臨幸。エ三十九代御宇田中恒世。第三。唐崎松同上下琴御舘庭上。記レ右。第四。石占井。同上第五。波止土濃御着坐。故號二波止土濃大明神一。同時。日吉大宮權現中トス。

一山王者三國名山之守護。故號二山王一。天竺靈鷲山之鎮守山王權現。无熱池。大唐天台山之鎮

艮
井以此水尊神洗御足給
東
石上ニ昔占ノ女人坐
北
木共アリ号帝竹林
社
神躰女躰又烏帽子形
本地毘沙門
占之女人祝之
拝殿
迫年絶テ死之
南

大乘寺ヨリ入道通西ノ口ノ神門。是ヲトリイ大神門出道通。

守山王權現云々。昆明池。我朝比叡山之鎮守山王權現云々。湖水池アリ。鷲峯守護神金毘羅神。三輪明神是也。

一山王本社建立之次第。初ハ大宮。次二宮。次聖眞

子。次八王子。皆宇志丸作始ナリ。後十禪師。又三宮。又客人。次御影嚮次第造立。都合百八社事。

一御影嚮初中後アリ。初。○二宮小比叡山大明神。日本以前ヨリ波母山來至シ玉ヘリ。次。○八王子者八十萬神引率而天ニ降金大巖ニ。時代第十代崇神天皇御宇也。是マテハ社頭建立无レ之。第三度目。○大宮建立。此社頭之最初也。二宮八王子早ケレ共。社无レ之。琴御館社頭建立之初也。天智天皇御宇是也。前委細記レ之。

一山門第五十代桓武御宇始也。大宮ヨリ百二十年後也。

第四。○聖眞子大宮ヨリ十年後也。

第五。○十禪師延暦二年御影嚮。

第六。○三宮同三年御影嚮。

第七。○客人宮。天安二年建立。相應和尚。祈處。已上神幸次第如レ此。

○地主大明神。天神第一尊神。日本叡山是也天地初之神是也。

○八王子。天神第二ヨリ八神天降玉フ。時代第十代崇神天皇御宇也。

○大宮。日本大國主神。又大己貴命。王代第一神武天皇ヨリ第十代崇神迄王宮鎮座アリ。主上加護。故號ニ比叡神ト。

○聖眞子宮。地神第二是也。第四十代天武天皇御宇御影嚮。

○十禪師宮。地神第三是也。第五十代桓武天皇御宇延暦二年。

○三宮。天神第六神也。同御宇年號同四年也。

○客人宮。天神第七神。日本開闢是也。第五十六代淸和天皇御宇建立。天安二年。

一石占井ヨリ上坂本之内口傳之事。大神門ヨリ上之事讀レ之。

大神門。馬場末有之。
胎藏界。
中神門。生源寺辻有之。
金剛界。
內神門。塔下之南有之。
號惣合神門。兩部合之。故
號惣合神門。文有之。最澄
御作也。

日吉社祭禮。此三神門爲通行之。大神門町ヨリ南通行アリ。古里井明良上作道出給。長辻堂之前河原口ヨリ富津登下。大道ヨリ唐崎神幸。粟御供備進。祝詞之。以後唐崎ヨリ還御四屋。小唐崎大道。酒井絕間富崎比叡辻登ヨリ大乘寺。八條横小路ヨリ馬場大宮橋。上下還御如例右三神門之中爲神幸也。神道之本意者。此神門之事也。大神門迄无用ナラハ。七社神輿。生源寺辻ヨリ作道入給。長辻河原口可有神幸ナレトモ。大神門迄下給事。三神門專用之神秘是也。

一大神門大明神者。俗僧形僧形。三聖御鎮座之社也。於此神門天照太神每日御影嚮所。三聖於此社御對面之宿院是也。神門笠木直立之事。天照太神正直依爲御本意立之。唐崎。

笠木一尺ソル。唐崎神門七社惣神門也。祭禮七社宿院有之。

內神門ハ社頭塔下南岩神邊在之。外神門ハ唐崎是也。

一

大宮御分。富津登兩社之間在レ之。近年絶无テレ之。所サヘ知ル人無レ之。トッシリト云ハ鳥居ノ下ト云心也。後此字也。後トモ云レ之。

二

大神門。馬場後ニ有レ之。町ヲ大神門町トモ云也。二宮御分。

三

中神門。生源寺辻之中。聖眞子御分。

四

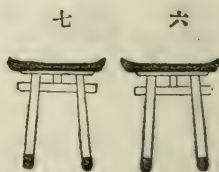
小神門。馬ヨリ鼠祠エ通口也。八王子御分。

五

惣合神門。客人御分。

六

大政所。王子宮前。十禪師御分。

七

昔ハ夷之前ニ有レ之。後ニ下ヲ下八王子夢妙幢前。

已上七處。八箇所神門ハ加ルニ唐崎ヲ也。

神道神門大事。　口傳種々事。

惣合神門。中神門。大神門。皆大宮之御分之由。口傳。又三聖御分之由。口傳。又三神門ハ皆大宮ノ御分。聖眞子客人大宮之内ニテ。神門无レ之由也。又馬場ノ小神門又下八王子ノ邊神門ハ。小比叡御分。八王子三宮小比叡之内ニテ。神門無レ之由也。非ニ一說ニ。種々口傳有レ之。神門秘密。於テ大神門ノ社庭上ニ諸人ニ示レ之。

一
大神門社。三聖臨幸之事。

一大神門邊ニ地藏ノ尊像有レ之。役ノ行者作也。

一
和泉社。衣冠。　本地藥師。

一
古里井。同上。

一
福大夫。烏帽子。　本地毘沙門。
大乘寺之町之社也。藥師堂之前也。

一
井神。衣冠。　御田奉行之明神是也。三町御田植ノ御供於ニ此社一。二十一膳備ニ御供一。御田植輪番之使者。代奏ニ祝言一。三町御田植ノ日。曉備ニ御供一奏ニ祝言一。六月土用間々ニ有レ之。禰宜祝神主。三人番年如レ此。坂下中之田畠。此日鍬鋤不レ下サレ之觸アリ。輪番役人所。祝儀有レ之。惣社中參會也。於ニ大唐一三皇之內。神農皇帝是也云々。地藏是本地五穀成就之神德有レ之。

一
倉園大明神。衣冠帶ニ太刀一。八條鎮守社。第十三代成務天皇ノ王宮ニ穴太ニ有レ之。江州此神出現。元三大師之時。社建立之事。本地毘沙門。是ハ成務天皇御倉ノ神明也。後ニ如レ此現ニ形神德一事。

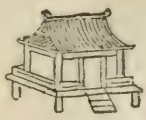
一
郡園社中ノ八條町鎮守是也。於ニ井上ノ辻一如レ此演也。女躰御裝束。本地普賢菩薩。三宮御一躰。

一南蓮華園有レ寺。號ニ安養寺一。傳敎大師御父母石躰之有ニ五輪一。行テ諸人ニ敎レ之。

一茶木數多有之。石像佛躰有之。傳敎大師御建立所。茶實從大唐大師求持シ玉ヒテ。有御飯朝植此處。其後山城國宇治郡栂尾所々植弘給云々。卯月祭禮。未日大政所神幸。二宮八王子十禪師三宮御茶調進之。社務當參之役人祝之。爲以淨水。此茶園之奥有大寺。小五月會刻。內渡爲於此。

南大寺。茶木之奥。京方内渡アリ。

北大寺。蓮華園。田舎方内渡アリ。近代妙觀寺ト云寺有之。昔其邊者北辻子地德寺迄内渡有之。

小五月會。昔五月五日毎年有之。

生源寺。本尊千手。傳敎大師御首許作之。御入唐之間御弟子兩人惠慶。法慶。作之。有摩頂樹。杉也。傳敎大師御誕生處也。故號生源寺。

御父三津百枝。三百歳御延命。

御母妙德夫人。五百歳御延命之事。傳敎大師。高麗國王也佛法東漸所。

第十六代應神天皇姬宮是也。

生源寺與染禪寺。三津百枝御持佛堂也。

御本地次第化身。

藥王傳敎大師生給。第二寂光。第三慈覺。藥上義眞和尚。

第一天台座主。華德三津百枝。赤袍町冠者殿社。妙音妙德夫人。横小路妙見ノ社也。又神宮寺有之。

法華經第廿七品在之。

藥王淨藏菩薩生。藥上淨眼菩薩生。華德妙莊嚴王生。妙音淨德夫人生。

三津百枝	石像佛躰
妙德夫人	石像佛躰

堂ヨリ西ニ有。燈明備之。

大將軍社。山祇。女躰。本地刀八毘沙門。大將軍ノ東ニ在レ之。大師御誕生ノ産神也。

市殿藥師。坂本中爲ニ惣社一。

山祇御姬。第七代伊弉諾尊 姉岩長姬。妹木華開耶姬。地神第三尊神后也。彦火々出見尊之御母也。

妙見社。大師御母。

横小路ヨリ東下細道アリ。

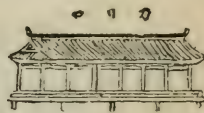
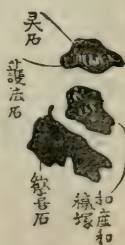
淨處瑞籬アリ。磊上有レ之。妙見ノ道ヘ下右ノ角ナリ。

大師臍緒奉納之處也。辨財天。

冠者殿。赤祠町也。大師之御父母兩處アリ。

妙見ヘハ參ル。冠者殿ノ事ハ於レ此演レ之。

一中神門。鍐字門。三之內先演レ之。

一小五月會。御供。假屋。社家假屋等有。

七社ノ神輿宿院。於ニ唐崎一七間同前ト。大風ニ倒。禰宜國忠拜領也。永正十六卯歲。

大師御出生時胞衣奉レ納處也。

大宮權現神幸。大師佛法來朝爲ニ報謝ノ一也。

小五月會始行。弘仁十年五月五日始ル。依ニ御託宣ニ始行。每年無ニ懈怠一。近代ハ斷絕ス。時代第五十二代嵯峨天皇御宇。

左方。京方差定ニ。右方。田舍方差定ニ。

所ハ祈現世之冥加是也。大師御存生時也。御入滅弘仁十三年六月四日也。

一祭禮。社務琴御舘宇志丸。以ニ大榊一執行事。第三十九代天智天皇白鳳年中ヨリ神輿御造進。

第五十代桓武天皇御宇延暦十年。

一小五月會始行。社務廣繼宿禰。第五十二代嵯峨天皇弘仁十年。

一禮拜講始行事。社務希遠宿禰有二御託宣一。後一條院御宇。萬壽二年三月十二日也。

騎鈴社。祭禮神人以レ鉾馬場ニ渡ル。騎馬。

騎平社。祭禮神人以二弓箭一同渡レ之。近年比叡辻河端北際ニ有レ之。神人代木守兵也。

已上馬場面如レ此。

〔舊本彼岸所以下圖在此間今從便宜移置〕

鼠祠モ。是王子宮末社之内也。子之神也。仕者鼠本地大日也。御神躰ハ鼠面。俗形ノ烏帽子狩衣ヲ是三井寺法師賴豪靈神之由申非説。自レ昔在ナリ之社也。

大宮化現之由也。帝王子御誕生之事。頼豪法師有二勅定一百日祈レ之。王子御誕生アリ。其時頼豪奏レ望。可レ造二戒壇院一之由言上。叡慮以外之儀也。於レ立二戒壇一山門憤山與レ寺可レ及二合戰一。天下之動亂如何非二勅許一。頼豪失二面目一。干死而王子奉二取殺一。敦文親王是也。御四歳時也。頼豪者爲二三千鼠一山門登聖教嚙破云々。號二之鼠祠一之由非説也。十二支内。子丑寅初。子神也。王子宮神門ヨリ二間許北ニ石アリ。獅子足跡是也。此處慈覺大師之里房也。慈覺大師佛法信敬。所以文殊菩薩納受ナリ。故有二現形一。里房ヲ彼號二彼岸所一。乘二獅子一臨幸アリ。其足跡一ッ殘ル也。第五十六代清和天皇御宇貞觀七乙酉年。御行幸事。傳教大師御弟子慈覺大師。慈覺大師御弟子相應和尚依二奏聞一。兩大師一度ニ大師號アリ。慈覺大師本國下野國也。委有二座主記一。楞嚴院建立。慈覺大師入唐時。海上風波起時。

御祈念有リ。歸朝時横川御建立。御詠歌。

仰見よもろこし船の面影を
移しとゝむる山川の水

號二前唐院一。後入唐智證大師御歌。

法のためさして行身をもろ〳〵の
神も佛も我をみそなへ

王子宮初參事。以二法華大意一如レ此。序品ハ文殊始也。故初度也。勸發品普賢末也。故結願參下向也。二十八品初後信心是也。

○王子宮　初　文殊　文殊ハ三世諸佛ノ智母。
故序品ハ文殊一番也。普賢
法華ノ正躰自在神通

○大宮　中　釋迦　從二東方一來ト云々。文殊
師利法王子經文也。
故號二王子宮一。八歳龍

○三宮　後　普賢　女文殊敎化也。法華
經處々ニ文殊ヲ爲二第一菩薩一。天竺ニ青凉山之文殊弘

法大師與有偶遇。日本丹後九世渡文殊。六十餘州所々神變事。山門横川文殊塔奇妙之神力御坐。東塔戒壇院文殊處々不可勝計。

後

北

私

一童社

早尾社

大殿

山長

吉備津

若宮

鋒殿

拜殿

三上社御一躰

地藏

六地藏第一傳教大師御作。

昔ハ此處皆安置。

慈覺大師六處ヱ御遷所。

一九條。一茵塵。一比叡。

一穴太。一明良。

此神中堂建立時。毎日御影嚮。大師見従添人給此林入給。故建社壇。俗形。本地不動。

三上社手摩乳。脚摩乳。稲田姫是也。內八社。外八社有之云々。

尾州熱田之宮內。源大夫殿是也。源大夫殿勅使御參向處也。勅使伊勢熱田源大夫殿御祈事。相坂ヨリ鈴鹿關。伊勢尾張通。不破關ヨリ御歸洛云々。業平御下向也。號三關。

素盞烏尊┐
稲田姫。┘――大己貴尊

手摩乳文殊。　源大夫殿早尾御一躰。

○七社
○左　大行事　毘沙門天王
○右　早尾　不動明王
兩神威專一也。

九所宮已上是也。岩瀧次有社。五大尊之中尊不動明王。惡魔降伏。早尾馬場頂上鎮護社是

大宮化現之由也。帝王子御誕生之事。頼豪法師有勅定。百日祈之。王子御誕生アリ。其時頼豪奏望。可造戒壇院之由言上。叡慮以外之儀也。於立戒壇。山門憤山與寺可及合戰。天下之動亂如何非勅許。頼豪失面目。干死而王子奉取殺。敦文親王是也。御四歳時也。頼豪者爲三千鼠。山門登聖教噉破云々。號之鼠祠之由非說也。十二支內。子丑寅初。子神也。王子宮神門ヨリ二間許北石アリ。獅子足跡是也。此處慈覺大師之里房也。慈覺大師佛法信敬。所以文殊菩薩納受ナリ。故有現形。里房彼號彼岸所。乘獅子臨幸アリ。其足跡一ツ殘ル也。第五十六代淸和天皇御宇貞觀七乙酉年。御行幸事。傳敎大師御弟子慈覺大師。慈覺大師御弟子相應和尙依奏聞。兩大師一度大師號アリ。慈覺大師本國下野國也。委有座主記。楞嚴院建立。慈覺大師入唐時。海上風波起時。御祈念有。歸朝時横川御建立。御詠歌。

　仰見よもろこし船の面影を
　　移しとゝむる山川の水

號前唐院。後入唐智證大師御歌。

　法のためさして行身をもろ〳〵の
　　神も佛も我をみそなへ

王子宮初參事。以法華大意如此。序品文殊始也。故初度也。勸發品普賢末也。故結願參下向也。二十八品初後信心是也。

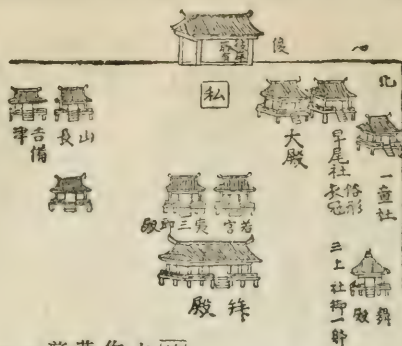
○王子宮　初　文殊　文殊三世諸佛智母。
　故序品文殊也。普賢一番
　法華正躰自在神通
○大宮　中　釋迦　從東方來云々。文殊
　師利法王子經文也。
　故號王子宮。八歲龍
○三宮　後　普賢　女文殊敎化也。法華
經處々文殊爲第一菩薩。天竺靑涼山之文殊弘

法大師與有偶遇。日本丹後九世渡文殊。六十餘州所々神變事。山門横川文殊塔奇妙之神力御坐。東塔戒壇院文殊處々不可勝計。

地藏

六地藏第一傳教大師御作。

昔ハ此處皆安置。

慈覺大師六處エ御遷所。

一九條。一菡鹿。一比叡。

一穴太。一明良。

此神中堂建立時。毎日御影嚮。大師見送ニ入給此林入給。故建ニ社壇一。俗形。本地不動。三上社ニハ手摩乳。脚摩乳。稻田姫是也。内八社。外八社有之云々。

尾州熱田之宮内。源大夫殿是也。源大夫殿ハ勅使御參向處也。勅使伊勢熱田源大夫殿御祈事。相坂ヨリ鈴鹿關。伊勢尾張通。不破關ヨリ御歸洛云々。業平御下向也。號三關一。

素盞烏尊 ── 大己貴尊
稻田姫。

手摩乳 文殊。　源大夫殿早尾御一躰。

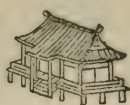
○左　大行事　毘沙門天王

○七社

○右　早尾　不動明王　兩神威専一也。

九所宮已上是也。岩瀧次有社。五大尊之中尊不動明王。惡魔降伏。早尾馬場頂上鎮護社是

也。東西之坂口諸人。加護之神徳之事。
稲田姫御事。三十一字始。
八雲たつ出雲八重垣つまごめに
やへかきつくるその八重垣を
手摩乳ヨリ因縁日本紀有之。

一 大師堂

大師堂慈恵大師安置之。慈恵大師御初登山之時。於此處休給。故後作之。此大師西向。十禪師前大師東向給也。此所安恵和尚里坊也。慈覺大師御弟子。安恵恵亮相應也。元三大師北郡ヨリ御上洛云々。

一 波之利祓殿 清浄水流出。以之祓也。口傳有。源ハ本社之勝地ナリ。日御供以此水調進之。浄水故也。二宮十禪師之供華水以之調。大宮之供華水波止土濃水也。坂本中諸家内浄事ハシリ水也。竈洗湯立等悉此水也。汚穢祓女人月水之浄水是也。參社諸人用之。

一 大橋長廣寸法前後有 以一千貫用途造立事也。昔祭禮日。此橋下希遠重服之時。忍祇候有。於橋上神輿止給。成不思議之覺悟之時。令託寄妓御歌。

こゝにきてこゝにありとは思へとも
めにみぬ程そ戀しかりける

依之希遠波之利以浄水御祓而。神輿之御前參勤アリ。其時則有出御。唐崎神幸之御事也。

一 希遠宿所 王子宮南有之。夜半計彼宿人數多雑談砌。希遠々々三度召。第三度目御諾言給。可參本社有御聲。畏申以浄水御祓。本社東御門邊休處妻戸口可參召給。則昇大床。妻戸口候給。自内陳仰宣。汝久不參。所為神役及闕怠。不可忌重服。至子孫早為參勤。神事可執行。依御神託。社家中重服五十一日參社申也。

又萬壽二年禮拜講始行。希遠蒙御託宣執行。已上三ケ度。直有御託宣。九十餘歲延命事也。一號猿塚穴有。唐崎迄通穴云々。猿老果後。此穴入不出由也。定說猿果姿爲見付者无之。奇特此事也。當社之仕者奇妙働。古今不可勝計。

イカキ

一塔下社日本ノ惣社是也依宣下也

塔婆北ニアリ今ハ斷絶也

二十一社御神躰安置處

猿行事

子安　千手

子立　十一面

彼岸處初是也

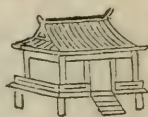
拜殿

此地北尾谷明達律師之里房也。明達行力達者。現妙之行者也。第六十二代朱雀天皇。朝敵御弟。惡人將門親王。於東國御移住。然而爲朝敵上洛。有調伏之法。對明達有勅定。則將門親王滅亡畢。明達法成就之砌。多寶塔建立アリ。故號塔下社。日本惣社者。依宣下。六十餘州大小神祇勸請之。塔下社者調伏祈念所也。於社頭如此。於山上四天王調伏祈處。四天有鑄像。從大唐我朝來至給。將門討手大將田原藤太與副將軍兩人。將門口傳。塔婆供養。

貴僧高僧數多云々。西方院院源座主者導師云云。此塔炎上以後。七重再造事アリ。社頭塔婆之初是也。故號根本塔。社名號之。明達法力成就之砌。天竺靈山淨土之一會之躰。於塔下出現也。大宮釋迦如來神通力是也。社頭彼岸所之始是也。

○猿行事ハ大行事御一躰祈念成就。御神力尤可有信用事。

○子安子立者。子々孫々長久祈之。男女出生祈念。此御社也。諸國有之。

惣合神門。先記之。吽字門也。神道胎金合躰。依之號惣合。於此內東向。兩大神宮拜念。關東諸國諸神祈念處。西向祈念同之。種々。口傳。

岩神社。子安是也。圍遶此社子孫長久祈之。子誕生百一日初參社。於此付童名。可凝懇祈御社是也。

一栢木客人。權現御影嚮神木是也。御託宣。我久有樹下未安居。

護法石。大宮彼岸所之方有り。

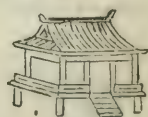
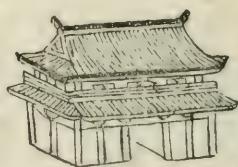
一春日岡。護法石已上九アリ。木共アリ。春日大明神御影向之靈地也。祭禮。七社神與此處昇居。奏添長柄。結付本社。添長柄出來奏樂。役人笛。和琴。篳篥。歌。

君か爲日吉の御神君かため
あはれむやゝゝゝゝゝゝ

歌畢テ七社神幸。於春日岡奏妓樂事。神代昔。日神月神天岩戶引籠給時。八百萬神等奏神樂。春日大神奏祝詞給。故春日岡前ニテ奏

之。樓門出御岩戸出給同等之順儀也。春日大明神天兒屋根命是也。十禪師權現天降給之時。三十二神同天降。凡一百七十萬歲有餘也。兒屋根命公家藤原氏上祖。　近九二一鷹司。悉氏神也。

大宮彼岸所。雜舍迄兩棟アリ。二季法事南谷上中下僧悉參籠事也。此内夏堂アリ。九旬供華十二人結番。七社有夏堂勤行アリ。大宮夏堂香華燈明。中僧調之。彼岸所上座二宮夏堂別有。拜殿東立之。十二人僧聖眞子念佛堂ナリ。十二時勤行。十二人鐘法螺。八王子夏堂。供華三院行者。衆徒祈念處。客人宮夏堂彼岸所内ニテ行法アリ。十禪師宮夏堂十二人。樹下僧號之。又亥子谷大衆號之。非衆徒非中僧。堂衆云十二人アリ。

一切經會之時。神樂屋是也。廣三間長五間。樓門之前有。彼岸所西ナリ。二處三會有之。於靈山二度說法於空中一度摸之。於山上舍利會與灌頂二度也。於社頭一切經會一度也。

一祇園石。中程凹アリ。以此溜水洗目好云々。一波止土濃。一切衆生悉有佛性如來常住無有變易。谷川波響如此。五色之水落合也。○波母山ヨリ一流。○中堂閼伽井北谷ヨリ一流。○楞嚴院如法水ヨリ一流。○神宮寺一流。○香爐岡ヨリ一流。但處々口傳種々アリ。非一儀。

波母山小比叡杣。一切衆生經文之初也。日本未開其以前波母山アリ。天神第六面足尊之時代ヨリ波母山アリ。過去拘留孫佛在世。天竺南海一切衆生之經文。

波響乘給。尊神御來到之所號二波母山一。口傳アリ。一切衆生之文。第一波母山。第二波止土濃。第三唐崎之濱也。於二唐崎一一切衆生聞給琴御舘也。其以後尊神御影向之時敎レ之給。波止土濃一切衆生文。權現聽給有二御垂跡一。故號二波止土濃大明神一。橋屋根。宮同前造レ之。有二尊神一故也。表二九品一。燈明九燈昔有レ之。近代屋根ナシ。ソリ橋カクル皆新儀也。橋東西床アリ。中通也。參詣諸人於二此床一休息。山上ヨリ隔夜大衆宵參社此床休。曉又參社登山アリ。波止土濃ヨリ東塔坂登。又補渡解谷登。神宮寺登。此寺傳敎大師開闢之處也。神宮寺登。岩阿橋登。方々道アリ。社頭參入道七道有。○大橋ヨリ參向諸人祈念所。○波止土濃ヨリ上下山上道アリ。○八王子ヨリ神宮寺道アリ。○夏堂東ヨリ北横川登奥護因參。飯室上仰木通葛川此道也。樹下ヨリ參向之道。社家中是ヨリ也。小走井口梅辻八條ヨリ參向上下。○二橋參社諸人下向道ナリ。社頭七道已上七道天下諸國七道モ表レ之。

撰集歌　　　祝部行親宿禰

あひにあひて守る日吉のかすくに
七の道の國さかふらし

當社七明神依二護持一諸國七道アリ。

一桂木アリ。神木之隨一也。御杖差置給。御垂跡之始也。故祭禮申日。內陣桂進上。則社家中一枝宛冠角差レ之。禁裡進獻。座主進上。七社神輿以レ是莊嚴。諸人頂二載之一。

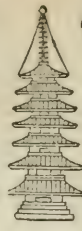
一杉。御垂跡初結レ之給。以二御印一建レ社。

一榊木諸木祖木是也。草祖萱姬也。神前有レ之。近代處々植レ之。

號二牛尊石一。近代失無レ之。樓門之西也。

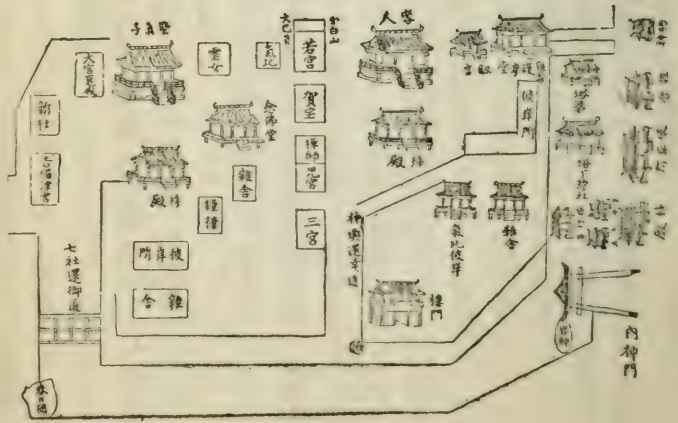
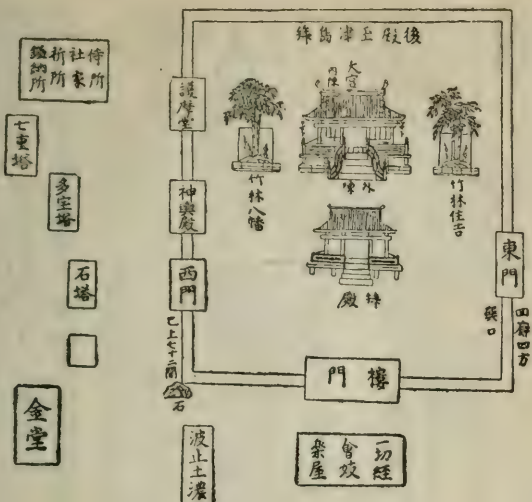
本尊阿彌陀。昔ハ一切經奉納處也。此堂ハ行基菩薩之造立ト云々。本尊同作也。

多寶石塔アリ。後白河院御願之事。

多寶塔婆。昔有ニ建立一。炎上畢。久壽ニ燒。

七重塔アリ。第八十五代後醍醐天皇御願。慈威和尚建立所。〔據本客人聖眞子等圖在此間今隨便宜移置〕

一樓門眞中ヲ不レ通。此東西之方ヨリ出入ス。中央ニハ經卷ヲ納ル也。

一回廊四方都合七十二間造レ之。東門西門巽ノ坤ノ口ニ有リ。於ニ回廊內一自然汚穢之者ハ巽ノ口ヨリ出レ之也。祭禮之時社家中者ニ坐スニ回廊一。酉日饗ノ時也。酒肴料座主ヨリ御下行也。

一東竹林。住吉明神御勸請。傳敎大師住吉御參詣ニ依レ之如レ此。

一西竹林。宇佐八幡宮。百日大師御參籠砌。大菩薩ヨリ袈裟大師與之云々。八幡應神天皇也。御妣妙德夫人申。妙德夫人御子大師御出生アリ。御傳敎御祖父八幡大菩薩御約束。東竹臺西竹臺。八十餘社之內是也。竹天上ヨリ天降生付也。口傳。

一大宮大國主神。又大國作神。又大己貴尊。數々有御名。本地釋迦如來。俗形着冠。但非普通御冠。如寶冠。御笏持。左右御手合給。笏御袍薄朱衣表袴。御鬚面方撫給。御齡四十歲餘。於唐崎琴御舘禮拜之給御形作之給。人長。口傳。神代昔御兒一百八十一御神。口傳。神寶神服兩色俗衣法服有之。寶撿帳有之。七社其外諸社奉納之尊像。宇志丸彫刻。第三十九代御宇天智天皇白鳳二年三月上巳御影向。自爾以來。凡及一千年神宮是也。宇志丸御遷宮。依神感御詠歌。

吾妻より琴の御舘にさそはれて
　この山末にとまる松風

依御詠歌。琴御舘神位號山末大明神。社壇大宮東脇建之。然後大宮寶殿時々爲大社。東竹林寺依有之。山末社下引之。下八王子西方東向社成。後北引上南向建立也。根本本社東方在之。大宮最初方丈造立之所。宇志丸之御沙汰也。次正面三間建立。相應和尚祈處。次正面九間建立之。慈惠大師御祈所。依之三聖皆五間之面也。

大比叡大明神三輪ヨリ御臨幸。御本地天竺鷲峰ヨリ御臨幸。御託宣。我爲守圓宗之教法。假出鷲峰之雲。暫馬臺同塵。早知小比叡社。爲我可建寶殿。是爲靈山嚴土。永止和光基迹焉。

古のわしのみ山の法のはな
　匂ひをうつすしかのから崎

いつとなくわしのたかねに澄月の
　光をやとすしかのから崎

大宮權現日本國之御主。故號大國主神。日本國御受禪次第。

伊弉諾尊　多賀大社。
　受禪　素盞烏尊　出雲大社。
　　受禪　大國主尊　大宮權現。
日本國中

禮拜講始行事。依御託宣。希遠祈事。奧委細記之。御託宣數度有之。

於御殿後。玉津嶋明神祈歌道。稱大比叡大明神事。人王第一神武天皇王宮ヨリ同座鎭座アリ。天子護持故號之。第一ヨリ至第十御宇。御同殿加護所。第十代御宇別宮御建立有。御遷宮有之。和州三輪是也。口傳。

人王第一御宇ヨリ主上加護之御本誓是也。平

安城開闢以來。比叡社猶以帝都之鎭守大明神是也。

一｜七所御前。是ハ七社祈念成就砌建立也。

一｜新社號ハ聖眞子之竈殿ニ。僧形。衣冠。本地胎藏界大日。

一｜大宮竈殿。大日金剛界。俗形。奥津彦神是也。

大年神御兒也。諸人家々竈殿神是也。

杵舂大明神
大國主神
大年神
奥津彦神竈是也

一聖眞子。僧形ノ。傳敎大師之御時御法躰。正哉吾勝(マサヤアカツ)勝早日天忍穗耳尊(カツハヤヒアマノオシホミ)是也。天照太神第一御子。地神第二番尊神。僧形。御齡五十歳計。法服黃被。寶撿帳在レ之。第四十代天武帝御宇白鳳十年御影向。尊神御出生。應神天皇。後八幡宮現形給。

天神第七代 伊弉諾尊　日本開闢
天照太神
素盞烏尊
十禪師宮
聖眞子 大行事御娘后タクハタチヽ姫
正哉吾尊
天津彦々尊
火々出見尊
葺不合尊
人王第一

大宮二宮ヲ爲ニ陰陽之神明ニ。於ニ其中ニ我爲ニ出生ニ。故號ニ聖眞子ト也。五男三女ノ第一是聖眞子御詫宣。本地阿彌陀佛。又大宮權現者。調ニ皆成佛之機ニ。二宮權現者止ニ惡業煩惱之病ニ。我導ニ十惡五逆者ヲ。可レ迎ニ九品淨刹ニ。

｜念佛堂參籠之者示給。二人現。一人眠。

千早振玉の簾を捲あけて
　念佛の聲を聞そうれしき
千はやふる玉の枕をそはたてゝ
　念佛の聲を聞そ嬉しき

御本地八幡大菩薩御詠歌。
いにしへの我名を人の顯はして
なむあみ陀佛といふぞ嬉しき
豐前國宇佐宮。第三十代欽明天皇御宇出現給。宇佐宮御臨幸故如レ此申。宇佐宮ヨリ石淸水八幡宮御影嚮。第五十六代淸和天皇御宇。男山遷給。行教和尙宇佐宮百日參籠アリテ。大般若經信讀アリ。下向袖移御影嚮也。
一［　］聖女宮。女形本地如意輪。神功皇后是也。稻荷大明神是也。神功皇后御本地。神代下照姬是也。大己貴尊之御娘也。山上舍利會砌。御登山之刻。法性房トガメテ曰。女人登山如何。當山女人禁制也。聖女答曰。我非二常女人一。爲二佛法護持一也。禁下衆徒洗濯可レ守云々。則御下山アリテ御垂跡。聖眞子之東社壇建レ之。
一氣比社。童形。本地聖觀音。越州敦賀郡ヨリ御勸請。傳敎大師御時也。第十四代仲哀天皇是也。第十五代神功皇后御子八幡宮也。
一［宮人宮］女形。本地十一面。日本開闢神伊弉冊尊是也。白山大妙理權現御影向アリ。我子也。栢木上有二御影嚮一。但社壇无レ之。相應和尙於二橫川坂一御對面。依レ之建レ社。天安二年六月十八日有二御遷宮一。小白山大己貴兩神有二同社一。後建レ社。
一［劍宮］童形。本地不動。瓊々杵尊是也。
一［若宮］毘沙門。
一［　　］賀寶。兒玉。小白山。
［　　］禪師。三宮。大己貴。
一靈石。歡喜天石也。天安御遷宮之刻。此石長丈降白山ヨリ出現驗也。一萬三千采女神。五萬八千妙吉祥神。十萬金剛童子。
一［　］結神。昔无レ之。何頃ヨリ安置哉。記錄无レ之。
一［　］客人下有レ之。聖女彼岸所東四辻ナリ。中

道ヨリ下所也。

一日御供所　御寄附。後白河院壽永二年八月一日ヨリ調進所建。

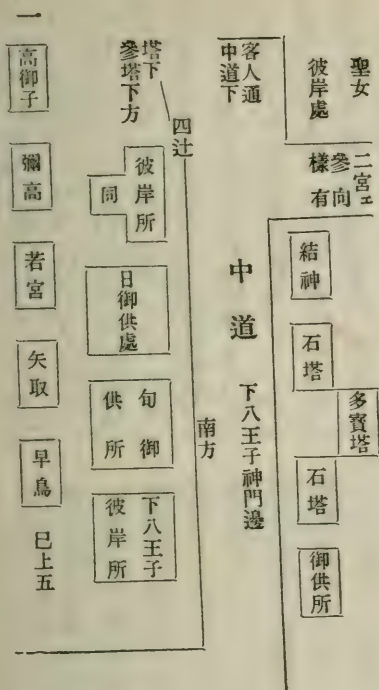
一旬御供所　部庄近衞殿御寄進。同十一月一日ヨリ調進處。三園庄ヨリ運上。

一多寶塔婆　中路北ニアリ。美福門院御建立。是ハ後白河院國母御建立。

一申日御供所　山末社ヨリ坤方ニ當ル。

一地藏院　山末ヨリ西ニ有リ。

一下八王子彼岸所　二橋ノ西方ニ有リ。

一神門。前ニハ夷ノ前ニ有。今ハ下八王子ノ匡也。

一下八王子宮 俗形。口冠。本地虚空藏。天御中主尊。天神第一是也。明星是也。拜殿 祭禮七社外當社神馬有之。東方石有。號天盤船。明神乘之御臨幸也。小走井。明星水也。

山末。俗形。衣冠。摩利支尊天。拜殿 琴御舘宇志丸神位是也。上古大宮廻廊内御殿東建社。

氏永社王御子 同社。希遠神位祝之。永澤社同前事。俗形。 氏永左方始。希遠宿禰神位也。

廣田社 東向西方立之。 山末神前ニテ申之字掌内書之祈念事。摩利支天法樂申。本社建立之初。祭禮之始當社ヨリ起也。

夷殿三郎殿 俗形。

内王子 童(俗イ)形。

夷三郎殿 俗形。竪烏帽子。已上兩東向立之山末北アリ。

夢妙幢社 俗形。 妙幢菩薩是也。善夢成就惡夢消滅唱之。獏食惡夢。

息三郎殿 俗形。 神功皇后御子也。夷三郎殿各別義。

九所宮 七社大行事早尾加之。 岩瀧南有。

岩瀧社 女形。竹生嶋辨財天是也。夕、ヲ姬是也。事代主神御娘。大己貴。御子。神武后也。竹生嶋ヨリ御影嚮アリ。

田付社 俗形。 岩瀧北有。

惡王子 童形。 愛染明王。當社後ヨリ下八王子邊マテ瑞籬有。下八王子神門東西非垣有。山末西又瑞籬有。岩瀧之西拜殿有之。

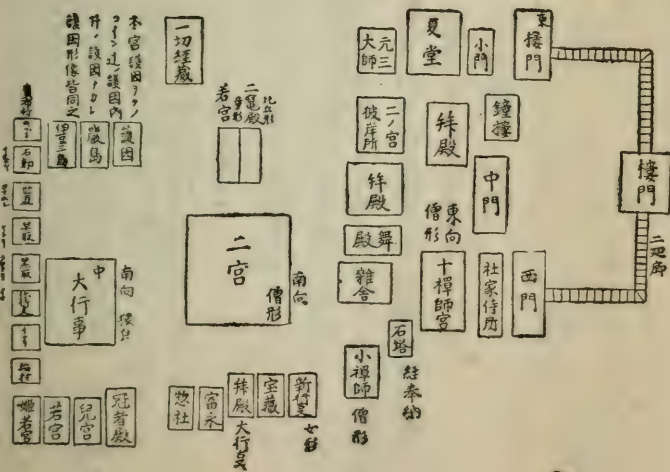
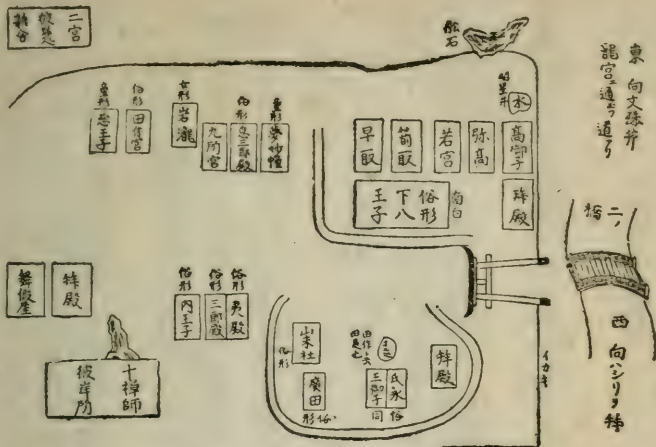
〔舊本二ノ插等圖在此間今圖便宜移載〕

御齡七十有餘。

二宮。俗形。堅實合掌。 法服黃被。

天神第一。國常立尊。 藥師。 華臺菩薩。

地主權現。 小比叡大明神。天地開闢之神。諸神惣大祖神是也。

二宮
高宮
拝殿
弥高
若宮
俗形
下八王子
南向
拝殿
舞殿
十禅師
彼岸所
廣田
氏永
三御子
拝殿
西
二ノ橋
東
楼門
小門
夏堂
元三大師
鐘楼
拝殿
二ノ宮
彼岸所
中門
楼門
拝殿
東向
僧形
舞殿
二宮
南向
僧形
雑舎
十禅師宮
社家侍所
西門
石塔
小禅師
僧形
新行堂
宝蔵
拝殿
大行事
富永
惣社
一切経蔵
二竈殿
若宮
中
大行事
南向
冠者殿
児宮
若宮
姫若宮

破軍星。　明星天子。

國常立尊（或曰天御中主尊）
- 高皇産靈尊
- 神皇産靈尊（大行事社是也　八神殿之内々裏ノ）
- 津速日命
- 裔孫春日社
  - 活魂命（祝部氏祖部）
  - 琴御舘（祝部）
  - 行丸（祝部）
  - 行廣（祝部）

本社。　寶殿建立。宮初者。琴御舘宇志丸造レ之給。

第六面足尊之時代ヨリ當山來至。天竺狗留孫佛之在世云々、

波母山小比叡杣鎮座御詠歌。（日本開闢已前也。）

波母山やおひえの杉のひとりゐは
嵐も寒し問人もなし

大比叡大明神波母山江臨幸御歌。

何事かおはしますらん瑞籬の
久しく成ぬ見たてまつらて

此御返事。波母山之御歌也。

大祖。（オホミヲヤ）

○國常立尊
- 高皇産靈尊—國御子千五百座（異イ）
- 栲幡千々姫—國御子
- 杤梯
- 御母
- 天津彦々穗瓊々杵尊（御彦）
- 十禪師宮御父方
- 子
- 孫
- 彦
- 伊弉諾尊—天照太神
- 正哉吾勝

社頭者上下兩祖之神威之事。

○大社。諸祖（社イ）同レ之。　大橋御田社職三人。禰宜祝神

一主有レ之。
一兩神輿初者大宮二宮兩神也。申日祭禮。上通早尾迄也。
○小比叡社。諸祖(社イ)同レ之。二橋御田社職云々。禰宜祝神主有レ之。
酉日神事皆以兩社計也。下通王子宮迄也。
山。東塔大宮。西塔二宮。
一十禪師。御齡二十有餘。僧形。團持レ之給。法服黄被。天津彥々穗瓊々杵尊。地神第三尊神。延曆二年御影向。同四年七月廿四日。於二山上一御兒形ニテ傳教大師御拜敬。則建二寶殿一給天降玉フ。凡百七十萬餘歲也。號二皇御孫尊一。中臣祓明レ之。御神力現形。古今種々事。童形ニテ慈鎭和尚へ通給時御歌。

ほと〱とたゝくつま戸はさもなくて
思はぬ方に明る東雲

慈鎭御歌。非二御返歌一。

我ならて誰にもかくや契らんと
思ふにかはるむねそこかるゝ

御託宣御詠歌。

一度唱二名號一功德如二虛空一。我誓無盡願ノ也。所レ願悉圓滿。

おもふこと祈るにつけてなひかすは
白木綿かけて誰か賴ん

慈悲正直可レ專之旨有レ之。
○明雲座主御流罪之時。無動寺童子鶴丸依二御託宣一明雲皈山之事。
○二條關白師通公以二身吉一給レ託事。樹下和光同塵。
一大行事權現。僧(俗イ)形。猿面。毘沙門彌行事。猿行事同レ之。猿田彥大士。天上第一智神。國常立。高皇産靈尊。日神月神岩戶閇籠給時。以二當尊神之智力一八百萬神集レ之奏二神樂一給。依レ之日神二度出現。高天照レ之給。中臣祓神漏

岐。大行事神滿美者。天照太神。此兩神力以レ之。八百萬神達集。皇御孫尊天降給。

外戚大行事御娘栲幡千々姫一
皇御孫尊御誕生
内戚天照太神御子正哉吾勝尊一

三十二神皇御孫之御供。春日。鹿嶋。香取。皆以二此御時一也。

護世四王多聞天。須彌山北方宮殿有リ。

一新行事。女形。吉祥天。與津嶋姫。三女之第一是也。

天照太神五男三女之御事。

一小禪師。僧形。團持レ之給。彌勒尊。一說地神第四尊神ト云々。太一定分也。本地兜率天上之尊像。三會曉出生。

一二宮竈殿。比丘形。若宮ハ童形。

日光菩薩。月光菩薩。藥師脇士八萬四千之內。上首是也。國常立尊之御子等是也。

一護因社。僧形。有レ嘴。樹下僧夏堂衆孝聖也。行力巨多也。後身誕生。後三條院勅附二愛智庄三千石所內陳御供料一。當社神位崇敬之社。辻護因房跡也。奧護因廟所淨レ之勝地也。內井之護因北谷川大洪水之時。流大行事ノ內井迄如レ此止給處建レ社。號二流護因一是也。

一嚴嶋社。女形。安藝國ヨリ御影嚮。

一貴布禰。鞍馬ヨリ影嚮。

一伊豆宮三嶋明神。本地大通智勝佛。

一石動。能登國ヨリ來臨。

一稻荷社。山城國。

一稻村社。中部。山崎ヨリカ。

一十禪師夏。御本尊童形繪像。慈鎮和尙御筆。

一一切經藏。十禪師權現御所望之給也。委細與ニ記レ之。

一樓門。二宮權現依二御託宣一平清盛御建立。
一廻廊。五條大納言國綱卿御建立。
一夏堂東ニ靈石アリ。樹下ノ下道下ニ平石云々。
一夢妙幢前靈石アリ。象之形也。護法石也。
一上總社ヨリ四五間東ニ烏帽子石アリ。象石與男女由也。
一山末前石坤ニアリ。氏永靈石也。
一八王子伏拜。拜殿アリ。靈石則八王子御神。
一二宮彼岸所ハ岩瀧ノ東ニ有。
一十禪師彼岸所ハ岩瀧ノ西方ニ有。
一大行事彼岸所ハ東門ノ又東ニ有。
一山末ノ彼岸所ハ社西ニ有。同地藏院アリ。
一新行事彼岸所。十禪師宮ノ上通。大行事宮ノ後ヘ參道。
一〔旋臺社〕〔拜殿〕慈覺大師御建立。於二大唐一白犬大師ニ値遇。御皈朝之時。於二此處一再會シ玉ヘリ。崇レ之。子細奧ニ有レ之。

一〔石介〕道ヨリ西ニ有。
一小谷祓。通二此道一有二靈石一。以二此水一祓レ之。禮拜講結願所。
一〔輪藏〕近年有レ之。昔ハ无レ之。行丸若歳時知レ之。建竟之。佛頂尾。圓定房造レ之。昔經藏アリ。此間ノ夏堂之地ニ有。此間輪藏之地ハ昔鐘樓有。夏堂ハ下僧初後擣レ之云々。
一〔石塔〕桓武天皇勅願御建立。塔前五間ニ廣サノ拜殿有。上道石壇リ道ノ有。下供僧堂ニ。十二人晝夜勤行有。堂僧領所過分ニ勅附之事。天正三乙亥年。此塔引倒事。上坂本惡人等ノ業也。土臺ハ一富津ノ大道之磊。南北ノ角石也。九輪ハ打折。笠木ハ打倒。筒躰顚之。桓武天皇佛法護持之勅願是也。

八王子登坂。

一アマナミ坂。午ノ神事ニ社司中順メクルレ之。口傳。
一八町坂ニ九箇處休所。號二和老堂一。表ス二九品之佛閣ヲ一。

一竹生嶋ノ伏拜ニ有。

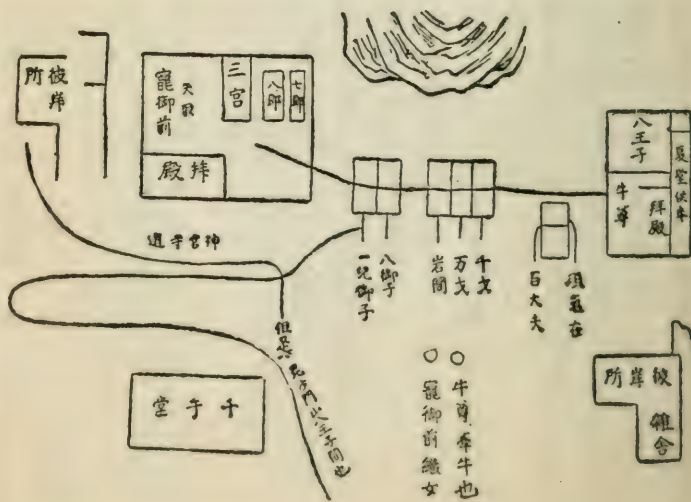
一護法石。八王子ノ下ニアリ。傳敎慈覺元三大師祈念之小堂アリ。三院行者衆參向アリ。

一千手堂　染殿后御願所御建立事。第五十六代清和天皇御國母是也。御兄惟高。惟仁ハ御弟。御位諍。惟仁御勝。御父帝文德。御即位。清和帝是也。惠亮和尙碎ㇾ腦燒ニ護摩火壇ㇾ依ㇾ之惟仁御即位ノ爲ニ御願成就ㇾ千手堂是也。惟高御祈禱者。南都ノ柿本紀僧正失ニ本意ㇾ干死而成ニ天狗ㇾ染殿后ニ含ニ遺恨ㇾ成ニ御惱ㇾ相應和尙依ニ御祈念ㇾ有ニ御本復ㇾ爲ニ御施物ㇾ伊香立庄御寄附所。

古今集春歌。

おほきさいの宮の御うたとあるは染どのゝ御ことなり。皇太后宮是也。伊勢物語も染どのの御事あり。

一護法石。道ノ東ニ有。千手道ヲ與ニ八王子ノ間也。

一牛尊石。御殿之下牛尊石上安ㇾ之。

一金大巖。八三兩社御間是也。奥江長石也。巖上ニ又靈石有レ之。

一八王子。俗形。束帶赤袍帶ニ太刀ヲ。千手國狹槌尊。八十萬神引率而天降。第十代崇神天皇御宇ヨリ鎭座所。神寶神服悉八色奉ニ納之ヲ。諸國在々所々御影嚮。悉號ニ八王子ト。以ニ御神力ヲ諸人信敬事ニ。右手笏持レ之給。以ニ御左手ヲ添ニ太刀ノ柄ニ。御齡卅有餘也。

一三宮。女形。三躰御質女唐女持ニ團子ヲ。依ニ三女之影嚮ニ奉レ稱ニ三宮ト。乘ニ紫雲ニ自ニ東方ヲ來臨給シ。傳敎大師御對面云々。延暦三甲子年陽春比臨幸云々。神寶神服奉レ納ニ三躰御分ヲ。三箱納レ之。寶撿帳七社有レ之。昔廿一社奉納有レ之。妙法華ハ正躰十願本誓御。天神第六尊惶根尊是也。此御娘伊弉冊尊是也。尊號日本紀數多。御三女宮是也。女略也。千手堂上ヨリ神宮寺道有リ。

詣石トテ自レ是不動瀧ノ拜ス。

一靈石アリ。惣社ヨリ東五六間程ナリ。號ニ烏帽子石ト。夢妙幢象石。男天女天也。

一惣社。日本國大小神祇鎭座。御神躰。山王七社。伊勢八幡春日社并諸神勸ニ請之ヲ。傳敎大師御時。

一神宮寺。本尊十一面。西ニ大黑天神御坐。

一東妻戸庭前ニ二石アリ。大宮御座。二宮御座。

一石塔有塚アリ。號ニ御首塚ト。二宮聖眞子御髮剃御髮ヲ奉レ納云々。

一堂西藥師淨土有ト云々。

一不動堂アリ。其西ニ妙見尊御庵室アリ。御住山ノ所也。近年斷絶畢ヌ。

一神宮寺傳敎大師御住山始之所也。自レ是山門有ニ開闢ハ。延暦四乙丑年七月十七日。從レ是御登山。廿四日童形ノ尊躰御對面ニ。稱ニ十禪師ト。廿六日ニ於ニ定心院ニ貴形尊大師御對面。大師問曰。尊

號如何。化人答曰。竪三點横一點。横三點竪一點。則山王覺給。大師唱給。諸佛救世者。住於大神通。爲悅衆生故。現無量神力。如此祈給。委曲山門記有之云々。社中者神道秘密本式也。廿一社百八社記錄爲本意。他事粗可爲演說也。

一神宮寺軒下大師舍利掘給事有。

一横川道有。靈石有云々。

一不動堂下西岸六月七ケ日涌水有。於神宮寺供華閼伽名水也。

一神藏寺ヨリ岩阿行道天人飛來石有。

一道ヨリ南屛風石有。毘沙門也。

一鬼石有。自樹少上也。昔鬼神休也。

一岩阿橋眞中穴ヨリ庭覰也。於此橋ハキ物ヲヌク也。橋下桓武天皇成龍住給。永代佛法加護云々。

一瀧名神藏之瀧號玄龍池。雨請有此處。第二番瀧號飛龍池。義眞和尚龍池云々。

一立石有。不動石也。屛風石同前也。

一不動瀧有。則明王之形有。

一香爐岡石アリ。淨名居士居處也。大師護摩修給灰等備今有云々。

一補度解谷。大師護摩所也。

一香爐岡ヨリ流水有。五水ノ内也。

一神藏寺ヨリ流水。五水ノ内也。

一波母山ノ谷ヨリ流水。五水ノ第一也。

一横川如法水。五水ノ内也。

一北谷中堂閼伽井。五水ノ内也。以上是也。此五水波止土濃ハ落合事也。

七社位階。

大宮。　正一位。最初正三位。　次二位。

二宮。　正一位。　記錄追而可調之。紙數三千一百卅二枚。

聖眞子。　正一位　大小神祇三千三十二

八王子。　正一位。　神表之吉祥也。

七十卷可レ調レ之。

客人。　正一位。
十禪師。　正一位。
三宮。　正一位。
已上。後白川院御宇皆同勅裁。

山末社。　正一位。　中七。　下七。　位階有レ之。

○大宮。　稱二號琴御舘御崇敬所一。御遷宮砌。社號。於二御祈念所一闇夜於二虚空一如二日輪一有二光明一。於二耀中一有二大字一。御質祈念之刻二文字一。依レ之稱二大宮一。依二日輪一日吉大宮崇給。

經曰大如二車輪一。大如二微塵一。他社之次第。一ノ神殿。二ノ神殿。三四ナドアリ。當社一二六七无二沙汰一。秘密也。

○二宮者天與レ地二儀ノ主神御。天始地始。其中間ニ出現シ給。故天地主權現ト號ス。天字ノ略ヲ號ス地主權現ト。天地陰陽兩儀。加護ノ大明神。

○聖眞子宮御託宣。大比叡。小比叡。爲二陰陽之兩神一。於二其中一我出生ス。故號二聖眞子一。聖ハ兩神也。眞子名字玉フ。法宿華臺。　聖眞子。有二口傳一。

○八王子列降玉フ。八十萬神有二引率一。天神第二ヨリ次第ノ尊神。有二口傳一神寶神服八具奉納事。

○客人宮。北陸白山ヨリ來臨ノ所。女體登山之砌。於二横川坂布袋邊一相應和尚御對談之刻。女體登何不審之御返答。客人御名乘故也。

○十禪師。禪レ師讀。有二口傳一。師ハ云レ國。帝御母儀國母云。國師同前ヨミ。十字。天神七ニ地ノ三ヲ合也。十善天子加護ノ義アリ。譲二天下一ヲ義也。

○三宮女體。　三質神降臨。故號二三宮一。乘二紫雲一自二東方一降臨御。

已上七社次第如レ斯。尚以口傳有。

日本國中大小神祇三千一百三十二神。定所紙數三千一百三十二枚。可ㇾ爲ㇾ新二調之一。追七十卷可ㇾ誌。
元龜二辛未年九月十二日放火。上古記錄大亂之刻紛失畢。此分新調也。追以二鳥子紙一可ㇾ加二淸書一者也。
天正十壬午年十一月万吉
社務上祖宇志丸三十七世裔孫。社務行七十一歲丸記。
相傳行廣授。三十五歲戌申生
日于時寛永十四丁丑年十二月十日寫ㇾ之　山門西塔南谷　觀泉坊乘盛
呈上　天海大僧正
以二寫本一校畢。尙文字誤以二愚見一難二訂正一。期二於後見之發智一而已。
右行丸記一卷者。以二雞頭院嚴覺本一令二染筆一。世山王記雖ㇾ有二少々一。如二今記一委細記ㇾ之書未ㇾ拜。實以可二自愛一。　文字轉誤頗多。後賢可ㇾ訂二正之一而已。
維時天和第二載在二壬戌一冬極月佛涅槃日。於二都率谷雞足院南軒一燈下書。
比叡山延曆寺楞嚴三昧院香芳谷養壽蘭若沙門權律師竪者惠覺稽首九拜印
右日吉社神道秘密記以東叡山普門院本書寫以天海大僧正筆本挍正

日吉神輿御入洛見聞畧記

應安元年戊申八月廿八日。山門大衆頂戴神輿忽入洛。自二條西行。至東洞院土御門里内邊云々。所志有之歟。防護之武士如雲霞馳向一條邊。但神幸正近御之時分者。武士各下馬伏弓就首於地。敢無防戰之儀。是偏恐神威。猶不應勅宣歟。爰大衆奉振寄神輿於北陣外。方々退散。所奉振寄之神輿凡四基。十禪師。八王子。客人。赤山云々。今夜同末社北野。祇園。御輿等任例奉振出之。翌日。廿九日。奉入神輿於祇園社畢。是亦爲先例歟。傳聞今度訴訟之篇目者。近曾有南禪寺樓門結搆事。而件樓門敷地爲山門管領之内。仍樓門者可被撤却。於長老者可被處流刑之由奏聞之云々。公家殊驚思食之間。月日南禪寺長老于時。玄璵被下遠流之宣旨。被移尾張國畢。然而武家猶抱惜之故歟。不及樓門撤却之沙汰之間。山徒猶含鬱陶。重可奉振神輿之由有其聞云々。

同二年己酉四月廿日甲申酉刻。山門大衆數千人。帶甲冑頂戴神輿入洛之間。貴賤上下鼓動。東西南北馳違。於今度善惡可奉振入神輿於内裏之門内之由。兼日有其聞之間。武家殊驚存。以武士奉守護内裏。西北兩門。佐々木六角判官入道。東門。黑田判官警固之云々。其外就當職侍所土岐宮内少輔率軍兵馳向河原邊。但大衆雲霞之上。恐神威歟之間。不及防之引退之間。大衆自元如相企。奉振陣頭欲奉振入門内。爰守武士不惜命防戰。神人多被疵歟。衆徒一兩於陣頭隕命。武士一人六角判官手者。討死云々。凡其間猥雜。上下人消肝迷魂云々。數刻雖相戰。堅閉門戸之間。不及奉振入神輿。振寄陣頭。而大衆退散了。此時分一條邊放火事云々。神人等之所行歟。神輿御入洛之時分。宸儀潛臨幸法身院。長者僧正玄濟。住坊土御門萬里小路。靜謐之後。夜陰還幸

云々。今夜奉入神輿大宮。二宮。三宮。聖眞子。四基。祇園社。
廿一日。賀茂祭有之。夜陰云々。
傳聞。今度守門武士。近江佐々木六角判官入道并黑田判官。應武命抱勅定。不惜身命奉防護間。叡感無他而度々被下綸旨云々。侍所雖馳向河原邊。曾無相防之儀。恐神輿之條。雖非無其謂。猶似輕武命歟之由有謗難云々。
同七月廿八日。南禪寺樓門遂壞始之。奉行安威入道云々。南禪寺住持僧自兼日悉退散云々。此事又一向六角判官入道申沙汰之由有其聞。今度拒神輿放矢之條。依武命應勅宣之故也。是又時不運無力之次第也。所詮早於自身者。先可被處流刑之由自申也。此上者早撤却樓門而忽可成御歸座之由申行云々。
同八月三日。樓門破却事畢。但柱計相殘云々。申刻。七社神輿御歸座。但大衆不令供奉。一向宮仕駕輿丁計也。是又爲先規歟。洛中自京極北行至一條。其間路次見物衆中蒙疵失命者數十人云々。是只彼駕輿丁等沛艾之故歟。其中花山院青侍能登左衞門娚。忽合宮仕失命了。宮仕又蒙疵云々。如此之類多之。雖向後神輿御歸座之時。無左右奉拜見之條。可加斟酌歟之由上下存云々。神輿自吉良々坂御登山云々。
傳聞。今度御歸座事。訴訟之篇入眼之上者。奉勸還幸。於御輿者。於坂本可奉造替之由。自武家問答之間。卽有御歸座云々。定又有先規歟。可尋之。凡者於京都造替之後。可奉勸御歸座哉。
同六年春比。於京都可有神輿造替之由有其聞。於坂本可有其沙汰之由。兼風聞虛說歟。又其後篇目相改歟。可尋之。院廳爲奉行造替所假屋數十間新造。一條萬里小路南頰。於是召集諸道細工。可令造替之用意也。或云。造替所者。門以下檜皮葺也。每日有御幸之故也。今度假葺略儀歟云々。

同七年甲寅六月廿日酉刻。日吉御輿七基幷赤山御輿一基。出雲邊奉振寄之。兼日無其聞。俄儀歟。今度但爲古輿之間。不奉移御神體云々。同夜奉入祇園社。神儀無御入洛之間。不及備神供云々。傳聞。去年造替所雖有建立。未及造替之分間。舊輿奉返入之由云々。

又聞。造替未事行之故者。山門張本任訴召出之後。可有其沙汰之由。自武家問答云々。又者大講堂料所數箇所。任申請雖有御寄進。衆徒等徒分持而。雖柱一本未及造營之上者。先返進後料所者。先可令造替神輿。造替以後者。卽可被返付之由問答云々。但神輿御造替料。諸國領別大略運上。然而爲當山門之非義。如此問答云云。實說猶可尋之。

同八年乙卯。（永和元）

同二年丙辰。

同三年丁巳六月下旬。山僧（杉生金輪院圓明院等諸大名。）十人出。

又聞。造替未事行之故者。山門張本任訴召出之。

同四年戊午。

康曆元己未閏四月十四日。武家執事武藏守賴之。依諸大名訴訟自大樹被立御使之間。忽沒落四國了。於不落命之條。偏大樹之芳恩。此間之舊好也云々。是則日吉神輿。數年雖有御在洛。造替事一切無沙汰之間。爲神罰之由乘人口歟。仍同五月比。山門使節宿老數輩列參之時。大樹對面。造替事指定。奉行日時等。嚴密被下知之間。山僧等開眉頭。先於神輿者可奉歸入之由申之云々。

六月。

八月。　日吉神輿悉奉歸入之云々。

康曆二年庚申六月晦。七社御輿造營事畢。卽今日坂本奉送之。人夫千餘人。自松本載舟。唐崎可着之。於彼奉莊之云々。

群書類従卷第十九

神祇部十九

北野緣起

北野天滿自在天神宮創建山城國葛野上林鄕緣起。

右天神最初以去天慶五年歲次壬寅七月十二日。於右京七條二坊十三町而相託多治比奇子給。御託宣云。我昔在世之時。屢遊覽右近馬埸多年。城邊閑曠之地。何如彼埸哉。因玆遇虛橫之過。被左降鎭西之後。遠雖思宿報。中心結恨之報。還作焦肝之爐。得歸京無期。適潛嚮彼馬埸之時。胸炎頗有薄。既得天神之號。有鎭國之思。須早進發彼處。聊結搆我禿倉。令得潛寄使者。爲畏託宣。搆其禿倉。安置柴扉之邊。五箇年之間。雖有崇營。憚賤妾之不重。能隨天神御宣。久蒙託巡。遂不勝堪思。以去天曆元年歲次丁未六月九日奉移件處。其後松種忽生。成數步之林。神妙在眼。如萬人之殖。彼時小木之地俄繁。今則大陵之庭既暗。建立造宮之後。于今十四箇年之間。奉爲天神所濟之雜事。改造御殿五箇度。最後所搆造立。是三間三面庇檜皮葺也。所用之色不可盡筆端。奉造御影像。并奉爲法樂增長。奉寫法花經十部。金光明經一部。仁王般若經二部。奉立率都婆四本。且依御託宣。建立三間四面堂一宇。安置觀世音菩薩像一軀。其外雜事累年多端矣。敢非可細

記。就中五間僧房二宇之中。一宇在二庇壹面一。一宇在二庇三面一。鐘一口長一尺六寸。禮盤一具二基。金鼓二面。經八寸之中。一面紛失。具注二疏資財帳一也。由レ是言レ之。萬物必有二根源一。弄レ根者何得二花實之榮一。絶レ源者何繼二宗海之流一。後代若旋二踵於此宮邊一之輩。不レ擇二僧俗一不レ論二貴賤一。觸二奇子之子々孫々一。可レ隨二其進止一。況於二大小所司一乎。傳領之旨。就レ之不レ可レ失。若或所司存二阿容之情一。施二偏黨之判一者。强好以望二天神之幽罰一乎。仍今爲二後代一勒二緣起之旨一。而請レ隨二近在地證判一如レ件。

右一帖以邑井敬義本書寫於杏花園遂一挍畢

北野縁起上

日本我朝は神明の御めぐみまさかりなり。人の望をみて給ふ事。いづれもおとり給はずといへども。北野天滿大自在天神は。末代の衆生をたすけて。二世の所求をみて給ふ事。世に勝れましますにや。一念欽仰をいたす輩。得益あゆみにしたがひ。片時擁護をねがふたぐひ。利生望のごとし。名稱異域にきこえ。靈驗本朝に秀たり。たゝけば則こたへ。あふげば必望む。秋の月の水にうかび。曉の鐘の霜に和するにことならず。或天下に鹽梅として帝圖を輔導し。或は天上に日月として國土を照臨す。本地を尋ぬれば觀音の垂跡也。慈悲の弘誓淺からず。外現を思へば人臣の大祖なり。風月の文章たくみ也き。されば現當をいのらむ人。いかでかむなしからん。仍寛弘元年始て行幸なりき。

承久の今に至る迄。聖王十九代。いづれの御代にか天神をあがめ奉らせ給はぬはなし。
抑昔菅相公是善。菅原院と申家に住給ひけるに。家の庭に五六歳ばかりなる兒あそび給ひけるを相公見給て。容顏たゞ人にあらずと覺して。君はいづれの家の子男ぞ。何によりて來り給ふぞと問給ふに。兒の玉ふやう。我さだまれる居所なし。母だもなし。相公を親とせんとおもひ侍ると仰られければ。相公よろこびていだきとりて。御子のごとく鍾愛し玉ひて。儒業を學せさせ奉らせ給ふに。相公の才智にも過てぞおはしける。世につかへて右大臣の大將迄なりのぼり給ひしかども。不慮の無實によりて。太宰權帥にうつり玉ひしかば。御なげきにたえずして。つゐに薨じ給ひて天神とぞならせたまひける。
生年十一二歳にならせ給ひけるに。詩つくり給ひなむやと。相公申させ給ひければ。

月耀如晴雪。　梅花似照星。
可憐金鏡轉。　庭上玉房馨。

とぞ作りまし〱ける。十三四に成玉ひて。殆天下にならぶ人なくおはしける。

氷封水面聞無浪　雪點林頭看有花。

これぞ十四にてつくらせ給ひける。
傳教大師大唐に渡りて。圓頓菩薩の大戒を傳へて。叡山に戒壇をたてむとせし時。諸宗更にゆるさゞりしかば。大師顯戒論三卷をつくりて。弘仁天皇に奉り給しかば。諸宗のうれへによらずして。同十三年六月十一日。叡山に戒壇を建立すべきよし宣旨を下されにき。されども論者たがひに鉾楯せしかば。慈覺大師是をいたみて。顯揚大戒論をゑらび給ひしかば。安惠和尚先師の一言を感じて八卷となし。是を三際に傳て十方にひろめんと覺して。くびに

懸て菅相公のもとへおはして。此文の序書玉ひなむやとの玉ひしに。相公思食けるやう。文は朝家のたから衆生の燈也。子なりとも此君にこそかゝせ奉らめと覺して。かくと申給ひければ。貞觀八年十一月の事なれば。天神は御年廿一二にて。官位もいまだ淺く。文章生にておはしたれども。書せ給ひたりける序の文こそ。天台宗第一の寳にて侍るとぞ申傳へたれ。所々申侍べし。

我本朝馳₂神眞際₁。求₂法道邦₁。先請₂業者偏執₁律儀₁。後研₂精者更傳₁圓戒₁。猶如₂前途覆₁車而未₂皈₁。晚進指₂南而必達₁。乃至殊恨保執者自謂。除₂非小律儀₁。更無₂大乘戒₁。遂毀₂梵網宗₁以爲₂沙彌宗₁。貶₂三聚敎₁以爲₂非僧敎₁。悲哉知₂其一₁而未₂知₁其二₁。乃至我大師圓仁。博窺₂三權之膏肓₁。新増₂一實之脂粉₁。

とぞかゝせ給けれ。

貞觀十二年の事にもや。春の頃。都良香の家に人々弓射ける所へ行あひ玉ひたりければ。人人思ひけるは。此君は戸ぼそをとぢ。しきみを出ずして。學問のこうをこそつみ給へば。弓の本末も知給はじとおもひて。心みに御弓射させ給てんやと申玉ひければ。弓場に立出て。弓に矢をさしはげて。引わたし給ひたる御質。養由がひぢつき斯や有けむと。めもあやにぞ見奉りける。御すがたのみならず。はなち給ふにひとつもはづれざりければ。都良香より始て。人々おどろきあざみ申けり。やがて其年三月廿三日にや。叡東しましまし〳〵けるとかや。

其年の春。都良香羅生門を通りけるに。春風唆に麴塵糸を亂せる柳の家々の垣根ごとにみえければ。氣霽風梳₂新柳髮₁と詠じたりけれども。次の句をば案じ煩たりけるに。羅生門の上より大にしはがれたる聲にて。氷消浪洗₂舊苔鬚₁

とぞ付たりける。良香身の毛も立ておそろしかりけれども。さすがに嬉しくて。急ぎ菅家に參て良香こそ羅生門にて詩作りたれと申て。我物がほに氷消の句をも申つゞけたりければ。菅丞相うち笑せ給ひて。あはれ人の物はほしげにおはするかな。上の句こそ良香の詞とも覺ゆれ。下の句においては。鬼神の次たる者哉。とのは賢才の士にはおはせず。矯傍ある人にておはしけるこそあさましけれと仰られければ。良香餘に心うくはづかしくて。顔より火の燃出たるやうにこそおぼえけれ。それよりしてぞ。菅丞相は神に通じ給へりとは人しりたりけり。

寛平六年長月の頃。門徒の人々貴も賤も吉祥院に集りて。五十の御年のよろこびの會臨せしめけるとき。法會の庭のおもてに。翁のわらぐつはゞきしたるが。願文に砂金をとりそへて。やう／＼あゆみよりて堂前の案上にをきて。いふ事もなく急ぎさりぬ。あやしと思ひてひらきたりければ。

傳聞。菅家門客共賀二知命之年一。弟子雖レ削二跡人間一無レ名世上一尙數記二淳敎之風一。多改二昏昧之過一。古人無（有イ）レ言。無二德不一レ報。無二言不一レ酬。深感二彼義一。欲レ罷不レ能。故福田地捨二此沙金一。金以表二中誠之不一レ輕。沙以祈二上壽之無一レ涯。莫レ疑二其人一。可レ求二其志一。遠居二北闕之以北一。遙贈二南山一和南。

とこそかゝれたりけれ。少僧都勝延。導師にて讃歎しき。忝も天子の修し給ひけるにや。希代の勝事とぞ。

富樓那の辯舌をのべ給ひけるにや。同七年三月廿三日の事にや。延喜聖王東宮におはしけるに。令旨を下されて曰。我きく。唐士には一日に百首の詩を作りたる人有。汝才智並びな

くして七歩の跡をつげり。しからば一時の内に十首の詩をつくらせらるべしとて。題をつかはされたりしかば。酉の時より戌の始にぞ作り奉り給ひし。

送レ春不レ用レ動二舟車一。唯別三殘鶯與二落花一。
若使三韶光知二我意一。今宵旅宿在二詩家一。

是も其内の句也。又次の年同く令旨を承て。二時の内に廿首の詩を作りてまいらせ給ひければ。昔も今もかゝる事なしとのゝしりあひける。又同九年六月かとよ。大納言になり給ひ。やがて大將の宣旨下りしを。三度迄辭し申させ給ひしかども。ゆるされざりき。其年の七月にぞ延喜のみかど御位につかせ給ひしかば。万機を攝籙し給ひけるとかや。

昌泰二年二月に右大臣にならせ給ふ。同三年かとよ。祖父三位淸公。親父相公是善などの家集幷に我文章廿卷もらさず天覽にそなへ給ひし。叡感の餘りに詩をぞつくらせ給ひける。

門風自レ古是儒林。今日文華皆悉金。
唯詠一聯和二氣味一。況連二三代一飽二淸吟一。
琢磨寒玉聲々麗。裁製餘霞句々侵。
更有三菅家勝二白様一。從レ玆抛却匣塵深。

或時陣座にて左のおとゞ世をまつりごたせ給ふ間。非道なる事を仰られければ。さすがにやんごとなくて。切にし給ふ事をいかゞはと覺して。此おとゞのし給ふ事なれば。不便なりとみれど。いかゞすべきとなげき給ひけるを。なにがしの史が。事にも侍らず。かまへて彼御事をとゞめ侍らんと申ければ。いと有間敷事。いかにしてなどの給はせけるを。たゞ御覽ぜよとて。座につきて事きびしくさだめのゝしり給ふに。此史文刺に文さして。いらなく振舞て。此おとゞに奉るとて。たかやかにならして侍けるに。左のおとゞ。文もえとらず。手わなゝき

て。やがて笑ひて。けふは無術。右のおとゞにまかせ申すとだにもいひやり給はざりければ。それにこそ右のおとゞ御心のまゝにまつりごち給ひけれ。笑てたゝせ給ぬれば。頗事もみだれけるとかや。さてこそかやうなりけめ。

同三年正月三日。朱雀院に行幸有て。御門法皇と御物語のついでに。密事どもありき。左右大臣ともに天下のまつりごとをするこそさだめて敷々の事あらん。一人をとゞめられたらばよかりぬべしとて。叡慮をめぐらし給ふに。左大臣は大織冠九代の孫。昭宣公の一男后宮の御せうとといへば。重代攝政高貴の人なれど。御年卅にだにもたり給はず。身のざえ心のをきてなどの右大臣には及ぶべくもおはせずをとり給へり。菅丞相は重代執政にあらねども。渭水の流をくみ。商山の風をあふぐ。賢をえらび德を貴は。執政此人に當り給へり。胡廣累世之農夫也。伯始致ニ位公相ー。黃憲牛醫之胤子也。叔度動ニ[名動イ]名京師ー。かるが故に右大臣を御前に召て執行べしと仰下されけれど。しきりに辭し申させ給ひけれども。さらにゆるさゞりけり。左大臣此氣色を見給て。座せきを立て陣座へ退き給ひしに。唯今の召こそ臣下あやしみをなしつべきとて。春生柳眼中と云詩の題を出されて。召のむね是也。各詩を奉るべしと仰下されければ。左大臣もかへり參りて。詩宴に攝[扱りせ歟]ら給ひしが。其日例祿のうへに。兩皇幷后宮の御衣をぬぎて。右大臣にかづけ給ひけり。左大臣の氣色例にたがひてぞ侍ける。偖此事密儀なりといへども。世にもれきこえ侍りき。左大臣ねん頃に無實の讒奏をかまへ。光卿。定國卿。菅根朝臣。もろともに僞て勅定と稱して。陰陽寮の官人に種々の珍寶をあたへ。其衆をまつり。皇域の八方に山野をしめ。厭術の雜寶をう

づみ給ひけり。されども菅丞相咒咀さらにおひ給はずといへども。御門御年十六七ばかりにや。いときなくおはしますべきほどなれば。仁流秋津洲の外。恵茂筑波山之陰。紫霄之上星位靜也。蒼海之中浪聲和也。思はざりき。同四年正月廿九日。左大臣讒言によりて。太宰權帥にうつされて。流罪の宣旨下べしとは。悲のあまりにたへずして。卅一字をつらねて法皇にぞ奉り給ひし。

なかれ行我身みくつとなりぬとも
君しからみと成てとゝめよ

法皇此哥を御覽じて。御涙にむせびつゝ。御門も我子也。申さんになどかかなはざらんと思食て。十善の御あしに泥をふませ給ふて。上西門より豊樂院眞言院打すぎて。清涼殿に近づきて。かくと申せと仰られけれども。菅根卿。昔庚申の御遊につらをうたれまいらせける恨ふかくして奏し申さゞりければ。大はのむくの木をうらめしく覺して。夕陽西にかたぶきければ。御泪にくれてぞむなしくかへらせおはしましける。つゐに宣旨おもくして。男女の御子廿三人男子四人四方にながされ給ひき。おとなしくおはせし姫君は京にとゞめをき。いときなき君達は。みな具しまいらせて出させ王ひける。紅梅殿に愛せさせ給ひける梅を御覽じて。

こちふかはにほひをこせよ梅のはな
あるしなしとて春を忘るな

梅のはなぬしをわすれぬ物ならは
吹こん風そことつてもせん

かやうの御歌ぞおほくかきとゞめ給ひける。此御歌故にや。梅は筑紫へ飛て參りけると申侍めれば。此間の哀さ。かき盡すべからず。生涯はさだまれる地なし。運命は皇天にあり。

おもはざりき。大臣の大將より太宰權帥にうつされ。輔胤阿衡の貴名あらためて。配流左遷のつたなき名をながすべしとは。承和四年に生れ。仁明文德の御宇にはいときなくおはしき。貞觀より五代の御門につかへ。騄駬の馬に乘。鳳輿の御さきにうち給ひしに。あらぬさまに西都におもむき給ひてん。いかばかりか覺しけむ。生死無常まのあたりにさとられて。泪を万里の波浪にそへ。一舟の愁吟によす。いかなる宿業にひかれて旅の空にたゞよひ。三峽五湖の浪の上の風景に獨心をすまし。吳坂楚嶺の月の前に膽坐猶涙にくもる。しかじ掌を合せて佛道に歸依し。心をめぐらして罪業を厭離せむには。三世の諸佛あはれみをたれ。一乘妙典後世をたすけ給へとぞ仰られける。宿習にひかれて。樂天北窓三友の詩をおもひて作らせ玉ひける。廿八韻の詩を聞にぞ。御心のうち哀におぼゆれ。

自從勅使驅將去。父子一時五處離。
口不能言眼中血。俯仰天神與地祇。
東行西行雲渺々。二月三月日遲々。
重關警固知聞斷。單寢辛酸夢見稀。
山河邈矣隨行隔。風景黯然在路移。
平到謫處誰與食。生及秋風定無衣。
古之三友一生樂。今之三友一生悲。

是其内の七韻にて侍り。廿八韻は殊に腸もたえぬべくぞ覺ゆる。都もとをく成行ければ。こころぼそくやおぼしめしけむ。北の方へ斯ぞ申させ給ひける。

君かすむやとの木すゑをゆく／＼も
　かくるゝまてにかへりみしかや

これを御覽じて。血の涙をながさせ給ひけるこそことはりとおぼゆれ。又茅屋のうちに雁がねの聞えければ。斯ぞつくらせ給ひける。

我爲遷客汝來賓。　共是蕭々旅漂身。
欹枕思量皈去日。　我知何歳汝明春。

又御心のうちにおもはせ給ける。

離家三四月。　落涙百千行。
万事皆如夢。　時々仰彼蒼。

此御作は御口の外へ出し給はざりけるを。唐土にきこえ人々詠じもてあそびけるこそ不思議に侍れ。又筑紫にて。中一年おはしましけるに。折につけ物にそへつゝ。あはれなる事のみ有ける中に。けぶりのたちけるを御覧じて。

夕されは野にも山にもたつけふり
なけきよりこそもえ増りけれ

雨のふりけるに。

あめのしたのかるゝ人のなけれはや
きてしぬれ衣ひるよしもなき

北野縁起中

さても去年の九月十日。禁中にて宴ありしに。正三位右大臣の大將にて。榮家は菊と共にぞみえし。

君富春秋臣漸老。　恩無涯岸報猶遲。

と作らせ給ひしかば。叡感のあまりに。御衣をかづけさせ給ひしを。筑紫までもたせ玉ひて。御かたみに御覧じける。次の年九月十日。去年の今日おぼし出てつくらせ給ひける御作こそ哀におぼゆれ。

去年今夜侍清涼。　秋思詩篇獨斷腸。
恩賜御衣今在此。　捧持毎日拜餘香。

誠に菅家の御作は。心のおよぶ所にあらずと申あひ侍。

都府樓纔看瓦色。　觀音寺只聽鐘聲。

といふ御詩は。白居易が遺愛寺鐘欹枕聽とい

ふ詩にはまさりたるとぞ申侍る。
昌泰四年八月より西府にて作せ給ひたりける御詩をあつめて。後集となづけて。延喜三年正月の頃やう〳〵御心神例にたがひまし〳〵し時。中納言長谷雄卿のもとへ贈りつかはし給〔るこれをひらき見て天に仰ぎ地にふして泣かなしみ給けるイ〕ひけり。此後集の中に哀にきこえしは。九月十三夜。皓月に御心をすまして作らせ給ひし。

黄萎顏色白頭霜。況復千餘里外投。
昔被二榮花一簪組縛。今爲二貶謫一草萊囚。
月光似レ鏡無レ明レ罪。風氣如レ刀不レ破レ愁。
隨見隨聞皆慘慄。此秋獨作二我身秋一。

鎭西におはしましける時。御身に罪なきよし祭文を作らせ給ふて。高山にのぼりて。七ケ日天道に訴申させ給ひける。祭文やうやく飛昇て雲を分て入にけり。梵天までもいたりぬらんとぞ覺し。昔釋迦菩薩底沙佛の御もとにて。七日七夜足の指をつまだてゝ。

天地此界多聞室。逝宮天處十方無。
丈夫牛王大沙門。尋地山林遍無等。

と讃歎し給ひしかば。九劫を越て彌勒に先達て成道し給ひしぞかし。菅丞相七日七夜蒼天にあふぎて。身をくだき心をつくし給ひしかば。あらたに天滿大自在天神とぞならせ給ひける。
延喜三年二月廿五日にぞ十二因緣にやどされたる五陰のすがたをすてつとしめし給ひける。昔釋尊入滅二月十五日のかなしみには。五十二類血の涙をながし。今宰府薨逝二月廿五日の別には。六十餘州愁歎をそふ。十號世尊も非滅現滅には闍維の烟にむせばせ給ひし事なれば。づゐにおさめ奉らんとぞしける。儲筑前國四堂のほとりに御墓所を點じおさめ奉らむとしける程に。御車たちまちにとゞまりてはたらかず。是によりて其所をしめて御

墓所とす。今の安樂寺これなり。
其後いくほどをへずして。延暦寺第十三座主法性房尊意贈僧正。其時御年四十ばかりにやおはしけん。月日は慥に覺えず。夜ふけ人しづまり。〔ほどにイ〕四明の山のうへ。九識の窓のうち。十乗の床のほとりに智水をたゝへて。三密の壇の前に觀月をすましおはしけるに。思ひかけず戻の妻戸をほと／＼とたゝく音のしければ。おしあけて見給ふに。菅丞相の化來してましましける也。うやまひ畏りて持佛堂へ入奉りて。何事にか候と申させ給へば。菅丞相仰られけるは。我すでに梵釋のゆるされを蒙りて。神祇のいさめもあるまじ。花洛へ入て鳳城にちかづき。愁をものべ。あだをも報ぜむとおもふに。禪室ばかりぞ法驗をもほどこしておさえ給ふべき。たとひ宣旨なりとも。あなかしこ請申させ玉ふ事あるべからず。年來師壇の契り是にありと仰られけるに。法性房申させ給ふやう。師壇のむつびは一世のちぎりにあらず。たとひ眼をぬかる〔るイ〕とも。なんぞいたまんや。但天下は皆王土也。此地にすみながら。宣旨三度に及ばゝいかゞと申給に。御氣色かはらせ給。御喉もぞかはかせ給とて。〔柘榴をイ〕すゝめまいらせられた〔イ无〕りける柘榴を妻戸に吐かけて出させ給ふに。其柘榴ほ〔の印をむすびてかけらイ〕むらと成てもえつきたりけるを。法性房灑水をせられければ火消にけり。其妻戸いまだ本房にあり。世の末の不思議なり。
其後やがて雷電霹靂して。世中くれふたがりて。いかづちの聲におほくの人膽心をくだきてしにまどひけり。清涼殿のうちには本院のお〔もイ〕とゞ一人太刀をぬきて。朝につかへ給ひしに・わがつぎにこそおはせしか。神と成給ふとも。などか我にところをき給はざらんとて立出玉ひけり。斯て御門おそれ思食て。法性房僧正の

もとへ宣旨三度までくだりしかば。參り給ひしに。鴨川の洪水去のきて陸地のごとくに成てとをり給ひしこそ法驗もめでたく王位もおそろしく侍しか。斯てやう〳〵にこしらへ奉りて。しばしはしづまり給ひしかども。つゐにはかなはざりけり。延喜八年十月の頃にや。菅根卿はあらたにけころされにけり。同九年三月に本院のおとゞなやみ給ふ。さま〴〵の御祈もしるしなし。耆域が方藥なむれどもしるしなし。安賀二家の秘術いたづらに祭物を費す。春日大明神もすて給ひけるかとぞ覺え給ける。されば菅丞相の御靈仇なりとさとりぬ。されども法驗ばかりやたすけ給とて。玄昭律師の弟子。善相公の胤子淨藏こそ年いまだはたちにもたらねども。驗德いたりてとうとく。顯密修學群にこえ。種々の才藝世にならびなしとて。四月四日にや請じよせていのらせ玉ひける。その日午の時ばかりに。善相公とぶらひに參給ひけるに。おとゞの左右の耳より青龍頭をさし出して。善相公に言示しけるやう。我申文をさゝげて。帝釋に祈申に。早くことはりを蒙りて怨敵を報ぜんとするに。尊閣の息淨藏たちまちに我を降伏せんとす。制せられよと示し給ふ。恐畏て此由を淨藏に告て。やがて出給にけり。其時本院のおとゞ頓て甍じ給ぬ。御年三十九とぞ承る。御娘の女御も失給ぬ。御孫の春宮も失給ひにき。一男八條大將保忠も若て失給にけり。それぞかし病つき給ひて。驗者藥師經の所謂宮毘羅大將とうちあげてよみけるを聞給て。我をくびらんとよむなりとおもひて。臆病に又目をだにもみあげず絶入給にき。三男敦忠中納言又失給にき。右大臣顯忠のみぞ二位大臣までならせ玉ひける。それは菅丞相の御事をふかく恐給ひて。晝夜

に念じまいらせてぞおはしける。かの家の人なれど。佛道に入給ふのみぞ僧都法印僧正にも成給ひける。三井寺の心譽。興福寺の快公。石藏の文慶などなり。又此末のいみじかりしは。敦忠三男兵衞佐佐理。一家のありさまを思ひつゞ〔らねイ〕けて。世中あぢきなくおぼして。出家入道して往生し給けるこそかしこくおぼえ侍れ。小松天皇御孫延喜御門には御從弟にて右大弁忠と申人おはしけり。延喜廿年四月の頃頓死して三日といふによみがへり給て人々に告示しけるは。我を具して內裏へ參れと申ければ。人々ものにくるふ〔かイ〕・と思ひけり。されども其こと葉ねんごろなりければ。子息信明信孝二人たすけられて。內裏へ參り此由を奏し申ければ。御門おどろかせ給ひて。出むかはせ玉ひしに。奏〔申イ〕し給ふやう。公忠頓死して炎魔王宮に參りて。門前にて・み〔しはしイ〕候しほどに。たけ壹丈あまり

なる人。束帶うるはしくさうぞきて。申文を捧て祈〔訴イ〕申さるゝ事を耳をそばだてゝうけ給りしかば。延喜の御門のしわざ尤やすからずと。やう〳〵に言葉を盡して祈〔うたへイ〕給ふにぞ。菅丞相〔のみイ〕・とは悟侍りし。其時あけや紫まつひたる冥官卅人ばかり並び居たるが。第二座に居たる人少し笑て。延喜帝こそ頗荒凉なれ。もし改元あらばいかにと申され候しなりと奏し申て出給ひにき。御門是をきこしめして。おそれ思食事限なし。さて四月廿一日。菅丞相をもとのごとく右大臣として。一〔ニイ〕階をくはへて正二位を贈〔巳イ〕たまひけり。其日昌泰四年正月廿五日の宣旨を・やきすてられにけり・五月廿〔ニイ〕五日に延喜をあらためて延長となされき。

又菅丞相清凉殿に化現して龍顏にまみえ奉りて。あやまたざるよしをのべ申給ひける時。御門おそれ給ひて〔イ无〕こしらへ申給ふ事ども有け

り。

延長八年六月廿六日清涼殿の坤に雷火出來て。大納言清貫卿のうへのきぬに火つきてふしまろび。右中弁希世朝臣はかほやけてたふれふし。是茂朝臣は弓を取て行ほどに立所にけころさる。近衛忠包紀蔭連等。ほのほに咽て悶絶す。是天滿大自在天神十六万八千の眷屬のうちの。第三使者〔役イ〕火雷火風毒王のしわざなりとぞ。其日毒氣始て御門の御身に入て。玉躰やう〳〵例にたがひまし〳〵ければ。九月廿二日御位を第十一皇子にゆづりまいらせさせ給ふ。朱雀院天皇の御事なり。さて九月廿九日御年四十六にて御出家侍りて。則崩御ならせ給ひけり。

其頃ほひ金峯山に日藏上人と申人。金剛藏王の行導にて三界六道みぬ所もなかりけり。承平四年四月十六日より笙の岩屋にこもりておこなひけるほどに。八月朔日午の刻〔イど〕に頓死して。十三日にぞよみがへり給ひける。其ほど金剛藏王の善行方〔所イ〕便にて。天滿大自在天神のおはします所より始て。兜率內院炎魔王宮以下六道を見廻るに。地獄と兜率との苦樂のありさま。聖教に說く所露もたがはず。天滿天神を〔にイ〕ば太政威德天とぞ申ける。みゆきのよそほひ。國王にも勝れたり。御すがたなど申さんにつけておそれあり。待從眷屬〔のイ〕。異類異形かぞへつくすべからず。或金剛力士の如く。或は雷神鬼王の如く。或夜叉羅刹の如くなり。御住所は極樂國土の莊嚴の如し。池〔のイ〕中に嶋有。花鳥樹木阿彌陀經にとけるにことならず。嶋中に境有。其上に蓮花有。花の上に寶塔を安せり。其內に金地の法花經まします。東西に兩部の曼陀羅をかけたり。其北一里ばかりをさりて大城あり。莊嚴美麗にして光明照曜す。是太政威德天の

御住所也。日藏をめして仰られけるは。我始は思ひき。流れしなみだをたゝへて。日本國をひたして〔イ无〕大海となして。八十年を經て後。國土を建立して我住家とせんとおもひしかども。佛教ひろまれる國なり。我教法を愛する心ふかし。仍顯密聖教の力にて昔の怨心十分が一はやすまりぬ。其上に往古〔イ无〕如來法身大士悲願力の故に。名を明神にかはりて。國々にみち給へるが。各智力を盡して我をすかしなだめたまへば。巨害をいたさゞる也。但我眷屬十六万八千の惡神等。所にしたがひて損害をいたす事は。我なをとゞめがたき也。日藏此事を承りて畏て申やう。日本國土〔イ无〕には火雷天神と申てたうとくおもんじ奉る事十號世尊の如し。なんぞ惡心おはしますべきと申給へば。太政威德仰られけるは。たれ人か我を尊重せんや。國こぞりて我怨敵なり。佛にならざらんほどは。いづれの時か此恨を忘るべきや。但人信心ありて我形像をあらはし。我名號をとなへて。態に祈こふ事あらば。我感應をたれん事。響の聲にしたがふごとくならんとぞしめし給ひける。

又日藏閻羅王界にいたる。王の使を相具して諸の大地獄をみる。一の地獄の中に鐵窟苦所といふ所あり。それに四人の罪人あり。其形黑き炭の如し。一人は肩に物をおほへり。三人ははだかにてあかき灰の上にうづくまりゐて悲泣嗚咽せり。王使をしていはく。肩をかくせるは延喜の帝。今三人は臣下也。君も臣もおなじ苦を請給ふ也。御門日藏をまねき給ふ。日藏畏て承ければ。冥途には罪なきを主とす。我をうやまふ事なかれ。我は父法皇の御心をたがへ。無實によりて菅丞相を流し侍りし。かの罪によりて此苦をうく。汝娑婆に歸りて我皇子に此苦をたすけ給へと申べしとぞ仰られける。

我生前に五の罪あり。皆是太政威德天の御事より出たり。一には父法皇を嶮路にあゆませ奉て心神困苦せしめ申たりし事。二には我高殿に安座して法皇を地にすへ奉し事。三には賢臣を罪なきに罪をあたへし事。四には久しく國位をむさぼりてあまたの佛法をほろぼし事。五には我身の怨敵の故に他の衆生を損害せし事。是等の罪によりて先苦[多イ]をうくる事かくのごとし。又善を修する事多かりき。彼苦をつくのひて後。化樂天に生ずべしとぞ仰られける。日藏上人よみがへりて此よしを委く御門に奏し申ければ。種々の善根をいとなみおはしましける。およそ國土の災變はみな天神の御眷屬の御しわざ也とぞ藏王は仰られける。上人は穢惡の住居をすてゝ。淨土の蓮にぞ生れ給ひける。

北野緣起下

天慶五年七月。西京七條に住せし賤女にあや子といひける者に託宣まし〳〵て。我昔世に有し時。右近の馬場にあそぶ事多年也。都のほとりの閑勝の地此所にしくはなし。我非道の罪を蒙りて西海の波にしづむといへども。ひそかにかの所にゆきてあそぶ時ばかりこそすこし心もなぐさめ。ほこらをかまへて立よるたよりをえせしめよと託宣ありけれども。身のほどのいやしさにはゞかりて。社をもつくり奉らで。柴の廬にいがきをむすびて五年の間あがめ奉りけるに。天慶九年六月九日にぞ北野にはうつし奉りける。

同九年近江國比良宮にして。禰宜三和よしたね男子七歲なるに託宣ありき。我物具は是に來[りイ]し始に置ける也。佛舍利玉帶銀つくりの劒

笏鏡。老松福部に持せたる〔りイ〕。是等は筑紫より我供に來れる也。此二人は甚不調の者ぞ。心ゆるしなせそ。我居たる左右にある也。我居たゝん所には。老松して松の種をまかするなり。我昔大臣たりしとき。夢に松三本生て則おれぬとみしは。流さるべき相也。我嗔恚のほむら天に滿て。諸鬼神十万五千よろづの災變をなす。みな是等が所爲也。不信ならむ者をば蹴ころし。正直ならん者をば護あはれむべし。みな人加茂八幡とのみいひて。我をば物ともせずおもへども。いづれの神々も我をばえをしふせ給はじ。我筑紫にありし時。佛天に仰ぎてちかひ給ふ〔せしやうイ〕。露命消なば當生に我ごとく思ざる外に災にあ〔はイ〕たらん人。すべてわびかなしまむともがらをたすけすくひ。人を損ぜん者をばたゞす身とならむと誓つゝ。思ひのごとく成給ふ。さても右近の馬場こそ興宴の地なれ。我かのほとりにうつるべし。そのほとりに松をうふべしとぞ仰られける。又此界に有しとき〔こそイ〕。公事をつとめて佛法を申とゞめたる事ありき。懺悔のために法花三昧堂をたてゝ。時ごとに大法〔のイ〕・螺をふかば。いかにうれしからん。又後集にのせられたる。離家三四月といふ詩と。鴈足粘將疑繋帛。烏頭點着憶皈家。此句を誦せん輩いかにうれしからんとて。此わらははさめにけり。

良種右近の馬場にゆきむかひ〔てイ〕。朝日寺住僧寂鎮法儀鎮世等に此託宣の旨をかたり。子細を相議する程に。一夜のうちに松數千本生侍りき。忽に林をなす。神靈眼前にあらはれ。みる人涙をながす。僧寂鎮と狩弘宗と。文子が伴〔類イ〕る寺主滿增星河秋長と力を合せて。叢祠の路をみがき。松壇の風をあふぎけるとかや。其後靈驗殊勝に賞罰揭焉也。天暦元年より天德にい

たる迄十四年の間。御殿を作り改らるゝ事五ヶ度也。天德三年に九條右大臣房舍をつくり。寳物を備られけり。其故にや。九條殿御子孫攝錄もたゆる事なく。皇胤も盡給はぬは。菅丞相の筑紫へくだり給ひしとき。貞信公は本院のおとゞの御弟にて右大弁にておはしけるが。このかみ謀計にもともなはず。菅丞相とひとつにて。消息をかよはして。隔る御心おはしまさず。斯念頃に契をむすびて。殊に御一家をまもりはごくみ給ふゆへに。かの御子孫繁昌し給ふとぞ覺〔えけイ〕侍る。

圓融院の御宇。貞元元年より天元五年にいたるまで七ヶ年のうちに。三度まで內裏燒亡有けり。造營の時。番匠うら板にかんなかきみがきて。次のあした參り見ければ。上にあさ〳〵と虫のくひたる跡有。是をみれば卅一字あり。

つくるとも又もやけなん菅原や
むねのいたまのあはむかぎりは

一條院の御宇に從一位左大臣を贈りたりき〔參り給ひイ〕。かの位記詔書等勅使菅原幹正。正曆四年八月十九日太宰府に下り着て。次〔のイ〕日安樂寺に參りて。御位記の箱を案上にをきて。再拜してよみあげけるに。一の絶句の詩化現してありしぞ第一の不思議に侍る。

忽驚朝使披二荊棘一。官品高加拜二感成一。
雖レ悅三仁恩覃二遂窟一。但羞レ存レ沒二左遷名一。

此正文は外記局におさめられて今に侍り。道風がふでに少も違ふ事なし。弘法大師の菅丞相は達世の身也。小野道風は我順世の身なりと示し給ひけるも是にてぞ誠と覺え侍る。今度勅答なを神慮心よからずと群議ありて。同五年正一位太政大臣を贈り奉られける。其度は神慮たいらぎに〔ましくけるイ〕けるにや。一の絶句の詩を託宣し給ひけり。

昨爲北闕被悲士。今作西都雪耻尸。
生恨死歡其我奈。今須望足護皇基。

此詩は一度も誦せん輩を毎日に七度守護せむとぞちかひまし〳〵けるとうけ給はる。

待賢門院の后宮にておはしましけるとき。女房の絹の失たりけるをあしざまにいはれける。女房北野の社にこもりて歌をよみてまいらせける。

あら人神になりしむかしを
おもひき〔田イ〕やなき名たつ身はうかりきと

とよみたりければ。其日やがてしきしまといふはしたもの盗たりけるが。手づからいだきて鳥羽院の御前にてくるひける。

治部卿通俊の子に世尊寺の阿闍梨仁俊とてたうとき人おはしき。ある女房。かの僧は女心有由を鳥羽院に讒言申たりけるを。阿闍梨安からずおもひて。北野の社に籠て斯ぞ讀ける。

あはれとも神かみならはおもふらん
人こそ人のみちはたつとも

とよみたりけるとき。かの女房くれなゐのはかまばかりをきて。手に錫杖をふりて。仁俊にそら言〔ぞイ〕・いひつけたるむくひよといひくるひければ。院宣にて北野へ仁俊を召につかはして參たりければ。護身をしたまふ程にやがてさめにけり。仁俊にはうす墨といふ御馬をなむひかれ。其上に種々の祿をぞたまひける。

仁和寺に阿闍梨何某といふもの有けり。北野西京の旅所におはしましける時。車に乘ながら御前を通りける程に。其牛俄にたふれふして死ぬ。阿闍梨かちより逃にけれども。頓て病つきて一二年なやみけり。さて北野にたい狀申などして命いきたりけり。かやうの事どもかずへつくすべからず。只少〔々イ〕・を書顯す也。八月の祭も村上の御時より初りて。公家の御沙汰

として大藏省のつとめとせり。神威嚴重なり。儀式希代なり。

延久二年九月の頃。仁和寺に池上と云所に僧西念と申者年五十計にて北野に百日籠て終日終夜祈請する事有けり。人々あやしみて無實などおひたるにやと申あひけるほどに。九十三日と申曉。師匠と賴たる僧をよびてなくなく申けるは。西念すでに年來の〔本イ〕望かなひて候。此正月熊野〔那イ〕名智山に參て百日籠。臨終正念往生極樂の定日いづれの日としめし給へと祈請し侍りし夜の夢に。御戸を開て〔七十餘のイ〕老僧の額の波きびしく〔頭イ〕首の霜さえて。けだかき〔すがたイ〕御形にて仰らるゝ樣。汝が申所の往生の日。我心にはからひがたし。北野の宮に參りて祈申べしと示現を蒙りて侍りしかば。頓て參詣して祈り侍る程に。此曉まどろみて侍つるに。夢にもあらずうつゝともわかず。御殿より直衣の袖ばかりさし出して。汝が望申事たやすからずといへども。心ざし念〔懇イ〕頃也。來年二月の彼岸の結願の日の朝を待〔期すイ〕べし。そのほどおもひわするゝ事なく念佛すべし。いか成人も心ざしをいたせば往生はやすき事なり共。臨終に魔緣きほひてとぐる事難しと仰られつとかたりてなくなく出にけり。此僧次の年の件の日時行てみければ。思ひのごとく臨終正念にして。異香室にみちて。紫雲空にたなびきて往生をぞ遂にけ〔るイ〕り。

承保二年の頃にや。西七條にまづしき銅細工人の有〔ありイ〕けり。女子二人持て侍りけり。十四十二ばかりにて母煩ひけるに。此子共を念頃にいとおしく思て。夫に返すぐ〳〵申置ける樣。あなかしこ〳〵。此子共のありつかむ程まゝ母に見せ給ふなと。なく〳〵申てはかなく成〔もイ〕にけり。おとこ契り置し事を忘れて。幾程なく妻を

なんまうけたりけり。今もむかしもなさぬ中のならひにて。此娘をあながちににくみけり。四五日物もくはせずして命をたゝんとぞしける。此繼母がけしきをうらめしくおもひて。姉妹北野に參りて籠りけり。晝夜淚をながして。天神たすけさせ給へと愁申て。失にし母に孝養報恩をもせぬ身ならば。命をめせと申けり。去程に御託宣あらたにて。參籠したりける播磨守有忠おどろきて。姉を呼寄て此故をとひ聞て。頓てとりておきて妻にしてけり。妹は宮づかへせさせけるほどに。宮うはまいらせてめでたくさかへて。父母の孝養思ふさまにぞしける。御託宣にも孝養の心ざしふかきによりて。感應ありて。我守りはぐゝむべしとぞ仰られける。凡天神に心ざしをいたし。步をはこばんともがらは。いか成のぞみかかむなしかるべき。

天神の御利生によりて。此娘〔ヌイ〕播磨守の妻と成て思ひのまゝにさかへて。父母のためにだう〔てイ〕塔をたて。色々の善を修して。後は出家し侍り。發心のおもひに住して。往生の素懷をとげにけり。

右北野宮緣起得飛鳥井一位雅章卿所筆本書以一本及梅城錄比挍了

明治十八年一月十六日以青木万藏藏本一校了中卷ノ初ニ淸凉殿ニ落雷ノ圖アリ　忠韶

兩聖記

昔無準和尚徑山に住し給ける時。北野天滿天神ある夜半ばかりに日本の菅丞相と名のりて。受衣しまし〳〵けるよし申傳へたり。此事やまともろこしの傳記にかきのせぬ事なるを。をろかなる身のあさき心にては。さること有べしとさだめむ事はゞかりおほし。又このことはりすべて有べからずといはむ事。その咎をまねきぬべし。聖神仙昇の後より無準の在世の比までをかぞふるに。三もゝちあまりの星霜をかさねたり。またから國わが日の本のさかひをことにせること。はるかなる八重のしほぢをへだてゝ。雲の濤煙の浪いく千里と云ことをしらず。またかしこにかたちをあらはし給けむこと。凡情にておしはからば。かたがたにつけてうたがひありぬべき事ぞかし。しかはあれど。一心法界に遠近のへだてなし。千万劫の轉變又卽今のうちをいでず。いはむや聖神は觀自在の靈應にましませば。本覺の光をやはらげてしばらく閻浮の塵に交りたまへり。普門示現の應化いづくか圓通の境界にあらざらむ。不生不滅のうちに。又古往今來の別有べからず。たとひ慥なる記文なくとも。しゐてうたがひをなすべからざることにや。こゝに吳竹のふしみの里とかや。代々の御門おほむくらゐをさらせ給て。紫の雲の上をみどりの蘿の洞に住かへさせまします事たびかさなりぬ。ちか比又宇多花山のふかき御跡にもこえて。少林のおく曹溪の源まで深くたづねきはめさせ給ふふた代の御事のかたじけなさは申もさらなり。かの仙洞にひきはなれて。一宇をたてられてうつり住まし〳〵し所を藏光菴となづけて。光かくれさせ給し後より御門徒の

尊宿いにしへのみことのりをたがへず。まもりおこなひ給めり。今の幽林主翁すなはち其人になむおはす。明徳の比。同伴の僧月溪の夢に。おほきなる嶋の中に一の壇あり。壇の上に寶塔あり。塔に法華の妙典を安置す。そのかたはらに裝冠盛服して。繪にかける唐人のごとくなる貴人立給へり。誰ならんとおもふところに。虛空に聲ありて。是なむ北野の天滿大自在天神におはしますといふとみえけり。天慶の昔道賢といふ僧。行力勇猛の功により冥助をかりて芳野の藏王權現ならびに北野の天滿天神にまみえたてまつりけり。時ニ天神道賢をいざなひて白馬にのせ給て。飛がごとく數百里を過て。わが御すみか所をみせさせ給ける事。古書にくはしくのせたり。其所の莊嚴の有樣の夢に露かはる事なし。其後應永元年の秋。幽月同門の僧忠菴のかたより天神無準に受衣し給ける御姿を圖したる形象とて幽林に奉れる。月溪これをみるに夢に見奉りし儀貌衣冠にたがふことなし。いと不思議なることになん。幽林感歎のあまり。つら〳〵是を思ひめぐらされけるは。此菴もとより寶塔をたてゝ。中に法華を安じて本尊とす。道賢はうつゝに拜し月溪は夢にみる。塔婆法華これをなし。又もとめざるに彼眞影こゝに降臨しまします。これひとへに祖宗をまもり法道をたすけましますべき神慮にや。緣遇時いたり。機感相應するにこそと。信心いよ〳〵深きによりて。當菴永代の土地神に勸請し奉りて。朝夕の燒香供養。懇誠をつくされけり。かの仙洞につかふまつる人々。此事どもを傳きゝて。和歌を詠じて法樂しけるに。近邊閑居の僧どももをの〳〵志をのべてあつめて一軸をなせり。劣者幽林にまみえ奉る事日淺しといへども。年を忘るまじ

はり。蓋をかたぶけてふかきがごとし。歌をゑいじたまふ。しかのみならず事のおこりを一端しるしつけむやとの嚴命のがれがたきによりて。蕪詞をつらねてやむことをえず。抑天下のことはり有無のふたつをいでず。有と云よりみれば。古あり今あり。我あり人あり。万象歴然として目前をはなるゝ事なし。無といふにつきてみれば。佛なし衆生なし。天地日月山川草木もみな是幻化なり。九流百家四韋五明色々様々にかきをき言傳へたる事。たゞ名字のみ有て實躰なし。はたして有こととやすべき。無事とやいはむ。なんぞたゞ此兩聖相見の事につきて。はじめて眞僞の蹤迹を論ぜむ。無準いかなる人ぞ。聖神いづくにかいます。おなじとやいはむ。ことなりとやいはむ。もし有無の落處をしらば。すなはち兩聖の眞躰を知べし。若しからずば祖師をそしり。神明を慢ずる咎。いかでかこれをまぬかるべきにや。此事をきかむ人こゝにおきて旨を得ば。聖神傳衣の靈意に冥合して。又は幽林皈敬の本意に奉備する事なるべしといふことしかり。

神よなを法をまもりて傳へけり
　三の衣の恨み殘すな

ねかふへき佛の道もすつる身を
　うき世のみとや人のみるらん

　　知足

たえずわが頼みをかくるしるしにや
　こゝに北野の影うつすらん

神もなを天滿光さしそへて
　心の月よくもりあらすな

右兩聖記以扶桑拾薬集校合了

菅神入宋授衣記

天滿天神以徑山傳授之僧伽梨安置西都靈岩神護山光明藏神寺流記。

慧日山東福寺第一世聖一國師。師歲三十四。入大宋國。見徑山佛鑑禪師親侍巾瓶。是則日本四條院嘉禎元年乙未四月。當于宋理宗端平二年也。後七年。以仁治二年辛丑四月廿日。辭佛鑑禪師歸朝。師歲四十。是年七月旦達博多。同月不違横岳山湛慧禪師往日之約遷宰府。横嶽揭勅賜萬年崇福禪寺之額。額者卽佛鑑禪師自書。以與聖一國師之眞蹟也。屬開堂演法。同年臘月十八日。　天滿天神新入崇福方丈。因見聖一國師問禪。尊神昇天後三百卅九年。卽仁治二年也。　國師屢示誨。卽以其夜現徑山參得佛鑑禪師親傳與僧伽梨云々。

密記云。杭州臨安府徑山興聖萬壽禪寺第卅四世特賜佛鑑圓照禪師。諱師範。字無準。一朝天未明。見丈室庭上有一叢之茆草。禪師自謂。昨之夕無此草。今之旦爲甚麼生之乎。于時有神人。隻手擎一枝梅花。突然出來矣。禪師問曰。汝是何人乎。神人無語。唯指庭上茆草。禪師忽謂曰。茆者菅也。卽知扶桑菅姓之神也。神人呈一枝梅於禪師前。胡跪有一首和歌。曰。

唐衣。不織而北野之。神也。袖爾爲持。梅一枝。

忽謂。稟禪師之密旨。覿面悟解。禪師卽付梅花紋僧伽梨示一偈。偈曰。

天下梅花主。扶桑文字祖。這箇正法眼。雲門答曰普。

神人親頂拜僧伽梨幷證偈了。又獻一偈。曰。

手裡梅花頂上囊。不離安樂現南方。徑山衣法親傳授。何用時々仰彼蒼。

是則宋淳祐元年。而日本仁治二年辛丑十二月十八日也。伽梨傳授之後。龜山院文永八年辛未十月望。　尊神現承天禪寺丈室裡。拈出徑山之

傳衣。以告鐵牛心和尙曰。和尙願安此伽梨於一所者。豈不爲悅懌乎。言訖付伽梨於和尙。飄々然淩空而去。于時和尙主承天。親蒙尊神之屬語。以同月廿五日。就于宰府靈岩之左邊。剏一僧宇。以安置尊神付與之伽梨。而爲衣搭。靈岩俗云岩崎。卽尊神第一眷屬御靈大明神之廟所也。鐵牛心和尙誕生之靈地也。又至文永第十癸酉之年。尊神又夢裡告鐵牛和尙曰。吾傳授之伽梨。得和尙之安置。寂以愜襟懷故。每日入此地拜護伽梨云々。而來。名山曰靈岩神護。名寺曰光明藏。諸人皆仰以稱尊。每日影降之靈窟也。誰不恭敬讃歎乎。念々勿生疑。鐵牛心和尙。姓菅氏。誕于靈岩之左邊。卽建長六年甲寅九月旦也。稱聖一國師會裡傑出第一法嗣。嘉曆元年丙寅九月廿四日。於光明藏示寂。按永正八年。自悅叟自懌所撰述　大威德天神參大宋佛鑑受衣記曰。宰府有富家。一夕夢。天神勅曰。擇無染淨侶而一日讀誦蓮華經千部。爲子惠也。覺後巡諭遠近請萬指。而讀誦如願。其夕天神又夢曰。法施可也。其人不可也。願重擇而淨課。富家自思惟焉。近聞。承天長老聞爾大和尙。昨入大宋。深極龍淵之底奧。今歸此土。遠唱龍峰之頂宗。求之必得所謀焉。其以前夢白和尙。和尙曰。爾所求非難也。當求水精念珠一百串也。則持而奉之。和尙懸之室中。燃燭於四隅。設侍坐於中央。一日中讀誦法華一部矣。卽夕神復夢謝富家之法施純一也。翌晨神現形於和尙室中。裹巾奇幅。而袖間挿紅梅一朶。欽謝千部課讀。而求作弟子之禮。和尙曰。吾師存也。不可敢也。則指俾參佛鑑禪師。神領而去矣。卽日再見而曰。我親入佛鑑之室矣。自指腋下衣袋爲證矣。蘊之福昌禪刹剏闢之日。嵒石之罅隙得此像記云。蓋此像記。胃華居之所示也。按應永廿七年庚子。予居相國東藏。入夏後數日偶赴佐々木京極賀州齋。請惟肖和尙。自少林

來與二江西等諸老一對談。肯曰。北野天神參二無準一傳レ衣。或以爲二妄誕一。然佛光禪師室中。八幡神君來請二佛光一。遂來二于此方一。由來天神參二無準一。又何疑矣。蓋此時甲斐武田圖二天神像一。求二洛下諸師賛一。故肯翁有二此論一。又先レ是人傳。天龍冉山徒普宣主。自二筑紫一送二天神畫像一。未レ遑二披見一。投二之壁間一。翌日醫僧眞知客來話。某夢。天神袖二挿梅花一。肘懸二小袋一曰。我參二無準一受衣云々。不レ知二何謂一也。宣驚曰。昨日得二天神像一。便命二侍僧一取來展レ之。則圖樣如二眞所一レ說。二人稱歎不レ已。既而語。心椿庭和尙作レ賛。因述二此事一焉。爾來人多設二此像一也。文安三年丙寅五月十五日。予赴二南禪慈光院故一色七周忌辰齋一。愚極亦來。煎點罷憩二瑞雲庵一。話次及二天神事跡一。愚極細說二來由一。如二此記所一レ載。又曰。福聖乃石屋道場也。石屋弟子鑑叟有道之士也。行化到二勢州一。與二吾同門禮長藏主一邂逅。因說二此事一云々。或記曰。無準禪師與二菅神一相見之后使三人畫二其像一。自筆項上賛曰。菅氏元不レ假二凡胎一。直自二靈山會上一來。五百年間無二識者一。扶桑佛法一枝梅。其時日本承天僧某在二徑山一。乞二其神像一持以歸二本國一上二聖一一云。

天滿宮託宣記

天曆元年丁未三月十二日酉時天滿天神託宣記。近江國比良宮仁天。禰宜神良種か男太郎丸年七歲奈留童仁託天宣久。我レ可レ云事有り。良種等聞ケ。我か像かタチ作るた女。笏は我か昔持シり有り。其たを令レ取与と仰セ給不。良種等申久。何處爾か候良牟土。答仰給久。我物具はと毛此仁來住せし始皆納置り。佛舍利玉帶銀造ノ太刀尺鏡なと毛有り。我カ從者爾老松富部と云フ者二人有り。笏者老松爾持セ。佛舍利者富部爾令レ持タり。是皆筑紫与り我カ共爾來れる者りと毛な若宮ノ前爾小シ高支所爾地下三尺許入天有り。此二人乃やつとはと毛甚不調乃者ソ。心つかひせよ。我カ居たる左右に置れた。不レ言しと思と毛笏仁依天云フ。此年來者像毛無久有つれは。不レ告し天有つるに。老松は久我に隨天成ぬる者也。是奈牟至所にこと松乃種は蒔久。我昔大臣と在し時に。夢爾。松身爾生天。即折ぬと見しな牟者。流さるへき相なりけり。松ハ我像の物也。我レ瞋恚乃身と成りた。其瞋恚の焔天爾滿りた。諸乃雷神鬼は皆我加從類と成天。惣十万五千爾成りた。只我所行乃事は世界乃災難乃事也。帝釋毛一向爾任給りた。其故は。不信乃者世爾多ク成りた。疫癘之事毛於行へと宣は。此我類なな牟所々ニ使爾天令レ行る。今は只不信爾有牟人はを雷公電公等爾仰天。令ニ踏殺一牟。惡瘡不吉物は行める。汝等毛我カ爲爾不

信ならは。子孫ナカヲ絶タチ天牟と須ルソ。阿波禮加久云計ソヤ。世界爾侘ロヒ悲不衆生を見者。何天救牟と耳ノミソ我思フ。筑紫爾有シ程仁。常に佛天を仰天願シ樣者。命終なは當生に如レ我久慮外乃災爾遇牟人。惣天侘悲牟者をは助ケ救比。人於沈損セム者をハ紏ス身と生と願しを如レ思成タリ。我敵は漸ク無ク成たり。今少ク有る。其は我を切爾歸依すれは暫ク免たるなり。我宮を今年造ケルソ喜き。甚面白所也と天。賀茂八幡比叡なと毛常爾坐し給フるソ無レ便つろに。伊と善し。自餘乃神達毛常來坐ナり。か久禮天毛猶狹し。我宮乃體は青松垣白砂を地ニ敷り。背ウシロニハ高山有り。前爾は大濱。背山ハ雷青山。靈地と可レ云也。花の散る春の朝。葉の落る秋の夕。月ノ明ク風涼キ時。憐風情之地や。南大納言乃倘齒會ハ此月ソ爲カシ。此爾天槐林乃枝を攀天韻を作ナサハヤ。我會爾は音樂と論議とを令レ爲與。我近邊爾は更ニ宍鳥殺事なせしめソ。嗔恚彌增天何天災チ與と思心起ル。皆人ハ賀茂八幡と耳云天。我等をハ不レ屑さめり。我ハ憑ム人をは守ムと思心深し。津良支人一人ソ有や。筑紫爾天我居所ニ人を送天祈願し人乃思叶ぬ云トイフ毛。近ク有と毛不レ向メり。又賀茂八幡とノミソ祈める。何の神毛。我をは衣抑し伏給ハし。燒爾燒拂天ム。小童部毛立出めりヤ。去シ月此若宮事世ムト天出ル人爾被レ障天還り來る。仍天可レ申事有を。八端の角乃邊爾まれ。若ハ坊城の邊爾まれ立依天ヤ申ましと宣不。右近の馬庭コソ興宴乃地なれ。我彼乃馬庭乃邊爾移居太利。但玉禮留所にハ可レ生レ松。良種申久。己か身乃上ニ可レ有事。又天下爾可レ有事ト仰せ給へと申ス。我レ何ル事をか者云。事可レ有世間なムめり。汝等ハ何ニ事かハ有む。天下の事ヲコソ事とハ云へ。我此界ニ有し間ニ。公事と毛勤天。佛物をなむ多申止たる。其中に天台乃堂寺の燈分をなむ止タリシ。其罪惣天深シテ。自在の身を〔と歟〕成と毛苦事多カルチ。彼代仁此邊爾法花三昧堂チヤ立天。大法の螺チヤ毎時吹世牟。佐良波。何爾喜シカヲム。一大事の因緣ハ不

可思議也り。我家爾ハ後集乃二句をヤ令レ誦セシメヨ。離レ家三四月と。鴈足ニ黏ラム將て帛を懸たルかと疑と云句をと誦せ與。初後乃句をと振り立天誦せむ。何爾與有卒と宣不。童覺ぬ。仍見聞ノ人々相共爾記レ之。

禰宜神良種

神主葦浦行

見聞人六人皆在ニ署名一。

永觀二年六月廿九日御託宣。

永觀二年甲申六月廿九日戊申辰時。以ニ禰宜藤原長子一託宣曰。我此砌下。月來之間。兩三僧侶種々脩善。遞以出入。黄昏錫杖之音。日夜懺法之響。念佛讀經。天動地感。何況我及眷屬。尤有ニ其益一。須下以ニ件僧等一令レ遞ニ陳之一。而三摩耶形是皆釋衆。若用ニ此人一可レ無ニ法威一。仍以ニ愚昧女一輕々令レ言。何可下求レ賢不レ用ニ本心一之故上也。寺家別當取レ筆注レ之。我欲レ示ニ一事一云々。我家子孫。遠近有レ員。內外無レ隔。漸經ニ數代一。遞難ニ相知一歟。昔日依ニ讒言一放レ我之日。大臣時平卿。光卿。納言定國卿。菅根朝臣。僞稱ニ勅宣一。召ニ陰陽寮官人一。宛ニ給種々珍寶一。令レ咒ニ咀我幷子孫永絕不一レ可ニ相續一之由上。神祭多送ニ日月一。皇城八方。占ニ山野一厭術埋ニ置雜寶一。然而我不レ可レ絕之術。隨レ分相構。被レ指ニ姓名一之人。皆以短命。又次々孫々不レ高ニ官位一。家貧才乏。是依ニ厭術一也。朝家豈可レ然乎。故高視淳茂朝臣等。切々祈念云。子々孫々家業不レ斷云々。我爲レ思ニ家文殿書等被ニ空廢一事上。令レ遂ニ淳茂登省及第一。次々在ニ弼輔正令一相續ニ事。一向我加護力。每度成レ妨乎。大貳朝臣兼ニ式部大輔一事又希有。爲レ家有ニ面目一。爲レ公無ニ憲法一。大貳朝臣內外共末孫又存ニ信心一。依レ發ニ造塔寫經之大願一。我深廻レ謀令レ赴ニ當任一。暫停ニ他事一早遂ニ此願一。致ニ合力一之人々。現世後世之大願皆成。生々世々之因果全熟。我一時之間廻ニ於三界一。常住所者濟度衆生界也。此界

普賢文殊觀音地藏四躰菩薩遞來化度。我每日往詣帝釋宮。閻羅王宮。自在天宮。五天竺國。大唐長安城幷西明寺。青龍寺。新羅國祥武城。當州皇城幷當府及諸國。所々歸依占別宮等也。我隨身伴黨十六万八千八百餘人。惣含恨背世。貴賤靈界皆悉集來。但無理含恨之輩。專不相共。昔自少年時有入唐之心。出身之後被任大使。依有本意。早欲渡海。而副使長谷雄朝臣。聊有相語。遲怠之間。昇大臣官。已以不遂。依彼本執。常在唐家。抑我是蒙攝政之詔。成功之身。朝家定憲。何無其賞。只贈一階。大山之上。如加一塵。我已負無實事之後。帝釋宮召鎭國明神。被勸糺之。隨卽種々災變而々出來。公家不堪其譴。改元爲延長之日。授右大臣官。被左遷時文書皆燒失。不可傳後代之詔明白。是依無罪所所〔所職〕也。彼詔作人事旨不快。仍又天罸畢。愚人之甚不得其心。被贈太政大臣正一位。今爲我無益。而南山隱者等皆大恠咎云々。定無罪之由。可無例賞云々。依有先蹤也。已無糺事之益云々。仍所示也。我每向皇城。燒亡度々。我更不屑。而伴類中所成。爲公常以嘲弄。令致大費。後々又不斷歟。上者崇道天皇。下者菅家小臣。不去帝釋宮。愁緒難斷。昌泰二年正月三日。行幸朱雀院。太上皇與今上。合額言談。召我甚密々被仰。天下之政汝獨可奏下。改先詔如何。左大臣見氣色。出陣外。我返奏曰。上在左臣。先詔下畢。是極不便有大怨歟云々。議定云。有召無別事。人成奇恠歟。可上詩。題以春生柳眼中卽被下畢。俄獻詩。此日例祿之上。兩帝皇幷后宮各給御衣。衆人驚恠。榮耀無比。左臣氣色頗異。當帝初產生給時。一時不去。男女之役獨成其勤。成人之後奉授諱名敦仁兩字。爲皇太子之日。依有次第。任權大夫。然而有別勅。宮雜事獨進退。讓位之後。一向又同。延喜御後皇胤

不變。是只依法皇深御契。所守護也。但我心不安。仍安和帝王生而無益。今上乍居其位。已無皇威。只臣下之最也。度々去城交入民間。不足皇道。我家末孫立朝庭者數少。又無力也。大貳朝臣｜者。志至誠深。右中辨資忠朝臣。其志雖淺頗存精信。能々可尋家情。爲糺朝臣似無其信。乍傳家風不知家志。齡未長之前。努力努力。舊人皆有誠。今人更無信。彼舊人已不幸。今人何爲々々。幸與不幸。信與不信也。文時朝臣來訴已得理我寺。申請三箇條事。爲我至要。府解言上。未聞裁下。資忠朝臣不信也。重可言上。已無公損。何卿可妨。何辨可抑。又々可相催。我家末孫出家入道者。一向可來住我寺。若不然者遇障難歟。遍空法師爲名利遙下。專爲我無信。不來見。歸向途中損畢。爲家之恥也。抑當士大災是兵亂也。此事只忠信朝臣之所爲。仰出敵人。常爲彼人致忿怒詞。又發國中兵士。多令成公損。每聞此由。隣國又々不靜。依一國亂成他境謗。各所謀計。已似謀反。府官可諷諫也。若不隨制止。早可言上也。忠信朝臣館中所集之凶黨惡群。不可勝計。件不善輩所行云々。甚可恐怖。似無惣府。何不糺行乎。達人名美。是已犯人也。得住國之身。作成長之使。早可糺行。是大府不可緩怠。吉祥院事。誰人堪力得改作乎。氏中可有定。十月十七日悔過于今不怠。子孫不絕只依此誠也。此寺傳彼風。年來法花十講會。先祖代々思所。皆以隨喜。三寶歡悅。味酒安行大功人也。彼後胤尤可賞之由可告大貳。一昨日夕大恠。國司可愼。大府何無用心。不到愼門只以信爲本者也。至于公事。告而無益。不可披露。此勤修諸僧。可令知我歡喜之由。又々仰云。不他筆自書。可告大貳館云々。

本。延久六年二月一日。以安樂寺別當闍梨

本寫畢。家本燒失之故也。坊門大輔殿御自筆本也。茂才公輔本也。

（一條院御時）正曆三年十二月四日御託宣。

禰宜藤原長子。今月（日歟）早旦仁申云。依例天昨夜御前仁候宿須。今曉寅時計乃夢中仁。廟君乃仰仁云。以汝傳仰倍木事有り、不罷去天可候志。但我一兩日他行奈り。其間御殿ハ不開天可候者。仍宮師淨洞法師爾仰爾天。如仰爾御殿た不開シ天例御供御燈等ハ戶外御簾乃前爾令奉供。同三日乃夜半計爾。雷公大鳴天。降雨如沃志。其間電光如日爾志天雷乃響振地布。奇恠怖畏不可勝計。然間爾御殿乃戶開ぬ。宮師等驚奇布。其後寅時計爾。禰宜長子託宣云。寺司等可召者。即大宮司安倍近忠チ以天御託宣乃旨チ令記牟。其仰爾。我家之末孫輔正朝臣乃大貳爾任セリ時爾。公家爲令申爾。種々乃古事チ仰示志キ。是ハ吾心非一。山々乃隱者賢人等乃所申之事幷爾封戶年分可被加木事等也。而左右爾思慮シ天。遂爾不奏聞。是ハ彼朝臣乃己不信なるなり。然而爲大貳志時爾。我寺爾一基乃多寶塔チ造立天。千部乃法花經チ書寫シ天安置供養セル其善無量也。國土ヲ鎭護志。砂界チ利益寸。此仁依天彼朝臣乃不信不勘也。右大辨惟仲朝臣ハ我家乃門生也。肥後國乃司と有志間爾。爲寺爾頗有用意。玉井名合（マキナアフ）志乃庄等事とも。其志有者モノナリ。又歸京乃時爾毛奉幣志。東舞等ヲ奉供セシ。尤有信心木。其後毛猶有リ其志。仍天有加護リ。此人乃作詩乃中爾輔正朝臣乃寺別當松壽爾寄たり志八韻乃詩ノ和ハ在厨子中リ。可求進志者。仍天忽爾分手天搜求出天。御前爾進留。即令讀天聞食天。父子相分テ隔遙界たる詞尤可憐志。何況昔乃事チ有心牟良人ハ可想像志。我常爾昔チ思仁。其心不安寸。抑先年爾所示乃隱者等乃所申ハ。昌泰三年乃事乃元首ハ。朱雀院乃行幸乃日事等奈利。左右兩大臣チ以テ共爾

時乃政ヲ令レ知りた。世人乃云々定天有ニ嗷々ニ加牟。院與ニ
主上ニト密議給天。一人ヲ欲ニ止給ニリ。志介爰對面良久
天。忽余ヲ召天。依レ召天座ヲ立ハ。左大臣共爾立天
出ッ。氣色ヲ見爾太留似りた。余ハ御前爾參りせ。其事等被
レ仰留。卽奏云。極天不便奈留事り奈。不レ可レ然爾。其旨詳
爾奏爾。猶上﨟ヲ可レ被レ用と奏畢。種々云々。仍卽
詩題ヲ可レ進者。群臣爾被レ下天作文ヲ令レ進牟。召乃
旨依レ是となり臣下仁令レ知畢。仍左大臣還參寸。然
而彼事漏聞りた。依レ是天年內爾成レ謀天。明年爾遂左
遷乃事有。天下騷動寸。左遷乃後爾。彼朝臣ハ獨身
世乃政ヲ行テ。官外記の雜事。詔書。宣命。官符。宣
旨。毀レ舊天改正皆畢。其事爾同心乃人々等。幾乃
程ヲ不レ經テシ皆悉死亡志。子孫各絶りた。適生は無レ益
毛誰不レ知乎。我入滅乃後爾。清涼殿爾參天シ帝皇爾
對面天。具古事ヲ奏爾する。合レ掌天涙ヲ流給天。彼時乃
事ヲ被レ宣留。然而臣下爾不レ令レ知寸。依レ無ニ皇威ニ
奈り。彼隱者等申。當國乃風な誰不レ知乎。官職乃生

前爾不レ任は沒後爾贈レ之。延長元年乃詔云。左遷
乃號ヲ停テ。爲ニ本大臣ニ爾。彼時乃文書等皆悉爾可ニ
燒失ニ志。若遺置牟加人ハ。違勅乃罪爾可レ處木由等。其
定明奈り。已爲ニ本大臣ニり。何無ニ贈位ニ乎。我か西行乃
時爾。故貞信公ハ右大辨爾天。深久我か遠行な歎天。
更爾兄乃大臣乃謀計爾不レ同木。遞爾消息狀ヲ通天。
專無ニ隔心ニ木。彼卿と我と遂慇懃な結ヒ木。彼家乃子
孫ハ攝政不レ斷天。多久朝家爾滿たり。故入道攝政乃
北野宮社爾被レ過たり志。甚所レ悅奈り。爲レ我有レ志留輩ナ
何不ニ守護ニ哉。我朝ヲ保護給事ハ。是八幡大菩薩
乃助給奈り。天下和平。神威繁多志。末世乃事皆能可
レ愼。我禮毎日三度比帝釋天爾參詣天愁訴乃後。頗
自在乃身な得たり。我心爾所レ思ヲ帝釋天暗爾知給
布。我か昔名ヲ損志せ時爾。心中爾五言絶句ヲ思木。離
レ家三四月。落レ涙百千行。万事皆如レ夢。時々仰ニ
彼蒼ニと。此句口外爾未レ出爾。帝釋天知レ之。忽以感
歎志。後集乃中仁載天有り。頗可レ憐木詩奈利。大唐乃

入皆暗爾誦留事有リ。我今懷ニ一絶句ヲ天。寺僧等爾示寸。家門一閇幾風煙。筆硯抛來九十年。我仰ニ蒼天ニ懷ニ古事ヲ。朝々暮々涙連々。寺僧等挙レ之。有レ感拭レ涙。又一切經論欲レ令ニ書寫爾。道心乃人に難レ會志。我家末葉乃此願ヲ可レ遂木人。忽以難レ有志。向後仁必出來歟。我致ニ助成ヲ之。某朝臣下向セリ時ニハ。他乃善事ヲ先營志間爾。任秩已暮テ不レ成爾木。然而彼朝臣大貳乃有レ闕牟時爾。必望ヲ可レ成木由ヲ可ニ告示ス者リ奈。寺僧等毛此心ヲ可レ存志。又此寺仁所ニ申請乃條々乃雜事言上。府解文等。入道攝政乃時爾在國朝臣爾付タリ。而其心爾不レ入シテ已捨失リ。大不レ足レ言リ奈。自爾天譴毛爾當留。是不信乃所レ致リ奈。又管國乃司等乃所ニ愁歎ハ。每年爾豁米等可ニ加進ス木事リ奈。各所レ訴リ奈。府國乃煩只此事爾可レ有志者。御託宣乃旨如レ此。仍注記。

大宮司安倍近忠
宮師法師淨洞
都維那法師
寺主大法師聖運
上座大法師王廉
撿挍大法師昇朝
別當大法師住筭
座主大法師松壽

此一通。又大輔殿御自筆也。

同四年御託宣。

一條院御時
正暦四年八月十五日。宮師淨洞夢。夜候ニ御在所ニ之間。子時許夢。御前ヘ召。故撿挍鎭延大法師仍參上。即被レ仰云。依ニ贈官事ニ勅使下向者。是非ニ本意ニ。依レ非ニ舊例ニ。更不レ可ニ承引ス。件使來者。令レ知ニ我他行之由ヲ。左右不レ可ニ相定ス。依レ無ニ面目ニ也。種々雜事非レ可レ仰者。同十六日夜。座主松壽大法師夢。子丑時計夢。見不レ知之人來告云。可レ參ニ廟院ニ者。答云誰人仰事乎。一家主達被ニ集會ス所レ被レ開

也云々。仍着袈裟参進。廊内外有十人。自西戸参入中門着座。四位五位數多也。其中知而之人。三位文時卿。左近中將英明朝臣(天神御孫子也)。勘解由長官在躬朝臣。山城守雅規朝臣等也。告示云。公使下向。其事非御本意。寺司等不可承引云々。然間覺畢。

御位記勅幷答勅使御作詩二首。

正二位。

右可贈正一位。

中務。性比柳下(人名也)位登槐端。開廊廟之華。累儒雅之葉乎。人文振芳。雖無埋英聲於龍門之土。天爵標秀。宜追賁殊禮於鶴塋之塵。可依前件。主者施行。

正暦四年五月七日

詔。褒賢之義無渝乎始終。尚德之規已貫于存沒。故右大臣贈正一位菅原朝臣。才高冊府。効著廟堂。抱九流以涉儒津(〔津渉〕)。登三旌以助帝道。於戯。象岳之蹤隔清塵而雖追。牛山之涙想往事而猶新。朕嗣膺寶暦祇奉審圖。欲施錄舊之仁以厚追遠之典。可贈從一位左大臣。庶分恩涙於北闕之宸波。將照寵光於西鎭之幽墓。布告遐邇俾知朕意。主者施行。

正暦四年五月

天皇我勅命を閑坐と宣。追往尊賢比。憐舊褒德は。食國介典奈り。故是以追天増一位ノ階左大臣ノ官乎贈賜比崇賜布勅命を。差使天中賜とは久宣。

同年同月廿日

示勅使被返左大臣宣命。同四年。

忽驚朝使排荊棘。官品高加拜感成。雖悅仁恩覃邃窟。但羞存沒左遷名。

此御作勅使幹正朝臣讀宣命之間。自珠簾内有青紙書隨風出矣。即一絕。其詞云フ。件正文詩。今在外記局。非彼御手跡。似道風手云々。或本有此詞等。書寫本無之。

大宰府解申言上奇異事。

安樂寺菅丞相廟前案上詩一枚暗出來狀。

右謹撿案內。贈官位勅使散位從五位下菅原朝臣幹正。今月十九日到府。同廿日未時。勅使幷府行事權少監正六位上源朝臣兼政。少典正六位上伴宿禰 如武等。相共參詣彼寺。勅使持位記函置案上再拜。讀宣命畢。爰彼廟院大宮司安倍近忠。件以位記步進廟前之間。案上函外有靑色紙書。近忠申云。此書在函外。是若漏落歟者。勅使答云。本自無靑紙書者。物似神作詩。不知其所出。謹須如此神異之文任挌密封言上者也。而寺司及 勅使祇候 宮人等。衆人 共所見也。仍記在狀言上如件。謹解。

正曆四年八月廿八日

正六位上行大典刑部宿禰

中務卿兼輔四品親王在京

正三位行皇后宮權大夫兼大貳藤原朝臣佐理

從五位上行少貳兼筑前守藤原

少貳以下府官等皆連署之。不書之。

(一條院御時)正曆四年十一(ニイ)月十六日卯時。廟院宮師淨洞來向。告座主別當云。禰宜藤原長子。自去十三日候御前。彼日申云。今曉示現始(給歟)。自今日 專不他行閑可候者。仍所候也。而今朝託宣云。座主別當相共可參。其時驚怪召所司等。參向廟前。被仰云。先日勅使。依有所思。我已不快。但爲令知其由示絕句也。至于此度勅使者。南山隱者等所告。頗以相應。定者所聞哉。彼書寫一切經之願。我玄孫等早申公家。可遂本願。抑今日勅使可讀宣命。唯以此詩可答勅使。

被贈太政大臣之後託宣。同五年十二月。

昨爲北闕被悲士。　今作西都雪恥尸。

生恨死歡其我奈。　今須望足護皇基。

古老傳云。此詩。北野天神。爲ニ令レ詠之人。毎日七度令ニ守護ー誓給云々。

（有此記素寫本無之）正曆四年八月廿日未時。勅使參ニ向安樂寺。卽大府被ニ並ニ官人等ー相共臨ニ廟南之流ー奉ニ仕御祓ー。其後御位記之函。令レ持ニ於權少監源直政ー。參ニ進御前ー。勅使傳請奉レ置ニ案上ー。再拜卽讀ニ宣命ー歸去。次廟院大宮使安倍近忠。件御位記爲レ納ニ御殿ー。持レ案參上之間。御函之下有ニ青色紙書ー。近忠申云。此書從ニ御函之內ー落歟者。勅使宣。件御函內本自無ニ青色紙書ー者。爰勅使開見。又以再拜罷出之後。彼此尋ニ問案內ー。不レ知ニ其所ー出。已是奇恠也。仍記レ之。

權府掌依末（宮イ 仕イ）
史生早部（過イ 水イ）
權陽永秦
少典伴
權少典源

正曆四年十二月。朝家差ニ使散位菅原朝臣爲理ー。被レ奉ニ安樂寺ー。是贈ニ靈廟於太政大臣ー也。宣命之後有ニ託宣ー矣。先レ是同年月十二日。召ニ入禰宜藤原長子於廟內殿中ー。曾不レ令レ出ニ戶外ー。令ニ仰云ー。官位之使。十六日可ニ到來ー之由南山隱等有レ被レ告レ之。其間依レ有レ可ニ仰云ー。所レ令レ候也告。于時及ニ十六日ー。勅使參到讀ニ宣命ー之間。以ニ別當僧松壽ー所レ令レ書詞也。

昨爲ニ北闕被レ悲士ー。見レ上。

菅家御傳記

散位從五位上菅原陣經謹勘作

昔在神代天照大神之子天穗日命。帥二其子天夷(ヒナ)鳥命。亦曰武日照命。天降于出雲國一矣。從レ天將來神寶。藏二于杵築神宮一焉。

天夷鳥命十二世孫鸕濡渟(ウカノクスノ)命。飯入根命子。磯城瑞籬宮御宇崇神天皇御世。勅定二出雲國造一。

鸕濡渟命弟曰二甘美乾飯根(ウマシカライチノ)命一。甘美乾飯〔根脫歟〕命子曰二野見宿禰一。纏向珠城宮御宇垂仁。天皇御世。喚二野見宿禰一與二當麻蹶速(ケハヤ)一令レ捔レ力。二人相對立。各擧レ足相蹶。則野見宿禰蹈二殺蹶速一。故奪二蹶速之地一悉賜レ之。仍留仕焉。於レ是皇后日葉酢媛命薨。是時古風尙存。喪葬無レ節。天皇神襟有二悲傷一。詔曰止レ殉奈之爲レ行。野見宿禰奏曰。夫君王陵墓。埋二立生人一是不レ良也。豈得レ傳二後葉一乎。願喚二上出雲土部人等一取レ埴以造二作人形一。以二是土物一更易二生人一。樹二於陵墓一爲二後葉之法則一。天皇大喜之曰。汝便儀寔治二朕心一。則其土物始立二于日葉酢媛命狹城墓一。今狹城盾列池前陵是也。是以土物謂二埴輪一。仍下レ令曰。自レ今以後。陵墓必樹二是土物一。無レ傷レ人焉。天皇厚賞二野見宿禰之功一。亦賜二鍛地一。即任二土部職一。因改二本氏一謂二土部臣一。其後天皇崩二于珠城宮一。葬二菅原伏見山陵一。今菅原御立野中陵是也。土部臣野見宿禰主二喪葬之事一。皇太子景行天皇。詔充二陵戶一。兼守レ山也。爾來土部氏萬葉居二菅原伏見邑一。土部臣野見宿禰三世孫身臣。難波高津宮御宇仁德天皇御世。改二土部臣一賜二土部連姓一。

土部連身臣七世孫。大唐學生甥。飛鳥淨御原宮御宇天武。天皇。天下萬姓改二定八等一之日。改二土部連一賜レ姓曰二土部宿禰一。

土部宿禰甥四世孫遠江介從五位下古人。平城宮御宇光仁。天皇天應元年六月上レ狀。望請因二地名一改二土部一以爲二菅原姓一。勅許レ之。

菅原宿禰古人長男外從五位下道長。長岡宮御宇桓武。天皇延暦九年十二月。改菅原宿禰賜姓曰菅原朝臣。

右日本書紀。續日本紀。氏族志抄。新撰姓氏錄。菅原本系帳所載。

贈正一位菅原太政大臣。諱道眞。參議從三位行刑部卿是善古人四男曰清公。仕至文章博士從三位。清公長男曰是善。三男。母大伴氏也。少而好學。博涉經史。及壯工文。兼詠和歌。師事文章生田口達音。門弟之中已爲貫首。

貞觀四年四月十四日式部省試賦賛。○五月十七日及第。文章。此日補文章生。御年十五家記。

同九年正月七日爲文章得業生。○二月廿九日授正六位下。家記。

同十二年三月廿三日式部省試對策。○五月十七日及第。此日授正六位上。二十三家記。

同十三年三月二日爲少內記。文章。家記。

同十四年正月六日爲存問渤海客使。三代實錄。○十四日親母大伴氏奄然。文章。○五月廿四日詔奪情起之。令作答渤海客王國號勅書。少內記如元。

同十五年正月七日授從五位下。遷兵部少輔。○二月廿九日未幾遷任民部少輔。

同十九年正月七日任式部少輔。

陽成元慶元年十月十八日兼文章博士。式部少輔如元。

同二年十二月十三日依家君敎代右大臣正二位藤原基經制文德實錄序。

同三年正月七日授從五位上。

同五年五月卅日親父是善薨。

同六年正月十一日兼加賀權守。式部少輔文章博士如元。去年丁父憂解職。今以本官起之。

同七年四月廿一日緣饗渤海客權行治部大輔事。是時道眞與渤海大使裴頲文籍賦贈答詩數首。文章裁紀。使稱曰。道眞文筆似白樂天也。

仁和二年正月十六日任讃岐守。罷式部少輔文章博士二官。

同三年秋乞暇入京。

同四年春更向レ州。是時授二正五位下一。〇五月六日城山神祭レ之請レ雨。卽日降雨也。

宇多
寛平二年春罷レ秩歸レ京。

同三年二月廿九日補二藏人頭一。〇三月九日任二兼式部少輔一。〇四月十一日又兼二左中辨一。藏人頭式部少輔如レ元。〇廿五日上レ狀請レ解二藏人頭一。勅許レ之。

同四年正月七日授二從四位下一。〇五月十日類聚國史奏上。先レ是道眞奉レ勅修撰。至レ是功成。史二百卷。目二卷。帝王系圖三卷。

同五年二月十六日爲二參議一。遷二式部權大輔一。左中辨如レ元。廿二日轉二爲左大辨一。〇四月三日任二勘解由長官一兼二春宮亮一。參議左大辨式部權大輔如レ元。

同六年八月廿一日爲二遣唐大使一。副使從五位上守右少辨兼行式部少輔文章博士紀朝臣長谷雄。〇九月十四日上レ狀。請レ令三諸公卿議二定遣唐使進止一。〇十二月十五日兼二侍從一。參議左大辨式部權大輔春宮亮如レ元。

同七年五月十五日　勅止二遣唐使進一。〇七月十六日爲二中納言一。卽日授二從三位一。〇廿三日兼二春宮權大夫一。左大辨侍從如レ元。系圖。七年十月十六日爲二中納言一。卽日授二從三位一。十一月十三日兼二春宮權大夫一。

同八年正月七日授二正三位一。

同九年六月十九日任二權大納言一。同日兼二右近衞大將一。七月廿三日又兼二中宮權大夫一。

昌泰元年八月廿八日兼二民部卿一。權大納言右近衞大將中宮權大夫如レ元。系圖。寛平八年八月廿八日兼二民部卿一。九年七月十三日叙二正三位一。

同二年二月十四日爲二右大臣一。右近衞大將如レ元。〇三月廿八日三上レ表辭二大臣一。詔不レ許レ之。

同三年八月十六日獻二上家集合二十八卷一。祖父淸公菅家集六卷。親父是善菅相公集十卷。道眞菅家文章十二卷。〇十月十日再上レ表辭二大將一。優詔不レ許レ之。

延喜元年正月七日授二從二位一。〇廿五日任二太宰權帥一。罷二右大臣右近衞大將一。依二左大臣正二位兼行左近衞大將藤原朝臣時平公讒一也。〇二月二日如二筑紫國一。長男從五位上行右少辨高視。次從五位下式部

大丞景行。藏人正六位上兼茂。正六位下文章得業生淳茂等。悉左遷諸國。
同三年二月廿五日薨于太宰府。于時春秋五十九。道眞公所詠歌集曰菅家御集。有一卷。昌泰三年以至神退所述詩文曰菅家後集。有一卷。又三代實錄預編修。不遂其業。則大藏善行筆之。
延長元年四月廿日贈正二位復本位。右大臣。
正暦四年五月廿一日贈正一位左大臣。勅使武藏權守藤原幹政。在躬子。淳茂孫也。同閏十月十九日贈太政大臣。勅使散位從五位下菅原爲理。幹政姪。輔正子也。
右據菅家文草。後集。三代實錄。公卿補任。菅原本系帳。家記等記之。
安樂寺學頭修奏狀云。太宰府安樂寺者。贈大相國菅原道眞公喪葬之地。十一面觀世音大菩薩靈應之處也。延喜五年八月十九日。味酒安行依神託立神殿。稱曰天滿大自在天神。北野社家者說曰。天慶五年七月十二日。神降着右京七條坊婢文子。託曰。我菅丞相之靈也。欲居右近馬塲。可造神殿也。其女賤而不能營作。奉齋家邊。
○天暦九年三月十一日。亦着近江比良神人良種子年七歲。託曰。我昔任右大臣。先夢松生我身而便折。是以我知昇三公官又逢左遷。旣爾以故我欲居之地必當生松也。一夜之中松數千本生北野。於是朝日寺僧最珍。與良種婢文子。戮力一心造立神殿。○六月九日奉遷于北野神殿。○天德三年二月廿五日。右大臣正二位藤原師輔造增神殿屋舍。獻上神寶數品。
外記日記曰。一條天皇永延元年八月五日。始行北野聖廟祭祀。宣命云。掛畏支北野爾坐天滿宮天神云々。天滿天神之勅號始起此哉。○寬弘元年十月廿一日。始有行幸。奉幣帛。
嘉承元年十二月十八日　　陳經（花押）

修理大夫資仲說曰。或人說示曰。偷覽或日記。菅原院者。相公是善卿之家也。相公平生昔日其宅南庭有齡五六童子。容止閑雅。體貌奇偉。相公問。汝是何氏子男。何由來遊。童子答曰。我無居處父母。欲爲相公之新友。相公知匪直人。饗應許諾。相從研精。天才日新。謂之菅贈大相國云々。日記之趣。是非不測矣。

元永元年八月七日。

掃部頭從五位下大江朝臣佐國謹書

右菅原陳經本加茂氏。菅家御傳記。大江佐國記錄。鏡古家求得件書寫之。兩人菅丞相公族類也。爲證可足。然道眞公補任。與菅原系圖有相違。爲加筆猶俟後學之是正耳。

文明十年八月六日　逍遙院殿 藤黃門在判

最鎭記文 貞元二年

北野寺僧最鎭記文云。當宮者。是近江國高嶋郡比良鄉居住神良種來着申云。火雷天神御託宣云。右近馬庭興宴地也。爲移坐我彼馬庭之邊乾角朝日寺住僧也。

世イ者受最鎭法儀鎭內等馬庭 良種云託宣云。可生松云々。相議此由之間。一夜內數十本松生也。即隨身其託宣文一通。因玆驚恐初

菅家人々。兩部上下勤仕二季之禮奠。致種々之祈禱。靈驗日新。漸經年序之間。寺家燒亡。氏人住僧等。僅搆造玉殿。如故欽仰者。天德三年。九條右大臣殿造增屋舍。奉供寶物。其祭文云。

天神。朝庭之間は。古名乎揚天高崇班爾昇給天。四海內之舟檝とシ天。綱紀乎意仁任世給ひ支。夜臺之後ハ。仁令跡乎垂天。普祈禱叶天。一天下之尊卑乎護持給

不事自在也。因レ茲師輔。力乎竭シ誠乎至天奉レ禱古度無レ極。夜乃守日乃守仁守幸へ給天。男女乃子孫品々仁。男は國家乃棟梁とシ天。萬機乃攝籙チ意仁任セ。及太子乃祖と成シ。女は國母皇后帝王乃母留多我カ姓藤原乃氏と千世之世仁名乎傳倍。萬孫之家仁跡乎繼天。天神乃此地仁鎮リ御坐仁隨天。二儀仁比天不レ衰須。三光仁伴天有レ慶留氏度。夜乃守日乃守仁守幸賜へと恐見恐見毛申。

（闕疑衍歟）又貞元元年十一月七日。太政官下二山城國一符云。氏長者式部權大輔文時朝臣奏狀偁。准二大宰府安樂寺例一。以二氏人一可レ令レ領二知北野寺一。是則稱二僧增日一者出來稱二寺司一諍論。爰最鎮稱二造立之功一。增日者陳レ持レ印之由。蒙二官裁一。領二知寺家一。永絕二彼此諍論一者。權大納言正三位源朝臣雅信宣。奉レ勅。依レ請者。因レ茲以二最鎮一令レ知二寺務一。最鎮等爲二後代一記レ之。

官符。

太政官。　山城國司。

應下准二大宰府安樂寺例一以二氏人一令上レ領二知北野寺一事。

右得二正四位下行式部權大輔兼文章博士菅原朝臣文時等去六月十日奏狀一偁。謹案二事情一。安樂寺。味酒安行去延喜年中始所二建立一也。安行死去之後。始レ自二天德三年一。以二氏人一解二言上於官一。補二任寺司一。年序漸久。今件北野寺者。初則僧最珍狩弘宗造立。次復僧滿增修治。弘宗滿增死去之後。天延元年彼寺燒亡。檢挍僧最珍重以造立矣。今年忽有下稱二僧增日一者上出來。從二滿增異父兄星川秋永之手一傳二得寺印一。自稱二寺司一。爰最珍者稱二造立之功一。增日者陳レ持レ印之由一。分成二二論一。諍論尤盛。望請殊蒙二天裁一。被レ下二宣旨一。准二安樂寺例一。領二知件寺一。將レ制二止彼諍論一。奉レ令レ警二護國家一者。大納言正三位源朝臣雅信宣。奉レ勅。依レ請者。國宜二承知。依レ宣行レ之。符到奉行。從五位下守左少辨

平朝臣
正六位上行左少史御船宿禰
貞元元年十一月七日

梅城錄

賀江　除饉男呆菴述

天神聖德讃

褋華契經稱。如人生已則有二天恒相隨逐。一曰同生。二曰同名。天常見人。人不見天。古諺又云。擧頭三赤是神明。然則人之日用不失周旋者。盖二天神明之陰相也。可不敬乎。賀州南郡地名直下里。溪山如圖畫。有神祠號檜屋。乃北野君分化也。予族藤氏。以永和己未五月朔生于斯里。既龍命歸釋。少小離鄕。嘗一辭神祠矣。京遊若干歲。無速香獻者久之。於是欲效秀紫芝傳歐公譔神君實錄。然國史載而不詳。家秘而莫出。姑采舊聞以頌聖德。雖詞非俊麗不足登歌。亦所謂苟有明信蘋蘩可薦之義也。凡二十五章。章四句。

大哉威德自在神。如日麗天光常新。冥扶佛運無紀極。調護皇基億萬春。

按。濟北老人所著元亨釋書神仙傳曰。北野天滿大自在天神者。菅丞相之靈也。昌泰四年因左僕射藤時平之讒。左遷大宰府都督而薨。未薨之先。自裁疏訴天帝。故其靈奮激爲威德天神也。天慶四年八月。有沙門道賢。借冥見金峯山金剛藏王菩薩。因覲大政威德天。天將賢見威德城。其嚴麗不可言也。語賢曰。我是上人本國菅丞相也。忉利天帝字我呼日本大政威德天。我主國土一切疾病災難事。今立一誓遺本邦。上人傳之。若人作我形稱我名。殷勤尊重我必擁護。周易文言曰。大哉乾元萬物資始。雪竇語曰。廣大門風。威德自在。華嚴論曰。智無思而知萬有。號之爲神。易曰。離麗也。日月麗乎天。李德裕文章論曰。譬諸日月。雖終古常見。而光景常新。左氏傳曰。不知紀極。漢留侯傳曰。調護太子。註。調護猶營護也。周詩曰。億萬斯年。杜詩曰。聖壽宜過一萬春。

惟昔化兒菅氏家。朱顏紺髮鳩車歲。月如晴雪花似星。五字初詩早驚世。

桓武天皇延曆廿三年。遣唐使左京大夫從三位菅原朝臣清公克家。翰林學士兼越州長參議諱是善。文章雅典。爲時儒宗。居在帝宮南。文集云。會春晨景淑。獨憑南軒遊目。俄有美髮兒。弄花于庭。肌肉玉雪。襦綉芳蕤。年幾五六歲。相公驚異問曰。君家何許。姓氏爲誰。兒曰阿呼小字無姓無家。唯欲父事相公爾。相公大喜。抱入撫育之。天才艷逸。異常童。凡世所傳聖廟記。及菅家書本。亡作者名。竝云。菅原院南庭。有兒化現。年纔五六歲許。又云承和四年生。又云貞觀八年年廿一二。徒欲伸其事。有自語相違之難。如扶桑略記書神君年。

出國史或御記必不誤矣。自其任大臣年却推之。則本命甲子也。今從俗好以化生一段係年。則仁明天皇嘉祥元年戊辰拾五歲矣。彌勒論曰。一切欲界衆天。無有處女胎藏者。四天王衆天。於父母肩上或懷中。如五歲小兒欻然化出。續博物志。王元長云。小兒五歲曰鳩車之戲。神君甫七齡。春宵快霽。梅月爭妍。相公試問曰。詩料滿前。兒能賦否。神君銜口誦口曰。月輝如晴雪。梅花似照星。可憐金鏡轉。庭上玉房馨。相公絕嘆曰。蘭生而芳。信矣哉。貞觀八年丙戌。年廿三。代相公作慈覺大師所撰顯揚大戒論序。至今國家講序。必引以爲左證云。和漢年代記云。延曆廿年辛巳。河內國人土師宿禰淸貞。賜姓菅原朝臣。見日本紀。又系圖云。菅原朝臣本姓土師。古人。淸公。是善。天神。扶桑略記云。陽成天皇元慶四年庚子八月壬午朔。日有蝕。卅日辛亥。參議從三位行刑部卿菅原朝臣是善薨。年六十九。父淸公學藝博通。才德甚高。弱冠爲文章生。尋擧秀才。對策高第登科。延曆年中爲遣唐使。復命之後累歷顯要。爵至三位。猶爲文章博士。以其爲儒門之領袖也。有四子。是善第四之子也。是善幼而聰穎。才學日新。弘仁之末年甫十一。侍殿上。常於帝前讀書賦詩。廿二補文章得業生。其後文章博士。東宮學士。大學頭。式部大輔。相次補任。貞觀十四年八月拜參議。式部大輔尙兼之。元慶元年遷刑部卿。近江守如故。三年十一月授從三位。藻思華贍。聲價尤高。小野篁詩家之宗匠。春澄善繩。大江音人。在朝之通儒也。竝以文章相許焉。天性少事。樂吟詩。最宗佛道。仁愛人物云。神君所編緝父菅相公文集有言。舊簡尙書左丞相詩曰。欲記家門相接密。道眞公幹混劉宗。自注云。君家公幹。我兒道眞。俱是前代

劉氏之名字也。知其不期而然耳。

君門射策穿楊葉。海內文章得鉅公。逸少稧帖猶姿媚。謫仙歌頌未神工。

貞觀十二年庚寅三月廿三日。對策高第。聲華藹著。見于菅家書本。漢書曰。楊葉之大加百中焉。可謂善射矣。魯直題東坡墨竹曰。海內文。翰林公李賀高軒過曰。光孝云是東京才子文章鉅公。扶桑略記曰。仁和二年丙午正月十六日丙申從五位上行式部少輔兼文章博士加賀權守菅原朝臣某爲讃岐守。又曰。寬平八年丙辰閏正月六日有子日宴。行幸北野雲林院。其扈從者。皇太子及一品式部卿本康親王。大納言正三位源朝臣能有。中納言從三位藤原朝臣時平。中納言從三位菅原朝臣。皆著麴塵衣。凡此方俗。毎至正月子日。有游野外採稚榮之風。退之詩云。羲之俗書趁姿媚。葛常之韻語陽秋。姿作媸。神君書學蘭亭。適勁過之。東宮一日召試十題詩。搦冠管卽成。太白沈香亭淸平調三章。殆不及也。

紫庭鳳。人瑞鍾美太平辰。醍醐聖曆蓂蓂紀。名躍金甌兼國鈞。齋房九莖

略記曰。人王六十一代醍醐天皇。御諱敦仁。宇多天皇太子。寬平九年丁巳七月三日丙子受禪。生年十三。同十五日丙戌於大極殿卽位。十年戊午八月十六日改爲昌泰元年。二年己未二月十四日。大納言左近大將藤原朝臣時平任左大臣。年廿九。太政大臣基經朝臣第一子也。同日。大納言右近大將菅原朝臣某任右大臣。年五十六。學行才名鼓動京師。參議是善之三男也。帝王世紀曰。蓂莢堯時瑞草。隨月凋榮。曆得其分度則蓂莢生。朔後日一莢生。望後日一莢落。杜詩曰。鳳曆軒轅紀。唐書崔琳傳曰。初玄宗毎命相。皆先書其名。一日書琳等名。覆以金甌。會太子入。帝謂曰。此宰相

名。若自意之誰乎。卽中且賜酒。太子曰。非崔琳盧從愿乎。帝曰然。賜太子酒。周詩曰。秉國之均。四方是維。箋云。言持國政之平。維制四方也。漢書曰。武帝元封中。芝九莖生甘泉殿齋房中。乃作芝房之歌。蔡邕琴操曰。周成王時。鳳凰舞于庭。成王歌曰。鳳凰翔兮于紫庭。余何德兮以感靈。韓集曰。鳳凰紫草。賢愚皆以爲美瑞。唐鄭仁表傳曰。自謂門地人物文章具美。嘗曰。天瑞有五色雲。人瑞有鄭仁表。

左相謾調金鼎元。纔有笑端不理事。我公那肯摸床稜。霹靂敏手快人意。

聞之先輩曰。本院藤公廼大織冠九代而昭宣公長子。世柄政者。其爲左僕射也固宜矣。然性疎率有笑疾。故機務雖急矣。當入奏時。有可微哂者。輒哂哂不能已。每推之右相。右相素以忠勤爲己任。故視事割斷如流。人便之。而藤公心害其能云。宋李文定公。天禧中與王沂公繼秉鈞。軸王公寄詩曰。錦標得雋曾相繼。金鼎調元亦屢更。後漢胡廣傳曰。萬事不理問伯始。唐蘇味道傳曰。嘗謂人曰。處事爲不欲決斷明白。但摸稜以持兩端可矣。時人號爲蘇摸稜。通鑑釋文曰。摸末若切。稜盧登切。朝野僉載云。味道爲相。或問其燮和之道。無答。但以手摸床稜。唐裴琰之傳曰。永徽中爲同州司戶參軍。州中有積年舊案數百通。琰之命書吏數人。連紙進筆。斯須剖竝畢。文翰俱美。號爲霹靂手。東漢書吳漢傳。帝嘆曰。吳公差強人意。

浪洗苔鬚知鬼語。春生柳眼悅皇情。才高見忌古皆是。貝錦萋兮誰織成。

聖廟記云。寛平八年初春。大內記都朝臣良香過羅城門。見陌頭楊柳散麴塵絲。得句曰。氣霽風梳新柳髮。沈吟久之。空中有聲。續曰。氷消浪洗舊苔鬚。良香私喜曰。奇哉。所謂神助也。

遽謁菅公詫曰。良香得佳對。要公品評。遂擧前一聯。菅公笑曰。上句固卿所作。如下句乃鬼仙語也。捨以爲吾有。獨不愧於心乎。良香悚然吐實。自茲人咸知菅公通神焉。略記曰。昌泰三年庚申正月三日。帝行幸朱雀院。與太上皇密議。召菅相府獨對。有關白詔。相府固辭。因奏。有召無事。人必怪訝。卽以春生柳眼中爲題獻詩。是日兩帝皇行后宮。各賜御衣。榮曜無比。左大臣頗變色。聖廟記曰。是年八月公編三代家集備御覽。帝褒寵賜詩曰。門風自古是儒林。今日文華皆悉金。士林榮之。於是時平公忌菅氏盛名。欲陰中之。嘗獨謁帝奏曰。右相有秘書。陛下未之知乎。蓋欲廢陛下立皇弟本康親王。而身任天下安危耳。言甚巧。聖聰惑焉。一條天皇正曆壬辰十二月四日。安樂寺詫宣記曰。我常思昔。其心不安。事元者。是昌泰三年正月三日。朱雀院行幸日事也。其事漏聽。年內成謀。明年有左遷事。韓文曰。事修而謗興。德高而毀來。周詩曰。萋兮斐兮。成是貝錦。喩讒人集作己過以成於罪。猶女工之集采色以成錦文。又暴公爲卿士而譖蘇公。蘇公作詩曰。二人從行誰爲此禍。杜詩曰。貝錦無停織。今云誰織。暗用蘇杜句法也。

元龜已卜變革運。延喜辛酉遷紫陽。離家洒盡千行淚。口語心時傳大唐。

略記曰。昌泰三年十月十一日。善相公奉菅丞相書曰。文章博士三善淸行言。某昔者游學之次。偸習術數。伏見。明年辛酉。運當變革。二月建卯。將動干戈。伏惟。尊閤挺自翰林。超昇槐位。朝之寵榮。道之光華。吉備公外無復與美。伏冀知其止足。察其榮分。四年辛酉正月廿五日。右大臣菅原朝臣。任大宰權帥坐事。年五十八。枹朴子。龜曰先知君。惟夫善相公先

見之知。非國之元龜耶。且勸使勇退。則忠愛之心可見矣。昌泰四年卽延喜之元。追而書之。故云延喜辛酉也。聖廟記云。西征旅懷有曰。東行西行雲渺渺。二月三月日遲遲。又有五絕曰。離家三四月。落淚百千行。萬事皆如夢。時時仰彼蒼。詩成未寫。大唐國裏喧傳。不亦異乎。樂天哭友詩曰。悲哉口語心。

西都僻在滄瀛曲。古寺鐘聲山更幽。浮雲蔽日長安遠。悄惹閑愁不倚樓。

日本紀曰。人王十四代仲哀天皇都筑紫橿日宮。又曰。齊明天皇元年乙卯。當大唐高宗六年。都大和國高市郡。辛酉五月（元明）天皇遷居于筑紫朝倉宮。秋七月天皇崩。又曰。安陪天皇和銅二年己酉。大宰觀音寺天智天皇御願。仍詔造畢。又曰。聖武天皇天平十五年。始置筑紫鎮西府。菅家書本云。菅公既到任。閑居不出門。有詩曰。都府樓纔看瓦色。觀音寺只聽鐘聲。類篇云。李白金陵鳳凰臺詩曰。總爲浮雲能蔽日。長安不見使人愁。菅公謫居編。名曰後集。其秋懷一聯曰。月輝似鏡無明罪。風氣如刀不破愁。聞者無不感激焉。瀛怡成切。海也。

平生久要唯淸客。千里飛來相慰藉。恩袍餘馥藹難消。憶昔淸涼侍宴夜。

或說曰。菅公平日癖于愛梅。甲第在長安宣風坊。五條號。置別殿純栽梅。而分紅白二種。凍蕊才開。淸玩終日。雅詠甚夥。其辭京也。潸然對花曰。東風有便爲我送香。雖無主管。汝勿忘春。西府荒涼元无嘉蔭。一夕冷香暗度。燕脂雪縞中庭。從而視之。乃別殿紅豔。若封殖者。世目曰飛梅云。大明初詩人洪恕。送僧東皈曰。日本曾聞北野君。愛梅瀟洒又能文。謫居西府三千里。一夜飛香度海雲。宋張祠部謂梅爲淸客。虛堂三友軒頌曰。淸客蒼官會

此君通鑑釋文。慰藉。藉慈夜切。安也。藉薦也。言安慰而薦之也。元歐陽玄君復愛梅。詩曰。如此暗香相慰藉。聖廟記曰。昌泰三年菊月十日以正三位右大臣大將侍宴於清涼殿。與酬獻詩曰。君富春秋臣漸老。恩無涯岸報猶遲。帝謝賞賜御衣。公蹈舞捧歸。珍藏巾笥自隨。今茲懷舊作詩曰。去年今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。恩賜御衣今在此。捧持每日拜餘香。論語注云。久要。舊約也。陪翁題嚴子陵釣灘圖曰。平生久要劉文叔。又宋仁宗賜進士詩曰。恩袍草色動。

雁足無書歲又三。箋天危立寶峯尖。賴有精誠動天鑒。天封七字拜新銜。

菅公後集。詠雪詩曰。雁足粘將疑係帛。烏頭點着憶還家。蓋用蘇卿燕丹故事。清熟悲健有味外之味。子美詩云。北書不至雁無情。比良宮詫宣記曰。我家後集二句。如離家三四月與雁足粘將疑係帛。若人誦之則使我有與矣歟。或說云。西都有巨岳。名云寶幔嵩。菅公既不賜環。[illegible]自料曰。人衆勝天。天定勝人。苟非上蒼。誰爲雪冤。遂三沐裁疏。直到岳尖。爇香七日。鬚髮盡白。期滿之日。雲葉忽來。取綫章昇天。久之天滿天神四字謚降。蓋物利帝錫也。公慊然曰。是特表内證德爾。未足得自在神力。以脚尖踢向之少遷。又加大自在三字。黃金寶篆現於空中。於是公意充然。便九頓首而退。翹立之跡印于盤陀。今謂之天拜岩。元人陸雪樵游紫陽者久。淮南范之能寄詩云。日出扶桑輝半夜。山開寶幔倚層空。謂此也。韻書。箋或作牋。緯略曰。晉劉謐之與天公牋曰。昔辛西之際。遭湯旱流烟。今子疑誤寫亥之歲。値堯水滔天。宋蕭東夫古梅詩曰。湘妃危立老鮫背。會稽志曰。寶山巔號白鹿尖。李程周五色賦曰。德動天鑒。韻書曰。官吏階位

曰銜。樂天詩云。獨有詠詩張太祝。十年不改舊官銜。

佳城埋玉仲春抄。霧若花薦安樂樹。恩追徒稱火雷神。未免撩它六丁怒。

扶桑略記曰。延喜三年癸亥二月廿日。權帥菅原朝臣於大宰府薨。年六十。四月廿日。前右大臣菅原朝臣。詔賜本職。兼增一階。並弃昌泰四年正月廿五日宣命。令燒却之。勅號火雷天神。一云。延長元年閏四月十一日。贈本大臣位。又安樂寺託宣記曰。抑我是蒙攝政之詔。成功之身。朝家定憲何無其賞。只賜一階。如大山之上加一塵也。或記曰。菅丞相薨于筑紫榎寺。今安樂寺也。日藏夢記曰。菅公語日藏曰。卅三天呼我。字日本大政威德天。我眷屬十六萬八千惡神等。隨處致損害。我尙難禁。況餘神乎。火雷火氣毒王第三使者也。豫章詩曰。埋玉慟佳城。字書云。薦萎也。僧寶傳曰。雲居有神號安樂樹神。今借其字。賓遺直挽歌曰。恩追歿後榮。通鑑玄宗紀。能撩李日知嗔。注。撩蓮條切。取也。嗔怒也。言取怒也。韓詩曰。天官叱六丁。雷電下取將。

台嶺高僧公所欽。靈至候之儀觀偉。釋梵愍哀聽復讐。三詔入山師勿起。

釋書曰。釋尊意。姓丹生氏。平安城人。元慶三年上台山。習學有聲。十七落髮。二十一禮座主圓珍受戒。一紀之間究台教。又稟兩部密法于增全。蘇悉地于玄昭。一日菅丞相化來語曰。吾已得梵釋許與。欲償夙懟。願師道力無拒我也。意曰然。然率土者皆王民也。我若承皇詔。何所避乎。菅作色・適薦柘榴。菅吐哺而起。化作焰。坊戶烟騰。意結瀉水印擬之。其火卽滅。燒痕尙在焉。已而雷雨浹旬。鴨河大漲。人馬不通。於是乎。詔意赴宮。意車到河濱。激浪止流水不濕輪。安樂寺託宣曰。我每

日三度參帝釋宮愁訴之。後得自在。韓集曰。儀觀甚偉。肇論曰。釋梵絕聽而雨花。後漢書曰。天恩愍哀。漢書何奴傳。襄公復九世之讎。春秋大之。

答云牽土奈王臣。公便投袂色甚壯。盤飣嚼殘榴實珠。吐成活火燎屏障。

周詩曰。牽土之濱。莫非王臣。左傳曰。楚子投袂而起。注。振也。韻書曰。飣置食也。范石湖田園詩曰。莫嗔老婦無盤飣。咲指灰中芋栗香。梅堯俞安榴詩曰。割之珠滿盤。不待鮫人泣。尚書曰。若火之燎于原。前南禪投老和尚有天神贊曰。榴實化成三昧火。梅花飛度九州雲。

黑雲壓城掛龍雨。象駕還呈截流機。帝改元年圖長久。佞臣震死雷霽威。

李賀詩曰。黑雲壓城々欲摧。甘露集曰。已収一雯掛龍雨。詩話曰。掛龍方言。祖師頌曰。象駕峥嶸謾進途。致中曰。香象渡河。徹底截流而過。扶桑略記曰。延喜九年己巳四月四日。左大臣藤原時平薨。年卅九。病痾之間。菅靈現形。制止淨藏加持。和漢年代記曰。延喜廿三年癸未春三月廿二日。皇太子保明親王無疾薨。擧世曰。菅帥靈魂宿忿所爲也。夏四月。右大臣本職及加階等。贈菅原朝臣某卿。此年改爲延長元年。安樂寺託宣記曰。我已得無實罪之後。帝釋宮召鎭國明神令勸糺之。隨卽種種災變面面出來。不堪其譴。改元爲延長之日。授大臣官。贈正一位。今爲我無益云。年代記曰。延長八年庚寅。天下疾疫。虹屢適日。星頻入月。夏六月廿六日未剋。雷電晦冥。霹靂下於清涼殿。黑暗無見。唯視炎光雷公燒害大納言兼民部卿藤原朝臣清貫。左近衛少將平朝臣希世。近衛二人等。秋九月天皇不悆。廿五日讓位於皇太子。遷右近衞府。同廿九日。

請天台座主尊意為師。出家受菩薩戒。不久登遐。略記曰。延長八年庚寅六月廿六日未時。大納言民部卿藤原清貫。年六十四。幷右中辨內藏頭平希世。及近衞二人。於清涼殿為雷所震。主上惶怖。玉躰不悆。遷幸常寧殿。座主尊意依勅候於禁中。每夜獻于加持。皇帝夢。不動明王火焔赫奕。威猛厲聲。加持聖躬。夢內尊重。覺後聞陀羅尼聲。則天台座主尊意也。九月廿二日壬午。天皇年卅六。禪位皇太子寬明親王。通鑑唐紀曰。魏徵苦諫。或逢上怒甚。徵神色不移。上亦霽威。胡三省曰。人主之威重於雷霆。霽威。言猶雨霽。則雷霆亦収威。

苦行賢師夢入冥。先皇囚在黑金城。秪緣往日屈忠直。化樂天宮空隔生。

日藏夢記曰。弟子道賢。以延喜十六年二月去洛入金峯山薙髮。時年十二。久之辟穀精修。天慶四年秋八月一日午時。忽舌燥氣絕。怳至一窟前。執金剛神傾金瓶水與賢。飲味甘美。神曰。我取雪山八功德水以救師渴耳。一大德和尚來執賢手上西岩。純金為地。光明照映。和尚坐七寶床。告曰。我乃牟尼應化藏王菩薩也。此處曰金峯山淨土。汝餘筭亡幾。及早修善。因賜名日藏。言宜歸大日如來修胎藏法也。又見地獄一鐵窟中有四人。其形如炭。一人衣覆肩者。招日藏云。我是日本金剛覺大王之子也。我居位尙矣。修種種善。造種種惡。惡果先熟受鐵窟苦。苦報盡後受善法。故當生化樂天。向者誤謫無辜賢臣。今隨苦所。上人還本國。首奏國王及大臣。為我造一萬卒堵婆。金剛覺卽寬平法諱。略記曰。朱雀天皇天慶四年辛丑八月。道賢上人冥途記云。弟子道賢今名日藏。立世阿毘曇論云。地獄梵名泥黎耶。以無戲樂故。此道於欲界中為下劣。名曰非道。婆娑論曰。地獄名不自

在。謂彼罪人爲獄卒阿傍之所拘制。不得自在故。無門關和尚鐵壁頌曰。巍然一座黑金城。唐書虞世南有五絕。一曰德行。二曰忠直。華嚴疏云。兜率陀此云喜足。後身菩薩於彼教化。多說喜足之行。故得少意悅爲喜。更不求餘爲足。又云。化樂天樂自變化。作諸樂具。以自娛樂。正法念經曰。受世間戒。信奉佛戒。生化樂天。大乘菩薩戒序云。三歸五戒得人身。十善八齋生天報。受具足戒。得阿羅漢之聖果。日藏夢記曰。道賢借藏王菩薩神力。禮慈氏尊於兜率天宮。其初入門也。樓閣重重。寶樹莊嚴。十六天女珠瓔被體。來迎稱讚。道賢問曰。七寶閣何人住處。第一天女以和歌答之。五十八白玉玷不付人入久留門爾也破安良奴。言已分散。予試解之。梵網以戒比如意珠。則五戒八齋戒等。能持不犯。其淨潔猶明珠白玉無瑕類者。所由而生也。故云。非白玉無玷人入來之門耶。

嗣王降勅加褒贈。四七驪珠謝使臣。新曬解釋從前恨。永矢涵濡壽域民。

略記云。人王六十六代一條天皇。諱懷仁圓融天皇太子。寛和二年丙戌。生年七歲受禪。六月卽位大極殿。正曆三年壬辰十二月四日。安樂寺詫宣記曰。我今有一絕句。示寺僧等。家門一閉幾風烟。筆硯抛來九十年。我仰蒼天懷古事。朝朝暮暮淚連連。又村上天皇紀曰。天德五年改元應和。以天德是火神號也。世傳云、新造內裡之柱。虫食卅一字。其歌曰。作倫又母屋計南莬原舍棟之板間不合奴限者。聖廟記曰。正曆五年天皇遣勅使於筑紫安樂寺。特賜正一位太政大臣大相國。勅使謁廟讀詔書。訖。瑞石忽現如玉板。有文粲然。蓋神君謝恩詩也。昨爲北闕被悲士。今作西都雪恥尸。生恨死歡其奈我。今須望足護皇基。勅使函封

歸獻焉。秘之內庫云。珍藏叟疏曰。蘇仙四七顆。驪珠散五彩。作湖山晴雨。盖謂西湖七言絕句也。李白詩曰。解釋春風無限恨。周詩曰。永矢不諼。注矢誓也。元結磨崖碑曰。涵濡天休。漢書曰。驅一世之民。濟之仁壽之域。

一宵擢秀北野松。廟食千齡著威烈。黍稷非馨至治馨。韶鈞九奏春秋節。

釋書天神傳曰。天慶三年七月十六日。詫右京七條坊婢文子。欲栖右近馬場。其女甚賤不能營搆。纔祠家側。天曆元年六月九日。始移北野。其制猶卑。九年三月。近州比良神官良種兒年七歲詫曰。我昔任僕射先。夢松生我軀而便折。是以我知上三公又逢貶竄。以故我所居之地。必當生松。不幾一夜間數千株松生北野。於是朝日寺沙門最珍與右京婢文子。戮力造靈祠。天德三年。右丞相藤師輔改規大厦。自爾靈威日新。略記曰。朱雀天皇天慶九年乙卯三月十一日酉時。天滿天神詫宣記曰。近江國比良宮禰宜良種男太郎丸年七歲。神詫之曰。我昔有所持笏。又有佛舍利。我從者曰老松富部者二人。是皆筑紫來。笏令老松持。舍利令富部持。而老松隨我到處每蒔松種。我遷右近馬場必可生松。松我像也。爲我設會。當作音樂與論義也。今北野廟二月八日祭祀惟謹。東坡潮州韓文公廟碑曰。能信於南海之民。廟食百世。北史隱逸傳序曰。望古獨適。求友千齡。尙書曰。至治馨香感于神明。黍稷非馨。明德惟馨。李韓集序曰。鏘然而韶鈞鳴。史記趙世家曰。鈞天廣樂九奏萬舞。慈氏空華翁住相州黄梅院日。有祭天神文曰。威靈既顯。神化旁敷。松于北野。梅于西都。神君昔有誓于八神節。酒食之文。其末云。以斯善自他同救。拔三界後趣。空寂。嗚呼有願必從。無到不現悲拔慈。予今正時

哉。然神君之言曰。心能合眞道者。雖曰不禱我必護之。然則姦耶鮮仁而汲汲於聞名破利者。日趍鉏砌右遶千匝。香雲彌空。神其吐之矣。傳云。神聰明正直而壹者也。又云。神不歆非類。或云。凡君而仁。臣而忠。父而慈。子而孝。兄弟能懷。朋友有信。或行義方皆文雅。是所謂眞道也。予曰似矣。近猶未也。詎宣記不曰乎。爲我設會。必當奏音樂論法義也。夫樂者聖人之所以感天地通鬼神安万民。而可以滌邪導和矣。論義者何。蓋主客論難以激揚。夫法華開權顯實心法之微妙者也。布袋和尙偈曰。十方世界最靈物。一切不如心眞實。是知仁義忠孝文雅之道。且約世俗諦則差爲賢行耳。非我神所謂勝義諦眞實道也。予愚管乃謂。若人欲得我神之慈護。則可整心慮以趣菩薩〔提歟〕乎。昔人云。菩提心卽萬行之本。卽此發心便名爲行。法句經云。人壽百歲情欣放逸。不如一日皈心空寂。

遺文復見元和體。只恐前身是樂天。兜率皈期殊未晩。醉吟且作海山仙。

唐書元稹傳曰。與白居易友善。工爲詩善狀咏風態物色。當時言詩者。稱元白焉。自衣冠士子。至閭閻下俚。悉傳諷之。號爲元和體。又白居易傳曰。居易字樂天。襟懷宏放。文辭富豔。尤精於詩筆。元稹爲集序曰。樂天未始言。試指之無二字。能不悞。又曰。其詩牛童馬走之口無不道。雞林賈人求市頗切。白云。本國宰相每以一金換一篇。白氏長慶集曰。客有説曰。近有人從海上回。海山深處見樓臺。中有仙龕虛一室。多傳此待樂天來。答客説云。吾學空門。非學仙。遇君此説是虛傳。海山不是吾皈處。皈卽應皈兜率天。自註云。予晩年結彌勒上生業。故云。又著醉吟先生傳曰。古所謂得吟於酒者。故自號醉吟先生。白

傳詩曰。是非都付夢。又曰烏頭因感白。又曰黃夾纈林寒有葉。又曰碌米𪎊牙稻。菅公詩云。萬事皆如夢。又云。烏頭點著憶還家。又云雪點林頭見有花。又詠霰云。𪎊牙米簸聲聲脆。皆奪胎妙也。白傳。花前難曰。南州桃李北州梅。且喜年年作花主。菅公和歌有梅花無主之語。蓋取諸此矣歟。白傳。蘇州法華院石壁經碑文略曰。攝四生九類入無餘。涅槃實無得度者。莫先於金剛般若波羅密經凡五千二百八十七言。壞罪集福。淨一切惡道。莫急於佛頂尊勝陀羅尼經凡三千二十言。菅公顯揚大戒論序曰。夫菩薩戒者。流傳不滅之敎也。盧遮那佛傳之於前。文殊師利弘之於後。故與彼談小乘者。一道而二門。與此說聲聞者。異器而同響。我本朝馳神眞際。求法道邦。先(傳賊)請業者偏執律儀。後研精者更得圓戒云云。於戲妙年之作。咄咄逼白傳。奇矣哉。張芸叟跋黃孝先詩後曰。不期元和長慶之風。復見於今日。予於菅公亦云。

世言圓通大士變。左遷捐館日五々。更分胎獄與生天。看來長袖解妙舞。

釋書天神傳曰。世稱。十一面觀自在靈應。聖廟記曰。大江匡衡齋居致祭。其文曰。右天滿大自在天神。或鹽梅於天下輔導一人。或日月於天上照臨万民。就中文道大祖。風月本主。翰林之人。尤可夙夜勤勞者也。其夜匡衡夢中見天神。排寶闥宣曰。汝文高妙。能感我心。抑日月於天上之句。非神叵測。則汝固通神矣。我是本地觀音也。按系圖云。大江朝臣匡衡。式部大輔。乃醍醐藏人維時孫。一條藏人擧周父也。法華文句曰。寶光天子。是日天觀世音應作。又十一面觀音經曰。昔爲大仙從功德光王佛受神咒。以十一俱胝諸佛所說故名十一面焉。又楞嚴會上二十五聖者。各說圓通。

文殊奉佛勅。擇圓根而以此方敎體在音聞。推觀音以爲之狀元。因而擅稱焉。菅公以昌泰四年正月廿五日謫。以延喜三年二月廿五日薨。皆表圓通五々之數。可謂藏身露影也矣。若以法界海惠照了。諸相則地獄。天宮皆淨土矣。尙何鐵窟化樂之足分哉。然大士無爲心內起悲心。現宰官身現自在身。及示天獄等事。所圖欲令毛道凡夫知因識果發菩提行耳。古德偈云。良哉觀世音。全身入荒草。是也。予故有妙舞之喩。韓非子曰。長袖善舞。左遷損館。並出史記。天台無量壽疏曰。夫樂邦之與苦域。金寶之與泥沙。胎獄之望華池。棘林之比瑤樹。誠由。心分垢淨。見兩土之昇沉。行開善惡。觀二方之麗妙。喩於形端則影直。源濁則流昏。

似聞嚴土號威德。衆色蓮開八德池。孤嶋中間安寶塔。層層影落軟瑠璃。

日藏夢記曰。大政天威德城有一大池。浩無邊際。微妙蓮華紛披。異禽翔集。皆金色也。池中有大嶋。廣員百里。白瑠璃爲地。玉樹行列。雜寶花馥烈。嶋有八峯。七寶宮殿八面開戶。內有八肘方壇。壇心有一蓮華。上有寶塔。寶塔內安措妙法蓮華經。金裝玉軸也。自餘嚴飾不在言也。大政天語佛子曰。是我作意特念處也。圭峯金剛經注曰。菩薩皆嚴土化生。稱讃淨土佛攝受經明八功德水。一澄淨。二清冷。三甘美。四輕軟。五潤澤。六安和。七飲時除飢渴等一切禍患。八飲已定能長養諸根四大。華嚴疏云。塔者訛也。正云窣堵波。此高顯。亦曰飯宗之所。石門文字禪曰。吳江一色軟瑠璃。劉賓客聯句曰。坐弄瑠璃水。

塔秘經王何所形。五蘊內有佛知見。返觀八辨肉團心。玉芬陀利身成現。

葛洪字苑曰。塔佛堂也。音他合反。瑜伽說曰。

塔婆者諸佛三摩耶形。衆生五取蘊體也。華嚴頌曰。三世諸衆生悉在五蘊中。法華曰。法華衆經之王。又曰。如來出現於世。爲欲令衆生悟佛知見故。秘密義記曰。一切衆生自心處。肉有八瓣。普眄反。狀似牛黄也。和合成蓮華。此蓮華中正遍知海。清涼華嚴鈔。梵語紇利陀耶。謂肉團心。卽五藏中心藏也。黄帝素問經曰。心形如未敷蓮華。中有九空。以導引天眞之氣。神之宇也。爲君王之官。神明出焉。唐譯華嚴曰。芬陀利花敷榮水中。疏曰。芬陀利卽白蓮華。亦正敷榮時也。大敎王聖觀自在軌經說譬喩伽陀曰。譬如清淨妙色蓮。雖生泥中不可染。如此衆生處煩惱。悉得淨清於三界。菩提流支法界性論曰。佛成道後四十二年。說法華經。永明宗鑑錄曰。妙法蓮華經者。妙法卽是絕待眞心。稱之曰妙。蓮華以出水無著爲義。卽喩心性隨流墮凡而不染垢。返流出塵而不着淨。文字性空。目之爲經。比良宮詫宣曰。一大事因緣不可思議也哉。盖謂此爾。

此經雖然無文字。八万法門皆揭示。展則量包大千界。卷之不盈方寸地。

法華曰。此經開方便門示眞實相。天王般若經曰。摠持無文字。云云(々々歟)顯摠持。止觀輔行傳弘決曰。明四諦境。八万四千不出一心者。小乘薩婆多論曰。佛爲衆生始終說法以爲一藏。如是至八万。有云。一座說法以爲一藏。有云。佛自說六万六千偈爲一藏。有云。塵勞有八万說八万法藥。且擧大數故云八万。具足應云八万四千。若法華疏云。佛地三百五十。一一皆有十善。對四分六根故成八万四千。華嚴曰。譬如有大經卷。量等三千大千世界。書寫三千大千世界中事。一切皆盡。此大經卷全在一微塵中。頌言有一聰慧人。淨眼悉明見。破塵出經卷。普能益衆生。天台三大部補

注曰。居于方寸者。俗書説人心藏。唯方一寸。正法念經云。心如蓮華開合。提謂經曰。心如帝王。皆肉團之心也。列子曰。見于方寸之地虚矣。古詩曰。但存方寸地。留與子孫耕。

人人鼻直眼能横。本地風光書不成。十世古今唯一性。明如日面耀金鉦。

棗栢大士華嚴論序曰。有情之本依智海以爲源。含識之流摠法身而爲體。又曰。十世古今始終不離於當念。西蜀僧祖秀撰歐陽文忠公外傳曰。慶暦四年。文忠公於廬山謁圓通祖印訥禪師。從容問曰。默通佛理。使不媿其心。師何以見教。祖印曰。一枝梅。青條繫腰。白襪裹足。風流瀟洒。自在逍遥。殆非人世之所有也。僧誠敬不敢問焉。傍有人言。是北野天滿天神也。入徑山室。傳無準衣。欲問所由。惚爾覺焉。翌旦乃告藏光主翁普寬禪師。師驚異而敬之。數年後於應永甲戌。佐忠菴持聖像來。果符所夢。不可測也。藏光禪師。仍命畫工圖而求贊。贊曰。北野菅君。尙古賢臣。盛德於今。日日惟新。不離凡意。深明聖意。不即世人。乃現天人云云。應永丙子重陽。前南禪釋海壽書。又少林竹翁和尙天神畫贊題辭曰。世稱。園照之董徑塢也。一夕夢。吾北野天神竊詣丈室。受金縷伽梨以皈。而手携梅花一枝。豈不自標牓而著其迹乎。好事者繪以傳之云云。又有贊詞曰。菅氏相公元化人。至今廟食號天神。龍淵室内參禪去。蝶夢床前納拜親。却頂強分塵惑廳。山河不碍意生身。傳金襴外有何信。插袂梅花北野春。扶桑略記曰。宇多天皇寛平六年甲寅五月。唐客含紹入朝。八月廿一日。任遣唐使參議左大辨兼勘解由長官菅原朝臣某。生年五十一也。同日任遣唐副使紀朝臣長谷雄。生年四十九。又圓融天皇永觀二年甲申 六月廿九日 安樂寺詫宣記曰。昔

自少年時有入唐之心。出身之後被任大使。依有本意。早欲渡海。而副使長谷雄朝臣聊有相語。遲怠之間。昇大臣官。已以不遂。依彼本執。常在唐家。由是觀之。神君頂謁無準於雙徑也必矣。抑無準夢。烈大夫獻明珠者。豈非我神耶。何以言之者。盖珠以表其東海之神也。且神自稱能主一切災異。故獻廿一顆。以志八人入市之日。而我祖得恬然耳。淸淨海眼經曰。觀自在證圓照三昧。則今我神見我祖者。若合符節。顧弗偉歟。松雪居士高麗國禪源寺化緣疏云。爐薌不殄於芥城。鼓唄常騰於桑域。華嚴昇須彌山頂品疏云。不離覺樹而昇釋殿。譬猶明月流影徧應。高僧傳曰。佛將涅槃。告迦葉曰。姨母所獻金縷伽梨。慈氏成佛留以傳付。

參玄旨外討便宜。恰似擔泉帶月皈。江南是處梅花海。探得春風第一枝。

俗諺有討便宜之語。祖師偈云。擔泉帶月皈。越使諸發執一枝梅。以遺梁王。見于卯金刀說苑。大庾嶺上梅。南枝落北枝開。出于白氏。不語先生宋景文公詩云。江南寒意薄。未臘見梅芳。西湖處士云。佛之道以悟心爲本。閣下百世大儒。學行冠本朝。皆累世生體。道已有習性。而此習性謂之種性。亦謂之道種。今以失念生中華。爲名臣爲鉅儒。於道間斷。偏泥世敎。所以忘佛而尊仲尼。昔退之亦如此。晩召大顚。遂通禪理。居訥不敏。仰承下問。不敢不盡以告。若要默識佛理。卽是禪宗。便是聖凡平等之心。一悟一切。悟身世幻假悟之方。空自心。靈明如精金。躍冶百鍊益眞。外謬無質。生死本空。心體獨露。亘古長存。若能悟之。臨終得力。永出輪廻。文忠聞之。密契旨要。祖師曰。日而佛月而佛。山谷六言曰。金鉦半吐墻東。謂日也。神君嘗有觀音講式。今此一

章竊効其體。必有辨之者乎。
圓照七世善知識。凌霄峯頂唱祖機。神人未始離桑域。入室親傳金縷衣。
釋氏稽古略曰。宋光宗甲寅紹熙五年。無準禪師名師範。生蜀郡梓橦雍氏。是年十月。登戒參學。來杭州見松源岳於靈隱肯堂。充於淨慈。謁破菴先禪師於平江西華秀峯。頓悟玄旨出生。明州清凉移焦山。遷雪豆。詔住育王。遷徑山。召入對脩政殿。賜金襴僧衣。宣詣慈明殿陞高座說法。帝垂簾而聽。賜號佛鑑禪師。後建接待。御書賜額曰万年正續。又築空明月池上。牓曰退耕乞子。朝入寂。塔全身于圓照。嗣破菴祖先禪師。行業碑刻。粲無文所撰行狀云。住徑山明年寺燬。先是師夢有烈丈夫。授以明珠二十一顆。莫知謂何。及寺焚則四月廿一日也。師逆知其數。不動容變色。安衆行道如無事時。是年七月有旨入內。上御修政殿引見。師奏對詳明。上爲之動色。賜金襴及師號。又結菴一區爲飯藏所。賜扁圓照無準。佛祖宗派圖跋曰。予住山之三年。寺事稍暇。冬御日舒。曝背於凌霄之西窓。入睦睡三昧。大覺璉乞還山頌曰。六載皇都唱祖機。淸拙和尚贊無準頂相曰。師何以無準繩有規矩。万鍛洪鑪。乃文乃武。石田師之兄。破菴師之父。有如此之父兄。所以凌今震古。宴坐凌霄最上頭。白日青天撒白雨。七世人天大導師。濟濟兒孫徧寰宇。南堂和尙無準贊曰。中峯再世。破菴嫡傳。宗通眼活。鑑地輝天。眞四川本色。纛苴納七世衲子生寃。万仞龍門饒嶮峻。不妨袖手看風烟。悟心和尚天神贊序曰。明德年中僧夢見。有人獨立。龍鳳之姿。仙冠道服。袈裟之囊。挂乎半肩。又雙手袖揷。雪後園林纔半樹。水邊籬落忽橫枝。陸渭南云。錦城梅花海。十里香不斷。左經臣探梅云。試搖枝

上雪。恐有夜來花。東皐雜錄云。江南自初春至初夏。有二十四風信。梅花風最先。朱新仲小調云。流水泠泠。斷橋斜路梅枝亞。太史公論屈平曰。其志潔故其稱物芳。盖孤芳皎潔。占百花之魁。我神君所鍾愛。故卒章用之云。

梅城錄畢

這一卷。以東都秘書監小野求藏書寫之。

天明二年壬寅秋八月

伊勢介藤原長桓

塙先生刻類書也。屬余挍此篇。乃照弘文院秘本讐對。傍注補闕者四十一所。正誤者一百八十四字。

天明丁未三月

昌平啓事河世寧識

群書類從卷第二十一

神祇部廿一

廿二社本縁

伊勢事。

太神宮仁內外宮座ス也。仍二所太神宮登申ス。內乎波皇太神宮。外乎波豐受太神宮登奉號志。豐受乃宮仁毛皇乃字乎可幾被加之由。外宮連々申之。然而卜毛內宮乃支申ス事也。大方多外宮乃鎮座依天神勅爾縁起セ志ヨリ。式條仁在其乃法。末代乃今皇乃字乎可登被加申請留。神慮難測事也。又內外宮波非內外義爾。皇太神波宇治仁坐ス。仍宇治乃宮乎稱寸內登。豐受波遠宮仁坐ス。依遠津宮乎稱寸登外卜云々。先內宮波神鏡仁天坐也。昔天照太神天乃石窟仁入給之時。爲仁祈謝乃造登日形乃鏡乎云。是也。石凝姥云神乃造給之也。初乃度此鑄多利志波諸神乃意仁不合。是紀伊國日前仁坐ス。次乃度此鑄多留波其狀美麗仁座ス。仍此鏡乎眞賢木乃上津枝仁懸ヨ。大神仁奉覽天登。天太玉乃命乃稱寸留詞仁毛。吾之所捧寳乃鏡。明仁麗志天恰毛如加登汝命乃云。日神乃御形乎奉摸意也。其後太神此鏡乎寳登シ給天。天孫彥火瓊々杵尊天降給シ時。太神持天此寳鏡乎祝之曰久。吾兒視此乃寳鏡乎。當之猶留視那吾乎。可同床共殿以爲齋乃鏡登勅シ給幾。神勅等具在別記仁。以來神代三代。人皇第十代崇神乃御宇乃初天波免摩。同殿仁坐給。此乃御時神代乎去コト漸遠天シ靈威仁畏給天。石凝姥乃裔召天。大和國宇陀郡仁天神

鏡乎令ニ天鑄改一免。護レ身璽シ登給。此乃時天乃聚雲乃劔モ同久鑄改无。是波天乃目一箇神乃裔乃造也。此神乃劔波素盞烏神乃獻シ給シ劔波奈禮。由來不レ可レ知之。彼天目一箇波。昔天上仁シ天。雜乃刀斧等乎造シ神波奈禮。其裔乎召也。右天神代乃與利寶鏡登靈劔波登乎。別所仁崇天。皇女豐鍬入姬乃命乎之天。令ニ无奉レ齋。太神有ニ天託宣一。彼乃皇女頂戴シ天國乎遍歷給宇。第十一代垂仁天皇乃御宇。皇女大倭姬乃命乎之天。先仁如ニ頂戴世羅禮シ一神詫乃間々仁猶國々乎巡給シ我。同天皇廿六年丁巳拾月甲子仁。伊勢國度會郡五十鈴乃河上仁鎮座給宇。皇太神宮登崇天。無ニ幾二一尊廟天仁坐須摩。此時與里祭主神主等乃職乎任給幾。神劔モ同此宮仁座世之乎。景行乃御宇與利尾張乃國仁移シ給。今乃熱田神是也。依ニ事繁一不レ記レ之。內宮鎮座乃後。經ニ天四百八十年乎一。告ニ天大和姬命爾一。丹後國與佐乃眞井乃原仁坐ス豐受乃神乎奉ニ留羅一迎惠一。此年人皇第廿二代雄略天皇卽位廿一年丁巳仁當禮利。天皇毛御夢乃告阿利弖。仍明年戊午秋七月。差ニメ勅使乎一奉レ迎。同九月仁度會郡山田乃原乃新宮仁鎮坐寸。大倭姬乃命仁天坐。內外乃制度皆計定之也。神波天祖國乃常立尊御靈仁天坐寸。天孫瓊々杵尊。天乃兒屋根命。天乃太玉乃命毛。此相殿爾坐也。是與利二所乃太神宮仁天坐セ登毛。惣シ天伊勢太神宮登申也。奉幣乃時波以ニ天四姓乃人乎一爲レ使。其禮王氏大中臣齋部卜部乎四姓登云也。聖武天皇乃御宇天平年中仁大宰大貳藤原廣繼謀反乃聞阿利志時爾。爲ニ仁祈禱乃一初天在ニ行幸一云々。已上。

石清水事。

八幡宮。本宮波豐前國宇佐宮仁座寸也。人皇第十六代譽田天皇乃御靈也。第卅代欽明天皇乃御宇仁始天化現シ給宇。垂跡地非ニ一所仁一。今五處乃別宮登號寸是也。此天皇乃御案波胎內爾坐給シ與里神

異御坐シ幾。依弖住吉乃明神乃教爾。御母乃神功皇后新羅百濟高麗等乃國乎平計給幾。然禮波此國乎波胎内乃天皇乃可治給宇國也登有幾神託。垂跡之初ハ。我波譽田乃八幡丸登奈利勅之給利志與。八幡登和申也。

譽田和往昔乃御號。八幡和和光乃御稱也。

測爾奈利文武天皇乃御子開成皇子ノ出家志天攝津國勝尾登云所爾之天發シ天誓願乎大般若經乎書寫世羅禮志時。大菩薩化現シ天曰久。得道以來不動法性。〔自性〕示八正道垂權跡。皆得解脱苦衆生。故號八幡大菩薩云々。淸和天皇御宇貞觀年中。大安寺僧行教參詣シ天彼乃宮仁。一夏九旬乃間。叮嚀仁奉仕シ法施乎。大菩薩感應シ天阿彌陀乃三尊乃形仁弖化現シ多摩宇。其乃光明行教乃袈裟仁映徹す。有天種々乃靈告。帝都仁近久可令守護云々。行教件乃袈裟乎頂戴之天進發す。今乃男山石清水乃峯仁結比菴利乎勤行す。然而未計留仁達セ天聽仁。天皇乃御夢仁。男山與利在天光明。照す登宮中乎見給。翌日仁遣弖勅使見仁計留。行教仁尋遇。行教具仁奏聞之計連波事之由於。卽勅之天諸司造立セラ留神殿乎。自是擬之天宗廟仁被留獻セ官幣乎。宇佐乃宮遂連奈遠波。一代一度乃宇佐使等和不登替云々。一々細々乃神事和併當宮仁天有之。朱雀院乃御宇爾始天臨時乃祭乎被行。將門追討之報謝也。圓融院乃御時與利在行幸。後三條院乃御時。依御願爾。每年乃放生會之時公卿參議已下參向す。又神幸乃儀行幸仁比セラ留。六府乃將佐弓箭乎帶志天供奉す。上卿毛大臣參向度々乃例也。代々尊崇乃禮亦異他爾也。抑八幡三所登申波。中乃御殿和大菩薩。西乃御殿波神功皇后。東乃御殿和神武天皇乃御母。此神同殿乃事不測事也。是和海乃神乃女仁天坐す。定天有由緒。彼仁波獻神服乎。中和法師乃御裝束。西所〔兩殿〕爾波女體乃御衣也。法體乃御事和。昔聖武天皇東大寺建立乃時託宣阿利幾。

彼乃寺乎巡禮シ給宇仁。卽此乃寺仁天可ニ出家得度寸ニ由詫給天。如在乃儀乎被ㇾ行計留與利緣起也。又式部卿敦實親王。男體僧形乃二像乎造天。每ㇾ日御供乎被ㇾ備計留仁。或時。僧形乃御體者乎令ㇾ立給利奈。仍此御體乎石淸水乃外殿仁安置セラ禮幾。保延乃回祿仁燒給。依天假爾被ニ安置ニ仁シ。不ㇾ及ニ改造乃沙汰仁。又當宮乃祠官仁和紀氏輩補ニ寸之仁。行敎毛俗姓紀氏也。行敎乃舍弟和圓城寺乃益信僧正也。仍當宮乃初乃撿挍仁波僧正乎被ニ補任。別當和安宗大法師。是毛紀氏也。其後和撿挍別當及俗官。皆紀氏於波補寸。紀乃氏和武内乃大臣孝元天皇曾孫。子角宿禰乃後胤也。神功應神乃御代。專棟梁乃臣天登之補佐シ申計留左禮種因也。八幡大菩薩。初和筑紫宇佐仁下御寸。其後和聖武皇帝仲哀第四乃王子。十六代。百十歲。治天四十一年。乃御宇。奈良乃火以岐仁移リ坐寸。又和平岡仁。稱德天皇乃比和和氣氏安ㇾ寺仁申左留。次爾今乃男山八幡大菩薩和改□乎給幾。

自ニ稱德天皇乃御時ㇾ物毛不ㇾ被ㇾ仰云々。

八幡ニ三所登云事。御身和應神天皇。仲哀王子。后和依玉〔玉依歟〕姬。御母和神功皇后。子和□責ニ新羅ニ給之時。飛鳥乃大明神乎使天登之。自ニ龍宮ニ干珠滿珠乃玉乎借ニ龍王仁ニ給仁古曾。安久平計給我之。譬□䪼レウト也。云々。

本地事。行敎乃袂ニ移リ給之時和。阿彌陀乃三尊仁天坐寸也。出家毛仁釋迦三尊云々。眞言愛染云々。

若宮事。應神八幡御姬三人。男子一人坐寸。其中爾若宮登申寸和男子仁天坐寸也。若宮四所登云和。姬宮三人共仁申寸登云利惠。若宮和仁德天皇也。卽平野大明神也。已上。

賀茂事。

賀茂社。賀茂和山城之賀茂。葛木乃賀茂登天坐寸。各別之神也。葛木乃賀茂波鴨登書里計。都波八重事代主乃神登云。賀茂家乃陰陽道乃祖神都天奉ㇾ齋也。此

地神ニテ坐寸。伊豆國賀茂郡仁坐寸留三嶋乃神。伊豫國仁坐寸留三嶋乃神。同體仁天坐寸登云惠利。天神部和中世登毛。何乃神登云事所見不詳。今下上乃有ニ二社ニ。下平波鴨乃御祖登毛申ス。上波賀茂乃別雷都號寸。鴨賀茂昔波通也。今波下上各別用之。鴨賀茂雖ニ各別奈利登一。以ニ賀茂ヲ爲レ本。但シ下上登云事和依ニ留御祖乃儀仁歟。伊勢毛託宮仁天。外宮乃祭禮乎先仁世羅留々類乃事歟。上乃祠乃官和賀茂乃縣乃主。下乃和鴨乃縣乃主ト云。本和同祖也。昔神武天皇東征乃時。山中嶮絕仁之天路乎失比給惠利。此時神代魂命乃孫鴨建津命。武津〔身歟〕第登毛云宇。化シ天大鳥都奈留。翔里飛天良賀乎奉ニ留導天中州仁達シニ。天皇褒ニ天其功乎一厚ク貴給宇。是乎天乃八咫烏ト號ス。彼乃苗裔此社爾奉ニ留仕一由來和無仁所見一阿羅寸。此乃御事自ニ利昔一殊爾被ニ尊崇。又嵯峨乃御時與利。齋宮仁以ニ天皇女乎一齋院都寸。又四月乃祭禮爾近衛府已下之使乎立羅留。遷都以前與利乃事也。又寬平乃御時與利十一月爾臨時乃祭阿利。有ニ由緒一。圓融院以來行幸阿利。八幡惠有波御行幸一。必ス當社爾有ニ行幸一。仍天兩社行幸登號寸。後一條乃院行幸乃時。山城乃國乎寄進シ給宇仁仍。今者當國乃惣社仁天坐ス也。凡曾伊勢八幡賀茂乎波三社都天神領毛餘社爾不レ准。崇重禮異ニ他奈留者也。已上。

松尾事。

松尾社。垂跡乃緣起。鎮座乃時代。古記不ニ慥[illegible]常爾波賀茂乃別社都申奈利。然而日本紀。舊事本紀仁不レ見事和。偏爾難レ用之。上七社乃第四ニ出給事不ニ聊爾奈羅一事也。舊事本紀乃中仁素盞嗚尊乃御子大歲志乃神。其御子乃中此神乃御事見給歟。比叡乃神同體歟都見多里。人乃不レ知事也。可レ秘々々。已上。

平野事。

平野乃社。常仁波仁德天皇乃垂跡登申寸。或和又仁德乃御弟登毛云惠利。舊記不レ詳。當社與。源氏乃長者管

領之。正統是神主チ云也。等乃祠官毛長者乃宣仁弖補寸之。
藤氏乃長者乃春日等乃祠官毛如シ被加補。以之
思仁之乎。源氏乃氏神也。然而仁德毛祖皇仁和不
坐。若隼總別乃皇子歟。是波應神第八乃御子。繼
體天皇乃御高祖父也。猶可勘知寸。已上。

稻荷事。

此社乎波當乃說爾波弘法大師東寺仁住給計留時。御弟
子檜尾乃僧都實惠登云人。彼乃寺乃南大門仁被
計留仁徘徊。老翁嫗乃異體我奈留。數多乃男子眷屬乎率
志天。稻乎荷天遠與里休息世羅留々事乃體。直也人登不見。
僧都成天奇異乃思於告大師申寸。大師出給天
招請志此人乎中門乃下仁。物語志給計里。何乃所惠向
給登尋爾申左連計連波。比叡乃阿闍利傳敎大師事也。我等乎守護
世與登天招請勢羅奈利都留々答計連波。彼仁波比叡神專鎮守仁天坐シ天。
當寺爾佛法乎守給へ登計禮宣波承諾坐ス。仍大師與
此神同道有天。勝地乎擇天。今乃所爾鎮坐云々。卽東
寺乃守護登成多摩宇也。每年乃祭禮仁和。東寺惠入給。
中門乃供御登天。寺家是乎供寸。又太摩我里登弖必供
寸之。大師乃時乃舊儀云々。初乃體。稻乎荷志給利シ與稻
荷乃神號也云々。中古以來烈志天官社仁加惠上七社
仁給。無上神坐歟。本地事猶可尋之。稻荷行幸
事。後三條院行幸春日仁夜。帝御夢云。稻荷乃
御歌仁茅破屋布留神乃數仁毛入留奈羅波希有乃御
行乎與曾仁見摩志也。其翌日行幸稻荷社。仍當
社爲官幣神云々。法性房夢記云。容貌奇妙貴女人
參入。惣持次徘徊志天廊〔昇歟〕家乎禮拜寸舍利會乎。僧
正曰久。當山和大師結則之淨砌也。女人登山如
何。貴女對曰久。吾禮非凡女仁。是聖女也。故登
山無其憚身也。且和爲禮舍萬〔里歟〕之會場乎。且和爲
助山王之行化乎。自羅稻荷來。攀此乃嶝仁。其後
僧正勸請稻荷明神。崇法宿權現東頭。今聖女社
是也。已上。

春日事。

此神乃社波天兒屋根命仁天坐寸。藤原氏大中臣氏等乃祖神也。本社和河内國平岡也。此神御事。神代乃往。日本紀等仁見惠多利。事多ケレハ不レ注。天孫天降里給シ時。八百萬神乃首仁天卅二神。其中猶五部乃神。五部乃中仁毛第一仁天。殊仁天孫乎波羽翼シ給由シ。天照太神乃有ニ勅一幾。異ニ他一爾奈留御事仁也。當社鎮坐乃初和神護景雲二年中ノ事也。今和興福寺乃鎮守仁天坐寸。彼寺和本山背乃山科ニ阿里幾。大織冠乃建立奈利志乎。淡海公乃時今乃平城仁遷左連幾。其時波即勸請奈加里計留爾也。遙ニ隔ニ天年月乎一。景雲中仁遷シ給也。常仁和常陸乃白ニ鹿嶋一遷給登云傳多里。而留爾春日祭乃宣命仁和。鹿嶋仁坐寸武甕槌神。香取仁坐寸齋主神。平岡仁坐寸天兒屋根命乃神姫大明神登阿里。然者本社皆各別也。鹿嶋神古曾彼與里遷里給宇都毛。天兒屋根神乎平岡乎本社登都寸見多里。但所々仁志天四所坐歟。鹿嶋仁和其社各々也。社家秘之。香取仁和四所乃御殿分明也。然者藤氏乃祖和平岡仁坐寸。餘乃三所和寄宿神仁天坐也。依ニ天神代乃幽契仁一寄宿志給歟。就中姫大神相殿仁坐給事有ニ秘說一也。下野乃松岡仁遷給計留我。又鹿嶋仁遷給。大織冠誕生乃初。此神化現志天靈乃告乃事有幾登毛云也。縱依ニ都毛此說爾一。姫大神等和藤氏乃祖神仁和不レ坐云惠登毛。所々仁志天寄宿志給計留也。如レ此乃事。諸社仁有ニ留其類一者也。

鹿嶋四所事。第一鹿嶋第二香取。第三平岡。第四伊勢也。然波當ニ十六大菩薩仁一之時ハ。鹿嶋和愛菩薩也。香取和王菩薩也。鹿嶋本地和不空羂索也。又七月十一日ノ神事。新羅百濟乎被レ責日也逆土和鹿嶋乃妹也。

香取於經津主登云事。天津彥々火瓊々杵乃尊。又皇御孫尊天降天。筑紫日向國高千穗槵觸峯仁御寸。天照太神皇太神皇御孫乃內侍所神璽寶劔三

種乃神寳乎持下御志天。人壽八万歳與里百歳仁至ル摩天。皇孫。火々出見尊。不合葺尊。三代四十一万八千五百四十三年。此所仁御寸也。鹿嶋香取波天照太神乃政所仁天御寸之間多。天竺晨旦本朝乃年貢乎香取乃津仁付タル也。然ル間。香取乃明神乃飛子丸登申寸王子乎御使天。登志筑紫日向國ヘ年貢乎奉ル也。仍天飛子丸請取テ乞奉ル詞仁云。此後知仁天毛持來天唯仁般牟後知摩天毛不違不絶樣乃請取於可給之由乎申左連計理趣經於出留左連波。此乃故爾經津主登波申寸也。天照太神問云久。今日和可登行久在計禮波仰。鹿嶋立志天候都申寸。自之鹿嶋立和始摩留也。天照太神波三國主也登云事。可秘々々。千手乃婆蘇仙人理趣經於持給也云々。已上。

大神事。

此神和三輪乃神爾弖坐也。本和出雲乃大己貴乃神登同體也。出雲乃神ノ御名多々也。大己貴毛登大國主都毛大物主トモ云リ。今大物主乃御名乎波當社仁號志。大汝トハ出雲仁天稱之。此乃大神和素盞烏尊乃御子。御母后稲田姫也。或説爾波大汝ノ神和素盞烏乃五世乃孫。或ハ六世登毛云。共ニ日本紀仁見多里。日本紀曰久。大己貴神與志天言曰。夫葦原乃中國。本登自荒芒。至及ヒ盤石草木ニ。咸能強暴。然吾已仁摧伏莫不和順。遂仁因言。今理此國乎唯吾一身而已美。其可與吾此理天下乎者。蓋有之乎。于時神光照海乎。忽然登志天有浮來者。曰久。如吾逹不牟在者。汝能平此國乎哉。由我留吾在爾留故爾。汝得建其大造之績乎矣。是時大己貴神問曰久。則汝是誰耶。對天曰久。吾是汝幸魂奇魂也。大己貴神乃曰久。唯然ハ廼智知ヌ。汝和千是吾之幸魂奇魂。今欲ヤ何處仁住登ン。對曰。吾欲住於日本國之三諸山仁。故即營宮乎彼處仁使就而居。三輪之神也。已上日本紀。此神昔娶天三嶋乃溝樴耳

之女玉櫛姬於。未曙去。未曾晝到。於是玉櫛姬續苧係衣。至明仁隨苧尋覓仁經テ於茅渟縣陶邑。直指大和國眞穗御諸山。還天視苧乃遺乎。唯有三縈。已上姓氏錄說也。三輪卽三縈也。此神之苗裔卽知大神朝臣也。本云大三縈都。又大物主波大汝別名也。今以弖三輪乃神乎爲大物主登。彼神乃御魂爾弖坐寸禮ハ無相違。昔大汝神既ニ此國ヲ奉避。吾顯露所治事和。皇御孫當治。吾和將治幽事都弖。踏弖船乃枻海中仁隱給宇。其後大物主ノ神合弖八十万乃神乎。昇テ天誠欵乃至乎陳給計里。天神高皇產靈乃尊語天曰久。汝若シ以國神乎爲妻。吾猶汝乎有ト疏心謂。故爾今吾女配天三穗津姬乎妻登世牟。宜久領天八十万乃神乎。永久爲爾皇孫乃奉ト護令下勅。然ハ八十万神乃統領天登志國家擁護乃神登可ト成見多利。然者祟神天皇御宇乃初。國內仁災難シ給シ。倭迹々日百襲姬乃命仁憑テ曰ク。天皇何憂國之不治也。若能々祭我乎者。必當仁自

ヲ平矣。其後猶天皇及三人乃臣。同夜夢乃感仁依天。此神乎祭給爾。於是疫神始天息美。國內漸々謐仁シ天。五穀既仁成。百姓饒足ト云惠利。又高橋乃邑仁活日ト云人有リ。此乃人ヲ志天大神乃掌酒トス。此神乃祭日。活日神酒乎奉天獻留天皇仁。歌弖曰久。許能彌枳破。和餓彌枳那羅孺。椰摩等那須。於明望能農之能。介彌之彌枳。伊句臂佐。伊句臂佐。諸大夫等歌曰。宇麻佐開。彌和能等能々。阿佐妬耶毛。伊弟氐由介耶。彌和能等能渡嶋。天皇歌曰ク。宇麻佐階。彌和能等能々。阿耶毛々於。於辭賦羅箇禰。彌和能等能渡嶋。卽神宮乃門於開弖幸行云惠利。自是神酒乎彌和ト云也。又神功皇后新羅百濟高麗乎攻給弖登。筑紫仁天諸國乃兵乎召仁卽不集。此神告給事有里之加波。卽祭祟給乎。其後諸國乃兵參集トス見惠多利。然者。國家乃災難乎毛兵革乃時仁毛殊仁可祟給神仁氐坐也。已上。

大倭事。

此社和大國魂神仁坐ス。此神乃御事。諸説不レ同歟。但シ加ニ留仁料簡乎一。出雲乃神仁坐寸留歟。大汝乃神乎波大地主毛都大國主毛ト顯國玉毛都云惠利。玉波則魂乃儀也。然者出雲乃神乃又大和乃國仁座志給乎大和乃神登號歟。崇神天皇乃御代摩弖和。天照太神登同大殿乃内爾崇給。此時天照太神乎別所爾遷之給之時。此神毛仁(乎歟)皇女渟名城入姫命仁託給幾。皇女髮落體瘦不レ能ニ祭一登古事記阿里。其後市磯長尾市ト云人乎志天。大國魂乃神乎祭神主登都寸見惠多里。是又上古乃尊崇。他爾異奈留神仁坐寸也。已上。

石上事。

此社乎波又布留社都云。此神乃御事有ニ兩説一。一爾波素盞烏尊乃蛇乎斷劔乎波蛇麁正ト云。又和天乃羽々斷都云。古語仁和大蛇乎羽々都云。此劔石上乃社仁坐都云惠利。日本紀。古語拾遺乃説。或曰久。劔和吉備乃神部乃登毛所仁坐寸。出雲乃簸乃川上乃山是也登云。日本紀乃一説也。二ニハ天神饒速日尊天孫御兒也。先天降時。外祖高皇產靈神。神武爾授ニ十種乃瑞寶乎一給。其孫古宇麻志間見命登傳天獻ニル天皇仁一。天皇悅天鎮玉ヒ魂寶志都給字。即彼宇麻志間見乃命乎志天齋祭志。石上仁安置寸。仍彼乃命乃裔乎石上乃朝臣ト云。鎮魂都云和使ニ離遊之運魂鎮ニ身體之中府一之儀也。此乃十種乃寶乎一々津稱ニ志名乎一兇文志天布留也。仍布留乃神毛都號寸。十種ノ名兇文秘説也。更可ニ口傳一。此事憶仁舊事本紀爾見多里。世俗乃説爾。昔布乃依ニテ流仁計留。布流都云。依ニ天流連留仁摩留一布留毛都云事阿里。是極多留非説歟。舊事本紀乃兇文ニハ布瑠都書計里。已上。

廣瀬社事。

此社和風神仁弖坐寸。龍神毛都云惠里。此神天津柱國津柱都云御名阿里。昔伊弉諾伊弉冊尊乃天祖與里傳給志天乃瓊矛和。天乃摩逆矛毛登云。磤馭盧嶋仁持下給弖。此

嶋乃在處等乃事和深秘乃説阿利。此神彼矛預里給都毛云惠里。神乃御名乎天柱國柱都云惠留毛可レ有二深秘爾一也。更可レ尋之。已上。

龍田社事。

同風神仁天坐也。風神乃祭都云和。此二神乃祭也。

大原社事。

吉田社事。

此二社者春日乎勸請乃社也。依二所仁一稱二彼名於一歟。被レ祭二本社チ一上和。後代勸請乃神爾天。同時仁被レ祭事无二其謂一歟。然而藤氏乃繁昌乃後。風儀尊崇相同哉。氏后奈度和大原野仁行啓寸。昔乃與里事也。已上。

住吉社事。

底筒男。中筒男。表筒男仁弖坐寸。此神和伊弉冊乃尊。火乃神生二軻倶突智乎一時。被レ焦而終里坐寸。伊弉諾尊戀慕志弖。黃泉摩天追給仁。有二志弖種々乃誓一歸給宇。日向乃小戸乃檍原仁弖祓除志給登天。海底仁洗ヒ濯ク時仁化生給神乎底筒男登云。潮ノ中潜濯時仁生志給乎中筒男登云。潮乃上仁浮濯時仁生志給乎表筒男登云。是則住吉乃大神也。日本紀仁見多里。仲哀天皇爲二仁熊襲亂乎平シ一計。筑紫仁幸世シ仁。此神神功皇后仁詑弖告申給事阿里幾。天皇不二用給一。遂仁攻二熊襲一事不レ成崩玉幾。皇后恐懼給天更仁齋龍神ト成給仁。前乃神顯天。三韓乎可レ平之狀乎告申留左。遂仁三韓乎征伐弖シ大功乎立天。胎中乃天皇乃國乎成シ給幾。併此神乃功也。可二鎭座一所乎尋給里計。攝津國住吉乃郡仁可レ住宣イ計連波。今乃津守浦仁鎭祭連給。當社和四處仁天坐須也。玉津嶋乃明神毛古乃衣通姬坐。此四所仁祭給宇。住吉和。古與利和歌乃道乎護里給シ奈利。筑紫仁毛本都住吉都弖坐也。

日吉社事。

本和大比叡小比叡都天二神坐寸。今和七社都號寸。五社和後代乃勸請。此內仁毛聖眞子和山門草創ノ

比ヨリ聞給也。大小比叡乃御事。其證不同也。常ニハ
大比叡和三輪乃神。小比叡和地主弖仁坐都云々。昔
シ潮上仁異人乘船志浮遊志計留乎。祝部乃氏乃先祖奉
見天。勸請申志計連波。唐崎乃濱仁船乎付給計里。是則大
宮仁弖坐寸。三輪乃明神乃化現奈里都云々。地主和本來
乃神仁弖坐寸都毛云惠利。而留仁澄憲法印加山王講式云。聖
子乎和州三輪也ト書何哉是何哉。非无不審也。
大小比叡聖眞子和傳教大師乃時與見多里。度者乎
被請申志仁和。大小比叡。後神乃御爲登阿里弖。而仁彼神
受戒得度シテ菩薩號乎得給シ和仁三所坐也。其餘乃
四社和後乃勸請。無異儀。或說仁和聖眞子乎波八幡登毛
申也。爰仁舊事本紀說和。近江乃比叡乃神登弖松尾
同體都見惠多利。人不知事也。可秘々々。此神素盞
烏尊乃御孫也。謬弖三輪都毛申歟。若又二宮乎三輪
都毛可申歟。三輪和本出雲乃神仁弖坐寸。大地主乃神
都稱寸禮波。地主乃號相似多里。然者大宮和大歲神乃子。

二宮和大地主乃神也。親族乃神仁弖坐寸禮波。非無仁
其乃由。愚案雖有憚。社家乃說澄憲我式相違。不
一決事無疑。仍愚案乎毛加載多里。且比叡山トハ桓武
天皇傳教大師無二乃師壇仁弖坐ス。比叡盧仁依テ
山乃名都寸。此山王仁弖坐寸留故仁。比叡乃神登號寸。日吉
波比叡之轉語也。此說毛虛事也。舊事本紀仁比
叡ト云事分明奈留故也。以猿使者登寸留事毛有口傳。
異朝乃天台山乃神獼猴形也。天台章疏乃中仁神
僧乃曰阿登和留件神云々。傳敎皈朝乃時。一乃獼猴乎
渡志天衣乎造天着世シ无。今乃猴衣乃初也。彼獼猴乃後
胤繁昌シ。當社仁有トモ云惠利。又以神乃字チ口傳ト寸。
又取モ山王乃名ニ天台宗乃三諦合釋寸。山和竪
乃三諦。王和橫乃三諦也云々。凡山ハ止也。艮乃方
也。皇城乃在天艮爾止觀擁護乃神奈都利。其義相合
寸登毛云邊幾也。後三條院在坊乃時。御願仁天始天行幸
阿里。先朝乃御宇。始天祭禮乃時。上卿已下乃諸司乎

遣。又內侍參向寸。行幸乃時。禰宜上階乎被聽畢。名稱事照遠江之故ニ又名日吉。已上。

廣田社事。

神功皇后都毛八幡同體都毛申也。但不留憚故仁也。宗廟仁不准。若志八幡同體仁天毛坐勢波宗廟仁可准也。筑紫仁五所乃別宮都天坐寸。火事等阿禮波准天宗廟仁廢朝阿里。此社仁皇后三韓征伐乃時乃御甲冑幷爾如意珠等アリ。此寶珠和海中仁之天得給惠留由。日本紀仁見多里。左右仁不能波事也。如何樣仁毛皇后御事仁弖其由有神也。委可尋之。又攝社仁夷都號寸留和。蛭子仁天坐都毛申傳也。已上。

梅宮事。

此社ハ井手左大臣橘諸兄乃靈也。仍至今橘家乃長者管領寸留奈里。已上。

祇園社事。

此云感神院。播摩乃廣峯與里遷坐寸。牛頭天皇都號也。圓融院御時與里祭禮仁預給字。白河院御時。寵幸乃人阿里幾。時乃人祇薗乃女御都號寸。此人歸依仁天與白河院此社乎興隆志給。其後與里行幸阿里毛。又院中與里十烈乎被獻。已仁流例也。已上。

北野社事。

此神和大宰府乃天滿宮仁天坐寸。彼乃額仁天滿宮安樂寺部阿里。仍此北野乎毛宮寺都號寸。依天神託宣鎭座乃次第人口仁阿里。仍不注之。鎭座乃初兔。九條乃右丞相親造之天。次第乎取置天被造進計里。其故仁也。常乃社乃體不相似也。代々乃作文仁和北野聖廟都書多里。後宇多院御幸阿里弖作文被新爾毛如此。而乎先朝行幸。始天作文阿里。有天沙汰北野乃社登被書。廟登云字有憚故也。已上。

丹生社事。

大和國仁坐留丹生河上乃神是也。雨師登毛申寸。仍祈雨乎。止仁和雨乎別志天當社仁奉幣申左留。已上。

貴船社事。

此神乎波賀茂攝社也。祈雨止雨乃時和丹生都同久奉幣勢羅留。仍當社ヲ加弖廿二社ト號也。此廿二社幷仁上中下乃品於被レ定事。中古已來事也。皇城乃近境仁取弖。別志弖宗敬乃神乎被レ定。細々仁臨時乃奉幣アリシナリ。此外皇都乃近國仁毛式內式外乃神多久坐寸。撰定乃義難ニ測里一。然而已仁數代乃風儀也。仍大概注之。況ヤ諸國乃神仁和異ニ他爾一神靈毛有レ功之廟社乃美坐寸。式文披見シ天常仁念申給邊幾也。且波此國仁臨天波物時天國津神乎毛敬ヒ。神乃次第乎毛辨。齋祭留邊幾也。熊野乃神靈驗新爾座寸。又有ニ天子細一。宣命等乎毛餘神仁不ニ相交一。出雲神ハ我國乃大地主仁天坐寸。鹿嶋乃神香取乃神波天孫光臨乃前使都志天。葦原乃中津國乎謐給幾。熱田乃大神和天聚雲乃正體仁坐寸。昔波伊勢仁同坐給キ。尤可レ奉レ崇神也。筑紫乃宇佐和石清水乃本宮也。香椎和神功皇后乃御靈。筥崎等乃別宮。又宗廟仁被レ准。伊勢仁毛神直日大直日乃神登申和天照太神乃荒魂也。如レ此事能々可ニ尋知一者也。已上。

廿二社畢

右二十二社本緣以印本挍合了

群書類從卷第二十二

神祇部二十二

二十二社註式

二十二社事。

人皇六十二代村上天皇治十九年康保二年乙丑霖雨經レ月。九天覆レ雲。依レ之閏八月廿一日被レ奉二獻官幣於十六社一止レ雨。

伊勢。石淸水。賀茂。上。下。松尾。平野。稻荷。春日。大原野。太神。石上。大和。廣瀨。龍田。住吉。丹生。木船等。

第六十六代一條院治五年正曆二年辛卯炎天送レ日。萬物變レ色。依レ之。六月廿四日祈雨奉幣時。加二吉田。廣田。北野。以上三社一被レ奉二獻官幣一爲二十九社一。

吉田。廣田。北野。次第事。可レ爲二住吉次丹生之上一由宣下。

同五年二月十七日祈年祭時。加二梅宮一被レ奉二獻官幣一爲二二十社一。

梅宮事。可レ爲二吉田之上住吉之次一由宣下。

第六十六代一條院治十年長德元年乙未二月廿五日被レ奉二獻臨時官幣一之日。加二祇園社一爲二廿一社一。

第六十九代後朱雀院長曆三年己卯八月十八日。被レ奉二獻官幣一之日。加二日吉社一爲二廿二社一。

日吉社事。可レ爲二住吉之次梅宮上一由宣下。

二十二社次第幣數。

上七社。伊勢。石淸水。三本。賀茂。二本。松尾。二本。平埜。四本。稻荷。三本。春日。四本。

中七社。大原。四本。大神。一本。石上。一本。大和。一本。廣瀨。一本。龍田。二本。住吉。四本。

下八社。日吉。梅宮。吉田。四本。廣田。祇園。北野。丹生。木船。一本。

以上廿二社。

太神宮。臣下奉幣不容易。

式云。王臣以下。不得輙供太神幣帛。其三后。皇太子。若有應供者臨時奏聞。

一本。祈雨十一社。

天雷。水主。木嶋。山城。乙訓。同。平岡河內。恩智。同。廣田。攝津。生田。同。長田。坐欒。垂水。人皇六十二代村上天皇治十七年應和三年癸亥七月十五日之例。

同方角事。口傳云。近社。自當時在所宛之云々。

震。吉田。巽。伊勢。稻荷。祇園。離。春日。大神。石神。大和。廣瀨。龍田。住吉。丹生。

但春日一社之外不卜之。龍田。先例入坤方。住吉。人皇六十一代朱雀院治十五年天慶八年七月二日炎干御卜。全入坤方。此外先例。園韓神。第七十四代鳥羽院治十年永久五年六月炎干御卜。入離方。

坤。石清水。大原野。石清水。雖入離方。先例爲坤神。兌。松尾。梅宮。廣田。但松尾先例入坤方。乾。平野。北野。坎。賀茂。貴布禰。或艮。艮。鴨。日吉。

或本云。先例。

丑寅。賀茂。辰巳。伊勢。祇園。稻荷。未申。石清水。梅宮。松尾。大原野。戌亥。平野。北野。

二十二社。

延喜式曰。太神宮三座。在度會郡宇遲鄉五十鈴川上。

天照太神一座。謚號皇親神漏伎。日本書紀云。伊勢國礒宮太神。此御名也。

相殿神二座。左天手力雄神。右万幡豐秋津姬。或云。左天兒屋根命。右太玉命。

皇太神宮。此以前筑紫日向國天降座。人皇第一神武天皇以後九代坐宮中。第十代崇神天皇。幸遷大和國宇多郡。

第十一代垂仁天皇廿五年丙辰鎮坐伊勢。是謂礒宮。同天皇廿六年丁巳十月甲子遷度會宮。

齋宮。

同天皇廿五年丙辰倭姫命祭二天照太神一。立二齋宮于五十鈴川上一。是謂二礒宮一。又號二渡遇宮一。今內宮是也。

第八十九代龜山院 治十三年 文永九年壬申愷子後嵯峨院皇女退下。

第九十五代後醍醐天皇治十一年元德二年庚午建武元年甲戌雖レ有レ入二御野宮一。無二群行一。

荒祭宮一座。太神荒魂。去二太神宮一北廿四丈。

伊佐奈伎宮二座。伊弉諾一座。伊弉冊一座。

月讀宮二座。月夜見一座。荒魂命一座。去二太神宮一北三里。

瀧原宮一座。伊勢與二志摩一堺山中。太神宮西九十里。

瀧原竝宮一座。

伊雜宮一座。志摩國答志郡伊射波神社也。

內宮所攝廿四座神名。

朝熊社。　園相社。　湯田社。　田乃家社。　蚊野社。　鴨社。　大土御祖社。　國津御祖社。　朽羅社。　伊佐奈美社。　津長社。　大水社。　大國玉比賣社。　江神社。　神前社。　粟皇子社。素戔孫。　久具都比賣社。　奈良比良社。　[illegible]榛原社。　御船社。　坂手國生社。　狹田國生社。　多伎原社。　川原社。

今案。此末社倭姫齋宮。勸請也。

度會宮四座。在二度會郡沼木鄉山田原一也。去二太神宮一西七里。

豐受太神宮一座。

相殿神三座。左大一座。天津彥々火瓊々杵尊。右前二座。天兒屋根尊。太玉命。

人皇廿二代雄略天皇廿一年丁巳天照太神御託宣備。我御食津神。自二丹後國與佐郡眞名井原一奉レ迎。彼神我朝御食夕御食可二調備一。又祭レ我奉レ供之時。先可レ奉レ祭二豐受神一也云々。

同廿二年戊午秋七月。從二與佐郡眞名井原一遷二坐于伊勢國度會郡山田原一。內宮鎮座之後。經二十代一〔日紀〕及二四百八十四年一鎮坐也。

每月朝夕御饌。自二外宮一賚二參內宮一。而人皇四十

五代聖武天皇六年己巳。今年改二元天平一。正月十日。於二途中一汚穢。永止二賽參事一。於二外宮御氣故（殿歟）一備二進内外宮御饌一也。

度會宮所攝十六座。

月夜見社。艸名伎社。大間國生社。度會國御神社。度會國玉比賣社。田上大水社。志等美社。大川内社。清野井庭社。高河原社。河原社。河原淵社。山末社。宇須乃野社。小俣社。御食社。

祈年。

人皇四十代天武天皇白鳳四年乙亥二月甲申始レ之。三千一百卅二座。欲レ令二歳災不レ起時令順一度。

神祇官祭。

七百三十七座。案上三百四座。案下四百三十三座。

月次。六月。十二月。十一月。

案上三百四座。神祇式。儀式。

人皇五十六代清和天皇貞觀八年六月。見二國史一。

第五十二代嵯峨天皇弘仁年中。此祭始被レ行レ之。

神今食。

人皇四十四代元正天皇靈龜二年六月始被レ行レ之。天曆勘文云。神今食。月次祭。人皇五十代桓武天皇延曆九年庚午六月。於二神祇官曹司一行二神態一也。

新嘗祭。十一月中卯。同二于神今食一。開手數十二。其外同前。

神代。素戔烏尊見二天照太神一。當二新嘗時一。神代始也。

人皇二十三代清寧天皇二年辛酉十一月始レ之。濫觴見二于右一。一代一度云二大嘗會一。每年云二新嘗祭一。

人皇三十二代用明天皇二年丁未四月。始此祭行レ之。

以上四度祭是也。

神衣祭。四月。九月十四日。神代之濫觴也。

神祇令曰。謂二伊勢神宮祭一也。

例幣。九月十一日。新嘗祭。

人皇四十四代元正天皇治七年養老五年九月十

一日。始奉ニ遣官幣一。
第六十一代朱雀院 治九年天慶二年己亥始被レ行レ
レ之。天暦勘文云。於ニ濫觴一者垂仁天皇御宇也。
臨時祭。
人皇三十四代推古天皇廿一年癸酉有ニ臨時祭一。是
得ニ神語一隨レ教而祭。使王一人。齋部一人。卜部一
人。勅使。
行幸。
第四十五代聖武天皇治十七年天平十二年十月。
行啓。
第四十九代光仁天皇寶龜九年戊午十月。皇太子。
第五十代桓武天皇延暦十年辛未十月甲寅太子。
御幸。
第七十五代崇德院治三年大治元年。兩院。白河院雖レ爲ニ御法體一御參也。鳥羽院。
神三郡。
度會。多氣。飯埜。

宮川。
齋宮式云。度會川。御裳濯川。見ニ同式一。
職掌人。神式。
宮守物忌。地祭物忌。御鹽燒物忌。清酒物忌。酒造物忌。山向物忌。土師器作物忌。御笥作内人物忌。陶器作物忌。木綿作物忌。忌鍛冶物忌。御馬飼物忌。御笠縫物忌。日新物忌。菅裁物忌。御炊物忌。根倉物忌。
人皇七十二代白河院治五年承暦内宮註文。
御鹽湯内人。鎰取内人。御巫内人。土師内人。陶器内人。清酒作内人。山向内人。宮守内人。地祭内人。酒作内人。瀧原内人。副清酒内人。
以上。皆内宮人云々。
玉串大内人。宮掌大内人。番撫大内人。
内宮子良十人。童三人。女七人。此内一人荒祭。
外宮子良四人。内一人高宮。

館母。內宮一人。外宮一人。

以上。館母子良子。昇殿供奉者也。　鳥名子。地下駈役者也。

御體。

廣田。神功皇后。天照太神誨曰。我荒靈。不可近皇居。當居御心廣田云々。隨神敎以鎭坐。

日前神社。國懸神社。紀伊國名艸郡。

諸國散在。

內宮御同躰十社。　同相殿二社。尾張葉栗郡。宇夫須奈社。式內。手力雄命。　外宮十八社。以上。建治勘文乃如之。式內。河内國高安郡恩智神。

造替廿年。

內康永二。自元亨二廿二。　外貞和元。自正中二廿一。　內貞治三。自康永二廿三。

外康曆。自貞和元廿六。　內明德二。自貞治二廿八。　外應永七。自康曆二廿一。

石淸水。山城國久世郡。

八幡宮三座。式外。三所內男躰一。女躰二。神功皇后。玉依姬。

人皇五十六代淸和天皇貞觀元年己卯四月十五日行敎和尙傳燈大法師位。奉宣旨參籠宇佐宮。同八月廿三日。到來男山之邊。一宿之間。更倍信心祈願之。行敎和尙致誠祈請。將拜見權現大神之垂跡本身。爰行敎和尙袈裟之上現三尊。因是神殿內奉安云々。同九月十九日。差使木工權允橘良基。造立御殿六宇。三宇正殿。三宇禮殿。同二年庚辰造立寶殿。隨則安置御像。

延喜格曰。貞觀十八年丙申八月十三日官符。神主事。准宇佐宮置件職。

使始用納言事。

人皇七十八代二條院治五年長寬元年癸未五月十日臨時廿二社奉幣也。石淸水使權中納言平淸盛卿。次官右少將源國雅。但定文如例四位源憲雅朝臣也。俄以公卿爲使。

同社放生會事。

舊記云。人皇四十四代〔治號脫〕元正天皇六年養老四年庚申豐前守宇奴首男人〔之誤〕乎將軍止志大御神乎奉請氏。大隅日向兩國左元向。拒隼人等乎伐殺岐。大

神託宣。吾此隼人多殺部留。毎レ年放生會奉レ仕留倍之。
今件放生會興レ自二宇佐宮一。傳二於石淸水宮一。
人皇三十代　欽明天皇卄三年正月。顯二豐前國宇佐郡馬厩峯菱潟池一。今宇佐宮是也。
第四十八代稱德天皇治三年神護景雲元年丁未五月十八日御託宣云。明日辰時。沙門與成旦可レ受二三歸五戒一。自今以後禁二斷殺生一。但爲二國家一有二巨害之徒出來一者。非二此限一云々。
人皇五十九代宇多院御子敦實親王。奉レ造二立大菩薩御影一事。
後光嚴院御坐御影。弘法渡唐之時。自令レ奉レ圖給也。大師皈朝之後。被レ奉レ（給歟）安二置高雄寺一。而彼寺荒廢之後。鳥羽上皇尋召行。奉レ安二置件寶藏一云々。
　高雄山神護寺八幡御緣起。
人皇五十三代淳和天皇天長九年壬子九月廿七日官符云。從三位行民部卿淸丸。爲レ果二神願一。（給歟）寶龜十一年敷二奏此事一。天皇感歎。親製二詔書一。未レ行之間遇二讓位之事一。天應二年亦奏レ之。柏原先帝。卽位以前。詔書普告二天下一。至二延曆年中一建立云々。
　御位記。
人皇四十六代　孝謙天皇天平勝寶元年十一月。八幡託宣。向レ京東天。是日奉レ授二大神一品。比咩神二品一。　第五十五代　文德天皇　治八年天安二年己卯五月。比咩神一品。　人皇七十一代後三條院延久二年。始行幸。
　行幸。
第六十四代　圓融院　治十年　天元二年　三月廿七日。行幸。
　放生會。
第四十四代元正天皇養老四年。宇佐宮託宣。毎年放生會奉仕。
第五十四代仁明天皇承和十年。放生會。
第六十四代　圓融院　治五年　天延二年　八月十五

日。放生。仰雅樂。准諸節會。
第七十一代後三條院延久二年八月十五日。自
今年。上卿以下六衞府馬寮。准行幸儀。扈從御
輿。

臨時祭。

第六十四代圓融院天祿元始之。

宇佐八幡宮。延喜神祇式曰。豐前國宇佐郡。

三所。一八幡。二比賣神。三大帶姫神。神功皇后息長足姫。
或書曰。豐前國宇佐郡菱形山廣幡八幡宮。坐郡
家東馬城峯頂。人皇四十五代聖武天皇神龜四
年歲次□。就此山奉造神□。因名曰廣幡八幡
大神宮。舊記云。人皇三十代欽明天皇御宇。豐前
國宇佐郡廐峯菱潟山間。現三歲小兒。立竹葉
託宣云。我是日本人皇十六代譽田天皇廣幡八
幡麻呂也。我名曰護國靈驗威力神通大自在王。
國々所々跡垂於神道。是初顯御坐。
人皇四十八代稱德天皇神護景雲三年。道鏡皇
位事。和氣淸麻呂勤宇佐使事。
第五十六淸和天皇御代。遷坐于石淸水。
古老口傳云。應神天皇。神功皇后。玉依姫。稱之
三所。如延喜式者。三所中。男神一躰。應神天皇
是也。女神二躰。大帶姫神功皇后。幷比咩神是也。
已上。平野神主神祇權大副兼前註進之。
據此等文。八幡大神者三所之垂跡。吾朝之宗廟
也。

筥崎宮。

或云。一應神。二聖母。三竈門。建治御勘
入石淸水內。
延喜式神祇云。筑前國那珂郡。八幡大菩薩筥崎
宮一座。式內。
人皇六十代醍醐天皇治廿四年延喜廿一年六月
廿一日。大菩薩御託宣云。吾穗波宮柱三惡有之。
欲移住筥崎松原。其故昔天下國土平鎭護始時。
戒定惠之筥留置志松原奈利。仍號筥崎。末世古敵

新羅禍害發物留。筥崎松原仁建立新宮。可降伏新羅之由書付弖。吾坐下置弖。其共石居。柱乎立弖。宮殿乎造向。役新羅弖。〔後世〕自然降伏消除志奈牟云々。

香椎宮。筑前國糟屋郡。式外。神功。武內。八幡。住吉。

或書曰。加襲宮者。昔仲比古天皇仲哀。之后息長足比咩神。神功。及大臣武內宿禰命。今夜此行宮謀伐新羅。從爾已來便爲廟堂。后宮在東。臣廟在西。

大宰府例曰。二月。帥已下筑前國郡司以上。奉拜借飯廟宮云々。於是再拜兩段。帥奏曰。帥不在。大少貳見在奏之。明神等八嶋國知里志倭根子天皇大前仁。大宰帥位姓名等。牟〔久麻〕仁司仁人毛止恐武恐美美奏賜止波久奏。訖再拜同兩段退。更參入於大臣殿。再拜兩段退出。時古狀云。香椎宮者。神功皇后宿禰大臣。在此廟宮。謀伐新羅。

五所別宮。各式外。同石清水。

筑前國大分宮。神躰同于筥崎。寛元年中依御託宣坐豐後國大分郡。武內。　肥前國千栗宮。天平寶字年造替宮殿。式外。　肥後國藤崎宮。　薩摩國新田宮。始雖降日向國。不禁神宮。遷於薩摩國。鎮坐龜山。　大隅國正八幡宮。桑原郡。

已上。八幡大菩薩御垂跡也。

正宮者始在大隅國兩八流幡。後〔在歟〕主豐前國坐宇佐郡大隅宮。

大御前大比留女。兼右案之神功歟。　南面。應神。　若宮。仁德。西向。武內。

家記云。人皇三十代欽明天皇五年甲子顯座。第四十代天武天皇白鳳二年癸酉二月八日高良託宣。譽田天皇御宇爲晨昏武略之健將。

竈門。延喜式神祇云。筑前國御笠郡。

延喜二十一年六月廿一日御託宣云。竈門宮波我伯母仁御坐須。

高良。社解云。三所。中殿高良。左八幡。右住吉。

延喜神祇式云。筑後國三井郡高良社。名神。

人皇四十代天武天皇白鳳二年二月八日。依㆓詫宣㆒勸請。
人皇七十四代鳥羽院天仁二年己丑十一月師時卿記云。三所內。比咩大神。應神天皇御娘云々。
同記云。江帥云。高良大明神者武內大臣也云々。此說非也。高良者藤大臣連保之御事也。神號曰㆓高良玉垂命㆒。以㆓乾滿兩珠㆒令ㇾ奉㆓行之㆒。故奉ㇾ號㆓玉垂㆒。住吉大明神之化身也。
又云。玉垂將軍。右丞相。應神御乳子也。應神武將云々。本宮下十町許。
武內社。因幡國宇陪宮。大和葛城。美濃不破。同日同時顯也。
人皇三十七代孝德天皇大化四年。造㆓社壇㆒。
景行。　成務。　仲哀。　神功。　應神。　仁德。
奉ㇾ仕六代。壽量三百八十餘歲。
長門國二宮。
社解云。當宮有㆓仲哀天皇之后妃神功皇后㆒。應神天皇之聖母也。

三所。　神功。本社。　仲哀。　應神也。
高良。武內。移㆓繪像㆒勸請。
同國龜山八幡宮。
三所。　中間應神。　左神功。　右仲哀。
第五十六代　淸和天皇貞觀元年。奉ㇾ遷㆓男山㆒之時。行敎和尙造㆓行宮㆒勸㆓請之㆒。
同國阿彌陀寺八幡宮。同㆓于龜山㆒。
無㆓朝家之式文㆒。仍年紀不ㇾ得ㇾ勘。近代之勸請歟。
又云。龜山之末社也。九月十五日祭禮也。
同國豐明宮。
中間神功。　左仲哀。　右應神。
從㆓香椎宮㆒依㆓神詫㆒奉ㇾ遷ㇾ之。
同國住吉社。
底筒男。　中筒男。　表筒男。
此外。諏訪八幡等二社。後人勸請也。
征㆓伐三韓㆒給之時。神功皇后仁神詫阿利。依ㇾ之。歸朝之後御勸請也。

周防國朝倉八幡。神躰。同宇佐。
人皇五十六代清和天皇貞觀元年。立行宮勸□。
同國今八幡宮。
宇治皇子也。不分明年紀。後人之勸請歟。
山城國六條佐女牛八幡宮。神躰同石清水。
人皇七十代後冷泉院治八年天喜元年。依勅願御勸請。祖兼親奉行之。伊與守賴義御沙汰也。
同高倉八幡宮。
人皇九十七代光明院御宇康永二年甲申等持院勸請。兼豐奉行之。
八幡神靈次第。
惣而本社和八幡太留程仁。第一和應神天皇也。第二神功皇后也。仲哀天皇輪父神爾天御坐寸程仁。雖爲第二號。神功皇后三韓於征給時。應神胎中仁坐天。母神與里卽位給布故仁。第二神功皇后登奈之。第三仲哀天皇止奈須。第四仁德天皇也。此神和應神御子。殊仁仲哀輪仁德乃祖父也。更仁仁德乃下仁。仲哀天皇於用由邊加羅須。

右此注。兼右口決也。秘中之深秘。

仲哀天皇。御世務四十五年。御治世九年。諱足仲彥。父和日本武尊。河內國白鳥大明神顯坐。母兩道入姬命。成務十九年己丑御誕生。御卽位。四十四歲。壬申歲也。容顏美麗。御身長一丈。住吉之御再誕。仲哀九年庚申二月六日癸卯長門國於豐浦宮崩御。五十二歲。以武內宿禰葬河內國長野陵。越前國敦賀氣比大明神。
神功皇后。御世務一百年。御治世六十九年。御諱氣長足姬尊。父和氣長宿禰王。開化天皇四世御孫也。母曰葛城高顙媛。成務天皇四十年庚戌御誕生。仲哀九年庚辰三月。自討新羅高麗百濟。十二月生譽田天皇於筑紫。六十九年夏四月。大和國稚櫻宮崩御。百歲。冬十月葬狹城盾列陵。香椎大明神。筑前國糟屋郡住吉第四御殿。
應神天皇。御世務一百十一年。御治世四十一年。諱譽田。御父和仲哀天皇。御母神功皇后。仲哀九年庚辰十二月十四日辛卯寅時。筑前國宇彌ニテ御誕生。四歲而立爲皇太子。

七十一歲卽位。四十一年春二月十五日。明宮崩御。百十一歲。庚午歲也。神功皇后三韓御征伐之時在胎内。故號胎中天皇。人皇三十代欽明天皇卅二年辛卯宇佐宮御示現。廣幡正八幡大神宮是也。

仁德天皇。御世務一百十年。御治世八十七年。諱大鷦鷯。御父應神天皇。御母仲姬命。五百城入彦皇子孫女也。應神二十年庚戌於備後國御誕生。二十四歲癸酉御卽位。仁德八十七年己亥正月十六日。攝津國難波而崩御。百十一歲。

若宮八幡四所御事。

若宮。仁德天皇也。今宮。宇治王子也。

宇禮。姉。久禮。妹。別本云。姉妹祭。則別稱姫若宮。

私云。仁德天皇繼王位給畢。不可有若宮之稱歟

丹波國篠村八幡宮。同石清水。

人皇七十一代後三條院延久三年辛亥依勅定奉勸請。曩祖兼延奉行之。

伊豆國鶴岡八幡宮。

第七十一代後三條院延久年中。源義家勸請也。兼延奉行之。

東鑑云。本社者。人皇七十代後冷泉院御宇。伊與守源朝臣賴義。奉勅定征伐安倍貞任之時。有丹祈之旨。康平六年八月潜勸請石清水。建瑞籬於當國由比鄉。今號之下若宮。人皇七十二代白河院治八年永保元年二月。陸奥守源朝臣義家加修復。今又奉遷小林鄉云云。

矢橋八幡宮。近江國栗太郡。

三所。中間聖母大明神。左住吉大明神。右高良大明神。山田鄉正八幡宮一座。

人皇四十代天武天皇白鳳四年。乙亥二月十一日。依勅願詔大中臣清麻呂。近江國栗太郡於矢橋浦奉勸請聖母大神。住吉。高良。三所。正八幡宮一座在山田鄉。同日鎮座。

第八十二代後鳥羽院建久元年（庚戌）十月二日。源朝臣賴朝上洛之時。於矢橋浦有神社。召浦人。在馬上以鞭指之問。此神社何哉。浦人答曰。是八幡宮也。賴朝有下馬而拜之。依此號鞭崎八幡。

同三年（壬子）賴朝以卜部兼藤奉再興社壇。

同四年（癸丑）八月十五日。有遷宮。兼藤奉行之。

諸國散在。（式内八社。式外七社。）

賀茂。（延喜式曰。山城郡愛宕郡。）

鴨（號下社。）御祖神。（玉依日咩。別雷御母。大己貴神。別雷御父。）

賀茂（號上社。）別雷神一座。（八咫烏。高皇產靈尊之苗裔也。）

鴨建角身命女玉依日賣。（母丹波國伊賀古夜媛或云賀古比賣。）

素戔烏尊。　大己貴神。　大山咋神。

先代舊事本紀云。大山咋神座近淡海比枝山。亦葛野。松尾。用鳴鏑神也。

人皇四十代天武天皇白鳳六年（丁丑）二月丙子。令山背國營賀茂神宮云々。

鴨氏人爲秦氏之聟也。秦氏爲愛聟。以鴨祭讓與事。社家云。梨木元祖和縣主也。

賀茂本緣事。

日本書紀一書曰。意日向國曾峯天降坐須神於賀茂建角身命止申寸。神日本磐余彥天皇御前仁立座而。大倭乃葛木峯仁宿里坐寸。彼與利漸久山背國岡田乃賀茂仁遷幸有利。山代川爾下坐天。葛川止賀茂川止合處仁立坐給比。賀茂川鳥見巡羅天之宣具。狹久少也止云登毛石川乃淸幾流也止云天石川瀨見小川止號久。川上爾宮所於定給天。北山乃麓仁住給利。其時此所鳥賀茂止云也。建角身命。丹波國伊賀古夜日咩止云布於娶利。所生子於玉依日子止云。其次於玉依日咩止云布。一日洗衣鴨川。一箭流來。鴨羽加箸。女取歸家插簷牙。已而女娠產男。父母問其夫。女云無。父母以爲匿不言。兒三歲時。父母議以爲。母豈有無父之兒哉。于時神魂尊具

酒膳宴。里父令兒持杯。外祖父建角身命試告云。置汝父前兒云吾父有天也。穿屋甍而便登天。別雷神是也。母亦同時上天成神。御祖神是也。丹塗矢。乙訓社是也。

御位記。

人皇五十一代平城天皇大同二年丁亥五月。下上正一位。使源氏四位。幣三所。宣命紙。黄色。

行幸。

第六十一代朱雀院治十二年天慶五年四月廿九日始之。

祭。四月中酉日。若朔日當酉者。下酉行之。式云。賀茂祭爲中祀。

第三十代欽明天皇御宇二十八年丁亥天下擧國風吹雨零。爾時勅命卜部住吉若日子令卜。賀茂神祟也。撰四月中祀。馬繫鈴人蒙猪影而駈馳。以爲祭禮能令禱祀。因是五穀成就天下豐年。乘馬始於此也。

第四十三代元明天皇和銅四年辛亥四月。詔。祭日。以國司每年駈於祭焉。

兼敦案之。於造社者天武六年也。於祭者自欽明被始行歟。賀茂祭日。楓山之葵挿頭。當日早朝。松尾社司等令貢之。

臨時祭。

第五十九代宇多天皇寛平三年十一月廿四日庚午此日。於鴨明神有奉幣并走馬之事。勅使右兵衞督藤原朝臣高經。率遊男廿人參上下社。皆着□摺。歌舞如例。

同御宇寛平元年。登禰以前祀事。

御幣六嚢。二嚢下社。二嚢上社。二嚢松尾。机二脚。

河合社者。　御祖別雷神之苗裔也。

橋本社者。　英明中將。宇多御孫。齋世親王御子也。御母菅相丞御女。

齋院。

人皇五十二代嵯峨天皇弘仁。有智內親王。

嘉陽門院。第八十三代土御門院治六年元久元年卜定。以後斷絕。

松尾。

延喜神祇式曰。山城國葛野郡松尾神社二座。一座大山咋神。本社也。一座曾形中初大神。市杵嶋姫也。素戔烏御子。人皇四十二代文武天皇治五年大寶元年。秦都理奉勅請松尾。始造立神殿。第四十五代聖武天皇治七年天平二年。預大社。

御位記。

第五十六代清和天皇貞観八年十一月卅日。正一位。使同賀茂。幣二前。宣命。黄紙。

行幸。

人皇六十六代一條院治十八年寛弘元年甲辰十一月十四日始。

祭。

第五十四代仁明天皇承和十四年六月始之。霖雨。先是。左相撲司伐葛野郡郡家前槻樹作大鼓。有是□奉幣及鼓松尾大神以祈謝。

平埜。

延喜式曰。山城國葛野郡平埜祭四座。

第一。今木神。日本武尊。源氏氏神。

第二。久度神。仲哀天皇。平家氏神。

第三。古開神。仁徳天皇。高階氏神。

第四。相殿比賣。天照太神。大江氏神。

縣神。天照太神子穂日命。中原。清原。菅原。秋篠。已上四姓氏神。

延喜格云。桓武天皇延暦年中。立件社之日。點定四至云々。

御位記。

人皇五十六代清和天皇貞観六年七月十日。正一位。幣四前。宣命。黄紙。

行幸。

第六十四代圓融院治十二年天元四年十二月廿日始。

祭。

第五十六代清和天皇貞観元年十一月九日始

祭。或說。第五十代桓武延暦被レ始二行之一。或云。第五十二代嵯峨弘仁被レ行二御祭一。或云。第五十五代文德仁壽元年十月被レ行レ之。

臨時祭。

第六十五代花山院寛和元年四月十日。始以二殿上五位一爲レ使。以二近衞府官人一爲二舞人陪從一。有二御拜一。御幣四嚢。机一脚。左大臣以下參仕坐。自二今年一始平野祭被レ奉二遣使一。臨時舞人走馬。左衞門權佐藤原雅成爲レ使。在二宣命一。

稻荷社。

延喜神祇式曰。山城國紀伊郡稻荷神三座。

下社。大宮女命。伊弉冊尊化神罔象女命。水神也。

中社。稻倉魂命。神播百谷神也。一名豐宇氣姫命。大和國廣瀨大明神。伊勢外宮同躰。神名。比咩大明神。

上社。猿田彥命。三千世界地主神是也。

人皇四十三代元明天皇和銅四年辛亥始顯二坐伊奈利山三箇峯平處一。是秦氏祖中家等拔二木殖蘇也。秦氏人等爲二禰宜祝一。供二仕春秋祭一。依二其靈驗有一。被レ奉二臨時御幣一。相次延喜八年。故贈太政大臣藤原朝臣時平修二造件三箇社一者也。

山城國風土記云。稱二伊奈利一者。秦。中家。忌寸等遠祖伊侶具秦公。積二稻梁一有二富祐一。仍用レ餅爲レ的者。化成二白鳥一。飛翔居二山峯一。子生遂爲レ社。各至二其苗裔一。悔二先過一而拔二社之木一。殖レ家禱二祭之一。其木蘇者得レ殖。木枯者不レ移。

或記曰。人皇五十二代嵯峨天皇弘仁十二年夏。智證大師參二熊野一。以二顯密法一還向之時。過二紀伊國石田川下稻羽里一之間。一人老翁多苅レ稻荷レ之。二人女亦戴レ稻。不レ知二行方一失訖。其夜大師夢。一人老翁者上宮。二人女下中社云々。今案。稻荷社者。秦氏遠祖也云々。

御位記。

人皇六十一代朱雀院治十年庚子八月廿八日。從一

位。使四位一人。幣三前。宣命。黃紙。
此後諸神一階度々也。極位勿論也。
行幸。
第七十一代後三條院延久四年三月廿六日始。
祭。四月中卯日。卯有レ二則初卯日也。
天曆勘文云。禰宜祝仕二春秋祭一云。

春日社。
延喜式曰。大和國添上郡春日祭神四座。
人皇四十八代稱德天皇治三年神護景雲元年丁未
六月廿一日。伊賀國名張郡夏身鄕一瀨河御沐
浴。以レ鞭爲レ驗立給。成レ樹生付。自レ其復御二同國
薦生中山一。數月御宿。時風秀行等仁燒栗各一賜
天宣久。汝等子孫無レ斷(絶歟)色一可二我仕一者。其栗殖必
可二生付一。卽生付了。因レ之始號二中臣殖栗連一。
同年十二月七日。大和國城上郡安部山御坐。
同二年正月九日。大和國添上郡三笠山御垂跡。

同年十月九日寅日寅時。宮柱立御。殿被レ造訖。
御影向之次第。
一殿。武雷命。常陸國鹿嶋郡御乘物以レ鹿爲二御馬一。以二榊
枝一爲レ鞭。
二殿。齋主命。下總國香取郡御影向。
三殿。天兒屋命。河內國河內郡枚岡御影向。
四殿。比咩大神。伊勢國度過郡御影向。
已上。春日四所大明神是也。
御位記。
人皇五十四代仁明天皇治十七年嘉祥三年九
月。正一位。使同上。幣四前。宣命。黃紙。
行幸。
第六十六代一條院治三年永祚元年三月廿三日
始。
祭。
第五十六代淸和天皇貞觀元年十一月九日始。
或云。第五十五代文德天皇仁壽三年始。 國史

云。非祭之濫觴歟。但同御宇治八年天安二年十一月三日（庚申）停平野春日等。清和天皇貞觀十八年二月丙申。春日祭如常云々。如此等文者。天安以往被始行之條顯然歟。第五十四代仁明天皇治十七年嘉祥三年九月。遣參議藤原朝臣。

臨時祭。

第九十一代伏見院正應三年二月九日始。使頭中將伊定朝臣。後深艸勅願也。

春日社小神御在所。

御寶殿。（辰巳。）太力雄明神。其北裏。飛來天神。其北竝。八龍神王。内殿後。梅本明神。（又號梅本神。）其北。栗辛明神。（所謂隼明神。）四御殿後。椙本明神。其北。佐軍神。中院。（乾方臨戸本。）椿本明神。（角振明神是也。）四御殿西方。風御子明神。其西座忠隆。金剛明神。内殿。（坤方。不開殿是也。）岩本神。（住吉神是也。）舞殿。（東方。）神宮寺。其次青榊明神。次幸榊明神。已上鎮座。次穴栗明神。次井栗明神。此兩神新勸請。外院。（自本社乾方一町歟去御坐。）水屋明神。（三所牛頭天皇是也。）自本社坤方。福攤主榎本明神。（女神。亦號巨勢姫大明神。）自榎本社一町西。祓戸明神。（瀬織津姫明神。）自本社一町西。船戸明神。（猿田彦明神。一名道祖神。）廻廊西竈殿。

已上四十三所。

若宮。（御垂跡深秘之故。難註之。）内院。手力辛雄神。太玉命。外院。（自本社北。三所御坐。）兵主明神。次南宮明神。次一童子明神。自本社南宮御庭。鬼子明神。次懸橋明神。三十八所明神。（所謂藏王權現。）其南裏。左祭氣（良イ）明神。其南一町。（去坐。）諸社。

紀御社。其巽御本社明神四所之內。　赤穗明神。　嶋田明神。
前立明神。　天石吸明神是也。
率川明神。三所。　自二一言主社一五町去坐。三枝明神此也。
正一位。
自二本社一南十餘町去坐。宍栗明神。非栗明神。
此兩社十餘町去。詩二社坐。赤乳明神。白乳明神。

已上說。

右件社。右大臣是公南家武智丸孫也。建立。因レ茲。南家苗裔被レ行二此祭一。春日祭翌日也。

本社之事。

人皇七十六代近衛院治六年久安三年正月十九日。預二祈年月次新嘗一。第一第二相殿。無二別御殿一。第七十五代崇德院保延以後。造二神殿一遷御云々。第八十六代四條院治五年嘉禎三年十一月廿九日。祈年穀奉幣。宣命辭別云。去三日　神木歸坐。自二今般一天向後仁至末天。專以二公卿一天可レ爲二勅使一。兼又若宮之祭禮者。當社之壯觀也。殊凝二叡襟一天可レ奉二官幣一。十二月十七日庚子。春日若宮祭也。去九月依二衆徒事一延引。自二今般一被レ獻二內藏寮官幣庭積等。昨日被レ發二遣之一。春日祭幣四分之一用途也。

行幸。

人皇六十六代一條院治三年永祚元年三月廿三日。始與二四所一同日行事歟。

或云。春日社御垂跡事。第四十八代稱德天皇治四年神護景雲二年正月九日云々。四所御殿御事候哉。四所年紀各別歟承及候。又若宮御出生年月同如何。兼滿御返答云。四所共以二同日一御影向也。又若宮御出者神代也。

人皇八十六代四條院治四年嘉禎二年十二月七日宣旨。春日別社若宮祭。宜レ令二官幣前日發二遣其使一事。

第八十九代龜山院治十一年文永七年七月十三日。宮秀氏狀云。位階事宣二下之一。但二本地之號一。手

力雄神。太玉神。兩神云々。秘說々々也。

大原野。山城國乙訓郡。式外。

四座。本跡同二春日一。

國史云。人皇五十五代文德天皇仁壽元年辛未二月二日乙卯別制二大原野祭儀一。一準二梅宮祭一。

舊記云。仁壽元年二月二日乙卯依二太皇太后御祈一。山城國葛野郡大原野仁宮柱廣知立。春冬乃御祭加賜。

御位記。

使。藤氏五位一人。幣四前。宣命。黃紙。

行幸。

人皇六十六代一條院治七年正曆四年十一月廿七日始。

祭。二月上卯。十一月中子。

貞觀內膳式云。夫大原野祭。一物已上同二春日一。第六十八代後一條院治十四年長元三年二月廿日。預二祈年。月次。新嘗祭。四度幣一。

大神社。三輪大明神。神代垂跡。延喜神祇式曰。大和國城上郡大神大物主神也。

日本紀曰。大己貴神有二七名一。一云大國主神。世界之主。二云大物主神。萬物之主。三云國作大己貴命。造二作國土一而我爲レ貴。四云葦原醜男。世界荒鬼神。五云八千戈神。九万八千之軍神。六云顯國玉神。顯露造國土也。傳致取二此七神一。以勸二請山王七社一秘中之秘也。

舊事本紀云。大物主神密二通活玉依姬一。時人無レ知者。姬懷妊。父母怪疑問云。誰人來到乎。姬答云。頃者有レ人自二屋上一夜潛來二于吾所一。共同寢者也。父母欲レ知レ之。採レ針與レ絲授レ姬曰。會二彼神人一。以二此針一可レ着二其衣裾一。此夜神人來臥。姬如〔字歟〕二父母敎一。朝見二彼絲一。自二鑰孔一出。認レ跡尋レ之。過二節渡山吉野山一留二三諸山一。其絲綵綰有二三輪一。故名二三輪一。彼神人大物主。活玉依姬大陶祇之女也。

日本書紀云。大己貴神之幸魂奇魂。欲レ住二於日本

國之三諸山。故卽營宮彼處便就而居。此三輪之神也。（父素戔烏。母稻田姫。）

兼敦案之。書紀之明文。神代之鎭座勿論也。

御位記。

人皇五十六代淸和天皇貞觀元年二月正一位。

祭。（四月。十一月。各上卯。有三則中卯也。）

第五十九代宇多天皇寬平九年三月七日。勅享春秋祭祠之。鎭花。大神狹井。

神祇令云。花散之時。疫神分散。爲遏有此祭。

使。五位一人。幣一前。宣命。黄紙。

石上社。（延喜神祇式曰。大和國山邊郡石上坐布都御魂神。）

人皇十代崇神天皇。御鎭座。

一座。（布留神也。常陸國鹿嶋大神同體也。）

日本紀云。素戔烏尊斷蛇劔。號曰麁玉。此神在石上也。

兼俱云。十代崇神帝御宇鎭座。

第十一代垂仁天皇四十九年十月。作劔一千口藏石上神宮。以斷虵劔爲神躰。今所作之劔奉副之也。同八十七年春二月。丹波國桑田郡有人。名甕襲。家有犬。是犬咋山獸名牟士那而殺之。則獸腹有八坂瓊曲玉。是今在石上神宮。

御抄云。石上社者。素戔烏尊所持之十握劔也。（一名天羽々切。神躰云々。）

古語拾遺云。素戔烏以下十握劔。（其名天羽々斬。）今在石上云々。

御位記。

第五十六代淸和天皇貞觀九年三月十日。正一位。

祭禮。無之。

使同上。幣一前。

大和社。（延喜式曰。山邊郡大和坐。）

大國魂神社三座。三輪同躰。

先代舊事本紀云。素戔烏尊兒大己貴神。次御年神。次大國御魂。（大和神也。）人皇十代崇神天皇六年。鎮座。

御位記。

第五十六代淸和天皇貞觀元年正月廿七日。從一位。

無祭禮。

使同上。幣一前。

廣瀨社。　龍田社。（延喜神祇式云。大和國廣瀨郡廣瀨坐。外宮御同躰也。一名宇賀神）

和加宇加乃賣命神社。

延喜神祇式曰。大和國平群郡龍田坐。

住吉社。

延喜神祇式云。攝津國住吉郡住吉坐神社四座。

日本書紀云。伊弉諾尊所生。其第一底筒男命。第二中筒男命。第三表筒男命。是卽住吉大明神。此三神。（竝第四。）神功皇后鎮座。（以上四所也。）

社家說云。住吉社四座。第一天照大神。第二宇佐明神。第三（底筒男。中筒男。表筒男。爲一座。）第四神功皇后也。

住吉神社三座者。攝津國住吉郡。筑前國那珂郡。長門國豐浦郡。三所之垂跡也。

住吉大神。其荒魂。在筑紫之小戸。和魂者。神功皇后征三韓時。顯坐攝州。而託神功皇后。而徇行四方。遂到攝州之地。宣言曰。眞住吉眞住吉之國也。因鎮坐其地。名曰住吉。豐浦之住吉。那珂之住吉。由攝州地名而通呼之。

御位記。

行幸。

無祭禮。

使五位一人。幣四前。或一。

日吉社。（延喜神祇式云。近江國滋賀郡日吉。與三輪此國地主。）

大山咋神座也。（賀茂。松尾。御同躰也。）

先代舊事本紀云。大山咋神坐㆓近淡海比叡山㆒。亦葛野郡松尾用㆓鳴鏑㆒神也。
當社鎮座年紀不㆓分明㆒。舊事本紀者。聖德太子之撰也。已述㆓子細往昔之垂跡㆒歟。或說。人皇三十九代天智天皇御宇。大比叡神顯坐。
大宮。　三輪同体。　號㆓大日枝㆒。
二宮。　國常立。　號㆓小比叡㆒。
聖眞子。　八幡。　已上謂㆓之三聖㆒。
八王子。　國狹槌尊。
客人。　菊理媛。　白山。
十禪師。　天津彥々火瓊々杵尊。　稻荷。
三宮。　豐斟渟尊。
已上七社。
山家最要略記。日吉七社降臨垂跡時代事。
扶桑明月集云。大江匡房記。匡房在世之時。號㆓朧月集㆒。沒後改㆓名明月集㆒。
大比叡明神。俗形者翁之體。人皇三十代磯城嶋金刺宮欽明天皇卽位元年庚申大和國城上郡大三輪神天降。

第卅九代天智天皇大津宮卽位元年壬戌大比叡大明神御㆓日吉㆒。與㆓三輪大物主神㆒。此國地主也。
小比叡明神。俗形。天神第一國常立尊也。
聖眞子。俗形。人皇十六代應神天皇輕嶋明宮御代天降。第三十代欽明天皇卅二年辛卯鎮西豐前國宇佐郡八幡顯坐。
第四十代天武天皇卽位白鳳元年壬申近江國滋賀郡垂跡。今聖眞子是也。
八王子。俗形。天神第二國狹槌尊。第十代崇神天皇卽位元年甲申近江國滋賀郡小比叡東山金大巖傍天降。八人皇子引率天降。故謂㆓八王子㆒。神祇宣令曰。言㆓八王子㆒者。天照太神所ㇾ生之五男三女等。八王子也。
客人。女形。第五十代桓武天皇卽位延曆元年。天㆓降八王子麓白山㆒。菊理比咩神也。
十禪師。童子形。同桓武天皇延曆二年癸亥正月十六日。天㆓降地主宮前㆒。天兒屋尊顯御。
三宮。女。桓武天皇延曆六年丁卯八王子金大巖傍

天降。天照太神與素戔烏尊誓給所生。五男三女中。三女也。故名三宮。

康和元年正月十一日　大江匡房謹記

山王號事。

三寶輔行記云。傳教於求法歸朝之海中遇暴風。逆浪之至難時心發願祈念。一人童子化現船頭。問云。童子是誰耶。童子答曰。吾是天台鎭守明神也云々。問云。如何稱號耶。童子答曰。下竪(上歟)三點加橫一點。下橫三點加竪一點云々。斯時恭敬合掌。寫文字見之。山王二字也云々。

山王與三輪一躰事。

人皇七十三代堀川院治十七年康和五年十二月十日。以近江國愛智莊寄進日吉社。官符曰。權中納言大江匡房宣。奉　勅。御神者。大八嶋金剌朝庭顯。三輪明神。大津宮御宇初天降坐。尋其本爲天照太神分身云々。

御位記。

大宮。人皇五十七代陽成院元慶四年。正一位。

二宮。第八十一代安德天皇壽永二年。正一位。

聖眞子。八王子。客人。十禪師。三宮。第八十八代後深艸院建長二年。正一位。

行幸。

祭禮。

第七十一代後三條院延久三年十月廿九日始。

同延久四年四月廿三日記云。今日比叡祭也。自今年初被立官幣。

或曰。依爲八王子三宮遷宮以前。依別叡願自第六十四代圓融院貞元二年四月廿六日始被遣上卿辨外記史諸司等。

第八十四代順德院建曆二年以後相續。十一月中申日式日。

一本云。第六十九代後朱雀院治七年長久四年六月八日。被下每年立內藏寮幣宣旨。

次山王號之事。第五十二代嵯峨天皇弘仁十年

始崇敬之。

第六十九代後朱雀院長暦三年八月十一日。始坐住吉次梅宮上。

臨時祭。

第六十四代圓融院治十三年天元五年七月五日。依叡願被遂行之。使侍從藤原朝臣。粟田殿。

第六十六代一條院治九年長德元年八月廿一日。被行之。使左少將源朝臣方理。已上三ヶ度。

或說云。第八十二代後鳥羽院建久三年二月十三日丙辰法皇後白河。依御不豫危急御願被行之。使正三位行左近衛權中將藤原朝臣忠經。此後中絕。

日吉末社。

大行事。高皇産靈。　早尾。一名藏住。猿田彥。　下八王子。

王子宮。健御名方。　聖女。稻荷。秘說云下照姬。　氣比。仲哀天皇。

小禪師。

已上中七社。

惡王子。　新行事。湍津姬。　石瀧。蹈鞴姬命。　劔宮。素戔烏。

牛停。　若宮。　護因。

已上下七社。

右山王廿一社眷屬百八座。私云。此書立之分。社家註進之。

梅宮。

延喜式曰。山城國葛野郡梅宮坐神四座。

酒解神。　大若子神。　小若子神。　酒解子神。

右鎭座年紀不分明。

貞觀式。梅宮神四座。夏冬祭料同平埜祭。

人皇五十六代清和天皇貞觀元年十一月十日。

梅宮祭如恒。

日本三代實錄。陽成院元慶三年四月二日。停梅宮祭。

同年十一月六日。停同祭。梅宮祠者。仁明天皇母后。文德天皇祖母。大后橘氏神也。歷承和仁壽二代。以爲官祠。今永停廢焉爲官祠。

元慶三年十一月六日。停之。同八年四月七日。始祭梅宮。是橘氏神。頃年之間停祀。今勅始而祭。第五十八代光孝天皇仁和元年四月七日。又始祭。第六十六代一條院永延以後。亦祭不絶。同一條院治十九年寛弘二年十一月。新依御願。如舊例。今勤仕祭。自明年可用式日者。一條院以來相續。四月十一日上酉。今案。仁明母。文德祖母。太皇太后橘嘉智子也。嵯峨后。左大臣諸兄之曾孫。贈太政大臣奈良麻呂之孫。贈太政大臣清友之子也。此大后者。嘉祥三年五月四日崩。六十五歲。續日本後紀云。仁明天皇承和三年十一月。奉授酒解神從五位上。大若子神。小若子神。並從五位下。坐山城國梅宮神云々。又案。承和三年者。嵯峨天皇大后。其見在也。然者非大后之垂跡。彼御祖神勿論歟。嵯峨。承和九年七月崩。五十七。大后。嘉祥三年五月四日崩。

御位記。

人皇八十代高倉院治十二年治承四年十二月。正一位。

使。橘氏五位一人。幣四前。

社司之事。

往昔今相承而。大副卜部兼親。人皇七十代後冷泉院治十年天喜三年。始補預。于今相續。

吉田社。

延喜神祇式曰。山城國愛宕郡。式外。四座。同春日。鎮座年紀不分明。或云。人皇五十六代淸和天皇貞觀年中鎮座。中納言山蔭卿。始奉渡之勸請云々。二八明題集。吉田社止云仁。從三位爲實。

皇毛。頼牟宮居止。成仁鬼。唯山蔭乃。名殘計利〔此下恐脫字〕
御堂關白御書曰。奈良京時春日社。長岡京時大原野。平安城之今吉田社。占二帝都之咫尺一。有二神祠之鎭護一云々。

兼俱日本書紀御抄云。當社。藤氏崇敬依レ異レ他。曩祖兼延勸請。

人皇六十六代一條院永延元年十一月廿五日甲申今年始祭禮。依二誓願一爲二公家御沙汰一云々。

第七十三代堀川院治二十年嘉承元年官符。預二四度幣祭一。四月中子日。十一月中申日。

御位記。

第九十九代後光嚴院治九年延文五年六月卅日。正一位。

使。藤氏五位一人。幣四前。

吉田小社之事。

第九十五代後醍醐天皇治八年嘉曆元年五月三日丙午朝間雨降。今朝註進了。昨日內府御所望也。中院之內。內院之內。四所之小社。自レ古不レ知二御名一。曾祖父御記註二申之一了。

第八十四代順德院治五年建保三年四月十三日。入レ夜自二伯大納言殿一被レ仰レ之。吉田之內小神員數御名等。可二註進一者。以二折紙一註二申之一。

吉田小社八所。相殿。和泉國窪田明神。或說大井關。若宮。一二御殿之間。雖レ無二神殿一奉レ祝レ之。神樂岡社。當社地主艮方。霹靂雷火神。第八十六代四條院治八年仁治元年。奉レ改二御在所一見二于決御記一。其以後所見無レ之。第百一代後小松院治十二年應永二年正月廿一日見レ之。

一言主神。內院巽角。　今宮。南大鳥居東脇。

此外四所。二社中院東。二社全西方。自レ古不レ知二御名一。

牽川。　水屋。　氷室。　榎本。依二祖父御夢想之告一。如レ此云々。

廣田社。號二西宮一。延喜神祇式云。攝州武庫郡廣田神一座。大神宮御同躰也。

日本書紀曰。神功皇后廿年。伐二新羅一之明年春二

月。天照太神誨云。我荒魂不レ可レ近ニ皇居一。當レ居ニ御心廣田國一。隨ニ神敎一以鎭坐焉。
或說云。廣田者。天照太神之荒魂也。可レ謂ニ神宮御同躰一。如ニ式文一者一座也。現在五社也。
人皇百一代後小松院治二十三年應永十三年四月四日甲子今日。伯三位資忠王。依レ招也。日本紀第九讀合。廣田社事。條々有ニ不審一。雖レ爲ニ社秘一。於ニ兩流一者一條門弟也。今已授ニ散書一之間。委細演說彼卿示書。如ニ社官申詞一者。先奉レ書ニ廣田社一者。神功皇后也。自餘之神社。意得之勸請歟。
住吉。　廣田。　八幡。　南宮。松尾南宮。　八祖神。大山咋神。嚴嶋明神。宗像明神。
已上五座也。垂跡時代無ニ正記一。
戎社。三所。今二所。蛭子也。海社歟。　名次。　兒宮。　松原。　鰯津社。　岡田社。　奥戎社。　武宮。　須川御前。　火大神。
至レ戎注傳也。自餘後世之勸請。併社官私之沙汰乎。
右此註文。伯三位忠富御問之宗要。令レ勘時後者也。
從二位兼倶

祇園社。延喜神祇式曰。山城國愛宕郡祇園神社。式外。三座。
牛頭天皇。初垂ニ跡於播磨明石浦一。移ニ廣峯一。其後移ニ北白河東光寺一。其後人皇五十七代陽成院元慶年中移ニ感神院一。
西間。本御前。奇稻田媛垂跡。一名婆利女。一名少將井。脚摩乳手摩乳女。
中間。牛頭天皇。號ニ大政所一。進雄尊垂跡。
東間。蛇毒氣神龍王女。今御前也。
人皇六十一代朱雀院承平五年六月十三日官符云。應下以ニ觀慶寺一爲ニ定額寺一事上。字祇園寺。在ニ山城國愛宕郡八坂鄕地一町一。檜皮葺三間堂一宇。在ニ庇四面一。檜皮葺三間禮堂一宇。在ニ庇四面一。安ニ置藥師像一躰。脇士菩薩像二躰。觀音像一躰。二王毘頭盧一躰。大般若經一部六百卷一。神殿五間檜皮葺一宇。天神

婆利女。八王子。五間檜皮葺禮堂一宇。右得二山城國解一偁。故常住寺十禪師傳燈大法師位圓如。去貞觀年中奉レ爲二建立一也。或云。昔常住寺十禪師圓如大法師。依二詫宣一。第五十六代清和天皇貞觀十八年奉レ移二山城國愛宕郡八坂鄉樹下一。其後藤原昭宣公。感二威驗一。壞二運臺宇一。建二立精舍一。今社壇是也。

第六十四代圓融院治五年天延二年三月被二官符一以二愛宕郡觀慶寺感神院一爲二延曆寺別院一事。

第六十四代圓融院天祿三年。以二祇園社一爲二日吉末社一。

祭禮。

同圓融院天祿元年六月十四日始二御靈會一。自レ今年一行レ之。

臨時祭。

同三年六月十五日。始奉二走馬一。勅樂。東遊。御幣等一使左少將藤理兼。左右御馬有二五疋一。左右近官人供奉。

東遊歌。

神風爾。八坂乃里止。今日與里曾。君我千歲遠。許利始茂留。

此後中絕。第七十五代崇德院天治以後每年相續。

行幸。

第七十一代後三條院延久四年三月廿六日。

使同上。幣二前。加二八王子八所一。

神社本緣記云。昔北海坐之武塔神。南海乃女爾加與比天。彼爾。出坐爾。日暮多利。彼所仁將來二人在伎。兄蘇民將來止云。甚貧窮。弟巨旦將來止云。富饒屋舍一百在伎。爰仁武塔神借二宿處一仁。惜天不レ借。兄蘇民將來借奉留。卽以二粟柄一爲レ席。以二粟飯一饗(來饗一)奉流。武塔出坐後爾。經レ年率二八柱子一。還來天我將奉之爲二報答一曰。汝子孫在哉。蘇民答云。己子女子止婦止侍止留申須。宣久。茅於以天爲レ輪。腰上仁着

與。隨詔天着。卽夜爾。蘇民之女子止婦止置天。皆悉久許呂志保呂保志天伎。時仁詔久。吾波速須佐能神也。後世爾疫氣阿羅波。汝蘇民將來之子孫止云天。以茅輪着腰有人波。將免止詔伎。

北野社。延喜神祇式曰。山城國葛野郡北野。式外。

天神三座。

中間御前。菅丞相。

東間。中將殿。

西間。吉祥女。

人皇六十二代村上天皇天曆元年六月九日。遷坐北野。

同九年三月十二日酉時御託宣。右近乃馬場乃興宴乃地奈利。我彼馬場乃邊仁移居牟。俱至牟所波仁可生松云々。

同天皇治十年天德三年。九條右丞相造増屋舍。奉仕寶物。

第六十四代圓融院治十五年永觀二年六月廿九日辰時御託宣云。大唐長安幷新羅及諸國所々末天皈依。占別宮之處也。我隨身伴黨十六万八千百餘人也。捻含恨背世貴賤靈鬼。皆悉集來。但無理含恨之輩。不相共云々。

御位記。

第六十代醍醐天皇治廿八年延喜三年二月廿五日。從二位。

同廿三年四月。贈正二位。

第六十六代一條院治七年正曆四年五月廿日。贈左大臣正一位。勅使菅原。

同年閏十月廿日。贈太政大臣。

祭。

同一條院永延元年八月五日。始祭預官幣。

第七十代後冷泉院永承元年。八月四日被定。依五日國忌母后。也。

臨時祭。

第六十六代一條院治十八年寛弘二年八月四日。始被ㇾ奉ニ神寶一。

東遊。走馬。

第九十一代伏見院正應二年七月十八日。進ニ十列一。

行幸。

一條院寛弘元年十月廿一日始。

或云。第六十八代後一條院治八年万壽元年十一月廿二日始。

使。菅家五位一人。幣一前。

末社。

宰相殿。正三位菅原輔正。壽永三年三月廿七日。贈ニ正二位一。

和泉殿。從四位下菅原定義。同時贈ニ正二位一。

丹生社。號ニ雨師社一。延喜神祇式云。大和國吉野郡丹生川上神社。

水神罔象女神。伊弉冊尊化生也。或云ニ闇龗一。

人皇四十代天武天皇白鳳四年乙亥御垂跡。當社爲ニ大和之別社一非ㇾ見ニ延喜格一。不ㇾ聞ニ人聲一之深山。立ニ我宮柱一以敬禮者。爲ニ天下一降ニ甘雨一止ニ霖雨一者。

御位記。

無ニ祭禮一。

使。神祇六位官一人。幣一前。

貴布禰。當社與ニ丹生一同ㇾ之。延喜神祇式云。山城國愛宕郡貴布禰神社。

水神罔象女神也。

日本後紀。弘仁十年五月爲ニ大社一。造東寺長官藤原朝臣伊勢人奉ㇾ勅雖ㇾ造ニ東寺一。私願未ㇾ遂ニ建ニ一堂一。然間夢ニ洛陽北有ニ一深山一云々。宜ㇾ望ニ地形一。爰老人出來。齡八十。卽相語云。汝知ニ此地一否。伊勢人答云。目見耳所ㇾ不ㇾ聞也。老人重云。斯地之勝甲ニ于天下一。建ニ立道場一尤得ㇾ地。我是王城鎭守貴船大明神也。

御位記。
國史云。弘仁九年六月。奉授從五位下。
人皇五十四代仁明天皇承和十年十二月。正五位下。
同五十五代文德天皇治八年天安二年正月廿七日。從四位上。
同五十六代淸和天皇貞觀十五年五月廿六日。正四位下。
同六十六代一條院治十七年長保五年三月廿六日。正三位。
同六十八代後一條院寬仁元年十一月廿五日。正二位。
同七十三代白河院治七年承曆五年二月十日。從一位。
同七十五代崇德院治十七年保延六年七月十日。正一位。
無祭禮。

末社。
奧深。吸葛。
已上二十二社畢。

卜部朝臣

右二十二社注式以村井敬義本書寫挍合

神祇部二十三

大和豐秋津嶋卜定記

平京波未深山乃時與利既仁帝都乃勢自良備波利支。誠仁日本乃中心。國中乃秀。天下無雙之勝地奈利。南波晴禮。北波塞利。東波流水有天。福壽延長之謂弘顯之。西仁波長木山竝比連禮利。四神相應弘爲寸。然波四方四隅仁靈神竝御座之天。代代乃固仁奈豆氣利。古仁波八十萬神等。天高市仁集玉天。神議仁議給天。可ㇾ遣神弘尋出之奉利。此國陪鹿嶋仁座寸武雷乃神。檝取仁座寸齊主神止弘下之。千早振惡神弘悉皆伏世順陪奉利。遂仁報申壽。此後皇孫。天石座放千。天乃八重雲乎稜威乃千別仁千別天。武甕槌經津主弘左右仁添奉弖。天鈿女命波盤樟船弘漕奉利。皇孫弘神代乃浦乃浪靜奈留礒迄送利御座之木。仍弖天神與利賜之三乃神寶弘以弖。此國乃主止成良世玉波牟止天。北山乃麓仁應化之。百王弘守利玉布。經津主武雷神毋。同此所仁社垂跡之玉陪利。去波。王城乃丑寅仁當天一乃山有利。神代乃昔與利天七地五神此山仁影向之玉波奴無之。卽今日枝之宮是奈利。先大宮止波三諸乃神止同立。神皇產靈乃御神也。聖眞子和吾勝尊奈利。蓋陰陽兩神乃其中仁出生之玉仁依天。聖止波申神也。兩神乃眞乃中與利出玉布故也。八王子止波國狹立乃尊也。客人止申奉波伊弉諾尊也。十禪師止申奉波十

止波七代天神。地神乃三瓊々杵。合之天十也。禪止波讓也。師止波國也。言波十善天子仁師弘讓利天加護乃義有利。三宮波惶根尊也。此外尊神來臨乃事有止雖毋。彼家仁沙汰有事奈利。次仁西谷峰上乃柱波。是卽神代乃昔。陰陽二神巡利。國中乃御柱止云者奈利。天御柱波一氣顯現乃起利。萬品惣持乃源奈利。天乃四德地乃五神弘象利。又五色乃絲弘以天奉レ纒利。八重乃榊弘以天奉レ飾留。是伊弉諾伊弉册乃鎭座。陰陽變通乃本基。諸神化生乃心基也。都合天心天木德弘興之。皇化仁歸天國家弘助介。故仁皇帝數乃天下弘經玉止毋常磐堅磐仁之天。動事無久。三十六禽。十二神王。八大龍神。常仁守玉布仁依天。損失有波。天下必危事阿利。次仁東谷今乃藥師堂乃山頂波畏毋大日本三千界出生給。天浮橋乃上仁立弖。瓊矛弘指下玉天探玉之時。一滴乃凝成留。自凝嶋止云波此所也。其立玉之浮橋止波今乃日枝乃岩河橋止云

者奈利。諸人此橋弘渡仁。必沓弘脫事波此故奈利。次此山乃麓仁高野止云所阿利。天照大神乃別宮也。夫此山波。昔天照大神。天磐戶仁入居玉時仁。八百萬神等深久哀愁弖。磐戶乃前ニ天神樂於奏之。天子八禰命於以天麗木諄辭竟奉志牟。幷仁天手力雄神。戶側仁隱立天。常世長鳴鳥於集弖。長鳴世之女玉陪利(サイ)。天神毋感玉比。岩戶於細目爾開給波。多力雄神引出奉利之與。再常暗乃雲晴奉利支。其籠玉之岩戶片闥和。投弃玉布時落天。今乃西石座止成利。其片闥波今岩倉乃里仁留禮利。又長鳴鳥於集天令レ鳴玉布所於長谷止云比。又神樂於奏之申所和裂雷神出現之天分奉留。今乃吉田山是也。彼八十萬神集玉所和如意峰奈利。今毋六一乃日每仁。每月六度。和州金剛山。城州愛宕山。同如意。江州日枝。向州高千穗。此日本五岳也。此五岳與利如意寶山陪神達集會在天。神代乃神樂於奏玉奈利。次仁戊亥仁當天。王都守護神明座

寸。卽天神第七陰神奈利。火災於永久退牟爲也止天。若宮仁和火產靈於置玉奈利。偏爾帝都靜謐乃基也。東仁當天鴨御祖乃鎭座有利、此明神和。彼六一乃毎レ日仁。如意峯仁集給神等仁、事勝神止相共仁、百乃味乃御饗於調天、神樂乃奏有波。尤深重乃御神奈利。殊仁波久我三井乃社。同久傍仁御座世波。帝京何乃危事有牟。次仁又西仁神明鎭座之玉布。此神波地神第四神也。此京於保玉牟爲仁日向乃國與利來臨之玉布、故當社仁龜於以天使者止定事波。昔火酢芹命止幸易給時。海邊仁吟比玉陪波。鹽土老翁顯出天。無目片間乃小船於作天。宇奈乃底仁深久入禮。遂龍宮乃玉乃殿仁到玉天。三年乃比留利玉天。其後上津國於床敷思食天歸牟止之玉時。海神大龍仁乘奉旦歸玉陪波。其與利當社乃使者止定也。其後天武天皇乃御寓仁天與利靈璽降此仁母。帝都乃守符仁定女奉牟止天。又此社仁母納玉也。尙深重乃秘事奈禮波。今不レ載寸。又松尾止名

介奉事和。靈璽降下乃時與利也。彼敎之老翁母。小鹽乃山仁影向奈利。次帝居乃未申爾當天、第三乃瓊々杵乃后宮木花開耶姬神。同父大山祇。幷仁瓊々杵、火々出見乃神達。鎭仁守利玉布、其誓。當仁婦乃產仁最惡木事於慇玉天。偏仁如レ此人乎助玉利。彼開耶姬和酒解子神社奈利。大山祇和酒解社也、瓊々杵和今乃若子宮奈利。小若子社古曾火々出見尊仁天渡世玉也。次仁辰巳乃方仁當天倉稻魂乃垂跡有利。夫此神波百穀於播玉布故爾名介奉留。神代乃昔與利此峯爾向伊玉母不レ知。只三峯仁顯玉之和。人皇四十三代元明天皇和銅四年辛亥二月十一日仁垂跡寸。誠仁諸人哀憐乃御心深久。蒼生乃作牟物波。草乃片葉末天百乃災於攘玉伊。剩。隨身乃寶於安久保事母、皆此神態奈禮波。誰賀此神於踈久世牟。次仁城南仁當天和地神第四乃皇后豐玉妃乃廟有利。加之。天孫乃御傍仁天助奉牟止盟之天兒八禰命。又外戚高皇牟巢日神。竝

御座波惣社玉籬内乃名有利。此如國中仁成出牟族。若又此國乃道於踈之奉良波。永久神明乃御心背奉牟耳。

瀨見小川乃清木流乃御世仁。和久良和仁成出奉利。布理志仁神代乃言乃葉於。筆奈良寸葉何賀和跡仁殘良牟。墨奈羅寸葉敢天志呂伎於後留仁寸事有牟。加賀留於材短木彌津嘉連良末天。神垣仁木綿取志天。傳奈流理烏知利。清和井乃水遠杓母天。烏和鳴止母天母識毛。皆古木詔遠烏乃跡不殘和。誰賀其深事於辨牟。吁太神哉乎。

永正元甲子年五月廿八日。以御本書寫畢。

藤原朝臣判

天文二十三年甲寅歳。以藤納言御本寫之。

右以山城名勝志名跡志等所引比挍畢

大日本國一宮記

山城愛宕郡。鴨大明神。號下社。大山咋父。故號御祖。又曰糺宮。大己貴命也。

賀茂大明神。號上社。大山咋神也。號別雷。母玉依姬。武角身命女。

大和城上郡。三輪大明神。號大神。大物主神。大己貴命也。父素盞烏。母稻田姬。

河內河內郡。平岡大明神。號枚岡神。天兒屋命也。又於奈良春日第三殿祭之。

和泉大鳥郡。大鳥神社。日本武尊也。

攝津住吉郡。住吉神社。底筒男。中筒男。表筒男三座。後加神功皇后四座也。

伊賀阿拜郡。敢國神社。號南宮。金山姬命也。

伊勢河曲郡。都波岐神社。猿田彦神也。

志摩答志郡。伊射波神社。

尾張中嶋郡。眞墨田神社。眞清田大明神此也。大己貴命。

參河寶飯郡。砥鹿大明神。大己貴神。

遠江佐埜郡。己等乃麻知神社。號事任神。猿田彦命。

駿河富士郡。淺間大明神。號富士權現。大山祇女木花開耶比咩。

伊豆賀茂郡。三嶋大明神。大山祇命。

神社	國郡
淺間神社。同富士。	甲斐八代郡。
寒川神社。八幡也。	相摸高座郡。
氷川神社。素盞烏命。	武藏足立郡。
安房神社。號洲崎大明神。太玉命也。	安房安房郡。
玉前神社。高皇產靈弟生產靈一男前玉命。	上總埴生郡。
香取神社。齋王命也。於春日第二殿祭之。	下總香取郡。
鹿嶋神社。武甕槌神。春日第一殿祭之。	常陸鹿嶋郡。
建部神社。大己貴命也。三輪一體。	近江栗太郡。
南宮神社。金山彥命也。	美濃不破郡。
水無神社。大己貴命女御歲神也。	飛驒大野郡。
南方刀美神社。大己貴二男建御名方刀美命也。號諏訪大明神。	信濃諏訪郡。
拔鋒大明神。經津主神也。	上野甘樂郡。
二荒山神社。大己貴命男事代主神。	下野河內郡。
都々古和氣社。大己貴男高彥根。	陸奧白河郡。
大物忌神社。倉稻魂神也。	出羽飽海郡。
遠敷大明神。號若狹彥神。上社彥火々出見。下社豐玉姬妹玉依姬。	若狹遠敷郡。
氣比神社。又號笥飯宮。人皇十四代仲哀天皇也。	越前敦賀郡。
白山比咩神社。下社伊弉冊尊。上社菊理媛。號白山權現。	加賀石川郡。
氣多神社。大己貴命。	能登羽咋郡。
氣多神社。同上。	越中礪波郡。
伊夜日古社。饒速日尊皇子天香久山命也。	越後蒲原郡。
渡津神社。大己貴命兒五十猛神。名大屋彥神。	佐渡羽茂郡。
出雲社。大己貴命妻三穗津姬也。父高皇產靈尊。	丹波桑田郡。
籠神社。一名籠守權現。住吉一體也。	丹後與謝郡。
粟鹿神社。上社彥火々出見。中社籠神。下社玉依媛。	但馬朝來郡。
宇倍神社。武內大臣也。	因幡法美郡。
倭文神社。大己貴命女下照媛也。	伯耆川村郡。
杵築宮。大己貴命。素盞烏命。	出雲出雲郡。
物部神社。饒速日尊皇子宇麻志摩千命。	石見安濃郡。
由良比咩社。大己貴嫡后須勢利媛。	隱岐智夫郡。

伊和神社。大己貴御魂也。　播磨完粟郡。

中山神社。同上。　美作苫東郡。

吉備津宮。孝靈皇子吉備津彦命者非也。孝靈三世吉備武彦命也。備前備中備後三國一宮也。　備中賀夜郡。

伊都岐嶋神社。天照與素盞烏誓給生三女內市杵嶋姬。　安藝佐伯郡。

玉祖神社。伊非諾男玉屋命。　周防佐波郡。

住吉神社。底筒男。中筒男。表筒男也。　長門豊浦郡。

日前國懸宮。天兒屋孫石凝姥。　紀伊名艸郡。

伊佐奈岐神社。號多賀社。　淡路津名郡。

大麻比古神社。猿田彦神。　阿波板埜郡。

田村社。同上。　讃岐香川郡。

大山祇神社。　伊豫越智郡。

都佐神社。號高賀茂大明神。味鉏高彦根。　土佐土佐郡。

筥崎宮。八幡大神。二聖母神后。三竈門。號宮崎八幡。　筑前那珂郡。

高良玉垂神。武內宿禰。　筑後三非郡。

宇佐宮。應神天皇。比賣神。大帶姬。吾朝宗廟。　豐前宇佐郡。

西寒多神社。號大分宮。筥崎同體也。又名柞原八幡。　豐後大分郡。

與止日女神社。號河上大明神。八幡伯母。神功皇后妹也。　肥前佐嘉郡。

健磐龍神社。人皇十二代景行帝御出現。阿曾都彦也。　肥後阿蘇郡。

都農神社。大己貴命。　日向兒湯郡。

鹿兒嶋神社。號大隅正八幡宮。兼右云。神功皇后也。　大隅桑原郡。

和多都美神社。號枚聞神社。塩土老翁。猿田彦神。　薩摩穎娃郡。

天手長男神社。天思兼神一男。　壹岐石田郡。

和多都美社。八幡宮也。　對馬上縣郡。

右諸國一宮神社如此。秘中之深秘也

延喜式神名帳頭註

定㆓日本國中大小神社鎭座㆒事。
人皇六十代醍醐天皇治七年延喜五年十二月廿六日宣下。於㆓山城國愛宕郡如意峰神祇齋場所㆒奉㆑安㆓鎭三千一百三十二座之神體㆒同月廿八日奉㆑渡㆓神體於六十餘州㆒矣。天下諸神奉㆑授㆓神號㆒之時。以㆓神代正印㆒被㆑定㆓神宣事㆒延喜已來聖斷也。

右京三條。

太詔戸命神。　本社。和州添上郡。對州下縣郡。
天兒屋命也。

山城乙訓郡。

乙訓坐火雷。　賀茂建角身命也。

向神社。　素戔烏孫大歳子也。母須沼比女。

葛野坐月讀。　松尾內櫟谷。松尾末社。

梅宮。　仁明帝母太皇太后橘嘉智子也。橘妙神也。
續日本後紀云。仁明帝承和三年十月一日。奉㆑授㆓酒解神從五位上。若子。小若子。竝從五位下㆒。坐㆓山城梅宮㆒云々。貞觀式云。梅宮神四座。夏冬祭料同。
淸和帝貞觀元年十一月十日。梅宮祭如㆑恒。

愛宕郡。

別雷神社。　山城風土記云。賀茂建角身命。娶㆓丹波國神伊賀古夜日女㆒生㆑子。名㆓玉依日子㆒。次曰㆓玉依姬㆒。玉依姬。於㆓石川瀨見小川之邊㆒爲㆑遊時。丹塗矢自㆓川上㆒流下。乃取插㆓置床邊㆒遂孕生㆓男子㆒。至㆓成人時㆒。外祖父建角身命造㆓八尋殿㆒。竪㆓八戶扉㆒。釀㆓八腹酒㆒而。神集々而。七日七夜樂遊。然與㆑子語言。汝父將㆑思人令㆑飮㆓此酒㆒。卽擧㆓酒杯㆒向㆑天爲㆑祭。分㆓穿屋甍㆒而升㆓於天㆒。乃因㆓外祖父之名㆒。號㆓可茂別雷命㆒所謂丹塗矢者。乙訓郡坐。

火雷命。

御祖。　一社者。大己貴子大山咋神。一社。玉依日女也。

久我。　建角身命也。

貴船。　國史云。弘仁九年六月奉レ授二從五位下一。其後位階及二度々一。人皇七十五代崇德院治十七年保延六年七月十日。正一位。

太田。　人皇七十四代鳥羽院治十三年庚子元永三年官符。預二案上官幣一。

三井。　三身社也。本緣見二風土記一。賀茂武角身命也。又曰。蓼倉鄉三身社。稱二三身一者。賀茂武角身命。丹波伊可古夜日女。玉依姫也。三神身坐。故名二三身社一。今漸云二三井一。

紀伊郡。

稻荷。　本社。倉稻魂神也。此神素戔烏女也。母大山祇神女大市姫也。倉稻魂神播二百穀一神也。故名二稻荷一歟。伊弉諾御女此名有レ之。一座素戔烏。一座大市姫也。秘中之秘也。以上三座也。人皇四十三代元明帝和銅四年辛亥二月十一日戊午。始顯二座伊奈利山三ヶ峯平處一。風土記云。稱二伊奈利一者。秦中家忌寸等遠祖伊侶臣秦公。積二稻粱一有二富祐一。乃用レ餅爲レ的者。化二白鳥一飛翔居二山峯一生レ子。遂爲レ社。其苗裔悔二先過一。而抜二社之木一殖レ家。禱レ命也。

久世郡。

水度神。　山城風土記云。久世郡水度。名天照高彌牟須比命。和多都彌豐玉姫命。先師案二風土記一。天照太神。高皇產靈。豐玉姫命三神。尤有二由緒一者也。

大和添上郡。

宍吹。　猿田彥命也。

宇奈太理坐高御魂。　天神第一天御中主尊第六世孫。天八十萬魂尊長男。高皇產靈尊也。人皇十五代神功皇后御宇。武內宿禰勸二請之一。

率川坐大神御子。 大臣贈從一位藤原公卿建立也。其後毎二二季之祭日一。有二公家奉幣使一云々。其社南又有レ社。號二三枝名神一。卽大神御子神也。件二社同在二一村一。相去不レ幾。世俗稱二率川一。

春日。 人皇四十八代稱德天皇治三年神護景雲元年丁未六月廿一日。伊賀國名張郡夏身鄕一瀨川御沐浴。以レ鞭爲レ驗立。成レ樹生付。自二其復御一。同國薦生中山。數月御宿。時風秀行等賜二燒栗各一一。宣。汝等子孫無レ絕可レ仕レ我者。其栗必生哉。卽生。因始號二中臣殖栗連一。同年十二月七日。大倭國城上郡安部山御坐。同二年。垂二跡於大倭國添上郡三笠山一。同年十月九日宮柱立。

平群郡。

龍田。 或記云。伊勢瀧祭神。廣瀨龍田神。則同體異名。水神也。故此二神名號二天御柱國御柱一。是天逆矛守護緣也。

往馬坐伊古摩都比古。 膽駒社也。

廣瀨郡。

廣瀨。 倉稻魂命也。谷水神也。龍田風神也。此兩社者風水陰陽二神也。竝伊弉諾尊所レ生也。人皇四十代天武帝白鳳四年四月祠レ之。貞觀元正月廿七日。正三位。

葛上郡。

葛木御年。 舊事本紀。地神本紀云。大己貴神女下照姬妹高照光姬大神命。坐二倭國葛上郡一。御歲神社一。

高鴨。 大己貴命一男也。又名二捨篠社一。

大倉比女。 味耜託彥根妹下照姬也。

葛下郡。

當麻山口。 人皇五十五代文德天皇仁壽三年始レ之。內藏式。夏四月。冬十一月。竝上申日祭レ之。

吉野郡。

丹生川上。　號二雨師社一。水神罔象女神也。伊弉諾尊化生也。一座。

宇陀郡。

八咫烏。　賀茂建角身命也。古事記云。於レ是高木大神命以。覺白之。天神御子自レ此於二奥方一莫レ使二入幸一。荒神甚多。今自レ天遣二八咫烏一。故其八咫烏引道。從二其立後一應二幸行一。故隨二其敎覺一從二其八咫烏之後一幸行云云。新撰姓氏錄云。神日本磐余彥天皇。欲レ向二中州一之時。山中嶮絕。跋涉失レ路。於レ是神魂命孫鴨建津見命。化二如大烏一翔飛奉レ導。遂達二中州一。天皇嘉二其有一レ功。特厚褒賞。八咫烏之號從レ此始也。

御井。　素戔烏子也。母稻羽八上姬。

城上郡。

大神。　舊事紀云。大物主神密通二活玉依姬一時。人無二知者一。姬懷妊。父母怪疑問云。誰人來到乎。姬答云。頃者。人自二屋上一夜潛來二于吾所一。共同寢也。父母欲レ知レ之。採二針與レ糸授一姬曰。令〔會歟〕二彼神人一。以二此針一可レ着二其衣裾一。此夜神人來臥。姬如二父母敎一。朝見二彼糸一。自二鑰穴一出。認レ跡尋レ之。過二鄉〔茅亭歟〕度山吉野山一。留二三諸山一。其糸纏絡有二三輪一。故名二三輪一。

狹井。　疫神也。神祇令曰。花散之時。疫神分散爲レ癘。有二鎭花祭一。舊記云。鎭花祭祀二大神狹井一也。宇多帝寬平九年三月七日。勅享梅。神祇令註云。狹井者大神之荒魂也。

城下郡。

鏡作伊多神社。　石凝姥命。

鏡作麻氣神。　天糠戶命。

高市郡。

鴨事代主。　舊事紀云。大己貴神。娶二坐二邊津宮一高降姬神一生二一男一。都味齒八重事代主神。坐二倭國高市郡高市社之甘南備一。

飛鳥社。
牟佐神社。　生雷神也。
飛鳥社。　賀夜奈流美命。
十市郡。
多坐彌志理都比古。（或號大社。）
天香山坐櫛眞命。　天照大神之孫。饒速日御子。
天香山命也。
山邊郡。
大和坐大國魂。大歳神子。大歳者素戔子。母須沼比女。大和社者。大國玉大歳須沼比女三座。人皇十代崇神帝六年鎭座。五十六代清和帝貞觀元正月廿七日。從一位。
河内高安郡。
恩智。　御食津神也。當國二宮。
志紀郡。
當宗神。　新國史云。人皇五十八代光孝帝仁和五年。改元。己酉四月乙亥。朕之外祖母當宗氏神。在河内國。自今年始可祭之狀。御四記云。寛平五年四月七日戊辰。奉遣河内國志紀郡當宗氏神幣帛使。當宗社天皇外祖母之氏神也。
攝津住吉郡。
住吉。底。中。　表筒男命。　神功皇后也。皇后十一年辛卯。住吉垂跡長門豐浦京。住吉神顯國賊皆伏之故。香椎大明神是也。皇后皈座之後。一神留攝津國住吉郡。今住吉大明神也。一神奉崇信濃國諏訪郡。今諏訪大明神是也。攝津國風土記云。住吉大神現出而巡天下。覓可住國時。到於沼名椋之長岡前。（今神宮南也）乃定神社。
東生郡。
生魂社。
比賣胡曾。　下照姫。
阿遅速雄。　高鴨明神也。味耜詫彦根命。

西成郡。
坐摩。神功皇后也。凱旋之日於ニ此所一飮食也。仍名。譽田天皇三年十一月。百濟辰斯王叛。遣角宿禰。羽田矢代宿禰一令レ伐レ之。卽日於ニ難波一沼中一祀レ之。仍爲ニ住吉第一攝神一
武庫郡。
廣田。日本紀云。神功皇后九年。伐ニ新羅一之明年春二月。天照大神誨曰。我荒魂不レ可レ近ニ皇居一當レ居ニ御心廣田國一隨ニ神敎一以鎭座焉。或說云。廣田者天照大神之荒魂也。可レ謂ニ神宮御同體一如ニ式文一者一座也。其見在內。八幡。松尾。住吉八祖神。（八祖神者。八神殿內高皇產靈神也。）也。貞觀十二年十月六日。從一位。
八部郡。
生田。天照太神妹稚日女也。
長田。事代主命也。日本紀云。神功皇后元年。事代主尊誨レ之曰。祠ニ吾于御心長田國一則以ニ葉山姬之弟長媛一令レ祭レ之。
有馬郡。
湯泉宮。舊記云。三輪明神也。
伊賀阿拜郡。
敢國。南宮也。金山姬命。
伊勢度遇郡。
太神宮。相殿二座。（手力雄。栲播姬。）舊記云。太神宮。已前筑紫日向天降座。神武帝已後九帝。宮中座。崇神天皇奉レ遷ニ大和宇陀郡一人皇十一代垂仁廿五年。鎭ニ座伊勢一是謂ニ礒宮一同廿六年丁巳十月甲子。遷ニ于度遇宮一
度遇宮。豐受太神也。相殿三座。（兒屋禰。太玉。瓊々杵。）舊記云。雄略廿一年依ニ太神託一從ニ丹波與謝郡魚井原一奉レ迎レ之。朝夕御饌。自ニ外宮一參ニ內宮一人皇四十五代聖武帝神龜六年正月十日。於ニ途中一有ニ汚穢一於ニ外宮御氣殿一借ニ進內外宮御饌一也。

神前。元々集云。荒前姫。
雷電。又云。大歳御祖神。
尾張中嶋郡。
大神。新式。第三。名神祭所 大神社一座。或大
作レ多。
丹羽郡。
生田。天照妹稚日女尊。
年魚市郡。
熱田。人皇十二代景行帝十四男小碓尊。後名
日本武。此神垂跡也。大宮日本武。東素戔烏。
南宮簀姫。今氷上明神是也。西伊弉並。北倉稲
尊。中央天照太神。已上六社。高藏宮。八劔宮。
日破宮。氷上宮。大福殿。源太夫御前。紀太夫
御前。尾張風土記云。熱田社者。昔日本武命
巡二歷東國一還時。娶二尾張連等遠祖宮簀姫命一。
宿二於其家一。夜須向レ厠。以二隨身劔一掛二於桑木一遺
レ之。入レ殿乃驚。更往取レ之。劔有レ光如レ神。不レ把二
得之一。卽謂二宮簀姫一云。此劔神氣。宜レ奉レ齋レ之
爲二吾形影一。因以立レ社。熱田鄕爲レ名也。先師說
云。熱田社者。日本武尊留二其形影一。天叢雲劔
爲二御神體一。可レ謂二日本武尊垂跡一者。
日割御子。日本武五男武鼓王也。母吉備穴戶
武姫。吉備武彥女。
孫若御子。日本武第七男稚武彥王也。母弟橘
媛。穗積氏。忍山宿禰女。
高座結。日本武第二子仲哀天皇也。
火上姉子。兩道入姫命也。日本武姉也。爲二仲
哀母一。
參河賀茂郡。
猿投。人皇十二代景行帝第一皇子大碓命也。
母播磨稻目大郎姬。
遠江佐野郡。
己等乃摩知。大己貴命也。
蓁原郡。

敬滿。一名事任大明神。
伊豆賀茂郡。
阿波。續日本後紀九云。三嶋大社本后也。
物忌奈。阿波神御子也。
武藏足立郡。
氷川社。日本武東征之時。勸₌請素戔烏尊₋也。
入間郡。
中氷川。日本武東征之時。勸₌請稻田姬₋。
男衾郡。
出雲伊波比。大己貴命也。
稻乃賣。稻田姬。
安房々々郡。
安房坐神。舊事紀云。復天富命於₌安房國₋立₌太玉命社₋謂₌安房社₋也。
上總埴生郡。
玉前。高皇産靈孫玉前命也云。不審也。今案高皇魂弟生産靈子也。號₌前玉命₋掃部連等祖也。

下總香取郡。
香取。舊事紀云。伊弉諾以₌十握劔₋斬₌軻遇槌₋。鋒垂血激越爲ㇾ神。走就₌湯津磐村₋所ㇾ成之神名。曰₌磐裂神。根裂神₋兒磐筒男。磐筒女。二神相生神也。兒經津主神。今香取大神是也。
常陸鹿嶋郡。
鹿嶋。舊事紀云。伊弉諾以₌十握劔₋斬₌軻遇槌₋爲₌八段₋。各化爲ㇾ神。八山祇。復劔刄垂血激越爲ㇾ神。熯速日神。今座₌天安河上₋。兒建甕槌男神。今常陸國鹿嶋大神是也。卽石上布都大神是也。
那賀郡。
大洗礒前藥師菩薩。大己貴命。
酒烈礒前藥師菩薩。少彥名。
近江國滋賀郡。
那波加。一名苗鹿。
栗太郡。

印岐志呂。
佐久奈度。　一名佐久良谷大明神。
野洲郡。
兵主。　名神祭所レ不レ載レ之。可レ尋焉。
小津。　宇賀魂。
蒲生郡。
沙々貴。　仁德天皇。一說少彥名。
高嶋郡。
水尾。　彼郡內有二大河一。作河南水尾猿田彥神。名二河內社一。河北天鈿女神也。兩社分二水尾川一勸請也。
美濃不破郡。
金山彥。　風土記云。伊弉諾尊生二火神軻遇槌一之時。悶熱懊惱因爲レ吐。此化神曰二金山彥神一是也。一宮也。
飛驒大野郡。
水無。　大己貴命女高照光姬命。母高降姬。大和國葛上郡御歲神社同レ之。
信濃伊那郡。
阿智。　思兼命。
諏訪郡。
南方刀美。　舊事紀云。大己貴命娶二高志沼河姬一生二一男兒一。建御名方神。坐二信濃國諏訪郡一。諏訪上社是也。下社片倉邊命。是天手力雄命男也。
更級郡。
武水別。　名神祭所レ不レ載レ之。可レ尋焉。
水內郡。
美和。　三輪大明神也。
伊豆毛。素戔烏命也。
妻科。　稻田姬也。
健御名方富命。　諏訪一體也。名神祭所レ不レ載レ之。可レ尋焉。
上野甘樂郡。

貫前。一名抜鋒大明神。
群馬郡。
榛名。其所榛名。
山田郡。
賀茂。大山咋神。
美和。大己貴命。
下野都賀郡。
大神。三輪大明神也。
河內郡。
二荒山。事代主命。
陸奥白川郡。
都々古和介。味耜詫彥根。
伊和止和介。手力雄命。
玉造郡。
温泉。大己貴。
温泉石。少彥名。
會津郡。

伊佐沼美。作レ須非。伊弉竝伊弉諾二座也。古老
諺云。有二二神像一不レ知二何時畫筆一也。畏二神威一
而。淸寧天皇御宇辛酉歲。造レ殿奉レ遷レ之。
蠶養國。稚產靈。
小田郡。
黃金山。金山彥命也。
若狹遠敷郡。
若狹比古。火々出見一座。豐玉姬一座。人皇四
十五代元正天皇御宇靈龜元乙卯九月十日。
當國遠敷郡西鄉內。靈河之源白石上始垂跡。
又云瓊々杵也。
三方郡。
宇波西。新式。名神祭不レ載レ之。
越前氣比郡。
氣比。風土記云。氣比神宮者宇佐同體也。八幡
者應神天皇之垂跡。氣比明神仲哀天皇之鎭
座也。

天利劔。續日本後紀云。氣比大神之御子。
天比女若子。同上。
伊佐奈彥。同上。
坂井郡。
比古奈。少彥名。
枚岡。天子屋命。
能登羽咋郡。
氣多。大己貴命。
越中礪浪郡。
氣多。延喜八年八月十六日乙卯。以越中氣多大神預官幣。國史云。延曆三年三月三日丁亥。氣多神正三位。社記云。天活玉命。
佐度羽茂郡。
度津。五十猛命
丹波桑田郡。
出雲。一作出芋。天津彥根一座。三穗津姬一座。

神野。賀茂建角身命婦伊賀古彌日賣命也。玉依彥玉依姬母也。玉依姬鴨御祖神也。玉依彥可茂縣主等遠祖也。
松尾。大山咋。
大井。月讀命也。建治乙亥四月。神輿依大井河大水而流此地。故國民祭之云々。
村山。山國內也。大山祇也。
船井郡。
幡日佐。氷大明神。神吉氷室。件社解云。和銅年中御影向。當時齊衡年中。被授追從三位。宣命云。貢氷非啻署月貢進知。天下之泰平。庶民之豐稔之嘉瑞也。
丹後與謝郡。
籠神。一名籠守權現。
但馬朝來郡。
粟鹿一宮。上社彥火々出見。中社籠神。女體也。下社豐玉姬勸請。女此。又云。伊弉諾伊弉竝相

貫前。　一名抜鋒大明神。
群馬郡。
榛名。　其所榛名。
山田郡。
賀茂。　大山咋神。
美和。　大己貴命。
下野都賀郡。
大神。　三輪大明神也。
河内郡。
二荒山。　事代主命。
陸奥白川郡。
都々古和介。　味耜詫彦根。
伊和止和介。　手力雄命。
玉造郡。
温泉。　大己貴。
温泉石。　少彥名。
會津郡。

伊佐沼美。作須非。　伊弉並伊弉諾二座也。古老
諺云。有二神像不知何時畫筆也。畏神威
而。淸寧天皇御宇辛酉歲。造殿奉遷之。
蠶養國。　稚産靈。
小田郡。
黃金山。　金山彥命也。
若狹遠敷郡。
若狹比古。　火々出見一座。豐玉姬一座。人皇四
十五代元正天皇御宇靈龜元乙卯九月十日。
當國遠敷郡西鄉內。靈河之源白石上始垂跡。
又云瓊々杵也。
三方郡。
宇波西。　新式。名神祭不載之。
越前氣比郡。
氣比。　風土記云。氣比神宮者宇佐同體也。八幡
者應神天皇之垂跡。氣比明神仲哀天皇之鎮
座也。

天利劍。續日本後紀云。氣比大神之御子。
天比女若子。同上。
伊佐奈彥。同上。
坂井郡。
比古奈。少彥名。
枚岡。天子屋命。
能登羽咋郡。
氣多。大己貴命。
越中礪浪郡。
氣多。延喜八年八月十六日乙卯。以越中氣多大神預官幣。國史云。延曆三年三月三日丁亥。氣多神正三位。社記云。天活玉命。
佐度羽茂郡。
度津。五十猛命
丹波桑田郡。
出雲。一作出芋。天津彥根一座。三穗津姬一座。

神野。賀茂建角身命婦伊賀古爾日賣命也。玉依彥玉依姬母也。玉依姬鴨御祖神也。玉依彥可茂縣主等遠祖也。
松尾。大山咋。
大井。月讀命也。建治乙亥四月。神輿依大井河大水而流此地。故國民祭之云々。
村山。山國內也。大山祇也。
船井郡。
幡日佐。氷大明神。神吉氷室。件社解云。和銅年中御影向。當時齊衡年中。被授追從三位。宣命云。貢氷非啻署月貢進。知天下之泰平。庶民之豐稔之嘉瑞也。
丹後與謝郡。
籠神。一名籠守權現。
但馬朝來郡。
粟鹿一宮。上社彥火々出見。中社籠神。女體也。下社豐玉姬勸請。女此。又云。伊弉諾伊弉立相

生之兒。大日靈神。月讀。素盞烏。合三神。和銅元年歲次戊申八月十三日。筆取神部八嶋勘註言上。正六位上新羅將軍神力直根開。
養父郡。
水谷。名神祭所不載之。
屋岡。諏訪同。
出石郡。
出石。又說一宮也。古事記云。應神天皇。多遲摩比多阿娶其姪申良度美。生子葛城高額姬命。故其天日矛持來者。玉津寶云而珠二顆。又振浪比禮。切浪比禮。振風比禮。切風比禮。又奥津鏡。邊津鏡。幷八種者。伊豆志之八前太神也。
御出石。名神祭不載之。
須義。三輪同體。
佐々伎。少彥名。
氣多郡。
山神。大山祇。

因幡法美郡。
宇陪一宮。風土記云。武內宿禰垂跡也。仁德帝治五十五年春三月。御歲三百六十餘歲。當國御下向。於龜金双履殘。御陰所不知。六代帝後見也。當國宇陪。大和葛城堺。美濃國不破關是三ヶ國同日同時顯座。
出雲意宇郡。
熊野。伊弉並。軻遇槌。
佐久佐。稻田姬。
山代。伊弉諾也。
嶋根郡。
加賀。
美保。三穗津姬也。一座事代主。
秌鹿郡。
佐陀。伊弉並尊。神代岩隱地。
惠曇。素戔子磐坂彥命。
出雲郡。

后神。　三穗津姫。一云㆓須勢利姫㆒。
御碕。　天照大神。
飯石郡。
飯石。　脚摩。手摩。
須佐。　素戔嗚。
川邊。　八岐蛇。
石見安濃郡。
物部。　味間乳命。
那賀。
多鳩。　二宮也。
隱岐知夫郡。
由良比咩。　大己貴命 嫡后須勢利姫命。元名和
　多須神。
播磨餝摩郡。
白國。　四宮也。
高岳。　五宮也。
宍粟郡。

伊和。　一宮也。
多可郡。
荒田。　二宮也。
美作苫東郡。
高野。　二宮也。
中山。　一宮也。大己貴命。
備前赤坂郡。
鴨。　山城同。
布都之魂。　素戔所持之神劔也。武雷命。
備中賀夜郡。
吉備津彦。　人皇第七孝靈天皇御子彦五十狭
芹彦命。亦名吉備津彦命。此說非也。孝靈三世
皇子吉備武彦命也。日本紀與㆓風土記㆒符合。景
行天皇御宇。彼御子吉備武彦命。罷㆓吉備國㆒。
如㆓備中國風土記㆒者。賀夜郡伊勢御社東有
レ河。名㆓宮瀬川㆒。河西者吉備建日子命之宮造。
此三世王故。之名㆓宮瀬㆒。勸請年紀未㆓分明㆒。

安藝佐伯郡。
伊都支嶋。　號嚴嶋大明神。天照與素戔誓所生三女。其一神市杵嶋姬也。
周防佐波郡。
玉祖。　伊弉諾男玉屋命。
長門豐浦郡。
住吉。　神功皇后十一年。垂跡于長門國豐浦。住吉神三座者。攝津國住吉郡。筑前那珂郡。長門國豐浦郡。三所也。住吉大神。其荒魂在筑紫之小戶。和魂者神功皇后征三韓時。顯座攝州而詫神功皇后體而循行四方。遂到攝州之地宣言曰。眞住吉々々々之國也。因鎭座其地名曰住吉。豐浦之住吉。那珂之住吉。由攝州地名而通稱之。
紀伊伊都郡。
丹生都比女。　先師說云。高野山天野大明神是也。天照太神之妹稚日女神也。高野明神當宮太子也。一說云。丹生都姬天照大神也。坐和州丹生川之裔。故名丹生都姬也。後又顯伊勢國。
名艸郡。
日前。　一名國懸宮。又名艸宮。日本紀云。思兼神以石凝姥爲冶工。採天香山之金。以作日矛。此奉造之神像。是卽紀伊國所座日前神也。
石凝姥命也。
伊曾大神。　大己貴子五十猛命也。多以木種播殖于大八洲之國。爲有功神。
大屋姬。　五十猛命妹。
抓津姬。　同上。
靜火。　右自伊達之神社至靜火社。以此三神名紀三所社。
有田郡。
須佐。　伊曾太神末社也。
牟婁郡。

熊野。崇神天皇十六年。始建二熊野本宮一。又景行天皇五十八年。建二同新宮一。

淡路津名郡。

伊佐奈伎。又曰二多賀一。又天地大明神。

阿波板野郡。

大麻彥。猿田彥命。

麻殖郡。

忌部。日鷲命。

讃岐香川郡。

田村。一宮也。名神祭所レ不レ載レ之。猿田彥。

阿野郡。

城山。名神祭所レ不レ載レ之。

伊與新居郡。

伊曾。名神祭所レ不レ載レ之。

越智郡。

大山祇。俗稱二三嶋大明神一。伊與風土記云。宇智郡御座神。御名大山積神。一名和多志大神也。是神者。所レ顯二難波高津宮御宇天皇仁德一御世一。此神自二百濟國一度來座。而津國御嶋坐云々。謂二御嶋一者。津國御嶋名也。

多伎。名神祭所レ不レ載レ之。

伊與郡。

伊與。名神祭所レ不レ載レ之。

土佐土佐郡。

都佐坐神。一宮也。俗號二高賀茂大明神一。土佐國風土記云。土佐郡郡家西去四里。有二土佐高賀茂大社一。其神名爲二一言主尊一也。其祖未レ詳。一說云。大穴六道子味耜高彥根尊也。

朝倉。土佐風土記云。土佐郡有二朝倉郷一〔今下或脫按字〕。郷中有レ社。神名天津羽々神。天石戶別乎。今天石戶別之神子也。先師云。天津羽々神者朝倉社也。

筑前宗像郡。

宗像。日本紀云。天照太神。索二取素戔烏尊十握劒一。折爲二三段一。濯二于天眞井一。齰然咀嚼而吹棄

氣噴之狹霧所生神。號曰田心姬。次湍津姬。次市杵嶋姬。凡三女矣。此三女神悉是爾兒。便使授之素戔烏尊。此筑紫胸肩君等所祭神也。田心姬命坐宗像奥津宮。中津姬命坐中津宮。邊津姬命坐同邊津宮。又在大和國城上郡。山城左京者新宮也。

那珂郡。

筥崎。一宮。人皇六十代醍醐天皇治廿四年延喜廿一年六月廿一日。大神御詫云。吾社波宮柱三惡有云々。欲移住筥崎松原。其故昔天下國土鎭護始之時松原也。

住吉。日本紀云。伊弉諾伊弉並。往至筑紫日向小戸橘之檍原而。祓除將盪滌身之所汚。乃濯於海底。因以生神。號曰底津少童神。次底筒男命。又潜濯於潮中。因以生神。號曰中津少童命。次中筒男命。又浮濯於潮上。因以生神。號曰表津少童命。次表筒男命。其底筒男命。中筒男命。表筒男命。是卽住吉大神矣。

糟屋郡。

志賀。是住吉一體也。底津少童。中津少童。表津少童。

御笠郡。

竈。延喜廿年六月廿一日。八幡大神御詫宣。竈門宮波我伯母仁御座。

夜須郡。

於保奈牟智。大己貴命也。筑紫風土記云。氣長足姬。欲伐新羅。整理軍士。祭行之間。道中逃亡。占求其由。卽有祟神。名曰大三輪神。所以樹此神社。遂平新羅。

筑後三井郡。

高良玉垂。武内宿禰也。人皇四十代天武天皇白鳳二年二月八日。高良神詫云。譽田天皇御宇爲晨昏武略之健將。末世時古敵新羅禍害發物會。筥崎松原仁建立新宮。可降伏新羅之

由字乎書天。吾座下置天。其上石居。柱乎立天。宮殿乎造。向新羅天。自然降伏消除奈年云々。件新宮。以延長元年遷御已畢。人皇六十代醍醐天皇治廿八年 延長三年 乙酉五月十八日。高良神詫云。宮崎宮北望巨海。西向絶域。爲防異賊之來寇也。不啻我朝德及遐方。高麗國接境不犯云々。社解云。三所。中殿高良。左八幡。右住吉云々。

豐比咩。　因繰在肥前國佐嘉郡與止姫社也。

豐前宇佐郡。

八幡。　三所者。一八幡。二比女神。三大帶姫也。豐前國宇佐郡 菱形山廣幡八幡大神。坐郡家東馬城峯頂。後亦人皇 四十五代聖武帝 御宇神龜四年。就此山奉造神宮。名曰廣幡八幡大神宮。

比賣。　宇佐使時被獻御裝束。

大帶姫。　社解云。仲哀帝后妃。應神天皇聖母。神功皇后也。宇佐使時。被獻御裝束。

田川郡。

辛國息長大姫。　豐前國風土記云。田川郡鹿春鄉。昔者新羅國神自度到來。住此川原。卽名曰鹿春神安水之豐州比賣語曾社。不見神名帳幷風土記也。而任那新羅國種也。辛嶋比女語曾神之垂跡也。

豐姫。　註肥前佐嘉郡下。

豐後大野郡。

西寒多。　名柞原大原神。　宮崎同體也。

肥前松浦郡。

田嶋。　仲哀帝弟稚武王也。號上松浦明神也。

志々伎。　稚武王弟十城別王也。號下松浦明神也。

佐嘉郡。

與止日女。　風土記云。人皇卅代 欽明廿五年甲申冬十一月朔日甲子。肥前國佐嘉郡與止姫

神有鎭座。一名豐姫。一名淀姫。乾元二年記云。淀姫大明神者。八幡宗廟之叔母。神功皇后之妹也。三韓征伐之昔者。得干滿兩顆而沒異域之凶徒於海底。文永弘安之今者。施風雨之神變而摧幾多之賊船於波濤云々。河上大明神是也。

肥後阿蘇郡。

健磐龍阿蘇津彥。阿蘇都姫。人皇十二代景行帝十八年。巡狩筑紫。到阿蘇國。曠遠不見人居。天皇此國有人乎。時有二神。曰阿蘇都彥。阿蘇都姫。忽化人以遊詣之曰。吾二人在。何無人乎。故名其國曰阿蘇。

國造。

日向兒湯郡。

都農。一宮也。大己貴命。

大隅桑原郡。

鹿兒嶋。甬而應神天皇。若宮仁德。大御前大比留女。兼右案之。神功乎。欽明五年顯座云々。

囎唹郡。

大穴持。大己貴命。

薩摩頴娃郡。

枚聞。和多都美神。

壹岐石田郡。

手長男。思兼命一男也。

手長姫。同子。

對馬上縣郡。

和多都美。八幡大神也。

大鳥。舆書云日本後紀作木。

右一卷。或人拔上件神名。乞本緣之註記也。不得默止。摘先達之秘記註進畢。

文龜三年十二月廿六日

神道長上從二位行神祇大副兼侍從

卜部朝臣兼倶

尾張國內神名牒

正月十一日有下座主讀二國內神名帳一神事上。〔此十字恐當在此數云々之下〕

熱田太神宮。奉レ唱二王城鎮守諸大明神一。

伊勢二所梵尊。　比叡山王三聖大菩薩。

八幡三所大菩薩。　宇佐大菩薩。

金峯山金剛藏王大菩薩。熊野三所大權現。

白山妙理大權現。　立山滿行大菩薩。

竹生嶋大辨才天女。　熱田大福田大菩薩。

多賀信行大菩薩。　中山滿行大菩薩。

伊豆滿行大菩薩。　氣比氣多兩所大菩薩。

高野木河兩所大菩薩。　二荒滿行大菩薩。

賀茂下上大明神。　稻荷大明神。

松尾大明神。　住吉大明神。

廣田大明神。　垂水大明神。

比良大明神。　淺間大明神。

神野大明神。　葛木大明神。

春日大明神。　大原野大明神。

瀧藏大明神。　伊福貴大明神。

三嶋大明神。

尾張國內諸神社。

海部郡二十座。

從二位上。大國玉名神。　憶感名神。

甘樂名神。

從三位上。諸桑天神。　塗部天神。

宇多須天神。　藤嶋天神。

生桑天神。　夜櫓天神。

新屋天神。

正四位下。大井天神。　宗形天神。

從三位上。馬嶋天神。　中杜天神。

小杜天神。　鳥取天神。

正四位下。伊福部天神。　河氣天神。

從二位上。赤星大名神。

正四位下。相江地神。

中嶋郡四十八座。

正一位。眞清田大明神。　於保名神。
太神名神。　伊奈波名神。
千代名神。　金名神。
國玉名神。　鞆江名神。
御玉名神。
從一位。酒見名神。　久田名神。
淵森天神。
從二位。小塞天神。
從二位上。宗形天神。
從三位上。淺井天神。　石作天神。
溢江天神。　鹽門天神。
御母天神。　川曲天神。
千野天神。　堤治天神。
從三位上。針前天神。　高田波曾岐天神。
坂手原天神。　美奴天神。
波曾木天神。　疵非天神。

室原天神。　野見天神。
石門天神。　除治早天神。
大口天神。　裳咋天神。
大神神社。　蕨野天神。
櫟江天神。　物部天神。
小盛天神。　茜部天神。
賣夫天神。　赤竹天神。
河俣天神。　河俣下天神。
修理若御子天神。　長杜天神。
鵜養地天神。
正四位下。鈴置地神。

羽栗郡十二座。

從三位上。足近天神。　穴太天神。
石作天神。　河嶋天神。
大野天神。　蘆入天神。
若栗天神。　生嶋天神。
黑田天神。　大筒天神。

伊福利天神。　宇夫須那天神。
丹羽郡三十五座。
正一位。大縣大明神。　三名神大明神。
從一位。針繩名神。　吾縵名神。
從三位上。比良賀天神。
從三位下。成海天神。
從三位上。吾馬天神。　諸桑天神。
立野天神。　石作天神。
山名天神。　前刀天神。
井出天神。　丹羽天神。
鹽道天神。　伊賀原天神。
詫美天神。　工天神。
虫鹿天神。　稻木天神。
削栗天神。　田方天神。
生田天神。　小口天神。
田宮天神。　新屋天神。
楉野天神。　松杜天神。

奈良志天神。　鳥杜天神。
國玉天神。　鳴海天神。
鹽田天神。　赤見國玉天神。
赤見天神。
春日井郡二十座。
從二位上。船備名神。　內津天神。
多氣天神。　片山天神。
物部天神。　味鋺天神。
樋田天神。　六師天神。
訓原天神。　魚江天神。
板鳩天神。　高見天神。
外山天神。　松原天神。
志賀田天神。　粟野三所地神。
正四位下。粟栖地神。
從三位上。草田天神。　小高薗天神。
菅生天神。
山田郡二十四座。

從三位上。羊天神。　坂庭天神。
澁河天神。　大簷天神。
金天神。　尾張戸天神。
深河天神。　大井天神。
大目天神。　石作天神。
桁幡天神。　尾張田天神。
大江天神。　和田天神。
片山天神。　河嶋天神。
和示天神。　小口天神。
川原天神。　夜簷天神。
伊奴天神。　牟久杜天神。
山口天神。　賓々天神。

愛智郡二十七座。

正一位。熱田皇太神宮。
從一位。素盞雄名神。
正二位。高藏名神。　今彥名神。
日制名神。　乙子名神。

正一位。八劒名神。
正二位。青衾名神。　氷上名神。
日長名神。　千竈上名神。
千竈下名神。　水向天神。
從三位上。成海天神。　物部天神。
高牟久天神。　孫若御子天神。
伊福利天神。
從一位上。三田天神。　暮田天神。
訓原天神。　氷上姉子天神。
油江天神。　萱津天神。
日置天神。　入江天神。
針名天神。

知多郡十六座。

從一位上。波豆名神。　知鯉鮒名神。
從二位上。英比天神。　入海天神。
日長天神。　成石天神。
常石天神。　天尾天神。

正四位下。　櫟屋天神。　杞摩加天神。
從三位上。　壬生天神。　富具天神。
伊具智天神。　阿奈志天神。
荒太天神。　野間天神。
奉レ始ニ武塔天神幷八王子一。
右神名帳所レ奉レ唱如レ件。
依ニ文治二年丙午三月日
宣命狀一。國中諸神皆增ニ位階一。爲ニ天下安穩御祈
禱一。
于時貞治三年甲辰正月七日酉剋讀上。
右筆行範

右以熱田座主如法院藏本書寫畢

伊豆國神階帳

伊豆國三ヶ郡内神明帳事。
正一位三嶋大明神。　一品きさきの宮。
一品當きさの宮。
正五位上第三王子幷十八所御子達
正一位千眼大菩薩。
從五位上六所王子。
從一位やきわらの明神。
從一位廣瀬明神。
正五位上角の明神。
正一位天滿天神。
從四位上小河泉明神。
從四位上玉作明神。
從四位上たんかいの明神。
從四位上宮玉の明神。
從四位上高橋の明神。

従四位上くわとの明神。
従四位上なつめの明神。
従四位上さゝわらの明神。
従四位上おほあさの明神。
従四位上たわらの明神。
従四位上河原の明神。
正四位上あらきの明神。
従四位上にゐのゝ明神。
正四位上瀬の明神。
従四位上ちゝなしの明神。
正四位上狩野の明神。
正四位上長瀬の明神。
正四位上奈胡谷の明神。
従四位上高山の明神。
従四位上たき山の明神。
従四位上熱海の湯明神。
従四位上多明神。

従四位上たまたの明神。
正五位下ひたの王子。
那賀郡貳拾四所。
従四位上みのわの明神。
従四位上いしひの明神。
従四位上いなかみの明神。
従四位上おゝとしの明神。
従四位上ゐたの明神。
従四位上いなしりの明神。
従四位上なかおゝとしの明神。
従四位上たにやの明神。
従四位上多胡の明神。
従四位上宇久須の明神。
従四位上へたの明神。
従四位上二浦谷玉姫の明神。
従四位上いわらい姫の明神。
従四位上國玉姫の明神。

従四位上みかたま姫の明神。
従四位上もろき姫の明神。
従四位上とよみ玉姫の明神。
従四位上青玉姫の明神。
従四位上國原姫の明神。
従四位上いなみや姫の明神。
従四位上しての明神。
従四位上にゐの明神。
従四位上石戸の明神。
従四位上うちわたりの明神。
賀茂郡三十七所。
従四位上なつ姫の明神。
従四位上いつな姫の明神。
従四位上いわし姫の明神。
従四位上ほこわけの明神。
正五位下をつさわけの明神。
従四位上たつふたわけの明神。

従四位上いはくらわけの明神。
従四位上いわよ姫の明神。
従四位上たけしの明神。
従四位上あめつかた姫の明神。
従四位上いわ姫の明神。
従四位上をゝつゆき姫の明神。
従四位上いわてわけのみこ。
従四位上おさめいわかはのみこ。
従四位上さかわら姫のみこ。
従四位上月まの明神。
従四位上加茂の明神。
従四位上おほいの明神。
正五位上國ぬしの明神。
正五位上船との明神。
正五位上たふこまつの明神。
正五位上みちつくりの明神。
大嶋井嶋々十五所各五位上。

康永二年辛亥十二月廿五日　在廳判

右伊豆國神階帳一卷以當國在廳伊達某藏本書寫一挍畢

上野國神名帳

上埜國。摠五百七十九座。
鎮守十二社。
正一位。抜鉾大明神。　赤城大明神。
伊香保大明神。　榛名大明神。
甲波宿禰大明神。
從一位。小祝大明神。　火雷大明神。
倭文大明神。　大國玉大明神。
加茂大明神。　美和大明神。
宇藝大明神。
甘良郡三十三座。
正一位。抜鉾大神。
從一位。宗岐明神。
從三位。丹生明神。　秋山明神。
鳥總明神。
從四位下。抜鉾若御子明神。

正五位。天津社明神。
從五位下。玉山明神。
從五位上。佐位明神。新屋明神。
億津宮明神。朝賀保明神。
小船明神。高垣明神。
荒垣明神。縣明神。
朝照明神。於神明神。
餘社十五座。
多胡郡廿五座。
從二位。辛科明神。
從三位。物部明神。
正五位上。郡御玉明神。鳥總明神。
從五位上。櫛子明神。穗積明神。
馬片山明神。有志子明神。
餘社十七座。
綠埜郡十七座。
從三位。丹生明神。廣野明神。

波與明神。
正四位下。椙山明神。
從四位下。水沼明神。
從五位上。郡御玉明神。
正五位上。土師明神。
從五位上。荒御玉明神。
餘社九座。
碓氷郡二十五座。
從二位。波古曾明神。
從三位。美都澤明神。飽馬明神。
從四位。若國玉明神。新屋明神。
從四位下。事玉明神。
從五位上。下田明神。
從五位上。鹿嶋明神。咲前明神。
餘社十六座。
片岡郡十四座。
從四位。小野明神。

從四位上。鎌總明神。
從四位下。下縣明神。　榛名木戶明神。
從五位上。吠前明神。
餘社九座。
群馬郡百四十六座。
正三位。溫泉明神。
從三位。大友明神。　丹生明神。
正四位上。新屋明神。
正四位下。小河原渠口明神。　物部明神。
從四位上。放光明神。　小祝明神。
止々呂明神。　若伊香保明神。
嶋名明神。　石井明神。
大御子明神。　郡御子明神。
中山明神。　有馬渠口明神。
正五位上。伊香保明神。　大國玉明神。
從五位下。鏡明神。
從四位下。小津明神。

從五位上。槻村明神。
正五位上。赤城若御子明神。
正五位上。伊勢明神。　高山明神。
大取明神。
正五位下。有馬堰口明神。　高井明神。
矢田部明神。　狐墓明神。
有馬堰口御鐅明神。　麻生明神。
石內明神。
從五位上。横和知明神。
從五位上。子持明神。　鐅越明神。
息津宮明神。　魚所明神。
大木明神。　貫前若御子明神。
從五位。池岸明神。
從五位上。桑原明神。　石壺明神。
中家明神。　サ、メ馬騳明神。
大友明神。　伊香保明神。
刀部明神。　日置明神。

大井明神。　道中明神。
横手明神。　津矢明神。
小柴明神。　大柴明神。
子高井明神。　赤城三明神。
赤波明神。
餘社八十九座。
群馬郡西郡百六十九座。
正三位。宮姫明神。
從三位。大奈知明神。　小奈知明神。
息災寺小祝明神。　尾張明神。
高田明神。　古舘明神。
諏訪若御子明神。
從三位上。息津宮明神。　鹿嶋明神。
芝麻明神。　桑上明神。
感馬明神。　新渠明神。
從四位上。扳鉾若御子明神。
從三位上。沼嶋明神。

正三位。赤城三御子明神。
從四位上。家尾明神。　榛名木戸明神。
菓矢明神。
從四位下。月波明神。　胸形明神。
南宮明神。　宇挍院若御子明神。
小桑明神。　石神明神。
桑下明神。
正五位上。玉山明神。　温泉明神。
横手明神。　駒形明神。
毛野明神。　大嶋明神。
小石明神。　田中明神。
小河明神。　小嶋明神。
泉矢明神。　車持若御子明神。
大野明神。　榛名若御子明神。
大井明神。
從四位上。榛名上神明神。
從四位下。伊香保木戸明神。　財部明神。

扳原明神。　春科明神。
榎本明神。
從五位上。田口明神。　於神明神。
榛名大所明神。　火雷若御子明神。
車持大明神。　新渠明神。
倭文若御子明神。　桑上明神。
白羅禰若御子明神。　芳賀明神。
香取若御子明神。　大石明神。
赤城若御子明神。　榎本於神明神。
大嶋明神。　水沼明神。
桑下明神。
餘社百四座。
吾妻郡十二座。
從一位。白根明神。
從二位。小白根明神。
從三位。淺間明神。
從四位上。小礒明神。

從五位上。小不多明神。　佐奈明神。
新渠明神。
餘社五座。
利根郡廿二座。
從一位。保寶高明神。
從一位。小高明神。
從二位。碓根明神。
從三位。笠科明神。　絲井明神。
鬼坂明神。　大社明神。
從四位上。石油利明神。
從四位。國津社明神。
從四位上。津馬利明神。　新屋明神。
郡玉明神。
從五位上。小用明神。　利神明神。
飯玉明神。　山神明神。
餘社五座。
勢多郡廿三座。

從三位。　於神明神。　鳥取明神。
從四位。　榛名木戸明神。　伊香保若御子明神。
正四位下。　郡玉明神。　高井明神。
若國玉明神。
正五位上。　井出上明神。　白川明神。
小出明神。　霜川明神。
榛名若御子明神。　神前明神。
赤城若御子明神。
餘社九座。
那波郡十八座。
從三位。　國玉明神。　篠原明神。
正五位上。　栗原明神。　石手明神。
霜川明神。　十二月明神。
從五位。　三村明神。　布留明神。
餘社十座。
佐位郡十二座。
從一位。　大國玉明神。

從三位。　八田女明神。
從四位上。　郡玉明神。　都奈明神。
於神明神。　穗積明神。
餘社六座。
新田郡廿五座。
從三位。　生階明神。　大窪明神。
從四位下。　新池明神。
正五位上。　宿窪明神。　楯事明神。
阿波明神。　郡玉明神。
餘社十八座。
山田郡廿三座。
從三位。　賀茂明神。
從四位上。　玉田女明神。　礒部明神。
吉知明神。　御槐明神。
餘社十八座。
邑樂郡十五座。
正一位。　長柄明神。

從三位。　八田明神。
從四位上。　火雷明神。
從四位上。　母前若御子明神。
從五位上。　郡玉明神。　岡劔明神。
　坂津明神。　子赤城明神。
餘社七座。

右上野國神名帳一卷以奈佐勝皐藏本書寫一挍畢

神祇部廿四

藤森社緣起

謹勘舊記當社三所天王者。神護景雲年中。山城國紀伊郡藤尾之靈地垂跡者也。人皇四十九代光仁天皇第二皇子早良親王。年來御崇敬異于他也。爰天應元年四月一日。超御兄山部親王立太子。今年異國蒙古責來之由有風聞。以立太子爲大將軍。可有退治之由有宣旨。依之立太子大軍勝利事被祈申當社。同年五月五日御出陣之處。大風吹而大海飜波浪。件蒙古不及一戰。悉以令滅却畢。以此因緣。每年五月五日祭禮神幸之時。在地之神人等。鎧甲冑帶弓箭列騎馬事。第一異國降伏之表示。第二天下泰平之瑞相。第三疫病消除之祈禱也。自爾以降。洛中洛外至邊土遠國。小男童兒帶作太刀刀等。以菖蒲餝之。稱菖蒲刀。是則當社祭禮供奉行粧也。依此等本緣。以當社被奉號弓兵政所者也。早良親王延曆四年御早世。御兄山部親王卽皇位。桓武天皇御事也。爲被鎭申早良親王之御怨靈。有追號奉稱崇道天皇。後日被贈正一位。七月十五日於當社庭中燈大立松事。爲崇道天皇法燈云々。又說爲蒙古追善云々。兩說古傳也。弘仁七年大師稻荷大明神爲勸請。藤森天王敷地之內所望之由被達叡聞。被伺申當社神慮之處。可奉借之由依有神託。三山之麓勸請之。自爾以來號彼所於稻荷矣。五十町

四方。依為天王敷地。近鄉并京中自五條至九條住民等。悉以為當社氏子。稻荷社人等同前也。雖然於京中氏子者。被寄稻荷之社。依之五月五日神幸奉成京中者也。大師敷地借用為報謝。將來佛舍利三國傳來之旨。被染空海自筆。相副本尊大日像。被奉當社宮中。舍利堂是也。同年五月五日。於當社寶前空海修法味隨奇瑞。初而被定中三所天王御本地。本社藥師。西御前十一面。東御前文殊。日本神國之諸神以佛菩薩稱本地事。眞言將來以後。傳教弘法兩大師始而被定之矣。

右當社之本緣。世以不流布者也。撰數百合之書籍注之。可秘々々。

神祇長上卜部朝臣從二位誌

弘治二十一三。借用件社緣起書寫了。神龍院殿被注遣之條。見御奧書。

右藤森社緣起以立原萬藏本及諸社根源抄挍合畢

尾張國熱田太神宮緣記

正二位熱田太神宮者。以神劍為主。本名天叢雲劍。後改名草薙劍。其祠立於尾張國愛智郡。所以者何也。昔大足彥忍代別天皇。立播磨稻日太郎姬為皇后。生二皇子。第一曰大碓命。第二曰小碓尊。一日同胞雙生。天皇異之。則詰於碓。故號其二子曰大碓小碓也。是小碓尊。〔後サ下同〕亦名日本武尊。幼有雄略之氣。及壯容貌魁偉。身長一丈。力能扛鼎焉。天皇四十年秋七月癸未朔戊戌。詔群卿曰。朕聞東夷反逆。暴神多亂。國家之怨〔急讎〕甚於倒懸。命遣誰人〔可サ〕平其亂。群臣皆未知所其薦達也。日本武尊奏言。臣先則勞西征。是役必大碓命之事矣。時大碓命聞斯敷奏。五情無〔サ无〕主。愕然逃亡。匿於艸莽。則遣使者召來。爰天皇責曰。汝不欲往豈可强遣耶。何未對賊恐懼〔惶イ〕迷魂。無賴之責何地逃之。於是日本武尊雄

詔曰。熊襲既順伏。未經幾年。蝦夷逆亂。討平何日矣。臣雖劬勞。撥理其亂。天皇手持斧鉞以授日本武尊曰。夫九夷之中。蝦夷爲暴悍之首焉。父子無別。兄弟相疑。各貪土壤。遞以抄略。承恩易忘。宿怨必報。故頭髻藏矢。衣中佩刀。或結群黨而凌邊境。或伺間隙以略平民。狼子野心未染王化。加以山有邪鬼。郊有暴神。惱亂人民。年來尙矣。今朕察汝爲人也。身體魁偉。志力雄傑。所向无前。所攻必勝。寔知形雖我子。實是神人。此天下則汝天下也。此皇位則汝位也。願深謀遠慮。探姦知變。示之以威。懷之以德。掉舌而調暴神。振武而攘姦鬼。日本武尊乃受斧鉞以再拜曰。臣謬以孱劣奉命東征。若賴神靈之冥助。假天皇之明威。往臨其境。示以德敎。猶有不服。擧兵討擊。重以再拜之。天皇勅吉備武彥與建稻種公。服從日本武尊。亦以七拳脛爲膳夫。冬十月壬子朔癸丑。日本武尊發路之。戊午。

枉道奉拜伊勢太神宮。辭於齋王倭姬命。(齋王者日本武尊姑也。)曰。今奉皇命東征逆賊。傾慕恩顏。枉道拜辭。倭姬命感其志。授一神劒曰。努努莫離於身。又賜一御囊曰。若有急卒。解斯囊口。日本武尊拜領劒囊行。道路到尾張國愛智郡。時稻種公啓曰。當郡氷上邑有桑梓之地。伏請大王税駕息之。日本武尊感其懇誠。踟蹰之間。側見一佳麗之娘。問其姓字。知稻種公之妹名宮酢媛。即命稻種公。聘納佳娘。合卺之後。寵幸固厚。數日淹留。不忍分手。(不忍分手數日淹留也)既而與稻種公議定行路之事曰。我就海道。公向山道。當會彼坂東國。言辭約束。各向前程。日本武尊到駿河。其處賊帥陽從之。欺曰。是地也。原野蕭條。目極四遠。麋鹿爲群。有娛遊獵。日本武尊信其言。入野中而覓獸。賊有謀殺之意。放火燒其野。日本武尊忽被詿誤。計略難施。其所帶神劒自然抽出。薙四面之草。又開所持囊。中有火打一枚。驚喜

敲火。向燒而得免。悉焚滅其賊黨。曾無噍類。故名其處曰燒津。今謂益津(〔二字サ无〕)郡訛也。號其劍曰草薙。(草薙此言具佐那岐。)亦歷相摸。欲向上總。望海高言曰。(高言。猶言擧言。)是小海耳(也イ)。可立跳渡。乃至于(〔於サ〕)海中。暴風忽起。有從王妾號弟橘媛。(穗積氏。忍山宿禰之女也。)(一本此注无)啓王曰。今風波激(一本波起波泌)怒。王船將沒。是必海神之心也。願以賤妾之身贖我王之命。此語未終。銜波沒入。於此風和波定。王船得着岸。時人號其(〔サ无〕)海曰馳水也。弟橘媛入海之後。及於(〔サ无〕)七日。御櫛隨波依於水濱。乃取其櫛作墓安置焉(也イ)。爰日本武尊自上總轉入陸奧。懸大鏡於船首。從海路廻於葦浦。橫渡玉浦。稻種公(〔サ无〕)適有來會(寄イ)。縷陳山道之消息。共向蝦夷之地(〔サ无〕イモ之サ)。其蝦夷賊首嶋津神國津神等(一本嶋浦神國神)。屯竹水門欲相旅拒。遙望大王之威勢。而縛首帥。共拋弓矢望拜之曰。仰視君容。秀(〔サ无〕)於人倫。威猛若神。欲知姓名。王對之(〔サ无〕)曰。吾是現人神之子也。於(〔サ二字无〕)是蝦夷等震慄歸德。故免其罪(〔サ无〕自サ)。因以俘其魁帥。令從身也。蝦夷既平(〔无サ〕)。自日高見國以却廻西南。歷常陸至甲斐國。居于酒折宮。夜深人定。秉燭而進食。此夜以歌問侍者曰。珥比麼(磨イ)利。菟玖波塢須擬(酒イ)氐。異玖用加禰菟流。諸侍者不能答。秉燭者續王歌之末曰。伽餓奈倍氐。用珥波虛々能用。比珥波苦塢伽塢。卽褒秉燭者敦賞。日本武尊與稻種公更議曰。我就山道公歸海道。當會尾張宮酢媛之宅。日本武尊自甲斐北轉(〔サ无〕)歷武藏上野。西逮于碓氷坂(〔三サ〕)。忽有戀弟橘(〔妾イ〕)媛之情。故登碓氷嶺。而東南望之。歎曰吾嬬(妻イ)者(〔倭武サ〕)耶。嬬(妻イ)。此云菟麼。故號坂東諸國曰吾嬬國也。(〔サ三字无〕)尊進入信濃。山高谷幽。人馬希通。日本武尊杖策褰裳。跋涉懸度逮於山椒。(一本逶迤大山既逮于峯而食飢)進食療飢。山神欲惱王。化白鹿立於王前。王異之。以一箇蒜彈白鹿。則中眼而死。爰王忽失路。不知所行。時白狗自來有導王之意。隨狗而行之得出美濃。先是度信濃坂者。中傷神氣。瘼臥猥多。鹿死之後。

踰此山者。嚼蒜而塗人及牛馬。則不中毒氣也。日本武尊還向尾張。到篠城邑〔サモ〕。進食之間。稻種公傔從久米八腹。策駿足〔馬サ〕馳來。啓曰。稻種公入海亡沒。日本武尊乍聞悲泣曰。現哉現哉。依現哉之詞。其地號内津。社今稱天神。在春日部郡。〔間サ〕亦公入海之由。八腹啓曰。度駿河之海〔サ二字無〕。々中有鳥。鳴聲可怜。毛羽奇麗。問之土俗。俯覺鴐鳥。公謂曰捕此鳥獻我君。飛帆追鳥。風波暴起。舟船傾沒。公亦入海矣。日本武尊吐飡不甘。悲慟無已。促鴐還着於宮酢媛之宅。于時獻大饌〔一本作獻食〕。宮酢媛手捧玉盞以獻。彼媛所着衣裙。衣裙此云意須比。染於月水。日本武尊覽之卽歌曰。麻蘇義。乎波理乃夜麻止。許知其知能。夜麻乃加比由。等美和多流。毘〔久イ〕何波乃波富曾。多和夜何比那乎。麻岐爾牟等。和例波母弊流乎。與利爾牟止。和例波 母弊流乎〔比サ〕。和伎毛古。那何祁西知爾祁理。宮酢媛奉和曰。夜須美志々。和期意

富岐美。多伽比加流。比乃美古。阿良多麻乃。岐閇由久止志乎。止志比佐爾。美古麻知何多爾。都紀加佐爾。〔イ无〕妓美麻知何多爾。宇倍那宇倍那志母夜。和何祁勢流。意須比乃宇閇爾。阿佐都紀乃其止久。都紀多知爾祁流。日本武尊又歌曰。奈留美良乎。美也禮波 止保志。比多加 知爾。已乃由不志保爾。和多良部牟加毛。奈留美者。是宮酢媛所居之鄕〔縣イ〕名。今云成海。先是日本武尊於甲斐坂折宮。有戀宮酢媛。卽歌曰。阿由知何多。比加彌阿禰古波。和例許牟止止許佐留良牟也。阿波禮阿禰古乎。此數首歌曲。爲此風俗歌矣。日本武尊淹留之間。夜中入厠。厠邊有一桑樹。解所帶劔。掛於桑枝。出厠忘劔還入寢殿。到曉驚寤欲取掛桑之劔。滿樹照輝。光〔柔サ〕〔皎イ〕彩射人。然〔而イ〕不憚神光。取劔持歸。告媛以桑樹放光之狀。答曰。此樹舊無怪異。自知劔光。默然寢息。其後語宮酢媛曰。我歸京華。必迎汝身。卽解劔授曰。寶持此劔。爲我床守。時近習之

人大伴建日臣諫曰。此不可留。何者。承聞前程氣吹山有暴惡神。若非劔氣何除毒害。日本武尊高言曰。縱有彼暴神。擧足蹴殺。遂留劔上道。到氣吹山。山神化大蛇當道。日本武尊不知主神化蛇。謂是大蛇必暴神之使也。〔サ无〕若得殺主神。其使者豈足愁乎。因超蛇行數里。暴風吹〔サ无〕淫〔零サ〕雨。山谷杳冥〔々サ〕。乃捿遑不知其所〔所昏イ〕。跋涉冒雨强行。僅得出山脚。失意如醉。居山下泉側。乃飲其水而覺醒。故號其泉曰居醒泉也。自後日本武尊體中不豫。欲歸尾張。便移伊勢到尾津濱。昔向東之歲。停此濱邊而進食。〔サ无〕是時解一劔置於松下。遂忘而去。至今日劔猶存。故歌曰。遠波理爾。多陀爾牟迦弊流。遠津能佐岐那流。比登都麻都阿勢遠。比登都麻都。比登爾阿理勢波。多知波氣麻斯遠。岐奴岐勢麻斯遠。比登都麻都阿勢遠。逮于能褒野。異常委惙。仍以所俘蝦夷等獻於太神宮。又遣吉備武彥奏於天皇曰。臣受

命天朝。遠征東夷。則被〔二字サ无〕神恩賴皇威。而叛者伏罪。荒神自調。是以卷甲戢戈。凱歌而歸〔サ无〕之。而天命忽至。隙駒難停。豈惜此身之亡。悔不而拜復命。既而過鈴鹿山。病〔御病イ〕痛危迫。故歌曰。遠登賣能。登許能辨爾。和賀於岐斯。都留岐能多知。曾能多知波夜。渡鈴鹿河中瀨。忽隨逝水。時年三十。仍號其瀨曰能知瀨。能知者。命終之詞也。今改爲長瀨。天皇聞之。寢不安。食無味。晝夜鳴咽〔哽サ〕。喟然歎曰。我子小碓王。昔熊襲叛逆之日。未及總角。征伐有功。又不離左右。補朕不及。今東夷騷擾。無人征討。忍愛以入賊境。少選無不念之。是以晨昏鶴〔顒サ〕望。待其凱旋。何禍兮。何罪兮。不意之間。倏亡我子。自今而後。與誰人〔サ无〕將繼〔纘緒サ〕朕鴻業耶。即勅群卿百寮。仍葬伊勢國能褒野。時日本武尊化白鳥。從陵墓出。指大和國而飛去。群臣等開其棺櫬而視之。明衣空留不見骸骨。於是馳使追尋。白鳥集於大和國琴彈原。仍於其

處造陵。白鳥更飛至河內國志紀郡留舊市邑。亦其處造陵。故時人號是三陵曰白鳥陵。然遂騫翥昇天。徒葬衣冠而已。但日本武尊於氣吹山所以受病者。放神劒於身故也。此神劒者。素戔烏尊於出雲國所得也。昔素戔鳴尊自天降。到於出雲國簸之河上。時聞河上有啼哭之聲。故尋聲覓往。有一老翁與老嫗。中間置一少女而哭之。素戔鳴尊問曰。汝等何人。哭泣如此耶。對曰。僕是國神大山祇之子也。號足名槌。手名槌。此少女是吾兒也。號櫛稻田媛。所以哭者。往時僕有八女子。每年爲〔爲脫サ〕尾八岐大蛇所吞。今此少女且臨被吞。無由脫免。故以悲哭。素戔鳴尊勅曰。若然者汝當以少女奉吾耶。老翁對曰。不敢背。抑聞御名。答曰。我是天照太神之弟。素戔雄尊也。於是翁嫗即知天神。謝曰。左右任勅。素戔鳴尊立化櫛稻田姬爲湯津爪櫛。挿於御髻。乃使足名槌手名槌釀八醞酒。幷作假庪八

間。一面開八戶。各置槽盛酒以待之。至則有大蛇到。頭尾各有八岐。眼如赤酸醬。松柏生於〔生背サ〕背上。而蔓延於八丘八壑之間。其腹皆爛壞。及饗酒氣。八戶分頭。飲醉而睡。時素戔鳴尊。乃拔所帶十拳劒。寸斬其蛇。簸河之水一時流血。斬蛇尾之時。劒及少缺。故劑裂其尾視之。中有一劒。此所謂叢雲劒也。本名天叢雲劒。蓋大蛇所居之上。常有雲氣。故以名歟。至〔サ无〕日本武尊東征之歲。改名爲草薙劒。素戔鳴尊曰。是神劒也。何敢私秘藏乎。獻天照太神〔也サ〕。故彼太神齋女有領神劒。授日本武尊〔生イ〕而已。日本武尊奄忽仙化之後。宮酢媛不違平日之約。獨守御床。安置神劒。光彩亞日。靈驗着聞。若有禱請之人。則感應同於影響。於是宮酢媛會集親舊。相議曰。我身衰耄。昏曉難期。事須未瞑之前占社奉遷神劒。衆議感之。定其社之地。有楓樹一株。自然炎燒。倒水田中。光焰不銷。水田尚熱。仍號熱田社。天命開別天皇七年戊辰。新羅沙門道行。盜此神劒將

移本國。竊祈入于神祠。取劔裹袈裟。逃去伊勢國。一宿之間。神劔脫袈裟。還着本社。道行更還到。練禪禱請。又裹袈裟。逃到攝津國。自難波津解纜歸國。海中失度。更亦漂着難波津。乃或人託宣曰。吾是熱田劔神也。然被欺妖僧。殆着新羅。初裹七條袈裟。脫出還社。後裹九條袈裟〔袈裟二字〕。其難解脫。于時吏民驚怪。東西認求。道行中心作念。若棄去此劔。則將免捉搦之責。乃抛棄神劔。劔不離身。道行術盡力窮。拜手自首。遂當斬刑。天渟中原瀛眞人天皇朱鳥〔皐上サ有臬字〕〔二字サ无〕元年丙戌夏六月己巳朔戊寅。卜天皇御病。草薙劔爲祟。卽勅有司。還置于尾張國熱田社。自爾以來。始置社守七員。一人爲長。六人爲別。並免傜役。凡奉祀劔神〔神劔サ〕於此國者。總緣宮酢媛與建稻種公也。宮酢媛下世之後。建祠崇祭之號。氷上姉子天神〔祝サ〕。其祠在愛智郡氷上邑。以海部氏爲神主〔海以下九字サ爲分註〕。海部是尾張氏別姓也。稻種公者。火明命十一代之孫。尾張國造乎止與命之子。母尾張大印岐〔サ二字无〕之女眞敷刀婢命也。實尾張氏祖也。因玆以熱田明神爲尾張氏神。〔サ注无〕宮酢媛。及建稻種命。大宮相殿神也。便以尾張氏人補神主祝〔部サ〕等職也。但件神社。舊依無緣起。去貞觀十六年春。神宮別當正六位上尾張連淸稻。搜古記之文。問遺老之語。粗加繕寫。有脩緣記〔起サ〕。守從五位下藤原朝臣村椙〔サ无〕。理劇之隙。披閱斯文。嫌締勺之質。略訪通儒。而筆削之。庶令神明靈跡萬代長傳也。卽寫三通。一通進公家。一通贈社家。一通留國衙。

寬平二年十月十五日

右大臣基房公。奉勅被尋下當社緣記。仍書寫家本獻上之者也。

延久元年八月三日

大宮司從三位伊勢守尾張宿禰員信

右熱田宮寬平緣記以一本挍

〔更今以參考熱田緣起挍合了標サ者卽是〕

荏柄天神縁記

王城鎮守神々多くましませど。當社は靈驗あらたにまします故に。朱の玉垣再拜せぬ人なし。叩ば必こたへ。仰ばかならずのぞむ。秋の月の水にうかぶごとし。あか月の鐘の霜にわするにゝたり。しかあれば一人もかふべをかたむけ。萬民もたな心をあはすめり。爰に一條院（六十六代）御宇寛弘元季きのえたつ十月廿一日かのとのうしの日。はじめて此宮に行幸なりしより。建久（後鳥羽）の今にいたるまで。聖主十六代。つもるとし月ふたもゝとせの春秋をへにけり。そのあひだいづれの世にかは天滿大自在天神をあふぎましまさぬ。昔をたづぬれば。文道の大祖。風月の本主也。或は天下に鹽梅として帝圖をふたうし。或は天上に日月として國土を照し給へり。あはれめでたくまします權者の化現かな。菅原院と申は菅相公是善家也。相公平生のそのかみ。かの家の南庭に五六歳ばかりなるこちごのあそび給けるを。相公見給て。容顏躰貌たゞ人にあらずと思して申給樣。きみはいづれの家の子男ぞ。なにによてきたりあそび給ふぞとのたまふに。このちご答てのたまふやう。させるさだまれる居所もなし。父もなく母もなし。相公をおやとおもひはむべるとおほせられければ。相公返々よろこびてかきいだき給けり。これを菅贈大相國と申也。さる程に生年十一歳になり給けるに。相公こころみに詩作り給てんやとのたまひければ。詞もわかぬに。

月耀如晴雪。　梅花似照星。
可憐金鏡轉。　庭上玉房馨。

とぞつくりましましける。十三四になり給ては。相公の才智にも殆すぐれたまひて。天下に

ならぶ人なくおはしましけり。

氷封二水面一聞無レ浪。　雪點二林頭一見有レ花。

これこそ十四歳(天安二)にてつくらせ給ひける秀句と承り侍りつれ。

傳教大師大唐に渡りて。圓頓の菩薩の大戒をつたへて。叡山に戒壇を立んとせしとき。諸宗ゆるさゞりしかば。大師顯戒論三卷をつくりて弘仁(嵯峨)天皇に奉り給しかば。諸宗のうれへにもよらずして。同十三年六月十一日叡山に戒壇を建立すべきよし宣旨くだされにき。されども論者東西に相たがひに鉾楯せしかば。慈覺大師これをいたみて。顯揚大戒論をばえらび給ひしが。安惠和尚先師の一言をかんじて。八卷となして是を三際につたへ十方にひろめんと思して。首にかけて菅相公の家にいたりて。此文の序書たまはらんとのたまひしに。相公思食けるやう。此文は朝家の寶。衆生の燈なり。みづからはえかゝじ。子なりとも此君にこそ書せまいらせめとおぼしめしてかくと申給ければ。貞觀(淸和)八年十一月の事なれば。天神の御年は廿二にて。位官もいまだあさく。文章の生にてましましけれども。かゝせ給たりける序の文こそ。天台宗の第一の寶にて。あら人神の御筆なればとて。今日いままでめでたきふしぎに申あひけれ。所々申侍べし。

我本朝馳二神眞際一求二法道邦一。先請レ業者偏執二律儀一。後研レ精者更傳二圓戒一。猶如三前途覆レ車而未レ歸。晩進指レ南而必達一。乃至殊恨保執者。自謂除二非小律儀一更無二大乘戒一。遂毀二梵網宗一以爲二沙彌宗一。貶二三聚敎一以爲二非僧敎一。悲哉。知二其一一而未レ知二其二一。乃至我大師慈覺博窺二三權之膏肓一。新増二一實之脂粉一。

とこそかゝせ給ひたれ。あはれにめでたき權者の利益なるべし。

貞觀十二年青陽の春の頃。都良香が家にて。門生等が弓遊しけるに。行逢給ひたりけり。亭主思ふやう。此君は とぼそを とぢしきゐを出ずして机案に ひぢをくたしつゝ。弓のもとするもしらせ 給はじと おもひて。簾の中にかくれゐて。こゝろみに御弓いさせ 給てんやと申給ければ。弓場につゐたちて。弓に矢をさしはげて。ひきわたし給たる御すがた。養由がかひなつきまのあたりみつるかなと。をの〳〵目もおどろく ほどに。一度はなち給へば ふたゝびあたる 百度はなち給へばもゝたびあたる。むかしもきかず。いまもみず。いきほひたいはい。たとへんか たおはしまさず 都良香おどろきあざみて。射策中鵠之嚴なりとぞ相申ける やがて其年の三月廿三日 射策しまし〳〵き。みやこの言道問頭の博士にて 二問のうちに句ごとに數義を含して 嚴事かぎりなかりけり

これをこたへ給に文辭甚美にして義理みな通じき。されども凡夫に似同せんがために。一事しらざる 氣しきにて。しばらく 思案しましまし き。其時橘廣相毛沓さしはき。省門にたちより。この事をうちみて。馬にむちうち。嵯峨の隱君子の御許にまいりて かくと申ければ。隱君かむがへあたへ。則省門にかへりて。ひそかにつたへ 申けるこそ。權者のふるまひ は計がたくおぼゆれ。それより後こそ。射策の庭には人をもよせぬとうけ給はり侍る。

寛平六年長月の頃。門徒の人々たかきも賤も吉祥院に あつまりて。五十の御としの悅の會修せしめけるとき。法會の庭の おもを見やれば。わらうづ はとぎしたる 翁の願文に沙金を取そへて 漸あゆみよりつゝ。堂の前の案の上にをきて いふ事もなくしてにげさりぬ。あやしと思ひてひらきみれば。

傳聞。菅家門客。共賀二知命之年一。弟子雖レ削二跡人間一無二名世上一。而數記二淳敎之風一。多改二惷昧之過一。古人有レ言。無二德不一レ報。無二言不一レ酬。深感二彼義一欲レ罷不レ能。故福田之地拾二此沙金一。金以表二中誠之〔其献〕不一レ輕。沙以祈二上壽之無一レ涯。莫レ疑二其人一。可レ求二甚志一。遠居二北闕之以北一。遙增二南山之和南一。

とこそかゝれ侍けれ。其時少僧都勝延。その會の導師にて讃歎しき。かたじけなくも天子の修する所なり。希代の勝事とぞ。ふるなの辯説をのべ給ける。

同七年三月廿六日。延喜の〔醍醐〕御門春宮にて おはしましけるに。令旨をくだされ。我聞。大唐國に一日に百首の詩を作たる人有。汝が才智双なく。七歩のあとをたづねたり。試に一時のうちに十首詩を作てんや。則十事の題目を給て。酉刻より戌の時にぞつくりて たてまつり給けり。

送レ春不レ用レ動二舟車一。　唯別殘鶯與二落花一。
若使二韶光知一レ我意一。　今宵旅宿在二詩家一。

さて次年かさねて又令旨を承て。二時のうちに廿首の詩を作て まいらせ たまひければ。むかしも今もかゝるふしぎなしとそのゝしり給ける また寛平九年六月に 中納言より 大納言にのぼりて。頓て其日。大將の宣旨くだりしかば。三度迄御辭退ありしかどゆるされずして。其としの七月に延喜の御門位につかせ給て萬機を攝錄し給けり。

〔醍醐〕昌泰二年二月にぞ右大臣にあがらせ給ける。

昌泰三年八月かとよ。祖父三位家の集。菅相公の家の集。我文集。廿卷もらさず天覽にそなへ給しに。叡感のあまりに詩をぞつくらせ給ける。

門風自レ古是儒林。　今日文華皆悉金。
唯詠二一聯一知二氣味一。　況連二三代一飽二淸吟一。

琢磨寒玉聲々麗。　裁製餘霞句々侵。
更有ニ菅家勝ニ白様一。　従レ茲抛却匣塵深。

これこそは延喜の御門の御製にては侍れ。扨昌泰三年正月三日。朱雀院に行幸ならせ給て。延喜の御門と寛平の法皇と御ひたいをさし合て密事ありけり。左右大臣のともに天下の政をすることあしきことなり。菅丞相は重代にあらずといへども。渭水のながれを汲で商山の風をあふぎ。賢をえらび徳をたとぶ人なればとて。此人にさだめられぬ。胡廣累世之農夫也。伯始致ニ位公相一。黄憲牛醫之胤子也。叔度名動ニ京師一。かゝる故に法皇と御門との御前にめしいだされて。天下のまつりごと一人して奏下すべきなりと仰下されぬ。此事を菅丞相はしきりに辭退申給けれども治まらず。左大臣此事をいきどをりて。うらみふかくなりて。やう／＼の無實をかまへて。光卿。定國卿。菅根朝臣。もろともに勅宣と稱して。種々の珍寶をあたへて冥官をまつり。皇城の八方に山野をしめて厭術の雑寶をうづみ給ける。されども菅丞相は。我身も子孫も咒咀さらにあふまじき術をほどこし給て。此ころ八九代の苗裔まで繁昌の門として。儒業絶る事なかりけり。しかりといへども。延喜のひじりの御門は其時御とし十六七ばかりにや。いとけなくおはしますべきほどなれど。仁流ニ秋津洲之外一。惠繁ニ筑波山之陰一。紫霄之上星位靜。蒼海之中浪聲和。思はざりき。昌泰四年正月廿五日に左大臣の讒奏によりて。太宰權帥〔に脱歟〕にうつされて。流罪の宣旨くださるべしと。菅丞相かなしびのあまりにたへずして。三十一字を連て。亭子の法皇にぞ奉り給ける。

なかれ行我はみくつとなりぬとも
　きみしからみとなりてとゝめよ

法皇この哥を御覽じて。かなしびのあまりに。御なみだにむせびて。さりとも御門も我御子なれば。申さんになどかかなはざらんと思召つゝ。十善の御足にきたなき泥をふみつけて。上西門をさし入て。清涼殿に近付まし〳〵て。かくまいりたるよしおほせられけれども。そのときすがねの卿。くらんどのとうにて。むかし殿上の庚申の夜の御遊につらをうたれまいらせたるうらみふかくて。奏申給はざりければ。よの中あぢきなく。うらめしく思食て。大庭のむくの木に立やすらひたまひて。夕日山のはにかたぶき。涙にもくれつゝ還御なりしこそ。あはれにも淺ましくおぼゆれ。つゐに勅宣をもくして。男女の御子廿三人の中に。男子四人はおなじく四方に流されき。おとなしくおはしましける姫君は都の中にとゞめられて。いとけなき君達はぐしまいらせていでさせ給ける事のあはれさこそ。たとへんかたもなかりけれ。さて紅梅殿にあいせさせ給ける梅を御らむじて。こゝろなき草木にもちぎりをぞ結び給ける。

こちふかは匂ひおこせよ梅花
　あるじなしとて春をわするな

櫻はなぬしをわすれぬものならは
　吹こん風にことつてはせよ

さて此御うたのゆへに。つくしへはこの梅はとびてまいりたりと申はべるめり。此あひだのあはれさ書つくすべからず。おもはざりき。大臣の大將より太宰の權帥にうつされて。輔弼阿衡の貴名をあらためて。配流左遷のつたなき名をつくべしとは。朝の露をば袖のうへにうちはらひ。よぶこ鳥のこゑこそ枕のうへに友となれ。承和（仁明）四年にむまれて。仁明（五十四）文德（五十五）の御代にはいとけなくまし〳〵き。貞觀よりつ

かへて。五代の帝王の御幸に一度もはづれずつかまつりしに。あらぬすがたにて西海におもむく事。いかにすべしともおぼえず。生死無常まのあたりにきたりて。おつるなみだをともにして。蘆分小舟にのりて。浪にたゞよひて。心ならずこがれ行こそ。むかしのつみのむくひはづかしくて。こゝろにまかせぬいのちのうらめしさよ。かぜにまかせて羊のあゆみちかづき。傳築巖邊禍。范舟湖上篇。我身いか成宿業にひかれて。旅のそらにたゞよひて。三峽五湖の曉の浪になみだをもながしそへ。吳坂楚嶺のよな〳〵のあらしに目のみさましつつ。都をいでて後月日かさなれども。ねぶる事なければ夢にみる事なし。いまはたゞたなごころをあはせて。罪業の深き身を懺悔して。極樂にまいらんとおもへども。やすからぬおもひむねにみちて。かならずこれらを思食てつくらせ給たる廿八韻の詩をかくこそなみだもとゞまらぬ。所々申侍べし。

自從勅使駈將去。父子一時五處離。
口不能言眼中血。俯仰天神與地祇。
東行西行雲眇々。二月三月日遲々。
重關警固知聞斷。單寢辛酸夢見稀。
山河邈矣隨行隔。風景暗然在路移。
平到謫所誰與食。生及秋風定無衣。
古之三友一生樂。今之三友一生悲。

道のとをくなりければ御心ぼそくおぼえて。北の方へたてまつらせ給ける御哥をきくこそあはれには侍れ。都には此御歌を御らむじて紅のなみだながさせ給けるもまことにいかばかりの事をおぼしけむ。

君かすむ宿の梢をゆく〳〵と
　かくるゝまでにかへりみしかな

秋ぎりの上にかりがねのきこえければつくら

せ給ける。

我爲遷客汝來賓。　共是蕭々旅漂身。

攲枕思量歸去日。　我知何歲汝明春。

又御心のうちにおもはせ給ける

離家三四月。　落涙百千行。

萬事皆如夢。　時々仰彼蒼。

此詩をば御こゝろのうちにこめをきて。くちの外へもいだし給はざりけれども。大唐國に人々あまた詠じけるこそをそろしけれ。つくしになか一年おはしましける。おり／＼につけてものによそへてあはれなる事のみありければ。

夕されは野にも山にも立けふり
なけきよりこそもえ增りけり

又雨のふりけるに。

あめのしたかくるゝ人もなけれはや
きてしぬれきぬひるよしもなき

中巻

抑昌泰三年長月の十日宴に正三位の右大臣の大將にて。榮花は菊とともにひらけたり。叡感は時雨とおなじく下りき。その九日の後朝ぞかし。

君富春秋臣漸老。　恩無涯岸報猶遲。

とつくらせ給たりしに。叡感のあまりに御衣をぬぎてぞかづけ給たりし。此御衣をつくしまで持て。都のかたみには御らんじけり。次年の九月十日。こぞの今日思食出てつくらせ給けむこそあはれにはおぼゆれ。

去年今夜侍清涼。　秋思詩篇獨斷腸。

恩賜御衣今在此。　捧持每日拜餘香。

まことに菅家の御草は心もをよぶべきにあらずとぞ。博士たちは申侍ける

都府樓纔看瓦色。　觀音寺只聞鐘聲。

といふ詩をば。白居易の遺愛寺鐘攲枕聞。香爐峰雪撥簾看といふ詩にはまさりたりと。博士

たちは申侍ける。

昌泰三年八月より後。西府にしてつくらせ給たりける詩をあつめて。後集となづけて。延喜三年正月の比。心神漸例にたがひ給しに。箱のうちにおさめて中納言長谷雄の卿の許へをくりつかはしき。紀納言これをひらきて。天にあふぎ地にふしてなきかなしび給けり。此後集中にあはれにきこゆるは。九月十三夜の皓月に心をすまさせ給けるときつくらせ給ける。

昔被榮花簪組縛。　今爲貶謫草萊囚。
月光似鏡無明罪。　風氣如刀不破愁。
隨見隨聞皆慘慄。　此秋獨作我身秋。

鎮西におはしましけるあひだ。御身につみなきよしの祭文をつくりて。高山にのぼりて七ケ日の程天道にうたへ申させ給けるとき。祭文漸飛のぼりて。雲をわけていりにけり。上梵天までもいたりぬらむとぞおぼえし。釋迦菩薩は。往刧に底沙佛の御もとにて。七日七夜足のゆびをつまだてゝ。天地此界多聞室。逝宮天處十方無。丈夫牛王大沙門。尋地山林遍無等と讃歎せしかば。九刧をこえて。彌勒にさき立て佛にはなり給しぞかし。菅丞相は現身に七日七夜蒼天に仰て。身をくだき心をつくして。あなおそろし。天滿大自在天神とぞならせ給ひける。延喜三年癸亥二月にぞ。十二緣にやどされたる五陰のすがたをすてつとはしめし給ける。昔釋尊入滅の二月十五日のかなしびには。五十二類血の涙を流し。今宰府の二月廿五日の別には。六十よ州身の毛こそよだちけれ。十號の世尊も非滅現滅には闍維の煙にむせぶ事なれば。おさめまいらせん事をさだめける。扨筑前國四堂のほとりに御墓所を點じておさめたてまつらんとしける。御車忽に路中にと

どまりて はたらかず。其所を ばしめて御墓所とさだめて。今の安樂寺と申なり。菅丞相の薨御は一天に雨の ごとくふり。四海に 浪聲かくれなし。

其後いくばくをへずして。延暦寺の 第十三座主法性房尊意贈僧正。其時御年 四十計にやおはしけん。月日はたしかにおぼえず。三伏の夏。夜五更いまだいたらず。人しづかなるに。四明の山の上。九識の窓のうち。十乘の床のほとりに智水たゝへ。三密之壇の前に 觀月を すましておはしましけるに。思ひがけず坊のつま戸のほと〳〵となりければ。をしあけて見給に。菅丞相の化來して おはしましけるなり。うやまひ畏たてまつりて持佛堂へいれまいらせて有ければ。菅丞相おほせられける樣。我梵天帝釋のゆるされを蒙り。神祇のいさめあるまじ。花の都にいたりつゝ。龍顏にちかづきうれへ をのべあたをも 報ぜむと おもふに。禪室ばかりこそ法驗をもほどこし。おさへ給ふべきに。たどひ宣旨なりといふとも。あなかしこ。うけ申させ給事ある べからず。年來の 師壇のちぎりは是に有と おほせられけるに。法性房申させ給ける樣。師壇のむつびは一世の ちぎりにあらず。眼をぬくともなにかはいたらん。但天下は皆王土なり。此地にすみながら。宣旨三度にいたらばいかゞと申させ給ひしに。御氣色すこしかはらせ給て。御のどかはかせ 給らんとてすゝめまいらせ たりける。柘榴を妻戸にはきかけて いでさせ給に。その柘榴ほむらにあがりて。妻戸にもえつきたりければ。贈僧正灑水の印を結びて かけられたりければ。其火はきえにけり。こがれたりけるつま戸は。いまだ本房に有。よのすゑのふしぎ也。

其時をそろしき 雷電しきりにして。世中くれ

ふたがりて。雷の聲におほくの人きも心もくだけてしにまどひけり。清涼殿のうちには。本院（時平）の大臣一人たちをぬきて。朝につかへ給ひしにも我次にこそおはせしか。今神となり給ひたりとも。我に所ををかで思ふがごとくには。さすがにいかでかとて。ひが事にぞとにらみてぞたち給ひたりし。

扨御門をそれさはぎて。法性房の贈僧正のもとへ。宣旨三度までなされしかば。僧正まいり給き。鴨川の洪水さりのきて陸地になりけり。さてとをり給しぞ。法驗もめでたく。皇威もをそろしかりし。扨様々にこしらへ。たいらぎたてまつりてぞ。しばしはなだめ申たりしが。つゐにはかなはざりけり。

延喜八年十月の比。菅根卿はあらたにけころされぬ。同九年三月に本院のおとゞなやみ給に。さまざまの御祈もしるしなくおぼえて。菅丞相の靈氣とは心のうちにさとりにしを。法驗ばかりぞたすけ給とて。清涼房の玄照律師の弟子。善相公の胤子淨藏貴所こそ年いまだはたちにはたらねども。驗德いたりてたうとく。種々の才藝ならびなしとて。四月四日請じよせ給ていのらせたまひけり。其日午刻ばかりに善相公とむらひにまいり給たりければ。おとゞの左右の耳より靑きくちなはの頭をさしいだして善相公につげていひけるやう。我申文をつくりて梵天帝釋にうたへ申によりて。はやく怨敵をほろぼせとことはりをかぶれり。汝が子の淨藏を我降伏せむとす。せいせられよと。くちなは舌をびろびろとす。善相公をそれをのゝき畏て。淨藏につげてやがて出にけり。其時本院（時平）の大臣は頓て薨給ぬ。又御女の女御。御孫の東宮も。又一男八條大將保忠。三男敦忠中納言。いづれもいづれも殘らずうせ給に

けり。右大臣顕忠のみこそ二位の大臣までならせ給たりければ。菅丞相の御事をふかくをそれ給て。大臣にて六年までおはしましけれども。御ありきには御前をだにもぐしたまはず。よろづにをそれて。晝夜菅丞相を祈念しまいらせてぞおはしける。此家の人なれども。佛道にいりたる君達のみぞ。僧都。法印。僧正にもなり給ける。三井寺の心譽。興福寺の扶公。石藏の文慶也。この御すゑのいみじかりけるは。敦忠の三男兵衛佐佐理。一家の有様をおもひつらねて。世中あぢきなしとて。出家入道して往生したるのみこそかしこくは覺ゆれ。

小松天皇の御孫。延喜の御門にはいとこにて。右大弁公忠と申人おはしけり。延喜廿三年卯月の頃頓死して。兩三日といふによみかへり給て。家の人々につげていひき。我きく人々物（我を具して内裏へ參れと申ければ（北野縁起））にくるふと申あひけり。されども其詞ねんごろにて。あながちに申ければ。子息信明。信孝。二人にたすけひかれて。内裏へまいりて。このよしを奏申給ければ。延喜の御門おどろきさはぎて出向給ひしに。奏申給やうこそをそろしくは侍れ。公忠頓死して炎魔王宮にまいりて。門のまへにてしばしみる程に。長一丈あまりなる人の身には束帯うるはしくして。手に金の文ばさみに文をさしはさみて。さしあげてうたへ申を耳をそばだてゝ承りしかば。延喜の御門のしわざどもやすからずと様々に詞をつくしてうたへうれへしに。菅丞相とはさとりぬ。其時緋や紫まとひたる冥官三十よ人ならび居たりしが。第二座に居たる人すこしあざわらひて。延喜の帝こそ頗荒涼なれ。若改元もあらばいかゞと申されし也と奏申て還給にき。御門是をきこしめして。おそれ思食事かぎりなし。さて四月廿一日菅丞相をば如元

右大臣として。一階を加へて正二位をぞ贈り給ける。やがて昌泰四年二月廿五日の宣旨をやきすてられにけり。五月廿五日延喜の年號を改て延長となされし事はこのゆへなり。又菅丞相の清涼殿に化現しましくて。龍顏にまみえたてまつりて。あやまたざりし事をのべ申給けるとき。御門をそれ給て。こしらへ給事もありけり。

延長八年六月廿六日に清涼殿のひつじ申の柱の上に雷火いできて。大納言清貫の卿の上のきぬに火つきて。ふしまろびおめけどもきえざりき。右中弁希世の朝臣かほ燒て柱のもとにたふれふし。これもちの朝臣は弓を取て向へば。たち所にけころされ。近衛のたゞかぬ。紀のかげつら。ほのほにむせびて悶絶す。これ天滿大自在天神の十六万八千の眷屬の中の第三の使者火雷火氣毒王のしわざなり。

その日毒の氣はじめて御門の御身にいりつつ。たへがたくおはしましければ。九月廿二日御位を第十一の皇子朱雀天皇にゆづりまいらせて。九月廿九日にぞ御年四十六にて御出家しおはしましけれども。終に崩御なりにける。

其頃金峯山日藏上人と申人。金剛藏王の敎にて三界六道みぬ所もなく見廻けり。承平四年四月十六日。笙の岩屋にこもりておこなひける程に八月一日午刻計に秘密上乘の床のうへに鈴をにぎりながら俄に死いりたりける事ありけり。十三日にぞよみかへりける。其ほど夢にもあらずうつゝともなくして。金剛藏王の善巧方便にて。天滿大自在天神のおはします所ならびに都率の内外院。炎魔王宮。地獄などをみめぐりたりける。地獄と都率との依正二報苦樂の有樣。聖敎にのべたるに露もたがふ所なく。天神をば大正威德天と申て。十方の往來

は大王卽位行幸の儀式にもすぐれたり。御形などは申につけてをそれ有。侍從眷屬の異類異形の類かぞへつくべからず。或は金剛力士のごとくなるあり。或は雷神鬼王夜叉羅刹のごとくなり。極樂淨土の莊嚴のごとし。嚴妙の寶みちみてり。天神日藏上人に仰られける。我はじめには思き。ながれし淚をたゝへて日本國をひたしほろぼし。大海となして。八十四年を經て後。國土を建立して。我すみかとせむと思ひしに。敎法をあひする心かろからず。顯密聖敎のちからにて。むかしの怨心十分が一はやすまりぬ。其上に往古の如來法身の大士達。悲願力のゆへに。名を明神にかりて。此國にみち給へるが。各智力をつくして我をすかしなだめ給へは。巨害をばいたさず。但我眷屬十六万八千の惡神等。所々にしたがひて損害をいたすをば。我なをとゞめがたき也。日藏上人此事を承りはてずうやまひかしこまりて申けるやう。日本國の内には火雷天神と稱して。尊重したてまつる事十號世尊のごとくなり。なんぞ怨心おはしますべきと申給ひしかば。誰かは尊重すべき。佛にならざらむかぎりは。いづれの時にか此恨を忘るべき。但人信心有て。我形像をあらはして。我名號をとなへてねんごろに祈こふ事あるならば。我必感應をたれむ事。響の聲にしたがふがごとしとこそちぎりしめしたまひければ。日藏上人金剛藏王の神通の力に乘じて閻羅王界にいたりて。王の使をあひぐして諸大地獄をめぐりみるに。一の地ごくの中に。鐵窟苦所といふ所有。それに四人の罪人有。其かたちすみのごとし。一人は肩に物をおほへり。三人ははだかなり。火の上に居たり。あか灰のうへにうづくまりて。かつてうちゐる床もなくして。むせびかなしむ事かぎり

なし。王の使をしへて云く。肩をかくしたる一人の罪人は延喜の御門なり。のこり三人は其臣下なり。君も臣もおなじく苦をうく。延喜の御門日藏を招寄給へば。うやまひかしこまりてまいられければ。御門。冥途には罪なきを主とす。ひじり。我をうやまふ事なかれ。我父寛平法皇の御心たがへまいらせ。無實によりて菅丞相をながせしつみによりて。此地獄におちたり。汝娑婆にかへりて。我皇子にこのくるしみ患たすけ給へと申べしとて。なみだをながさせ給けり。

日藏よみがへりて此よしをくはしく御門に申給ければ。種々の善根いとなみ御弔有けり。凡國土のさい變は天神の眷屬のしわざなりとぞ藏王仰られける。日藏上人其後穢惡のはかなきすまゐをふりすてゝ。淸淨の目出蓮のうてなにのぼりけり。

下巻

天慶五年七月十二日西京七條二坊に住せし賤の娘あやことといひしものに託宣しまし〳〵て。我昔世に有し時。しば〳〵右近の馬場にあそぶ事多年。みやこのほとりの閑勝の地。此所にしくはなし。されども非道の罪をかふむりて。西の海邊の浪にしづむといへども。潜にかの所に行あそぶとき許ぞすこし心もなぐさむ。ほくらをかまへ。立寄たよりをえしめよと御託宣はあれども。身のほどのいやしさに憚て社をもつくりまいらせで。柴の廬のほとりに瑞籬を結びて。五ヶ年の間はあがめまいらせ給に。天暦元年六月九日ぞ北野へはうつしたてまつりける。

天暦元年近江國比良の宮にして。禰宜神のよしたねが子の童の七歳になるに御託宣ありき。我物具はこれにきたりゐし始にをけるなり。佛舍利。玉の帶。銀作の太刀。笏。鏡なども

あり。老松。富部とて。二人侍従あり。笏をば老松にもたせ。舎利をば富部にもたせたり。此等はつくしより我と共にきたれるなり。此二人は甚不調のものぞ。こゝろゆるしなせそ。我居たる左右にをさめ置たれ。老松をして我居たらむ處に松のたねをまかする也。われ昔大臣たりしとき。夢に松身におひて卽おれぬとみしはながさるべき相なり。松は我像の物也。我嗔恚のほむら天にみちて。諸の鬼王は十万五千有。よろづの天變はみな此等がする也。不信ならむものをばけころし。正直ならんものをまもらん。皆人加茂八幡とのみいひて。我をば物ともせず。何れの神々といふとも我をばをしふせ給はじ。右近の馬場は我すみか也。そこには松をうゝべし。但我此界にありし時。公事共つとめて佛の物をなん申とゞめたる中に。天台の燈油分なむとゞめたりし。其罪ふかくして自在の身となるといへども。くるしき事おほかるを。懺悔のために法華三昧堂を立て。大法の法螺を時々ごとに吹ならば。いかにうれしからん。一大事因緣は不可思議なり。後集にのせられたる離家三四月と言詩と。又鴈足黏將疑繫帛。烏頭點着憶歸家。此句を誦せむ輩。いかにうれしからむといひて。この童さめにけり。良種此よしの御詫宣を身にそへて。右近の馬場に向て。朝日寺の住僧最鎭。法儀鎭世等に向て。事の子細を相議しけるあいだ。一夜の中に松おひて。數歩の林となりにける。さて最鎭とあやこが伴類。寺主滿增。星河秋永とちからをあはせ。心をひとつにして。叢祠の露をみがき。松壇の風をあふぎける。其後靈驗殊勝。賞罸掲焉也。天暦元年より天德に至るまで四十年のあひだ。御殿をつくり改る事は五ヶ度也。天德三年己未の歳。九條右丞相（師輔）屋舍をつく

りまし。寶物をまいらせ給けり。此故に九條殿の御子孫今までも攝錄も絶事なく。皇胤もつき給はぬは。九條殿の信心のちから。天滿天神の御惠なり。

圓融院の御時貞元元年より天元五年に至るまで七年があひだ。三度まで內裏燒亡ありけり。其時の造內裏の番匠共集參て。兩殿の裏板にかなかけみがきて。次の朝に參て見ければ。うらにあざ〳〵とむしの三十一字をくひたりけり。

つくるとも又もやけなんすかはらや
むねの板間のあはぬかぎりは

一條院御宇。正二位に從一位左大臣の官をばをくり奉り給き。彼位記詔書等。勅使菅原幹正。正暦四年八月十九日太宰府に下りつきて。廿日未時に安樂寺に參りて。御位記の箱を案上にさしをきて。再拜々々してよみあげ給しに。ひとつの絶句の詩の化現して有しぞ第一のふしぎとはおぼえし。をそろしくも侍り。

忽驚朝使排荊棘。　官品高加拜感成。
雖悅仁恩覃邃窟。　但羞存沒左遷名。

件正文は外記の局におさめられて今に侍なり。道風が筆跡にすこしもたがふ事なかりけり。弘法大師の菅丞相は我遺世の身。道風は我順世の身なりとしめし給けるも。誠におぼゆる。今度の勅答。神慮なほ心よからずと。群議をはりて。同五年のころ正一位太政大臣の官位をぞ贈り奉り給ける。其度ぞ天神の御心たひらぎて。一の詩を詫宣せさせ給ける。

昨爲北闕被悲士。　今作西都雪恥尸。
生恨死歡其我奈。　今須望足護皇基。

此詩こそ世の人一度も詠ずるものならば。一日に七度守護せんとちかひまし〳〵けるとは

承れ。無實にかゝりたる輩は。歩をはこびかうべをかたむくれば。立どころに靈驗あづかりける。

北野の宮の御はむ昌村上の御世よりとぞ承はる。凡官位福祿智惠。臨終正念往生極樂ののぞみ。何事も申にしたがひてかなはぬはなし。おろおろ申べし。

待賢門院の后の宮と申けるとき。女房の衣うせたりけるをあしきさまにいはれける女房七日いとまを申うけて。北野にこもりて。此哥をぞよみまいらせたりける。

思ひいつやなきな立身はうかりきと
　　あら人かみになりしむかしを

とよみたりければ。其日やがてしきしまといふ半物のぬすみたりけるが。手づからいたゞきて。鳥羽院の御前にくるひまはりける。

治部卿通俊の子にて世尊寺の阿闍梨仁俊と申て貴き人おはしき。或女ぼう鳥羽院に件僧は女心のあるよしを讒言し申たりけるに。阿闍梨やすからずとおもひて。北野にこもりてよめる。

哀とも神々ならは思ふらむ
　　人こそ人のみちをたつとも

とよみたりけるとき。かの女房。くれなゐのはかま腰にまとひつゝ。手に錫杖をふりて。仁俊にそらごとをいひつけたるむくひよと申て狂ひおどりあせりけれ。院宣にて北野より阿闍梨を召出してたすくべきよしの仰かふむりて。一度ごしんし給へばやがてさめにけり。阿闍梨にはうすずみといふ御馬をなん引て種々の祿をぞたびける。

仁和寺なりける阿闍梨。北野の御輿西京の旅所におはしましけるに。車にのりながらとをりけるに。其牛俄に倒臥て死にけり。阿闍梨か

ちよりにげたれども。やまひつきて一二年なやみて。北野に參て怠狀申てをきたりける。ケ樣のことどもかぞへつくすべからず。八月の御祭も村上の御時よりはじまり。公家の御さた大藏省のつとめなり。神威嚴重也。儀式希代なり。

七十一
後三條院御宇延久二年九月の頃。仁和寺の池上に僧西念と申もの年五十計にて北野に百日籠て終日通夜祈請する事有けり。人々あやしみて。無實ばしおひけるかとて申あふ程に。九十三日と申曉。師匠とたのみたる僧をよびてなく〳〵申ける。西念は已に年來の所望かなひて候。此正月に熊野那智山に參て。百日籠て。臨終正念往生極樂の定日何日と言事しめし給と申侍しに。百日と申候し夜の夢に。御戸をひらきて。よはひ七十餘の老僧の額の浪きびしう。かうべの霜さえたる。けだかき御躰にてしめし仰らるゝやう。汝が申所の往生の日。我心にはからひ難し。北野の宮に參りていのり申べし。其御はからひにて有べしと。示現をかふりて。さてかく參て申程に。此曉しばしまどろみて候時。ゆめかうつゝかともいとわかず。御殿より直衣の袖計出て。汝が望申事やすからずといへども。往生の心ざし念頃なり。來年の二月の彼岸の七日といはん朝を期べし。其程おもひまじうる事なくて。阿彌陀佛にむかひて念佛を申べし。いかなる人も心ざしを思はば往生はやすけれども。臨終の時の魔緣きびしくてとぐる事かたし。我にかく申せば成就すべきなりと。御示現かうぶりて候とてなくなく出にけり。此僧つぎの歲の仲日。尋行て見ければ。おもひのごとく臨終正念にして異香薰じて往生をとげてけり。

七十二
白河天皇御宇承保二年。西七條に貧き銅細工有

けり。女子二人もちたりけり。十二十四許にて。母わづらひけるに。此子共を念頃に糸惜しくおもひて。おとこに返々契り申樣。あなかしこ。あなかしこ。此子共のありつかむ程。繼母にみせ給なとなく〳〵申て はかなくなりにけり。おとこ契りをきし事をわすれて。其年いく程なくて妻をなんまうけたりけり。今も昔もなさぬ中のならひにて。此繼母女を あながちに にくみけり。四五日物をだにもくはせず〔衍脱〕なんして。いのちをたゝんとなむしけり。人の氣色もうらめしくおもひて。姉妹北野に參て籠にけり。夜ひる 涙をながして。天神たすけ させ給へとうれへ申て。うせにし母に孝養報恩をもせぬ程の身ならば。命をめせと申ける程に。御詫宣あらたにて。參り相こもりたりける 播磨守有忠おどろきて。姉をよびよせて。此故をきゝて。頓て妻にしにけり。妹をは宮仕させける 程に。宮うみまいらせて。目出さかへて。父母の孝養思さまにぞし侍ける。御詫宣には孝養の心ざし念比也とて 感應ありて。我まぼり さいはふべしとぞ仰られける。およそ天神に 心ざしをいたし歩をは こばん輩は。いかなる望かむなしかるべきぞ。北野の御利生に よりて この娘播磨守の御前になりて。思ひのまゝ榮て。父母のために堂塔をつくりて。後には出家して。發心の心にしうじて往生をとげてけり。

右天神之御縁記。鎌倉 荏柄天神社有之寫矣。筆者世尊寺行能云々。

住吉内藏允

繪卷物奧書。

天滿天神。利生利物。薩埵之應現。權化之方便。綷入幽玄。筆難觀縷。唯舊談之所。世論之不忘。摸之丹青。彰其奇特。勒成一部。相幷三軸。聊

依有中丹之緒願。所願所念。此後素之畫功也。一奉納寶殿之後。再莫出瑞籬之外。信心之至廟嚟定照。感應之倏宿望盡成。于時寶曆元應屠維之年。玄律大呂朔之朝而已。

右近將監藤原行長

此一帖以小野高尙本令書寫於杏花園遂一挍了

宇都宮大明神代々奇瑞之事

一朱雀院御宇。于時承平年中。平將門追罸之時。於當社有征伐祈精。勅使田原藤太藤原秀鄕。仰于社司社僧等。一七箇日致調伏之祈念之所。秀鄕乍給神劔之由。蒙靈夢之告。夢覺卽件劔在掌。秀鄕成奇異之思。合渇仰之掌。卽催士卒官軍。速令發向將門舘云々。依王事靡盬神力振威。凶徒卽時令滅亡畢。秀鄕以件之劔自刎將門首畢。其後彼靈劔飛歸有社壇云々。同御宇天慶年中。將門追罸之後。正一位勳一等位記。一鳥居額等是也。

額文云。

正一位勳一等
日光山大明神

又依綸言。送紫金字法華經一部。被納神殿。又被定置二季祭禮幷法花經最勝兩講之料所等云々。

一後朱雀〔冷泉歟〕院御宇康平年中。奥州刺史八幡殿義家。安部貞任征伐時。又如舊例於當社有降伏之祈精。仍神殿三ヶ度振動并鏑矢出自神殿向東鳴過。其後不經日數凶徒被誅戮畢。義家爲報賽被掛生贄。加之奉納御劔并甲冑號厚丸以下種々武具等畢。又奉寄進數箇所神領等云々。

一高倉院御宇治承三年。天下不靜。源氏東國蜂起之間。平家西海流浪之時。頼朝又於當社致征伐之祈精云々。

一同四年。頼朝又爲朝敵誅罸令發大願。當國之内久野大井手二箇所。爲燈油料所奉寄進畢。

一後鳥羽院御宇元暦元年。源右幕下頼朝爲平家追罸。又於當社致祈精。即所願成就之間。爲當國地頭御家人等所役。被始置五月會頭。

一同御宇文治五年。征夷將軍家頼朝爲藤原泰衡誅罸。又於當社有祈精。仍感應繁多。三箇日中凶徒誅戮畢。爲報賽。以生虜樋爪五郎季衡被掛生贄。并御劔以下神寶等奉納御殿。加之那須庄内五箇郷。肥前々司知行。被充置生贄狩料所。其外以森田向田兩郷被定置日御供料所云々。

一龜山院御宇文永年中并大覺寺殿御宇弘安年中。兩度異賊蜂起之時。爲降伏被下勅命之間。社僧等於當社勵御祈禱之忠節之所。奇瑞甚嚴重也。七箇日調伏結願日。御殿三箇度振動。鏑矢出自御殿。向西鳴渡。不幾異賊飄沒之由。自關東飛脚到來云々。凡當社之根元者。稱德天皇神護景雲元年顯現日光山。其後仁明天皇御宇承和五年戊午。温左郎麿。奉懐大明神。奉移河内郡小寺峯。〔惣歟〕號補陀洛大明神矣。於社壇之南面有道路長。行人征馬致無禮有秋毫之誤則神忽成嗔。或落馬損身。

或受レ病或遇レ夭。有二種々災難一。仍往反之貴賤。輙難レ通之間。則塞二宮南之路一。奉レ移二山北叢祠一云々。今社壇是也。當國第一宮也。右於二當社一。代々朝敵追罸之奇瑞分明。時々王臣崇敬之支證炳然也。但上代信仰之眼前。彌雖二感應之月朗一。末世不信之掌內。何得二利生之蓂鮮一。方今披二此記一各致二信敬之精誠一者。誰不レ預二冥應之掲焉一哉。仍爲二後代一粗勒二先蹤一。

文明十六年甲辰九月卅日

右宇都宮奇瑞記以村井敬義本書挍合

群書類從卷第二十五

神祇部廿五

竹生嶋緣起

夫當寺者。人皇第七代大日本根子彥太瓊尊（號孝靈天皇）御宇廿五年乙未。湖水湛而此嶋顯出也。此御宇。霜速彥命生三兒。氣吹雄命。坂田姬命。淺井姬命。天降坐豐葦原水穗國。箇中氣吹雄命。坂田姬命二神。下座淡海國坂田郡之東方。淺井姬命下座淺井郡之北邊。爰淺井姬命與氣吹雄命競勢爭力。更去北邊下坐海中。其下海音云都布都布。故云都布失嶋。卽件神凝水沫而爲鱗積風塵而化嶋。又召諸魚令持重石。字今云魚崎。魚集之處也。又召諸鳥令落殖草木種。今猶衆鳥來集之峯也。巖長成林時。先其最初竹篠出生。故云竹生嶋。一傳云。行基菩薩當嶋經行之時。明神垂靈應示地分云。此嶋自金輪際出生。金剛寶座石也云々。則行基所携持竹杖立地。誓云。若此地爲三寶住持之地者。此竹則可生長。願時滋茂如出生竹。故號竹生嶋云云。古老口傳云。此嶋出花嚴經說。故自金輪際出生。金剛寶石者自神代在之。淺井姬命下坐此寶石上。後召諸魚。此石周圍疊重石隱寶石也。仍兩說無相違。淺井姬命（今號地主）者釋迦如來化現也。故下坐在世說法之金剛座也。次竹生嶋稱號。兩說雖似有異。諸鳥從落殖時。雖有竹生嶋號。行基菩薩御立願後竹生嶋號彌盛矣。爰海龍變大鯰廻嶋七匝。蟠繞首尾相咋。每其一

匝一神顯坐作於八方。今之大神及七所神子是也。乃往難波海有一大蛇。長數丈也。從宇治川登到此嶋之上。呑食來宿之人。于時件大蛇纒尾於大松。垂頭於海岸。延頸呑水。爰件大鯰擧首開口。咋其大蛇之頭。奮迅曳之。松木覆根遥擲神崎濱。件地𧌃小力不及龍勢。故云小神。其蛇所居者。今云虫尾也。人皇第十三代稚足彥尊成務天皇御宇。件神現嶋乾。維是從辨岩屋現鷲岩屋始也。古老口傳云。是法花經提婆品時。自海中詣靈鷲山表示也。表靈鷲山而現鷲形。故云鷲岩屋。巖形山躰峻嶮孤峙在彼岩屋。取往還之舟。擊嶋上。乃有穴太古麻呂。造酒大瓶。載舟過海時。件神從空取彼瓶。置嶋巖頭。舟亦不動。于時古丸急失心神。捧幣祈云。我及子々孫々。累世相繼奉仕。冀嶋太神令如本得免。此難云々。于時件神殊降神氣免舟令行。但其瓶者雖歷數代。于今尚在。今云寄瓶尾之處是也。故穴太氏爲祝部。累代奉仕之。凡有諸舟人寄宿此嶋者。智辨自就。故後人云智就嶋。亦件神能與智惠富貴。故云智福。當初役行者入辨岩屋龍穴。此岩屋道。南北前後出入。穴口狹小又曲。此中央有池。上有大朽木。是大龍在所也。于今此嶋坤方有役行者造立卒都婆也。天平十年戊寅。招提寺僧行基到此嶋。感歎靈異留跡巖石結草菴。經行閑座。爲聖朝安穩國家鎭護。奉造長二尺四天王像。即搆小堂安置之。天平勝寶二年庚寅。元興寺僧泰平。東大寺僧賢圓。兩人尋勝地到此嶋。祈請所願。應願悉成就。同三年辛卯十一月七日丁卯日。件神託宣泰平童子穗積有本丸云。我居乾遠於閑法須早遷取我社。齊置巽宮云々。因之泰平賢圓等敬奉神宣。齊社巽宮。從乾奉迎。今宮崎是也。秘傳云。龍女從靈山唱南方無垢世界成道意也。同四年壬辰。淺井郡人國造田次丸改行基之

小堂。立三間之佛殿。今驗堂是也。同五年癸巳。淺井郡大領直馬。慕行基薫風。造金色觀音像。爰件觀音與此神放光。應人之祈念施靈驗。奇特甚多。今之千手觀音是也。天平寶字八年甲辰九月十八日。大中臣惠美仲丸成亂逆意。發兵攻國。于時。天皇差遣將軍伴凉太。引率士衆。令相防之時。天皇兵衆在高嶋郡勝野濱合力相戰。中臣兵敗乘船浮海指東而逃。爰將軍凉太向嶋神祈云。普天之下無不王土。卒土之濱誰非王民。右山大川皆鎮國王座。彼海中都布失嶋神。乞發神力助護天孫之國。令得中臣之身云々。于時件神赫然發憤。急出東風吹返中臣之舟。令着高嶋之濱。仍將軍凉太遂得中臣首。天下泰平。因之將軍奏上天皇。奉授從五位上勳八等。是則神之被知國王始也。延曆七年戊辰。傳教大師奉爲桓武天皇。創建根本一乘止觀院。今中堂是也。安置藥師如來尊像。修三部

長講。致朝暮勤行。奉祈聖朝安穩皇帝本命佛法繁昌。件堂乾方大辨才天女忽然化現曰。如來在世之昔者助月氏之佛化。智者大師中比者養振旦台嶺之僧侶尊者。今建皇帝本命道場。拓佛法相應之靈峯。吾今所隨喜也。隨尊者於三國。如影隨形助化儀。心中三種所願等如望可滿足也。自今已後住湖中之靈嶋。可奉守此山佛法也云々。大師于時捧白紙。讀祭文奉祭供。貞觀二年庚辰六月七日。慈覺大師任祖大師之遺誡建立文殊樓院。時丑寅方可鎮護之由。辨才天契誓約。則遣弟子僧眞靜令造改神社。慈覺大師手自造立神躰。奉送彼嶋安置之。今神殿是也。同十三年。淺井郡淺井盤稻壞運日屋建立食堂。同十四年。同郡之老淺井廣志根發大弘願。鑄造湯釜施入之。仁和三年丁未。天台僧尋明。慶詮。雲晴等。共行此嶋。智辨傳世。仍施入珍財修造神殿。寛平二年庚戌。天

台僧清源。道慶。理智等。茲〔イ无〕行二此嶋一。辨才〔財イ〕天化レ人
之間傳レ世。則造二中門及〔イ无〕磴橋等一。昌泰三年十月。
寛〔无イ一〕平前帝禪定法皇行幸。召二木工寮一。改二三間堂一
〔造イ一〕〔二五イ〕作二七間之殿一。淺井郡撿挍出雲春雄蒙レ勅奉レ搆二
造之一。法皇即常燈料施二入勅旨田參町一。諸王諸臣
各施二入位田一。延喜六年天台僧祚源。湛祐等。亦
到二此嶋一。辨音流レ世。〔習字無雙イ〕・莊二嚴佛神一施二入財物一。同年
元興寺僧泰宿來臨。〔當嶋イ〕・滿願則書二寫大般若經六部。
金剛經一千卷一。其中大般若經二部。〔イ无〕納二厨子一奉
レ置二於嶋一。同十三年四月十一日。寺家僧慶照。基
然等。爲レ濟二三界六道一。普引二知識一鑄二造銅鐘一口
高五尺一。〔也イ一〕・同十六年常住沙彌豐祐。爲二聖朝安穩一
建二立多寶塔一基一。延長元年七月。蒙二太子親王家
扶一春柯改二造五間之神殿一。同八年越前大丞出雲
〔同イ一〕〔イ无〕貞行。奉二爲國家一建二立法花三昧堂一。〔イ无〕奉レ安二置五尺
皆金色釋迦如來像一躰并三尺四天王一。則入二〔二イ〕六
口之沙彌一令レ修二三昧一。同九年先帝特賜二度者一

人一令二登壇受戒一。天暦元年丁未二月八日。右兵衛
息智神主恒〔贇イ一〕算。延暦寺僧神勢。東大寺僧延寛等。
施二入伊香郡十七條九里之内田地貳拾町一。天台
第十八座主三朝國師慈惠大師。初任二當嶋撿挍
執行職一。興隆千萬端。〔參イ〕・其中六〔月イ〕・蓮花會其隨一也。私
傳云。此大師者。御母祈二精大悲觀音一。奉レ祈レ子之
時。夢見下安二坐海中一向二〔唐字イ〕大虚一開レ懷受中日光上云々。
其後懷姙。仍此嶋大辨〔財イ〕才〔女イ〕天・化現也。奇瑞惟多。斯
會之儀式者。造二大鳥一嚴二船於海中一而祭レ之。〔隨イ〕後切
破入二海中一。是則金翅鳥沒後。彼鳥心臟隨入二海
中一成二如意寶珠一。驪龍收二頷下一。降二雨七珍萬寶一。於二
一切事一除二怖畏急難一〔表相イ〕意也。天下泰平・〔國土安穩イ〕五穀豐饒。
〔之イ〕併依二此祭會一。〔也イ〕・自レ爾已來。大師門弟執行別當相
續・于今不レ絶。一條院御宇永祚元年九月四日。右
大辨兼内藏頭平朝臣惟仲。加二行法華三昧一。施二入
六口僧料田十二町三段二百七十歩一。則當時權
別當仲舜爲レ師令レ預二行一。凡從二神代一迄二聖代一。大辨

才〔財イ〕天奇瑞不可勝計。今是大神者。辨才〔財イ〕天女釋迦
如來應跡〔迹イ〕。爲三界於我有撫四生於一子。七所
神子者。十五童子中司陰陽。二神中主陽主天
神子顯現嶋上。主陰主地八神子者居在海中。
凡十五童子顯神體垂跡於處々一記云。
第一麝香童子。　三輪。
第二赤青童子。　熱田。
第三香精童子。　諏方。
第四召請童子。　春日。
第五大神童子。　丹生。
第六惡女童子。　白山。
第七除惡童子。　飛龍。
第八質月童子。　若一王子。
第九慈滿童子。　西宮夷。
第十密迹童子。　稻荷。
第十一施願童子。　賀茂。
第十二虛空童子。　羽黑。

第十三施無畏童子。　鹿嶋。
第十四隨念童子。　八幡大菩薩。
第十五光明童子。　松尾。
凡三億六萬眷屬。八萬四千〔イ无〕諸護法。充滿國中
顯諸神冥。藥師十二神將。法華十羅刹女。或被
云同躰一身。或被謂折伏攝受。眷屬無非此神
王〔之イ〕所變而已。溪嵐集云。湖海者琵琶形也。所以
竹生嶋者覆手也。小嶋（號十羅刹女嶋）者撥也。嶋內之宮
殿者陰月也。白石與竹嶋〔沖嶋イ〕者半月也。渤海者遠
山也。勢多者鹿頭也。自宇治至海者海老尾也。
湖海最底四海〔之イ〕流即四絃也。法爾天然之標。相生
身辨才〔財イ〕所居也。
應永廿一年（大歲甲午）八月。普文頭陀詣此嶋。七ケ
日參籠。爰當嶋事人未知垂跡由來。故敬信聊
疎。早於叡嶺集此緣起。可奉賣神威之由。
依有靈夢之告。令登山令勸誘之間。集于
舊記刪繁補闕錄正說〔記イ〕。則傳於三際弘於十

方。後葉宜知素意而已。

助縁衆

聖輿。呂府。梵泰。梵廣。常崇。祐崇。
寶城。延命。眞等。淨貞。眞保。善應。
祐弁。隆光。信乘。淨達。佳阿。增阿。
右吉。原鎭。淨隨。慶幸。良英。

外題　仙洞宸翰。

應永二十二年乙未六月十五日辛巳。大勸進小川末流煥章頭陀普文。自身持來奉安置于寶殿者也。

松風亭判

以異本智福嶋縁起挍了

走湯山縁起卷第一　帳箱五卷之内。〔全海〕

當山者。人王十六代應神天皇二年辛卯四月。東夷相摸國唐濱〔濱歟〕礒部海漕。現一圓鏡。徑三尺有餘。無有表裏。順濤浮沈。或夜放光明。疑日輪之出現。或時發響聲。誤琴瑟之音曲。視之爲奇異之想。適欲近之波浪荒暴隱沒海底。又或飛登高峯。係松朶。或入海中照曜波底。仍時人云二處日金。二處者入海登山故也。日金者光如日音如金故也。凡無識其事如何。然爾送三箇歲。同御宇四年癸巳九月中旬。有一仙童。其年三十有餘。不知何里人誰姓族。唯爲其體。布帽冠首。薜衲纏身。手提桂杖。腰佩劒刀。足着藁履。口絶穀漿。只服松葉與茯苓。時人號松葉仙。尊欽神鏡。深設禮奠。遂而點嶺洛。搆社屋。祝禱靈神。禮供之人不絶。願滿族惟多。

大鷦鷯帝廿七年八月五日。忽然此神鏡放光明。照禁闕。攝津國難波高津宮也。響驚叡聞。公臣奇怪。爰武内

宿禰大臣奏聞云。先皇稚櫻宮御宇攻三韓時。高麗國零沛郡之深沙湯有一神人。與皇后結契約謂。來影于我大日本國。覆養黎元鎭護國家。加之吾胤尊可宰東征云々。以其厚契降臨此州歟耳。若欲知事實令降宣使。依之差泊瀨大瑞。百濟薗部等兩使承勅東降。見聞社屋尋問子細。若是神歟。將又祇歟。仙童答云。神者天地之精氣。人臣父母。神自無言。若欲知由來須爲卜占。又可推靈託。勅使諾此謂。雇一老巫令請神託。卽時神靈附託而自稱云。吾是異域神人也。又是日輪之精體也。昔西天之月盖依釋迦文佛之勅。取閻浮檀金奉鑄如來眞像。吾胤尊重此金像。故下自高天原住月氏之境。又以本誓化出温泉。濟度蒼生。因之呼吾曰沙訶沙羅。湯泉之梵語歟。爰如來化緣已盡。催東漸之幸。我隨此亦東向。棲宿三韓〔之イ〕國。新羅也。高麗。百濟。爰神后討三韓之時。自進幸我卜宅深沙湯之許。誘云。吾是豐葦原大和國主第十五代帝君也。今以神威伏三國。自今以後以大養德國爲本首。以三韓爲邊畔。然則湯神客來達于本朝。又所歸依之金像。可迎接我朝云々。磯城嶋宮御宇。百濟國之濟明王。奉渡金像於吾朝。我聞神后誘。承諾已畢。早出本國。降臨倭朝時節云到。既達叡聞。令勅使尋來斯。甘心也。但於此州雖逕多歲。非有緣之勝地。若公等可與仰崇者。兼可卜靈地。謂湯出州。新礒濱。二色浦。片平鄉。是有緣之地形也。我本自在西天所好玩甜〔蔗柑イ〕子波藻。以其種子兼蒔植于彼地。又兼令化出靈湯。已託宣事終。神鏡乘飛〔雲イ〕龍之背。翔虛空。到山頂係松朶。爰仙童老巫幷勅使等。瞻光雲之聳。効香郁之薰。尋入當山。凡靑巖側立〔无イ〕峨峨。祥樹茂生森々。履蘿徑跨谷澤。遂而攀登日金之巓。夫爲山之體。望離白浪之海蒼々。顧坎〔東西イ〕翠嶺之岫峻々。水石聳湛。林花開結。乾坤虎蹲。震兌龍偃。靈湯沸涌。神蝠杳洞。奇仙異人卜

宅連々。天地之間。無地干比之。〔可獻〕爰宣使詣神鏡前跼跪云。以事實劾欲經奏達。其容儀如何乎。于時老巫變形示俗躰。其長八尺。壯齡五十有餘。頭戴居士冠子。身着白素衣裙。係健陀色袈裟。右手持水精念珠。左手把錫杖。柔和忍辱。慈悲和雅也。親拜見之。應爲寐應爲寤乎。感涙難拒。心魂叵保。尋召畫工。繕寫相好。納箱戴頭。上達洛都。高津宮。帝后有叡感。當國之土產三分之一。募永世被宣進畢。宣命在別。加之課巧匠而爲土木之功。凡於碏礪爲鎮將。於蟲蝗爲平夷者也。爰仙童挑神威致禮奠。凡歷九十九年。同御宇己巳三月四日。仙童入定于日金之巖崛。其七箇日以前。山峯震崩。社殿吟鳴。白雲聳覆。細雨無間。靈禽垂翅。奇獸跪蹄。發哀聲流涕涙。是忝權現垂跡。王子眷屬。被催離別之傷歎歟。所持柱杖劔刀奉納神殿。是爲將來龜鏡。又爲當山印璽者也。

入定後。云開山祖師。

又云勸請仙人。

緣起第一畢

走湯山緣起卷第二

人王十七代仁德天皇七十一年。樵夫新儀郡太。人日金之北山伐材。其木高大也。中心虛穹。以如屋舍。內坐一人。形貌非常。宛如入定之人。良且搖身開眼。告樵夫云。松葉仙人既籠嗣否。答云然也。聞已出木中詣神社。尊崇權現。奠供香花。勤精進之業。致興隆之行。一如勸請仙人也。

清寧天皇三年壬戌三四月。富士淺間山燒崩。黑煙聳天。熱灰頻雨。三農營絕。五穀不熟。依之帝臣驚騷。人民愁歎。天子被立官使捧獻神寶。錦帳。玉筐。氈毯。鐃鉢。又蘭脫輿晉皛俱經始抖擻。踏通邊路。於稻竝石藏谷唱天下泰平。其音達叡聞。仍被降

勅使。阿刀直樹。尋遇蘭脫宣勅旨。幷賜紫襟備日饍。効驗無雙。或落飛鳥或逆河流。時人云神司行人。或云蘭脫。當國刺史伴目寮館新田之保。其妻室有佗夫之聞。依之目寮捕妻室籠置於標欄之內。彼妾悲歎無限。合掌云。南無木生仙人。蘭脫本名。解脫我無實之苦。應時標欄破碎。故以欄脫爲名。又云蘭脫。彼妻妾其名云蘭女故也。又云有紅蘭染士。深歸權現。專信木生。以之奏達京都。大和國盤余甕栗宮。仍云藍達。

磯城嶋御宇十一年。天下大疫。人民死亡。又神火燒禁園。仍被降綸命。課三箇國伊豆。駿河。武藏。名戸土民被行臨時祭祀。金銅圓鏡一面。徑二尺。權現御躰。六尺二寸。被込神殿。此像御衣木者。和泉國茅沼海中有音如雷光如日之物。帝遣勅使令覽之。長九尋楠木也。以之造彫佛神之像。謂吉野光像。當山權現像是也。以此削屑棄置新磯之濱。生長而成大木。號楠山。又被降呈額。號東明寺也。同御宇廿三年。三月八日。相竝勸請仙人之廟崛。木生仙人入定已。

卅一代渟名倉太珠敷帝御宇四年乙未八月十三日。大地震搖。山裂谷塡。民舍顚仆。林樹傾折。及晡尅於日金坤角。有光如火。有音如螺。人恠而見之。其地方圓一丈餘。皆黃金也。其地上有一人。白髮係肩。波皺疊面。雪眉弓腰。薜衲纏身。錫杖念珠提之。問云。蘭脫入定否。答云。然也。聞已忽起金地詣社壇。致歸依渴仰。偏同木生之昔。坐金地。故人呼云爾。

高麗國靈光王獻烏羽之文。儒者不明了。以宣使祈權現。權現變人體分讀之。小墾田女帝御宇。東宮豐聰皇子聖德太子。弘隆佛法。度僧尼。建立伽藍。叡感神威節々被貽祝禱。又太子。前皇御宇。被獻御書於當社。彼御書云。吾國佛法弘流之緣地。濟生利物之勝境也。雖然國人舊邪難改。俗情傲慢。就中國臣守屋悖逆盈胸。尤叵抑

掣。神道合力降邪徒伏弘俗。遂利生素懷果弘通本誓云々。爰神威不虛損。王事靡盬。邪臣被討罰畢。禮奠之餘。有勅謚御諱。號東明山廣大圓滿大菩薩。神號卽走湯權現云々。又有宣命。被訊神之本地。（當國刺史益田邦照朝臣。）宣使莅當山。以宣命附座頭金地上人。上人與邦照沐浴靈湯。捧幣帛排社戶。跪暢宣狀。于時千手觀音像。浮圓鏡之面。金色具十一面。坐青蓮花。（但眉間有竪一眼。違世間流布之像。）座頭金地上人。宣使邦照以肉眼親拜靈儀。具勒故實。催駕上京。有叡感。如所現之像。於圓鏡之面鑄千手之像。裹錦袋納金筐〔筴イ〕。被奉安置神殿。凡靈應熾盛。神威超絕也。

難波豐崎宮御宇白雉五年正月。鼠爲群黨。損亡五穀。騷動山野。仍被立勅使緋田烏丸。以弓箭甲冑神民庄領。（勅書在別。）令進納於當社。不經旬强鼠伏匿。爰被奉授官爵於權現。謂正一位勳二等。又此御宇有遷都之事。奉爲祈請莊飾鳳輦。有出御之儀式。

同御宇九年十月二日。金地仙人。相並蘭脫之廊〔窟歟〕堀。令入定已。

四十二代文武天皇（御諱輕。）戊戌。役優婆塞。（大和國茅原人。）依違勅配流大嶋。行者嚮〔[illegible]イ〕北顧。山頂常聳五綵之雲。（仙道之奇瑞歟。）兼識權現靈砌。四月上旬艤船航來。着湯濱欲浴湯泉。靜見溫底顯現八葉金色花臺。上有尊像。以千手爲中臺。葉上各有八佛。左右有天仙。又浮金文一偈。無垢靈湯。大悲心水。　沐浴罪滅。　六根淸淨云々。

行者不堪隨喜。詣神所勤精進。或以杵窟〔穿イ〕巖。流出淸水。或抖擻峯頂。踏行邊路。（秘所靈窟悉在別記。）又小勾戶崎有毒蛇。常吐雲霧降霰雹。損亡國中。行者以金杵擬之。蛇忽顚沒。又日金艮角住穴。秋八月大風吹出。損失果實。行者覆大石以爲其蓋。暴風忽止。國中安然也。金杵。水瓶。繩床。鹿杖。安置小勾戶之菴室。

四十三代元明天皇御宇和銅三年(庚戌)二月。寶社搖動七箇日。晝〔中イ〕夜大風颺レ砂。如二金盤之形一物婉二轉神殿一。指二北方一飛去。神民住侶驚恠。開二社戸一拜見之。神鉾圓鏡共不レ有レ在。爰知神化緣已盡移二他界一。靈湯枯干不レ擧二微烟一。神部僧侶含二悲歎之氣一請二神託一之處。巫器宣云。我是地主白道明神也。依二大神影向一讓二敷地一傍侍二濟度一。周二四海利生一潤二一天廿心一也。然大權現與二善光寺如來一。自二西天一爲二親衛一故。以二其芳緣一幸二臨來國戸隱山一。(來國者。信濃國也。以二如來國隱密如レ字。單云二來國一歟。)就中我山人信力薄淺。故去二此所一赴二他界一。是人力所レ不レ及也云々。風霜自然。侵レ甍頽敗。人法衰微。無レ有二參詣之輩一。送二四十餘回之序曆一也、

高野天皇御宇天平勝寶年中。八幡大菩薩自二宇佐一臨二幸洛都一。(平城宮。)于時當山震動七箇日。湯泉沸出。沈檀風薰。神鏡。神鉾。飛還二在本社之所一。見聞之人隨喜無レ限。權現託二神童一云。昔神功皇后與レ我有二深契一。然今其尊子八幡菩薩自二本社一入二洛都一。欲二拜謁一。令二神鏡寶鉾屆二上都一云々。因レ之都維那(晉詔)。座頭(揚舟)。年預(尋察)。幷神識〔職歟〕。(高麗彥太田畔戸主。)鉾持(金目保持。)頂二戴靈鏡一捧二神鉾一上二達洛都一。于時太上天皇太后太子皆詣二東大寺一。以二神鏡一納二八幡社殿一。有二禮奠之儀一。經二七ケ日一神鏡下洛。於二東大寺一有二萬僧會一。於二當山一有二千僧會一。國史〔司歟〕弓張藏人統俊。書二寫一切經五千箱〔卷イ〕一。令レ施二入根本堂一畢。

四十八代稱德天皇御宇神護慶雲。此帝造二八萬四千基石塔一。其內一基被レ安二置於當山一。

同御宇(丁未)當山鳴動。如レ血大雨降。當二翌日一湯濱畔吹二寄一査一。長四五尋。廣五六尋。猿猴數十爲二群黨一。乘レ査遂二上陸一。詣二〔隱イ〕社殿之許一之。各々吐二異類音一三ケ日夜。然後・失不レ知二行方一。社司神人民恠視レ之。社壇搖動神殿戸開。神鏡飛翔入二天雲一。見者悲傷聞者恐懼。加之溫泉乾涸。爰住侶職事等。以二巫婦一請二託宣一七ケ日夜。巫女宣託云。吾

是地主明神也。大神歸國悲感之心如春。其故當今女帝賜賞祿於弓削。八幡菩薩含恨太爲妖嬈。閉神戸隱音形。而權現與八幡(諱イ)芳契最深。爰以弃國移高麗。汝等雖致祈精。輙以無効驗。我試爲汝等涉高麗再奉請權現云々。住侶社職雖憑地主明神託宣。神鏡不還湯泉無涌。空送四十三年星霜。弘仁元年(庚寅)二月十五日。當山松樹花開。温泉所々涌。香氣谷々薫。爰緇素歡喜測知權現還御。爰地主明神託巫女云。我奉爲權現勸請。去天應年中投高麗。然未叙思緒。彼國廟神等。奠以美酒。供以腥宍。醉酷之餘。忘素意。既送多年。康寧(高麗年號歟)始醒寤輸勸請。今權現還御正是時也。公等抽渇仰盡歸命。託宣云終。神鏡翔降。還入宮殿如舊。爰社職住侶欣感地主之恩。而於楠山之麓奉勸請。世人號來大明神是也。(奉還權現故以來爲名。)依之來明神惜酒味不容受。權現再來。此明神之祕計也。尤可奉運信仰之忠貞哉。

當國刺史大學寮大江政文。當歸依異于他。適參拜之次。請記錄。若不然者將來墜沒。爰以刺史承諾。粗勒故實。納帳箱示後生。

勘定。

社司。(通智大法師。卓彷大法師。)
職事。(栗田倫秀。牡丹藤逸。)
三綱。(尋念上座。旻容都維那。一藏寺主。)

縁起第二

于時弘仁三年(壬辰)二月十八日。

大學寮兼遠江伊豆刺史大江朝臣政文記之。

走湯山縁起卷第三

嵯峨天皇弘仁十年(己亥)東寺大和尚。(勅號弘法大師。)古迹巡禮之時。於當國桂谷(修禪寺。)興行金剛界大灌頂。緇

素纖。踵隨喜結緣。刻彫諸尊形像。安置自身木像。巡禮當山社頭。結壇念誦。當三箇夜。有二人化童。語曰。我等是走湯權現王子也。爾[今イ]時及澆漓人懷弊幔。權現欲隱形。依之神鏡寶鉢可奉入神崛。和尙進來惟太可也。和尙問云。神崛何所乎。又奉納儀式如何。神童答曰。神崛二所。一在松岳之南麓。一在松岳之東谷。以神童爲先導。褰神鏡以九條赤衣。奉納南崛。抱神體寘藏東岳[崛イ]。書[安イ]寫法華二部。安置兩穴。又寶塔一基建立之安。妙法華經幷佛舍利。造立道場。焚八曼荼羅香。又圖繪權現本迹之眞影。安置根本堂。書兩所額。根本堂幷一切經藏也。又埋寶珠納寶劔。是爲伏降邪徒福人法也。結界四域召請善神。定置法則。始行法。又和尙於神崛之前講心經祕鍵。崛中電[雷歟]鳴也。仁明天皇御宇。甲州八代郡有一居士。姓竹生。名賢安。自幼少不食葷肉。以精進爲業。世人云居士聖。同御宇

承和二年乙卯二月。甲州有住國之史炙破麻續朝臣。生一男子無有口鼻。父母驚恠云不祥。竊欲弃之。其母夢有一童子。告云。所生子聖智者也。可養育之。請賢安居士令加持之。又相共可詣走湯山云々。夢覺隨喜銘肝。尋得賢安居士。暢此懷。居士幷夫婦赤子精進七箇日。着淨衣捧幣帛。上詣當山盡信心。窮渇仰致祈精。父母感靈夢。有童子。開筐賜砂金云々。明旦口鼻開生。唇吻分明也。因此稱名金春。國史上京。遂入室山門之惠鏡闍梨。又居士巡撿經行山上。如入仙閣似臨淨刹。忽忘舊土獨留此砌。搆草菴運行業。送四ヶ年。同御宇承和三年丙辰二月。欲奉造本迹之御影。殊抽勇猛信心。精進祈念。同四月中旬。夢中異人示云。我是走湯權現也。本地千手千眼。汝宿緣不淺。發再興之願。訊我靈儀。故以示之。若可崇置者。新礒[盤イ]濱側。靈湯之上山。勝地也異境也云々。夢醒巳隨喜無限。感涙難押。遂

請國吏麻績朝臣語靈夢之旨。仍以麻績爲檀那。造彫俗體本地兩軀。搆寶社奉入俗體。造堂閣安置千手也。文德天皇齊衡二年（乙亥）四月。安然和尚（相摸國星谷人。）詣當山。獻法施崇神威。卜松岳西谷搆舍房。念誦結壇。（求持行法聞云々。）明星入井中。（世人號智惠水。）加之講讀經論。解釋章疏。安置聖教凡數百卷。賢安居士値大和尚捨俗出家。以俗名不改之爲法名。號賢安法師。天安二年（戊寅）二月四日入滅。點社頭西岳。築廟所已。大和尚歸本山畢。

元慶元年（丁酉）安然大和尚門弟沙門隆保和尚。（大和國葛下人。）感靈夢云。六尺有餘之優婆塞。帶袈裟持念珠錫杖告云。汝於我結緣斯深。勿歸山。須住此所助我化道云々。依神勅勸進諸人并國中庄官。建立伽藍。挑法燈。設享祭。同二年（戊戌）造堂社安置本迹靈體。自十二月十二日點八ヶ日。始行法花八講。同三年自正月一日至于十五日。始一山順行不斷觀音品讀誦。又經始心經會千座大仁王講。其外興行不遑羅縷耳。（治山十七年也。醍醐五年二月三日入滅。）

于時延喜四年（甲子）九月十八日。

大敎王護國院。定額僧阿闍梨豪忠記。　延敎闍梨。　上綱良宣。　保全。

緣起第三

神記第四（雷電。）

竊以。直指曲折。本地甚深之化儀。洪範賞罰。垂迹和光之靈驗也。然則行藏順時。顯昧依人。神化無方。凡識難測。靈應有限。愚情誰推。有機垂迹。譬如水月。無緣歸本。宛似風雲。抑雷電金剛童子者。南山熊野王子。東明走湯儲君也。本是震多摩尼菩薩。以安養補陀落爲所居。迹則雷電金剛童子。以熊野走湯山爲社壇。爰延喜五年（乙丑）

春。南山護法五體王子之中。雷電童子出本山。降臨大嶋之淨濱。謂其靈瑞。海潜芬芳。沈檀薰馥。虹霓列張。迅雷發音。潮水展錦色。波浪布花葩。釣叟里民爲怪異。靈禽奇獸致馳翔。當其翌年二月望日。移遷當山。彼先兆誠不專。輙時有巫覡。名卽漢勝。容貌美好。體精利敏。忽然躋靈石。端坐收氣息。逕七日之間。曾無睡眠寢食之儀。異香散風。光氣燦爛。五彩之雲霞聳頭上。九尺之絹素纏身間。于時天台學徒有龍觀法師。智行磨珠。戒定研鏡。承勅詔住當山。具聞此奇瑞。來臨松石之下。視之。戴八輻之輪寶。拱手蹲踞。謹問訊之。且時巫覡開眉目含微笑。語于法師云。我是靈神也。遊神於風雲。馴情於水石。雖棲紀州南山之岫。是非相應之地。日金山者。宿緣令然之境也。就中大神卜宅。佛法駐流東漸之擁護。最吾所望也。依之試示隱顯之兆瑞。在大嶋淨濱之浦。若相稱衆情。自應勸請

潤利蒼生。饒益元庶。本自所誓也云々。龍觀承神勅。隨喜餘肝膽。信仰舂身心。催促道俗。勸進上下。捧白妙之幣帛。備紅壘之供膳。調勸請音韻。唱啓白句義。當于此時。靄雲靉靆霖雨車軸。雷霆響衆器忽碎。雷陣映山海擧煙。虹霓階梯接三秬。白浪舶船竝兩艘。爰形勢如日輪係雲松之梢。光炎奪眼精。鼓掣壞耳根。親拜神化。心神爲恍忽或有聞香氣。或有見光曜。或有聞雷音。或有無見聞。除法師以外正無有見神鏡。爰再拜稽顙云。願靈神正示容儀。須臾圓輪變作童形。莊嚴一如天女。左持理趣經。右握利寶劒。乘九仭白龍。卽時翻形示尊相。六臂具足如意輪也。擧頭欲再見。奄然藏形儀。爰法師見臨幸之奇相。拜本迹之眞體。且喜且懼。感心欣々。喜淚連々。遂卜靈石之上。築社壇。點翠松之下。搆朱殿。權扉巾帳窮美。床蓐細氈盡妙。同年三月上旬。僉議一同勸具子細。發向洛都。經遂上奏。

照宣公為上啓。具有叡聞。感歎催叡襟。照宣公承勅令奉行。當山懸巴蜀錦帳。敷呉郡綾縟。威驗効一天。靈德周四海。王臣仰崇。遠近禮奠。膺此佳運。聖代榮昌。民煙豐鏡也。〔饒歟〕又日金北沸酒泉。松岳中唱萬歲。如白琉璃霰。凝枝條。久不零。嘗之如蜜糖。衆色更和。露結草葉自不消。味之病患愈。或化人恒來致禮供。或妓樂無主作絃歌。奇特難盡記。靈應豈得語而已。

于時天慶二年五月日。

前進士準大學匠伊豆守菅原氏胤記。

走湯山雷電緣起第四 帳箱五卷之內。

走湯山緣起第五 深秘輙不可披見。

當山日金者。本名久地良山也。此地下赤白二龍交和而臥。其尾漬筥根之湖水。其頭在日金嶺之地底。湯泉沸所此龍兩眼二耳并鼻穴口中也。抑此龍者。昔此國未發之前。海中有法身印文。中心獨鈷輪也。國常立尊。此杵顯迹也。東圓鏡。南寶珠。西蓮花。北羯磨杵也。此龍背處圓鏡。是當東夷境所示現神鏡也。又千手金剛藏王一具尊也。金峯藏王役優婆塞勸請之。當山本地千手現鏡面。龍樹菩薩示分身為四代祖師。興行當山。抑此二龍者。日月精氣降于地所成也。主陰陽生長萬物。一天魂肝萬有神靈也。以國名號伊豆。伊者[illegible]三辨寶珠。豆者頭首也。所謂此龍頭頸懸三辨寶珠。是故云伊豆。此寶珠之上者卽松岳是也。翠松靈杉茂生。書云。山藏玉。草木自茂云々。可推察之。若有善惡之事。先兆必先震動此山岳。是此神龍致喜怒時也。此卽權現靈體也。以同人故現俗體也。以圓鏡為法身。以龍體為報身。以千手為應身。以俗體為化身也。

松岳東西麓各有一穴。此龍眼根也。高野和尚以神鏡藏右眼穴。抱俗體込左眼穴。山內有十五

之谷。十五王子住處也。二龍吐精氣。赤白交海水。二色浦此謂也。又經柱空中顯。現大般若魔事品。法華壽量品。其文字金色。高野大和尙向虛空。以右頭指書寫之。又新礒之濱上壇有巖坎。安置三尺金塔。塔上有飛空八天塔。中坐釋迦多寶。又塔崛東役優婆塞所穿清水有之。此自彼龍之鼻根所涌出也。

此龍有千鱗。鱗上各顯千手持物之文繪。鱗下各有明眼。生身千手千眼也。此山是補陀洛山九峯院之內別院明鏡院是也。此山地底有八穴道。一路通戶藏第三重巖穴。二路至諏訪之湖水。三路通伊勢大神宮。四路屆金峯山上。五路通鎭西阿曾湖水。六路通富士山頂。七路至淺間之嶺。八路攝津州住吉。神后皇宮攝政討三韓之時。於船中示現俗形。從兵不見之。於異國軍兵悉見之。或時權現示靈夢云。伊豆者。伊者。惠比須也。豆者頭也。東境伊人惠比須也。依仰吾神威。於一天下可爲頭首也。云々。

已上高雄寺清涼房眞濟之記也。

日金參登之路側。月光童子。松下搆菴室。紀僧正有參籠。行愛染王秘法云々。

有三神輿。一番走湯權現。二番女體。三番雷電也。

神馬三疋。一辛夷童子。二岩童子。三櫻童子也。

已上延斅之記。

〔按標題重複雖可疑姑存之〕

走湯山緣起第五

根本地主有二神。一者白道明神。本地者地藏薩埵也。其體男形也。於八穴道明白。故云白道明神也。二者早追權現。女形也。本地大威德也。日日夜々往反此八穴道。故早追也。其故於天下善惡吉凶。王臣政務是非。爲取捨勘定。以白道明神爲先引。以早追權現爲使者。令執行其事。或時奏伊勢內外。或時談與諏訪住吉等。又爲結緣引攝啓來國如來。總當所權現職宰。南

浮八娫之地主。故於日夜十二時無間斷也。

神託記。

昔景行天皇三十一年。久地良山之上有大杉木。其脂膏凝滴如白雪所照日月之光。其中心消融。其香氣宛如龍腦。從其中生一男一女。于時有巫女。號初木。以此二子養之如己子。不經旬忽成長。一云日精。一云月精。

第十三帝志賀高穴御宇。被定諸國之堺。至當國以此二人所治定之畢。此二人爲夫婦。以月之上旬入八穴之道等除之。以下旬等擺當山。國人以之號神冥崇重之。此權現氏人之元初也。

系圖。註上統不載枝葉。

初木養母。日精女月精男。—見津—赤松—安木

若木—若松—木村—姫初—坂會

月神—日向—月景—大谷—蜂木

直木—桑名—名代—若椿若松叢大夫。

立岩延數童名也。

承平八年戊戌四月日。延數記之。

延喜四年甲子二月十五日。法華長講始之。金春和尙先師賢安所造堂閣。星霜年久。破壞衰損。勸進十方。三間四面檜皮葺講堂修造之。安置十一面觀音像。長八尺。

又造立五間檜皮葺禮堂。奉立執金剛神二軀。長八尺。

又經藏一宇修造之。奉納五千餘卷聖敎也。

延數。承平二年壬辰爲金春上足弟子執行大小事。同六年金春入滅畢。

天德四年。庚申始建立鐘樓。又講堂破壞頹毀。康保九年甲子入杣山取始材木。同二年造五間四面檜皮葺堂一宇幷七間禮堂。棟高四丈。東西長八丈五尺。南北廣六丈也。又金色十一面觀音像一體。

長五尺。正觀音像一軀。長六尺。權現一躰。御長六尺。安置之。
安和二年己巳當國太守依智秦永時宿禰爲願主。
延敎爲勸進建立常行堂。又西廊奉安置金身
佛菩薩七軀。又三間四面檜皮葺僧坊一宇造立
之。
承平七年。菅野名明朝臣爲願主。延敎爲勸進
造立之。破壞之後。天祿二年加修復之功。普賢
文殊之檀像塗餝金泥。又撰六口供僧。結番修
誦法華經幷懺法等。
天祿四年北條大夫平時直爲願主。延敎爲勸進
建立寶塔一基。安置金色五佛。四年始之。同五
年遂功畢
永觀元年癸未造立三間檜皮葺大門。安置金剛力
士。同年改造御祭所幷禮殿。又造改三間四面檜
皮葺中堂一宇。天祿年中終功已。又七間二面食
堂一宇。當國太守平立身朝臣天慶四年所造立
也。然而大風顚倒。延敎爲大勸進造立之。又唐
國本朝摺本寫本經論。人師述作。〔等イ〕合束八千餘袟〔帙集イ〕
納之。凡自天曆之末至于永觀之今。三十餘年
興法修營。皆是延敎闍梨成功也。
秘所口傳幷權現王子〔和師イ〕氏人等圖繪影像。在別
矣。
永延二年戊子三月日。沙門延尋記。

貞觀六年甲申春。岩童子顯現。本地彌勒菩薩也。金
峯山金剛藏王之示現也。形像一如藏王。或古老
傳云。小勾戶菴室役行者本尊也。依蒙冥告奉
祝安之云々。
元慶三年己亥拳童子顯現。不動明王垂迹也。形如
夜叉。黃色。右手持三鈷。左金剛拳也。此社壇之
跡。本自有大辛夷木。此樹乾枯之以後。此木中
心此神像顯現也。仍立其名字也。
櫻童子者。其所有櫻木。花八重枝條茂盛。〔イ无〕樹下樹
上常有天童。推神託之處。此砌有嶋。嶋中有
金塔。天人爲供養常來下。殊以開花之時來集。

仍構寶社而奉安置之。其形天童子也。右手持開蓮。左手持寶珠。已上三社者權現之王子也。延喜五年乙丑雷電顯現。本地如意輪觀音。本是熊野權現王子。今則走湯權現儲君也。委細在彼緣起也。

權現女體事。幽玄而人不奉知之。本知〔地イ〕彌陀如來。金春造立御祭所。本是女體。所安社壇〔殿イ〕也。以權現像雖安之。正即女體之宮也。日金頂上權現御坐之時。彼嶺當東南。此女體社壇安之。權現自日金岳下降湯濱上之後。以女體移御祭所。仍以古社壇號本宮。以御在所云新宮也。其形像如天女。持天扇扇中圖開合之二蓮。坐白蓮花。

應和元年辛酉夏比。有神託。女體入御雷電御社。走湯權現令通夾早追權現。其嫉妬云々。其後經五箇年。康保二年還御本社。是皆依神託所執行也。

沙門延尋記

辻別御子。早追權現母儀也。本地地藏菩薩也。治創八穴道神也。滿御子。本地文殊菩薩也。迹體九尋青龍也。雷電所乘也。

天平五年〔五イ〕巳六月。東國大疫。過半死損。當國南北條祭主等同心合力。於當社盡究術藝專仰神助。于時神託云。一業所感不及力也。但有神術。謂白山威力也云々。爰炎天之剋以一夜中。松岳東隅岩藏谷白雪降。深三尺餘。雖經旬都不消。取之觸身背口。病患平愈。仍構社宅奉祝之云々。

密傳云。松岳南麓之地底方十二丈有宮闕之閣。花幢幡珮。摩尼燈燭。奇麗莊交之淨刹也。上方以廣〔實イ〕平瑪瑙大石爲覆蓋。名坤元・廟〔之イ〕。其中心有七星臺。坐千手觀音。二十八部神森竪。日夜說法。利生無間斷。是則補陀落山九峰之別院是也。參詣之輩步行淨刹之上。除災與樂。出離生死決定者也。

此一ヶ條者。弘法大師語眞濟口傳云々。皆在面授。今歎廢忘之故。乍懼註之。

日精月精其終沒不知之。仍以其所棲之卜宅奉祝之也。人云結護法是也。

海底大日印文五箇口傳。中心伊勢大神宮。內胎藏大日。外金剛界大日。已上中臺。南方高野丹生大明神。寶珠。西方熊野。蓮花。北方羽黑。羯磨。東方走湯權現。圓鏡。

日本是大日如來密嚴花藏淨刹也。四佛安四方。天照大神處中心。此海底印文皆〔各イ〕在大龍之背也。

眞濟面授口傳云々。

權現。或云。異國之神。或見本住之神。是神化無方也。不可令凝滯。以一察萬此謂也。

走湯山緣起第五　延尋記

右走湯山緣起以屋代弘賢本挍合了

明治十年四月以前田家古寫本挍合了　忠部

筥根山緣起并序

原夫扶桑之津。湘江之西。相州西富郡足柄。有勝絶仙窟。傑而爲魁。爾不稱錄其名尙矣。諸天下佳山水者。必有人以稱鍾秀色濃。故有客云。久歷覽千山無勝彼秀峰。天晴則山色擎劔。而室利凝艷容。湖平則水面磨鑑梨也。降毒龍陰崖銘石。波間點釭。雨常帶陽臺暮。雲長閇紫塞冬。高岳苺苔封毘盧長印。幽磵艸木說醫王遺蹤。自地神以來漸記神德。天子公主亦畧叙祖宗。爰人皇第五孝照天皇蓋代之始。聖占仙人漸排駒形權扉。而爲神仙宮。有人云。泰山府君以秀峰爲座。神仙世祿長藏彼岳。因名泰祿山。故孝安天皇獻壽于彼山云々。熟觀四境風致。地跨伊駿相三州。因分其域。而良材立波心。名曰代木。西汀名駿河津。南岸號伊豆地。東濱名相摸津。又云。莅彼境業障懺悔。故稱懺悔津。有釣

魚之制。又當坎有嶺。眞龍馬常遺其蹟。嘶風之聲隔翠雲于咫尺。夙聞穆王詣靈山。斯地亦豈非遊歷之境。因四山牧馬不知經幾歲月耳。次崇神天皇寶祚之砌。利行丈人奏當山之聖域。卽以天旨創建堂宇矣。復乾有燒熱大岡。欲使人厭離穢土現出淨刹之神通智力也。左顧有富士峰巒。雪曝億刧而雲變須臾容。削芙蓉琢水晶。影落湖心則游魚鱍々。或宿雪或戲雲。復艮有峰。府君收諸寶。名稱寶藏岳。左有並肩嶺。長生妙術之靈藥籠之。或笥或盖。故號盖子塚。岸脚有二池。一名精進池。鱗魚之衆類絕焉矣。一名那都奈池。又云兩上池。水煙爲雲。則洪雨充遍界矣。復巽有山。欲降惡鬼之毒風。因號屛風岳。左有嶠名室河津。彌勒尊佛淨刹擬都率宮院。次神功皇后討三韓後。有武內大臣奏云。奉請異朝大神而令祈願天下長安寧矣。卽奉遷百濟明神于日州。奉遷新羅明神于江州。

奉移高麗大神和光于當州大礒聳峰。因名高麗寺云々。泰祿山者。異其名而同其跡。次履中天皇時。彼湖上有五色細浪。卽生寶蓮花。菩薩天人戲樂日經三七日。次安閑天皇時。仙人飛來居山頂。碧雲覆嶺頭。紅霞擁湖心。波現青瑠璃。日月星宿轉于其左右。稱之名東方淨瑠璃世界。次欽明天皇時。高僧來登彼岳。向仙人云。見巘山其形如梵篋。豈非淸涼世界曼殊室利靈場乎。箱是般若實相之根源。故名箱根山。因般般若寺。次皇極天皇時。玄利老人管當山。而改般若寺號東福寺。次齊明天皇時。玄利建一寺于彼嶋。嶋有北面怪岩。自是大悲尊容也。因名補陀洛迦山。又有人云。本朝有過現未三峰。金峰。葛城。志峰三岳也。次文武天皇時。有行者優婆塞。宿彼嶋蘭若。而自室河津巡行于志山之麓。以當山峰自準富士峰以還。天下高僧尤不拜覽矣。同朝吉備大臣幷玄昉僧正奉天意又建

一寺于靈嶋。而名南勝寺。同室河津卓招提號西光寺矣。又涉旬行基菩薩再興般若寺號東福院。復立一寺於嶋。而名南勝院。室河津稱西光院。次聖武天皇神龜五年四月廿一日。吉備大臣再來登彼嶋。復立一寺奉安措大悲尊像。玄昉於室河津造立彌勒尊佛。次行基亦再至般若寺。奉營造等身文殊大士像而號東福寺。又山嶅津川之間有奇偉七石七木名。（別帋記之。）已上七七數。豈不配忉利四十九院等品耶。又前朝元正天皇養老年中。洛邑有沙彌智仁。不知其氏。生一男兒。襁褓匍匐之際。口嫌葷腥。膚辭錦綉。父母大奇之。弁李歳入釋門。至滿廿而受具剃髮。日課方廣經看閲一萬卷。故稱萬卷上人。巡行諸州靈崛。于時高野天皇天平勝寶元年（己丑）萬卷詣常州鹿嶋靈社。建神宮寺。年經八秋而令住持間。一心所冀无他。南无三世十方諸佛大士。願以大慈之智力示有緣佛土。卽有瑞夢。

次天平寶字（丁酉）投錫于祿山。練行脩史（志歟）及三霜。一夕有靈夢。三輩各告云。我等斯山之舊主。權實應化之垂跡也。汝留令脩練云々。三容各異其貝。有比丘形。左執如意寶珠。右掬獨鈷云。我是爲三世諸佛助出世化儀。以汝心清淨。吾今現形矣。又有宰官形。手持白拂云。當來導師也。汝因慇懃吾現此矣。又有婦女形云。我是聞思修大士也。汝以有上求下化悲願故。我今來此矣。三容異口同音唱云。池水清淨浮月影。汝意清潔來三體。三身同共住此山。結緣有情同利益。萬卷夢醒矣。日數不幾。彼靈瑞遠達天聽。卽爲勅願造梵宮。餝靈廟以金玉。而奉崇三容於一社。靈廟各號箱根三所權現。主賓有五尊。駒形能善左之右之。又曩時安閑天皇約靈夢使萬卷造立丈六藥師像。而號根本中堂。（以歟）昔日有神仙。閱彼靈地而栽谷神妙藥。自爾此來。非醫王淨琉璃世界乎。奇花異艸各良醫雖有

其證。人以未識耳矣。岳是毘盧遮那如來全體駒形應化之權扉也。嶋是觀音大士并水仙虛步之幽栖也。前岸有嶠彌勒薩埵靈場也。諸峰之盤窟自室利之所居。金色世界師子返擲怪岩也。又能善者大行普賢大士之垂跡。白銀世界主。因爲他方權跡。爲彼土衆生垂慈不淺。假自熊野山詣彼山挽而留之。可謂尋靈山左右之舊盟矣。或古佛。或薩埵。或神仙。或肉身薩埵之靈場也。或一運步於彼靈場輩。各隨其所願而豈不成就乎。爲求无上正覺者。因爲往古如來駒形。加恣神力令蒙驗德矣。爲求无病息災者。傾醫王寶瓶。而與如意良藥矣。爲祈大行願輩能善現威光。令助其力矣。爲願吉祥如意者。以歷刧不思議大願。如臨淸波月影。應聲隨響。而无不成其願矣。爲願當來三會法筵徒。彌勒大士攜手而无不等其志矣。爲冀破愚脅蒙大願者。室利以利劔。剪破愚闇胸霧。立令人發无漏大智。伏以彼大士者。統眞俗二諦。該權實二教。或圓頂。或五髮。討其事迹。則南天竺梵德婆羅門一子。名長男。釋迦老子。未成道之前。爲七佛詳微旨。專以俗諦應化。然則聖古。利行。玄利。萬卷。各四輩者。眞俗權實。豈非大士纔相乎。佛未生則以俗諦爲衆生應化。漸知有佛則以眞諦令大智發解脫門。猶降一級。和法性靈光。爲聖爲權爲眞爲俗。今以稱神。所謂先佛方便之樞機。衆生濟度之舟車也。故僧俗甲乙。遠近老少。无不詣當墳。往還又半欲絕焉。西汀有驛路。毒龍凌浪拏雲。人民多不免損害。萬卷臨彼深潭。築石臺而令禱。爾毒龍改形。捧寶珠幷錫杖水瓶。乞欲受降。卽咒而繫之以鐵鎖。號其木幹名梅檀訶羅木。厥形九頭毒龍也。所蟠湖水增風浪。山脚長洋々。臺石未礴。巍然波間。于時嵯峨天皇弘仁七年丙申萬卷聖代祈願之聲速達天聽。卽應參朝勅。而半途至三州楊那

郡。冬十月廿四日暮。齡九十七示寂。徒弟拾遺骨而瘞本山。遺誡侶三十有餘。上足有經卷。僧議而云。憑誰可留跡於本山。諸經幷丈六藥師尊像擔之而各令行脚。抵于豆州田方郡新居鄉。佛像經卷肯不扛。因建一堂。名桑原山新光寺。稱其地號小箱根。卽於彼地溫風頻如伏艸。有占者云。當坎大伽藍所祟也。卽奉返佛像于本山者。漸宿霧悉晴。民戶頗平安也。同弘仁八年十月二十四日。九五有奇夢。萬卷託云。我是室利應化。生緣既盡矣。魂還本山。濟度有情群類。而長奉衞護寶祚。帝夢卽醒。因有勅言。令築靈壇於赤坂。而駿豆相三州寄附祿山。爲神費幷萬卷供獻之具。自孝謙天皇至嵯峨天帝七朝。敬心不怠。頃駒形神靈自西剋以來。令詣翟驚怖。于時空海山々巡行次。爲彼神掛數珠于神頭。塞五鈷于神口。而向坤自奉安置之以來。數朝天帝各令渴仰。一天民心无不肅詣。宮殿樓臺恰如布金。四十八間廻廊擇其材。七百餘宇之坊舍輾其甍。或折花供。或摘榤獻者。日以賡夜。次又慈覺巡行諸山之次建一堂。始有常行三昧勤脩。自仁壽元年八月十一日三七日之間脩念佛三昧。以爲深艸天皇弔。次院主職之興廢。具不及錄矣。凡所誌者。淳和天皇天長年中實保僧。仁明天皇承和初惠命僧。文德天皇齊衡年中榮善僧。淸和天皇貞觀比善如僧。醍醐天皇昌泰初知最僧。同延喜年中雲照僧。同五年比叡山惠空僧。（于時修禪寺別當。）又自延喜十九年澄仁僧。久住當山。勤苦勇猛也。州郡貴賤。或寄佛像。呈經卷。又建三所堂閣。可謂中興有天之數。南北廣小六里。東西長百廿餘町。次村上天皇天曆年中有天意。以叡山之職務讓與平信僧。（山興）預國宰。任補座主職。而後平信與叡海。次花王院王子豐覺。自七歲天性聰明也。五大明王前後圍繞。詣熊野山。登金峰山。巡行天下佳山。受叡海讓任

座主職。而住祿山。次一條院登祚刻。平將門仲弟將廣嫡子安慶僧。稟豐覺讓。寬弘三年任祿山座主職。窮大小乘。法燈欲令照破衆生癡闇矣。次駿州富士郡有奇子。時人不知其氏。詣祿山。積功累德。歲經三秋。碎骨剝皮。而造營佛像。書寫經卷。鳥羽太上皇有叡感。令彼上人參朝。先奏祿山神威。卽就當州酒輪鄉四十八町。以天旨令寄附當社。上人委顧後。座主職次序四世的傳。安慶。澄實。源良。行實也。行實自刖歲。恭敬神庭。拜覽佛場。故長寬二年五月十六日造三間四面根本中堂。令安措醫王像。并三所靈壇。能善駒形神殿。同再興矣。次安元二年四月十三日。造三所前殿。東西九間。南北八間。鴛鴦列簷之瓦。翡翠擁扉之簾。宮宇翼々然矣。復壽永年中源賴朝有瑞夢。月旦肅詣神壇。仍令文學於豆州奈古谷建多聞堂一宇。而奉遷當山駒形神。卽爲國家鎭護矣。又往昔田村丸奉東夷遠征之天旨。先詣當社。向山腹秀杉。奉獻表矢。次復源賴義奉追罰貞任宗任之宣旨。先詣舊嘉例而向杉獻矢矣。賴朝欲起義兵。將拜當神壇。而獻表矢于杉。如古例。累世仰神德則有武軍威力。施仁惠則恣戰功餘勇。信心仁惠相全。而破凶器則如秋風敗芭蕉。故諸將欲發義兵。則先无不奉仰社稷之大神。以茲治承四年。賴朝相州早河庄。豆州土倉鄉。同佐野鄉。配三所神社而爲祭祀地矣。同年行實改座主職號別當。翌年二月。有拜堂義。以次賴朝戰勳大願力壽永二年閏十二月廿三日。營造東西三間廻廊。次元曆二年。四十八間悉造畢矣。同年十二月廿九日。駒形前殿所功畢矣。次三間中門一宇。令安置丈六彩畫二王像。次再興常行三昧堂。同令安等身彌陀像。次營建三間法花堂。奉安釋迦三尊。次鑄洪鐘。建樓臺瑞籬紺殿。悉賴朝悲願所及也。次當國在廳武藏權守建三層

素塔。而卽以豆州山木鄕水田卄町為浮屠脩營料。次奥州住侶藤原秀衡緬仰祿山神力。而以銅奉鑄神像。故及武威於九夷外矣。又源義經西征之日。奉納利劍于王扉名薄緣。併施策略于天下。勤雄名于古今。復賴朝為行實以有深期。故令續踵於賴實。故別當職位之班行與他不混其座。専豆相州家人等。可應祿山之命。（條目有證）（別判各別搭載之。）復自為義義朝以還。別當刺史之官。事不預當社領旨有遺文。（別搭在矣。）次復行實願命永實（賴實。後改永實）云。累世雖易改。莫違信心於當神。必有德行。可等神之半德。當山者以萬卷定規式。撰衆徒百廿人。而為供僧。長日勤修別當奉衆徒同參于廟堂。専所祈君王。獻壽高岳萬歲无疆。更所冀武將震威於四夷均功於九州。次願萬民抽丹誠志運一步于神庭者。各々之靈神。區々之衆望。披胸霧而染和光塵。掬智水而滌煩惱垢。立可成二世願力。豈盡仰三所神德乎。

建久二年七月廿五日　別當行實

南都興福寺住侶信救誌焉。

右筥根山緣起以增上寺貞譽大僧正本書寫挍正了

松浦廟宮先祖次第幷本緣起

贈太政大臣大中臣鎌子連鎌足。依功任大臣。鎌足薨後。給食封二千戸。尙如生時。卽被授藤原姓。在一男。右大臣藤原不比等朝臣是也。在其四男。卽立四門也。卽藤傳五卷。已明白。

一男。左大臣武智麻呂。南家。元右大臣。

二男。贈太政大臣房前。北家。元參議民部卿。

三男。參議式部卿正三位宇合。武家。本名馬養。見國史。

四男。參議左京大夫麻呂。京家。

宇合朝臣在八男。

一男。太宰少貳從五位下廣繼。松浦廟。

二男。贈太政大臣正一位良繼。

三男。贈太政大臣正一位種繼。

四男。右大臣贈正一位近衞大將皇太子傅田麻呂。

五男。內舍人繩手。同時難罪。

六男。贈太政大臣正一位百川。

七男。參議太宰帥從三位勳一等藏下麻呂。

八男。參議從三位濱成。

右廟宮先祖幷舍弟殿原案內。爲後代所註申如件。男藤原氏者。何背此四門哉。

本緣起。

右近少將從四位下藤原廣繼。太宰少貳任中盧外難罪。觀世音寺讀師能鑒。執筆筑前介南淵深雄。內竪礒上奧波等。慕主公而傳。

右少貳廣繼朝臣者。孝德天皇御宇臣大織冠太政大臣大中臣鎌子連鎌足御殿戸之孫。正三位式部卿藤原朝臣宇合之第一子也。以天平十年四月授從五位下。拜式部少輔。兼大養德守。同年十二月爲太宰少貳。兼行將軍職。抑件少貳先祖父鎌足御殿戸。奉授君王。功遍天下。名滿華夏。而以彼子孫非可任外庭之傍臣。然而爲令防禦隣敵伺隙之危。以文武竝朗兼將軍職

所令拜任。然將軍少貳。既是天下神妙之聖哲。黠賢奇異之其一也。於彼存生時有五異七能云々。

謂五異者。

一。御髻中。生一寸餘角。諺曰。人者雖賢專角不生云々。今按謂之世間希有。

二。候宇佐玉殿頃年奉仕圍碁。此亦希有。專非人間之事。

三。龍馬出來。少貳任初年冬十二月。郭中聞一音七度嘶之。卽以高直買取令勞飼。專不食例草。只食荒強草。或時食大小楉。又其形體尤奇異也。是知龍駒。仍試櫪中打四杭。勞飼之間。漸々登立四杭。如此經數日。縮足立一杭之。遠近見聞甚爲異體。

四。峙面從者不後龍馬。得作龍馬。午上從都府之務。午後勤朝家之命。如此往返之間。備中國板倉橋爪。立異體男。專不似例人。于時小貳問云。汝居住何處乎。申云。丹波國氷上郡所生矢田弘麻呂也。申云。卽被召奉永主人也。又申云。誰人洛下鎭西朝夕往返給人。其人吾共可有云々。參候更不後御馬之尻。及渡門司關之時。進立御馬之前也。世傳云。龍出來者有峙面。若謂之歟。

五。花洛鎭西朝夕往返。往古今來世人未有此事。奇異甚多。今畧擧五異而已。設雖得龍駒。朝夕往返。身力豈堪乎。仍異常人也。

五異之中。一寸角。神通龍。隨重堪半斤石以五町抛馴。

謂七能者。

一。形體端嚴强軟自在。嗔無敢敵之者。軟卽有羽毛之恩。

二。文籍通達內外融洞。世俗文筆法門奥義悉能了知。莫不研學之。

三。武藝超輩戎道練習。一度括二矢射放。分中二物不異楊由。又十盞挑燈。面脫大刀十燈一時滅之。

四。歌舞和雅聽莫不感。唱囀雅音宛可比淨土天人諸天樂。

五。管絃幽微律呂弗違。一曲之中奏八音。

六。天文宿曜陰陽通達。伎術自在之條。亦勝衆能之中。此業殊勝也。

七。妻室花容人間希有。他人十倍已從夫如水。此希有事也。但依件妻女蒙官責。卽亡身命也。

其能雖多略以明之。

凡此等事以爲希有。是以高野姬天皇御學士右衞門督眞吉備朝臣幷僧正道鏡。又與少貳御近親人々相共語云。其眞吉備苟爲朝使。以去靈龜二年入唐。至于天平二年。經十四年之間。碎

碎分明。研覈數多內典。外書。天文。陰陽。又能搜試人情。今件廣纖朝臣者。猶尚勝於兩朝人也。才學優長武藝茲明。內外通達異能克備矣。此人自然爲物妨歟。朝家蠧害斯而已。如是質碍毀謗之間。以天平十四年冬十一月。被加從四位下。遷右近少將。其故何者。相會彼新羅賊之日。爲我朝有勤公之節。仍所被拜任也。爰高野姬天皇發御不快之氣令候道鏡。其寵罔極。漢宮入內之夜。如星侵月。伉儷成宴之朝。似鷺戲花。帝王之位因斯難惜。後代之謗不敢爲恥。而間天變怪異。種種非一。於是少貳以天平十年勘之頻以上表。其詞云。臣聞。昔者天子有諍臣七人。不失天下。諸侯有諍臣五人。不失其國。是故三王御國。恐有過而不聞。五帝治世。懼忠言之不達。或懸旌進善。或置木召謗。伏惟。陛下乃賢乃聖。克文克武。重華放勛。何得間然。可謂黃河一澄。幸逢聖運哉。但聖人千慮。是有一失。頃少人道長。君子道消。上下道隔。民不安堵。加以昊天誥譴。嗟有丁寧。群臣上下。未聞極言。臣子之道。豈若斯哉。臣家。開闢以來。及至今日。鼎食累世。冠蓋相連。恩賞超於呂霍。榮寵類於伊周。覆載之恩。死而不朽。豈如荊軻感一旦之恩。爲燕報讎。張良思五世之寵。爲韓威秦。若斯而已。雖觸龍鱗。不敢不陳。臣聞。皇之不極。謂之不建。時則昊天示變丁寧。君上若改過修德。轉禍爲福。知而不改天則罰之。然則天平五年及至十一年。幷六箇歲。太白徑天。案劉向五記論曰。太白少陰弱。不得專行。故以己未爲界。未得經天而行。經天則晝見。其占爲兵。爲大臣。爲民。主強國弱。主弱國強。臣勝主。此之攻占可畏也。重以去天平十一年十一月廿七日。太白晝見。在心度日。正午時見未申。上有芒角。最可畏之。穩在申日。心爲天王。海內主故置積率而衞己。五星極此度。而

有變者。主者惡之。雖魏晉末代君臣同床時。而未有太白少陰在心上而晝見也。天平十一年正月廿九日災可畏。大史所知。故不勞陳。二月廿九日夜半。地震蕭牆之內者又詳也。大史所奏。故不煩重。十二年二月。陰獸登樹。奪陽烏之巢也。以五行傳按之。恐有賊人奪君位之象乎。臣愚一矣。讖記曰。胡法滅國亡。頃將者佛法漸頽。最可畏也。何則結集正教之日。十地菩薩四果聖人。咸集一處告誓言。從此結集以後。一言一字不得增減。然則增者失音。減者迷律。傳內律教禁斷著正五位色。而今僧正玄昉。恒著紫袈裟。一頃違正法。令諸僧尼漸染邪道。豈如此乎。又諸如來三乘教中。未曾聞流放僧侶制僧尼有罪。即苦使耳。而今玄昉私制邪律。流放僧尼。內挾舐糖之心。外曜指鹿之威。佛法之賊亦何如斯。又出家人者離出國家如牢獄。棄捨妻兒如著枷鎖。不得畜養奴婢牛馬。酤酒居肉耕作商賈。而今玄昉畜養奴婢。興作舍宅。聚積財寶。釀酒居宍。作賈商侶。一同白衣。法滅之漸彌扇。外道之跡頓起者。一何悲哉。又出家人者一切衆生大導師。故堅制威儀。以導三有。又僧正者佛法綱紀。法興廢緣此一僧。然此僧無頭陀安居種々威儀。而香華飾身愛著女色。宛如白衣無戒有情。又十地菩薩非宍眼之所能見。坐禪靜慮處非嬌欲所緣之境。然詐說現身值遇十地菩薩。矯言身證坐禪道。昔聞大夫汗穢正教。今見玄昉欲絕法綱也。遂今令金身丈六佛眼流淚。矯下賤女子。僞稱彌勒。豈非法滅之相哉。臣愚二矣。金光明最勝王經說曰。由諸天護持亦得名天子。三十三天主分力助人主。若王作非法親近惡人。三十三天衆咸生忿怒心。天主不護念。餘天咸棄捨。國所重大臣。枉橫而身死。惡鬼來入國。疾疫遍流行。若有諂狂人。當失於國位。由斯損王政。如象入花園。然

則頃蕨。賢臣良將。零落殆盡。百姓死散。里社爲墟。疾疫流行。時無虛歲。嗟乎興廢之機。係此一時。可不勉哉。臣愚三矣。我聖朝之爲國也。光宅日本。臨長安而兹明。包括萬邦。對唐王以爭雄。但唐王恒云。天無兩日。地無二主。無大唐則日本。無日本則大唐。豈有東帝〔疑衍〕西帝者乎。遂挾姦心。窺我上國者。歲已長也。最爾新羅虎狼爾。心含會稽之耻。畜勾踐之怨。祈禱群望。搆禍國家者。日亦久乎。北狄蝦夷。西戎隼俗。狼性易亂。野心難馴。往古已來。中國有聖則後服。朝堂有變則先叛。其爲俗也。子報父敵。孫酬祖怨。但以畏陛下之威武。服聖朝之文教。匿爪牙於毛中。戢羽翼於鱗下。縱令朝堂有旰食之急。邊城有烽火之驚〔警歟〕。豈有忍父祖之宿怨。忘子孫之甘心哉。頃者賢臣已沒。良將多亡。百姓零落。里社爲墟。四隣具聞。八表共識。當今練習五兵。振威四海。先評後賞。災變或視。能崇賢選士。

撫慰萬邦。剖却庸稚。簡易庶務。復八柱之已傾。張四維之將絕。然則遠肅近安。民豐國富。太平之基。華戎共欣。康哉之歌。朝野同音。豈可假武棄備。將士解體。修徐偃之仁義。從蹈楚之詐謀乎。兵法曰。天下雖安。忘戰必危。勿恃彼之不來。恃我有備而待也。然則解却兵士。出賣牧馬。抑止射田。若斯事條。未見其可。臣愚四矣。又僧正玄昉。掌中有通天之理。直達中指。傳聞。大唐相師曰。當作天子也。竊負此言。獨窺寶位。熒惑陛下。欺詐后宮。讒絕藩屏之族。令朝庭無維城之固。放逐棟梁之家。令左右絕忠良之臣。屢出酷政。令天下積怨於陛下。舉動大役令萬民疲弊於興作。假武棄備令國家忘戰。愛養死士不啻萬金之資貨。所有行事一同文種滅吳九術。又從五位上守右衛士督兼中宮亮近江守下道朝臣眞吉備。邊鄙傅子。斗筲小人。遊學海外。尤習表短。有智有勇。有辨有權。口論

山市之遺風。意慕趙高之權謀。所謂有爲姦雄之客。利口覆國之人也。亦作玄昉左翼。而蔽陛下明德。臣熟視二盜。契爲比目。雖陛下撫育之恩超同位。而進退周旋猶如餓虎。先知二盜必有大求乎。若不早除。恐貽噬臍之憂也。大公曰。涓水不塞將成江河。兩葉弗去將用斧柯。夫視日月之光不爲明。目聽雷霆之動非爲聰耳。所謂上智者居高堂之上。知日月之次序。見瓶水之中。知天下之寒暑。臣請賜尙方劍。芟夷二盜。省薄苛政。以扶傾運。天下幸甚幸甚。誅無忌而謝吳王。楚子故事。戮晁錯而賜七國。漢帝上策。臣愚五矣。臣聞。鴟鴞山鳥猶惜毀巢。況乎我國家宗廟社稷。與日月競其照臨。與天壤齊其終始。然爲玄昉姦賊吉備凶豎所謀者。豈不哀哉。忠臣義士。以何面目戴天蹈地乎。廷屈師傅朱雲高志。折檻非罪。漢文聖德。幸照盆下。納臣愚忠。所謂負薪之言。芻蕘之事。聖人猶擇。天下幸甚。雖知此旨上表。時帝更不被納件表奏。可讓帝位於玄昉之由。以和氣淸麻呂〔磨歟〕爲勅使。令奏宇佐大神宮。專不憚帝勘〔改歟〕。爲攝神罰。返奏不容受給由帝姬大嗔。攻彼淸麻呂降穢麻呂。斬其手足已配流隱岐國。替々宿衞。爰商客之船遭於逆風。來從管州。密通事由。乘船浮海。得達宇佐宮。俯伏拜表中云。爲攝神冥。返奏不容之由。今遭禍對。唯願神驗。如故還復。悲哀睡入。覺悟之次。手足還生。神助不空。感喜之足。卽依祈念之應。建立神護寺。（在愛宕山。今爲御願寺。和氣氏寺也。）于時玄昉。帝王御恩之餘。驕恣自長。於少貳在京妻室命婦。欲通花鳥之氣。以風多情之志。女已不宜。破白單衣。染翰飛文。落居都廳前。少貳忽以上洛。高聲放言。城中之人普聞爲恐。是擧世云。僧正被殺歟。廣繼朝臣已上才人也。天下俊者也。（一箭射四方。）爲君爲臣。必致凶計。不如却朝庭乃至斷身命。卽天平十二年九月。急

徵發軍兵。以從四位上大野朝臣東人為大將軍。從五位上紀朝臣飯麻呂為副將軍。軍監軍曹各四人幷召集東山。東海。山陰。山陽。南海。五道之軍。總一萬七千人。委東人等。持節討之。又召隼人廿四人。令候御在所。右大臣橘宿禰諸兄勅授位各賜當色服發遣。冬十月。少貳率一萬騎許。在於板倉橋河之側。親自率隼人為前鋒。卽編木為船渡河。于時佐伯常人。安倍中麻呂。發弩射之。隨則少貳却到河西。陳云。勅使誰人御坐。答云。衞門督佐伯大夫。式部少輔安倍大夫御坐云々。良久乘馬出向。官使被到來。再拜承之。常人等所率軍六千人。陳河西。大叫云。逆人豈拒捍官軍哉。直滅身罪及妻子親族者也。常人等云。為賜勅符。少貳下馬又以再拜。卽遁去肥前國松浦郡値加浦。乘龍駒遙欲移隣朝。向馬於海上。不敢進。其時少貳云。以小直買此馬。故不進也。卽削頭棄畢。乃乘船浮海。

得東風往四箇日。行見嶋。船上人云。是耽羅嶋也。于時東風猶扇船。留海中不肯進行。漂蕩已經一日一夜。西風率起。更吹還。提驛鈴一口臨海云。我是大忠人也。神冥豈捨我哉。是賴神力。暴浪暫止。然而黑風彌扇。白浪不平。帆柱之上。種々鳥來居。所謂烏鵲鳩等也。烏者住吉、鵲者香椎。鳩者八幡大菩薩也。遂吹著小値嘉嶋。次還來松浦橋浦、彼御忌日、十月十五日也。其遺體三箇日。懸虛流電。鎭落之所。今鏡宮也。抑廟靈非愚。只依朝祈神冥感趣也。何因名稱鏡宮。雷電歟光照耀。夜之如晝。如此之間。勅使頓滅二三人。洛下外境。奉見其影。奉聞其名。醉氣迷神。死亡甚滋。臣下公卿。妖死又多。諸卿朝議。眞吉備朝臣外。誰人奉祈鎭哉。槐林同門學舘契深。況又祭祀祈鎭。其能尤勝者。以眞吉備朝臣所被擇遣也。奉宣旨以後。令修降伏邪惡之法。途中每宿勤仕河臨解除之祓。又從筑前國宗像郡以圓座四枚宛著手足。御幣負背。徊徊參

來高聲唱中。一日爲師。終身爲父。一字千金。二世恩重。依聞此唱。忿心忽和影。談存生沒後之事等。不敢致害。乘所思計眞吉備勅使下也。我心平和也云々。而間道鏡僧正觸請有驗名僧。登大和國高山。一向勤修北斗七星之法。於殿上宮中所々令修調伏之法。又依託宣。以右近同立檜木造立同身六尺彌勒佛像一體。又書寫金泥法華經一部。託宣云。以雷電檜木。彼引異佛可役造云云。仍以件木令造給。乃以二十口僧爲使。奉擔件佛經。其料夫六十人也。於斯勅使眞吉備朝臣以天平十七年造立廟殿二宇。奉令鎭坐兩所廟。以卽建立神宮知識無怨寺。奉安置佛經。以彼廿口僧定置祈願住寺之僧。以持夫六十人分置宮寺雜掌人御墓守三十人。寺家雜役三十人。至于彼遠忌日者。晝則披存時持佛法華經。講說一乘妙義。夜傳菩薩三聚淨戒。被加行府御誦經。復次天平十九年十二月。騰勅符。爲誓度逝靈始置年分戒者。又同令始脩法華三昧。如此等事。皆

以爲祈鎭也。于時姬天皇寵愛尙甚。件僧正道鏡終被任太政大臣。然後未經幾程。天皇奄然薨給。於大和國添下郡高野山陵是也。卽道鏡奉荷御骨。陵下結廬勤行。而間姧謀事相發。俄被定下下野國藥師寺別當。是尙依先帝厚恩也。而任下不幾頓以死去。世人云。彼藤少將靈罰也。亦卽舍弟弓削淸人。男弘方。弘田等。配流土佐國。而間忽死去。如此過十餘年之間。眞吉備朝臣內心祈念云。尅念若相叶。元可奉事松浦藤廟。所念已成就。以天平勝寶六年拜任太宰都督。卽經奏聞。定行廟宮春秋二季。千卷金剛般若讀經幷最勝會。彌勒會等。其料買取大領田拾伍町施入。在當郡見留加志之庄是也。又神宮無怨寺寄置水田四十町。二十町燈油佛聖幷廟御忌日十五日料。二十町住寺料。願僧二十口之料也。又免田六十町。三十町分置御墓守三十人料。三十町寺家雜役人三十人料也。又其次定置鏡尊廟之號。其故何者。廟靈忿怒之時。御在所方丈。照耀如懸鏡。仍稱鏡山也。又藤少將者。是累葉高

門之亂。勤皇忠臣之烈。仍授尊號。故稱鏡尊廟也。然則雖大惡忿怒。依彼存時之契。終爲眞吉備朝臣被祈鎭給。可謂心爲恩使。命依義輕。尊非斯哉。爰眞吉備朝臣任太宰都督。既歷八箇年之間。建立施藥院。幷始起種々佛事等。凡此朝臣若冠時者。被擇爲遣唐使。擧日本之面目。歸朝以降。廣開賢名。是依佛神之有助也。遂登大臣位。多是藤廟助成云々。書云。玉雖有映。不研專無其光。雖能治之人。無傷時者。曾不見其所治。若於世間無如斯大亂者。誰知眞吉備朝臣忠言之潭哉。然則委尋其奥。大略記之。若於後代宮寺之間。有妙希有事者。詳緇素注加之耳。

群書類從卷第二十六

神祇部二十六

北畠准后親房卿

造殿儀式

一大中小社差別事。

太政官符。　神祇官幷五畿七道諸國司。

應㆓早定㆓置天下諸社大中小神殿。雜舍。瑞垣。珠垣。鳥井幷四至內地町數㆒事。

正一位正三位以上爲㆓大社㆒。

從三位從四位以上爲㆓中社㆒。

正五位從五位以上爲㆓小社㆒。

一大社四至限㆓九町㆒。

三間檜皮葺正殿一宇。（高一丈二尺。在㆓板敷戶一本㆒。）堅魚木八丸。（長五尺。徑九寸。）千木四支。（長一丈三尺。）瑞垣一重。方二丈。（高七尺。）內外鳥居二基。（內一本。高九尺。口徑八寸。外一本。高一丈。口徑九寸。）三間檜皮葺幣殿一宇。（高一丈一尺。在㆓板敷戶一本㆒。）五間草葺拜殿一宇。（高八尺。）五間板葺直會殿二宇。（高八尺。）萱葺板倉二宇。三間草葺屋二宇。（在㆓戶二本㆒。）左右板葺廊二宇。（各高七尺。）五間外舍二宇。（高八尺。）五間廐二宇。

一中社四至限㆓八町㆒。

三間檜皮葺正殿一宇。（高一丈一尺。在㆓板敷戶一本㆒。）堅魚木六丸。（長四尺。徑七寸。）千木四支。（長一丈。）瑞垣一重。（方二丈五尺。高七尺。）珠垣一重。（方三丈五尺。高八尺。）內外鳥居二基。（高八尺。徑七寸。）三間板葺幣殿一宇。（高七尺。戶一本。）三間板葺拜殿一宇。（高七尺。）五間外舍二宇。五間板葺舞殿一宇。（高七尺。）三間板葺直會屋一宇。（高七尺。）

一小社四至限二四町一。
二間板葺正殿一宇。高八尺。在二板敷戸一本一。堅魚木四丸。長四尺。徑七寸。千木四支。長八尺。瑞垣一重。方二丈。高五尺。鳥居一基。高六尺。徑六寸。三間草葺拜殿一宇。高七尺。三間板葺舞殿一宇。高七尺。五間雜舍二宇。同尺。
右被二左大臣宣一偁。奉レ勅。諸國神社正殿雜舍幷四至町數所レ定如レ件。宜下仰二在國司一以二正稅物數一令中造進上。自今以後不レ可二違失一。若有二破損一者。應レ令二社司修造一。無二其勤一者。科二大祓一解二却見任一。官宜承知依レ宣行レ之。符到奉行。

寶龜二年二月十三日

正四位上行左大弁兼右兵衛督藤原朝臣百川

左大史外正六位上阿陪志斐連東人

一造宮制度。
倭姬命世紀曰。皇神詫宣久其造宮之制者。柱則高太。板則廣厚。禮二是皇天之昌運。國家之洪啓一古止波。宜レ助二神器之大造一奈利。即承二皇天之嚴命一天。移二日少宮之寶基一造二伊勢兩宮一焉。
府錄曰。造宮義則大梵天女大倭姬命。承二皇天之敎命一令レ移二飛宮天寶基一而興二神籬於神風伊勢五十鈴原上矣。
麗氣曰。內鳥居。金剛時春天。金剛時夏天。外鳥居。金剛時秋天。金剛時冬天。內者授二秘密灌水神一表二沐浴懺悔一也。外者解二捨祓神一除二穢惡不淨一也。
天口事書曰。二所太神宮。左右東西寶殿。前後不レ同レ儀。內宮陰神。外宮陽神坐也。是春夏象レ陽。長二萬物於前一。秋冬象レ陰。藏二萬物後一。所謂天地之位聖人之法。在レ前在レ後象二四時一。治二天下一以二事理一。此其儀式也。
千木片挾者。陰陽之表也。堅魚木者星象坐。其數十者大日靈尊照二十方一誓也。九者五大成身尊光二濟八洲群生一光明表也。八者八心德明表也。七者七星頂坐守護願也。六者六根明也。五

者中府五魂齊也。四者四德表也。三者天地人表也。一說云。十者十地之位表也。九者極上之位表也。天四德地五行爲九也。九者五方四維。九州因九之故。爲九々八十一數極也。寶基本紀曰。千木者智義也。搏風也。義者仁也。如天。智則靈也。如神。風者氣也。夫天地之間非風則不行不動。故神聖乘風雲而往行。冷然善乍有風竅。是則虛空之中無聲而獨能聞知焉。無形之中能露心矣。實有之所皈。衆之所集至德一大道之竅也。千木片挾者水火之起。天地之象也。故則日天之智義也。片挾者仰以開口。斯受月天之一水利萬品緣也。任水德豐受太神(乎波)號御氣都神也。向上天神開口。而向下地神合口也。是陰陽化德也。堅魚木者。木者衆星像也。奄守天下比於列星也。人氣昇天爲星。善氣則爲善星。惡氣則爲客星也。德善元。客惡起也。鞭懸者天神地祇之風光。衆人之壽命。國之權衡。民之轡策者也。故以爲名矣。御門鳥居。八州之中四方中。以西方爲智門也。故以西方號鳥居也。大智清淨心緣也。謂陰陽之原。乃遂於大明之上出入於窈冥之門。而君臣上下令逍遙淸淨之宮殿焉。瑞垣玉垣荒垣者。天四德。地五行。萬象大位。五友皆備矣。惣天地與人形。人體與寶舍。雖異其名而其源一也。

右造殿儀式非無疑然傳世久仍姑載于此矣

八幡御幸次第 非レ進レ之。雅俊朝臣加役付二送之一。

前三箇日御精進。門々立レ札。

當日未明出御。御淨衣。被レ用二御輿一。

近習公卿以下着二淨衣一供奉。

直幸二馬場殿一。

先奉レ仕二御禊御裝束一。

其儀。馬場殿西面卷二庇御簾一。階間敷二小莚二枚一。東西行。其上供二高麗端半帖一枚一。北面。爲二御禊御座一。六位判官代役レ之。西庭當階間去二五許丈一立二高机一基一。下敷レ薦。如レ例。倚二白妙御幣一七捧。寬元六捧。文應加二若殿一。其東昇二立朱塗辛櫃一合一。納二金銀幣一。南北行。幣案南立二八足机一。其南置二軾一枚一爲二陰陽師座一。飯殿南頭引二立神馬一。額付レ鈴結二木綿一。御厩舍人引レ之。

奉行院司覽二日時勘文一。入レ筥。

先觸二公卿院司一。

次奏下如レ常。

剋限着二御御座一。赤色御袍。有文御帶。

四位院司供二御笏一。

御隨身二人將曹。引二立神馬於御幣案北頭一。北面。

次陰陽師着座。

四位院司三人。參進。取二白妙幣一立。

次供二御祓物一。

陪膳。四位院司。

役送。五位院司。

御禊始間。廳官進二沃清酒一。

次御禊了。陪膳人降二西階一進二庭中一。取二大麻一傳二供之一。

次撤二御贖物一。如二供儀一。

陰陽師退出。

御拜兩段。令レ向レ北御。

返二賜御笏一。院司持二參御盃一。自二馬場殿一出御之時。或御令レ持二御笏一御。但大治記云。臨御着座之期可レ供之由有二本院仰一者。

院司在幣於机退去。
今度南出御
次入御。近例或直出御。今度若可為此儀歟。
引出神馬。
撤御幣等。
今度无此儀
次撤御禊御座尋常御座。直出御者不可及此儀。
次公卿列立西階南腋。東上北面。
殿上列立飯殿前。南上東面。御隨身褐衣垂袴壺胡籙。候西階
北腋。東上南面。
清雅朝臣
次院司近將參進。給御劔。降西階候同南腋。
次出御。於階一級着御御沓。
別當
其人公卿院司(別當)。獻御沓。藏人(藤原季敦)傳之。　其人西園寺大納言候御裾。
其隨身不稱警蹕。
此間公卿侍臣跪地。
次御參宮。殿上人御隨身等前行□候樓門南壇下。御劔役人候御後。公卿扈從。
先是舞殿中央傍犬防立案。倚立白妙御幣。
廳官役之。案南敷祝師座。宮寺儲之。同第三間敷小莚
二枚。其上加高麗端半帖為御拜御座。廳儲之。

着御御拜御坐。
役人賜御沓。乍持候樓門內邊。御劔役人候
樓門西腋。其人奉刷御裾退。
次供御笏。家相朝臣供之藏人傳之(廳官傳之)。若自元令持御者非此限。
次四位院司二人。資行朝臣雅俊進取白妙御幣立。
次同院司一人家相朝臣取金銀御幣。六本。進立舞殿東砌。
授御幣於公卿院司堀川大納言之後。加立案下取白妙御
幣立。
公卿院司取金銀御幣入御座間北頭跪進之。
御幣末在御座右。搢笏左廻退。候御座東南砌邊。
御拜兩段再拜。御笏令置御座左御。
御拜了。役人參進。賜御幣。進立御座西北第一
間南頭。召祝師給之。授了。跪搢笏退入。
院司等置御幣退去。
俗別當須置御幣申祝。
次申返祝拍手。尊儀應之。陪臣又應。
祝師退去之間。主典代給祿。於榊樹下給之。

院司等各相分付レ社。若宮。武内。高良。

祝間且廻ニ神馬一右遶八匝。但近例或三度畧。(今度三度也)御隨身二人引レ之。

次入ニ御西廊御所一。自ニ北面一入御。其人候ニ御簾一。

院司賜ニ御笏一。

役人獻ニ御沓一。入御之後。藏人給レ之。近令レ候。

次撤ニ御拜御座一。藏人(藤原季歟)役レ之。

公卿着座。西上北面。

引ニ上神馬一。從ニ南樓階一昇レ之、入レ樓出ニ舞殿西庭一。神人受ニ取之一引ニ入北方一。

次里神樂。宮寺僧座。但近例不レ及ニ着座一。終頭給レ祿。巫女三人。各八丈絹一疋。鳴人五人。各布一反。已上主典代取レ之、

次御經供養。

宮寺奉ニ仕堂莊嚴一。其儀。舞殿中央間立ニ禮盤一。

其前立レ机備ニ香花一。同西邊敷ニ高麗端疊一枚一。

爲ニ導師座一。東邊敷ニ紫端疊二枚一。題名僧爲ニ僧綱一者可レ爲ニ高麗帖一。

其前立ニ机三前一。分ニ置御經一。爲ニ題名僧座一。

御導師參上參上、自ニ西方一着座。

題名僧建久四口。寛元文應各三口。自ニ東方一參上着座。

依ニ奉行人氣色一導師着ニ禮盤一。說法了歸ニ着本座一。

賜ニ布施一。

導師。

被物一重。參議(二條宰相)若散三位取レ之。

裹物一。四位院司取レ之。

題名僧。

裹物各一。殿上人等(家相朝臣仲高資冬)取レ之。以上各自ニ東方一置レ之。

次御誦經。

舞殿東庭。傍ニ犬防一敷ニ小莚一。立レ案積ニ賵嚫物三百段一。加ニ諷誦文一。執事別當加署。

導師僧。執行權別當宮寺。參上。啓白了給ニ布施一。五位院司(資冬)取レ之、

此間撿挍別當着ニ東廊座一。

次職事藏人左少弁依レ召參ニ進簾前一。奉ニ勸賞事一。資俊進ニ公卿座一仰ニ上首人一。堀川大納言其人召レ弁仰レ之。弁仰ニ其人一。

次賜ニ寺司祿一。各大褂二領。

撿校。　別當。
已上五位判官代（仲高　資冬）取之。
次還御馬場殿。
先是。公卿降南階列階東邊。北上西面。侍臣列同
西方。隨御步前行。御隨身參進階下。
昇自馬場殿西階御。
御隨身發前聲。役人給御沓。其人候御簾。御
劔進入簾中。

平野行幸次第

前一兩日奏宣命草。有召仰等事。近代多在當日。
前日例。治安二。
當日例。承保三。寛治四。天永三。大治四。承安元。治承三。
宣命趣事。
寛治天永其狀有相違。承安有沙汰。被用天
永例了。
先有御湯殿事。
次神寶御覽。其儀如例。
刻限諸卿參着仗座。
召仰之後帶弓箭。
仰留守人。
當日有召仰者。其次仰之。
上卿承仰仰外記。納言參議之間一人。弁一人。
弁召其人仰之。承保三土記如此。舊例。見參
之中。以下﨟爲留守。寛弘元小記云。以行成

卿為留守。（下臈。）治安二。（同記。）定頼雖下臈為行事。仍以廣業為留守。

公卿列立。

近衛將監昇出太刀契。

長元左將監不候。仍右將監許昇之。

寄御輿。（懸花。）無鈴奏。

上臈次將開輦戸安御劔。

乘御。　無警蹕。

候劔璽。次將取御草鞋給東竪。

次將取御璽安輦。閇戸退下。

執柄於東階下着靴。（乘車時不着。）

此間公卿前行。騎馬。

次大將前行。（不仰御綱。）

乘輿出御。

御路事。

治安二。出建春陽明等門。西門未造畢。仍出東門給。一條西行。自□野寺西着御社頭。長久元。承保三。經常住寺西北着御社頭。天永三。經西堀河至社頭。本經其西路。今度依香隆寺□周堀河北。後例皆如此。承安元。一條西行。經北野社前。（諸司不下馬。）至西堀河北行。着頓宮。治承三。北野伏禮。大將軍堂等前以竹塞之。諸司幷公卿悉乍騎馬渡北野前。御輿弁近衛陣令避給。承安同令避給。

執柄騎馬供奉腰輿後。（或乘車。）

車駕着御社頭。

於大幔外神祇官獻大麻。雅樂奏立樂。

南鳥居以南八許丈。（馬場以東當巳方。）立宇合部屋二宇。西庭引廻班幔。西面有幔門（立屏代幔門）南北各有幔門。（屏代。）但無件蔀屋五間中央間立輕幄。其中敷繧繝帖二枚。（南北行。）其上敷東京茵一枚。（西面。）其北間敷高麗帖一枚。其上敷高麗半帖一枚為御拜座。（西面。）北第一間西邊敷兩面帖一枚。（南北行。）為邊鋪輕幄（當以下恐有誤）南面敷繧繝帖二枚。其上敷同帖一枚為御座。

（南北行。）輕幄前敷兩面帖一枚。爲關白座。（南北行。）南一
間南邊敷兩面帖二枚。（東西行。）南北東三方立渡大
宋御屛風數帖。其後引隔軟障。後屋爲女房候
所。御所南去數丈。立五間板屋一宇（卯酉妻。西上北面。）爲
公卿座。立大盤。兼居饗。其南立幄爲弁少納言
外記史座。（西上北面。）兼居膳。外記北面史南面。（承安。橫座儲弁少納言座。）
先是。立下馬標。
御所一許丈。立五位已上標。（樂屋前。）其南八段許。立
位標。
供奉上下各下馬。依次列立。
公卿列立御所南幔中坤角。（東上北面。）左右大將入
西幔門立。左右（右北。左南。）衞門列立西幔外。（北上東面。）兵
衞立其北。
御輿寄御在所西面。（御輿向南。諸卿居地。）
久安。（稻荷。）宰相中將敎長取之。大夫史師經傳
之。或云。納言取時。五位史取之。（大弁宰相同之。）他參
議立。史傳之。如舊記者。納言傳之。參議大
夫史取之。但近代多六位史取之云々。
殿上人取舞人挿頭花。
於北幔外給之。治安小記云。契弁定賴取挿
頭。先之中納言取之。承安。大納言上卿之時。
中納言可取歟。而天永。大納言上卿時。行事
宰相取之。治承。宰相中將入西幔門。挿勅使
冠。經本路退下。可被入南幔門歟。可謂失
歟。
次返給御笏。
上卿起座。參社頭。（出西幔門。）
治安。（行親記。）先御幣。次神寶。次神馬。次使（內記持宣命相
從。）次行事弁。次舞人陪從。今案神馬如何。若
稱舞人馬歟。
此間主上入御。脫御裝束。
次撤神寶。
次以職事仰社司賞於上卿。

御厨子所儲レ之。顯隆陪膳。
山城國獻物。近代付二御厨子所一。
執柄仰二職事一。令レ辭二社頭事一。或遣二隨身一。
社頭事了。上卿歸參奏二御願平安遂之由一。
寛治。按レ記。上卿已下渡御前。撤二御前幔一之後也。天永。雅兼。上卿參入路經二幔西南一。大治。馳二于御馬間一。上卿歸參。承安。上卿歸參立二南幔門外一奏二事由一。舞人留二幔外一。
主上更着二御御裝束一。
此間撤二御所前西幔一敷二公卿座一。
當二御所南一敷レ之。北上西面。大幔所司幔共撤レ之。
馳二御馬一了。如レ本立。
大治。依二雨儀一御所北敷二公卿座一。東上南面。宗能記云。可レ敷レ南歟云々。
入レ夜者。主殿官人立レ門。以二藏人頭一召二諸卿一。
承安。五位藏人光雅召レ之。
公卿着座。乍レ着レ沓自二座後一着レ之。

執柄候二簾中一。
舞人上二御馬一。爲レ先二上﨟一。於二社門外一騎馬南行云々。
大治。上卿歸參以前馳二御馬一。
馳二御馬一。入レ夜者所々立二柱松一。
長久。公卿給レ祿之後馳二御馬一。大治。依二降雨一公卿着座以前馳二御馬一。
公卿起座着レ靴。
次撤二公卿座一。如レ本引レ幔。
此間當座上卿奏二見參一。
於二幔門外一付二職事一。
次侍從一通。非侍從一通。六位一通。御覽畢。返二給上卿一。下二外記一。
賜二公卿祿一。
關白祿。依レ命□藏人頭取。執柄祿。天永。承安。治承。行事辨取例。大治。宗能記。雖レ之。公卿祿。殿上人取レ之。
次公卿取レ祿列二立前一。北上東面。
治承。公卿不レ懸レ祿。

左右大將立二左右一。
寄二御輿一。
乘御。安二劔璽一。
大將始稱二警蹕一。
乘輿出二御幔門一。
大將前二幔門外一仰二御綱一。御在所幔門也。
車駕還宮。
治安記云。前陣違レ路。依レ暗歟。可レ立二柱松一歟。
還二御他所一例。
天永三。自二大内一出御。還二御六條殿一。是永保三。
法勝寺御塔供養時。出二御六條殿一還二御堀河
院一例也。
寄二御輿一。下御。如レ例有二警蹕一。
次鈴奏。
正曆。亥二點。還御。有二鈴奏名謁警蹕等一。
名謁。
還二御本殿一。

前後次第事。
正曆。上卿歸參。次公卿着二御前一。次給レ祿。
治安。上卿歸參。次奏二見參一。次給レ祿。次山城國
獻物。次諸卿被レ祿。列立。次還御。
長久。上卿歸參。奏二見參一。給レ祿。馳二御馬一。還御。
承保。二東。上卿歸參。次奏二見參一。次給レ祿。次敷二
公卿座一。卽着。次馳二御馬一。次還御。
寬治。上卿歸參。諸卿着座。馳二御馬一。給レ祿。還
御。
天永。中右。上卿歸參。公卿着座。上二御馬一。此間
立二柱松一。次馳二御馬一。次給レ祿。次還御。
同。雅兼。上卿歸參。此間敷二公卿座一。卽着。次上二御
馬一。次馳。次奏二見參一。次祿。次還御。
大治。中右。馳二御馬一。上卿歸參後。可レ馳レ馬。依二雨降一被レ急之故也。次上卿
歸參。次奏二見參一。次還御。
同。中内記。馳二御馬一。次公卿着座。次上卿歸參。次
奏二見參一。次祿。次還御。

承安。(賴業。)上卿歸參。公卿着座。馳御馬。奏見參。祿。還御。

神祇官舁立神寶。(御幣机北。神寶南。)

天永三。(殿曆。)奏宣命之間。舁立神寶御幣等。

長久元。(土記。)了起座。至幔頭令奠御幣神寶等。

大治四。(中內記。)置神寶之間。衞士等誤猥入幔中。直欲置之。頭弁雅兼追出了。運平文漆案二脚。上置神御裝束二具。(各有錦蓋入褁。)次細辛櫃蓋中同置神寶。重辛櫃身舁並置案南頭。(或云可置前。)行事弁又令舁入辛櫃二合。取案上神寶御裝束。(自本入蓋。)令重置身。此事如何。違例也。而頭弁示不可然由。猶如本令置案。令撤辛櫃身了。行事弁頭第准人說乎。

承安元。(賴業。)內藏寮官人立案二脚於東第一薦上。以御幣四捧。(以赤布褁之。無志手。)倚于案上。(每案二本。)次神祇官舁立平文高机二脚於中薦上。(南北行。)置神寶二具於其上。(各有錦蓋一流覆其上。北机有女躰御裝束。南机有法躰御裝束。)西薦上列置朱漆細櫃五合。(北三合各納銀劍一腰。有平緒。南二合納弓梓箭金銀御幣串等三本。盛櫃蓋。)

治承三。同之。

大臣左右大將不參。

寬治三二十七巳刻。行事左衞門督(家忠)參弓場。以余奏宣命草。次余仰行幸召仰由於藤大納言。(今日一上卿也。行事上卿。昨日可行召仰由雖執申。任近例當日被仰殿下仰也。)

無大臣兩大將例。師平注申。

長久元十二月。平野。永承六八六。北野。

公卿數少不置留守例。同北野。

承保二。賀茂。此日右中將仲實。(頭中將同弁不參。)御袴陪膳供御笏。而同廿三日。大原野左少將國信陪膳。藏人少將俊忠役送。先以俊忠令供御笏。余中言此事。

承安二年。稻荷祇園行幸日。左大將(師。)奏見參之時。三通之內。六位見參不奏。返賜外記。

是以二大二條殿之例一。先人不レ奏給二。仍今夜不レ可レ奏。卽尋二是御一門之御作法一歟。命云。至レ奏二上卿一者。知二此秘說一人雖レ誰人一可レ用二此說一歟。上卿歸參聞二召使追一前聲。召二召使一被レ仰二外記見參可レ持由一。卽入二幔門一持參。向二座下一扳取披見。次侍從非侍從見參二通卷二籠點紙一枚一賜レ之。令レ挿レ杖。縦。以二六位見參一返二給外記一。不レ可レ奏。可レ懷中一之由。外記懷中。次起座至二南幔門一給レ予。先レ是起座了。付二頭中將一奏レ之。返二給外記一。次撤二御所幔一。仍不二歸着給一。

神馬引付

一太神宮內外。爲二若君樣御元服御祈禱一。神馬二疋河原毛。栗毛。可レ牽進一之由所レ被二仰下一也。依執達如レ件。

文明五年十二月十九日　伊勢守

太神宮御師

一石淸水八幡宮爲、、、、同前一疋。

石淸水八幡宮御師

一賀茂社、、、、、、、、、一疋。

、、、、、御師

一松尾社　一疋。

、、、、、御師

一平野社　一疋。

、、、、、御師

一稻荷社　一疋。

、、、、、御師

一春日社御太刀。鳥毛。　一疋。鹿毛駮。
一日吉社　一疋。
一祇園社　一疋。
一北野社　一疋。
一今宮社　一疋。
一鴨社　一疋。
一吉田社　一疋。
一御靈社　一疋。
一鎭守八幡宮　一疋。
一神祇官　一疋。
以上自傳奏廣橋殿御注文書。
同十八日奉之。調御送狀。悉以宛所者御師也。各請取到來之。
一三條京極寺八幡御元服三月六日まいる。請取有之。　一疋。鹿毛。但此一疋。六年
同六年分。
一三條京極寺八幡宮　一疋。月毛。

正月八日恒例也。
一石淸水　一疋。河原毛。
同十七日
一春日　御太刀持。　一疋。月毛。年始恒例。
同十一日
一石淸水爲御方御所樣御祈。　一疋。黑。
後五十六
一三條京極寺八幡　一疋。鹿毛。五月分也。
五月八日但六月十四日。以宮崎奉調之。
、、、、、御師
一譽田八幡宮爲放生會神馬　一疋。鹿毛。
八月十五日
、、、、、、御師此一通。八月十一日以宮崎奉之。自畠山殿御申候。
一三條京極寺八幡宮　一疋。青毛。
十一八恒例。
一北野宮寺　一疋。河原毛。

二廿五
一今宮社　一疋。黑。
三六
文明七年分
一京極寺八幡宮　一疋。栗毛。
正月八日恒例。但十八日以₂横山雅樂助₁御送狀事奉ㇾ調ㇾ之。
一石淸水八幡宮　一疋。栗毛。
正卅　年始恒例。日付不定。
一京極寺八幡宮爲₂造營₁御奉加。　一疋。月毛。
三廿
一京極寺八幡宮　一疋。栗毛。
五八
一譽田八幡宮爲₂放生會₁神馬　一疋。栗毛。
八十五十二日以₂與一殿₁奉。則調上ㇾ之。
、、、、、御師
一京極寺八幡宮　一疋。栗毛。河原毛。
八八但九月九日調ㇾ之。以₂宮崎₁奉ㇾ之。

一鎭守八幡宮　一疋。鹿毛。
九十七
一今宮社　一疋。黑。
九十七
一石淸水八幡宮　一疋。月毛。
九廿四
文明八年。傳奏より直に出候。
一春日社節分。御劍持。進上。　一疋。黑。山名殿垸飯御禮
正二
一京極寺八幡　一疋。月毛。布施彈正出仕
御禮進上。正十六日。
正八
一春日社年始分。恒例。御劍持。進上。　一疋。河原毛。正廿赤松殿
正十一
一石淸水八幡宮年始。恒例。　一疋。月毛。

正廿二

一新羅社ニ爲ニ御方御所樣御矢開御祝御祈禱ニ神馬一疋鴾毛。可ニ牽進ニ之由、、、、、

文明八二廿八

新羅社御師此月毛。小笠原民部進上也。

一今宮社同前　一疋。鴾毛。畠山殿御進上。

一太神宮内外　二疋。栗毛。一色殿。河原毛讃岐殿。細川

一石清水　二疋。栗毛。細川右馬頭殿。黑。赤松。

一同　先例云々。

一御靈社　一疋。栗毛。山名殿。

一北野　一疋。治部大輔殿。

一今宮社　一疋。黑。以ニ三上ニ奉レ之。

五六明日爲ニ祭禮ニ

一祇園爲ニ御方御所樣ニ　一疋。河原毛。以ニ松永又七ニ奉レ之。

五十二

一譽田八幡宮爲ニ放生會ニ神馬　一疋。栗毛。

八十五此一通九月六日貴殿御自筆。

譽、、、、、御師

一太神宮　二疋。鹿毛。栗毛。

十一十六

一石清水　一疋。瓦毛。

同日

一京極寺八幡　一疋。瓦毛。

八八但十一十七まいる。以上三通以ニ宮崎ニ奉レ之。

文明九年。

一御靈社公方樣御顔御かぶれの御祈也。御太刀。糸卷。　一疋。月毛駮。

正月五日

一幡枝八幡同前。　一疋。鹿毛。

同六日

一石清水八幡宮爲ニ年始御祈禱ニ　一疋。栗毛。

正卅

一京極寺八幡　一疋。月毛。

正八恒例。

一譽田八幡宮爲二放生會一神馬　一疋。鴾毛。可二

牽進一之由、、、、、

八十五

譽田、、、御師以二杉江一奉レ之。

一京極寺八幡宮　一疋。鹿毛。

、、五八

一今宮社　一疋。鹿毛。

、、五七祭禮。

一同社　一疋。栗毛。御方御所樣正

御誕生日御願也。

十一月廿三日

文明十年。

一京極寺八幡　一疋。月毛。

以二宮崎一奉レ之。五月三日。

正月八日恒例。

一石清水八幡宮　一疋。栗毛。同前。同日。

正月廿五日年始之儀也。

一今宮社　一疋。河原毛。

以二杉江一奉レ之。五月二日。

五月七日祭禮。

一今宮社　一疋。栗毛。

以二宮崎一奉レ之。五月三日。

三月三日

一太神宮神馬一疋。河原毛。印雀目結。自二御方御所樣一可二

牽進一之由所レ被二仰下一也。仍執達如レ件。

文明十五廿七大御所樣御かぶれにつきて御祈禱也。

、、、、、御師

一石清水八幡宮　一疋。月毛。印同前。

同前。

同日

、、、、、御師

一御靈社、、、、、、、、、、、、一疋。栗毛。印同前。
同前。
同日
、、、、、、御師以上三通貴殿御前にて調レ之。
一就二鴨社御遷宮一神馬　一疋。鹿毛。印雀目結。
四月十一日遷宮日也。
、、、、、、御師號二河原口一。以二杉江一奉レ之。六月十九日調レ之。
一春日社　一疋。鹿毛。
就二御師刑部大輔師淳千日參籠一。以二杉江一奉レ之。
一就二天下靜謐之儀御祈禱一太神宮神馬二疋。
栗毛。印雀目結。鴾毛。印同前。可レ牽二進之由。所レ被二仰下一也。仍執
、、、、、
八廿一
太、、、、御師
一太神宮神馬　二疋。河原毛。印兩目結。
黑糟毛。印雀目結。
九朔　以上二通。次郎四郎に渡レ之。

一御靈御方御所より　一疋。河原毛。印雀目結。
十廿八
一今宮社御方御所樣。正御誕生日御祈一疋。月毛。
十一廿三
一爲二石清水八幡宮放生會一神馬　二疋。月毛駮。黑。
十一十四
、、、、、御師
文明十一年。
一石清水八幡宮　一疋。栗毛。御
方御所樣より。
正廿六
、、、、、、御師
一京極寺八幡　一疋。黑。
正八　爲二年始御祈禱一。
一石清水　一疋。鴾毛。
正廿　年始分也。以上二通。三月廿二日調レ之。
一今宮社　一疋。鹿毛。印雀目結。

五七祭禮。

一鴨社　一疋。栗毛糟毛。

正十六　御送狀日付如レ此。五月十九日にまいる。

、、、、、御師

一市宮社西宮兩宮内。　一疋。鹿毛。

八廿一

一石清水　一疋。鹿毛。

御方御所樣よりまいる。御もう〳〵によりて也。

後九廿三

一今宮同前御方御所より。　一疋。月毛。

後九廿三

文明十二年。

一石清水八幡宮　一疋。栗毛。

正月十三日

一春日社年始。　一疋。河原毛。

正廿八

一鴨社　一疋。黑。年始分。

正十六　但六朔調レ之。鈴木。

一三條京極寺八幡　一疋。黑。

五八　同日調レ之。

一祇園　一疋。月毛。

六七祭禮。

一春日節分。　一疋。河原毛。印雀目結。

十二廿七

一稻荷今度御劔出現之御祈謝。　一疋。栗毛。

十二廿七

一賀茂同前。　一疋。佐目。

同日

文明十三年。

一石清水八幡宮　一疋。栗毛。

正十九舊冬御劔出現御祈謝。

一平野御劔出現之御祈謝。　一疋。栗毛。

正廿三
一春日年始。　一疋。河原毛。
正廿五
一春日社　一疋。栗毛。
二五恒例。
一三條京極寺八幡　一疋。月毛。
正八但六廿五被レ引ニ進之一。恒例。
一三條京極寺八幡　一疋。鹿毛。
五八恒例。但八十被ニ引進一。
一石清水八幡宮　一疋。鹿毛。印雀。
八廿七但爲ニ年始御祈禱一。御送狀。
、、、、、御師
一京極寺八幡　一疋。河原毛。
八々但八廿八調レ之。
一同　一疋。鹿毛。
十一八但正廿六調レ之。
文明十四年。

一春日節分。　一疋。栗毛。
正八
一同社年始。　一疋。河原毛。
正廿六
一石清水　一疋。鹿毛駮。
五十九
一三條京極寺八幡　一疋。栗毛。
正八六月四日雖レ被レ引ニ進之一。依レ爲ニ恒例日付一如レ此。
一同前　一疋。栗毛。
九八文明十五二十五被レ引ニ進之一。以ニ藤田小五郎一奉レ之。
一今宮社爲ニ御方御所樣正御誕生日御祈禱一　一疋。河原毛。印雀目結。
十一廿三日付如レ此。但翌年四月廿一日被レ引ニ進之一。以ニ藤田小五郎一奉レ之。
文明十五年。
一石清水八幡自ニ御方御所樣一　一疋。黑。印雀目結。
文明十五三廿
一今宮社　一疋。鴾毛。印雀目結。
五七祭禮。

一石清水八幡宮　一疋。黒。印雀目結。
五八年始。
一太神宮　一疋。青毛。印雀目結。
一八幡　二疋。鹿毛。印雀目結。
同毛。印鍬形。
一新羅　一疋。河原毛。印同。
一御靈　一疋。鹿毛。印同。
一北野　一疋。鴾毛。印同。
一祇園　一疋。青毛。印同。
一多田院　一疋。鹿毛糟毛。印同。
一今宮　一疋。月毛。印同。
一京極寺八幡　一疋。月毛。印同。
一壬生地藏　一疋。月毛。印同。
以上十一疋。伊達進上御馬也。御送狀十月十五日。
一三條京極寺八幡　一疋。栗毛。印雀目結。
十一八　同十六年八月六日。以ニ蜷欠一奉レ之調進。兵庫殿御送狀也。
文明十六年

一春日社　節分。　一疋。蘆毛。印雀目結。
正月朔日分　御送狀。文明十五廿五調ニ進之一。
一春日　年始分。　一疋。鹿毛。印庵目結。
九十　兵庫殿御送狀。
一京極寺八幡　年始分。　一疋。鹿毛。印雀目結。
此一通。以ニ掃部一奉レ之調ニ進之一。
一京極寺八幡五月分。　一疋。黒駮。印雀目結。
八十六　同前。以上兩通。以ニ木村六郎一奉レ之。
十一
文明十七年。
一八幡　年始。　一疋。鹿毛糟毛。印雀目結。
正十六
一春日　一疋。毛同前。印同前。
二十二
一今宮　一疋。月毛。印同前。
五七祭禮。
一三條京極寺八幡　一疋。黒。印同前。

九四 以上四通。兵庫殿御送狀。九月五日調ㇾ之。以ニ蜷八三ニ奉ㇾ之。

一石淸水八幡宮　一疋。黒。

十一十三御使蒲生。

文明十八年。

一今宮　一疋。栗毛糟毛。

五七祭。兵庫殿御たくり狀。御使古市次郎。

一東大寺八幡宮　一疋。栗毛。

八六 備中殿御たくり狀。御使燭阿彌。

東、、、、御師。室町御所樣よりまいる分。兵庫殿御送狀。

一石淸水八幡宮年始。　一疋。青毛。印雀目結。

文明十六七六同十七日以ニ木村六郎ニ奉ㇾ之。

文明十七年。

一石淸水八幡宮年始。　一疋。栗毛。印雀目結。

八月八日 兵庫殿御下書。御使淵田。此間召御馬也。臨時云々。

文明十九年。

一三條京極寺八幡宮年始。　一疋。鹿毛。印雀目結。

正八

、、、、御師　一疋。鴾毛。

一春日社 年始。

正十六

、、、、御師

一石淸水八幡宮　一疋。葦毛。印雀目結。

二十

、、、、御師 以上三通。備中殿御送狀。御使古市彈正。二月十日。

一太神宮　一疋。鹿毛。印雀目結。

三八

、、、、御師 備中殿御送狀。御使新見又六。十三日。

一春日社　一疋。月毛。印雀目結。

四十二

一太神宮　一疋。月毛。印同前。

同日 此兩通。備中殿御送狀。御使木村。

一鴨社　一疋。河原毛。印雀目結。

四十三 備中殿御送狀。御使木村。

一廣田社　一疋。栗毛。印同前。

四九

一石清水八幡宮　一疋栗毛。印同前。

四十三同前。

一同社　一疋河原毛。印兩目結。

同日以上三通。備中殿。御使木村。

一就愛宕護社神事。　一疋青。印雀目結。

四月廿九日

一野宮社神事　一疋鹿毛。

同日同前以木村奉之。

一今宮社　一疋栗毛。印兩輪違。

五月七日今日神事也。御使八郎三郎。

一今宮社　一疋鴾毛。印雀目結。

五月廿八日御使同前。

一祇園社　一疋青毛。印雀目結。

六月七日蜷三右。

長享二年。

一就愛宕護社神事。　一疋黑月毛。印雀目結。

四月廿七日

、、、、、御師

一野宮社同前。　一疋青毛。

同日同前。河井。御使蒲生。

一三條京極寺八幡年始。　一疋青毛。印雀目結。

九月十六日

、、、、、御師

一石清水八幡宮　一疋青駮。印雀目結。

九月廿七日

、、、、、御師

一今宮社　一疋黑。印雀目結。

九月廿七日

長享三年。

一愛宕社神馬　一疋鹿毛。印雀目結。御使蓬。

八月七日

、、、、、御師

一野宮社神馬　一疋左目。印庵目結。

同日同前。

延徳元年。

一御靈社神馬（東山殿様御中風氣御祈禱也）　一疋。栗毛。印雀目結。

十月十日　御使木村。

延徳二年。

一石清水八幡宮爲年始御祈禱。　一疋。鴾毛。印雀目結。

正月十六日　蜷八郎三郎御使。

、、、、、御師

延徳二
一春日社爲年始御神馬　一疋。河原毛。印雀目結。同。

一愛宕護社御神馬　一疋。印雀目結。

四月十四日　御使木村方。

、、、、、御師

延徳二
一野宮社御神馬　一疋。印兩目結。

同日　同。

、、、、、御師

延徳二卯月廿八日就御代初まいらせられ候也
一太神宮御神馬　一疋。黑毛。印井文字。

同日
一八幡宮　一疋。鹿毛。

同日
一賀茂　一疋。雲雀毛。

同日
一松尾　一疋。栗毛駮。

同日
一平野　一疋。鴾毛。印雀目結。

同日
一稲荷　一疋。河原毛。

同日
一春日　一疋。鴾毛。印雀目結。

一今宮社爲祭禮。　一疋。鴾毛。印雀目結。

、、、、、御師御使太田五郎左衞門尉。

五月四日

、、、、、御師

延徳二
一石清水八幡宮就御宣下御祝儀。

御神馬五疋。鹿毛。印片車。

黑毛。

鹿毛。印雀目結。

青毛。印雀。

鴾毛。印引兩目結。

七月十一日

、、、、、御師　難波御使。

一延徳二春日社御神馬　一疋。鹿毛。印雀目結。
二月五日
、、、、、御師

一同　一疋。青毛。印雀目結。
御判始御評定始分。
六月廿一日

一同　一疋。鴾毛。印雀目結。
閏八月十九日　三通同前。御使啪田新三郎。
上七社御神馬。大御所様御かぶれにつきてまいる也。

一太神宮　一疋。鹿毛。印雀目結。
倉次承。

一八幡　一疋。同。

一賀茂　一疋。

一松尾　一疋。青毛。印雀目結。

一平野　一疋。鴾毛。印雀目結。

一稲荷　一疋。蘆毛。印雀目結。

一春日　一疋。黒毛。印雀目結。
十一月廿五日
此外

一八幡宮　一疋。鴾毛。印雀目結。

一祇園　一疋。栗毛。印雀目結。

一御靈　一疋。河原毛。印雀目結。
同日

一吉田社　一疋。鴾毛。印雀目結。

一新羅社　一疋。青毛。印雀目結。
十二月六日
延徳三年。

一八幡宮　一疋。青毛。
二月廿八日年始分。

一春日社　一疋。栗毛。
同廿八日節分參。

一春日社　一疋。鴾毛。印雀目結。
同日年始分。

一三條京極寺八幡　二月廿九日年始分。　一疋。鹿毛。印雀目結。木村民部。
一太神宮　五月四日　一疋。鴾毛。印雨目結。
一石清水八幡宮　五月四日　一疋。河原毛駮。印雀目結。
一愛宕社　四月廿八日　一疋。河原毛。印雀目結。
一野宮　四月廿八日　一疋。河原毛。印雨目結。木村民部丞。
一三條京極寺八幡宮　五月十六日　但去年九月八日未進分に參。　一疋。栗毛。印雀目結。
一今宮社　同七日　御祭禮に付參。　一疋。鴾毛。
一春日社　同五日　爲二年始分一參。　一疋。鴾毛。印雀目結。
一祇園社　一疋。月毛。
同七日　二疋。鹿毛駮。印遠雁。栗毛。印雀目結。
一太神宮
六月廿四日
一石清水八幡宮　一疋。河原毛。印雀目結。
同日
一春日社　二月五日未進分。まいる。　一疋。鴾毛。
一御靈社　二月五日未進分まいる。　一疋。栗毛。印雀目結。
一三條京極寺八幡宮　去年十一月八日にまいる。　一疋。印雨目結。
一同御神馬　當年五月五日にまいる。　一疋。栗毛。印雀目結、
延德四年癸巳正月日
一太神宮　二疋。栗毛、鴾毛。印雀目結。
一八幡　一疋。栗毛。印雀目結、

一賀茂　一疋。鹿毛。同。

一鴨　一疋。青毛。

一春日　一疋。鹿毛。印雀目結。

一六條八幡　一疋。鴾毛。

一三條京極寺八幡　一疋。栗毛槽毛。印雀目結。

一新羅　一疋。河原毛。

一日吉　一疋。栗毛。

一祇園　一疋。鴾毛。

一北野宮寺　一疋。印雀目結。

正月十一日

一石清水八幡宮　一疋。鴾毛。印雀目結。

正月十九日　河井。

一御靈社　一疋。同。同。

正月十六日

一今宮社　一疋。河原毛駮。印同前。

同日

一下御靈社　一疋。蘆毛。

同日

一御靈社 御幸如云々　一疋。栗毛。印雀目結。

三月十八日　御使木村。

一石清水　一疋。鹿毛。印雀目結。

四月廿四日

一春日社　一疋。雲雀。

三月廿七日

一愛宕護社　一疋。河原毛。印雀目結。

四月四日

一鳩尾八幡宮　御劔。持。御馬　一疋。鴾毛。印雀目結。

二月廿八日　白川殿より以二神戸殿一四月十九日に調二進之一。

一愛宕護社　一疋。鹿毛。印雀目結。

四月廿八日

一野宮社　一疋。黑毛。

同日　難波。

一今宮社　一疋。青毛。印雀目結。

五月三日

一三條京極寺八幡宮　一疋。黒糟毛。印兩目結。御使より

五月廿一日

一岩神社　一疋。鴾毛。印雀目結。

御使より、月澤。

五月廿一日

一新羅社　一疋。瓦毛。

御使より式部丞。去年分にまいるなり。

三月廿七日

一太神宮　二疋。河原毛。鴾毛。印雀目結。

六月二日

一祇園社　一疋。青毛。印雀目結。難波。

同日

明應元年。

一石清水　御劔。景光。御神馬　一疋。黒河原毛。印雀目結。

十二月十八日

一就祇園社遷宮之儀御劔。宗光。御神馬一疋。黒。印雀目結。

十二月廿三日

明應二年。

一太神宮爲御祈禱御神馬二。黒毛、印雀目結。鴾毛。印同前。可牽進之由。所被仰下候也。仍執達如件。

正月八日

太神宮御師　月阿彌御使。

一石清水八幡宮御神馬一疋。鴾毛、印雀目結。可牽進之由。所被仰下候也。仍執達如件。

正月八日

石清水八幡宮御師　御使月阿彌。

一三條京極寺　一疋。雲雀毛。

五月一日

一春日社　年始之御祈禱。一疋。鹿毛。印雀目結。

正月十日

一同節分。一疋。栗毛。印同前。

同日

一加茂社　一疋。河原毛。印同前。

同十九日

一祇園社　一疋。青毛。印同前。

同十九日

一鴨社　一疋。蘆毛。印雀目結。

正月十九日

一御靈社　一疋。鹿毛。印同前。

同日

一愛宕護社　一疋。鹿毛。印雀目結。芥川筑後守御使。

正月廿二日　芥川御使

一石清水八幡宮　役神爲御神馬　一疋。鴾毛。印雀目結。

正月廿四日

一石清水八幡宮　御太刀三振。清繩。基次。　基近。

三疋。鴾毛。印雀目結。同鴾毛。印雀引兩圓。河原毛。

二月朔日

一石清水八幡宮爲御動座之御祈禱。御劔一腰。持。御具足一兩。腹卷同甲。神馬一疋。栗毛。印雀目結。可送進之由。所被仰下也。仍執達如件。

明應二年二月廿一日

一石清水　一疋。黑駮。

同日

一愛宕社　一疋。青毛。印雀目結。

同日

一太神宮　二疋。青毛。印井文字。黑毛。印雀目結。

二月廿三日

一愛宕社　一疋。黑毛。印輪違。

三月七日

一石清水　一疋。鹿毛樺毛。印雀目結。

三月十七日

一愛宕社　一疋。雲雀毛。印雀目結。

同日

一石清水　一疋。栗毛。印雀目結。

二月廿二日

明應三甲寅年。

一譽田八幡宮　一疋。栗毛糟毛。印雀目結。
八月十三日
譽田八幡宮御師
一三條京極寺八幡宮　一疋。河原毛。
十二月十七日　但當年始にまいろ。
三條京極寺八幡宮御師　未進分。
就御元服參。　以淵田方伺也。
一石清水　一疋。鹿毛。印雀目結。
一北野宮寺　一疋。鴾毛駮。印庵引兩。
一吉田社　一疋。栗毛。
明應三十二月廿日
各御師。　即刋形有之。
一石清水八幡宮　一疋。黑毛。
九月廿四日
、、、、、御師
明應四年乙卯正月。
一御靈社　一疋。栗毛。

二月廿一日
一石清水八幡宮　一疋。河原毛。
二月七日
一譽田八幡宮爲放生會。御太刀一腰。持御神馬
一疋。
八月十五日
一住吉社明應四　一疋。佐日。　御使芥川筑後。
十月十六日
一鴨社　一疋。河原毛。　芥川筑後。
十一月廿七日
明應五年正月。
一石清水八幡宮　一疋。青毛。印[　]。
正月十八日
石清水御師
一同前　一疋。鴾毛。
二月四日
一太神宮爲御祈禱去年祭司參籠之時。御劔。

持。御神馬一疋。栗毛糟毛。印雀目結。可牽進之由。所仰
下也。仍執達如件。
四月二日
太神宮御師

一野宮社　一疋。栗毛。
四月廿日
野宮社御師

一愛宕社　一疋。青毛。
同日
愛宕社御師

明應六。　右京亮殿より承。御使齋藤。伊勢國司より年始の御禮之御馬なり。
一就北野宮寺造營　一疋。月毛。印雀目結。
四月廿七日
北野宮寺御師

一愛宕護社神事。　一疋。青毛。
同日

一野宮社神事。　一疋。黑鹿毛。
同日

一老松社就遷宮　一疋。鴾毛。印雀目結。
八月廿六日
北野宮寺御師

明應六
一太神宮為年始御神馬　一疋。河原毛。印雀目結。
十一月九日

明應七正。
一就北野宮寺末社白大夫社遷宮　一疋。河原毛。印雀目結。
可引進之由。所被仰下也。
三月六日
北野宮寺御師

一就愛宕護社御神事御神馬　一疋。月毛。印雀目結。
四月廿日

一野宮社為御神馬　一疋。栗毛。印雀目結。
同日
野宮御師

一石清水八幡宮　一疋。蘆毛。印雀目結。

閏十月廿六日

一太神宮御神馬一疋。鴾毛。印雀目結。可ニ牽進一之由。所レ被ニ仰下一也。仍執達如レ件。　十市進上。

天文三年九月六日　伊勢守

太神宮御師

一石清水八幡宮御馬　九月六日　一疋。鴾毛。印雀目結。

筒井進上。

一太神宮御馬　九月十九日　一疋。鴾毛。印二文字鹿笛。

布施進上。

一愛宕山御馬　同日　一疋。河原毛。印鹿笛目結。

畠山殿進上。

一祇園社御馬　同日　一疋。栗毛。印菱鹿笛。

片岡進上。

同五年三月廿六日

一石清水八幡宮御神馬一疋。鴾毛。可ニ牽進一之由所レ被ニ仰下一也。仍執達如レ件。

天文五年三月廿六日　兵庫助

石清水八幡宮御師

一愛宕山御馬　同日　一疋。青毛。

仁木殿進上。　若君様御ウフスナトシ初而マイル在所東田口　四月十一日

一感神院新宮御馬　一疋。河原毛。印雀目結。

武田進上。

一宇佐八幡宮御神馬　九月十二日　一疋。鴾毛。

細川殿進上。

一興福寺學侶衆徒御中　後十月二日　供目代。宛所。

爲ニ若君様御祈禱一御太刀一腰。御馬一疋。可ニ牽進一之由所レ被ニ仰下一也。仍執達如レ件。　畠山殿進上。

天文六年三月廿一日　細川殿進上。

一太神宮御神馬一疋　廿一日到來　青毛。印雀目結。可ニ牽進一之由所レ被ニ仰下一也。仍執達如レ件。

天文六年三月廿一日　伊勢守

太神宮御師

一石清水八幡宮御神馬（同日）　一疋。黒鴾毛。
土岐殿進上。
一感神院新宮御神馬（同日）　一疋。黒栗毛。引兩目結。
遊佐進上。（六月廿二日）
一太神宮御神馬　二疋。鹿毛。印雀目結。
武田殿進上。
黒鴾毛。印雀目結。　朝倉進上。
一宇佐八幡宮御神馬（同廿九日）　一疋。河原毛。
朝倉進上。（天文十一年後三月卅日）
一太神宮御神馬　二疋。鹿毛。糟毛。
六角殿進上。
一石清水八幡宮御神馬（同日）　一疋。鴾毛。
土岐殿進上。（天文十三六四）
一祇園社御神馬　一疋。河原毛。
一感神院新宮御神馬（同日）　一疋。黒毛。
一鴨社御神馬（天文十三八十四）　鹿毛。印雀目結。
一吉田社御神馬（同日）　一疋。鹿毛糟毛。
一石清水八幡宮（同日）　一疋。鴾毛。

一愛宕山（同日）　一疋。鹿毛。
一清水寺御神馬（同日）　一疋。鴾毛。
一鞍馬寺御神馬（同日）　一疋。河原毛。
一感神院新宮御神馬（天文十四十二朔）　一疋。青毛。
一同御神馬（同十四十二廿三）　一疋。鴾毛。
細川殿進上。

明應以上。本云。本書親元御筆之寫。
天文以下。本云。本書親俊御筆之寫。

神祇部廿七

太神宮參詣記

坂士佛

康永元年十月十日あまりの頃。太神宮參詣のこゝろざしありて。伊勢のくに安濃津と申ところに着て侍りし程に。故鄕にて聊見侍りし人のとゞめ申しかば。旅の心をもたけむとて。兩三日逗留し侍りぬ。この津は江めぐり浦はるかにして。ゆきゝの船人の月に漕こゑ。旅泊の曉の枕にきこえて。あらき浪風の音しのびがたく侍りしかは。

かせ寒き礒やのまくら夢さめて
よそなる波〔浪イ〕にぬるゝ袖哉

安濃津をいでて。あこぎが浦をすぎ行ほどに。しほやのけぶり心ぼそくて。うはのそらにたびだつおもひをそへ。友なし千鳥の鳴まよふ聲をきゝては。跡もさだめぬ身のたぐひはありけりとおもひしる。水上より時雨くだる。雲出川のはやき浪をしのぎ。小野のふるえわたりなど〔むイ〕申名所を過行にも。あはれみやこの人とともに見てゆかましかば。しらぬみちものうから〔ざらまイ〕じとおもひ出て。松風いとさむき三渡の濱にもつきぬ。はるかなる入海にむかひゐて。旅行の人のやすら〔休むイ〕ふにことゝへば。とをき道をめぐらじとて。汐の〔のイ〕ひるまをまち侍るなりとこたへしかば。とき・うつる程かしこに

休み侍りて。心にうかむことを口にまかせて申すてぬ。

渡口無船憩樹陰。　漁村煙暗日沈々。
寒潮歸去途程近。　又有松濤驚客心。

西にかたぶく日影には。終にゆくべき我身のあらましもまぢかく。汐のみちひのときのまにかはるを見ては。生死のみちは海にもありと詠たる古集の歌をおもひいでて。

うきしつむこのみを思ふくるしみの
海に汐ひの山は有けり

櫛田川秡殿をもすぎて行ほどに。世中みだりがはしくなりしより。國のみなみはあらぬ處のやうにあれはてゝ。竹のはやし杜[森イ]の木がくれのにぎはひたるも。近づきみれば人屋もなし。すゝきかるかやの絶まに。かりはねおほきはりみちあり。をのづからあふ人にとへば。これなむあらを田のなれるはてよとこたふるを聞に。いとゞかはれる世の有さまもかなしくて。齋宮にまいりぬ。いにしへの築地のあととおぼえて。草木の高きところ／＼あり。鳥居はたふれて朽のこりたる柱のみちによこたはれるを人だにもかくとしらせずは。たゞふし木とのみぞ見てすぎなまし。齋宮と申はたえてひさしき跡なりしを。近此再興あるべしとて花やかなる風情などありしかども。芳野山のさくら常なきかせにさそはれ。嵯峨野の原の女郎花あだなる露にしほれしかば。野宮の名のみ殘りて。齋宮の御下りにもおよばず。神慮のうけおぼしめさぬ政なりけりとは此時こそ思ひ合せ侍しか。これは近き程の事なり。むかしは又神のいがきをこえしくすのはに。かりなる露の契りを結びし事も侍けるとかやうけ給れども。今は通路もみえず。をきかさねたる霜の下に枯葉のあさぢのわづかに殘るば

かゝりにて。いづれの草こそ秋のはなのかほよかりし名殘よとだにもみえず。ねてかさめてかとすさび[みイ]給ひけるそのよの夢も雲となりあめとなりていまはなし。むかしはふるきゆめ。今はあたらしきゆめなり。夢の心にうつゝを覺ねば。しらずうつゝと思ふも夢にてや侍らん。

はかなしといつれをわきて思はまし
夢もうつゝもおなし世中

宮川をわたりて。は山しげやまの陰にいたりて見れば。このもかのもの里道をひらきて。まことにひとみやこなり。爰を山田の原と申せばげにも杉のむらだちおくふかげなり。これ則外宮也。三寶院と申僧坊にやどうぢ[たイ]かりて。連歌の物がたりな[んイ]ど侍りしところに。祠官長官従三位家行卿。きゝをよびて。みやこの傳もきかまほしげに侍な[んイ]どさそふ人のありしかば。彼宿所へ行ぬ。長官對面して。花のもとのたゞずまひな[んイ]どたづね侍りしかども。不堪の身なれば辭に申のべたる事もなし。神代のむかし垂跡のいまを尋ね申詞の下に。記錄をひらかずして答へ侍しかば。年[來イ]頃の不審は雲霞の風に散ずるがごとし。此人をみるに。霜の眉雪の鬢。顔氣時にあひ。心の水ことばの泉。弁舌むかしをうかぶ。まことに太神宮の祠官なりと有がたくおぼえ侍りしかば。終夜の閑談を忘れぬさきにとて。草案にも及ばず筆にまかせて是を記す。抑内宮御鎭座は垂仁天皇の御宇也。外宮御垂跡は雄畧天皇の御代也。數百歳の前後なりといへ共。參詣の次第によりて先外宮御垂跡のことを記す。當宮をば天照豐受太神と申すなはち月神なり。これにつきて神書の說これおほし。暫日本紀をひきみるに。伊弉諾伊弉冊尊。日神をうみ月神をうみ給ひて。あまの原

にをくりあげ給へり。この日神月神は內外兩宮なりと云々。是はよの常の說なり。一書云。外宮の月神にてましますことは子細なし。但伊弉諾伊弉冊のみことのうみ給へる月神にはあらず。國常立の尊なり。天神七代は水氣を始として月神の號あり。地神五代は火德をつかさどりて日神御名まします。万物は陰陽を父母として。水火交會のことはりあり。是まことに兩宮眞實のならひなり。參宮の道すがら更に人間とはおぼえず。あらぬさかひに生れかはれる心あり。古松老檜のとしをへたるかげ森々としてものさびしく。瑞花異草〔とイ〕の霜にのこれるよそほひ茸々としていと・あはれなり。鳥居は冠木もそらず。正直のものを照し給ふ本誓を表す。みづがきには丹朱をもぬらず。御殿には檜皮をもふかず。かやの軒ばしどろに葺なして。茅茨きらざりける昔をおもひいづ。

これは是國のわづらひ民の費をあはれび給ふ〔ろイ〕ゆへなり。宮中に祭禮をこなはるゝ殿數多あり。偏に大內の搆のごとし。出家の輩は五百枝の杉と申靈木のもとまでまうでて宮中へはまいらず。是又禁裏の禮義なり。神孫をたてゝ皇帝と稱し。帝祖をあがめて太神と號す。國家安全の恩澤は宗廟加護の德光なり。このことはりをおもひつゞけて。

皇のはしめと思へは千早振
　いせこそ神の都成けれ

千木鰹木の歲霜をへたる。猶一千餘廻の月をのこすといへども。宮居鳥井〔居イ〕の雲霧にかたぶけるいまだ廿年の秋にあはず。當國の靜謐もちかきほどなれば。造營の延引もことはりなり。九月中に山口祭あるべしなど聞えしかども。大儀なればとりのべられぬ。扨も當宮御垂跡の始をたづぬれば。雄畧天皇の御宇。天照太

神大佐々命に勅りし給ひて。天照豐受太神を我國へ移し奉れと示したまひしかば。命神詫のおもむきを奏聞し給し程に。帝かの命を丹波〔後イ〕國へ下向せしめて。神明を伊勢國へうつし奉れと勅詫〔定イ〕ありしかば。則丹波〔後イ〕國與謝郡比沼の魚非の原にくだり給て。御遷幸をなし奉り給ひけり。先大和國宇多宮に着せ玉ひて御一宿。次伊賀國穴穂宮に御二宿。次に伊勢國鈴鹿の神戸御二〔イ一〕宿。次山邊行宮に御一宿。次渡相沼木平尾與ニ于行宮ヲ三ケ月まします。號ニ今處名離宮ト也。夜々天人降て神樂を供ず。今の世に豐明と號する其緣也。戊午秋九月。從ニ離宮ト山田原に御遷幸あり。相殿に三はしらの神ましますゝ皇孫尊天兒屋根命。太玉尊これなり。天兒屋根尊のましますゆへに。當宮を宗廟社稷の神とは申けり。としごろの不審をひらき侍りぬ。皇孫尊と申は天照太神の御孫天忍穗耳尊の御子也。この忍〔天イ〕穗耳の尊と申は。素盞烏尊天照太神のびんづらの玉をさがみにしてふきいださせ給ひたりしが。御子となり給ひたりしを。天照太神これはわが子なりとおほせられて。地神第二代の尊とす。彼尊高皇産靈尊御むすめ栲幡千々姫を娶り給ひて。皇孫尊を御誕生あり。素盞烏尊は伊弉諾伊弉冊尊の御讓を得て。我朝の御あるじにてまし〳〵しが。國土を皇孫尊にゆづり奉り。御身は出雲の國に御垂跡あり。いまの大社是なり。なを不審あらば神書をひらくべきよし申侍りしかども。この老翁のこと葉をきくに。日本紀にむかひ万葉集にあへ〔にイ〕るがごとく。おぼえしか。されば更に疑心なし。感淚〔情イ〕とゞめがたく侍しほどに。聊古語の風情を學びて。忽に今案の詞露をしたつ。

足引之。山田原能。宮柱。廣敷立而。天下。高知賜。宗廟社稷之。皇御神農。跡垂志。創者

泊瀨。朝倉能。大御門之。勅。最恐久。辭定而。眞奈志峯農。白雲能。棚引越志。太家山。何日母阿良旦。伊勢國。沼木鄕社。宮居奈禮。鳥〔居イ〕井瑞籬。佐丹奴羅須。小茨苅葺。宮造。玉毛金毛。不レ餝〔餝イ〕者。四方國有。人夫者。煩貴〔皆イ〕。事昝奈岐。然者阿禮登母。運云。荷前糸之。長良〔辭イ〕徹旦。子良毛御母良毛。暇波。日々之御膳。絕藻瀨須。豐宇賀能貢農。神爲之。大神酒御贄。忍穗井之。以レ水炊。朝旦佐。奉レ饗。氏人農。三角柏之。常盤〔磐イ〕仁。百官之。仕者。天業仁。不レ異。思レ之者。八隅知之。吾大王能。御心能。聰明久賢久。御坐母。神之誓登。木綿手襁。懸留賴能。廣前爾。降惠農。雨露於。仰而受流。國土能。百姓裳。榮營。作五。穀物。雖二置足一。万指勢奴。五百枝杉之。深綠。如レ不二葉替一。伊麻勢太御世。

右一首。奉レ讃二外宮天照豐太神一歌也。

反〔短イ〕歌。

處女子之。友爾別而。天原。振離津久流。昔悲聞。

右一首。奉レ題〔後イ〕二豐宇賀能貢神一歌也。

むかし丹波國ある川邊に天女八人くだりて。水をあびてあそびけり。一人の老翁これを見て。數多の天女の中にひとり〔のイ〕衣をとりかくす。天女これにさはぎて。みなとびさりぬ。衣をかくされたる天女なげきて衣をこふ。おきなのいはく。我に子なし。願はこの國にとゞまりてわが子になり給へとて。更に衣をかへさず。天女ちからをよばでおきなが子となりぬ。養父が家のまづしきことをあはれみて。酒をつくりてうるに。この酒を一椀を服すれば百病ことごとくいゆ。これによりてもろ〳〵の寶を馬車につみてをくる程に。富貴の家となりにけり。そののち〔かのイ〕翁天女をいとふ心ありければ。

おきなにむかひてその心をとひ給ふ程に。翁かくれなく申ければ。天女是をうらみて天上にのぼらんとすれば。天の羽衣に別て飛行の徳をうしなひ。下界にすまむとすれば養育の翁にいとはれて起居のところなし。常に蒼天をあふげども。ともなひしをとめはみえず。なくなく白屋にふせどもあ〔なイ〕はれむ人まれなり。むかしを忍びいまをかなしびてよみ給ける。

天原。振離見者。霞多地。
家路麻余伊豆。行徹不レ知聞。

この天女は神明御遷座のとき御供申て〔後イ〕。丹波の國より當國へうつり給へり。天女のなきゐたりけるところを奈〔はイ〕久郡云々

題二忍穂井水一短歌二首。

たむくるも是やかきりの老かみは
　神に名殘のをしほ井の水
すみ初ていく世になりぬ久かたの

天のむら雲の忍穂井の水

この水はむかし天村雲命。下界の水は不熟也。天上の水をくださ〔んイ〕むとて。天〔高イ〕原にのぼり給ひて。牛漢の水をくみて。馬瑙の鉢にいれながら外宮にとゞめをき給ふ。かの水にて神供の御膳をかしぐに。くめどもつきず。くまねどもあまらず。是第一の奇〔らせイ〕持なり。天村雲命と申は天照太神あまくだり給ひし時三十二神御供し給ひたりしその中の一神なり。祠官渡〔度イ〕會氏の祖神云々。當宮には巫女なし。子良とて幼稚のをとめのいまだ夫婦のわざもしらぬが。御膳をそなふる器用にて召つかはるゝばかりなり。神慮にかなひぬれば。二三十までも月事なし。冥鑒にそむきぬれば。十一二よりさはる。さはればすなはち職を辭す。大宮のたつみに御池を隔て高き山にましますは高ノ宮と申す。古語には多賀の御前と申なり。當宮にいのり申こ

とをば。まづこの御神に申せば。この御神又太神宮に奏し給といへり。天子の攝政のごとし。直奏せざる神事諸社にこの例なし。又當宮のうしろの山に希代の岩崛あり。諸神爰にあつまり仙客常にきたると申つたへたり。岩屋のかずは四十八といへり。唯今まで人のゐたるとおぼえて。石面のあたゝかなる處もあり。又よのつねならぬ翁の人に行あふ時もあり。漢家に三十六の洞空あり。かれは道士方術を行ふ舊窟なり。當山に四十八の靈崛あり。これは神仙遊戯をなす化城なり。神かくしの里とて。花紅葉の遊覽の輩つねにみる家にはあらで絃を調て宴飮す。こゑ耳をおどろかし。みちには騎をつらねて。富貴の躰めをたのしむ。日くれて里に歸りて。かゝるおもしろき所をこそみて侍りつれと語れば。翌日に人おほくともなひて行てたづぬれども見えず。疑なくこれ仙家なり。劉阮が七世の鄕には似ず。かへりきて朋友にかたる。武陵一日の道にあひおなじ。尋行て邑屋をうしなふ。かくのごとくのふしぎ連綿としてたえず。月讀の宮にまいりて拜すれば。森のくち葉跡をかくして庭の冬草塵をなせり。月讀の御名を思へば神代のこともきゝなれたる心にて。

幾年に露の玉かきふりぬらん
神代の秋の月よみの宮

山田より內宮へまいるみちすがらいやしき筆のはしにてのべがたし。或は水煙山をうかべて影を重溟にさかさまにせる處もあり。あるひは雲氣みちをうづみてみねを千嶺にかくすところもあり。既に宇治の里にいたりぬれば。みやこにちかき其名もなつかしく。外宮よりはたつみにあたれる處なれば。爰にも庵をむすびて。しかすむ人やあるらんと覺ゆる山

陰なり。檜原がくれのこぶかき陰をはるかにわけ入程に。道は人煙をはなれてたちまちに有漏のさかひをのがれぬるかとおぼえ山・仙〔はイ〕雲に隣てすでに無何の里にいたれるかとうたがふ。二の鳥居のうちまで參りて拜するに。山下松くらくして百枝のこずゑはいづれともわきまへがたく。宮中の杉いよやかにして。千木のかたそぎもさだかには拜れたまはず。倩この身の有さまを案ずるに。十惡心にあり。故にながく佛意にそむく耻をいだき。一衣かたにかゝれり。故にいま神道にとをき恨をのこす。就中當宮參詣のふかきならひは。念珠をもとらず。幣帛をもさゝげずして。こゝろにいのるところなきを內清淨といふ。潮をかき水をあびて身にけがれたるところなきを外清淨といへり。內外清淨になりぬれば。〔同イ〕神のこゝろ〔なイ〕と吾〔我イ〕こゝろと隔なし。既に神明におなじ。しからば何を望てか祈請の心あるべきや。これ眞實の參宮なりとうけ給はりし程に。渇仰の涙とゞめがたし。抑內宮の御躰は神鏡なり。天上にて八百萬の神達の鑄たてまつり給ける御鏡也。一書いはく。天照太神天岩戸にとぢこもらせ給しとき。天下とこやみになりにけり。此時よもの神達集り給ひて。天香久山の根こじの榊に鏡をかけ玉をかけ。靑にぎて白幣をかけて神樂をうたひ給ひしとき。天照太神の岩戸をほそめに明てみそなはし給けるを。手力雄命の岩戸をひきひらきて太神を取出し奉る。その御影のうつらせ給たりし御鏡なり。神武天皇以來代々の帝王同殿にすませ給けるが。第十代のみかど崇神天皇御宇。靈威にをそれ奉りて。別に殿をたてゝあがめたてまつらる。温明殿是也。第十一代の御門垂仁天皇の御娘倭姫の皇女をこの神鏡につけ奉りて。直に

神託をうけたまはりし。御垂跡あるべき時節やいたりけむ。皇女に託し給て。天皇廿五年三月はじめて大和國城上郡珠城宮を出させ給ふべきにさだまりけるとき。この神鏡を本躰として大和國宇陀郡宇陀の神戸にて重て鑄あらはし給し御鏡は內裏におはします。內侍所是也。天上根本の神鏡は當國へ御遷幸有。皇女神鏡をいたゞき奉りて。御鎭座あるべき所を御尋あり。伊勢の海つらに歷覽あきたらずおぼしめさるゝ海ありて。二度御覽ありしゆへに。二見の浦となづく。皇女この浦より御船にめして。河をのぼりに渡御ありけるに。御裳のすその御船よりあまりてぬれさせ給たりし故に御裳濯河と名づく。この川のほとりに山あり。神道山となづく。一の川あり。五十鈴川これ也。天照太神下界に御垂跡あるべきところをかねて御さだめありて。種々の神寶をくださせ給ひしそのなかに五十の鈴あり。この鈴の故にいすゞとなづく。當宮を天照太神と申。相殿には二神ましします。手力雄命栲幡千々姬の命と申せば。神々の御名は昔をのこし。代々の記錄はいまに絕ざりけりとおぼえ侍りし程に。短才のつたなきことをかへりみず。長句の哥をつくる。

皇御麻之。勅勢志。從神代。兼手降志。種々濃。天津寶能。一鳴。五十鈴之河之。水清見。流受益。皇之。高御位之。無動。下津岩根之。御柱濃。神能宮居濃。自內外。國平育。父母能。居諸之照。天原。振離見者。古之。岩戸耀。眞清鏡。戴增而。皇女之。光留簪之。玉笹。二見浦之。湊與利。御船艤而。上瀨爾。河波立傳。御裳能。奴禮鷄流時由。此河之。名仁流垂。水上濃。神路之山。岩村之。常石堅石之。瑞離毛。舊奴留霜之。有數登。影於雙而。相

生仁。千歳乎送。百枝松。栄於奈良佐奴。神風也。伊勢云國爾。垂跡。御世鎮居。皇御神香裳。

右一首。奉讃天照皇太神歌也。

短歌。

あまくたる五十鈴の川の瑞籬の
　　ふりぬる世をは神やしるらん

この五十鈴川は。大宮と風の宮とのたにあひよりながれて。深山木のこだかき陰におちくる水の音まことに心ぼそし。この川は滅盡せんとき濁るべしと神詫あり。されば五月雨夕立にもにごることなし。大宮のいぬゐにすこし高きところあり。かしこにましますは荒祭神と申なり。外宮の高宮内宮の荒祭宮は深秘なる故にいづれの神と申あらはさず。櫻の宮と申は大宮のまぢかき處にましますが御殿もなし。唯一木の櫻を神躰とすとうけたまはりをよぶばかりにて。宮中へはまいらず。風の宮へまいりぬ。苺ふかき岩ねづたひのみちをしのぎて。眞木の葉のおくなる宮居にまうづ。造替あるべき月日も過ぬれば。甍やぶれて雨殿栢のもとにしたゝり。軒かたぶきてあらし夏松のかげをはらふ。天下の兵革は王道の衰微なりとなげき侍りしに。世上擾亂は宗廟の荒廢にもをよびけれど。例のなみだ袖にあまるほどなり。五十鈴の川と御裳濯川のおちあひたるところに松あり。御遷宮のもろ〳〵の神寶をかしこへ出し奉りて。御秡ありてあたらし殿へいれ奉る。これを河原の御秡となづく。帝王御卽位の儀式なり。又瀧祭の神とて。河の洲崎・松杉な(ど)の一むらたてるばかりにて御社もましまさす。神躰は水底に御座とかやぞうけ給る。是則龍宮なりといへり。きたを望ば長橋のながれをきるあり。緑松たれて行人の

みちをさゝへ〔无イ〕。南をかへりみれば高巖なみをくだくあり。紅葉のこりて遊客の心をそむ。所にふれて感をうごかし。ものごとに興をもよほさずといふ事なし。問云。內宮は日神女躰。外宮は月神男躰なり。日神ならば陽神也。男躰に〔云イ〕てこそましますべきに。女躰心得がたし。答曰。火は水をえて滋をあらはし。水は火を得て氣をおこす。故焔はふさがりて見えず。水氣內にあるによりてなり。水はすき融て明なり。火德內に有によりてなり。水火和合して其德をあらはす事天然の理也。是によりてゆふかづらの白をもて男は冠をゆひ。かけおびのあかきをもて女は身をかざる。是則陽は水をもて身をきよめ陰は火をもて身をきよむる姿也。しかあれば神も陰陽を具足して。男きたれば陽に同じ。女きたれば陰におなじくし給ふ。本有常住の神躰には陰もなく陽もなし。衆生隨類の垂跡には男に現じ女に現ず。たとへば玉の水火をいだすがごとし。玉には水火なけれども。日にむかひて火をとり。月に對しては水をとる。これすなはち因緣所生の水火也。故に日神は陽中に陰をふくみ。月神は陰中に陽をふくみ給へり。是一陰也一陽なり。兩宮は天地の父母として。萬物を出生し給けることはり尤ふかし。造宮の爲躰。深義繁多なり。棟梁の下に橫竪の板あり。かの板に種々の秘密あり。是を神躰とならへり。又心の御柱とて。山口祭と申大營ありてとり奉る御柱なり。是又深義あり。般若〔心イ〕經のこゝろをば神とならふ秘密あり。この心は四方の人の神道に歸する心なり。此心は我神の一切衆生におなじくし給ふ神也。大權出世して濟度利生し給ふに種々の方便あり。〔无イ〕釋尊西天に出て一代敎を說給ひしことは纔に二千餘年なり。利益とをからず由來近き

かな。神道は久堅の天よりあらがねのつちをさぐりいだし。磤馭盧嶋となづけ。二神この嶋にあまくだり給ひて。國土をうみ草木を生じ給へり。國既に定りて。人倫又はじまる。それよりこのかた神道の利益を思ふに。天津彦々火瓊々杵尊は三十一万八千五百三十二年天下ををさめ給。彦火々出見尊は六十三万七千八百九十二年。鸕鷀草葺不合尊は八十三万六千四十三年國家をめぐみ給ふ。然れば神明の國を守り人をあはれむ益のみありて。更に佛教の世ををさめ政ごとをたすくる徳はなかりき。歳うつり世くだりてのち人神道を信せざる時に。上宮太子世にいでて佛法をひろめ給ひしも。神道の化現也。自爾以來傳教大師北嶺をひらきて。一乘を七社權現の威光にかゞやかし。弘法高祖の南山をしめし〔てイ〕。三密を四所明神の徳風にひろむ。佛法ひとりたゝず。偏に神

道のたすけによるものなり。諸宗の教法はまちまちなれ共。己心を琢きて佛性の玉をあらはす。所詮は一理なり。この己心を釋教にをく時は佛心と號し。神書にをくときは冥慮と稱す。此冥慮は我らがをろかなる心なれども。しばらくもすなを〔ほイ〕なるときは同じ給ふたのみ有。されば内證のほとけは一心空寂の觀にあらはれて。癡迷の生をば度することかたし。外用の神は七識執我の機にも同じく。蒙昧の輩をも利すること安し。御柱のうへに心の字をいたゞけることはり誠にふかしと。終夜ものがたりし侍しをおもひ出て。身のきよからぬがなげかしきにつけても。常に參宮する身ならばやとおもひ侍れども。六旬の齡又あゆみをはこぶべきゆくすゑをもたのまねば。神慮の名〔倚イ〕殘もおしく。靈地の感情も禁じがたし。山風とき〲時雨て。夕なみたちさはぐ河の邊

に參宮のともがらこりをかきて。さむげなるけしきもなし。麻の衣のいやしき賤女も。身をきよめぬればとよろこぶ色あり。花やかなるたもとのにほひ深き人も。はだへをあらはにしてはづかしめたるかほばせも見えず。和光の水は善惡の塵をえらぶことなく。利物の淵は高低のかげをわかつことなし。御裳濯川の〔後イ〕ながれつゐに伊勢の海にながれ入ぬれば。細流巨海隔もなく。一味平等の法水となる。このことはりをおもひしりながら。身は彌陀の心水をもあびず。好みて濁惡の泥にしづみ。心は神明の願海にもいらず。かりに清潔のながれをむすぶばかりなり。かやうのことを思ひつづけて。なく〳〵境内をいで侍りぬ。朝熊巡禮のこゝろざしありて。河つらのみちをくだるほどに。祠官の軒をならべたる住居。都めきてにぎやかに。民庶のかきほつゞきの家居のよのつねのひなには似ず。香爐風薫ずけしきもなし弘正寺淨場。茶竈煙かすかなり菩提山の禪坊。かゝる寺々を一見して。朝熊の宮にまいりぬ。この處には倭姫皇女御とゞまりありて。年月を送らせ給ひけるとき。神鏡あまた鑄たてまつらせ給て。是より內宮へうつらせ給けるとかや。仍鏡宮と申なり。山中に寶殿をつくれども。朝日さらに百錬のかげをかくさず。岸下恠石をしめて。夜月とこしなへに宮のひかりをみがきなせり。をよそこのところをみるに。山くだりくだらざれども。樹木こと〴〵く底にあり。水のぼりのぼらざれども。波浪みな梢にかゝる。心は明鏡のごとし。もろ〳〵の色像をみる。色像不生なれば。九界佛界の隔もなし。是則本來清淨の鏡なり。しかれどもわれら五欲のあかをもとがざれば。心鏡ながくくもり。三毒の雲をもぬけざれば。胸月つゐにあらはれ

ず。かりなる影像に執着して。色にふけりあちはひを好む。この心はたして六道となりて永刧のくげむにしづむ。これによりて神明は本覺眞如の都を出て。末世愚鈍の生をすくひ。随緣應因の鏡となりて。常沒流轉の塵にまじはる。たれかいふ大權方便の利益なりと。われはおもふ一乘圓融の妙理なりと。仍長短二首の哥をつくりて。内外の一理の益をほめたてまつる。

千磐振。神世不レ替。朝熊之。阿波〔居イ〕丹建留。瑞籬農。水農心毛。伊知早久。宮井乎出而。有レ麓。阿利曾之上乎〔於イ〕。耀〔由イ〕須。光麻志和流。塵土之。積留山農。高照。月母勝而。隱奈貴。鏡宮者。多補姤句阿利計梨。

短歌。

朝熊也。　豐榮登。　日影社。
天津神　世之。　鏡奈利鷄禮。

朝熊にて。二見の浦はいづくぞとたづね侍りしほどに。をちかたにみゆる里を過て行ば。すなはちかの浦なりとあやしげなる人のをしへ侍りしかば。このことばばかりをしるべにてたづねゆく程に。めにかけし里を過てこゝろざす浦にいたりぬ。この浦のけしきを見るに。みやこにてつたへきゝしはことのかずにあらず。遠浦眇々として万株の松煙に和し。孤嶋峨々として百尺のいはほ月にそばだてり。この浦に佐美明神とて古き神まします。太神宮御垂跡以前の神也と申つたへたり。峯のあらしのさはがしき國となりしより。おきつなみあれのみまさるところなれば。松のおちばに手向のみちはうづもれてまことに神さびたり。いか〔んイ〕なる結縁ありて〔かイ〕。かゝる浦に跡をたれ給ふらむと。神慮もありがたくおぼゆ。俗にはこゝをば立石と申なり。大淀の浦もあたり

に近く。伊勢嶋のかたもはるかにながめやる。南に歩をすゝむればしろき砂雪をあざけりて。淸きなぎさの名をあらはし。青き浪風にたゞよひて。あらきはまべのきゝを驚す。山陰とをくめぐれる入海のかたをたづねて。江寺と申觀音の靈地にまいりぬ。苔ふみのぼる石橋は磐折にて溪の潤をとかすかなり。黄葉を拂てふるき跡をたづね。青竹に携てはるかなるみねにいたる。ちか頃までは僧坊などもありけるとかや申侍れども。今[天イ]世中のしづかならぬによりて。禪徒の止住すべき便もなし。蛩のすみかの四五宇あるばかり也。寒燈かゝげず。たゞ漁舟の篝火の波をやく影をのみ見る。霜鐘うごかず。徒に樵路の斧の音のかせにたぐふひゞきをのみきく。一花一香のつとめも絕ぬれば。千手千眼のちかひもなきが[おイ]ごとし。佛前のさびしくなることも。人間のをとろふるゆへなりと。世の哀にうちそへて旅の泪[涙イ]もしきりにこぼる。かの寺より麓の浦にくだりて眺望するに。曲渚浪をへだてゝ所々の松繪にかけるがごとし。これなりこの音に聞しまき繪の松なるらむ[んイ]と思へども。たれにとふべしともおぼえず。磯ものとるあまのをとめにとへどもこたへず。船さしのぼるますらお[をイ]あり。若やとたづね侍りしほどに。この入江をまきゑとやらむ[天イ]申らん。それはしらず。この湊は御裳濯河のながれのすゑにてこそ侍れとこたふるをきゝて。いとゞところがらおもしろくおぼえ侍りし程に。後見の一笑をわすれて僻案の四韻をつくる。

浦松似レ畫夕陽裏。老眼摩挲費二苦吟一。
水自二細流一通二海脈一。波横二万頃一列二天心一。
雲晴雲起山高下。潮去潮來月淺深。
六十餘年漂泊處。江湖風景不レ如レ今。

比興のわざなれども。感をうごかす心やみがたく侍しかば。兎毫をそめて鳥跡をのこす。霜にかれたつ濱荻の風にそよめくをと。沙に下[岸イ]居る鴈金の浪まをつたふよそほひ海[浦イ]邊の興眼前の景あり。はるかに東をのぞめば。海門行舟の帆かげは万里のなみにとをざかり。嶋づたひするからろのをとは。千尋のきしに近づく。雲のなみ煙のなみしばらくはれて。海のさかひ國のさかひをながめやるに。伊良虞嶋なるみがたはかしこにやと思ひやり。あまのたき川はこのなだの名にながれておなじ浪路なり。不盡高嶺はおほくの山をみこして。雲かあらぬかとたどれども。ふせこなどのやうにて風にもうごかねばうたがふ心もなし。千里の名所もつゞめて一浦の致[越イ]景となす。この浦の奇特なり。命あらばまたもとこそ思ひ侍れども。老ぬる身はたのみがたくて。

老のなみ立かへるへき身ならねば
　二見の浦の名をも頼ます

礒山かげの道をつたひ行程に。哀にこゝろすごき古寺あり。安養山と申所也。是は西行上人のすみ侍ける舊跡とかやぞうけたまはる。望を西刹にかけしむかしは。四十八願の迎の雲眼にさへぎり。名を南浮にとゞむる今は。三十一字の詞の花[光イ]をこゝろに殘す。佛道修行の身となりしかども。神明崇敬のこゝろざしも侍けるにや。難波津の梅のにほひを神道山の春の霞にうつし。淺香山の月のかげを御裳濯河の秋の水にうかべ[けイ]り。宮川の歌合も此ところにてあつめけるとぞうけ給る。しかれば兩宮の祠官もこの風をまなび。一寺の僧侶も彼あとをこそしたひ侍りしに。いまはいそべによするもしほ草。かきをくすさびばかりは。この世にとゞまりて[淺イ]。浪間にひろひし玉のありと

は。たづぬべき道にもあらず。あしのはの冬がれたる浦かぜふきわたりて。なにはの春かと詠じけるむかしの夢のことばおもひ出し・

なには江にあらぬ汀の言のはも
霜かれぬれは夢かとぞ思ふ

山色秋をのこして。風錦帳のもとにすさまじく。溪聲昔のごとくにして。雨草庵の中にそゝぐ。ふりぬる庭の籬はかゝれる蔦にのこり。あれ行軒の瓦はかたぶく松におちなむとす。あやうきはなか〳〵ひさしくて。久しかるべきはあやうし。げにさだめなき世のならひかなと。ものあはれにて。山もとをき湊江のかたをみわたせば。河のうき洲はみちくるしほにかくれ。鸚鵡洲のあとなきいにしへも目のまへにうかび。あしべのたづのいづくともなくとびさるこゑをきけば。黄鶴楼の古きためしもこゝろの底に近し。

此地空餘山寂寞。昔人去後幾朝昏。
綠蘿菴舊絶蹤跡。只有松風敲寺門。

所々巡禮の後。山田の三寶院にかへりて侍りし程に。當所の好士あまた尋きて一折あらま・しげにすゝめ侍りしかば。手向の心ざしあるおりふしなり。宿願の純熟するゆへかとおもひ立て侍りしに。人々いはく。本朝を大和の國といひ。哥道をやまと詞といへり。國の開闢・當宮にあり。歌の根本あに我神にあらずや。しかれども諸社參籠の懷帋は常に見きたれり。雨宮法樂の連歌はいまだ聞をよばず。神の緣にあひましまさぬか。人のことはりをしらざるか。今すでに參籠のつゐであり。數寄たよりをえたり。一夜の會をのべて累日の席をひらかむと申侍りし程に。面目をうしなふ藝を忘れて。心肝をついやす席につらなる。着座十餘人。笠着群集せり。その中に垂髪あひまじはりて。

花やかなる句なども〔んイ〕をいだし侍りしかば。老氣いよ〳〵まどひやすく。愚案さらにをよびがたし。

忘るなと書をく文の一筆に。

といふ句の侍りしに。

人のなみたをおもひいてけり。

と垂髪の付て侍りしかば。諸人詠吟耳をおどろかし。滿座のかむたむ腸をたつ。年久敷この道に心がけたる身は。明暮きゝとりわざのふるきことをのみつらねて。むねのうちよりいづるまことは更になきものを。この垂髪のよはひ。よも志學を出じと思ふ心のそこよりかかるやさしきことの葉の聞え侍るありがたさよとあやしく。すみ〔てイ〕かはいづくなるらむ〔んイ〕とゆかしくおぼえしかども。こゝろざしをつげやりぬべき花鳥のつかひもなし。夜といふ文字を懷紙にとゞむるばかりにてゆくゑもしらずなりぬ。をよそ〔おほイ〕此處は天のうきはしをふみそめ給ひし神代のふみを學ぶ家々絶ずして。大和言葉のひろまりける人のよの跡をもてあそぶ道々もおぼえければ。身は山田の原の杉の木かげにすみながら。名を和哥〔若イ〕のうらの入江の浪にかけゝる餘薫後生に及びて。數奇のみちは繁昌しけりとおもふに。都のことも忘るゝ程のなごりなりしかども。かくてとゞまりはつべき身にしもあらねば。歸路のみちにおもむく日。故鄕人の家づとにと。紙のうへにすみをつけて。袖の内の寶となしぬ。一隅を守る筆作のつたなき事をはぢざるにはあらず。兩宮をあがむ〔んイ〕べき記錄のたつとき事をしらしめむがためなり。

右太神宮參詣記以扶桑拾葉集本挍了

八幡社參記

慈照院准后義政公

康正二年三月廿七日丙申。天晴。今日參詣石清水八幡宮。初度儀。任正長二年八月十七日例。可催沙汰之由。兼日仰中山大納言親通畢。彼度被用永和元年三月廿七日并至德三年八月廿八日例云々。今度日次。勘解由小路三位在貞卿所擇申也。自然相叶永和佳例者乎。自去廿四日晚始神事。吉田前預兼名卿令立神事札。今日辰一尅。着香小直衣（文桐丸萠黃相。文松立涌薄色藤丸浮織物指貫上括也。）出坐公卿座。（右中將敎國朝臣持劔相從其邊。）先聖護院准后（兼傳中山大納言可申有來臨之由畢。）被加持。次土御門三位有季卿（淨衣。重衣。）入中門廊北妻戶。來座前奉仕身固了。退出之後。聊經程（有季卿乘輿之程相待之故也。）起座出。當間。經中間廊內出車寄戶。乘輿（兼案中門廊西簀子。）座定之後。兼名卿（布衣上括。）出北方腋戶。自輿左方指出祓。予以左片手取之。如拂懸息了返授之。兼名退入之後。力者等進寄舁立輿。出西四足門。敎國朝臣降庭上。以劔授布衣侍。（伊勢次郎左衛門尉貞枚。）先是公卿殿上人等列居中門南腋。（東上北面。）

路頭行列。

先馬。（置水干鞍。同鞍覆也。）虎皮切付。豹皮泥障。舍人三人着直垂引之。

次番頭八人。（二行。直垂。）

次布衣侍六人。（二行。爲先下騎。以左爲上）

海老名兵庫助季久。　結城左近將監政宗。

伊勢平三左衛門尉貞憲。　藁科左京亮貞相。

伊勢次郎左衛門尉貞枚。（持劔步輿左方）

伊勢八郎左衛門尉盛種。

次輿。（卷前方并左右簾。）

力者三手。十八人也。

雨皮持。退紅。

笠持。白張。

雜色六人。

次殿上人六人。二行。上﨟在左方。
右中將敎國朝臣。　右中將公躬朝臣。
左兵衛權佐永繼朝臣。　左中將雅康朝臣。
藏人左少辨益光。　侍從長淸。以上淨衣。重紅打衣。
次諸大夫。同。
前左京大夫相豐朝臣。　修理大夫賴弘朝臣。各淨衣。重衣。
次公卿三人。一列。四方輿。
三條大納言公綱。淨衣萠黃衵。布衣諸大夫一人。侍一人具之。
中山大納言親通。淨衣裏欵冬打衣。布衣諸大夫一人。具之
日野中納言資綱。淨衣紅打衣。布衣諸大夫一人具之。
次管領右京大夫勝元朝臣。裏打直垂。騎馬。騎馬若黨十人具之。直垂
次小侍所細河民部少輔敎春。同。若黨六人。
次侍所佐佐木大膳大夫持淸。同。若黨六人。
路次。
高倉南行。一條東行。萬里小路南行。三條西行。
東洞院南行。七條西行。大宮南行。九條西行。

大方殿從一位重子立御車於三條東洞院西頰。令見物給。車牛牛飼十三人所召進也。
於東寺南門東方暫扣輿。敎國朝臣下馬。取布衣侍所持之劔入輿。須入左也。而入右。頗不審之處。稱夫念由云々。侍等乘馬前行。自此所畠山右衛門佐義就若黨廿人。單物帶太刀。走輿前。尋常時走衆等在輿後。於八幡常盤大路同朝臣下馬。取劔授貞敎令持之。自此所布衣侍等步行如前。已尅下着善法寺。透淸法印也。寄輿於寢殿南面下輿入簾中。先式。次着饌三獻。此後行水。次着淨衣絹蘇芳衵。文桐唐草。出座寢殿南面。階間內也。兼卷簾。次土御門三位有季卿。着淺履。入東屛中門着八足下座。圓座也。頗向乾方。次公躬朝臣。永繼朝臣。雅康朝臣。已上着淺履。等。入屛中門進寄八足下取幣。上首二人各三本。下﨟一人一本也。此幣正長度下家司調進之。是守本式儀歟。然而今度猶仰社家令用意之畢。向乾方立。此間神馬三疋引立幣案南方。頗向乾方也。布衣侍三人引之。
次三條大納言經南簀子跪當間簀子。益光持來贖物跪大納言座下。大納言取之。昇長押居

予前。退居本所。益光退入。次有季卿秡詞畢。持大麻進寄砌下。大納言降階乍立取之。歸昇持來。予取之。如拂懸息打置柳筥上。以上方向南。次殿上人等返置幣退入。次下家司中原盛富以幣納長櫃。令昇出中門。神馬同引出之。次予起座出當間。經寶子并中門廊内出車寄戶。於沓脫上着沓。日野中納言役之。降地於門下乘輿。幣神馬等前行。自餘行列如初。入宿院鳥居。於北門外下輿。藁沓役同前。致國朝臣持劔相從。經極樂寺東南登山。先參高良社。立座前脫藁沓着座。中山大納言持來幣取直授之。予跪取之。以上方爲左。仰左手取上方。伏右手取下方。筋替持之。起兩段再拜了。乍跪返遣幣於大納言之後安座。大納言退。以幣授俗別當。俗別當向神前申祝畢拍手。予同拍手。不令音有也。畢起座。着藁沓。右廻退。次參石清水。乍着藁沓懸腰於疊端。向社方坐。社司盛水於土器。居折敷出之。三條大納言取之持來。予以右手取土器許。

聊頂戴嘗。又返授大納言之後起座。參護國寺。又不及脫藁沓居疊端。寺僧以香水預出之。三條大納言進寄取之持來前。予嘗之如前。次參若宮社。自座後着座。中山大納言取幣二本持來之。予取之起。兩段再拜。了返幣安坐。其儀同高良。申祝之後拍手。畢起座降拜殿前方。着藁沓。左廻西行參武內社。奉幣之儀同前。次參寶前。着舞殿座。奉幣。三本也。其儀同前。此間引廻神馬。樓門外也。布衣侍引之。予暫着東廊座。神人等撤予座敷里神樂座。巫女以下着之。神樂始之後。吹出笛程也。起予座出樓門降石階。經猪尾并宿院内。於本所乘輿。歸善法寺。於寢殿南面下輿入內。透渟法印勸盃。酌三獻。公卿殿上人等一巡召出之。次又於會所有三獻。此後於寢殿南面乘輿歸京。九條東行。大宮北行。七條東行。油小路北行。七條坊門東行。西洞院北行。參左女牛若宮社。於南門外下輿。沓役人同前。入中門着庭中座。於座後脫沓。中山

大納言自二西方一進出。取二神主所レ持之幣一持二來之一。予跪取レ之起。兩段再拜。畢返レ之。大納言授二神主。神主参二神前一申レ祝畢。返祝拍手予同拍手。神樂始之後。起座着レ沓退出。於二本所一乘レ輿。町北行。六條東行。東洞院北行。三條東行。萬里小路北行。一條西行。歸亭。于時酉初尅也。於二寢殿東面一有二祝儀一。先御前物。六本。次贊殿膳。精進也。御厨子所小預調二進之一。陪膳益光。不レ改二淨衣一。役送伊勢肥前守盛豐。同左京亮貞綱。同七郎右衞門尉貞熈等勤レ之。此後供奉輩於二會所一對面。各太刀如レ例。次於二女中一改二直垂一有二式三獻一。用二魚味一。大草調二進之一。役送同レ前。又有二五獻一。今日天氣快晴。無二一事之違亂一。神感之至歟。尤所二自愛一也。又兼日示二護持僧一令二祈念一畢。

廿九日戊戌。今日依三昨日爲二衰日一也。人々來賀二一昨日社参無爲之由一。各對面。太刀如レ例。又自二禁裏仙洞一被レ下二御劔一。白。畏申畢。

八幡宮御社参。明德二年三月廿八日

衞府侍。

伊勢七郎左衞門尉貞長。

伊勢十郎左衞門尉貞淸。

本庄次郎左衞門尉滿宗。

松田平內左衞門尉氏秀。

齋藤三郎左衞門尉滿淸。

長次郎左衞門尉賴連。

御方御所樣。八幡宮御社参始。應永十年三月廿八日

衞府侍。

曾我平次右衞門尉滿康。

伊勢七郎貞稙。

市四郎左衞門尉重明。

伊勢彌九郎盛綱。

齋藤孫右衞門尉滿時。

熊谷次郎左衞門尉直將。
松田三郎左衞門尉滿朝。
伊勢平三。
眞下勘解由左衞門尉滿廣。
長次郎。

八幡宮爲上卿御參向。應永十九年八月十五日

帶刀侍。
赤松出羽守則友。
赤松左馬助義雅。
赤松宮內少輔滿政。
赤松右馬助祐久。
赤松左京亮則綱。
赤松近江守滿永。
伊勢守貞經。
海老名太郎左衞門尉持季。
伊勢七郎左衞門尉。

伊勢七郎左衞門尉貞家。
伊勢兵庫助貞慶。
伊勢與一左衞門尉貞安。
伊勢九郎右衞門尉盛綱。
伊勢平三左衞門尉盛信。
曾我平次持康。
長佐渡三郎宗信。
富樫兵部大輔滿成。
朝日因幡守滿時。
佐々木黑田備前守高宗。
佐々木黑田九郎右衞門尉高淸。
佐々木鞍智四郎左衞門尉高信。
佐々木岩山美濃守秀定。
佐々木近江守滿信。
佐々木越中四郎右衞門尉高恭。
佐々木治部少輔滿秀。
佐々木加賀守高敎。

衞府侍。
大和三郞右衞門尉持行。
佐々木鹽冶五郞右衞門尉滿通。
松田七郞右衞門尉信郷。
遠山右馬助景澄。
勝田太郞左衞門尉定長。
宮次郞左衞門尉滿信。
東三郞左衞門尉益之。
宮式部丞盛廣。
安東次郞祐氏。
小早川四郞次郞持平。

石淸水八幡宮放生會御參向。永享十年八月十五日

帶刀。
赤松伊豫守義雅。
赤松左馬助則繁。
赤松播磨守滿政。

赤松兵部少輔祐康。
赤松上野介持祐。
赤松參河守持忠。
千秋民部少輔秀貞。
宮參河守盛廣。
宮次郞左衞門尉敎信。
宮五郞左衞門尉盛長。
曾我平次左衞門尉敎康。
松田六郞左衞門尉信朝。
田村刑部大輔持直。
本郷美作三郞。
大和三郞右衞門尉持淸。
長九郞左衞門尉信康。
土岐肥田伊豆守持重。
土岐今峯三郞賴通。
佐々木大原備中守持綱。
佐々木大原近江守信盛。

衞府侍。
宮下野守元盛。
長井太郎左衞門尉元久。
朝日孫左衞門尉持長。
松田次郎左衞門尉持郷。
長三郎左衞門尉家連。
八幡御參詣。　永享十二年十一月十五日
布衣侍。
松田六郎左衞門尉信朝。
長井太郎左衞門尉元久。
毛利修理亮與元。
宮五郎左衞門尉盛長。
長孫三郎信富。
本郷美作六郎。
元通注進。

春日社參記

権中納言基綱卿姉小路

柿本の陰をしめ。山邊の住家に跡をつぎて。しきしまのみちにひとり歩むとかや。今の世に申あひ侍るあたりにむつぶるよすがありて。難波江のあしよしをもわかず。淺香山のあさしふかしもしらねど。めにさいぎり耳にふるることわざには。をのづから和哥のうらなみたちなれ侍れはにや。此たびかの家に代々の跡をつぎて。敷嶋の歌撰奉るべきよしのみことのり侍りしにつきて。和哥所の寄人になされ侍るは。身にとりて重代の名にも侍らず。まして今たへたる道にしもあらぬに。かゝる仰の侍るは。唯他生の宿縁にこそと。しらぬ世のゆかしきのみにぞ侍るや。小一條左大臣なり時の大將などの はるかなる跡として。いとゞ

しくつたなき名をぞなげき思ふ給へらるゝに。されど此道は執心をこそひとかたのたよりとして侍れば。をろかなる身をはぢて。いよいよものうくし侍らむは。住よし玉つしまふたつのおほん神の見そなはすらむも恐れおほく侍れば。せざるなりあたはざるにはあらずとかやのふるき詞に心をいさめて。つとめ學ぶべきにこそ侍らめ。偖も寛正(後花園)四の年の九月に左大臣殿この社にまうで給ふべきあらまし侍て。おなじく御供につかうまつるべきよしもよほされ侍りしに。馬鞍よりはじめて。さうぞくありさま。なべてのきらをつくし。みがきたてらるゝなれば。たづきなき身には此いとなみ叶ひ侍るまじきよしいなび申侍りしに。とりわき仰のむねなどこまやかなる御沙汰にをよぶことありしかば。とかくおもひいとなみ侍りしに。勝智院(重子)殿と申せしは將軍(義政)家の御母うへにておはしましゝが。月頃おもくいたはり給ひて。八月はじめの八日になむうせ給ひぬれば。なべての秋の露もしぐれも。もろ人の袖の上にのみしほれはてつゝ。そのまゝやみにしを。御ぶくはてば。かならずのやうに聞へしにこそは。又御位ゆづりなどとて。世中ゆすりみちて。新院の御幸いしく〱室町殿へありしかば。さやうのおほむいそぎにうちをかれて。ことしおなじき六の年長月廿日あまり一日と定められて。又有しやうにぞ人々思ひいとなみ侍りし。すぎし時よりの仰なれば。此たびかならず御ともにつかうまつるべきを。久しくしる所。ふる河野べの過にし年をへてさまたぐるゑびすもなくて侍りしを。おもひの外なる事あれば。其よしを歎申せしに。れいのいつくしみ深きおほむ心にて。さらばとて此たびのめしにはまぬかれぬるに。かつ

は後記のため。かつは神慮もいかゞと。一かたならずほいなくおぼえ侍りしに。宗匠[雅世]はかねてよりいざなひおほせられしを。此たびの撰歌によりてめしなかりしを。雅康の中將はかならずまいるべかりしに。はらからのいとまのほどにて有しやらむ。そのかはりに宗匠家よりいだしたてられしかば。かのいとなみをなむひたすら身のいそぎになして。御供にぞつかうまつり侍りし。道すがらもろ人のさうぞくなどのきら〳〵しき。まねびたてんも言の葉たるまじければもらしつ。かく此たびもおもはずなる人のさはりによりて御供に侍るも。神のしかるべきおほむはからひにもやとぞおぼえ侍る。みかさ山陰高くあふぎかしこみ奉るこゝろに。よし田の御社に月每に歩びをはこびて。つたなき身の行末をうれへ申に。その御あはれびにもやとおぼしきしるしども侍れば。うき今ながらたのもしきふしも侍るにや。廿一日酉の刻ばかりに一乘院につかせ給て。その夜風流の延年とかや侍りぬ。そのつぎの日やがて御社參あり。廿三日晝のほどはこゝかしこの僧坊にいらせ給ひて。夜にいれば又延年有。こよひは此惣寺より風流の數を盡してすべき由申侍りしに。暮ぬほどよりは人々おほくまいり集りて。誠にめもかゞやくばかりなることゞもは。筆にも盡しがたし。廿四日は大佛を初てこなたかなたの靈場ども巡禮し給ひて。戒壇院にては御受戒の作法など有て。すぐに公惠僧正の坊にいらせ給ふ。人々花をおりてめづらかなる物見にこそ侍りけれ。是にて東大寺の寶藏のふるき寶物ども多く御覽有けり。此寶藏には勅封をつけらるる事にて。頭左中弁のぶたね。束帶にてぞ勅封をばひらき侍りし。廿五日。猿樂とて。朝よりま

いりて。暮てぞ宿に歸り侍りし。かやうに隙なくいてつかうまつる程に。とく社參し侍らむと。心にかけておもふ給へながら。とかくまぎらはしきに。けふまでに成ぬるも神慮おぼつかなし。やう〳〵けさぞ心しづかに參りて。わたくしのみてぐらなどさゝげて。宮めぐりし侍りし。こよひ又延年有べきにて侍りしに。時雨ふり出て。御庭の舞臺も濡て侍れば。あすの夜になりぬ。たま〳〵いとまあれば。とりしづめつゝともしびの許にむかひて。こゝろをすまし侍りしに。妻とふ鹿の聲いとちかくきこえて。暮行秋の名殘をおしみがほなり。野原の草のまくらならねど。此あたりのならひにて。いとめづらかなるたび寐なり。更行まゝにいとゞ靜まりて。心しづかに侍れば。南無かすがの大明神といふことを。一文字づつ五文字のかみに置て。十三首の法樂をなんよみ侍りぬる。此心ざしひとへに題の心をおもひて。ありのまゝにいひ出しぬるにも侍らず。又ことばをかざりこゝろをたくみて思ひしづめるにもあらず。唯あめのした靜に。君が代をながく久しくとおもひ。又は數ならぬうき身をうれへて。行すゑを神にまかせて。うきをもよろこばしきをも。共にいひあらはせるばかりにて侍れば。哥のすがたにめで給ふべきふしも侍らねど。心ざしの深き色にことばの花なきを忘れ侍りぬ。いはぬ心のうちをもそらに照覽あるべき事なれど。とかくすます心にすゝめられて。身のむかし身の行すゑ。おもひと思ひ出すふしをば。かたのやうに書つけ侍りぬ。これさらに人に見せてあざけらるべき事にも侍らねば。こゝろのうちにおもひめぐらして。ことの葉にいだし侍らずともおなじことなれど。猶たしかなるうれへのほどをも。神には知

られ奉らむとぞ思ひたまふるなり。

秋天象

なかめつゝ更れはいとゝすみ增る

こゝろや月の光なるらむ

秋天象

むら雲の往來をはやみしくれきて

野分になりぬ秋の暮かた

秋地儀

かきりなくあふく心の色とみよ

三笠の山の秋のちしほを

穐地儀

すきかてに詠てけりな春日のゝ

おとろの露のあきのさかりを

秋植物

風すさふ草木はあれと荻はかり

そよや秋そと聞つてそなき

秋植物

のこしをかむ秋の形見かから錦

枝に一むらうすき色かな

秋動物

たちまよふ霧のまきれにくる雁や

はなれぬつらも絶まみゆらん

秋動物

いとゝしくをしかの聲の哀さも

ことしの秋の旅ねにそしる

秋雜物

身のよるへ神はしらせよさほ河の

霧の朝げにまよふ捨舟

秋雜物

山のはの月を東にいそけとや

この大寺の入あひのかね

秋人事

うきことを何そといはゝこたへまし

とはれぬ秋の夕ぐれの空

穂人事
しるやいかに寐てもさめてもあきのよの
長き思ひを神にまかすと
秋人事
むすひをきし契りや深き神と君
代々にまちみる秋の手向は
廿七日。そらこゝろよく晴て。宵の雨の名殘もなきに。けふは若宮の祭禮なるべし。ことに風流のさうぞくなりとてひしめけば。をりあをのかり衣にきぬかさねて。むくらんじのさしぬきなどきて。巳のはじめばかりに一條院にまいりぬとは。やがて御出なり。御裝束は菊紅葉などえもいはずこきませたる唐をり物の御小直衣に。朽葉のきぬかさねて。香の御さしぬきなどきはことなる御さまは。筆にも書のべかたし。馬鞍よりはじめて。わたくしさままでいたく心けさうして。思ひ〳〵に出たつさまいと興あり。かくて黑木の御所とかやいひてこゝろもをよばずつくりたてぬる御棧敷にぞいらせ給ひぬる。み山木のをのがさま〴〵おひいでたる。なをきをもまがれるをもそのまゝなるまろ木どもにて。その處々に作りあはせぬる。たくみどものしわざ見所あり。軒ばを松杉などのみどりふかき葉にて青やかにふきわたしたる。まづめとゞまる心地するに。大衆兒などけさかづきてむれたちたる。めもをよばずひろき所にところせげにをしあひたるさま。げにもちごのやぶさめ隨兵などとてわたるに。又ことやうなるあやしきすがたしたるさま〴〵のわたり物どもおほくみゆる。いとめづらかなる事どもなり。此祭禮は。ちかくは霜月にのみをこなはれて式月なる事もまれなるとかや。されどかく御まいりのたびには。こと更に式月にとげらるゝ事も。鹿苑院の

入道のおほきおとゞ（義滿）の御まいりなどより代々の御事にもなりぬるにや。誠に和光同塵は結縁のはじめとなむ申侍れば。かく高きいやしきまいりつどひて。けふのたうとさをあふぎかしこみ奉るは。なほ神のおほむこゝろにもかなひぬらんかし。さて酉のなからばかりに事はてゝ。夜に入ば又御宿坊にて延年有。風流のさまは廿三日の夜に事盡ぬるこゝちし侍りぬるに。今宵もまたさま〴〵の事ども多くて。曉がたに事はてゝぞをの〳〵まかでぬる。廿八日。後宴とて。けふは又きのふの御棧敷に引かへて。うつくしき柚木どもにて白く作りみがける所にて。廿五日のやうに。やまと猿樂の四座とかや。さま〴〵の興を盡して。はてには田樂など有て。子の刻ばかりにぞ還御なりける。御所にも又御供の人々も。けふ迄のおほむ遊びさま〴〵の物見など。名殘ある心にや。

さかづきの幾めぐりともなく數おほくなりて。わたくしざまゝで。醉のこゝちなどみだりがはしくて。御かへりはすゞろに馬などはやめていさみあへるさまもいと興おほかり。廿九日。かはたれ時よりしたゝめて御坊にまいりぬ。いつしかと花の都にかへるべき家路のみ。たれも〳〵催されつゝ心のいそがるゝにも。けふより又故鄕となりぬべきならの都も。いと名殘おほかり。宇治にてしばし御休有て。是より御舟にたてまつりて。ふしみの指月といふ所までめさるべきにて。をの〳〵舟どもに乘もいとおもしろし。御船には一位大納言殿。なか繼朝臣。御劍をもつ。其外は武家の衆少々のせらる。一艘には公卿殿上人のる。廣橋中納言。三條宰相中將ます光。頭左中弁のぶざね。頭中將宗綱。前左衛門佐經熙。爲廣朝臣。冷泉少將。右少弁ひさ光。言國。山科少將。右兵衛佐兼顯。俊量。綾小

路侍従。もとつな。そうじて六七艘侍りしやらむ。いろ／＼の装束共にて。乗たる舟どもはるばると漕うかべぬるさま。紅葉にてはかざらねど。かの兵部卿宮のこの川にて舟樂などし給ひし昔がたりぞこゝろにうかびぬる。雲井に見ゆるとよめる朝日山をはじめて。まきのしまさま／＼の名所どもさらでだに有べきに。こくうすく色づきわたりたる。をちこちの野山の梢ども。くもりなき夕日に染られて。おほかたの秋の哀も身にしむいろをそへぬる折から。いとゞこゝろなき我みをぞ耻ぬる。かく日数をへたる旅の御心のうちも。道すがらのあはれも。折にふれことにつけたるおほむ遊びにも。あはれ宗匠のまいらば。仰られかはす一ふしども、おほかりぬべきものをと。先おもはるゝこそ。例の門弟のかたはしなる心のもよほしなれと。をこがましきや。御舟の前にて

綱引などして。おほきなる鯉をとりてまいらせぬる。かの孟津とかやにて。白魚の船に入けむもろこしの遠きためしもおもひ出られて。おさまれる代のめでたき事のみぞよろこばしき。かくて伏見より又御輿にて道いそがれぬれば。室町殿へは申の終にぞつかせ給ひける。はる／＼の日数をへたるほど。雨風のさはぎだになくて。心殊におもふことなき。此たびの事ども。めでたさいふばかりなし。御供の人人はやがて御はかしまいらせて各まかでぬ。此外くはしき事共はべちにしるしをき侍りぬれど。是も書つゞくるつゐでに。秋のむしのさせることなく。夏の鹿の聲にたつべきことならねど。かつやりすつべきほんごのはしに。みきゝぬる事をいさゝかかきつけて。人には見すべき物ならねば。我こゝろといひあはせてやみぬるになむ。

群書類從卷第二十八

神祇部二十八

東家秘傳

北畠准后親房卿

日本書紀者。藤原朝廷天津足根大父天皇御宇。一品親王奉詔所制作也。上始混沌未分之昔。下終人皇四十一代高天原廣野姫天皇之御宇。古來讀此紀者。或秘而絕其傳。或暗而失其致。故欲明用心之道識理世之術者。迴訪印度之釋典。遠決支那之書史耳。予久覽我國之舊史。粗了此道之所在。天地造化之根元。神皇授受之因起。其理玄妙。其詔明白。撿此於異域之道。果然無秋毫異。凡厥陰陽之理。造化之端。自始至終無離五運。五運消息終而又始。當與天壤無窮者。蓋此道也。是以粗據神書之明文。敢聊勤愚管之所見。文不筆削。立心爲致。都十箇條。命曰東家秘傳矣。

第一天地未割名渾沌也。

渾沌者。天地未割之理。一物未生之前也。

解曰。一物未生ノ前ナレバ。可字之處ニモ非ズ。可象ノ形モ無。如雞子溟涬而含牙トモ云。猶浮膏而漂蕩トモ云。猶海上浮雲無所根係云。且取喩雖論之。實ニハ有形體コトトモ不可言之。有對無名。無對有稱也。有無ヲ離テ名字未立時ヲ渾沌云ベシ。然モ此渾沌位ニ五大ヲ具定〔足歟〕。萬德同備セリ。一顆ノ珠ノ中。水火ノ二德ヲ具スルガ如シ。此珠ノ體ヲ見ニ。都テ一物ヲ蓄ルトハ不見。若日月ノ光ニ遇トキハ。必火ヲ生ジ水ヲ生ズ。然バ乃此珠天然トシテ含水火トコトハ得可知。渾沌モ又如此也。又物未生ノ時。儒典ニハ元氣トモ大極太一トモ云ヘリ。此元氣ハ如露

シテ。六合ニ充塞ル。此中ニ水火ノ二德アリ。是身心ノ根元也。露ノ濕生ハ水也。水ノ體ハ圓也。露ノ中ニ含靈ハ心也。火ノ體三角ナルベシ。其淸陽ノ氣ハ薄靡爲レ天。重ク濁氣淹滯爲レ地トモ云ヘリ。淸陽ナルハ乃火ノ氣也。上リ升ルハ火ノ性也。下リ降ルハ水ノ性也。今此渾沌未レ分處ハ立レ心者大ナル象也。苟モ其道ヲ得ツレバ。天地ニ先テ造化ニ主タリ。我國ノ神代ヨリ此遺炳焉タリ。全ク內外ノ典籍ニ關カラズ。知與レ不知言與レ不言ナリ。抑此渾沌所具ノ水火ノ二德。委クスレバ五大也。上轉下轉ノ二ノ用アルベシ。下轉スレバ空風火水地ト次第シ。上轉スレバ地水火風空ト生起ス。無レ端如レ環。相攝ルコト如レ珠。志レ道者更ニ問ベシ云々。

渾沌之形譬如二雞子一也。

雞子者純圓ニシテ無レ端。譬含レ牙者云ハ。天然而遂二陰陽一之稱也。

解曰。未分ノ理ヲ渾沌ト云。已分ノ氣ヲ陰陽ト云。陰陽ト云ハ水火也。故性具ニ約而圓ト云ニ無レ錯。三角ト見ルモ不レ差。彼圓ト三角トハ元來□體上變相也。三ヲ圓トシ。圓ヲ三トス。其中間ハ團虛空ノ相トス。故知ヌ。空ニ三ト圓トノ三德アリ。依レ之水火二用ヲ施ス也。又圓ハ兩箇ノ半月也。半月ハ風氣往來ノ形。陰陽ノ氣往來シテ水ヲ生ズ。此時ニ一圓相成ス。此ヲ天ノ形ト云ヘリ。又三角ノ火性ニ自陰陽ノ二德隨憂恚心トナル。是故ニ男女アリ。然バ乃男女ハ一心ノ所變ニシテ本來ノ二ニハ非ズ。彼二ノ三角ヲ合テ一ノ方形ヲ成ス。方ハ地ノ形也。天ハ圓ニシテ物ヲ覆德アリ。故圓蓋云。地方ニシテ物ヲ戴德アリ。故方輿云。方圓ノ二法ヲ以テ天地ノ初トシ。萬物ノ所依トス。渾沌ノ處ニモ自然圓形談

ズト云ドモ。先後ニ亘。天地已分ノ後ニモ。地方ナル對シテ天ヲ圓ト云也。密敎ニ天地曼陀羅ヲ建立ス。其義全同。方形ハ萬物造化ノ上ニ各天眞ノ理ヲ通ジ。圓相一物未生ノ前ヨリ無始無終ノ心ヲ表セリ。神道ノ玄妙言語道斷ト云ベキニヤ。深秘云々。

第三 陰陽初判。一物生レ中也。

及ニ其清陽者薄靡而爲レ天。重濁者淹滯而爲レ地。精妙之合搏易。而重濁之凝埸難。故天先成。而地後定。然後神聖生ニ其中ニ焉。

又曰。天地之中生ニ一物ニ。狀如ニ葦牙ニ。便化爲レ神。號ニ國常立尊ニ。

解曰。天地ノ名言ハ緣底起ルヤ。是ハ自然ノ尊理情識所レ不レ測也。萬物ノ名言モ又如レ此ナルベシ。若漢土文字ニ約シテ義ヲ立バ。一大ヲ天ト云。至高シテ無上ノ義也。土也ヲ地云。土ノ二畫ハ地ノ德。下可レ畫。又地上地中ナリ。萬物之形ト云ヘリ。天ハ他年切。地ハ徒二ノ反。其從來ハ不レ可ニ得而知ニ理也。故從レ此已往ヲバ儒書不レ明レ之。我國在ニ人民ニ以來。天ヲ阿麼云。地ヲ毘尼云。又ハ都知云。便是自然ノ理ヨリ如レ是名言トナル。然而釋典旨符合シテ甚深ナル義漢朝ノ說ニ勝レタリ。更問レ之。阿ハ最初ニ開レ口聲也。諸音四十七音也。皆此聲ヨリ轉生シ。万物造化スル元也。有情非情皆此德ヨリ現成。此天地相分根元數ヲ以可レ知也。混沌初分テ卽天上ト知。是一氣初テ生ル也。是陽ノ道也。奇數ニ相應ス。奇ハ半也。其性ハ水也。當體ノ水ニハ非ズ。故其清陽氣ハ上リ升テ上ニ在。水性ノ上清陽氣アルニ。卽火ノ陰不二ノ美以レ之可レ知若方取。北方也。已ニ一ト云理アレバ二ハ隨テ自在レ之。其二トハ。方卽地二知。是陰ノ道也。偶ノ數ニ相應ス。偶ハ重也。重濁ルノ氣下降テ下ニ在。若方ニ取バ南方也。其性ハ火也。當體ノ火ニハ非ズ。火上升ル聲アリ。然而地二チ火ト云 是不二ノ義

也。天上ヨリ水生ジ。地中ヨリ火生ズ。目前ノ造化。天然ノ道理ナリ。凡一二ハ不離ノ法。水火互具ノ德アリ。水ノ中明ナルハ火也。故字ヲ造ル元二也。水中ノ昧ハ水也。故字ヲ造元三也。下ニ可レ釋レ之。如レ是道理ニ依テ。陰陽ノ道互ニ升降シテ。天ト成地ト定。已ニ上下ノ相分トナラバ。中有ト云コト又可レ知レ之。故ニ天ノ三道出生ス。而シテ此中位ハ空也。一ヨリ二ヲ生。二ヨリ三ヲ生ジテ。天地ノ道極。故大極之一ハ函三云リ。內典有二空不生空假中等義一皆是也。假令バ横ナル一ヲ立テ丨ト成。是一動也。又一轉シテ一ト成セリ。元來ノ横一ニ反テ。然其意ハ大ニ異也。萬物ノ理皆如レ此ナルベシ。今此天三ノ空中ニハ何物カ主タルベキ。此ハ是風ノ所在ト可レ知也。此風ハ非二從レ外來一。元來ノ相分卽是風ナリ。水用ヲ施。又風萬物造化。又此風也。故風ヲバ地四ノ位ニ居テ。四方ノ位ヲ定ベシ。已ニ四方ノ位ヲ成タレバ。其中央アルコト可レ知。是ヲ天五ノ位ト云。此位ヲバ地トス。當體ノ地ニ非ズ。所レ居約地ト云。如此ニ五位成ヲ水火空風地ノ五大ト云。又此中央ノ五ハ最後ニ出生スレドモ。四方ヲ統領スベキ道理天然也。密經之深義。此等ノ說ニ符合ス。北極ノ五星ヲ五天ノ位ニ習也。天一ヲ天皇天帝ト習フ義アリ。更問レ之。如レ此次第ハ造化ノ初テ一往ニ計也。五ニ至留ル。通計スレバ一十五。是ヲ天地自然ノ數ト云。周易家ニハ小衍ノ數ト云。衍ハ大也。豐也。盛也。盈也。數ニ盈タル義也。天地ノ中ニ生ニ一物一。狀若ニ葦牙一。便化爲レ神。號ニ國常立尊一ト云ハ。此中央ノ五位ニ相應シテ化生シ給ヘル神也。此神ヲバ又天常立ト云。天御中主ト云。元氣ヨリ萌牙シ。五大ヲ化成シ給ヘリ。又天狹霧。國狹霧トモ申。出生ノ根元稱シ奉ル也。又ハ天禪日。國禪月トモ申ス。陰陽不二ノ獨尊タル御號也。此神五大ヲ一身備ヘ給ヘリ。然而獨立尊坐。五德ノ一以レ不レ可レ名之故。天

地ノ倶生神トモ申ス也。五行成數各著ニ其德一也。

第四　次國狹槌尊。又國狹立。次豐斟渟尊。又豐國主。凡三神マス矣。國常立チ奉レ加。乾道獨化。所ニ以成ニ此純男一。次埿滿鑒反。泥塗也。土煮尊。沙土煮尊。又泥土根。沙土根。次大戸之道尊。大笘邊尊。又大戸摩彥。大戸摩姬。又大富道。大富邊。次面足尊。惶根尊。乾坤之道相參而化。所ニ以成ニ此男女一。

解曰。常說ニハ國常立ヨリ次第ニ化生。上三代ハ純男。次三代ハ陰陽形已ニ著而無ニ其態一思ヘリ。祕說ニハ。國常立ヲ五德ノ神ニテ代ノ次第ニハ非ル也。此五尊出生給ヘルコト。又五行ノ出生ニテ料簡シ奉ルベシ。次ニ前小衍ノ數。一二三四五也。再往シテ計ニ之ヲ一ハ。地六天七地八天九地十ト出生ス。其數合テ五十五。此ヲ大衍ノ數ト云。此再往ノ時ニハ水火木金土ト成也。是五大ノ位ヨリ衛其德ヲ等也。先地六ヲ生ズル故ハ。中央ノ五北方ノ一ニ相感ジテ六ト成。是ヲ水ノ一六ト云。次ニ又南方ノ二ニ感ジテ七トナル。是ヲ火ノ二七ト云。次東方ノ三ニ感ジテ八トナル。是ヲ木ノ三八ト云。次又西方ノ四ニ感ジテ九トナル。是ヲ金ノ四九ト云。次又中央ノ五自感ジテ十ヲ成ス。是ヲ土ノ五十ト云。五大ノ中ノ東方ノ空ハ木ト成。故空乃木ト云ニハ非ズ。空ヨリ風ヲ生。風ニ水火ノ二德アリ。相感ジテ心ヲ生ジ身生ズ。然後毛髮生ガ如。凡五行出生根元。人靈心身ヲ本トシテ國土艸木ヲ成也。故火ハ心也。南方ノ☲ノ卦ヲ以作レ之。水ハ身也。北方ノ☵ノ卦ヲ以作レ之。此水火ニ於相互先後スル理ナリ。不二ノ義炳焉也。喩ヘバ有レ心然後ニ有レ身ト云ハ。火先ヅ生。水後ニ生也。二水和合シテ心詫ニ此中一ト云。水先生ジ火後ニ生ズル也。中陰胎內等ノ義。委ハ內典ヲ可レ訪也。二水不レ壞シテ骨髓ト成リ血肉ト成。心處中胎ヨリ五七月

至。人體ヲ生ズ。此ヲ五位ト云。（五位ノコト。五大ノ轉チ以可レ知也。）從レ此次第ニ手足等ノ形ヲ生ズ。眼目等ノ根ヲ生ジ。毛髮ヲ生。皆是水火風ノ所レ成也。如レ此五行ヲ生成スル時ニ。木ヲ以空ノ位ニ居リ。艸木ノ色初黃後靑シ。虛空ヲ表スル也。次ニ西方風金ト成。故ニ風水相應シテ泡沫ト成。其泡沫堅固ニシテ。天上ノ諸宮殿乃至須彌四大洲等ヲ生ズルト云コトハ。內典ニ說也。然レ者有ニ形體一皆是地ノ大德也。泡沫ノ積也。其地ヨリ生ズル至テ精ナルハ金トナリ。麁ナルハ土ト成。依レ之金ハ西方ノ風位ニ居シ。（西方風方陰也。）土中央ニ處也。如レ此次第ニ生起シテ。五行ノ德ヲ著ニ。各神化生。此故ニ合スレバ國常立一身ノ上ノ五德。開ハ國狹立等尊五神ニ坐ス也。又國狹立豐國主神ハ純男ト云ヘリ。此位ニ男女ト云難シ。決定陰陽不二ノ神ナルベシ。又水火ニハ對揚ナシ。以レ之可料簡。木金土ハ對揚アルベシ。故各々ニ陰陽相對シテ化生シ給也。

（第五）陰陽二神產ニ生人物一也。

次有レ神。伊弉諾尊伊弉冊尊云々。

伊弉諾尊伊弉冊尊立ニ於天浮橋之上一。共計曰。底下豈無レ國歟。廼以ニ天之瓊矛一指下而探レ之。是獲ニ滄溟一。其矛鋒滴瀝之潮。凝成ニ一嶋一。名レ之曰ニ磤馭盧嶋一云々。

一書曰。天神謂ニ伊弉諾尊伊弉冊尊一曰。有ニ豐葦原千五百秋瑞穗之地一。宜ニ汝往脩一レ之。廼賜ニ天瓊戈一云々。

解曰。上來ノ五神ハ五行ノ精妙ナル處也。（開合ノ義右ニ載レ之。）此五德ヲ陰陽二神與ニ造化一ノ元祖云給ヘル。此ヲイサナキイサナミト申。（或云。伊弉諾ト云ハ內典ニイハユル伊舍那天ナリト。伊舍那ハ自在ノ義也。）地水火風空（若ハ土水火金木）次第スルニ。上轉ノ義。陽神ノ德也。空風火水地（若ハ木金火水土。）次第スレバ。下轉ノ義。陰神也。上下ハ

郎左右也。是故ニ陽神ハ左ヨリ旋。陰神ハ右ヨリ旋テ。一面會テ萬物ヲ產生ス。陰陽二ニシテ不二ノ謂也。天地倶生神ハ和魂也。中間ノ五神ハ五行ノ德也。幸魂ト云ル此義歟。陰陽二神ハ荒魂也。次第ニ約テ七代ト稱スレドモ。實ニ二代也。七代十一神坐ス也。

第六
變二易五行一建二立八卦一

☰乾　☷坤　☵坎　☲離

☳震　☶艮　☴巽　☱兌

此ヲ云二八方之卦一也。一者爲二陽爻一。天之象也。二者爲二陰爻一。地之象也。一成レ二。二成レ三。是三才之理也。故畫二三爻一以成二八卦一也。通二天地之道一極二萬物之理一。無レ善二於此八卦一矣。

解曰。今此八卦ヲ建立スル。我國ノ說ニハ不レ見。然而其理ハ炳焉也。五方ノ位ヲ成シ了。四維道ハ隨テ有。此時ニ至テ。北方ノ天一ノ位ヲ西北ニ置。乾チ以天ノ方トスル此故也。乃乾卦ヲ成。是ハ天也。陽之初。南方ノ地二ノ位西南ニ置。乃坤卦ヲ成。是ハ地也。陰ノ初也。東方天三ノ位ハ東北ニ居ス。乃艮ノ卦ヲ成。是ハ山也。西方地四位ヲ遷シテ東南ニ居。乃巽卦成。是風也。中央ノ天五ノ位ハ不レ動レ之。如レ此四維遷了テ。地六位北方居ス。乃坎封ヲ成也。是水也。天七位南方ニ居。乃離卦ヲ成。是火也。地八ノ位東方ニ居。乃震卦成。是雷也。天九ノ位西方ニ居。兌ノ卦ヲ成。是澤也。若其生起ヲ云時ハ。北方ノ☵卦ノ一陽ハ萬物ノ生ズル初也。喩バ一年十二月ハ六陽六陰。十一。十二。正。二。三。四。此ヲ六陽トス。五。六。七。八。九。十。此ヲ六陰トス。十月ニ至テ陰氣終盡ス。十一月冬至ノ夜半子ノ剋。一陽初テ生ズ。終而又始リ。極テ又生理也。此一陽ノ氣ヨリ次第ニ生起スル子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥ニ消息シテ萬物始終ノ相ヲ表スル也。委曲ハ別ニ可レ習ナリ。我國ノ神道ニ可二配當一。五行ノ八神ニテ其

義ヲ可レ成ナリ。陰陽俱生シテ。神中央ニ在テ不レ動。國常立ノ神ノ御事也。中央ノ五地ノ極ニ配ル。右ニ記レ之了。故水火木金土ノ五行八神ハ八方ニ居。陽神ハ上方ニ居テ天ヲ主。陰神ハ下方ニ居テ地ヲ鎮ベシ。伊弉諾神。功已了。高天原ニ還給ヒ。伊弉冊尊ハ火ノ神ニ被レ破テ地底ニ留リ給テ。其儀炳焉。八神ヲ八方ニ安置セバ。五德ノ神ヲ五方ニ安ジテ。然後八位ヲ成ベシ。所謂五德者。

國狹立水

埿土根 沙土根 木

面足 惶根 土

豐國主火

大富道 大富邊 金

八位者。

埿土根山　面足雷　大富道風

沙土根水　大富邊火

國狹立天　惶根澤　豐國主地

上行五方八卦配當。恐是今案也。然而五行以推レ之無ニ過失一也。天北斗者水一六相合精也。易家説。故七星成。此本命元辰星トス。其德分日月火水木金土ノ七曜ト名ク。此七星ノ德。又四方著。二十八宿ト云。四方各七。然則北辰北斗七曜二十八宿諸星。元起ニ含本命一也。又東方神ヲ青龍ト云。木精神也。其數ニ依テ八龍神トモ云。南方神朱雀。火精ノ神也。其數ニ依テ七鳥神トモ云。西方神ヲ白虎云。金精ノ神也。其數ニ依テ九虎神トモ云。北方ノ神ヲ玄武ト云。水精ノ神也。其數ニ依テ六蛇神トモ云。中央土神也。五基神トモ云。其色ハ黃也。內典ニハ堅牢地神ト云。其習アルベシ。如レ此ノ義重無レ盡也。羅縷不レ遑者也。此理ハ兩儀造化之根元也。萬象森羅之因起也。故陰陽二神磤馭盧嶋降給テ。八尋殿化立。卽大八洲國ヲ產生ス。又日像ノ寶鏡作テハ八咫鏡ト名付ケ。神璽寶八坂瓊曲玉稱。又神劔ハ乃八岐ノ

大蛇ノ精神也。其蛇ヲ斬シカバ。八ノ雷ト成テ天ニ昇テ。甚深ノ義不レ可ニ勝計一矣。

第七 地神五代應ニ五行運一也。

皇祖大日靈尊者。陰陽二神之所レ生也。或云。陽神左手持ニ白銅鏡一而所レ生也。此神又號ニ天照太神一。又號ニ日神一。第二代正哉吾勝々速日天忍穗耳尊者。感ニ日神弟素戔烏神所レ獻之寶玉一而所ニ化生一也。第三代天津彥々火瓊々杵尊者。吾勝尊娶ニ天神高皇產靈尊女栲幡千々姬一所レ生也。奉ニ皇太神勅一始降ニ臨葦原中國一。第四代彥火々出見尊者。瓊々杵尊娶ニ大山祇女木花開耶姬一所レ生也。第五代彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊者。彥火々出見尊娶ニ海童神女豐玉姬一所レ生也。已上此曰ニ地神五代一矣。

解曰。今此五代神。五行運相應シテ。次第出生シ給コトナルベシ。凡五行ハ水火ヲ本トセリ。其精日月トス。故天祖神ニハ。天禪日。地禪月ト云御名アリ。日月ノ二ト云ニハ非ズ。其冥德稱スル也。次伊弉諾尊日子申。伊弉冊尊月子申。是陰陽二相分。遂ニ日月神生給フ謂也。所レ生日月乃火精也。但日神金德神坐。深義アルベシ。更問レ之。吾勝尊ハ水德ノ神ニ坐ス。同前。瓊々杵尊ハ木德ノ神ニ坐ス。火々出見尊ハ正火中ヨリ出生シ給。火德ノ神ニ坐ス。御母木華開耶姬ト云。乃木精也。生レ火ノ理分明ナリ。葺不合尊土德ノ神ニ坐ス。如レ此配ニ當奉五運次第一。更無ニ差異一。五行相生終又始。古往今來無レ有ニ窮極一。故天祖勅シテ曰。豐葦原千五百秋瑞穗國。宜ニ汝往脩一之云々。千五百秋者爲ニ是無窮一稱ナリ。天照太神勅ニモ又如レ此。下人代ニ至マデ又相生法盡期アルベカラズ。世祖神武天皇。辛酉年受レ禪給故。金德ニ依テ天下ノ主タリ。葺不合尊土德ヲ承テ出生シ給フナルベシ。從レ是水木火土ト相承シ給フ。終テ又始ルベシ。若瓊々杵尊天

降給シヲ元祖トセバ。木火土金水ト相承スベシ。是故ニ紹運ノ主。相生ノ道ヲ以天下ヲ治玉フベキ也。自然ノ理無究ノ德其意在レ此哉。

第八 相生相剋此爲ニ順逆一

五大者能生之理。五行者所生之德。相生者是順。相剋者是逆。順逆之道。悔吝之象也。

解曰。五大五行者能生所生也。五方五季五色五音五香五味等ノ用アルベシ。青赤黃白黑ハ如レ次空火地風水ニ配當ス。東南中西北ニ配シ。春夏土用秋冬ニモ當リ。若受染次第ヲ云ニハ。(染相次第也。)最初ノ色ハ白。中央土用トス。次黃色。東方ノ春色。次青色。南方夏色。次赤色。西方ノ秋色。次黑色。北方冬色。是木滋潤之次第也。世間ノ法ニハ受染ノ次第ト云。五大(虛空藏之色如レ此。故五穀成就ノ爲ニハ必此法ヲ修ス。故金門鳥敏ノ法トモ名ク。)音香味等モ准可レ知也。五季ニハ夏秋ノ間ノ土用ヲ正土位トス。然而四季ニ亘テ各一十八日。合七十二日。四季モ又七十二日。都合三百六十日。是ヲ以一年ヲ成也。五方ニ中央土。四方四維統領ス。若人身ノ上ニ配當スレバ。肝心脾肺腎ノ五藏。如レ此ノ次ノ五季五色ノ氣也。其內ニアル魂ハ(肝之所レ生。)神ハ(心ノ所レ生。)志ハ(脾之所レ生。)魄ハ(肺之所レ生。)精ハ(腎之所レ生。)ト云。其外ニ着ハ。眼(肝ノ所レ生。)舌(心ノ所レ生。)口(脾ノ所レ生。老子經。口ヲハ犯トモ他ニ主ル。註ニ以ニ五味ヲ從レ口入テ藏レ於レ胃(脾ノ名)。形骸骨肉血ト成ト云リ。)鼻(肺所レ生。同經ニハ五氣ヲ從レ鼻入テ藏レ心。精神聰ニシテ音聲ト成ト云ヘリ。古ニハ鼻ノ字自ニ從心ニ從テ作。鼻息ヲ於入。是ヲ命トス。故息ノ字ハ〔恐有脫字〕ト心從也。)耳(腎之所レ生。)如レ此ニ配當シテ相生相剋ノ道ヲ得テ。身ヲ修メ養生ノ法トス。乃至天文地理算術巫醫音樂農業ノ道。一トシテ此相ニ依ラズト云コトナシ。若相剋スレバ其道不レ成シテ災害トナル。相生ハ是順也善也。相剋是逆也惡也。故王者國ヲ理ム。人臣ノ官ヲ守ル。相生ノ政ヲ知テ相剋

ノ亂ヲ濟也。反之者亂世亡國。所謂仁禮智義信ノ五常。如次木火土金水所感也。仁ニ依テ禮ヲ行バ木生火。禮ニ依テ智ヲ行バ火生土。智ニ依テ義ヲ行土生金。義ニ依テ信ヲ行金生水。信ニ依テ仁ヲ行バ水生木。是ヲ相生ノ道ト云。仁害智木剋土。禮害義火剋金。智害信土剋水。義害仁金剋木。信害禮水剋火。是相剋ノ法ト云。明王相生ノ術ヲ得テ天下和平也。暗王相剋ヲ行テ國家凋弊ス。父子之道君臣ノ□夫婦ノ間。乃三才之道也。尙書洪範九疇ニ專此義ヲ明。而我國政術神代ヨリ此理炳焉。深可學ナリ。

第九　造化之端皆是玄妙也。

天地未割。陰陽不分。渾沌如雞子。溟涬而含牙。是一。其淸陽者薄靡而爲天。重濁者淹滯而爲地。是二。天地之中生一物。狀如葦牙。便化爲神。號國常立尊。是三。次國狹槌尊。次豐斟渟尊。乾道獨化。所以成此純男。次有神。埿土煮尊。沙土煮尊。次有神。大戶之道尊。大苫邊尊。次有神。面足尊。惶根尊。乾坤之道相參而化。所以成此男女。是四。天神謂伊弉諾尊。伊弉冊尊曰。有豐葦原千五百秋瑞穗之地。宜汝往脩之。迺賜天瓊戈。是五。於是二神立於天浮橋上。天狹霧中トモ云。投戈求地。因畫滄海而引擧之。卽戈鋒垂落之潮。結而爲島。名曰磤馭盧嶋。是六。二神降居彼嶋。化作八尋之殿。又化竪天柱。然後云々。是七。廼生大八洲國。次生海。次生川。次生山。次生木祖句々廼馳。次生草祖草野姬。既而伊弉諾尊伊弉冊尊共議曰。吾已生大八洲國及山川艸木。何不生天下之主者歟。於是共生日神云々。次生月神云々。次生蛭兒云々。次生素戔嗚尊云々。

解曰。已上八ヶ條可有深意。更問之。

第十　治世要道神勅分明也。

天孫降臨第一書

天照太神乃賜二天津彥彥火瓊々杵尊八坂瓊曲玉。及八咫鏡。草薙劒。三種寶物一云々。因勅二皇孫一曰。葦原千五百秋之瑞穗國。是吾子孫可レ王之地也。宜二爾皇孫就而治一焉。行矣。寶祚之隆當レ與二天壤一無レ窮者矣。

又曰。天照太神手持二寶鏡一授而祝レ之曰。吾兒視二此寶鏡一。當レ猶レ視レ吾。可三與同レ床共レ殿以爲二齋鏡一云々。

神皇實錄曰。皇天御中主神與二大日靈尊一盟。宣二天皇孫尊一。如二八坂瓊之勾玉一以二曲妙一治二天下一給。如二白銅鏡一以二分明一看二行山川海原一。乃提二是靈劒一平二天下一矣。

解曰。如レ玉曲妙ナルハ柔順ノ心ヲ表シ給フ。如レ鏡ニシテ分明ナル正直ノ心ヲ表シ給也。心ノ本元ナリ。如レ劒剛利ナルハ決斷ノ心ヲ表シ給也。智也。勇也。尙書ニハ剛柔正眞三德トモ云。禮記ニハ知仁勇ノ達德トモ云。其義皆一也。啻其道ヲ傳ヘ給而已ナラズ。神器ニ顯シテ萬代ノ璽トシ給フ。梵漢ニモ此類ナシ。神道妙ナルコト凡慮難レ測。治世ノ要道豈有二異途一乎。正直慈悲決斷。三ヲバ不レ出也。內外ノ典籍千萬ナレドモ。又此三ニハ不レ過ナリ。神勅ニ至テハ。言訥ニシ「旨廣ニシ」(四字衍歟)テ旨廣シ。可レ貴々々。可レ仰々々。此事具ニ元々集ニノセタリ。志レ道者更問レ之。

此書。北畠准后親房。雖レ爲二神道秘傳之書一。依二御所望一令二相傳一者也。必愼不レ可二外見一焉。

右東家秘傳得一本挍合畢

寶鏡開始

伊勢兩宮鎭座本記云。凡神代異物之義。猿田彥神啓白久。夫天地開闢之後。萬物已備而莫照於混沌之前。因玆萬物之化。若存若亡而。下々來々自不尊志天不尊天。于時國常立尊所化神以天津御量事大神變通和合給弖。三才相應之三面眞經津鏡乎鑄造表給閉利。故此鑄顯神明曰天鏡尊。爾時神明道明知明現。天文地理以存矣。太田命白。豐受天降弖。天照太神與一處雙座。于時從天上御隨身寶鏡一面。神代天御中主神所授白銅鏡是也。是國常立尊所化神天鏡尊。月殿居所鑄造之鏡是也。三才内一面是也。今二面者天鏡尊子天萬尊傳持給。次沫蕩尊。次伊諾册尊傳持弖。神賀吉詞白賜弖。日神月神所化乃眞經津鏡是也。天地開闢之明鏡也。三才所顯之寶鏡也。當受之後以淸淨而求之。以神心祝之。以相無位。因爲神明之正躰也。今案一面荒祭御異。多賀宮御靈一面。已上三面。一面者八百萬神達。以石凝姥神奉鑄寶鏡。是卽案伊勢太神宮也。一名八咫鏡。一面者日前宮座也。石凝姥神鑄造鏡也。初度所鑄鏡不合神意。紀伊國日前神也。夫石凝姥合鑄銅鏡者也。天照太神以素盞嗚命有黑心。而不欲無女相見。乃入于天磐窟而閉着磐戶焉。於是天下恒闇。無晝夜之殊。故合八十萬神於天高市而問之。時有高皇魂之息思兼神云。思智乃白曰。宜圖造彼神之像而招鑄也。故卽以石凝姥或云。天糠戶。爲治工。採天香山之金以作日矛也。彼右工神者。卽山跡國鏡作坐神也。次倭姬隨神誨。更鑄造日月所化神鏡。藏朝熊社也。

太田命傳云。自神武天皇迄開化天皇九帝。經年六百三十餘歲。天皇同座也。此時帝與神其際

未遠。同殿共床以此爲常。故神物官物亦未分別矣。御間城入彥五十瓊殖天皇。漸畏神威。同殿不安。改更令忌部氏率石凝姥神裔天目一神裔二氏。取天香山白銅黑金。更鑄造劔鏡。以爲護身璽。是踐祚之日所獻神璽鏡劔也

天鏡尊所鑄圖

天照太神宣天皇。如八坂瓊曲玉以曲妙御宇。且白銅鏡以分明看行山川。提神劔平天下。次萬類神寶以三種爲神璽。敬承吾壽手持流鈴以治無窮無念。爾祖常有鏡中矣。

神代云。天照太神手持寶鏡。而授天忍穗耳尊。祝之曰。吾兒視此寶鏡當猶視吾云々。誠爲鑒之物也。靈妙不測湛然無相之靈器。故雖載神財許多。而以鏡爲第一重事也。尤非器無才之輩。幷剃髮不淨等族。敢不沙汰也。

八咫鏡圖

但寸法有習。

寶鏡開始

伊勢兩宮鎭座本記云。凡神代異物之義。猿田彥神啓白久。夫天地開闢之後。萬物已備而莫レ照ニ於混沌之前。因レ玆萬物之化。若存若亡而。下々來々志天自不レ尊天不レ尊。于時國常立尊所レ化神以ニ天津御量事大神變通ニ和合給弖。三才相應之三面眞經津鏡乎鑄造表給閉利。故此鑄顯神明曰ニ天鏡尊。爾時神明道明知明現。天文地理以存矣。太田命白。豐受天降弖。天照太神與一處雙座。于時從ニ天上ニ御隨身寶鏡一面。神代天御中主神所レ授白銅鏡是也。是國常立尊所レ化神天鏡尊。月殿居所ニ鑄造ニ之鏡是也。三才內一面是也。今二面者天鏡尊子天萬尊傳持給。次沫蕩尊。次伊諾冊尊傳持弖。神賀吉詞白賜弖。日神月神所レ化乃眞經津鏡是也。天地開闢之明鏡也。三才所レ顯之寶鏡也。當受之後以ニ淸淨ニ而求レ之。以ニ神心ニ祝レ之。以相無位。因爲ニ神明之正躰ニ也。今案一面荒祭御異〔字脫〕。多賀宮御靈一面。已上三面。一面者八百萬神達。以ニ石凝姥神ニ奉レ鑄寶鏡。是卽案伊勢太神宮也。一名八咫鏡。一面者日前宮座也。石凝姥神鑄造鏡也。初度所レ鑄鏡不レ合ニ神意ニ。紀伊國日前神也。夫石凝姥令レ鑄ニ銅鏡ニ者也。天照太神以ニ素戔嗚命有ニ黑心ニ而不レ欲ニ無〔與歟〕レ女相見ニ。乃入ニ于天磐窟ニ而閉ニ着磐戶ニ焉。於レ是天下恒闇。無ニ晝夜之殊ニ。故合ニ八十萬神於天高市ニ而問レ之。時有ニ高皇魂之息思兼神ニ云。思智乃白曰。宜レ圖ニ造彼神之像ニ而招鑄也。故卽以ニ石凝姥ニ或云。天糠戶。爲ニ治工ニ。採ニ天香山之金ニ以作ニ日矛ニ也。彼右工神者。卽山跡國鏡作坐神也。次倭姬隨ニ神誨ニ更鑄ニ造日月所レ化神鏡ニ。藏ニ朝熊社ニ也。

太田命傳云。自ニ神武天皇ニ迄ニ開化天皇ニ九帝。經レ年六百三十餘歲。天皇同座也。此時帝與レ神其際

未遠。同殿共床以此爲常。故神物官物亦未分別矣。御間城入彦五十瓊殖天皇。漸畏神威。同殿不安。改更令忌部氏率石凝姥神裔天目一神裔二氏。取天香山白銅黑金。更鑄造劒鏡。以爲護身璽。是踐祚之日所獻神璽鏡劒也

天照太神宣天皇。如八坂瓊曲玉以曲妙御宇。且白銅鏡以分明看行山川。提神劒平天下。次萬類神寶以三種爲神璽。敬承吾壽手持流鈴以治無窮無念。爾祖常有鏡中矣。神代云。天照太神手持寶鏡。而授天忍穗耳尊。祝之曰。吾兒視此寶鏡當猶視吾云々。誠爲

天鏡尊所鑄圖

鑒之物也。靈妙不測湛然無相之靈器。故雖載神財許多。而以鏡爲第一重事也。尤非器無才之輩。幷剃髮不淨等族。敢不沙汰也。

八咫鏡圖

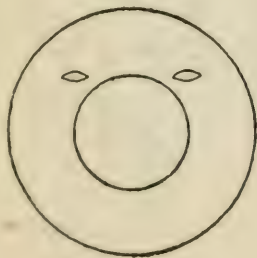
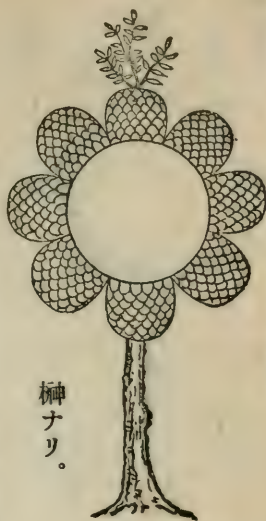
但寸法有習。

無縁鏡
但葺不合神製
方笏鏡
同製。
邊津鏡圖
奥津鏡圖

陰陽交儀鏡圖

日矛鏡

修行壇鏡圖

但有㆓寸法㆒。

星祭鏡圖

羅計二面可㆑爲㆓平調㆒。日雙調。月黄鐘。木火土金水可㆑爲㆓盤渉㆒也。但疫流厄年等別有㆓調子㆒。

盤鏡圖　但有㆓別名㆒。見㆓兼延神寶圖㆒。

榊ナリ。

右神武帝御宇。以㆓此鏡㆒被㆑祭㆓神祇㆒也。尤可㆑有㆑習者也。

御正躰幷御撫物鏡圖

但御正躰事可㆑隨㆓御帳廣㆒。

御正躰事。冶工非㆓神齊㆒。則决不㆑可㆑近㆓爐邊㆒者乎。且月水穢幷重輕服僧尼剃髮輩。從㆓三日已前㆒可㆑及㆓退出㆒也。

次御鏡事。無㆑裏無㆓輪緣㆒而四面令㆓光澤㆒矣。愼以㆓口唾㆒而勿㆑爲㆓磨水㆒。次御正躰鏡者可㆑爲㆓平調㆒乎。又鏡面可㆑合㆓凸字意㆒也。蓋以㆓神德㆒而普令㆑蒙㆓四維㆒之義也。次御撫物鏡者。必不㆑知㆑此乎。併天子御鏡可㆑爲㆓各別㆒也。次靈社鏡有㆓表裏㆒。裏者可㆑爲㆓石目㆒乎。

右寶鏡開始以小野高潔本挍合

詠太神宮二所神祇百首和歌

度會元長

春二十首。

立春。

神ノ代ノ春ヤタツミノ宇治ノ山
都ノ空モ今朝カスムラン

天照皇太神ハ地神五代ノ尊ニ坐。然者神代ノ春ヤ立ラント也。御鎮坐ノ山。都ノ巽ニ是アタレリ。西行此宇治ニテ讀ル歌。

爰モ又都ノタツミシカソ住
山コソカハレ名宇治ノ里

山城ノ宇治ニテ喜撰法師ノ讀ル歌。

我庵ハ都ノタツミシカソ住
世ヲ宇治山ト人ヤ云ラン

霞。

春ノ夜ノヤミハ無レ益雲霞
アケシ岩戸ノ空ニ殘レリ

天津尊天岩屋ニ藏坐。安河ノ邊也。安河トハ天河ノコトカ。長夜トナリシコト人皆知ナレハ略レ之。抑倭比賣命ノ紀。天地開闢ハ今日ヲ始トスル理アリ。天岩戸神ノ代ト許不レ可レ思。日ノ暮。夜ノ明。日ノ出ル義。岩戸タル理アリトナリ。無益ト書テアヤナシト讀。古今ノ歌ニ。

春ノ夜ノ闇ハアヤナシ梅ノ花
イロコソミエネ香ヤハ隱ルヽ

御裳濯河抄歌ニ。

岩戸アケシ天津尊ノ當所ニ
櫻ヲ誰カ植ハシメケン

若菜。

今日ハトテ七葉ノ神ニ備祭ル
若菜ハ誰カツミ始ケン

七葉ノ御神ノ次第。麗氣紀ニ具也。七葉ノ御

神ノ次第。妙覺心地ノ祭文ニ見エ侍リ。

子日。

春ヲフル百枝ノ松ノイツヨリカ
子日トテ引今日ノタメシヲ

百枝ノ松ハ。天照太神宮ノ御神木ノ由云人アリ。五百枝ノ杉ハ豐受皇太神ノ御神木也。

鶯。

鶯ソヲノカ栖トシムル山
少御神ノツクリ置ケン

伊弉諾伊弉冊尊トテ二神坐ス。伊弉諾尊國土ヲ作リ玉フコトヲ。萬葉ノ歌二首。次書。

大穴道少御神ノ作ケン
妹勢ノ山ヲ見ルソウレシキ

月見波少御神ソウラメシキ
何シカ山ヲ作置ケン

殘雪。

宮木引津長ノ原ノ春ノ雪
心モ解ヌ跡ヲコソミレ

津長ノ原トハ內宮ニアル名所ナリ。

柳。

春ハイツ岸ノ柳ノ神路川
浪モ綠ノ色ニタチケリ

神路川ハ御神前山ノ麓ヲ廻ル川也。山ヲ神路山ト云。八雲抄五卷ニ有之。

梅。

梅カ枝ノ花開姬ノ宮木トテ
惠ノ色ノイチシルキ哉

內宮ノ末社花開姬命ト申。朝熊ノ社ニ坐ス。此御神ヲ開姬命ト申トゾ。於神宮奉秘御神ニ坐ストゾ。櫻大刀神同在所ニ坐トイヘドモ。別ノ御神ノ由侍。并櫻宮是ハ大宮ノ邊ニ坐ス。寳殿マシマサズ。此御神北野ノ櫻葉ノ宮同躰ノ由。奉申人有之。櫻ノ宮。西行ノ歌。御裳濯河集ニ有之。

神風ニ心安ソマカセケル
　櫻ノ宮ノハナノサカリ雄
春田。
　忘テモ樋放ナセソ久堅ノ
　　天ノ良田ノ御種カスコロ
天良田トハ。天上ニテ天津尊ノ御田ナリ。伊勢ノ山田ノ原ノ宮崎ノ錦ノ河内ト云處ニ移。是御饌料トス。凡天ノ長田天ノ平田天ノ狹田天ノ邑幷田此外坐。依$_{レ}$事茂$_{レ}$略$_{レ}$之。
早蕨。
　蕨折山賤ノ身ニ至マテ
　　思ヘハ天ノ益人ソカシ
益人トハ國土人。人々ノ惣名也。譬バ昔尊坐テ軻グツチト云火神ヲ產坐。母ノヤカレテ薨玉フ。火ノ神ヲ三段ニ切玉フ。陰ノ尊恨坐テ。國土ノ人ヲ一日ニ千頭コロスベシト誓ヒ玉フ。陽神吾千五百頭可$_{レ}$產ト誓尊ス。仍益ノ字ヲ付ク。其ニ天ノ字ヲ置コト。天照太神御鎭坐ノ所可$_{レ}$爲$_{レ}$天ト云義也。萬葉ニ益人ト讀歌。
　益人ノ龍田ノ山ニ入ニケリ
　　同(オナシ)カザシノ名ヲヤケガサン
西行ノ歌。
　浮世トテ月スマスナルコトアラハ
　　イカヽハスヘキ天ノ益人
櫻。
　櫻太刀ノ天ノ往古ヲ殘テヤ
　　宮樹ノ花ノ雲ト見ユラン
彼櫻樹自$_{二}$天上$_{一}$降坐ス。日本ノ櫻ノ始也。是櫻太刀神ニ坐。朝熊ノ江ニ坐ス。
春雨。
　槵觸(クシフル)ノ嶽ニ霞ル春ノ雨
　　天津空ヨリ降(クダル)トソミル
天照太神ハ天原ヲ治テ。筑紫日向ノ國槵觸

嶽ニ天降坐御事ノ意ヲ讀侍也。

春駒。

　其モカモ春ノ艸ヲヤスサムラン
　　田面ニ放ツ天ノ駮駒

天ノ駮駒トハ天上ニ在御馬也。素盞烏尊。日神ノ御田ノ春苗代時。秋田ノ比。馬ヲハナサレ御田ヲ荒シ玉フ。然バ田面ニ放ト讀也。素盞嗚天津罪ノ内也。

歸雁。

　心セヨ天津尊ノ幸行セシ
　　雲路ニ歸春ノカリカネ

聲。天照尊御降臨ノ御時。天ノ八重雲ヲ分降玉。天路歸雁ト云義也。

菫菜。

　菫菜生野代ノ宮ノアタリトテ
　　摘人ナシニスクル春カナ

野代ノ宮ト奉レ申ハ。天照太神自ニ筑紫一伊勢國ヘ御降臨之御時。桑名ノ行宮ニ坐ス。其野代ノ宮ト奉レ申ニ御一宿四ケ年也。

杜若。

　是ソ此澤女ノ神ノ杜若
　　名モ便アル開(サキ)トコロカナ

杜若ハ澤女ノ邊ニ生ルナレハ。タヨリヲモトメ讀侍也。澤女ノ命ハ内宮ノ別宮ト申人侍。

藤花。

　花開ハ眞名井ノ水ヲ結トテ
　　藤岡山ニアカラメナセソ

件ノ眞名井ノ水ハ。自ニ天上一降坐ス。始ハ筑紫日向ノ高千穗ノ山ニ居置給フ。其後丹波與佐之宮ニ移シ居置タマフ。豐受太神勢州山田原ニ御遷幸。仍彼水ヲ藤岡山ノ麓ニ居祝奉リ。朝々ノ大饌料トナス。私ニ云。此水ニ付種々子細アリ。

躑躅。

　天照ス山邊ノツヽシ花散ハ

紅葉ニ春ノ嵐吹ナリ

天照山ト云ハ。紅葉ヲ思寄侍リ。天照山トハ御鎮坐ノ山ノ名也。夫木ノ歌ニ。

岩ツヽシ花散ヌラン太山ヨリ
落來水ハ春ノモミチ葉

椿。

年々ノ卯杖ニモレテ此春モ
深山椿ノ花サキニケリ

卯杖ドハ。正月上ノ卯日。於宮中其年號等ヲ調。御倉前ノ古殿ニテ曉書之トゾ。

三月盡。

今日マテハ春ノ内外ノ宮柱
立事安キ日ヲ惜ミツヽ

天照太神ヲ内宮ト申。豐受太神ヲ外宮ト申御事ヲ古事記ニハ内宮ト申謂。依圓地四方山也。其内ニ御鎮坐間奉申ト也。外宮ト申謂。久遠實ト成神坐。故ニ遠外ヲ指テ遠キ宮ト申也。但此義ノ外ニ義坐ヲ奉秘テ如此書侍カト申候。

夏十五首

首夏。

榊トル袖ノ匂ヲ誰ニカモ
ナレシト妹カ恨モヤセン

卯月一日。榊ヲ取侍フカト云人アリ。五十番歌合ニ。

榊取卯月キヌラシ山人ノ
平野ノ森ニユウカツラセリ

是四月一日ノ日旬ノ歌也。旬ニ種々ノ義アリ。帝始テ南殿ニ御出ナルヲ新旬ト申。始テ御政有ハ万機ノ旬ト申。然バ榊取。卯月一日ノ旬ニ當リ侍也。次デニ申。平野ノ山人トハ祭ニ從フ神人ノコト也。

五百箇眞坂樹。美津加志。榊ノ名也。
玉串。榊ノ名也。御賀玉樹。榊ノ名也。

萬葉ノ歌ニ。

玉串ノ御賀玉ノ樹ノ鏡葉ニ
神ノ胙備ヘケルカナ

御賀玉ノ樹ノコト。古今集ニハ榊ノコトニハ不ㇾ有。別ノ木ヲ云カ。三木ノ一也。妹ト云コト。萬葉ノ歌二首。

遠有而雲居爾所見妹家早將至歩黑駒
妹等取我通路細竹爲我通靡細竹原

更衣。

今日ノタメ御衣織ラシ久堅ノ
天ノ機殿夏モキヌラン

天ノ機殿ヲ内宮ニ移ス。往古七夕彼機殿ニ降リ。御衣ヲ織玉シ事有シト也。古記具也。天ノ機殿ニ駿駒ノ事侍由奉ㇾ申事坐也。

卯花。

瀧ノ宮ノ道サマタケニ成ヌナリ
波トミルマテ開ル卯花。

瀧宮ハ寶殿不ㇾ坐。地ノ底ニ坐ス。天ノ逆太刀納置坐ス神仙也。此外種々納置玉フト見タリ。御裳濯河原ニ坐御神也。

子規。

子規鳴ヌ習ヲ知トテヤ
音無山ノ名ヲ殘スラン

音無山ハ豊受宮ノ御前成山ノ名也。時鳥不ㇾ鳴有處ノ事ヲ。西行ノ歌。

不聞共爰ヲセニセン時鳥
山田ノ原ノ杉ノ村立

樗。

夏ハ早杉ノ社ノ木ノ陰ニ
咲シ樗ノ花モ散ケリ

杉ノ寶殿ノ御事。豊受宮之別宮ナドニヤ坐ラン。

橘。

花トミシ常世ノ浪モ絶ヌナリ

橋ノ江ハ神久ニケリ

神宮秘記云。此處ハ常世ノ浪寄ル國。鞆ノ音不レ聞國ト有。譬バ下津岩根ノ邊ナレバ。弓箭ノ器不レ知ト云義也。次ニ神榮トモ神久トモ書。萬葉ノ歌二首。

　神榮テ御神□セシ五十鈴川
　　打出ル音ノ荒木田ノ宮

　好去テ又顧ン大夫ノ
　　手ニ巻持在鞆浦廻原

夫木ノ歌。

　引流ス手束ノ弓ノ矢ヲハヤミ
　　トモネノ的ノ鳴カハスカナ

菖蒲。

　草奈岐ノ社ト誰モ今日ハ見ヨ
　　軒ノ菖蒲モ打亂レツヽ

草奈岐ト云名ヲ以テ讀タリ。社ハ大間ト一處ニ外宮坐。

早苗。

　吾六合ニ良田ノ早苗移サスハ
　　イカヽセン世ノ富種ノ花

天上ノ御田ヲ此秋津洲ニ移サズバ
　人イカヾセント云義也。西行歌。

浮世トテ月スマスナルコトアラハ
　イカヽハスヘキ天ノ益人

此歌ノ心ヲ取ヨミケルナリ。富種花。稲ト云義有。人ノ名ト云義アリ

只タノメシメシカ原ノサシモクサ
　　我世ノ中ニ有ンカキリハ

此サシモグサハ人ノ惣名ト也。萬葉歌ニ。

打ムレテ高倉山ニツム物ハ
　　新ナル世ノ富種ノハナ

麗氣記云。彼高倉山ハ此日本鎮座ノ靈所。

照射。

　離宮ノ鹿ニ乘ニシ古ヲ

萬葉ノ歌ニ。

玉串ノ御賀玉ノ樹ノ鏡葉ニ
神ノ胙備ヘケルカナ

御賀玉ノ樹ノコト。古今集ニハ榊ノコトニハ不㆑有。別ノ木ヲ云カ。三木ノ一也。妹ト云コト。萬葉ノ歌二首。
遠有而雲居爾所見妹家早將至歩黑駒
妹等取我通路細竹爲我通靡細竹原

更衣。

今日ノタメ御衣織ラシ久堅ノ
天ノ機殿夏モキヌラン

天ノ機殿ヲ內宮ニ移ス。徃古七夕彼機殿ニ降リ。御衣ヲ織玉シ事有シト也。古記具也。天ノ機殿ニ駿駒ノ事侍由奉㆑申事坐也。

卯花。

瀧ノ宮ノ道サマタケニ成ヌナリ
波トミルマテ開ル卯花。

瀧宮ハ寶殿不㆑坐。地ノ底ニ坐ス。天ノ逆太刀納置坐ス神仙也。此外種々納置玉フト見タリ。御裳濯河原ニ坐御神也。

子規。

子規鳴ヌ習ヲ知トテヤ
音無山ノ名ヲ殘スラン

音無山ハ豐受宮ノ御前成山ノ名也。時鳥不㆑鳴有處ノ事ヲ。西行ノ歌。
不聞共爰ヲセニセン時鳥
山田ノ原ノ杉ノ村立

樗。

夏ハ早杉ノ社ノ木ノ陰ニ
咲シ樗ノ花モ散ケリ

杉ノ寶殿ノ御事。豐受宮之別宮ナドニヤ坐ラン。

橘。

花トミシ常世ノ浪モ絶ヌナリ

橘ノ江ハ神久ニケリ

神宮秘記云。此處ハ常世ノ浪寄ル國。鞆ノ音不レ聞國ト有。譬バ下津岩根ノ邊ナレバ。弓箭ノ器不レ知ト云義也。次ニ神榮トモ神久トモ書。萬葉ノ歌ニ首。

神榮テ御神□セシ五十鈴川
打出ル音ノ荒木田ノ宮

好去テ又顧ン大夫ノ
手ニ卷持在鞆浦廻原

夫木ノ歌。

引流ス手束ノ弓ノ矢ヲハヤミ
トモネノ的ノ鳴カハスカナ

菖蒲。

草奈岐ノ社ト誰モ今日ハ見ヨ
軒ノ菖蒲モ打亂レツヽ

草奈岐ト云名ヲ以テ讀タリ。社ハ大間ト一處ニ外宮坐。

早苗。

吾六合ニ良田ノ早苗移サスハ
イカヽセン世ノ富種ノ花

天上ノ御田ヲ此秋津洲ニ移サズバ人イカヾセント云義也。西行歌。

浮世トテ月スマスナルコトアラハ
イカヽハスヘキ天ノ益人

此歌ノ心ヲ取ヨミケルナリ。富種花。稻ト云義有。人ノ名ト云義アリ

只タノメシメシカ原ノサシモクサ
我世ノ中ニ有ンカキリハ

此サシモグサハ人ノ惣名ト也。萬葉歌ニ。

打ムレテ高倉山ニツム物ハ
新ナル世ノ富種ノハナ

麗氣記云。彼高倉山ハ此日本鎭座ノ靈所。照射。

離宮ノ鹿ニ乘ニシ古ヲ

シラヌ國ニヤ照射スルラン

離宮ハ春日大明神座ス。初ハ山田ノ平尾ト云所ニ立出給ヒシガ。今ハ小俣田ト云所ニ勝地ヲ定給フ。平尾ヲ離宮ノ時。大治二年ノ比離宮院ノ御神事坐ケル。大宮司二宮ノ禰宜束帶ニシテシタガヒ玉フ。左右ニ屋形アリ。門東南ニ二アリ。宮司ハ南門入坐。禰宜ハ自東門入坐ス。以テ三日二宮ノ齋宮拜賀坐シ。彼平尾高河原トモ云。昔豐受皇太神宮遷幸ノ始。彼處ニ興ニ木ノ丸殿ヲ御在所ナリ。

五月雨。

忍海人ノ年魚ヲ取ヌル當所モ
阿部ノ河原ニ雨ハ降ケリ

忍穗海人命龍神坐ス。年魚ヲ取テ御神前備進ノ例ヲ以テ。今モ豐受宮ノ宮人御網ヲ捧持シメ。前ヲオハセ。彼川ニ出テ年魚ヲ取義アリ。神態坐ス。龍神ノ態ニヤ。當時ハ毎々雨降ケルト古記ニ侍。五月三日也。年中備進ノ年魚ヲバ掃守氏ノ仁取テ備ヘ奉ル。鮎ノ數凡定ナド申人有。大川ノ邊ヲ古老傳ニ阿部川原トアリ。是神態五月也。

螢。

螢飛豐宮川ノユフヤミニ
鵜船ノ篝サスカトゾミル

往古此河ニテ鵜ツカヒケルニヤ。古記ニ鵜川ノ名所ノヤウニ見エ侍リ。爰ニ宇治山ノ喜撰法師ノ螢ヲ讀シ歌ヲ玉葉集披見ノ時見出シ。此次デニ書付侍リ。

木ノ間ヨリ出ルハ谷ノ螢カモ
イサルニ海士ノ海邊行カモ

清水。

小戸川ノ誓忘ルナイサヽラハ
清水結テ身ヲキヨメマシ

筑紫日向國橘ノ小戸川ノコトナレバ。内外

宮ノ神祇ニ如何ト云人侍ドモ。伊弉諾宮坐御事ナレバ。サノミハノクベカラズトテ入侍リ。行水ハ身業ノ精進ト云人侍リ。

夕立。

白雨ノ雨ヲ出坐宣命
シラシヤ草ヲ笠ニムスハン

自天上素盞烏降坐御時。雨降ケルニヤ。其次第誰モ知御事ナレバ略レ之。其時草ヲ結テ笠ニ用坐ケルニヤ。

氷室。

千早振神代モ不レ聞皇ノ
イツヲ氷室ノ始ナルラン

氷室ト云事ハ。仁徳天皇ノ御時始ト哉。

荒和秡。

押ナヘテ荒和ノ神御秡川
イツレノ神カ先ナコムラン

荒和神。六月晦日ノ御秡ノ事。タトヘバ年ノ半至マデト云義ヲ以テ其身ヲ輪ヲ取。三度中ヲヌクル。皆マジナヒナリ。蔀屋作トゾ。大裏ニモ其日ハ大秡トテ。朱雀門ニ出テ百官御秡ヲ行トゾ。

秋二十首。

早穐。

宸早(イトハヤク)秋ハキニケリ昨日迄
音セヌ風ノ宮木ヲソ吹

風宮級長戸彦ノ御事。朝霧満タリシ事發リ侍。初ハ社ニテ坐ケルガ。弘安年中ニ勅使ヲ被レ下。御宮號風宮ト申奉リキ。此宮風日祈トテ神態アリ。就レ其種々在ド略レ之。私ニ云。風宮ノ宮號ノ事ハ神統記ニハ正應六年ト有。不レ審。

秋霧。

龍田彦ノ神路ノ山ノ朝霧ニ
保許見ユル秋カナ

立田彦神。瀧祭ノ御神分神座由。申人有。歌ハ秋霧立隱シテ山ノ色不レ慥義也。

七夕。

七夕ノ夜ノ契モ朝熊ヤ
鏡ニウツス影ソホトナキ

朝熊ノ鏡ニ彼星合ノ形寫リ玉フ由書タル一書有。彼宮ノ御鏡以上五ケ。内二面朝熊ニ坐也。大朝熊トテ坐也。二面ハ日天月天。是夜ノ守日ノ護ニテ坐。

女郎花。

言止シ艸ノ垣葉ノヲミナメシ
タトヘナレトモ誰カ語ラン

ヲミナメシトハ女郎花ト書ナレバ。名ニメデヽナド讀習ハセル也。言止テ。素盞烏尊天上シ玉ヘバ。艸木物言。石岩吠。海川漂ナドシケル時。日神尊黒心(キタナキ)坐故ニ。草木マデ風虚宣命有シ御時。素盞烏尊艸木ニ向テ言止ト御勅有シニ。上トノ(本ノママ、(止トゾ歟))

薄。

御裳濯ノ川邊ニ匂岩薄
昔フレッル袖加登會見流

倭姫命ノ御裳ヲ洗坐コト侍リ。左様之義ヲ以テ薄ノ袖ナト讀侍ル也。古哥。

三吉野ノ川邊ニ立ル岩スヽキ
釣スル人ノ袖香登會ミル

雁。

名無雉ノナラヒモシラテ天津雁
今年モキヌル聲ノキコユル

天津尊天上ニ坐時。地祇ヲナダメントテ。天稚彦降坐。應ニ神勅ニ降臨坐處ニ地祇ノ女下照姫ト契。報不レ申。其後無名雉ヲ降シ是ヲ見セシメ玉フ。天稚彦見テ。吾振舞ミセシメザランガタメニテ。彼雉ヲ射玉フ。其矢天上ニ至テ太神ノ御前ニ落。其矢ヲ投降玉フ。天稚彦

ニ中ルトゾ。私云。日本紀神代ニ具也。無名雉ノ神ノ御名ヲ彦國見賀岐津與束見命ト奉申。

天稚彥。 但馬國。 國上部ノ宮ト申。
下照姫。 肥前國。 階武ノ宮ト申。

鹿。

小男鹿ハ忘モヤセン問コトノ
カタヌタ占ノ道ノ遙ケサ

天津尊。天香久山ノ明神ニ詔有テ御占坐。其意ノ歌。

香久山ノ葉若カ下ニ占問シ
カタヌク鹿ノ妻戀ナセソ

萩。

暮ルマテ五十鈴ノ原ノ萩カ花
シルラン今日ノ饗忘ルナ

此宮ニ御饌ヲ饗ト讀哥。度會家行。

忍穗井ヲ今日若水ニ汲初テ
饗備祭春ハキニケリ

五十鈴原ニ萩ヲヨミ習ハシタル樣侍ルカト云ハ。衣笠中納言ノ歌ニ。

白露ノ手枕ノ野ノ女郎花
誰ニカハセルケサノ餘波ソ

手枕野ニ女郎花讀事如何ト云。其比哥仙達作例ヲ尋ルニ不レ及トテ。ユルサレケルト□侍。例是ヲス。饗ト書テミアヘトヨム也。光源氏物語ニハ。アルジト饗ヲ讀ト也。

露。

白露カ何ソト人ノ問ヘハ宮ノ
光ヲ替ス居玉ノ數々

白露ノ哥。伊勢物語ノ哥ノ言寄思キ。

槿。

百枝サス竹ノヨハヒモ有ナルニ
ナト愚ナル槿ノハナ

百枝刺竹。齋宮ニ有。五百枝刺竹田ノ國トモ。

齋宮之事也。昔天ノ香久山ノ竹ヲ根越ニシテ植ケルトゾ。竹ノ都ト云。齋宮ハ淳和天皇天長元年九月。齋宮ト云テ物忌ノ宮ト勅使ヲ被レ下。殿舍等ヲ造營ス。神宮ニ屬齋宮ゾ。

苅萱。

苅萱ハソレトナクテヤ亂ルラン
袖ヨリスクルヌサノ追風

苅萱ハ亂安キ物ナレバ也。麻ノコトハ日神天ノ磐屋ニ藏坐時。諸神達種々ノ物ヲ作リ初玉フ內ノ大麻也。然バ太神宮ノ神祇ニイレ侍リ。光源氏物語ニ源氏住吉詣ノ時色々ノ麻袋ト云事侍リ。

蘭。

宇禮志野ト宣命セシ草ノ原ニ
緘(ツヽ)無袖(ムソテナキ)蘭カ那。

宇禮志野。伊世ノ名所也。倭姫命。天照太神ノ御鎭座ノ處ヲ尋行玉フ處ニ。御鎭座ノ山ヲ御覽給ヒテ。此野ニテ嬉トノ玉ヒショリ名トス。嬉ト云詞ハ。古歌。

嬉シサヲ昔ハ袖ニ緘シカ
今夜ハ身ニモアマリヌルカナ

菇〔菰歟〕。

茅カ軒ニ山下菇ヤマシルラン
撰テ葺ナ日ハタケヌトモ

內外ノ宮ヲバカヤニテ奉レ葺。若菇モヤ相交ルコト侍トヨミシ也。

駒迎。

渡會ノ宮ノミムマヤ改テ
駒迎スルミヤコヒトカナ

譬ハ豐受ノ宮ノ御神馬退轉。已ニ一百八十餘年ニモヤ成ヌラン。于時寛正六年己酉秋九月十四日。御神馬下リ座。

月。

有明ノ月讀ノ神ノイカニシテ

北ナル空ニ幸行ナリケン

常ノ哥ノ義ヲ以テ讀侍也。北ハ月ナキ方ト云義也。大宮ヲ去ル事。北一日一夜ヲ隔ト神書等ニモ侍ルナリ。只月ト申義ヲ以讀。然バ上ニ有明ト置侍リ。万葉歌ニ。

天ニ坐月讀男麻比和セム
今夜ノ長伊保夜津紀古曾

擣衣。

長月ノ神祭夜ハ此里ニ
砧モ不レ擣人モ不レ聲

内外ノ御祭。四季ニ坐事也。其夜ハ音セヌト云義也。古歌。

長月ヤ送ル幣伊勢ノ海ノ
波ノ白ユフカケヤソフラン

虫。

蘿虫ノ社ノ秋ハ神久テ
松ノ聲スル夕風ソ吹

蘿虫ノ神社ハ朝熊ノ江ニ坐ト。慥ニ申人侍リ。

菊。

秋ノ菊ノ花ニ白酒取副テ
二ノ神ノ手向ニソナス

長月九日。菊ニ酒取副。備ヘ奉ル御事侍ル也。九月九日重陽ノ宴トス。九ハ陽ノ數トス。

紅葉。

速秋津日子ノミヤマノモミチハヲ
御衣ノ錦ヲルカトソミル

此御神秋ヲ位坐ストゾ。

九月盡。

瑞籬ノヒサキモ今日ハ散ヌラン
入日ニ秋ノ聲ナ忘レソ

瑞籬ノ久キト云義ヲ以テ。ヒサキヲソヘタルトゾ。瑞籬ノ久シキト云本哥ノ事。文德天皇元年正月廿八日。住吉ニ行幸ノ時。御供ノ

公卿五人ノ中ニ。業平中將進出。社壇ニ奉ㇾ近付玉ヒ。一首ノ詠歌奉玉フ。

我見テモ久成ヌ住吉ノ
キシノ姫松幾代ヘヌラン

則玉殿ノ御戸ヲ開。赤衣ノ童子出現。返歌ニ。

無津眞志戸君ハ白波瑞籬能
久敷代依祝初天喜。

冬十五首

初冬。

御水雲ノミヤマ一ニ時雨キテ
奥ヨリ冬ノ立ニヤ有ラン

御水雲ノ宮。豊受宮ノ内ニ坐ナド奉ㇾ申人有ㇾ之。

時雨。

松風ヤ小事ノ磐屋古テタニ
モラヌ時雨ノ音ノミソスル

天牟羅雲命ノ岩屋也。渡會ノ氏ノ先祖ニ坐シテ。外宮錦ノ河内ト云處ニ坐。

霜。

霜ヲ踏星ヲ頭宮人ノ
祝詞中拍手ノ音

入時霜玉墀曉踏。出時星丹闕合戴ノトコトミハ御秡ヲヤ可ㇾ奉ㇾ申ト云人有ㇾ之。譬ハ鞆ト云ハ弓ト知。ツゲノヲグシト云細ト知理リ有如トゾ。

霰。

霰敷玉串ノ葉ニ通フラシ
高佐山邊ノ峯ノ松風

豊受ノ宮ノ御前ノ山ヲ高佐山ト云。又高倉山共。加利加佐峯トモ申也。古歌。

君カ代ニ濁ハアラシ高倉ヤ
麓ニ清キ忍石井ノ水

寒蘆。

浪風ニ濱ヘノアシト枯ルコロ

伊蘇ノ宮人袖ヤ寒ラン

イソノ宮。內宮ノ別宮坐。五十ノ宮トカキタルハ齋宮ノ別名ト侍。

衡。

二見潟宿嶋カケテ立衡

最モカシコシ心シテナケ

天照太神二見ノ浦ニ遷幸成。其日暮テ御一宿ノ宿有。仍宿ト云。次ノ日御覽玉。然バ二見ノ浦トモ云。イトモトハモツトモノ義也。カシコキハ恐ル、義也。尤恐ト讀也。譬花山院花山寺ニ坐ケル也。都ニ御所ヲ立移給時。僧正成シ人ノ讀シ歌ニ

待ト云ハ尤恐花ノ山ニ

トマレトナカン鳥ノ音モカナ

万葉ノ歌ニ。

奥山ノ岩ニ苔生恐クモ

問玉フカモ念不堪國

雪。

神風ヤ五百枝ノ雪ノ春ニ來テ

杉ノシルシノ少シミエツ、

五百枝ノ杉。豐受ノ宮ノ御神木也。千枝ノ椙ノ事。往古千枝ノ祭主ト申セシ人ノ植玉ヒケル杉ヲ。則千枝ノ椙トカナト被レ申人侍。五百枝ノ杉之事。豐受ノ宮ノ御降臨。[　　]本記ニ[　　]

氷。

祭スル小野ノ古江ニ結手ノ

水モ潮モケサ氷ツ、

齋宮御坐ノ時。太神宮參詣ノ每々。彼小野ノ古江ニ出座テ御浴有ケルトカヤ。小俣田ノ板田ノ橋其道トゾ

水鳥。

鴛鳥ノ鏡ガ淵ニ影ヲ見テ

一番アル床ヲシメツ、

鏡ガ淵ハ御裳濯川ノ末社也。

網代。

宇治川ヤ黒木ノ橋ノナカリセハ
網代モヤナモ打ヘキ物ヲ

山城ノ宇治川ニハ。網代ナドモ在ドモ。コノ
宇治川奉恐以テ羨也。黒木ノ橋内外ノ宮有
之。

神樂。

祭執庭ノ謌長笛生ノ
聲サエ渡ル夜コソ更ヌレ

冬十二月ノ夜ノ祭ニ。謌長琴生笛生トテ。役
人參向。是等龍神本也。

鷹。

イマシメノ内ノ宮人トカメスハ
五十鈴ノ原ニ鷹獵ヤセン

古老口實ト云社記ニハ。鷹獵禁方有。五十鈴
ガ原ト云ヘバ。鈴ニ付。原ニ付テ思寄ケルカ。

内ノ宮ト讀哥。

榊持八ノ石壺踏ナラシ
君ヲソ祈ル内ノ宮人

炭竈。

炭竈モ斧ノ音モセヌ山ニ
誰カ下部(チリヘ)ノ坂ノ有テフ

下部ノ坂ト云處アリ。名所也。

埋火。

饌(ヲモノ)ナス宮ノ御薪(ミカマキ)イサヽラハ
埋火ニセン寒キ夕合(クレ)

御饌ヲヲモノト讀事ハ。日本紀ニ彦火々出
見ノ尊鈎ヲ魚ニ食。龍宮ニ尋行玉フ。鱗ヲ集
玉フ中ニ口女ト云魚ニ鈎ヲ食。是ヲ取。龍神
口女ニ向テ。天ノ孫ノ饌ニ參ナト云ケルト
ゾ。御薪禁ズル木五種有之。㸑トハ竈ノ名
也。

除夜。

天照豐受ノ神ノ宮人ノ
火トホスカケニ年ニ合ケリ
十二月卅日。灯油トテ御火ヲトボスコトアリ。此外無子細。天照豐受御降臨記ニ有之。
戀十首。
初戀。
二神ノ世ヲ立初シ當時ヤ
戀ステフコトヲ敎ヲキケム
凡契ノ始ヲ思ヘバ。二神トヤ奉申侍ラン。我六合ト云ルハ。太初ノ一氣始テ相別。淸ハ天文ト成。重ハ地理トナリシヨリ。天祖初テ氣ヲ開坐テ哉。又烏武見尊。妹下照姬ヲ思カケテヨム歌ニ。
烏羽玉ノ我黑カミモ亂レヌニ
結定ヨ小夜ノ手枕
是三十一字第二ノ歌也。
忍戀。
忍行道衢ノ神ナラハ
我名モラサヌ手向ナサハヤ
衢ノ神ト奉申ハ豐受ノ宮ノ別宮ニ坐。
不遇戀。
隔スニ祭ノ庭ノ面點衣
思ヘハウスキ我チキリ哉
トバリキヌトハ。御祭ノ時。御門等ニカクルキヌノ名也。御戸帳ナトヾ申也。幌ト書。百詠ニ有之。帷帳。コレモ帳也。
初逢戀。
月ニトフ君カ心ヲ御淸繩
カケテタノムル末ノ遙ケサ
御淸繩トハ注進ノ一名也。
後朝戀。
相見テシ後ノ朝ニ行人ノ。
神カケツルヤ情成ラン
舊戀。

イツカサテ外具(トク)ノ嶋輪ノ長柏
　長命ゾ人タノメナル
別宮ニ。風日祈ト申神態有。往古ノ事也。彼時
神女トオホシクテ。三角柏ヲ持奉坐テ。是可
レ用レ盃ト曰テ。神女ハ失玉ヒケルトゾ。然バ風
日祈御神態ノ日ハ。必外具ノ嶋ヨリ柏參ケ
ルトゾ。萬葉歌ニ。柏ノ事依レ茂略レ之。
吾妹子カ御裳濯川ノ岸ニ生ル
　人ヲ三角ノ柏ト思ハン

旅戀。
思事有テ旅行道敷ノ
　神名月ニヤ手向ヲクラン
道敷ノ神トハ。伊弉諾尊帶(オビ)ヲ投給ヒシニ。其
帶神トナリ賜ケルト歟。

思。
祈津々猶再拜ノ橋柱
　立名モクルシオモヒヤマハヤ
再拜ノ橋トハ。倭姫命。天津尊ノ御鎮坐ノ山
之ハラ御覽坐。彼橋ニテ拜有シ事ヲ名トス。
再拜ト書テ二度拜スト讀。

片思。
片割ノ千木モ内外ニ替ツヽ
　似タルコトナル我思カナ
二宮ノ千木ノ片割替ケル事ヲ。風雅集。朝東。
片割ノ千木ハ内外ニ替レトモ
　誓ハ同シ伊勢ノ神垣

恨戀。
イサヽラハ恨ルコトヲ止テミン
　岩長姫ノ神ノ代モウシ
神ノ御代ニ尊坐ケルカ。地祇ノ女ヲ召玉フ。
始姉ノ岩長姫ト云ヲ召テ御覽ズルニ御心ニ
不レ奉レ逢。然バ返坐。其後妹ノ木花開屋姫ヲ召
テ留給。其時姉ノ磐長姫恨妬テ。是ヲ詛テ曰。
吾ヲ留坐バ。產ラン子ハ石金ノ如クナラン。

木花産ラン子ハ落散如ク命モモロカラント
侍シニ仍テ。今ノ世ノ人ノ命モロキトゾ。

雜二十首。

曉。

時ヲ守曉ヲ待宮人ノ
饗ナストテ打トケモセス

明方ニ大饌ヲ備奉。夕大饌奉レ備コトヲ。朝ニハ曉ヲ拂ヒ。夕ニハ黄昏ニ着。

松。

昔タニ千歳ノ松ト云テケン
イク代フルトモ神ソシルラン

天照太神自ニ天上一三種靈物ヲ投降シ坐マセシヲ。御降臨ノ御時。彼靈物尋。伊勢ノ玉拾礒ノ國ニ御遷幸。其日暮テ御一宿ノ嶋有。仍宿嶋ト奉レ申。次日彼浦御覽坐。故ニ二見ノ浦ト號ト也。又云。札見ノ浦ト云義モ有レ之也。

蘿。

伊勢津彦ノ岩屋ヲ殘ス深山ヘノ
苔踏分テ誰通ラン

十二岩屋。高倉山。左貴山。雞足山。雞不鳴山。音無山。郭公不鳴山。

高坐山ト書テタツトクマシマストヨム。外宮ノ御神前ノ山也。十二岩屋有。伊勢津彦命ノ住所。春戸神石室。此神達。雄略天皇ノ御代ニ。御氣津ノ御神度會ノ沼木ニ御降臨ナル。彼岩屋ニ坐神達恐坐テ磐ヲ出去給トゾ。伊勢彦命少彦神ハ龍宮行去坐。依二事多一略レ之。

鶴。

秋ノ田ノ穂落シノ神ノ古ヲ
思モ久シ鶴ノヨロツ代

昔葦原ノ中ニ千鳥ノ鳴聲晝夜不レ止。神以レ勅命レ見レ鳥。其長一丈餘ノ鶴。稻ノ一本千枝指タルヲ食テ鳴。勅使見時。穂ヲ落シ啼事ヲ止ヌ。其倭姫命。烏須良太神ノ御饌料ノ奉田ヲ

營ニコソトテ。彼鶴ノ靈アガメ。其名ヲ穂落ノ神ト書テ。大藏ノ神トヨムト云人有。彼神社朝熊ニ坐事慥也。

山。

是ソ此上不見鷲日山櫻
神代ノ春ハ花ニ殘レリ

鷲日山トハ太神宮御饌坐ノ山ノ名也。舊歌。

遙成鷲ノ高根ノ雲井ヨリ
影和クル月讀ノ森

河。

百船ノ度會宮ノ御川成
水ノ水上幾代經ヌラン

豊受宮ノ御前ヲ流通川侍。今ハアセ御池トモ。百船トモ云ハ。昔ノ尊神御舟ニテ通用シ坐ユヘ也。百船度會ト云キ。百舟ト云ハ船ノ多ト云義ナルベシ。

万葉歌。

眞十鏡見宿女之浦者百船能
過而可往濱有七國

野

贄掛志狩之使之道絶天
湯田野爾鴨之子雄屋養育天牟

昔湯田野ニテ鴨ノ子ヲ取テ贄ニ備ル事侍ルニヤ。彼勅使ヲ獵之使ト云。業平中將。此勅使ニテ下向。貞觀年中ノコト也。兒手柏ニテ弓ヲ作リ。紅ノ糸弦ヲ掛。其弦ニテ鴨ノ子ヲ切調テ神前ニ備ヘケルト歟。

山家。

山里ノ朝氣ノ水ヲ結身モ
御井ノ神ノ惠トハシレ

彼御井ノ御事。自天上結降坐。始ハ筑紫日向國ニ居置ニ其後丹波國氷沼ト云處ニ奉移。其後伊勢國山田原ニ移祝置。倭姫命紀ニ曰。天之眞井ノ水ヲ呑。長田ノ稲ノ種ヲ食。神恩忝

トモアマリアリ。

田家。

今日トイヘハ田面ノ秋ニ打出テ
穂掛ノ稲ヲ先イソカナン

秋九月ノコト也。神垣ニ稲ヲ掛コト有。是ハ稲落ノ神ヨリ發シ御事ト申人有之。

海路。

海童屋豊玉姫ノ俤ヲ
鏡ニ殘ス月夜見能神

此段。具日本紀有之。

旅。

賀利爾問宿之饗（マツリ）ノ香壽（カズ）香壽雄
百ノ机ニ備天曾見ル

百机ト云ハ。多キ机ト云義也。万ノ物ヲ饗。譬ハ鰭狹毛鹿等ニヤ。種々饗リ奉備。

別。

添タニモ別ノ道ヲ悲テ
泣澤姫ノ名ヲ殘シツヽ

泣澤姫之事。珍義不待。

關。

祭執伊勢之使之都出テ
今日逢坂ノ關ヤ越ラン

天照太神宮 豊受太神宮 ノ御祭ノ勅使下向事。春夏秋冬御祭有之。

橋。

音ニ聞下樋小川ノ橋朽テ
引渡シケン御代ノ遙ケサ

別義不待。

懐舊。

齋主之神ノ昔ソ遙成
鳥居ヲ守吾モ老ニキ

齋主ノ神トハ。花表ヲ守玉フトゾ。

夢。

ウハ玉ノ夢ヲ賴ト敎置シ

神ノ惠ヤウツヽナルラン

天津尊御託宣ノ御停止之御時。倭姫皇女。末世ニ及如何ト御尋御申ノ時。夢ナ賴ベシトノ御事ト也。

述懷。

末ノ世ニ天之日鷲之神態之
殘モ遠キ白和幣哉

日神天岩屋藏坐時。諸神達御戸之前ニシテ。種々ノ御態シ玉フ時。白和綿ヲ日鷲之神始作給。依二事多一略レ之。

無常。

ハカナキニモレテ老ニテ仕ヘツヽ
思ヘハ久シ瑞籬ノ内

瑞籬子細。前書。

神祇。

神風ヤ級長戸彥ノ昔ヨリ
四方ノ夷モ治ニケリ

人皇九十代帝後宇多之御時。弘安四年之夏。蒙古亡宣ノ船。浦海ニ滿。旌旗日ヲ耀申ス。仍爲二降伏一太神宮ヘ勅使ヲ被レ遣。其旨啓白之處ニ。飛廉風發テ海上鳴動シ。神威ヲ顯シ。形ヲ現ジ。光ヲ放シ。陌候波ヲ上シカバ。異賊忽ニ退散ス。是則別宮風宮之神。科長津彥命行向ヒ玉フニヤ。神風ト云義モ侍也。前書。

祝。

君カ代ハ神樂石壺ノ内ニシテ
朝夕祈ル數積ルラン

石壺トハ内外宮ノ神官ノ拜所也。神樂石壺ト侍モ。古哥ニ樂々石ヲヨム歌。〔二首〕

君カ代ハ千代ニヤ千代ヲサヽレ石ノ
イハホト成テ苔ノムスマテ

樂々石トハ少キ石ノコト也。樂々波樂々水ナド侍モ同義也。石壺。當時ハ七モ八モ有ケルヤト申人有レ之。

雲州樋河上天淵記

山陰道出雲州仁多郡三澤郷樋河上天淵者。上古海潮來往之溪曲也。今既潤水衰々然。爲漲流迴洑之淵矣。去杵築海濱十許里也。去温泉者十餘町之下流有焉。竊按曆數二百三十四萬四千六百五十年昔。自天照皇大神即位甲寅至今大永三年癸未也。天地二神之交。有八岐蛇而居其中焉。是故八色雲氣常起自此淵而射斗牛間也。惟時素戔烏尊被謫雲〔恐誤〕州相宇雲土雲土空居相逢者少也。於越經大原郡福武庄。到八頭坂麓長者原。但有老翁媼。中坐少女而泣。其女甚美。素戔烏尊問曰。何爲哭。又偁何人。對曰。我名手摩乳。妻名脚摩乳。少女名稻田姫。而我是此地主也。已得長者之稱。又河西山腰泉涌出焉。以樋通之河東。故呼水爲樋河。又此去河上二里有餘有深溪。名天淵。即大蛇之窟宅也。其中大蛇食噉國人。國人將盡。故歲歲以一人宛彼犧牲。雖然。如此人民殆盡。我有八兒。經七年而其七已爲蛇被呑。此少女今一也。無由脫故哭。進雄尊憮然而曰。與女於我可解此愁。父母喜曰。諾。素戔烏尊先欲隱此女。去者七里。構八重墻於佐草里。隱女於其中。于時始詠三十一文字和歌曰。和歌三十一字之例始此時。

八雲起。出雲八重墻。妻籠而。八重墻作。園八重墻男。

依此御詠國名出雲。蓋起於此矣。稻田姫乃八重墻大明神是也。而後素戔烏尊還長者原。問曰。其蛇何形。對曰。甚可怖也。八頭八尾如參天枯木也。眼如日月光輝。上下牙如交劍戟。毒氣如火焰。其舌如紅。其大齊谷岳。出窟則洪霧煙起。如火而鳴響。爾素戔烏尊計奇計。置八槽醞酒。又作艾偶女裝之置東山頂。其影沈八槽。大蛇見之以爲眞女。便矯八頭飮八槽。槽中無女。仰見山頂。無端呑艾女熱悶。素戔烏尊拔所佩

神ノ惠ヤウツヽナルラン

天津尊御託宣ノ御停止之御時。倭姫皇女。末世ニ及如何ト御尋御中ノ時。夢賴ベシトノ御事ト也。

述懷。

末ノ世ニ天之日鷲之神態之

殘モ遠キ白和幣哉

日神天岩屋藏坐時。諸神達御戶之前ニシテ。種々ノ御態シ玉フ時。白和綿ヲ日鷲之神始作給。依事多略之。

無常。

ハカナキニモレテ老テ仕ヘツヽ

思ヘハ久シ瑞籬ノ内

瑞籬子細。前書。

神祇。

神風ヤ級長戶彥ノ昔ヨリ

四方ノ夷モ治ニケリ

人皇九十代帝後宇多之御時。弘安四年之夏。蒙古亡宣ノ船。浦海ニ滿。旌旗日ヲ耀中ス。仍爲降伏太神宮ヘ勅使ヲ被遣。其旨啓白之處ニ。飛廉風發テ海上鳴動シ。神威ヲ顯シ。形ヲ現ジ。光ヲ放シ。阳候波ヲ上シカバ。異賊忽ニ退散ス。是則別宮風宮之神。科長津彥命行向ヒ玉フニヤ。神風ト云義モ侍也。前書。

祝。

君カ代ハ神樂石壺ノ内ニシテ

朝夕祈ル數積ルラン

石壺トハ内外宮ノ神官ノ拜所也。神樂石壺ト侍モ。古哥ニ樂々石ヲヨム歌。

君カ代ハ千代ニヤ千代ヲサヽレ石ノ

イハホト成テ苔ノムスマテ

樂々石トハ少キ石ノコト也。樂々波樂々水ナド侍モ同義也。石壺。當時ハ七モ八モ有ケルヤト申人有之。

雲州樋河上天淵記

山陰道出雲州仁多郡三澤鄉樋河上天淵者。上古海潮來往之溪曲也。今既潤水衰々然。爲漲流洄洑之淵矣。去杵築海濱十許里也。去温泉者十餘町之下流有焉。竊按曆數二百三十四萬四千六百五十年昔。自天照皇大神卽位甲寅至今大永三年癸未也。天地二神之交。有八岐蛇而居其中焉。是故八色雲氣常起自此淵而射斗牛間也。惟時素戔烏〔恐誤〕尊被謫雲州相守雲土雲土空居相逢者少也。於越經大原郡福武庄。到八頭坂麓長者原。但有老翁嫗。中坐少女而泣。其女甚美。素戔烏尊問曰。何爲哭。又備何人。對曰。我名手摩乳。妻名脚摩乳。少女名稻田姬。而我是此地主也。已得長者之稱。又河西山腰泉涌出焉。以樋通之河東。故呼水爲樋河。又此去河上二里有餘有深溪。名天淵。卽大蛇之窟宅也。其中大蛇食噉國人。國人將盡。故歲歲以一人宛彼犧牲。雖然。如此人民殆盡。我有八兒。經七年而其七已爲蛇被呑。此少女今一也。無由脫故哭。進雄尊憮然而曰。與女於我可解此愁。父母喜曰。諾。素戔烏尊先欲隱此女。去者七里。搆八重墻於佐草里。隱女於其中。于時始詠三十一文字和歌曰。和歌三十一字之例始此時。

八雲起。出雲八重墻。妻籠而。八重墻作。園八重墻男。

依此御詠國名出雲蓋起於此矣。稻田姬乃八重墻大明神是也。而後素戔烏尊還長者原問曰。其蛇何形。對曰。甚可怖也。八頭八尾如參天枯木也。眼如日月光輝。上下牙如交劔戟。毒氣如火焰。其舌如紅。其大齊谷岳。出窟則洪霧煙起。如火而鳴響。爾素戔烏尊計奇計。置八槽醞舟。又作艾偶女裝之置東山頂。其影沈八槽。大蛇見之以爲眞女。便嬌八頭飮八槽。槽中無女。仰見山頂。無端呑艾女。熱悶。素戔烏尊拔所佩

十握劔斬蛇寸々。至尾及少缺。割是之中有一劔。盖八雲從此起矣。天叢雲劔是也。素戔烏尊奉劔天照太神。太神曰。我屏天岩屋時。落此劔江州伊布貴山。是我神劔也。太神命其孫彥火瓊々杵尊降此國。付三神器爲國鎮。劔其一也。累世爲國寶。其後素戔烏繩杵繫浮浪山十八里。(島根郡十八里山是也。此杵有深秘。)以定宮居於杵築濱。(素我里也。)素戔烏尊乃大社杵築大明神是也。寸々蛇流滯所。謂之來次八本杉矣。腹皮流止處。謂之皮原。八尾流落處。謂之三刀屋尾崎。蛇枕寄處。謂之草枕。置八槽地。乃天淵之坤隅也。中古燒鹽濱也。今成田謂之鹽田。悶熱宛轉匍匐黑跡猶存岩。天淵東岸是也。東岸有樵徑。樵徑已上山腹至絕頂數十餘丈皆銕塢也。居人謂之銕築地。蛇從淵窟通八頭坂。山底之熱路也。昔長者以治銕橫塞大蛇之熱路云爾。今篠竹也茅茨也。森々兮峩々兮。分見之鐵壁猶峩々兮巍々兮。又東岸

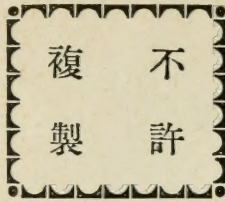
盤渦之底有三尺餘圓穴。其中渺々水也。茫々而無滴水。蓋蛇窟宅云爾。又淵東山曲有手摩乳廟淵西岸耳有脚摩乳廟也。按之上古未有之廟。蓋好古人爲之乎。又居人傳語云。八九十年前。天淵之傍有大杉。或時雷落懸。燒倒。其中有大蛇燒死。人皆拾骨築塚云爾。徃昔靈蛇之苗種生大蛇歟。則素戔烏尊以天火燒之言傳也。又村雲劔。終內裏治。而三種神器其一。當人皇八十代安德帝。尼被抱件寶劔挿脇海底沒入。是偏大蛇靈魂所爲無疑。又八頭坂左右有葛根而蔓延。長覃岳谷。是倚大蛇遺子也云々。又永正年中。當國大守京極源光祿。爲遊覽到樋河上。郡吏三澤遠江守使役吏芟除草木。歷覽銕築地。俄有陰雲。雷雨頻而人皆飲氣。猶有大蛇氣雲云々。抑天淵八岐大蛇由來者。日本正法傾邪神也。依此遂對治給。人皇十代崇神帝。恐寶劔靈威。良治召劔換打。舊劔伊勢太神宮奉

レ獻。新劒留二王宮一給。第十二代景行帝御宇。東夷叛。日本武尊令二征伐一也。尊東征之時。先詣二伊勢太神宮。神劒賜レ之赴レ東也。武尊到二駿河浮島原一。夷謀云。太子雄健。凡慮非レ可レ伺。當レ爲二奇計一。卽言二此地宜二遊獵一。太子諾。于時夷賊縱二火枯草一。焰迅飛。武尊抜レ劒揮給。四方一里。草木芟伏。其火自然止也。初此劒在二尾起一雲。故名二天叢雲一。今至レ爰名二草薙劒一。武尊東夷對治後。於二尾州熱田宮簀妃許一御心移。久留時。劒掛二松木一給。劒出二靈火一。木倒二田中一爲二熱水一。故號二熱田一也。此尊上洛時。江州伊布貴山麓。先八岐蛇靈出二黑雲一爲レ怨。欲レ奪二寶劒一也。尊擧二御足一蹴殺給。仍毒氣止而惱。以二冷水一醒給。其所名二醒井一。雖レ然終惱重而崩二褒野原一。後化二白鳥一逍遙。依レ斯名二白鳥一也。其後寶劒藏二尾州熱田一。第十四代仲哀帝御宇。大蛇靈化二蒙古塵輪者一襲二來筑紫一。爲二流矢一仲哀崩。葬二長門國豐浦借殯一也。杵築神靈晤託二胎神功皇后御腹一

也。皇后征伐後。以二弓弭一書二新羅國王日本犬也云々一。幾度磨滅尙鮮也。第三十九代天智帝白鳳八年。道行沙門從二新羅一渡二日本一。以二咒力一欲レ取二日本國一而同年冬。爲レ取二熱田寶劒於熱田祠一。持誦一七日。提レ劒出也。俄黑雲從レ空來。奪之。道行。劒靈威非二尋常一又持誦五十日。又取レ劒而裹二五條袈裟一到二近江蒲生郡一也。黑雲下奪取如レ先。又還二熱田一作二劒八枚一奉レ代今末社八劒宮。也。道行持念百日。深心賴二神祇一。裹二九條袈裟一遠到二筑紫一。欲レ歸二本國一之處。天照太神與二八幡一兩神。上レ天下レ地遂蹴二破船一。而道行沒死。寶劒又還二熱田一給云云。又四十五代聖武。四十六代孝謙帝間。李唐玄宗募二權威一。欲レ取二日本一。于時日本大小神祇評議給。以二熱田神一倩給。生二代楊家一而爲二楊妃一。亂二玄宗之心一。醒二日本奪取之志一給。誠貴妃如レ失二馬塊坡一乘レ舟着二尾州智多郡宇津美浦一。歸二熱田一給云云。是又杵築神八重墻妃之所レ作也。又八岐大蛇

爲レ取二此劔一。生二八十代高倉院□□言仁一。稱二安德帝一此也。起二源平亂一。赴二西海一。文治元年乙巳三月二十四日。長門浦被レ抱二二位尼一帶二寶劒於腰一。八歲時入二海底一。寶劔久失。此彼大蛇之所レ變也。平家追討大將源九郎義經。杵築右方所レ祭門客之所レ爲レ化也。又建武亂後。伊勢國桑名郡何氏。爲二神宮月參一。一旦安濃郡海上有二一光漂レ波而來一。佇立見者一劔也。帶レ此到二太神宮一。于時山田原託二一小女一云。此國靈劔久失。王法國法不レ行。今寶劔出者。天下大治瑞示也。仍出レ劔奉レ獻。故神宮祭主至レ今奉レ守。誠杵築天照兩神爲二日域普生一哉。難レ有御事也。

右雲州樋河上天淵記以小野高潔本挍合

昭和七年四月十五日印刷
昭和七年四月二十日發行
昭和十三年十月一日再版發行
昭和十六年十一月二十日三版發行

發行者 東京市豐島區池袋二丁目一〇〇八番地
續群書類從完成會代表者
太田藤四郎

印刷者 東京市豐島區西巣鴨二丁目二五七四番地
丹羽誠次郎

印刷所 東京市豐島區西巣鴨二丁目二五七四番地
忠義堂印刷所

發行所 東京市豐島區池袋二丁目一〇〇八番地
續群書類從完成會
振替東京六二六〇七・電話大塚七一八

（配給元 東京市神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社）